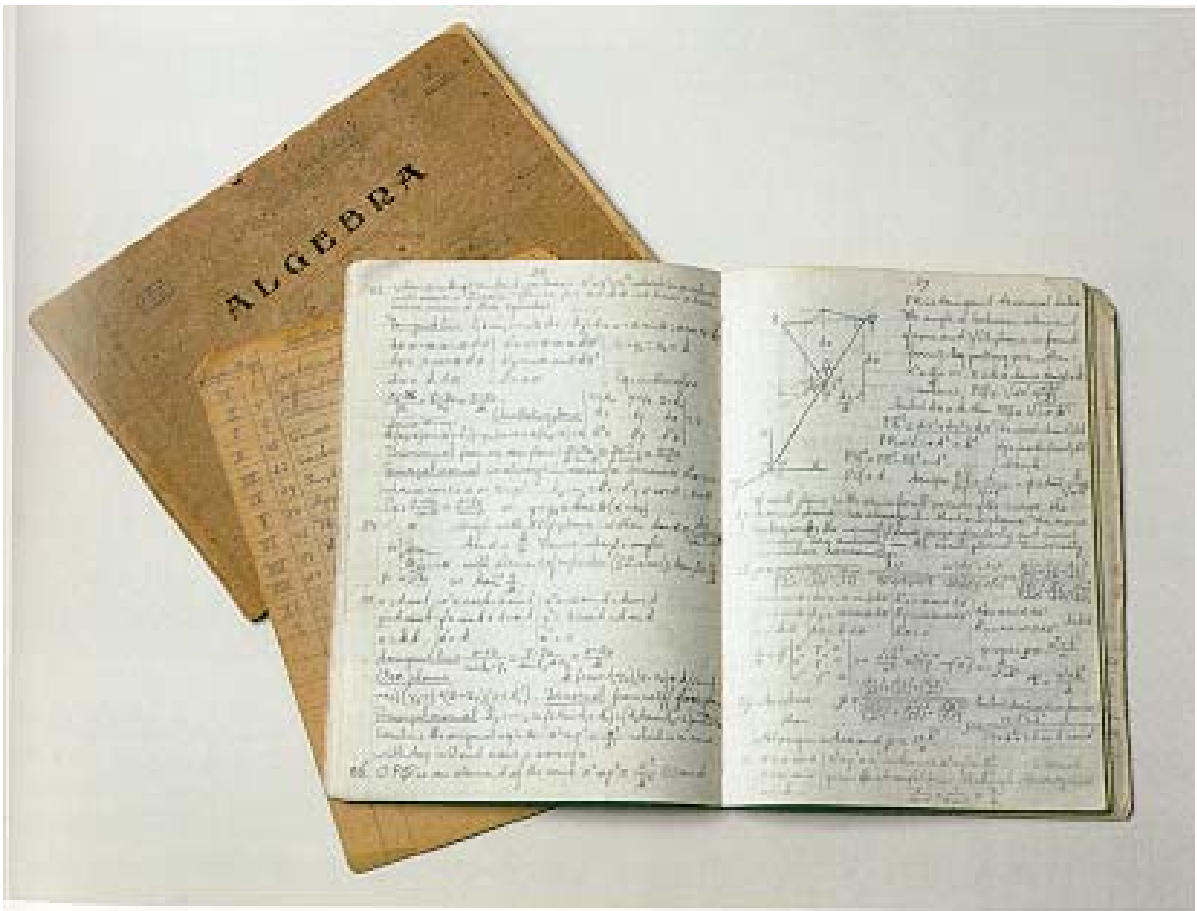


## 日記でみる日本占領時代の蘭印

ビルマータイ鉄道に於いて書かれた日記



この出版物はオランダ戦争資料研究所が「日蘭歴史研究プログラム」の一環として行った『日記プロジェクト』の成果の一つである。「日蘭歴史研究プログラム」は、1994年に当時の村山富市首相が提唱した<平和友好交流計画>から生まれ、日本政府による助成金により運営されるものである。

2004年、オランダ戦争資料研究所

A digital version of this manuscript can be studied on <http://niod.nihon.nl>

日記でみる日本占領時代の蘭印

ビルマータイ鉄道に於いて書かれた日記

編纂：Mariska Heijmans-van Bruggen

編集：Elisabeth Broers

翻訳：Naomi Bom-Mikami and Reiko Suzuki



## 目次

背景	1
序	3
移送・居住	45
ビルマから鉄道路線沿いで働く戦争捕虜グループ	45
タイから鉄道路線に沿って働く戦争補慮達のグループ	95
抑留所の組織／日本人責任者と欧州人責任者	149
日本人による抑留者の取扱い	165
食糧・物資	191
作業	235
保健・医薬	280
イラスト	335
教育、娯楽と信仰	338
「戦後の生活」の思案／抑留者の精神状態	366
抑留者相互の人間関係	382
抑留所外部とのコンタクト	398
戦争の経過についての報知と流言	421
抑留所での戦争終結の発表	438



## 出版にあたって

日本の蘭領東インド占領に関して残された一次資料は数少ない。日本の公文書は終戦時に大量に破棄され、インドネシアの資料は殆ど無いか、またあったとしても、その入手は困難である。一方、オランダの資料は主に戦後になって作成された報告書や声明書に限定されるが、その中で例外が戦時中に記された日記である。この日記を基に十一巻からなる<日記シリーズ>が編纂され、これはそのシリーズの一冊である。シリーズのうち五巻分の日記集はすでに『日記の中の日本占領』シリーズとして、ベルト・バッカー社（アムステルダム、2001-2002年）からオランダ語で出版されている。日記は現実の主観的表現ではあるが、日本占領下での日常生活の様子を良く表している。

ここで言う日記はすべて、オランダ人が記したものである。日本人管理下の収容所では‘書き物’をする事は禁じられていた。収容所外でも、家宅搜索の際に日記が見つかることを受けられる可能性があった。それでも多くの人々が敢えて日記を付けていたことから、日記が書き手にとっていかに重要な意味を持っていたかが窺われる。彼らの個人的な語りは、これまでに形成されてきた日本占領のイメージに新たな視点を提供するものである。

シリーズでは各巻毎に強制収容所、あるいは捕虜収容所に焦点を当てたが、収容所外の生活にも関心を注いだ。シリーズにはある日記を一冊、丸ごと収めたわけではなく、日本占領下の西欧人の日常生活がはっきりしたイメージが得られるように、取捨選択が行われている。選択に先立って、複数の日記からの情報をいかに明瞭な方法で組み合わせるにはどうしたらよいか、熟考され、長い議論が行われた。一見すると、それぞれの日記から部分を選んで、日付順に並べるのが最も妥当ではないかと思われた。しかしこのように並べると、日記の各々の部分が提供する収容所生活の独立した側面についての情報を全体の中から抽出する事が難しくなり、そのために情報が失われてしまう恐れがあると懸念された。また、我々は日記の部分をさらに細かく項目分けすることで、全体がさらに読み易いものになるではないかと考えた。さらに最終的には、シリーズには各収容所毎、独立した巻が設けられ、複数の日記が出版されるということがあり、我々は複数の日記からの情報を並べ、比較することができるような方法を見いだそうとした。そこで結論として、日記を各々、収容所生活の重要な側面を表す項目に分ける方法が選ばれた。項目毎に日記の部分を日付順に並べ、時の経過がはっきりと分かるようにした。さらに、こうすることで、シリーズ内の複数の日記に見られる話題の発展、例えば医療状況を、互いに比較することができる。しかし実際、項目内容はそれぞれ相互関係にあり、分け難い。したがって日記の部分の多くは幾つもの項目に跨るものである。

編纂にあたっては日記原本を使用した。ただし、読み易くするために、文章は現代オランダ語に統一する方法が採られた。また、紙不足から日記の書き手があまり考慮しなかった句読点や段落を付け加えることにより、読み易さを促進した。略語は幾つかの例外を除いて通常語に戻した。読み易いようにするためか、あるいは説明のためか、いずれにしても原本に後から書き加えられた文章は、すべてカギ括弧で括った。プライバシー尊重の観点から、文中、書き手を

著しく傷つけるような文脈、あるいは犯罪的な行為をしたとなどの非難の文章に限り、その個人名を伏せるようにした。時には書き手自身が、ある状況の中では名前を伏せている場合もある。全体として、書き手の認識は個人的なものであり、彼らが置かれていた極端な状況に影響されているものであることを特記しておきたい。

使用した日記の著者およびその近親者からは、我々が彼らを捜し出せる限りにおいて、この日記プロジェクトに彼らの日記を使う許可を得ている。



## ビルマータイ鉄道

1942年5月、東南アジアにおける日本陸軍第15軍の進軍はビルマ北部で停止した。第15軍の任務はビルマ北部からインドに攻め込み、同地を通っていたアメリカ軍とイギリス軍の中国向け輸送路を遮断することだった。日本軍に対する良好な補給路は作戦成功の第一条件である。シンガポールを通る日本の海上輸送路は長く、また1942年4月以降連合軍側からの攻撃によって危険な状態となっており、保有の船数では十分な補給ができなくなっていた。早急に代替え補給路の確保が必要だった。目を付けられたのはフランスとイギリスによって立案され、しかし一度も実行に移されなかった、ビルマのタンビュザヤからタイのノンプラドックまで、熱帯雨林と山岳と峡谷で覆われた地域、全長415キロ弱に鉄道を敷き、両国の鉄道路を結ぶという計画だった。

1942年6月20日、テラウチ・ヒサイチ元帥の率いる南方軍司令本部はその両鉄道を結ぶ路線建設命令を受け取った。<sup>1</sup>1943年12月に完成すべし、というものである。計画遂行に当たっては、日本に投降していた数万人の戦争捕虜と約25万人のアジア人労働者、ロームシャが当てられる予定であった。ビルマータイ鉄道の建設は日本占領軍が捕虜を使役して行った最も悪名高い事業の一つとして歴史に残ることになる。

### 組織

鉄道の建設技術指導と建設労働者管理のため、南方軍野戦鉄道隊(SARC) 2連隊が第15軍に付け加えられた。SARCは元々中国における日本占領地域の鉄道管理のために設立されたものだったが、日本の占領地域が広がるにつれ、その活動範囲も大きくなった。SARCの第5連隊はビルマに駐屯し、第9連隊タイ側に本部を置いた。<sup>2</sup>この鉄道連隊は総勢約1万3千人であった。戦争捕虜は日本軍からSARCに‘貸し出し’され、ロームシャは通常の労働者として直接SARCの管理下におかれた。<sup>3</sup>

ビルマータイ鉄道敷設に投入された捕虜の総数は6万1千人以上であった。イギリス人約3万人、オランダ人1万8千人、オーストラリア人1万3千人、アメリカ人650人である。<sup>4</sup>なぜ日本は鉄道敷設のために戦争捕虜やロームシャを使ったのだろうか？戦争捕虜の場合には人種差別的な要素もあったかもしれないが、一日本人は相手に投降する兵隊は劣等な人間だと思っていた— 決定的な理由は物流的なものだった。大東亜繁栄の社会経済基盤を回復し、新しく

---

<sup>1</sup>H.L. Leffelaar, E. Van Witsen著、*Werkers aan de birmaspoorweg*(Franeker 1982)、p53.

<sup>2</sup>Leffelaar/Van Witsen, p82, 83.

<sup>3</sup>Leffelaar/Van Witsen, p59.

<sup>4</sup>Gavan Daws著、*Gevangenen van de Japanners. Krijgsgevangenen in de Pacific gedurende de Tweede Wereldoorlog* (Baarn 1996) p210.

建設するための労働力が単にひどく不足していたのだ。日本占領地域全体で捕虜やロームシャが道路や空港、鉄道建設に投入されていた。

ビルマでもタイでも捕虜とロームシャが鉄道建設のために使役された。ビルマのタンビュザヤとタイのノンプラドックをそれぞれ起点とし、双方から歩み寄る形で建設が進められた。ビルマ側の捕虜監督にはヨシタケ・ナガモト大佐が任命された。タイ側の責任はササ少将(1943年7月まで)、ナカムラ大佐(1944年7月まで)、スガワサ大佐(1945年8月まで)が、それぞれ担っていた。<sup>5</sup>

## 輸送

1942年5月、イギリス及びオランダ捕虜の第一輸送隊が、シンガポールとベラワン(北スマトラ)からビルマに到着した。この輸送も、これに続く5回のビルマへの輸送もすべて海上輸送であった。スマトラ、ジャワ、そしてシンガポールから、合計1万2千人の捕虜が輸送された。船上の移動空間は非常に少なく、衛生面や食料面は悲惨な状態だった。多くの捕虜はこの船旅で赤痢に罹った。又ある捕虜輸送船は連合軍に爆撃された。<sup>6</sup>やっと岸についても、状況は好転しなかった。ビルマでは1942年8月のビルマタイ鉄道建設開始までの間、捕虜たちは空港建設のために働かされた。

タイへの輸送は1942年6月から、東南アジア捕虜の一大供給所であったシンガポールからの列車輸送によって始まった。列車の旅は4、5日かかり、バンポンで終わった。輸送には貨車が使われた。一台の貨車には、初期には‘たったの’24人の捕虜が押し込まれたが、時がたつとともにこの数は28人まで増えた。満員の貨車の中は、日中は灼熱の暑さ、夜間は凍てつく寒さだった。トイレなどの設備は殆ど、あるいは全く無かった。多くの場合、他の運命共同体員に掴まりながら列車の外にぶら下がって用を足した。やっとバンポンに着くと本当の惨劇がそのときから始まった。多くの輸送グループは最終目的地の線路際に達するまで、そこからすぐ徒歩で移動しなければならなかった。この旅は約10日間かかり、毎夜長大な距離を歩き、日中に休息した。1942年8月からはシンガポールからの列車輸送は毎日のように行われ、その中にはロームシャの輸送もあった。

---

<sup>5</sup> Leffelaar/Van Witsen, 59.

<sup>6</sup> 序文後述のボム氏日記からの抜粋参照。

## 鉄道

ビルマタイ鉄道は415kmにほんの少し欠ける距離の敷設が必要であり、ビルマ領152km、タイ領263kmである。タイに入ると路線はクエノイ川沿いをターマカンまで通り、その後メクロン川沿いにバンポンに至る。路線の内約300kmはほぼ無人地帯を通り、熱帯モンスーン雨林がほとんどだった。敷設場所の高低差は300m余りあった。山や谷が多いため、岩を削って貫通させなければならず、橋などの架橋工事が14kmに渡って必要だった。

1942年8月、ビルマ側からも、タイ側からも鉄道敷設工事が始まった。労働者たちは路線に沿ってキャンプからキャンプへと移動していった。合わせて全55のキャンプが線路沿いに設置された。

地質や地形状況が作業を難行させただけでなく、工具の不足や不良がそれに輪をかけて。 “つるはしはまあまあの状態だったが、それ以外の工具は悲しむべき状況だった。削り取った土を、かの有名な籠に入れるためのスコップの先はオイル缶から作られていた。少し力がかかればすぐに曲がったり折れたりしてしまった。”<sup>7</sup>とある元捕虜は書いている。作業の殆どは手で進めなければならなかった。さらに作業中以外の環境もひどいものだった。キャンプ到着時にはテントも小屋も不足しており、そこにある宿舎は全く原始的なものだった。医療設備はゼロか殆どゼロに近い状態だった。キャンプが村落から離れれば離れるほど食料供給が悪化した。気候状態も、ジャングルでの滞在を快適にするものではなかった。4月から9月にかけては南東モンスーンが吹き、熱帯の雨を運んできた。一ヶ月間に200mmの雨が降ることもあった。土はどこもかしこも深い泥の海と化し、鬱陶しい大気が温室のように垂れ込めた。11月から3月には日中は焼けつく太陽が照り、夜間は厳しく冷え込んだ。<sup>8</sup>これら全ての要素の組み合わせにより、病人の数は確実に増え続け、死者を送り出していった。最も重い病人達は1943年7月から、いわゆる病院キャンプに移送される許可を得た。しかしそこでも、当時の状況は理想とはほど遠いものであった。

捕虜たちやロームシャたちがしなければならない作業は重労働だった。木の伐採、建設地の整地、材木や石材の運搬、そして線路の敷設。幾つかのキャンプでは象の助けを使い、重労働が著しく軽減された。初期には一日の労働時間は平均10時間であった。しかし1943年初頭、日本軍は軍事上の理由から鉄道完成予定日を4ヶ月繰り上げて1943年8月とすることに決定した。連合軍が進軍して来ていた。特に日本の海上ルートでの重要な陸揚げ港であるラングーンは、連合軍爆撃の格好の目標となった。鉄道を戦略上役立たせなければ、一刻も早く完成させなければならない。いわゆる ‘スピード期間’<sup>9</sup>が始まった。その結果として労働者たちはより厳しく仕事に駆り立てられた。労働時間は、時には一日16時間以上にまで延長された。一日捕虜一人毎に運ばなければならない土の量は劇的に増量され、このいわゆるゴロン(一日一人が移動させな

<sup>7</sup> オランダ戦争資料館(NIOD)、インドネシアコレクション(IC)081845,85.

<sup>8</sup> L. de Jong, 著、*Het Koninkrijk der Nederlanden in de Tweede wereldoorlog* (Leiden,1985) 11b、後半、687.

<sup>9</sup> ‘スピード’は日本人が、何かが迅速に行われていないと思うときによく怒鳴った言葉だった。

ければならない土の量)に達した者だけが宿舎に帰ることを許された。もともと少なかった休日  
は、次の命令が下りるまで延期されることが多くなった。死亡率は高まる。

やっと1943年10月17日、両線路が合流した。それは三仏塔峠から約40km南のタイ側コ  
ンクイタ地点であった。10月25日、鉄道は公式に開通された。1943年11月に、幾つかのキャンプ  
で鉄道建設中に亡くなった人たちを追悼する記念式典が日本側によって取り行われた。その時点  
で、死亡した捕虜は12,400人(総数の20%)であった。ロームシャの推測死亡率は50%から90%  
と様々である。1944年5月12日ターマカンキャンプで、全ての死亡者を祀る追悼記念碑が日本軍  
によって除幕された。<sup>10</sup>日本側資料によれば捕虜とロームシャは全体で3百万立方メートルの石  
を運び、4百万立方メートルの土壁を築き、橋用の木材1万8千立方メートル、加えて杭用木材  
19万5千立方メートルを運んだ。688の橋を建設し、1日890メートル、全長415kmの鉄道を敷設  
した。<sup>11</sup>

## 鉄道建設完成後

鉄道使用開始直後の1943年11月、1943年4月と5月にシンガポールからタイに輸送されたFーお  
よびHーフォース<sup>12</sup>の生き残りの人々は、又もとの場所に戻された。まだ線路沿いのキャンプに  
残っていた殆どの戦争捕虜たちは、タイ側の鉄道始発点付近にあった幾つかの恢復キャンプ、カ  
ンチャナブリ、ターマカン、タムアン、チュンカイ、ノンプラドック、そしてナコムパトンに集  
められた。これらキャンプのすばらしい状況はもう知れ渡っていた。遂に輸送の日が来たとき、  
ある捕虜は溜息混じりに言った。“木々は緑に、光明るく。地球の様相は一新した。そうなのだ。  
あなたをチターの調べとともに賞賛しよう！私は死から立ち上がり、生に立ち戻った。私は又存  
在の側に属すのだ。”<sup>13</sup>恢復キャンプで捕虜たちはまた力を取り戻すことができた。食料は多く、  
労働の必要はなかった。1944年の捕虜たちの食糧配給量増加は、民間人収容所の配給事情がちよ  
うどこのころから劇的に悪化することから見ると注目に値する。考えられるのは、捕虜用の食糧  
量は変わらないが、恢復キャンプへの輸送路が際だって短く単純だったために、公式食糧の大部  
分がきちんと目的地に到着し、途中で横領されることが少なかったのであろう。鉄道建設中に密  
林の奥まで入らなかった捕虜たちは、ジャングルから到着する捕虜たちを見て衝撃を受けてい  
る。“川を牽引ボートで、あるいは鉄道を貨車で、又ジャングルをトラックで運ばれてきた。ひ

---

<sup>10</sup> 日記執筆者ディックによれば、死亡者数は4万6千人、内1万7千人が西洋人であった。

<sup>11</sup> Daws, 249.

<sup>12</sup> 日本軍はシンガポールから輸送される捕虜に、グループ毎にアルファベットコードをつけた。Aーフォ  
ースは1942年5月、最初に出発したグループだった。このFおよびHフォースにはイギリス人、オースト  
ラリア人とともに、約600人のオランダ人が含まれていた(Hフォース)。この2グループはビルマタイ  
鉄道建設捕虜の内でも、最も犠牲者の多いグループだった。F-フォース(7000)は、2200人の死者が出、  
総人員の1/3近くに達した。H-フォース(3270)の死者は約20%だった。(C.Kinvig, 著、*River Kwai Railway.  
The story of the Birma-Siam railroad* (London 1992) 166.)

<sup>13</sup> M. van Maaswijk 著、*Zwerftocht naar Arifina*. (Helmond [1948]), 56.

げは長く汚れ、髪も長くひどく乱れ、白目を見ると心が引き裂かれそうだ。ほつれただけで汚れ、数ヶ月も洗っていない服。疲れ果て、飢餓状態で、瀕死で、死んでいる。”<sup>14</sup>

戦争捕虜の約1万5千人と大勢のロームシャは短期間の休息の後、又ジャングルに戻らなければならなかった。彼らは線路の修復工事や貨物の積み降ろし作業などに使役された。初期にはこの作業グループへの食糧供給は良好だったが、日本軍がビルマで進軍してくる連合軍に押されるに従って悪化した。1945年からは又飢餓状態となり、1942年8月から1943年10月時期の悲惨な状況が再現された。回復キャンプから‘合格した’捕虜たちのグループが次々と送り込まれ、‘上流から’捕虜グループが戻ってくるという形で、交替することはできた。回復キャンプからまたもや‘上流’へ送られるのではないかという捕虜たちの恐怖は大きかった。最終的には最も弱っている者たちと必要なスタッフ、主に医療スタッフが回復キャンプに残った。上流だけではなく、タイ以外の国へも、次々と捕虜グループは送られていった。1万人以上の捕虜はインドシナに移され、8千人近くはシンガポール経由で日本に旅立った。これらの輸送に関しては、日本側で事前の組織化をしていたらしいことが窺える。元々1942年にビルマ、あるいはタイから投入された捕虜グループを、その後様々なキャンプに散ってしまったにもかかわらず、回復キャンプではまた元のグループと一緒にさせることに概ね成功している。例えば日記の著者であるディッケ、リブンス、オットゥンなどの場合もそうであった。さらに、オランダの捕虜の中でも、印欧人は鉄道作業に戻されている。これには様々な理由が挙げられている。J.C. ハメル牧師の意見では“敵は、印欧人は日本の冬の寒さに耐えられず、作業効率が上がらないということが経験上解ったのだ。だから彼らはトトク（純粋白人）だけをあの島国に送りたいのだ。”<sup>15</sup>ある日記著者は、日本人は‘アジアの解放者’というイメージを守るためには混血の印欧人を日本人の目の前で働かせるわけにはいかないのだ、<sup>16</sup>と言っている。その理由が何であるにしろ、他の場所からは、例えばマカッサル（セレベス南部）からは印欧人の戦争捕虜も日本に移されている。

捕虜たちがタイやビルマに残されるにしろ、シンガポール、日本やインドシナに移されるにしろ、どこにいても彼らは連合軍の爆撃に遭遇した。ビルマ-タイ鉄道は1944年3月以降、格好の標的となった。多くの捕虜とロームシャが爆撃の犠牲となり、それは彼らのための塹壕が殆ど、あるいは全く無いためでもあった。ビルマとタイに残った捕虜のうち、1943年10月から1945年8月までの時期に、また3100人が死亡した。戦争捕虜の死亡数は、これを入れると総数約1万5千5百人になる。国籍別に見ると、イギリス人はその24%を、オーストラリア人約21%、アメリカ人約24%、オランダ人は約18%を失ったことになる。<sup>17</sup>

---

<sup>14</sup> Van Maaswijk 著書, 77-78.

<sup>15</sup> J.C. Hamel 著、*Soldatendomeine* (Franeker 1975), P. 168

<sup>16</sup> 1944年4月14日付Rögeの日記抜粋から、収容所組織／ヨーロッパと日本の収容所スタッフの章参照。

<sup>17</sup> Leffelaar/Van Witsen, p376.

## 鉄道使用

ビルマタイ鉄道の使用開始と同時に、1944年10月頃までは戦争資材や人員がビルマ北部に運ばれていった。それまでにも、多くの日本兵士は線路沿いに上流に向かって徒歩で移動していた。戦略的事情から、鉄道開通まで待つことはできなかったのだ。鉄道輸送は問題がないわけではなかった。特に1944年3月以降ひどくなる連合軍の爆弾による路線の破壊だけではなく、一部路線の悪工事のためによく列車は遅れた。特に‘スピード時期’に敷設された半ばほどはひどかった。これら全ての問題に対処するため、捕虜とロームシャからなる鉄道保全グループが線路沿いに配置された。この結果、鉄道で運ばれた物資は一日平均600トンであり、これは予定の5分の1であった。

日本がまだ戦争に勝つ可能性はひどく低くなったにもかかわらず、3月15日、日本軍は同地に駐留するイギリス軍に攻撃を加えた。3ヶ月に渡って激しい戦いが続き、やっと1944年6月7日になって日本軍勢が崩れた。この戦いで日本側は兵士総勢11万5千人中、6万5千人の命を失った。<sup>18</sup>イギリス軍のビルマ進撃が開始された。ビルマタイ鉄道は、この時期、この戦いで負傷した兵士をバンコクやサイゴンに移送するために使われた。

1944年10月、連合軍の進軍によって日本とタイ間の補給路が断たれたため、日本からの新たな戦争資材供給は停止した。その間にも鉄道への爆撃は激しくなっていた。1945年5月にはラングーンが再び連合軍側の手に落ち、鉄道は日本軍の残留兵を運び出すために利用された。その内の一人に阿部宏中尉がいる。鉄道建設の時にはソクライの架橋工事の担当だった。<sup>19</sup>今ではその橋が彼の退却路の一部となっている。“[橋は] 激しい攻撃にさらされながらも直接的な被害はなかった。それはまだそこにあった、私が建設したとおりの姿で。私は陶然とした。[...]我々の兵士の多くは、我が軍惨敗の時ビルマタイ鉄道を通してタイへ退却した。あの橋のおかげで多くの命が救われた。私は自分が重要な役割を果たしたと感じた。”<sup>20</sup>

## 鉄道沿い生活の幾つかの側面

鉄道路線沿いの全キャンプにひとつひとつ焦点を当てることは不可能である。鉄道建設に従事した元捕虜は次のように表現している。“全部のキャンプが同じではなく、たとえすぐ隣にあっても、天と地の差があるようなことはしょっちゅうだった。”<sup>21</sup>ただ、大きく三つの‘種類’に分けることはできる。労働キャンプ、病院キャンプ、恢復キャンプで、最後の二つは一部重複して

---

<sup>18</sup> Kinvig, 174.

<sup>19</sup> F-フォースの一部は彼の労働力供給源となっており、非常に劣悪な環境の元で架橋工事に携わった。阿部宏は戦後ビルマタイ鉄道建設中に戦争犯罪を犯したとして裁判にかけられている。

<sup>20</sup> Haruko Taya Cook, Theodore F. Cook著、*Japan at war. An oral history* (New York 1992), p 105.

<sup>21</sup> NIOD資料、IC 081094、p 177.

いる。鉄道沿いの捕虜たちそれぞれの生活に影響を及ぼしたであろう幾つかの点について、これから言及していきたい。

## 労働と休暇

ビルマータイ鉄道が敷設された期間は、‘体調良好者’には日中の殆どが、1943年4月以降は夜も含めて労働時間であった。仕事は大部分が線路堤を作るための土の運搬だった。労働がいかに厳さを増していったかは、1942年10月には一日一人1立米から1,5立米を運搬していたのが、1943年8月にはこのボロンが2,6立米にまで増加したことに如実に現れている。土を掘り出し、運搬するだけでなく、木材の伐採、石の切り出しと運搬、橋の建設などが鉄道完成のために捕虜たちがしなければならなかった労働だった。線路堤や掘削や鉄橋が遂にできあがると、最後にいわゆる‘レール敷き班’と‘釘打ち隊’がやってきた。始めの班は500名のイギリス人から成り、路線上に鉄道レールを置いていった。そのレールは続いて500名のオランダ人から成る釘打ち隊によって釘止めされた。この2グループのどちらかに属した者は‘幸運’だった。元‘釘打ち隊員’の一人は言っている。“日本人とさえうまくやっておけば、我々は大丈夫だった。我々は職人だったのだ。これはとても重要なことで、一日3キロメートルのレールを釘打ちしておけば、ただの奴隷労働者達よりも上のステータスに昇格した。”<sup>22</sup>

線路堤を建設する捕虜達は班長をリーダーとする作業班に分けられた。班長に据えられるのは将校が多かった。班長は、班内で起こった全ての間違いの責任を負わされた。さらに、‘スピード期間’などには班長も班員同様に重労働をさせられた。すると将校が班長の任を下士官に振り当てることもあった。そして将校は労働キャンプ内の事務の仕事か、軽い雑役をするだけだった。別の状況になったのはタイにあったイギリス捕虜部隊である。このグループには比較的将校の割合が多かったため彼らの地位に準ずるような仕事だけをするができなかった。そのため、抵抗があったにも関わらず、最終的には将校だけの労働班が作られた。この班は主に架橋工事に使役された。<sup>23</sup>

捕虜達は、初期には10日間に1度くらいは日本側から休息日を与えられたが、工事が進むに従い休息日は少なくなっていった。1943年4月以降になると20日以上休みなしで働くこともまれではなかった。その上、1日の労働時間も長くなっていった。時には軽い負傷、例えば足の傷などで病室に入ることは、少なくともしばしの休息の場を得ることになり、捕虜にとっては安堵の時でさえあった。病人として入院することの短所は、将校以外の全員に適用された日本のモットー“働かざる者、給与も無し”であった。その上病室にいてさえも安全とはいえなかった。病室から病人がかり出され、ふつうに労働をさせられることも多々あったからである。

---

<sup>22</sup> H. Gideonse 著、*Het vergeten leger in de jungle. Nederlandse krijgsgevangenen in Birma/Siam* (Amsterdam 1989), p47.

<sup>23</sup> J.Coast 著、*Railroad of death* (London 1946)、p69.

将校と病人以外にも、少数の捕虜は毎日労働キャンプ内に残り、雑役をした。これにはまず炊事班があり、常にいくらかの余分な食糧を得られるために非常に人気のあった雑役であった。そのほかには‘軽い任務’と言われたキャンプ内清掃の仕事があり、病棟にいた回復期の患者達の仕事であった。

路線堤に土ではなく木の幹を埋め込むなど、あらゆる方法を使って、捕虜達は鉄道建設の妨害工作をした。特にオランダの捕虜達はこの面での優秀性を発揮した。“オランダ人はイギリス人、オーストラリア人、アメリカ人の中にあつて、全鉄道路最高の妨害工作者として知られていた！橋は彼らによって‘デルフト工科的永遠建築方’ではなく、‘一時的建築方’によって構築されたのだ。”<sup>24</sup>と、ヴィム・カーンは1942年末、タンビュザヤの病院キャンプで開かれたスタンドアップ・コメディの会で話した。病人達はこのような会を聞くことができ、ここでのみ1943年10月までの期間に公演会の準備をする時間があった。労働キャンプでのたまの休日は、数少ない装身具の洗濯や修繕、エクストラ食糧の獲得努力などに使われ、それでもまだ時間が余った場合には読書その他の精神的気晴らしがおこなわれた。鉄道が完成してからは、日記を付けるなど、より休暇的な過ごし方ができるようになった。

捕虜達がすでにしばらく回復キャンプに滞在し、少し休息できて初めて、精神的、身体的な娯楽の欲求がでてきた。倦怠感が強まる。むさぼるように読書をし、講演会が開かれ、講習会が催され、遊技がおこなわれた。スタンドアップ・コメディは重要な役割を果たすようになった。イギリス人もオランダ人も公演会を開いた。ナムパトンキャンプのある捕虜は次のように語っている。“[1944]年の終わり頃には、戦争捕虜収容所でなければ見られないような芝居やスタンドアップ・コメディが盛んになった。最高に素晴らしい（上演方法は素朴だとしても）公演を見ることができた。それは人生この時以外には決して見ることはできないものだった。もちろんここで最高級品を期待することはできないが、それは別のジャンルのものであり、キャンプ生活の雰囲気に対応したものであったために別の魅力があった。”<sup>25</sup>捕虜達はスポーツにも再び興味を示すようになった。サッカー、水泳、時にはテニスをする事さえ可能だった。しかし残念ながら回復キャンプでの滞在は、多くの人にとっては娯楽の時ではなかった。特に1943年の最後の数ヶ月や1944年のはじめには病棟は満室であり、死亡者数は多かった。さらに1944年中には多くの捕虜達が病棟を去らなければならなかった。彼らはビルマやタイの密林に連れ戻され、あるいはシンガポール、日本、インドシナに移送された。

---

<sup>24</sup> Wim Kan と Corry Vonk 著、*100 dagen uit en thuis* (Utrecht 1963)、 p 66.

<sup>25</sup> NIOD資料、IC 081094、p 225.



## チカルとルピー

蘭領東インドの貨幣や米ドルが通用してはいたが、タイのチカルとビルマのルピーはビルマータイ鉄道に働く戦争捕虜達にとって重要な財産だった。それは様々なものへの支払い通貨であったが、特に食糧用であった。配給される食糧は激しい労働をする男達の体を支えるのに充分であったことは無かった。鉄道で仕事をする者には‘給与’が出た。階級が高いほど、給与額も高かった。ただし、将校達には常に給与が出たが、階級の低い者は働いたときだけに賃金が支払われ、病気の時には無給だった。タイでは次のような規則になっていた。“給与は、兵隊は労働日毎に25チカルセント、下士官は30チカルセントだった。仕事をしなければ支払いもない。将校達は‘定給’で、月30チカルだ。チカル（今はバス）の交換レートは戦争直前には4チカルで1蘭領東インドギルダーだった。すなわち私の日給は7.1/2東インドセントに当たる。物価；私がタイに来た直後、鴨の卵一個が5から10（通常は10）チカルセントだった。終戦間近になるとこの値段は20から25チカルセントに上昇した。鶏の卵はもっと高かった。我々の昇給は無かった。”ビルマでは日本軍は兵隊に労働日一日につき0.15ルピーを支払ったが、これは交換レートからして0.25チカルとほぼ同等である。しかし日本人達は給与の規則的支払いにはあまり気を使っておらず、一月以上支払いが遅れることはまれではなかったため、捕虜達は長期的に無一文になることもあった。この時期を乗り越えるために、それだけでなくも少ない所持品を売り払った。多くの腕時計や結婚指輪、それにあらゆる衣類が、生命をつなぐという目的のためだけに売り買いされた。物々交換も流行した。特に葉巻や紙巻きタバコは高値で交換された。

賃金を支払われない病人のために、多くのキャンプで基金が募られ、病人以外の、支払われた給与の一部を積み立てた。積み立て額は給与高に比例しており、すなわち将校達は下位の軍人達よりも高額を差し出した。捕虜同士でもいわゆるコングシーと呼ばれた頼母子講を作って助け合った。コングシーの会員は病気になると、それでも少額の金を受け取ることができた。しかし金があるということは、いつもそれを使えるという意味ではなかった。密林の奥深く、付近に村落もない場所ではタイ人やビルマ人と取引をすることもできなかった。こうしたキャンプは日本の公式配給物の輸送も困難であったため、二重の打撃を被った。特に雨期には道路も劣悪の状態となり、輸送に支障が生じた。タイではクェノイ川が多少の助けとなった。ここでは食糧を船で運ぶという選択もできたからである。ビルマでは川の恩恵を受けることはできなかった。より集落に近い場所では現地の住民と取引できる可能性は高かったが、現地人との取引は多くの場合禁止されていたため、日本人から隠れておこなわなければならなかった。また食糧の供給状況もこちらの方がずっとましであった。回復キャンプがあったのも全てこうした場所だった。さらに回復キャンプでは食堂で、現地人、あるいは捕虜自身の経営の売店から副食を購入することもできた。しかし金銭問題はこうしたキャンプでも逼迫していた。

配給の、非常にまれな補充物資として、赤十字小包があった。キャンプにこれが届いたとしても、その大部分はすでにどこかに消えていた。この日記の著者達に関していえば、彼ら

が赤十字小包を受け取ることができたのは恢復キャンプにいたときだけで、それも日本降伏直前に2度目の赤十字小包を受け取ったドウ・フラウターを除けば、後は全員一度のみであった。

## 病気と死

日本の配給物資は量が足りないだけではなかった。供給された食糧は非常に偏ったもので、大切な栄養素やビタミンが欠けていた。この量と質の不足は早くも目に見える形で現れた。赤痢ははじめから存在した。便通が正常のものは例外的存在だった。さらにビタミンの欠乏による様々な疾病が現れた。この典型的な例はいわゆるシャンギボールだった。ビタミン欠乏のため、陰囊に赤い湿疹ができ、腫れてひどい痛みを伴った。この疾病の一般的呼称はライスボールであったが、場所により呼び方は様々で、シャンギボールはビルマータイ鉄道で最もよく使われていた名前だった。熱帯性浮腫の発生も、多くビタミン不足によるものだった。保護する衣服も靴もない鉄道建設現場ではすぐにできる傷は、直らずに化膿した大穴に成長していき、骨に達するまで体を腐食していった。きちんとした治療もできなければ、手足の切断につながるものだった。

密林内のキャンプではマラリア蚊の猛攻があった。このため時間の経過とともに、この病気に罹らない捕虜はほとんどいなくなった。また、蚊帳の不足も状況をより悪化させた。しかしキニーネは、他のほとんどの医薬品、包帯、医療器具と違っていくつかのキャンプには在庫のあった薬であった。薬品の不足に関しては、ナガトモ中佐は次のように説明している。“戦争捕虜用の医療品供給は、輸送設備の不足その他の理由でいくらかの不足がある。今後は、タイを通じて輸送される予定のためその到着は遅れるであろう。これまで戦争捕虜の医師達は、医療品を短期間に不注意かつ浪費的に使ってきたと思われ、常により多くを要求する。上記の理由により、それらは際限なく要求通りに供給することはできないのである。”<sup>26</sup>1943年4月、つまり‘スピード期間’の初めにはビルマの捕虜の40%は病気であった。<sup>27</sup>そのときから始まった雨期は泥をもたらしただけでなく、より強大な惨禍、コレラも運んできた。“それはタミール人とともにやってきた。我々の、無垢で汚染のないジャングルは突然伝染病の巣窟となり、死が狂ったようにあたり構わず掴みかかった。我々がやられるかもしれないと考えていたあらゆる死の中に、コレラ感染は入っていなかった。いいところもある。4日間で死ぬことだ。際限もなく死に至る道を這いずるのではなく、たった4日間でおだぶつだ。若い筋肉隆々の青年を、しなびて骨だけの老人にするのにそれだけあれば十分なのだ。”<sup>28</sup>オランダの捕虜たちはこの疫病から、主に予防接種と、できる限りの衛生を保つことで逃れることができた。

数千人の捕虜たちは病から立ち上がることができず死んでいった。鉄道脇にあったキャンプは、それぞれに墓地、あるいはそれらしきものを持っていた。墓には非常に簡単な木の十

---

<sup>26</sup> NIOD資料、IC 001365.

<sup>27</sup> NIOD資料、IC 001363.

<sup>28</sup> Gideonse, 49.

十字架がたてられた。時には埋葬があまりにも立て続けにありすぎて十字架に死者の名前を書いている暇さえないこともあった。リンティン病院小屋内の描写はその慰めようのない状況をよく表している。“我々は仰向けに、互いに腕をくっつけ、他人の顔のすぐ前に横になっているだけだ。小屋の中は寒く、湿気っていて、静かだ。我々は粥を食べる。朝も昼も夜も。私は左側の列に、入り口に近く、ヴィーベからほど遠からぬところに寝ている。私の両脇の人たちは死にかかっている、新隣人も、一人おいて隣の人も。我々はほとんど、あるいは全く話さず、眠り、さらに植物化し、ゆっくりと死に向かう。仮設便所に行くときだけに起き、毎晩6時になると埋葬される男達に敬意を表するために身を起こす。ラッパ吹きはそのラッパを吹き、その音はあまりに悲しく、あまりに陰気に、哀愁をこめてキャンプに響きわたる。昼は夜の後に、夜は昼の後に来、粥は粥のまま。”<sup>29</sup>

病棟の内部は貧弱なものだった。ベッドはすぐにいっぱいになり、多くの患者は床に寝ていた。小屋の壁には隙間が空き、屋根も漏れたため、雨も風も吹き付ける中に寝ていることも多かった。医師や看護人は、手に入る数少ない材料で、できるかぎりのことをした。熱帯地方での医療経験は、例えば熱帯性浮腫の治療などでは必要不可欠だった。ビタミンB5の豊富なイーストも培養された。恢復キャンプの医療設備や建物の状況はジャングル内キャンプより確かに良かったが、医薬品はここでも常に不足していた。

それほど深刻ではないが、同じくらい悩まされるのはシラミの問題だった。C. マック牧師はこう書いている。“我々は2種類のシラミの来訪を受けた。それは、まず初めは衣服に付くシラミで、小型だがかゆみをとめない、猛烈な勢いで繁殖する種類のようなのだ。これは衣服を熱湯に浸けると隠れていた卵が — ゆでられて — 白い待ち針の頭のように見えてきて、退治することができる。よりひどいのは2番目のトコジラミで、這い回る小創造物、闇の中で血を吸いにくる。[...] この小動物は我々の目から見ると下品な習慣を持っていて、偶然に、あるいは故意に叩きつぶされると、死後の抵抗としてひどい悪臭を発する。”<sup>30</sup>

## 生き残り作戦

体力とともに精神力は、生き残っていくためにはほとんど同じくらい重要なものだった。“我々はここでも身体と魂がいかにか神秘的につながっているかを見た。そこには病氣や死と勇敢に戦い、勝利を勝ち取ったり、死期を数週間も延ばしたりする人たちがいた。反対に意気消沈して恢復の望みを全く失い、本当に何人かの場合には死をなるべく早く迎えたい客人のように喜んで受け入れる人たちもいた。地上に存在することの痛みと悲劇が、ある種の人たちを完全に受け身に

---

<sup>29</sup> Van Maaswijk, p 44-45.

<sup>30</sup> C. Mak 著、*Een halve eeuw dienst* (Leeuwarden 1977)、p 84.

してしまい、そう、終わりのくることを、涅槃を希求するように望んでいた。”<sup>31</sup>とC. マック牧師は記している。

精神力をわき上がらせるための泉は信仰だった。多くの戦争捕虜達はビルマやタイでの滞在中（再び）信仰に支えを求めた。“我々の手から全てがたたき落とされ、全ての計算や計画が失敗し、足元が全て崩れ落ちようとするとき、人間は自然に、よりよい、信頼できる人生の基盤を求めて神に向かうのである。”<sup>32</sup>これもマック牧師の言葉である。彼はA. W. M.（エゼキエル）フェルヘースト神父とともに、1942年5月、自由意志でスマトラからビルマにやってきた。キャンプでは彼らは宗旨の違いを乗り越え、非常にうまく協力し合った。“ここでは1942年から1945年の間、ローマとドルト [新教の象徴の町] が文字通り手を差し伸べあった。”<sup>33</sup>彼らは鉄道労働をする必要はなかったが、キャンプからキャンプへと渡っていき、集会を開き、病人を見舞い、死者を埋葬した。カソリックとプロテスタントの関係が全てのキャンプでこのようにうまくいっていた訳ではなかったことは、タイのリンティンキャンプで1943年2月9日に書かれた日記の断片から伺える。“プロテスタントは合同で宗教集会を開こうとし、そのように申し入れてきた。この件についてカソリックの知識人たちと話し合った。彼らは私と同意見で、たとえこのような状況の中でも基本精神を守り、合同にはしないという意見だ。そのようなことをすれば我々の中の弱者が危機にさらされるであろう。”<sup>34</sup>

この時期にはJ. C. ハメル牧師がこのキャンプにいた。彼もまた、自由意志でジャワからタイに‘彼の’人々を追ってきていた。この牧師は捕虜達を助けるために全身で打ち込み、できる限り支えになろうとした。それに感謝して、ターマカンキャンプでは彼の名前の付いたスカウト・グループが創設され、このキャンプでは彼にメダルが贈られさえした。聖職者の数は鉄道沿いの全てのキャンプを定期的に訪問するには少なすぎた。このため、信仰に厚い捕虜によって、いわゆる平信徒集会が行われた。知識のある者が聖書の一節を読み、祈りを先導した。ユーモアは気力を失わないためのもう一つの重要要素だった。“ユーモアは天から授かった才能だ。それはふつうでも日々の生活に生彩を添えるが、しかし、死者の鉄道での私たちのような状況下では、私たちが奮い立たせる力の源である。”<sup>35</sup>労働キャンプでは互いの冗談や、小さな、思いがけないことを笑いの種にするのにとどまった。病院キャンプや回復キャンプでは、ユーモアはスタンドアップ・コメディーンを作り出すことができた。

戦争捕虜になったほとんどその直後から、連合軍の上陸と、遠からぬ解放の噂がキャンプに流れた。このニュースは失望に次ぐ失望をもたらした。にもかかわらず、噂は多くの人たちを力づけ、小さな希望を持たせ続けた。形を問わず、文字情報が熱望された。最も歓迎されたのはやはり家族や愛する者たちからの手紙であったが、このような通信がビルマタイ鉄道に達

---

<sup>31</sup> NIOD資料、IC 028881, 3.

<sup>32</sup> NIOD資料、IC 028881, 7.

<sup>33</sup> Mak、p 63.

<sup>34</sup> NIOD資料、Indische dagboekencollectie 81番.

<sup>35</sup> Mak、p 77.

するのは非常にまれなことであった。時々新聞がキャンプに入ることがあった。ビルマではそれは日本の新聞 *グレーター・アジア* であった。バンコクの周辺では *バンコック・クロニクル* が、好んで読まれた。

上記はだいたい捕虜個人に取っての話である。だがビルマータイ鉄道での捕虜にとって死活問題だったのは共同体、*コングシー* であった。捕虜達はグループを作って支え合い、一緒に生き残るために助け合った。金銭や食糧を分け合い、病気の者はできる限り看護した。*コングシー* の一員になるかならないかで、死ぬか生き残るかの分かれ目になりえた。一般的には、物事を‘調整する’ことのできる立場の捕虜と良い関係になっておくのが賢いことだった。C&Cという略語がキャンプではよく使われたが、これはコネクションとコラプション [汚職] を意味していた。元捕虜はこれについて書いている。“そう、C&Cはキャンプではよく知られた現象だ。みんなそれを当たり前だと思っていた。皆は看護人とC&Cをし、または将校の友人がいて、その将校はまた別の友人を持っている。キャンプ内の職に空きができたらすぐ飛び込む、そしたら安心だ。これは率直なゲームであり、参加できる者は皆参加した。そしてこれはスタンドアップ・コメディの格好の題材となった。”<sup>36</sup>

最も急進的な生存戦略はこの悲惨な状況から逃亡することだった。労働キャンプに柵はなく、監視も手薄だった。しかしその外は密林しかなく、地理には全く不案内で助けは現地の住民に頼る以外になかった。さらに白人はタイやビルマの社会ですぐに人目を引いた。捕虜の中でも浅黒い肌の者はその意味では得であった。多くの危険が付随していたにもかかわらず、様々な国出身の百人の捕虜は逃亡の企てを実行した。そのうち、囚われの身にしろ自由に身にしろ、戦後まで生き残ったのは約10人であった。<sup>37</sup>

## 国籍、階級、地位

ビルマータイ鉄道で働いたのは、イギリス人、オーストラリア人、オランダ人、アメリカ人の戦争捕虜達であった。それぞれの国ごとにグループを作り、独自のリーダー、炊事場、医師、キャンプまたはその一部を持っていた。鉄道建設中はグループ間の接触はごく限られたものだった。通常国籍ごとに別のキャンプになっており、一つのキャンプに2カ国人がいるときでも互いに相手に干渉するような時間はなかった。例外は病棟や病院キャンプだった。そこではあらゆる国籍のもの達が混在し、出身地の異なる医師たちの治療を受けていた。ひとたび回復キャンプに入ると違った国籍のもの同士の接触機会は数段増え、それによる良い面も悪い面も出てきた。全ての話の中から、いくつかのパターンが見えてくる。一般的には悪くいわれたのはイギリス人だったようだ。オランダ人もオーストラリア人もそしてアメリカ人も、高みから見下すような彼らの態

---

<sup>36</sup> NIOD資料、IC 081094、p 237.

<sup>37</sup> Leffelaar/Van Witsen、p 267.

度を快く思っていなかった。“イギリスの将校たちは自分の兵士たちをゴミのように扱い、その傲慢さからアメリカ人も同様に扱って良いものと思っていた。彼らは東インドからの旅の途中で [チャンギに] 寄ったグループを、ジャワの愚民、と呼んだ。”<sup>38</sup>イギリス人のもう一つの特長としてあげられたものには、不潔さ、衛生観念のなさがある。一般的にはイギリス人がひげ剃りをすることは知られていたが、頭と首から下には何がついていても一切の注意を払わなかった。皮膚病はイギリス兵の間に蔓延していた。あるオーストラリア人は次のように書いている。“このイギリス人キャンプは最も陰惨だ。士気は低い。衛生観念も少ない。彼らは自分たちの汚い工具を、我々の赤痢患者が使ったシャワーの水が流れる溝で洗うのだ。”<sup>39</sup>これはイギリス人、特に兵士には熱帯経験が不足していたことからくるのであろう。大多数は日本との戦争が始まって初めて東南アジアに送られていた。

オーストラリア人は粗野な民族といわれていた。アメリカ人に対して他の国籍の人たちがなんと思っていたかはあまり知られていない。鉄道労働に従事したアメリカ人捕虜がたった650人しかいなかったことによるのであろう。一般的にはアメリカ人はオーストラリア人と気が合ったといえる。その理由をあるアメリカ人兵士は語っている。“植民地経験の有無の関係だと思う。我々は両方とも激しく仕事をするのになれていし、より個人主義的だった。我々はオランダ人やイギリス人に対して共同して向かっていく傾向があった。”<sup>40</sup>オランダ人に対する批判はその気力のなさに集中した。<sup>41</sup>好意的なものはオランダ人、特にその中の印欧人がジャングルの中で食用になるものに関する知識があり、またサンバルなどの味付け食品を作ることができることだった。オランダ人捕虜の間では純粋白人と印欧人との間のライバル意識が存在した。この日記の著者たちはしかし、全員前者に属する。

全ての国籍に関して、批判はあったが、しかし互いに評価もしていた。例えばターマカンキャンプでは全ての人たちが、イギリス人中佐フィリップS. O. トゥーシーのキャンプ指導力を賞賛していた。様々な国出身の医師たち、例えばオランダ人のヘンリ・ヘキングやオーストラリアの外科医アルベルト・コーテスも全ての人たちからの評価を得ていた。さらに健康なライバル意識は、恢復キャンプでの国対抗のスポーツ試合をより面白いものにした。

全ての捕虜が付き合わねばならなかった国籍が日本だった。捕虜と日本人の関係は、第一に従属者と権力者の関係だった。この二者の対立関係は日本人の目には捕虜となる兵士は人間的価値の低いものと映っていたことからよりひどくなった。さらに白人の捕虜達は日本人を劣等民族だと思っていたために、その従属者の立場を受け入れがたかった。この関係は両者の無理解が支配していた。これは言葉の問題だけではなく、文化の違いもあって、互いが謎であり続けた。

---

<sup>38</sup> Daws、 p 201.

<sup>39</sup> R. Parkin 著、 *Into the smother. A journal of the Birma-Siam railway* (London 1963) p 152.

<sup>40</sup> Robert S. La Forte 他編著、 *With only the will to live. Accounts of Americans in Japanese Prison Camps 1941-1945* (Washington 1994), p 234.

<sup>41</sup> Parkin 参照, p109、 La Forte 他著、 p232.

国籍の違いだけではなく、捕虜たちの間には階級という大きな差があった。最も大きな差は将校とそうでないものの間にあった。まず、日本人による待遇の差がある。将校は一定額の給与を受け取ったが、階級の下のものたちは鉄道工事に出た日に対してしか賃金は支払われなかった。さらに将校はキャンプの運営委員として指導的な立場に置かれ、軽い雑役をするか、あるいは、そこにも短所はあったにしろ労働グループの監督役をするのみであった。この扱いの違いは日本の規則によるというよりも、1929年7月27日ジュネーブで締結された‘戦争捕虜の扱いに関する協定’の中の規約などによるものである。日本はこの協定に調印していたが、批准はしていなかった。1942年初頭に、日本政府はアメリカ、英国、英連邦、及びオランダに対し、協定に即した扱いを約束していたが、<sup>42</sup>捕虜たちには苦々しいほどその影響は感じられなかった。例外は将校とそうでないものとの待遇の差であるが、この面でも実際には協定の規定から大きくはずれることが多かった。例えば協定によれば将校は自らその立場に即した活動を申し出たのでなければ、仕事をさせてはならないことになっていたし、将校でない者にさせてよい仕事についても規則があったが、日本側はそれを守らなかった。<sup>43</sup>

軍隊階級の低い捕虜の中には早くも将校達の彼らに対する、あるいは日本側に対する態度についての不満が現れた。日本側に対する態度の軟弱さ、日本の命令や労働キャンプの悲惨な状況に抗議する勇気のなさに関する苦情は、どの国民のキャンプにも常に渦巻いているものだった。どの話も苦情が殆どであるが、ビルマタイ鉄道の将校達全てを一刀両断に切り捨てることはやはりできない。あるオランダの下士官は書いている。“我々の上官に関してはあまりに悪口を言い過ぎる事もある。殆どの場合にはその充分な理由があるとしても。また私は、自分たちの定給の中から多くを下の者に分け与え、ヤップにもしっかり対応している将校も知っている。こんな状況下では彼らの仕事もひどく難しいものなのだ。”<sup>44</sup>いずれにしろ、ビルマタイ鉄道の数字によれば、将校達は下級の者に比べ、非常に高い生存率を示している。<sup>45</sup>

## ロームシャたち

ロームシャ達はビルマタイ鉄道建設労働者の中では捕虜達よりもかなり大きな数を占めていた。既に1942年8月から、ビルマ人はビルマ側の鉄道敷設に投入された。ビルマ人は、日本の協力と要請により、ビルマ政府が徴募した。高給と、良い宿舎、良好な医療環境などの宣伝により、1942年7月から1943年1月までの間に8万7千人のビルマ人が自由意志で鉄道建設労働に応募した。<sup>46</sup>タイは実状としては日本の占領下にあったが、公式には独立国家であり続けた。交渉の

---

<sup>42</sup> De Jong 著、p584.

<sup>43</sup> ‘禁止労働’に関する協定第3 1及び3 2条。Verdrag nopens de wetten en gebruiken van den oorlog te land 参照(’s Gravenhage 1946), p 63.

<sup>44</sup> H.A.Th. Derks著、‘Herinneringen 1942-1945’、p 41.

<sup>45</sup> Leffelaar/Van Witsen、p 258.

<sup>46</sup> Kinvig著、p 80.

末、タイ政府は建設予定地を提供し、バンポンからカンチャナブリまでの、最南端路線を独自に出資、建設することになっていた。<sup>47</sup>このために集められたタイ労働者の数はビルマで労働に就かされた人数よりもかなり少なかった。

1943年始めに、鉄道は12月ではなく8月には既に完成しなければならないと決められた。この目標を達成する唯一の方法は鉄道建設労働者の数を劇的に増大することだった。大量の捕虜達がシンガポールからタイに送られた。それと共に、日本占領軍には2種類の労働力供給所があった。第一は、またもやビルマ政府である。鉄道沿いのキャンプに於ける悲惨な状況が既にビルマでは知れ渡っていたため、ビルマ国民の任意応募熱は冷めきっていた。そのためビルマでは労働義務が課せられた。<sup>48</sup>日本側が必要人数を示すと、政府がその人数を召集する。それぞれの地区に供給義務人数が定められた。この方法により、また9万1千人のビルマ人が鉄道沿いのキャンプに送られていった。第二の供給所は英国領マラッカであった。ここには19世紀から20世紀にかけて砂糖とゴムの栽培のためにイギリス人が運んだ50万人余のタミールインド人が住んでいた。日本軍占領直前から占領中にかけて同地域の経済状況は悪化した。多くのタミール人は職を失い収入を失った。彼らをタイに誘うのは難しいことではなかった。合計約9万1千人のタミール人、中国人、マレー人が、英国領マラッカからタイ領内の鉄道建設キャンプに送られ、労働に従事させられた。<sup>49</sup>多くの男たちは妻や子供たちを連れていった。さらにこの時期、数千人のジャワのロームシャたちがタイに送られたことが知られている。<sup>50</sup>

タイ独自の請負業者の元で働いていたタイの労働者達と違い、他のアジア人労働者達は一般に南方鉄道連隊(SARC)の直接支配下にあった。同連隊が彼らの宿舎、食糧供給、医療設備などの責任を負っていた。しかし、ロームシャキャンプの世話をすることが同連隊の優先事項からはほど遠いことは、早々に明らかになった。宿舎は戦争捕虜たちのものよりももっと質が悪かった。SARCが用意できる医者の数も限られていた。ロームシャたちの中に医者はいないかつたし、全体が組織化もされておらず、伝染病に対する知識も欠けていた。彼らは、状況のなすがままに放っておかれた。しょっちゅう打たれ、激しい労働をし、食糧は少なく、衛生状態の悪い中で、病が急速に広がった。悪名高かったのはコレラ感染で、戦争捕虜の間にも犠牲者を出した。1943年6月、日記著者の一人、ルーへは記している。“上流のキャンプで、コレラの蔓延がひどい。多くの死者。私はこの間ある医者から、約400人のタミール人がいるタンビ/タミールキャンプで、毎日25人くらいの死者が出ているという話を聞いた。”<sup>51</sup>何千人というロームシャたちが斃れていった。ビルマのロームシャの中には逃亡する者が多かった。

---

<sup>47</sup> Kinvig著、p 38.

<sup>48</sup> Kinvig著、p 112.

<sup>49</sup> Kinvig著、p 200.

<sup>50</sup> 日本側の資料に依ればこの数は6173人であるが、元戦争捕虜であったオランダ将校が、1945年8月、9月に行った調査に依れば最低でも7408人で、おそらくはかなりこれより多かつたであろう、という(IC 005228)。De Jong 博士その他は、ジャワのロームシャ総数を1万人と見ている

<sup>51</sup> ‘健康と医療情況’の章参照。



1943年半ばにはロームシャたちの状況があまりに悲惨であり、死亡率もあまりに高かったため、遂に日本軍上層部が介入した。ロームシャ専用の病院が幾つか作られた。1943年6月と8月にはシンガポールでK-、及びL-フォース<sup>52</sup>という医療部隊が戦争捕虜によって構成され、ビルマとタイのロームシャキャンプや病院に送られた。両部隊の到着によって状況は好転したが、それでも異常に高い死亡率が下がるまでにはまだしばらくの時間が必要だった。<sup>53</sup>

いくつもの墓地の中にはロームシャの墓地もあることが知られている。しかしほとんどのロームシャの墓には名前が無く、墓地の場所もはっきりしない。投入されたロームシャの総数も、そのうちの死者の数も、このため憶測の域を出ない。<sup>54</sup>ただ、次の抜粋は事実をかなりよく表しているであろうと思われる。“枕木の一本一本が死者であると言われている。スカルノのロームシャたちを加え、マラッカからのタミール人やビルマからなど、甘い約束やわずかばかりの金で原始林に誘われ、そこで飢えやコレラのためにネズミのように死んでいった全てのアジア人を計算に入れれば、それもあながち大げさとはいえない。”<sup>55</sup>

## 1945年8月15日以降

日本が降伏した1945年8月15日に、あるいはその少し後に、タイの恢復キャンプにいた戦争捕虜たちも終戦を知らされた。この知らせは、捕虜たちやロームシャたちがまだ鉄道補修作業をしていた奥地のキャンプにも迅速に伝わっていった。今度は彼らも（もう一度）恢復キャンプに送られた。パンフレットにより、元戦争捕虜となった人々はそれでもキャンプに留まるように要請された。その後、食糧や医療品のパラシュート投下が始まった。キャンプの状況は目に見えて好転した。すでに1945年4月にはRAPWI（連合軍戦争捕虜及び被強制収容者帰還組織）が戦争捕虜の避難準備を始めていた。こうして終戦発表とほとんど同時に戦争捕虜たち、これはその内のイギリス人、アメリカ人、そしてオーストラリア人に関してであるが、この人々の帰還が始まった。約1万1千人のオランダ人元戦争捕虜たちは、イギリスの蘭領東インド‘再占領’<sup>56</sup>とオランダの帰還準備を待ちながら、他の人々を見送らなければならなかった。1945年9月12日、日記著者のドゥ・フラウターは書いている。

---

<sup>52</sup>日本軍はシンガポールから他の場所に送られるためにグループ化された戦争捕虜たちに、アルファベットコードを付けた。F-、およびH-フォースは前述している。

<sup>53</sup> Kinvig, p161.

<sup>54</sup> 鉄道建設に投入されたロームシャ数の推測はおよそ20万から25万以上と分かれている。そのうちの死亡率に関しては研究者の間では最低でも50%にはなり、実際にはもっと多く、地域によっては80%から90%であったであろう点で意見が一致している。

<sup>55</sup> Gideonse 著、p 45.

<sup>56</sup> 1945年7月のポツダム会談の時、蘭領東インドは東南アジアのイギリス統轄下につけ加えられた。オランダは自力で蘭領東インドの統治を回復するだけの十分な物量に欠けたため、イギリスに頼らざるを得なかった。

我々の帰還輸送に関する本部からの公式書状も、迅速な帰還を期待できないものだった。突然に輸送手段が不足してしまい、天候が悪く、ラングーンはいっぱいだ、等々。しかしその間にもアメリカ人やイギリス人は発って行き、家路に向かっており、オーストラリア人はシンガポールから出航し、インドネシア人(!)は飛行機で飛んで行った!!! 不満が渦巻いている。

帰還輸送だけではなく、蘭領東インドにいる家族に関する情報もなかなか来なかった。死者や負傷者を出した、ジャワにおけるインドネシア人の反乱に関する噂が、オランダ人元戦争捕虜が当時集められていたバンコク周辺のキャンプに大きな不安をもたらした。残念ながらこれは単なる噂ではなかった。スカルノの指揮下で、1945年8月17日、*インドネシア共和国*の独立が宣言された。1945年9月から10月にかけて、状況は激化した。特にジャワとスマトラではインドネシア国家主義の若者たちが西洋人に対する過激行動を起こした。イギリス人たちは、不本意ながらも炎のまただ中に飛び込むことになった。

その間にも、タイでは蘭領東インドの統治回復のために元戦争捕虜のオランダ人たちが幾つかの大隊が編成された。しかしイギリスの東南アジア総司令官であった海軍大将ルイ・マウントバッテン卿は、ジャワやスマトラの爆発寸前の状況を見て、これらの島にオランダ軍の進行を許可しなかった。

1945年12月に、新しく帰還規則が制定された。オランダに送還されるかどうかの審査基準は、オランダ人であること、健康状態の良し悪し、社会的地位であった。この基準により、2千人のオランダ人が全ての任務の対象外とされ、オランダへの帰還者リストに載せられた。<sup>57</sup>この審査に関しては多くの批判があった。多くの人々が不当にも活動的な任務に適すると査定されている、というのが大多数の意見だった。1946年1月にはまだ9千人のオランダ人がタイに残留していた。<sup>58</sup>キャンプの状態はひどく原始的なものだった。居住状態や帰還の遅延に対する抗議書が何度もオランダ政府に送られたが、あまり状況は改善しなかった。帰還における大きな問題は船舶に十分な余裕がないことだった。使える船には優先基準が適用された。最優先は軍隊輸送、その後順に、ジャワからの帰還者輸送、次にスマトラ、シンガポールと続き、最後がタイであった。<sup>59</sup>1946年2月になって、遂にマウントバッテンからジャワ、スマトラへの軍隊輸送に青信号が出ると、これはタイにいた元戦争捕虜にとっては本国への帰還がまた遅れることを意味した。やっと1946年8月に、最後のオランダ人元捕虜がタイを離れた。<sup>60</sup>

オランダ人元捕虜の帰還だけではなく、ロームシャたちの帰還も遅々としていた。RAPWIは、元捕虜の救出作業しかなかった。ビルマとタイを再占領した際、RAPWIはロームシャ

---

<sup>57</sup> E. Touwen-Bouwsma と P. Groen 共著、*Tussen banzai en bersiap. De afwikkeling van de Tweede Wereldoorlog in Nederlands-Indië* (Den Haag 1996) 中 p 43-58、. Groen の記事、'Prisoners of War, Prisoners of Peace. De opvang en repatriëring van de krijgsgevangenen van het KNIL, augustus 1945 - augustus 1946', p 55.

<sup>58</sup> Groen 著、p 54.

<sup>59</sup> Groen 著、p 56.

<sup>60</sup> Kinvig 著、p 196.

たちへの緊急援助はしたが、帰還援助に関しては到着しつつあった占領軍に任せた。これにより、ビルマでは日本降伏の2ヶ月半後に医療センターと避難民キャンプが設営された。ここには3千人から3千5百人のビルマ人ロームシャが収容され、残り4万人ほどの、日本降伏時にまだ鉄道沿線に配置されていたビルマ人は、このときすでに自力で家路に向かっていった。しかしこれは、マラッカやジャワから連れてこられ、タイで立ち往生していたロームシャたちにはできないことだった。1945年9月に、何人かのオランダとイギリスのボランティアたちがロームシャ数の調査を始めた。3万5千人のロームシャが数え上げられ、その内5千人はジャワ島出身者であった。彼らはカンチャナブリ周辺とタイの南端、チュンポンのキャンプに集中していた。マラッカ出身のロームシャたちは1945年11月と1946年1月にマラッカに帰還した。<sup>61</sup>ジャワのロームシャはまだしばらく後に残らなければならなかった。彼らの帰還に関しては1945年11月に設立された「蘭領インドネシア人の帰還と文献局」(NEBUDORI)が担当した。<sup>62</sup>この帰還も、オランダ人元戦争捕虜の帰還と同様の問題に直面し、しかも捕虜よりも優先順序は低かった。その上1945年末には、タイのキャンプ内は政治的に不穏な状況となった。共和派のインドネシア人とタイにまだ残っていたオランダ人元戦争捕虜との間で争いが起こった。1946年8月になってやっとジャワ人の帰還が始まり、同年11月に終わった。<sup>63</sup>

帰還した戦争捕虜とロームシャたちは多くの死亡者を後に残した。前述したように、ロームシャの墓地はほんの少ししか知られていない。戦争捕虜に関しては1945年8月16日の時点で、鉄道線路沿いその他に144の墓地があることが知られていた。<sup>64</sup>死亡した戦争捕虜たちはビルマ(タンビュザヤ)とタイ(カンチャナブリおよびチュンカイ)の名誉墓地に再埋葬された。この三カ所の墓地に、合わせて12,849の墓がある。

30万人以上の様々な国籍、階級や地位の人々が非常に困難な状況の下で建設したビルマタイ鉄道は、現在ほとんどその姿をとどめていない。大部分は戦後解体された。ビルマ側の鉄道はほとんど残っておらず、タイではナムトク(捕虜たちにはタルサオとして知られていた)からバンポンにかけての、約124kmは使われているが、残りは破壊された。タイの旧労働キャンプ、ヒントクとコンユウ周辺は、1987年オーストラリア人元戦争捕虜によってヘルファイヤー・パス(地獄火峠)記念物とされた。<sup>65</sup>オーストラリア人がこう呼んだのは、鉄道建設のためにこの地域で大量の土を掘り返さなければならなかったからであった。

---

<sup>61</sup> Kinvig 著、p197.

<sup>62</sup> E. Touwen-Bouwisma と P. Groen の共著 *Tussen banzai en bersiap. De afwikkeling van de Tweede Wereldoorlog in Nederlands-Indië* (Den Haag 1996) の中、p73-94、H. Hovinga の記事 'Einde van een vergeten drama. Opvang en repatriëring van romusha na de Japanse capitulatie' p77.

<sup>63</sup> Hovinga 著、p85.

<sup>64</sup> Leffelaar/Van Witsen 著、p385.

<sup>65</sup> ヘルファイヤーパス記念物、タイービルマ鉄道(バンコク:オーストラリアータイ商工会議所), 1996

## 日記著者<sup>66</sup>

ボム

アントニウス・マリヌス・ボム修士(1910年11月15日生)は、1938年に妻イナ・ドクターズ・ファン・レイウンとともに蘭領東インドに向かい、スラバヤのジャワシュ銀行に就職した。1941年8月、彼はバタビヤに異動になった。すでに1940年5月以来、ランドストーム(市民軍)に将校として動員されていた。バタビヤに引っ越してから5週間毎の演習のためにスラバヤに通った。一度配属された部隊に所属し続けるのが規則であった。偶然にも、1941年12月8日に彼は演習のためにスラバヤにおり、そのまま部隊に残った。軍の仕事そのものはまだ橋の閉鎖に留まっていた。時間の経過と共に彼の部隊はマドーラに送られたが、そこでも実際の戦闘活動はなかった。蘭領インド軍降伏の6日後になって初めて日本兵を見た。

戦争捕虜としてボムは最初の3ヶ月間はマドーラに滞在し、その後ジャワに戻された。スラバヤではヤールマルクトテレインに収容された。ある訪問日に突然イナが目の前に現れて彼を仰天させた。彼の知らない間にイナはスラバヤに引っ越していたのだ。次にボムは列車でバタビヤに送られ、そこから船でシンガポールのチャンギに輸送された。1943年1月10日、ボムはシンガポールから蒸気船ニチメイ丸に乗船した。船内には約千人の戦争捕虜が乗っていた。同様に千人の捕虜達を乗せた第二の船、モジ丸と共に、コルヴェット艦に護送された船団は乗船と同日に出航した。目的地は捕虜達には知らされていなかった。1月15日午後、船団は2機の連合軍戦闘機に襲撃された。ニチメイ丸は沈没した。幸いなことに襲撃のあった時、殆どの捕虜達は甲板に出ていたが、それでも41人の捕虜が死亡した。ボムは、おそらくは爆弾の破片によって背中 of 皮の一部が剥け、負傷した。ニチメイ丸の生存者達は、爆撃にはあったがまだ浮いていたモジ丸に助け上げられた。満員の船は航海を続けた。目的地はムルメインであった。そこで、重傷者を例外として全員刑務所に運ばれた。ボムはこの時点で自分の着ている服と指にはめていた2つの指輪と、壊れた腕時計以外何も持っていなかった。モウルメインで、乏しい所有物を少し増やすことが出来た。さらに、彼は幾枚かの紙を手に入れた。ボムはそこに日記を付けることに決めた。1943年1月末に、彼はビルマータイ鉄道沿いの初めてのキャンプ、ラパウに送られた。将校として、彼は労働グループの長となった。少ない自由時間には好んで読書をした。状況は徐々に悪化していった。

ボムは毎日は書いていない。1943年10月までは約10日毎、その後は間隔が長くなった。1943年6月以降からは書く毎に、彼の居るキャンプでその期間に亡くなったオランダ人の名前を日記に記した。1943年7月からは便に混じる血液や粘液に多かれ少なかれ悩ませられ続けたが、労働は続けなければならなかった。やっと9月初めになって、彼の鉄道沿い第4のキャンプ、ア

---

<sup>66</sup> ここに記された内容は日記そのものから、あるいは本人や近親者とのインタビューや手紙のやりとりなどからまとめたものである。

ンガナンの病室に収容された。1ヶ月後にはかなり回復したが鉄道労働をする必要はなかった。1943年12月29日に、ボムはビルマを去り、タイのカンチャナブリ回復キャンプに入った。ここと、1944年5月に移送されたターマカンキャンプでは読書をする時間も十分あり、彼はそれを堪能した。シェークスピアとフェルギリウスが彼のお好みだった。しかしこれらのキャンプ生活の単調さは彼を憂鬱にした。1944年12月末に将校達は別の階級の者達と離されカンチャナブリに集められた。ボムもこのためターマカンを出た。1945年1月3日、良く知られたターマカンの「クワイ川に架かる橋」が爆撃された。ターマカンキャンプも幾つかの直撃弾を受け、ボムが10日前まで住んでいた小屋も全焼した。1945年8月になってもボムはバンコックの東約150kmにあるキャンプに移送された。彼は8月16日にこのキャンプに到着した。翌日、日本降伏が公式に通知された。ボムはバンコックに戻された。1945年12月24日、オランダ人の婦人達を乗せたイギリスの輸送船がジャワからバンコックに到着した。ボムが船から下りてきたばかりの知人にイナのことを聞くと、「彼女ももう来るでしょうよ、この船に乗船していますよ。」と言われた。またもやイナは完全に彼を驚かせた。イナはダルモ（スラバヤ）、タンゲランと聖ビンセンチウス（どちらもバタビア）の各収容所に抑留されていたのだった。彼らはもう二度と離れないと約束し合ったが、しかし3ヶ月後にはまた離ればなれとなった。ボムは徴兵検査に合格し、バリに行かなければならなかった。イナはバンコックに残った。ボムの船がバタビアに寄港したとき、彼は戦前の雇い主であるジャワシュ銀行を訪問した。銀行の頭取は彼を元の部署に戻したが、ボムが徴兵免除になるように取りはからった。こうしてボムは再びジャワシュ銀行に勤めるようになった。間もなくイナもバタビアに到着した。非公式のチャンネルを使って、イギリスの飛行機の席を取ることに成功したのだ。彼らはまた一緒になり、今度は最後まで続いた。

## ディッケ

ジョン・クリスチアーン・ディッケ(1902年12月6日ー1988年2月2日)は戦争勃発時にはテレビン・チンギ(北スマトラ)の近郊に有った繊維企業バンドル・ベッツィーのアシスタントであった。同企業はアムステルダム通商協会(HVA)の所有であった。彼はヤニナ・マリー・グスタヴァ(ヤンカ)・ブラウアーと結婚していた。上の二人の子供達、ペーター(1931)とヒセラ(1934)はブラスタギのプランターズ学校協会の寄宿舎に居た。息子のカレル(1937)は、彼らと共に会社の敷地内に住んでいた。

1942年3月始めに、ディッケは下士官として軍に入隊するよう呼び出しを受けた。彼は第二ランドストーム軍に参加するため、メダンに向けて出発した。3月12日に、日本軍上陸の知らせが入った。オランダの全軍、ほぼ3千人はメダンからアチューに向けて後退した。1週間以上してから、彼らは人里離れたブランケジェレンの軍事駐留所に到着した。ここで3月28日、日本軍に降伏する。投降した戦争捕虜たちはグループ毎に分けられ、幾つかの地点を中継しながら

らメダンに連れ戻された。収容されたのは、港町ベラワンの、元港湾労働者宿舎ユニカンボンであった。捕虜たちは港湾労働をさせられた。

1942年5月16日、ディッケは日本の輸送船イギリス丸に乗船した。この船は5月18日、ビルマに進路を向けた。1942年5月27日に、ディッケはタボイに停泊した船からビルマの岸に上がった。鉄道建設の労働が始まるまで、彼はタボイ、イエ、タンビュザヤの各キャンプに滞在した。捕虜たちにとっては比較的穏やかな日々であったが、それでも何人かの死者を送り出さなければならなかった。赤痢が最も大きな死因であった。この時期の労働は架橋工事、道路改善、港湾労働が主だった。

1942年8月17日、ディッケは約300人の戦争捕虜グループの一員としてトナンキャンプに到着した。2日後にビルマータイ鉄道での労働が始まった。土の運搬だった。ディッケは、第八グループに入れられた。彼は毎日日記を書き続けたが、この時期からは内容が次第に簡潔化した。鉄道建設のほとんど毎日の労働に関しては、何日も同様の作業をさせられたときには‘鉄道堤を造る’‘脇固めをする’‘土運び’‘パリツ（溝）掘り’、あるいは簡単に‘同上’と記すに留まった。日記から、いかに捕虜たちの作業が重労働であったかが読みとれる。休日は少なく、その数は減っていった。その上一日の作業時間は増えていった。労働を中止できるのは病気の場合か、あるいは他のキャンプに、通常は徒歩で、移動することになった場合のみだった。1943年2月から、ディッケはかなり定期的に腹痛を起こすようになった。数日間の‘ノーデューティー’の後、ディッケはまたもや労働に戻らなければならなかった。1943年8月21日、一月以上休みなしで働いたというので、ディッケはスタッフから特別休暇を得た。その夜腹痛がまたもや頭をもたげ、今回はあまりにひどかったため、14日後にビルマの第55病院キャンプに移送されることになった。ここで、彼は赤痢病棟に入れられた。鉄道が完成すると、1943年12月に第55キャンプは閉鎖された。ディッケは4日間近い旅を経て、タイのチュンカイ回復キャンプにたどりついた。ここに滞在した3ヶ月の間に体調がやや回復した。しかし検査では日本への輸送に適するとされ、第48グループに配属されて1944年4月8日、チュンカイを発った。徒歩で、列車で、そして船でと旅は続き、最後に着いたところは日本ではなくインドシナであった。4月17日に最終目的地に到着した。サイゴンだった。キャンプは港に面していた。宿舎に関して、ディッケは言っている。“ここには電灯があり、水道がある。寝場所は非常に狭く、50cmかける2mだ。”戦争捕虜たちは避難塹壕などを掘ったり、整えたりした。塹壕が捕虜のためではなかったことは1944年5月5日の記述で明らかである。

夜、私にとって初めての爆撃を経験する。私は自分の寝床に寝たままだった。我々のキャンプには避難壕は無いと言っていい。宿舎は2階建てだ。そしてヤップは我々に寝床に留まっているようにと言った。もし直撃されたら大量の死者が出るだろう。しかし、神が司っていることを知っているのは良いことだ。私はそれを信じている。

1944年7月8日、ディッケは雑役中に指に怪我をした。3日後、彼はすぐそばにあった病院キャンプに移された。‘充分な病人のいないところ。’注意を引く記述だ。1944年8月末に、彼の足にペラグラ紅斑が出た。彼はビタミン剤と注射の治療を受けた。10月末にはまた仕事に出、その一月後に病院キャンプから退院した。その時期には作業内容は多岐に渡るようになり、ほとんど日毎に変わった。主要な作業場は港と空港である。土木作業から荷運びまで様々な仕事があった。夕方や真夜中の労働もしょっちゅうあった。

サイゴンでの比較的良好な時期は1945年2月9日に終わりを告げた。この日、彼はサイゴンの南東約70kmのゴム樹林中にあったキャンプに、飛行場建設のために向かった。この新しいキャンプでは、不定期でわずかな休日以外は厳しい重労働をさせられた。1945年4月26日、つまり新キャンプに移ってから2ヶ月にもならないときにディッケは日記に書いている。“体重67kg。サイゴン出発以来7kg痩せた。”1945年6月末に、幸いにも森林キャンプ生活は終わった。捕虜たちはサイゴンの病院キャンプに連れ戻された。ここで、7月12日、ディッケは捕虜になって以来初めてヤンカの生存のあかしを受け取った。

ディッケはまたもや労働グループに入れられて雑役にだされそうになったが、1945年8月15日、日記に次のように宣言している。

水曜日。アメリカ兵が、12時頃“ザ・ワー・イズ・オーバー”と知らせてくれた。私はこれをすぐに信じた、というのも彼は日本人警備用の食事を持って労働キャンプから病院キャンプに入ってきたからだ(労働キャンプには秘密のラジオがある)。さらに、フランス人<sup>67</sup>が通りで“ラ・ゲール・エ・フィニ”と叫んでいたという。その日、後になって、日本人キャンプ司令官(下士官)がイギリス医療将校に“センサー・イズ・フィニッシュド”と言った。夜になってそれが事実であることが書面で確認された。

早くも元戦争捕虜たちは、ましな宿舎、フランス兵舎に移された。8月30日には町に出ることが許された。何人かの友人たちとともに、ディッケはこの機会を生かした。彼らは多くの人々と知己を得、ひんぱんに訪問し合った。しかし次の週には兵舎の外は不穏な雰囲気となった。アナミット<sup>68</sup>たちがフランス支配の復活に対して抵抗運動を始めたのだ。1945年9月28日にはオランダ人元捕虜2人がアナミットに殺害された。

1945年10月7日、ディッケはまたもやヤンカからの手紙を受け取った。彼女と3人の子供たちは戦禍を生き延びた。この手紙によって4番目の子供の消息も明らかになった。ディッケが1942年3月6日に召集されて家族を後にしたとき、ヤンカは臨月だったのだ。手紙に依れば

---

<sup>67</sup> インドシナはフランスの植民地で、支配者たちはフランス・ヴィシー政権に荷担していたため、この国のフランス人は抑留されなかった。

<sup>68</sup> インド後背地にあった以前の帝国とフランス保護領、南シナ海に面し、トンキンとコーチシナの間地域に住む部族の名前で、現在はベトナムの一部。アナミットはベトナム国民の過半数をしめる。

1942年3月27日に生まれた息子、ヤン・クリスチアンは1943年2月3日に死亡していた。ディッケはインドシナを1945年10月12日に後にした。船でシンガポールまで旅をした。ここでも彼は家族の元に戻るまで2ヶ月以上待たなければならなかった。1946年1月4日、ディッケはメダンに飛んだ。家族との再会について、彼はこう書いている。

トラックで、我々はまず中佐を降ろすためホテル・ドゥ・ブール（ヤンカはここで会議をしていたのだが、私はそれを知らなかった）に寄った。私の家の前も通ったのだがそれも私は知らなかった。その後、私は仲間たち全員を家に送り、最後に自分のところに行った。アニー・ファン・レーテルに玄関ホールで会い、彼女はすぐに私だと気づいた。彼女は私の住処を教えてくれ、その後、後ろで勉強していたペーターを呼んだ。4年前と同じである筈もないが、彼はそんなに変わってもいなかった。まあまあ大丈夫そうだ。その後、ヒセラが学校から帰ってきた。彼女もあまり変わっていなかった。そしてその後にヤンカが来た。窓から子供たちが、私が居ると叫んだ。私たちは自分たちの部屋で会った。彼女は少し白髪が増え、太ったようだった。それ以外は大丈夫そうだ。そのときカーレルチェが帰ってきた。彼はあまり成長しておらず、一番うまくいっていないように見えた。いい子だが、いたずら坊主だ。

これが、ディッケが日記に書いた最後の文章である。

#### フェイケマ

マルティヌス・フェイケマ（1907年8月12日－1996年4月10日）は、1941年12月にバタビアに住んでいた。彼はペトロネラ・ステファニー（ピッチェ）・カーメリング・ヘルモルトと結婚しており、娘が2人、息子が一人居た。フェイケマは蒸気船株式会社「ネーデルランド」の業務代理人をしていた。12月8日、彼は動員され、砲兵隊中尉として蘭領東インド軍の一員となった。1942年3月8日にはチランジャンの陣地にいた。同日に、彼の部隊はスカブミに出発した。そこで彼は捕虜となり、農業学校に収容された。6月28日にはまだ妻と子供たちの訪問を受けることができた。その三日後に、戦争捕虜たちはチマヒに移送された。フェイケマは輜重隊の野営地に入れられた。続いて10月にはバタビアに輸送され、その数日後にまた船に乗せられた。船はシンガポールに着き、チャンギ収容所に彼を送り込んだ。そこで、彼は1942年10月29日次の言葉で日記を付け始めた。

我が最愛のピッチェ、



僕たちがジャワを離れた今、僕は今までに君と話しをしたい、君と話して君たちをまた身近に感じ、もっといろいろなことを語りたい。君がこれを読むこともあるかもしれない、どんな状況下で読むことになるかは、今はくよくよ気にしないことにしても。もし何かの事情で君がこれを手にすることがないとしても、こうして君と話すという満足感を僕に与えはする。

彼の日記は全体がこのような、妻に宛てた“手紙”で成り立っている。家族を希求する彼の気持ちは強く、日記にも頻繁に登場する。家族と再会したいという意志が、彼を生存させ続ける。1942年11月18日にはこう書いている。

僕たちがもう一度一緒になることができれば、それで全ては良くなるのだ。そして僕はもう決して君たちと離れはしない。僕たち一生分の離別期間を、もうここで過ごしてしまったと信じているから。3月初めの8日間も含めて、これまで経験したこと全ての後で、僕はもう二度と軍服を着る必要のないことを祈っている。そんなことに再び熱中するような気持ちにはなれないだろう、これはここにいる殆どの仲間たちも同様に感じている。

すでにチャンギに到着した時から、フェイケマは腹を壊しており、シンタクラース祭(12月5日)の夜に、病院に入院する。赤痢ではなかったが、常に下痢症状があった。1943年1月16日、下痢はまだ治まっていなかったが退院させられる。同日に、彼のグループは、彼を残してバンコックに向かって出発した。

1943年5月6日、フェイケマももう移送を免れられなくなった。彼はH-フォース(H-2)に編入された。列車で彼はタイのバンポンに発ち、そこからさらに列車と徒歩で、トンチャン収容所に向かった。フェイケマは1943年5月から8月の終わりまで、この線路沿いのキャンプに滞在する。比較的短期間ではあったが、この期間は捕虜たちが最も厳しい労働をさせられた期間であった。足の浮腫と膝の怪我、身体に紅斑が出たことにより、フェイケマは8月26日、病院キャンプであるカンチャナブリキャンプに送られる。ここから彼は、チャンギを発って以来10度目のマラリア発作に苦しみながら1943年11月にまたシンガポールに戻される。シメロードキャンプが取りあえず彼の滞在地となった。1944年5月にチャンギキャンプに引っ越しをさせられた。ここで彼は日本降伏までを過ごす。1945年9月2日、彼は溜息混じりに書いている。

今やもう日本の圧力下で生きなくてよいとは、なんと心地良いことだろう。当時はこの日記を失うのではないかという恐れがしょっちゅうあった。こういうものは提出するか、焼いてしまうようにと何度も言われていた。そんなことは一度もしなかったが、しかし何度も何度も隠すことはした。ここにニュース的なことは決して書

かなかったし、目立つ日付を書いて日記風にすることもせず、ただの書き付け風にしておいた。

1945年9月26日、フェイケマは日記を終了する。彼は妻の手紙をバタビアから受け取ったところだった。

これがこの形で君に書く最後の手紙になる。実際に君に何度でも手紙が書けるようになった今、この日記は終了する。1年半以上の沈黙の後で、初めて君からの手紙を受け取ったときは、どれほどほっとしたことか。少しずつではあるがバタビアからの一般的な好ましくないニュースが入ってきていたし、病気や亡くなった人の知らせも多くなってきていた。神が僕たちの小さな家族をこの年月の間守ってくださったことに心から感謝しなければいけないし、これから必ず来るであろうつらい時や、あまり良くない時期にもこのことを忘れてはいけない。ピット、君がこの日記を最後まで読むかどうか、僕には解らない。あまり感動的ではない戦争捕虜生活の話は、特に最後の1年半は、全然面白くないかもしれない。でも、僕にとっては、ただの紙の上とは言え胸の内を吐き出し、時々こうして君と話ができるというだけで気分が良くなることが多々あったのだ。

ドゥ・フラウター

昆虫学者ヘンドリック・ヤコブ・ドゥ・フラウター博士<sup>69</sup>(1907年2月20日－1970年1月28日)は、1934年8月に、妻E. C. (ベップケ) ヨンケルとともに、蘭領東インドに向けて旅立った。ジェンベルのブスキッシュ試験場で働くようになる。ジェンベルに6年住み、ベッピーとキキという娘が生まれた後、一家はマランに引っ越す。引っ越しの理由は、ドゥ・フラウターがマランにあった、一般農業連合会の中央及び東ジャワ試験場に転勤になったためだった。1941年12月12日、ドゥ・フラウターは動員され、ランドストーム軍に配属される。そのときから彼は続けざまに東ジャワの様々な地域に転属となる。1942年2月24日、第三子出生に立ち会えるように休暇をもらった。翌日、ツルーシャが生まれる。3月9日、ドゥ・フラウターは捕虜となり、クルット通りの兵舎に収容された。それから1週間としない内に捕虜たちは第13歩兵大隊に移され、翌日にラムパルトレインの第10補給大隊に入れられた。そこは広い場所で、捕虜たちの待遇も比較的良かった。雑役はさせられたが、外部での雑役には志願者が列をなすほどで、それは妻や子供たちを見

---

<sup>69</sup> HJ. ドゥ・フラウターは1932年10月6日に国立ライデン大学で*De bloedluis Eriosoma lanigerum (Hausann.) in Nederland*という論文により、博士号を取得した。

る機会があるからであった。ドゥ・フラウターも、ベップケや娘たちが見られるような機会は逃さないようにし、時には二言三言、言葉を交わすことさえ有った。

自由時間にはドゥ・フラウターは他の生物学者や農業学者とともに、農業講座を開き、英語やロシア語の講座を聴き、合唱隊の一員となっていた。日本の収容所司令官の許可を得て、ドゥ・フラウターは1942年7月3日、4人の人たちと協力して、いわゆる病院用菜園の造築を始めた。収容所内の病人のために食用や薬用の作物を栽培するのが目的であった。好成績をあげたため、9月には収容所内外に、収容所全体向けの農園を造ることになった。しかし1943年1月から捕虜たちの移送が始まったため、この成果も長く楽しむことはできなかった。1月15日はドゥ・フラウターがマランを離れる番となった。列車で彼はバタビアに行き、1週間半後には彼はシンガポールのチャンギ行きの船に乗っていた。彼が家族を見たのは12月5日が最後であった。

チャンギはマランの後ではきついものであったが、それはこれから来るもの前触れと言うべきものであった。ドゥ・フラウターはチャンギでイーストの培養に従事した。このビタミン不足が、ペラグラ発症の大きな原因となっていた。1943年4月14日、ドゥ・フラウターは列車でチャンギを發った。3日半の後、タイのバンポンに到着する。そこから、捕虜たちは目的地の鉄道沿いのキャンプまで、200kmの距離を歩いて行かなければならないことになる。夜間に歩き、日中は休息し、2、3回の行軍毎に36時間休息した。ドゥ・フラウターは7回の夜間行軍の後脱落した。そこはリンティンキャンプであった。何人かの病人や疲労困憊した捕虜とともに彼はそこに残った。数日間、脱落者は放って置かれたが、ある日車が現れ、彼らをさらに先に運んだ。数回の車旅行の後、やっと、これからはばらくの滞在地タカヌンキャンプに到着した。そこには全行程を徒歩で行った捕虜たちがすでに到着していた。ドゥ・フラウターは病人用テントに入れられ、ニック・ワインハールツを含めたグループの人たちがそこを發ったとき、彼は後に残された。マラン以来、ドゥ・フラウターはニックとともに、ヒューブ・フェルワイエン、クン・ファン・ザイルとコングシー互助会を構成していたが、この会はバラバラになり始めた。

ドゥ・フラウターは体調が悪く、胃腸を壊し、足に怪我をし、実際的な鉄道建設労働はもうできなかった。タカヌンは病院キャンプであった。他のキャンプからも患者が頻繁に送られてきた。ドゥ・フラウターは毎日のように周りの人たちが死んでいくのを見、日記から、彼も赤痢に罹るのではないかと常に恐れていたことがわかる。彼は罹らずに済んだが、1943年6月10日、コングシー仲間のヒューブ・フェルワイエンが死亡する。残る仲間はクン・ファン・ザイルとドゥ・フラウターだけであった。悲惨な状況ではあったが、ドゥ・フラウターはタイの自然をとて楽しむことができた。日記を付ける以外にも、彼は自分の見た鳥や昆虫について書き留めた。毎日のように日記には“ベップケと可愛い子供たちのことを思う”とも書かれている。

そんな時、恢復キャンプに送られる人がいるという噂が流れた。ドゥ・フラウターはその運の良い人たちの中に入った。1943年7月8日、彼はタイのジャングルを離れた。目的地はカンチャナブリである。ドゥ・フラウターの体調はそこで目に見えて回復した。彼はそこで植物学者のライトと、昆虫学者のベルウィックに会い、多くの時間を彼らとともに過ごす。またクン・ファン・ザイルともまだ多くのコンタクトを持ち、さらにキャンプでの隣人、W. W. ロスとも友人

になる。彼は多くの本を読み、キャンプ内の昆虫や鳥の研究をした。マランに居たときと同様に、“苦しみと悲惨の日常から聴衆の気持ちを逸らすために”<sup>70</sup> 昆虫をテーマにした講座を開いた。

情況は確実に改善したにもかかわらず、カンチャナブリにもビタミン欠乏症が多く見られた。ドゥ・フラウターも、足、手、座居の臀部の傷に悩まされた。1943年10月13日、分かれて以来初めて、彼はベップケからの手紙を受け取った。ドゥ・フラウターは以降全部で6通の手紙を受け取ることになる。ここに登場する日記著者たちと比べて、これは例外的に多い数である。

1943年末に、捕虜たちの一部が日本か、インドシナに移送されるという知らせが入った。しかしドゥ・フラウターはそのような運命を逃れることができた。日本降伏まで、彼はタイの様々な回復キャンプに滞在する。1944年5月、彼は昆虫学者兼寄生虫学者として、チュンカイキャンプの医学試験場で働き始める。初期には血液や便の顕微鏡検査に従事した。6月半ばから、彼はマラリア撲滅のための蚊の研究を始める。1945年6月にタムアンキャンプに送られてからも、彼は研究を続けた。1945年8月16日、日本降伏が公式に通知された。翌日にドゥ・フラウターは書いている。

今日の午後、4時から6時まで、入浴の機会があった。自由に道を越えて川まで散策し、自由に水浴びし、自分の好きな所どこにでも立ち止まることができるのは、限りなく良い気分だ。帰ってくるとみんな楽しげな笑い顔である。皆同じように感じているのだ。もう何年も見たことのない光景だ。3年半の抑留の後、自由を実感している。小屋は急に狭苦しく感じられ、ここにこんなに長く住んでいたとは我ながら信じられないほどだ。

希望に満ちて、ドゥ・フラウターは妻や子供たちからの、あるいは彼らに関しての知らせと待ち望んだ。しかし、なかなか知らせは来なかった。ジャワの状況のニュースはどんどん悪化していた。1945年10月初めに、ドゥ・フラウターはジャワでインドネシア民族主義者たちと戦うために志願した。しかし、タムアンのある医師が、彼が居ないとマラリア研究をする人が居なくなってしまうと言って引き留めた。“良心と義務感とを統合できたら、と思う。そうしなければならぬのなら、僕は喜んでベップケと子供たちのためにジャワで戦うだろう。しかし私は非力な一兵卒でしかなく、大したことはできないだろう。ここでは病人や後に残された人たちのために重要な仕事ができるのだが。”

1945年10月8日、ドゥ・フラウターはやっとベップケからの手紙を受け取った。9月27日の日付のこの手紙には、現状下では4人もうまくやっていると有った。彼らはバンジュビルに居た。この手紙の後、しばらくまた沈黙が続いた。12月15日、幸いにもまたベップケからの手紙が来、彼らは自力でスラバヤに移動していた。5日後に、スラバヤの知人から、ベップケと

---

<sup>70</sup> 専門誌 *Vakblad voor Biologen* 26 (1946) の p 122-126, H.J. de Fluiter 著、“Grepes uit het werk van den bioloog in Japansche krijgsgevangenschap” の記事, p125。

子供たちがスラバヤでインドネシア人に襲撃された婦人と子供たちの輸送団の中に入っていたという、ぎょっとする知らせが続いて来た。その知らせにはそれ以上の説明はなかった。12月24日、彼は同じ知人から、ベップケ、ベッピーとツルーシャが重傷を負って中央人民病院(CBZ)に收容されると知らされた。次の信頼の置ける知らせは1946年1月14日の日付で、バタビアのRAPWIからのものであった。“ドゥ・フラウター夫人と3人の子供たちは輸送団への襲撃で負傷し、CBZに入院し、インドネシア人の手に依り、マランに避難した。以後不明。”1月29日、ドゥ・フラウターの不安に遂に終止符が打たれた。彼は日記に書いている。

[C.M.] ホーフトーウィルトン夫人から、最愛のベップケが、10月28日の襲撃<sup>71</sup>時の傷によって、11月17日に死亡したという手紙が来た。彼女は、今は健康でマランの海軍兵舎にいる可愛い子供たちを、自分の身をもって守ったのだ。彼女は7カ所に傷を負わされた。大量の出血と、捕虜抑留生活 [民間人收容のこと] による衰弱のために、彼女は負傷の高熱にうち勝つことができなかった。11月17日、彼女は子供たちをそばに集め、別れをした。[.....] 夜間に、彼女はインドネシア赤十字によって、マランに運ばれた。ベップケ、私の全ては、早朝に死んだ。彼女はマランに埋葬された。なにもかもがあまりにも悲惨で、あまりにもつらい。

1946年2月16日まで彼は日記を書き続けるが、そこで、突然止めてしまう。

## グルドヴァッチ

カロリー・フィルモス・フリギエス・グルドヴァッチ(1910年1月8日-1990年7月4日)はハンガリー出身である。1923年にオランダに来、1933年末にオランダに帰化した。1934年4月に、彼は州立紅茶会社の研修生として、東インドに旅立った。1939年に、彼はE. H. G. (エルジ) チズマジア・フォン・ソゴミーと結婚する。1940年4月27日に第一子、カレイが誕生。戦争勃発時にはエルジは第二子を身ごもっていた。グルドヴァッチは第三砲兵小隊に入隊するため、バンドンに出頭しなければならなかった。エルジはカレイとともに、エルジの父親が支配人をしていたブリターのカラン・ノンコ会社に行くことに決めた。蘭領東インド軍の降伏時にはグルドヴァッチはバンドンにおり、第15大隊に戦争捕虜として囚われの身となった。1942年6月17日、彼は次の收容所、チマヒの第六補給大隊まで行進させられた。1942年10月にはチマヒの第4及び第9大隊へ

---

<sup>71</sup> 1945年10月28日、オランダの女性と子供たちを乗せたイギリス軍トラックは、フーベン地区からスラバヤのダルモキャンプに向かう途中、パルメンラン南部に置かれた障害物のために停車した。トラックはインドネシア人の銃撃と手榴弾攻撃にあった。何台かは避難することができたが、それ以外は完全に破壊された。英国東インド軍兵士は殺され、多くの女性や子供たちも死んだり、負傷したりした。A.C.Broeshart 著、*Een dagboek over de berisaptijd in Soerabaja* より、(自費出版、Rijswijk 1987)、p21.

の移送が続き、1943年1月にはバタビアに送られた。グルドヴァッチが1943年1月15日にバタビアから“ファン・ワールヴァイク”号に乗船したときには、まだ家族からの知らせを一通も受け取っておらず、自分がもう一人の子供の父親になったかどうかもわからなかった。船は彼をシンガポールのチャンギキャンプに連れていった。そこに着いた夜に、グルドヴァッチは細菌性赤痢に罹り病院に入れられた。そこで、彼は1943年1月25日に、次のように書かれた東ジャワ新聞の広告を手にした。

カール・グルドヴァッチ、163010チマヒ！ディ・カラン・ノンコ・セムアバキ、イロナ・ラーヒルtg 22. 6. KG. ディツツプ。タベ、カレイ、イルカ、エルジ。[カラン・ノンコでは皆健康、イロナ1942年6月22日誕生。カレイ、イルカ、エルジより、挨拶]

1943年3月15日グルドヴァッチは病院から退院した。彼の体重もまた54, 6kgに増えていた（一時は46, 6だった）。ちょうど一月後に彼はチャンギを離れた。ドゥ・フラウターと同じように、彼も列車でバンポンに向かい、彼のグループもそこから目的地のキャンプまで歩かなければならなかった。11日後、疲労困憊の寸前に、クエキャンプに到達した。ここから鉄道建設労働が始まり、劣悪な条件下での疲弊作業の時期が始まる。それでもグルドヴァッチは物事の中にユーモアを見いだす事ができた。時折、彼は日記に、例えば次のようなユーモラスな出来事を書き留めている。

看護師が死者のそばに、ひげ剃り道具と石鹸のかけらを見つけた。彼はそれを欲しがらず、私にくれた。僕は我慢できず、ひげを剃った。結果は予測もしなかったものになった。食事を取りに行くと、韓国人警備官は私に気づかなかった。私がヒンダト [別のキャンプ] に属するものと勘違いした（それでは、そこはきっとイギリス人が居るのだろう<sup>72</sup>）。我々の中尉の一人が、私がここに属する人間だということを、必要なる努力の結果、なんとか彼に信じさせることができた。手荒な制裁の後で、私はテントに帰ることができた。そこで私はフェルスターフ医師に会った。彼も私を妙な顔をして眺め、“医師の...”とか何とか呟いた。私はどうやらそれほど利口そうな目をしていなかったようで、やっと彼は私に気が付いた。

1943年5月に彼が入れられた5名の堤建設チームのうち、1943年10月まで生き残ったのは彼だけであった。彼自身もそのときには健康を害していた。幸いにも彼を助けるためには何でもしようという友人が何人かいて、それが功を奏した。12月にはグルドヴァッチは再び立ち上がることができるようになった。このときすでに、彼は家族から生存の知らせを受け取っていた。1943年12

---

<sup>72</sup>イギリス人は“何が起ころうとも”ひげは剃るというので知られていた。

月22日、かれはノンプラドックの恢復キャンプに送られた。“我々が4月に14日間かかって夜間に足を引きずり歩いた長大な距離を、車に28時間乗って着いた。”到着直後に彼は下痢を起し、病院に入れられた。

1944年一年間で、グルドヴァッチが日記を付けたのは、1月、2月、3月の3回だけであった。次の記述は1945年1月1日になる。このとき彼はすでに、彼自身が‘サナトリウムキャンプ’と呼ぶナコームパトンに移動していた。彼は重い病気であったが、ここで少し恢復してきた。1945年2月に、また移動しなければならないと通知されたときには、“僕はもうかなり恢復したから、たぶん大丈夫だろう”と書いている。彼を輸送した列車は一部弾薬も積んでおり、連合軍飛行機の襲撃を受けた。列車は完全に破壊されたが、捕虜たちは幸いにも安全な隠れ場所を見つけることができた。日本軍からは8人の死者が出た。船と、それに次ぐ列車によって旅は続けられた。バンコクの近郊で、彼らはプラカノン村落／地区の港湾倉庫に最後には収容された。港の敷地や倉庫は頻繁に連合軍の爆撃の餌食となり、その上重労働もしなければならなかった。バンコク全体に避難塹壕を掘ることになっていた。6月にグルドヴァッチはまたもや倒れたが、以前同様、立ち直ることができた。1945年7月5日、グルドヴァッチは炊事場の助手として、300名のグループとともに、ドンムアンに向けて発った。そちらの状況もましなものではなかった。

日本降伏は、1945年8月17日に公表された。1週間後に、グルドヴァッチはバンコクのオリエンタルホテルに職を見つける。彼は何人かの高級将校の滞在を担当した。12月末から、女性や子供もホテルに収容されるようになると、彼は、自分でも言っているように“支配人兼高級給仕人”になった。

1946年5月になっても、グルドヴァッチはまだ妻や子供たちの消息が分からなかった。バタビアに行こうとする彼の試みも全て失敗した。5月5日、運が向き始めた。国の法律顧問W. F. J. ボルフマン・ブラウウェル法学修士がオリエンタルホテルを訪れた。グルドヴァッチは彼がBB氏と呼ぶこの人物と鉄道建設で一緒だったことがあり、彼らはともにビールを飲んだ。その後、BB氏が彼のために尽力すると突然全ての（飛行機の）扉が開かれた。1946年5月14日、グルドヴァッチはバタビア飛行場に降り立った。彼は家族を捜すためにバタビアのインドネシア共和国事務所の協力を仰ぐことに決めた。彼がまだバンコックに居た時、ホーフ・フェーリュヴ会議（1946年4月）に出席するインドネシア側代表団の一員としてオランダに向かう途中であった、ラデン・マス・アブドゥル・ガファル・プリンゴディグド<sup>73</sup>と話をしていた。この人物は彼がバタビアに着いたらすぐにも援助しようと約束していた。“しかし敵側密通者と言われないうちに、NEFIS [オランダ軍事情報局] と連絡を取る。”事務所を訪問し、そこで会ったスタン・シャーリルが、ケディリ知事に宛てて、グルドヴァッチ一家が居るかどうか、照会の電報を打って

---

<sup>73</sup> 法学修士R.M.A.G.プリンゴディグドはインドネシア独立準備委員会の書記官でもあり、1945年9月4日、共和国初めての内閣の総書記となった。B.R.O'G. Anderson著、*Java in a time of revolution: occupation and resistance 1944-1946* (Ithaca 1972), p111.

くれた。彼が喜び、驚いたことに、5月29日、共和国内務省からの知らせを受け取った。彼の妻、子供たち、義理の両親とリリー（義妹）は、ブリターに居た。共和国側の、エルジと子供たちをバタビアに疎開させようというその後の試みは、共和国内閣危機のため一時的にとん挫した。1946年11月21日、遂にそのときが来た。

エルジケと幼子たちが、遂にやってきた。思いがけないときに、そしてその来方と言ったら！！！！一等車に乗って、二人のTNI士官〔テンタラ・ナシオナル・インドネシア〕にスーツケースを持たせて！！プラットホームは驚愕の嵐。ボーハルトは“あの忌々しい裏切り女を見ろよ。”とぶつぶつ言った。ピーターが彼をなだめた。“まあいいじゃないか、あれが彼の奥さんだよ！”

グルドヴァッチは、彼が家族とともに1947年1月初めにシバヤク号でオランダに出発できることになったという報告で、日記を終えている。最後の言葉は次のようであった。

P. S. 私たちがオランダに出発するとき、シバヤクの船上でカード付きの花束を受け取った。“メングチャップ・スラマト・ジャラン・ダン・スラマト・チンガル・ディ・ネグリ・ブランド、インドネシア共和国より”〔快適な旅とオランダでの快適な滞在をお祈りしています。〕

オットウン

ウィルヘルムス・アドリアヌス・バルナルダス・ヨハネス・フランシスカス（ヴィム）・オットウン(1915年12月22日)は、1938年3月、世界恐慌の時期に、オランダで蘭領東インド軍に入隊した。6月、彼は東インドに出発する。彼はすでにコルネリア（リー）ヨリッツマと婚約していた。彼の勤務はジャワで始まった。1939年5月17日、リーはオランダでオットウンの‘手袋’と結婚〔代理人の誓約で結婚すること〕し、一週間後にジャワに発った。1941年6月、オットウンは下士官に昇格し、スマトラに異動した。彼はセラランジャヤ（アチュー）の国境警備隊第五部隊に配属され、同地にリーとともに住むことにした。ここに住んでいたとき、戦争が始まった。リーはランサに疎開した。オットウンもその妻もこの時期に日記を付け始め、互いにそれを知っていた。1942年1月7日、リーは彼女の日記に書いている。“そうよ、オリー、愛しい人、私たちは二人とも日記を付けている。悲しいページがたくさん、でも人間は多くのことに耐えられる。そしてあなたを私のものにしておけるのなら、私はどんなことにでも耐えてみせるわ。”

1942年2月半ばまで、オットウンの部隊はセラランジャヤに駐留したが、その後コタラジャヤに向かった。最後にオットウンと彼のグループはタケンゴンで1942年3月、日本軍に降伏する。4月6日、戦争捕虜たちはビリューンに運ばれ、5月11日にはまたそのキャンプを後にする。



ランサに4日間留まった後、5月15日ベラワンに向かう。同日の夜、彼らは船に追い込まれ、船倉に入れられた。ビルマへの旅が始まった。

5月27日、オットゥンはタボイ近郊で下船した。6月初め、数日間の雑役のためトラックでイエに運ばれた。雑役というのは道路建設であった。1943年8月10日、さらにタンビュザヤへ、ビルマ側のビルマータイ鉄道の起点に送られた。ここから鉄道建設作業が始まる。オットゥンは鉄道路線に沿って、ディッケとほぼ同じ軌跡をたどる。1943年10月17日まで、時々短い病気の時期を挟んで、彼は鉄道建設に従事する。これは彼が健康だったというわけではなく、単に‘ノーデューティー’にしてもらうほどには病が重くなかったというだけであった。鉄道完成の殆ど直後に彼は倒れる。脳マラリアであった。1943年11月14日から27日まで、彼は完全に昏睡状態で、熱は41度まで上がった。この後、病は峠を越すが、これ以降、この時ほどひどくはないといえ、たびたび高熱の発作に悩まされることになる。1944年1月8日、オットゥンは病院キャンプ、カンチャナブリに送られる。ここで、彼は少しずつ回復していく。3月には‘合格’つまり十分に回復したと見なされ、翌日にターマカンキャンプに送られる。4月にはディッケ同様ノンプラドック経由で列車に乗せられてインドシナに輸送された。1944年4月15日、彼はサイゴンに到着する。ここでの戦争捕虜の仕事は町中での直し仕事や港湾労働、飛行場での仕事であった。労働そのものはそれほど厳しいものではなく、食事もビルマよりよほどましであった。さらにサイゴンでは現地のアンナミット族とのコンタクトを取ることができた。しかし、フランス人と接触することは堅く禁じられていた。1945年2月、オットゥンはディッケと同じ時にまたもや輸送される。彼はサイゴンから70kmほど離れたフミキャンプに入れられる。“9時頃、トラックは小さなキャンプに止まり、私はしばらくまたビルマのジャングルに戻ったような気がした。宿舎は竹とビリケン〔竹を編んだもの〕の壁で、屋根はアタップ〔椰子の葉で葺いた屋根〕であった。”最初は飛行場建設が仕事であったが、1945年3月からは捕虜たちは塹壕掘りをさせられた。3月22日、オットゥンはあることに気が付いた。“〔塹壕の〕四隅にピルボックスなどとも呼ばれる機関銃台が造られる。もう殆ど完成だ。私が気付いたのは銃口が、外向きではなく、塹壕の中を向いていることだ。”この事実は彼を恐れさせた。“もし連合軍上陸となれば、我々は塹壕に追い込まれ、監視兵やピルボックスの中の機関銃兵に機関銃掃射されるかもしれない。ヤップはたくさんある土を投げ込んで溝を埋めるだけでよい。”彼はサイゴンに戻るように努力することにした。この目的を達成する方法は、病気になることであった。捕虜が10日以上病気で病棟に入院していると、サイゴンに移送される。オットゥンは仕事で気を失う振りをして病棟に運ばれた。10日間、彼はひどく衰弱した振りをし、計画は成功した。1944年4月5日、オットゥンはサイゴンに送られ、病院キャンプに収容された。彼が恐れたことは、フミでも起こらなかった。彼が8月18日、公式に日本降伏の知らせを受けたとき、彼はまだサイゴンにいた。

一月後にオットゥンはまた兵役を申し込んだ。医者には、野戦には向かないという書類を書こうとしたが、オットゥンは彼の気持ちを変えさせた。“連合軍が英国領インドに、いわゆる回復キャンプを設置したという話を聞いた。[.....]もしここで兵役不合格になったら、そのようなキャンプに送られて、リッチェとの再会にずっと長い時間がかかるのではないかと恐れ

たのだ。” 1945年10月12日、オットゥンはサイゴンからシンガポールに向かった。リッチェに関する不安は、10月22日に、彼女がアーク・パミンケ収容所（北スマトラ）に居るという知らせを受け取ったことで解消する。11月15日、オットゥンは船でシンガポールからサバンに向かい、そこで軍警察として勤務する予定であった。1945年12月29日、彼はそこで、カタリナ号でサバンに到着したリーと再会する。

リーが小舟 [カタリナ号からリーを岸まで運んだ船] から下りてきたとき、僕は思わずじっと見てしまった。彼女はもっと金髪だと思っていた。挨拶の後、僕は彼女にそのことを言った。 [...] 彼女は彼女で、僕をもっと背が高いと思っていたという。なんて楽しいんだ。

2日後、オットゥンは日記を止める。“年越しの夜をクラブで過ごす。とても居心地が良かった。一緒にこれを祝うことができるなんて。今年中には再会できないのではないかと恐れていた。一緒に新しい時代を始めよう。そして新しい人生を！”

#### ペルクイン

ヨハネス（ヤン）・ペルクイン(1921年8月7日)は、1941年12月7日に日記を付け始めたとき、CAS（カルペンチエ・アルティン会）に属していた。2日後に彼は動員され、バンドンに兵士として配属された。3日後、彼はヘルミン・ファン・ベンテムと婚約する。全ての休暇を、ペルクインはヘルミンとともに過ごした。何度もの異動があった後、降伏直前にまたバンドンに戻され、そこで戦争捕虜となる。ヘルミンとその家族も、レンバンの家が爆撃で破壊された後、この時すでにバンドンに逃れてきていた。バンドン内での何度もの移動の後、ペルクインは、兄のヘルマンと再会した。1942年4月初めまでは戦争捕虜も面会を受けることができ、ペルクインはよくヘルミンと会っていた。その後は会うことも難しくなるが、手紙で、あるいはキャンプ外の雑役の時などに接触はあった。

1942年6月に、ヘルマンとヤン・ペルクインはチラチャップの捕虜収容所に移送された。彼は書いている。“ミンは小さな壁の所に立って僕を待っていて、有名なヴェラ・リーンの歌<sup>74</sup>を唱った。[...] 僕だけではなく、他の男たちの頬にも涙が流れた。神よ、何という感情だろう！”

チラチャップ収容所の待遇は悪かった。日本軍監視兵は暴力を振るい、食事は悪く、港で重労働をしなければならなかった。たった2週間後にペルクインは溜息混じりに書いている。

---

<sup>74</sup> これは*We'll meet again*という歌だった。

気が滅入っている。戦争が終わるときはないのだろうか？ 食べ物はどんどんひどくなり、日に二回米の粥と、昼だけはほんの少しの飯にキャベツの葉だ。[.....] 僕はぐったりして気力もない。神よ、なんて滅茶苦茶なんだ、この生活全部が。

他の全ての場所同様に、チラチャップでも楽観的な噂が響きわたり、多くの者たちは喜んでそれを受け入れた。ペルクインは悲観的であり、そのために戦争がいつ終わるかという賭で金を儲けさえした。1942年7月21日、彼は記している。“僕はまた7月11日から21日の間にアメリカ軍がジャワに上陸しないという方に5ギルダー賭けた。とうとう僕が負ける時が来た、という奴も居た。それが本当だったら、僕の5ギルダーなど安いものなのだが。”8月1日に、戦争捕虜たちはチラチャップの別の収容所に移り、そちらの待遇はずっとましだった。この収容所で彼はヘルミンからの手紙を3通受け取り、そこから彼女は母親や姉妹と一緒にバンドンのチハピット収容所に抑留されていることを知った。

1943年1月、チラチャップの2番目の収容所での‘良き’時期、とペルクインがその後何度も引用している時期に終わりが来た。彼はバタビアに移送された。1943年1月14日、ペルクインは船でジャワを発ち、シンガポールに向かった。船内の状況は悲惨きわまりなかった。“何度も僕はデッキに出て清涼な空気を肺いっぱい吸い込んだ。階下の悪臭は書き表すこともできないほどだ。みんな船酔いになり、階段にまで辿り着けずに床にもどしてしまう。風呂に入りたい、体中が痒く、自分で自分にさわれないほど汚い。”シンガポールではチャンギの広大な兵舎群に収容された。兄のヘルマンも数日後に同じ収容所に到着した。しかし1943年1月23日、彼はまたヘルマンと別れなければならなかった。彼らが再会するのは日本降伏後になる。

ペルクインはタイへの輸送に乗せられた。シンガポールからバンポンへの列車の旅は4日間かかったが、それでもまだ終着地点ではなかった。トラックに乗って、これは多くの捕虜グループ（ドゥ・フラウターやグルドヴァッチと比較されたい）が徒歩でこの距離を移動しなければならなかったことを思えば幸運であるが、彼らはキンサヨック収容所に運ばれた。キンサヨックからは、彼らも徒歩でリンティンまで14kmを進んだ。リンティンの状況は神をも恐れぬもので、早々に‘死の収容所’と呼ばれるようになる。9週間の間に、リンティンで115人の捕虜が死亡した。初めから、ペルクインは病気がちで多くの症状に悩んだ。ビタミンの欠乏のため、口内炎を起こし、睾丸も炎症を起こした。いわゆる‘チャンギボール’である。胃腸の調子も悪かった。鉄道建設労働は数日間耐えたが、倒れてしまった。1943年4月7日、ヘルミンの誕生日に、彼は恢復キャンプへの輸送者の中に入れられるという知らせを受け取った。5日後、彼はチュンカイキャンプに運ばれた。しっかりした食事と安息を得て、彼の体調は目に見えて恢復した。しかし医薬品はこのキャンプでも僅かか、あるいは全くなかった。1943年半ばから、彼は頻繁に、約14日毎に、マラリアの発作を起こすようになる。他よりましな状況にも関わらず、チュンカイでの死亡率も高かった。多くの捕虜にとっては病院キャンプへの移送は遅すぎた。彼らは到着した時点で衰弱しきっており、そのまま死亡してしまう。このキャンプの中では、労働キャンプである‘上流へ’送り戻されることの恐怖がいつも漂っていた。ペルクインも日記にこの恐怖をは

つきりつづっている。何度か連れ戻しを逃れた後、1943年8月21日、彼は上流への輸送に適すると審査された。9月5日、ペルクインはチュンカイを発ち、ヒンダトを終点とする旅に出た。鉄道敷設が終わった後も、ペルクインは1944年3月までヒンダトに、そして近くのクイマキャンプに滞在する。彼はカウボーイの仕事を割り当てられた。3月14日、彼は14人の戦争捕虜たちとともに、150頭の牛を伴って、徒歩でノンプラドックに向かった。10日後にはノンプラドックに達した。しかしそこは牛にとっての最終目的地でしかなく、捕虜たちの引き回しはまだ終わっていなかった。

1944年6月初頭、ペルクインはシンガポールに戻され、そこでアラミス号に乗せられた。この船は彼を日本に連れていった。船内の状況は劣悪だった。6月16日、アラミス号は門司港に停泊した。その2日後に下船。旅は列車で続けられた。貨物車ではなく、客車に乗せてもらえたときの驚きは大きかった。“皆それぞれの席さえ有った。”ペルクインを含めた300人の戦争捕虜の目的地は福岡県の大牟田だった。タイのキャンプに比べれば、居住性や衛生状態は格段に良くなった。捕虜たちは石炭掘りの炭坑で強制労働に従事した。仕事はそれほど重労働ではなかったが、不健康で、特に危険が大きかった。坑道の支柱は貧弱で、中は異様に寒く、ほこりと、ドリルやダイナマイト爆発による騒音が激しかった。事故も当然のように起き、怪我人や死者が出た。さらに食事の質、量ともに低下していき、薬は供給されなかった。これら全ては日本人の炭坑夫にとっても同様だった。状況は日本の冬が来て、ますます悪化した。1945年1月15日、ペルクインは書いている。

1月1日から、休みは一月2日だけ。身を切るような冷たさで、薄く雪が積もり、気温はマイナス4度だ。完全な衰弱と脚気が蔓延している。僕は体重57,5kgで体力も気力もない。

ペルクインは1945年2月5日に炭坑から帰ると死ぬほど驚いた。彼の日記が無い、多分日本人の予告なしの検査で見つかり、持ち去られたのであろう。“初めて、僕はひどい恐怖を感じた。そのとき何が頭を去来したかは言葉にすることもできない。”このため、2つ先の部屋で、誰かが日記を発見したときの安堵感は格別なものだった。ペルクインが考えられる唯一の説明は、日本人は彼の日記を発見したが、兵舎全体をさらに搜索してから持って行くつもりで一時的に置いて、そのまま忘れていったのだろうというものだった。彼はすぐに、劇的な対策をとった。“寝床の厚いマットをはがした。2枚の板を壊し、日記の1と2を新聞に包んで乾いた砂状の土の上に置いた。日記の3も慎重に隠した。いつもは石のように眠りに落ちるのだが、今は何時間も目を覚ましている。つまりこれは僕に強烈な印象を残したのだ。”4月半ばから、健康が優れないため、ペルクインは炭坑に入らなくても良くなった。そのかわり、捕虜たちの食糧補給のために造られた野菜畑に仕事に行かされた。1945年7月からは毎日のように周囲にアメリカの爆撃を見聞きした。ここから日本の敗戦色の濃いことが明らかであり、それはまた彼らの勇気を奮い立たせた。1945年8月15日、日本降伏の噂が流れた。8月17日に確かな情報が入った。日本は降伏し

た。9月19日、ペルクインは大牟田収容所を離れた。列車の車窓から、原爆が長崎を壊滅させた状況を見た。1200人の男たちとともに、彼は長崎港から軍事輸送船マラソン号に乗船した。船は9月21日に沖縄に達し、その4日後に飛行機でマニラに旅を続けた。ここでペルクインは1945年9月29日、次の言葉で日記を終えている。

ヴァウテル [彼の兄] に会う！彼は見違えてしまった。ビルマ鉄道では働かなかったが直接日本に輸送された。ヴァウトも知らせを受け取っていない、家からも、ヘルマンやフィーからも。[.....] 全ての人々、ヴァウトも僕も、**自由!**の中で生きられるという素晴らしい特権階級だ。未来は僕たちの前に広がっている。そして僕たちはじれったい思いで家族や愛する人との再会を待ちこがれている。

## リブンス

1941年12月にはヨハネス・コルネリス・リブンス(1916年1月21日)はバタビア石油会社(BPM)のスマトラ島ペルラックに勤務していた。動員されて、彼は市内警備隊の下士官となる。1942年2月、彼はパンカラン・ブランダンのBMP石油精製所破壊隊に参加した。その後、彼はあちこちで、警備の任務に就いた。1942年3月12日、スマトラ島東海岸に、日本軍上陸。3月末には中部及び北スマトラのオランダ軍は日本軍に降伏した。リブンスはベラワンのユニカンボンに囚われの身となった。

5月15日、ユニカンボンの戦争捕虜たちは、技術者の小グループを除いて全員船に乗せられた。1942年5月26日、リブンスはタボイから30kmのビルマの岸に上陸した。この距離を戦争捕虜たちは徒歩で行かなければならなかったが、長い議論の末、病人は車で運ばれることになった。リブンスは下痢のため、病人の中に入れられた。一週間後、彼は全快宣言され、近くの飛行場労働にかり出された。滑走路拡張のための土運びだった。8月12日、このグループはタボイを離れる。車に乗り、その後約20kmの行進を2度し、そして列車に乗り、8月15日にタンビュザヤに到着した。ここで、鉄道の操作場と道路建設のために働かされることになった。9月末に、リブンスは‘ジャングル’に入る。ウェガリキャンプで、“我々は鉄道堤建築の第一歩を踏み出した。”作業は初めのうちは主に土掘りで、一日10時間労働、9日働く毎に一日休みであった。一日に移動させなければならない土の量は時がたつとともに、0.8立米から1.2立米に、そして遂には1.7立米にまで増加した。さらに土壌は岩石質になっていき、土を掘り出すというより、石を切り出さなければならなくなった。リブンスは概ねディッケやオットウンと同様の鉄道路線をたどった。彼は何度も高熱発作を起こし、傷害を負ったりしたが、やっと1944年3月になって回復キャンプに送られた。1944年3月5日、リブンスは日記に書いている。“やっと我々は広大なビルマのジャングルを後にして、我々から見れば天国にやってきた。”

‘天国’とは、ターマカンキャンプであった。しかしこのキャンプでの滞在は一月にすぎず、リブンスはディッケやオットウンとともに、ノンプラドックキャンプを経由してインドシナのサイゴンに送られた。ここでは主に、避難用塹壕掘りをさせられた。“重労働というほどではない。ヤップの扱ひもやさしいもので、これなら長生きできるだろう。”と、リブンスは1944年4月30日に書いている。その反面で、サイゴンは連合軍爆撃の格好の標的でもあった。5月6日にリブンスは初めてこの爆撃に遭遇する。“爆弾投下から我々のキャンプがやられるまで、ほんの数秒だった。爆弾が落ちたのはたった700m先だ。我々1000人のキャンプにはせいぜい100人分の避難壕しかないから、いい気持ちのものではない。後は全てヤップ用だ。”1944年10月5日、日記を付けることに危険を感じて、彼は止めてしまう。彼は日記を他の大切な書類とともに背囊を二重底にしてその中に縫い込み、こうしてその先の捕虜期間中にも、日本人の目から隠し通すことができた。

ルーヘ

ヨハネス・ディオニシウス・アルベルタス・ルーヘ(1911年8月10日－1991年6月19日)は1941年12月にマランに住んでおり、ドラ・ファン・デン・ブラークと結婚していた。二人の間には2歳の息子と、もうすぐ5ヶ月になる娘が居た。1941年12月8日に彼は動員され、日記を付け始める。彼は東ジャワで活動する、N. J. C. ファン・デル・ノールト予備隊長率いる第三可動砲兵予備中隊に配属された。ボジョネゴロ、ジョンバン、モジョケルト、そしてスラバヤを経由して、1942年3月7日にはマドラにいた。ここで、彼は日本軍の戦争捕虜となる。4月11日、スラバヤに移送された。初めは港地区に捕らえられていたが、9月初めに、ヤールブルステレインに移送される。10月18日、このキャンプから、ルーヘを含む1000人のグループがバタビアに向かって発った。30時間の列車旅の後、目的地に到着する。

2日後には、ルーヘはクミタマ丸に乗せられた。大変な輸送期間を経て、船は1942年10月25日、シンガポールに到達した。ここで、捕虜たちは丸一日、暑さで息詰まる船倉に残らなければならなかった。やっと10月27日正午になって下船し、バードウッドキャンプに運ばれた。ルーヘはD-フォースに入れられた。約925人からなるDフォースは、1943年1月、2組に分かれて、シンガポールからタイに向かった。ルーヘは第二組であった。ルーヘは日記には事実のみを記しており、感情や自らの体験談にそれることはなかった。旅はバンポンまで列車で、その後トラックで、一時的な目的地、キンサヨックまで6日間かかった。そこで、鉄道建設労働が始まった。日記から、ルーヘのような下士官は兵士よりも賃金は高かったが、同様な労働をしなければならなかったことがわかる。この状況はその後にも変わらなかった。1943年8月8日、彼は書いている。“鉄道は地獄だ。70%は負傷し、怪我をした足で歩き、多くは這って仕事に行く。Pは誰でも、病気であろうと無かろうと、構わず殴りつける。”ルーヘは日本人を表すときは必ずPの文字を使った。1943年11月11日は彼の鉄道労働最後の日で、1944年3月22日にはジャングルを完

全に後にすることになる。彼はノンプラドックキャンプに送られた。一月強の恢復期間を与えられた後、ペルクインと同じグループでシンガポールに向かい、彼と同様1944年6月5日、アラミス号に乗船して日本に向かう。日本では二人とも同じ炭坑で働かされる。1945年1月10日、彼は日本の戦争捕虜生活について書いている。

さらに、水腫症が多く見られ、約100人が羅病している。原因、偏った食物。労働した場合は食糧が多くなる、という話は未だに実現していない。ここは毎日かなり寒く、マイナス5、6度だ。米とロバック [蕪]、それ以外は無し。炭鉱内では小さな事故が起り続けている。[.....] 体重は毎月減り続けている。多くは歩く骸骨のようだ。精神的にも、寒さのために落ち込んでいる。娯楽はない。

8月15日、炭坑に入るために整列していたグループは、その必要はない、と言われる。“全員が、戦争は終わったのだと確信した。”翌日は何も起こらず、8月17日になって、キャンプの統率権がオランダの [G. J.] ルッツ中尉に委譲された。やっと8月22日に、“戦争は8月18日 [ママ] に終わった”と公式に発表された。ペルクインとともに、ルーへは9月19日、日本を発ち、最終的にマニラに到着する。その数日後、すでに彼は軍事警察の検査を受けた。“検査はとても厳しいものだった。合格。”10月9日、彼は書いている。

今日、ドールチェと祖父母に手紙を出す。早く返事が来ることを祈っている。僕が元気なだけ、こうして不安の中にいるので気が狂いそうだ。食事は素晴らしい。それ以外は一日何もすることがない。一日中、家のことを考えている。誰彼は手紙を受け取った、という話をよく聞き、ひどくうらやましい。彼らのためには喜んでいるが。

ドールチェから、直接の手紙は来なかったが、他の人を通じて、彼女が中部ジャワのアンバラワに居ることが分かる。待ち期間は長かった。やっと1945年11月25日、ルーへは船でバリクパパン (ボルネオ島) に向かう。そこで、彼は1946年1月26日、妻と息子に再会する。娘はアンバラワ第六民間人収容所で亡くなっていた。一月を少し過ぎて、また彼は家族に別れを告げなければならなかった。ルーへはジャワに向かい、独立を望むインドネシア人に対する戦いに投入される。1947年3月、彼は休暇を得てバタビアに向かった。1947年4月15日、彼の家族もこの街に到着。6月の末に、回復のための長期休暇を得て、一家はオランダに向けて発った。同年7月20日、ルーへは日記に最後の章をつづった。“ロッテルダムに到着。歓迎は想像を絶するものだった。”

スネルン・ファン・フォルホーヴン

ヨアン・ヘインリッヒ・スネルン・ファン・フォルホーヴン(1911年1月30日-1982年4月4日)は1941年、妻のコルネリア・マリア(コリー)・クンツと、娘のテアとともにバタビアに住んでいた。1941年12月に動員されたときにはKNILの砲兵隊予備中尉となった。同じくバタビアのKNIL砲兵隊中尉であったフェイケマと同じ部隊にいたのかもしれない。いずれにしろ、スネルン・ファン・フォルホーヴンはスカブミで戦争捕虜となり、そこからチマヒ、バタビアを経由して、1942年末、チャンギに落ち着いた。そこで彼は1943年3月18日、コリーの誕生日に日記を付け始める。

愛するコリーとテア、今日から僕は日記のようなものを付け始める。僕はもう1年も戦争捕虜となっている。僕はしょっちゅう君たちのことを考え、眼鏡ケースに君たちの写真が入っているから、1日に何度も見る。

日記はここから、全て手紙形式で書かれている。チャンギではスネルン・ファン・フォルホーヴンはH-フォース(H5)に入れられ、フェイケマと同じ輸送団で、1943年5月6日、タイのバンポンに向かい、4日後に病人となって到着する。下痢であった。5月16日、彼は、当時はまだ非常に原始的なキャンプであった、カンチャナブリに移送される。2日間高熱を出し、ひどい下痢をともない、半分昏睡状態であったが、その後少し回復する。彼は‘下痢便’に悩まされ続けるが、それでも1943年6月3日、鉄道路線沿いの労働キャンプへ輸送された。

1943年7月半ば、下痢がまたひどくなった。19日に、スネルン・ファン・フォルホーヴンは病院キャンプ移送組に入れられた。そこまでの輸送状態は筆舌に尽くしがたいものであったが、しかし1943年7月21日、彼はターマカンキャンプに到着した。食糧などの待遇は改善されたが、ここでも1日平均二人の命が失われていった。ターマカンの、そして特にスネルン・ファン・フォルホーヴンが1943年9月末に移送されたカンチャナブリの問題は、水の供給にあった。1943年10月10日、彼は書いている。“借りた水でひげを剃る。一週間も身体を洗っておらず、こすって垢を落とす。”カンチャナブリでは、1943年5月にシンガポールからタイに送られた捕虜たちの、残り組との再会があったようだ。フェイケマもこのキャンプにおり、スネルン・ファン・フォルホーヴンと同日、同じ輸送団で、シンガポールのシメロードキャンプに送られた。このキャンプで、スネルン・ファン・フォルホーヴンは製本を担当した。彼が以前に地図を作っていたらしいことも分かる。また、彼は多くの本を読んだ。1944年5月5日、また引っ越さなければならず、今度はチャンギで、フェイケマと同じであった。6月にスネルン・ファン・フォルホーヴンは‘チャンギボール’に罹る。このため彼は病院に入れられ、9月にまた退院する。8月には彼は気晴らしにオランダ語-英語の翻訳を始める。やっと1944年11月16日に、彼は初めてコリーからの知らせを受け取る。その葉書は1943年5月に、バンドンから書かれていた。1945年中は、爆撃が増え、食糧が減った。1945年3月31日、スネルン・ファン・フォルホーヴンは日記に書き



ている。“長官の [C.] v[an] d[en] H[oogenband] による日記の検閲”。戦後になって戦争資料館への手紙で、彼はこう説明している。

オランダ人キャンプ司令官が、私が日記を付けていることを聞き、タイで私がこのために身体検査を受けた事を知って、そこでは日記が厳しく禁じられていたために、これがヤップの手に入ったときのことを恐れ、日記の一部を切り取ったのです。

幸い、日記は発見されなかった。1945年4月30日、日記帳は数頁しか残っていなかった。“たっぷり1年の間、この日記帳を付け終わる頃には戦争は終わっていると信じてきた。もうすぐ終わるのかもしれない。我々には何も分からないが、その分憶測も多くなる。”非常に短く、小さな字で書くようにしたために、この日記帳に日本降伏の記事を書くことができた。

1945年9月16日、彼はコリーからの知らせを受け取った。“彼女が生きていて、何とか健康にしていることを神に感謝。どれだけほっとしたことか。”12月6日、イギリスに向かうニュー・アムステルダム号の船上で彼は家族と再会する。船上での抵抗力は強くなかったようで、娘のテアは麻疹に罹り、その後気管支炎になり、スネルン・ファン・フォルホーヴンはアメーバー性赤痢に罹る。幸いにも船上の医療設備は良好だった。1946年1月4日、スネルン・ファン・フォルホーヴンはまた妻や子と短い別れをしなければならなかった。妻子はその日、サザンプトンからオランダに発ち、彼自身はもう数日待たなければならなかったが、1946年1月9日には、彼もオランダのデルフトに着いた。この後、幾つかの短い記述が続いた後、1946年1月22日に日記は終わる。

## ウェストホフ

ウィレム・ベルナルト・ウェストホフ(1900年7月19日－1959年2月19日)に関する資料はひどく少ない。おそらく、かれは戦争勃発時には、スマトラの企業のアシスタントであったのだろう。戦時中は中央スマトラの市内警備隊に居たことは分かっている。彼はアンディナ・ヘンリエッテ・ヴィッツンと結婚していたが、彼女はオランダに残っていた。彼の日記は妻への手紙で、平均1月に2、3度書いていた。1942年4月、彼は戦争捕虜となり、ベラワンのユニカンポンに入れられる。リブンス、ディッケ、オットウンと同じ輸送船団で、1942年5月15日、彼はビルマに向かい、初期には鉄道沿いに、同様の経路をたどった。1943年4月にはすでに彼は持ちこたえられなくなった。彼は頻りに気を失い、足には脚気も出ていた。彼はジャングル内の病院キャンプ、レットポーに送られた。一月後にここから、以前1942年8月から10月まで滞在したことがあり、今は病院キャンプとなっていたタンビュザヤに戻された。1943年6月15日、タンビュザヤのキャンプは連合軍戦闘機によって爆撃される。キャンプは全壊し、29人が死亡、その数倍の人々が負傷するが、ウェストホフは無事だった。キャンプはKm 22 キャンプに避難する。

ウェストホフはこの後、鉄道労働をすることはない。1943年7月、彼はまたレトポーに送られ、1944年4月にはビルマを発ってタイの恢復キャンプ、ナコムパトンに行く。彼の手紙状日記にウェストホフは、皆のしている大量のうわさ話を書き留めている。その真実性に関してはひどく懐疑的であったが、それでも書き続けた。噂は、殆どの場合、後から根も葉もないことと分かったので、彼の悲観主義も理解できないことではない。しかし、1945年5月15日に、こう書いたときには間違ったようだ。“最近聞くニュースの全てが本当ならば、ドイツは負けて、欧州の戦争は終わったことになる。この噂は今やあまりにしつこく広まっており、そのために我々はかえって信じようとしない。”幸いにも1945年8月16日に、ナコムパトンキャンプでは公式に日本降伏が伝えられたため、この‘噂’の真実性を疑う余地はなかった。1945年9月27日、妻の誕生日に、ウェストホフは書いている。

君のために僕が受け取った最高の贈り物は、今朝、すぐにもオランダに出発せよと言う知らせだ。数時間後には僕は車に乗っており、全ての友人から、例外なく全員嫉妬で溢れているが、とても気持ちの良い別れの挨拶を受けた。

5日間バンコックに滞在した後、ウェストホフは飛行機でラングーンに向かった。10月23日、彼をロッテルダムに運ぶ船、リッチモンド伯爵号に乗船した。1945年11月20日、船はロッテルダム港に入港した。

とても静かな夜が明けて [...] 8時にフック・ファン・ホラントに着き、初めてオランダを再び目にし、12時にロッテルダムへ、これでやっと君に関して確かなことが分かる [彼はアンディナからの知らせを全く受け取っていなかった]。ゆっくりと、時間がたつほどに緊張が高まる。やっと岸が見え、沢山の人たち、叫び声、泣き声などがする。どんなに探しても彼女はいない、勇気が萎えていく。誰も、誰一人として僕を迎えに来てくれる者はいない、死ぬほど悲惨な気持ちになった。それは僕の全人生の中で最も悲惨な30分だった。あの時を一生忘れられないだろう。しかし突然君が目の前に立ち、神よ有り難う、健康で明るく元気、僕は6年半の留守の後、僕の奥さんを再び取り戻した。もう二度と、決して彼女から離れはしない。これで終わりだ、悪夢は終わったのだ。僕はまた家庭に、愛しい愛しい奥さんとともに居るのだ。神よ、私をお守り下さり、そしてアンディンケを私のために取って置いて下さったことに感謝いたします。

ここで日記は終わっている。

## 移送・居住

### ビルマから鉄道路線沿いで働く戦争捕虜グループ

オットウン

1942年5月15日

[ベラワン (スマトラ)] もう殆ど暗い。我々はベラワンにあるDSM-事務所<sup>75</sup>に近い [その] 道の脇に坐り、これから起こる事の成り行きを見守っている。今朝とても早く我々は拘置所を離れ駅に向かって行進した。ビレウエンからの出発時より全て今はとても良く統制されていた：乗車は迅速に進み車両の中はより多くゆとりがあった。約7時列車は出発した；10時半その列車はベシタンに止まり、其処で我々はDSM-列車に乗り換えなければならなかった。11時 [に]：出発。3時半近く列車はメダンの駅に蒸気を立てて入り、其処から瞬く間に再びメダンの港町、ベラワンへと出発した。

ベラワン：全員下車 [させられ]、そしてその駅から、ベラワンの無遠慮な住民達の大関心の中で、今居る場所まで行進した。ユニーカンボン、本来は港湾会社の（港湾）労働者達の宿泊所であり日本軍が現在北スマトラの戦争捕虜達の大半を収容した場所、は通過して進んだ。その事を確かに多少不思議に感じたのは、自分達もここに収容されるだろうと我々の内の誰もが逸早く思っていたからだ。でもまあ、そのキャンプが勿論溢れかえっていて [だから] 我々は大きな港湾倉庫の一つの中に場所をあてがって貰えるのだろう、と考えた。我々は出来得る限り寛ぎ、人によっては既に寝むっていた、狭い草の路縁でリュックサックの上に頭を置いて長々と横たわりながら。

ディッケ

1942年5月16日

[ベラワン (スマトラ)] 土曜日。9時半に我々は10時に荷造りをして整列しそしてあまり多く携行してはいけない、と通知された。でも僕は自分の簡易ベッドまでも持参した。我々は乗船することになるだろう。1919年 [に] 造船された、正味約4100トンの日 [本] 船に我々は乗り込んだ。午前中に港から停泊地へ向けて航行する。我々はかなり蒸し暑い船底に横たわっている、僕自身は少なくとも乾いた状態にいる。

---

<sup>75</sup> デリ鉄道団体有限会社の事務所。

オットウン

1942年5月16日

[ベラワン(スマトラ)からタヴォイへ]やはり乗船!昨夜ユニーカンボンからの戦争捕虜大数個団体が我々を通過して行った。最後のグループが通過して行った時、我々も後に続き埠頭まで行進させられた、其処に停泊していた大型船の近くで停止させられるまで。ここから港湾区域は荒涼とした眺めを呈した。いくつかの倉庫は半焼して大部分が崩壊し、そして港では沈没船の操作室が水面から突き出ているのが見えた。これが特別な破壊グループによる仕業なのか、或いは日本の爆撃によるものなのか、我々は知らなかった。

この乗船はかなりの喚き声を伴い、時々明らかに神経質になっていた日本軍によって、彼等の意のままに迅速に進まない時は蹴られたり或いは銃の台尻で叩かれた。捕虜達は船底に押し込められ、そして床面積に僅か一平方センチメートルの隙間があっても日本軍はそれを許さなかった。怒鳴り声や棒が振りかざされ、席を詰めることがすぐに察知できなかった相当数の捕虜達は平手打ちを食らった。更に多くの連中が船底に駆り立てられて行った。とある瞬間一人の日本人将校が船底に行く階段まで降りて来て、その途中で止まったままこの集団に目を向け、何やら上に向かって叫ぶや人の流れが停止した。我々はお互い殆ど重なり合う様に横たわった。その夜は全く眠れずあれこれ多くの質問が我々の脳裏を霞めた…我々は一体何処へ連れて行かれるのだろうか?日本軍は我々と何を計画しているのだろうか?妻や子供達はどうしているのだろうか?ひょっとして我々は連合軍の艦隊か或いは戦闘機によって攻撃されないだろうか?そしてその答えは誰も知らなかった。

今朝、日が上がって何もかもが再び良く識別出来るようになった時、人は全てを又多少楽観的に見るものだ。我々の中の数人が甲板に席を探し始めたが、日本軍がこれを認めている事に気付くや否や他の者が後に続いた。埠頭には戦争捕虜達に未だあれやこれや売っていたインドネシア人達が立っていた。不思議にも船上の監視人達はこれを許した。しかし埠頭に数人の日本軍監視人がやって来てインドネシア人達を追い払った、とは言え彼等は日本の兵隊達が歩いて行ってしまった途端戻って来たけれども。見張りの無いその瞬間小包等が空高く飛び、沢山の手によって貪欲に掴み取られ、そしてお金を入れた小さな包みが埠頭に居る商人達に飛び戻った。とある瞬間2ポンド缶バターが捕虜の一人の頭、彼の左目のすぐ上に命中した。この缶詰の持ち主はこの犠牲者に一匙のバターを約束し、この申し出で和解した該当者はその後で看護人に手当てして貰った、というのも彼は頭になんかの切り傷を負っていたのだ。11時15分[に] 錨が上げられ[それから]我々はゆっくり出港した。僕はその時戦争捕虜達を乗せたもう二隻の船を見た。その一隻にはシンガポールから来たオーストラリアの戦争捕虜達も坐っていた。港を出てからは我々は停泊していた。

食事は少ししかなかった。日二度〔食事は〕供給された。そしてそれは日本の指揮官によれば我々が反逆者達だから我等の罰である。何故なら日本軍隊が北スマトラ<sup>76</sup>に上陸して来た時、我々が軍隊と一緒にジャワで彼等に降伏しなかったからだ。故に日本の指揮官は我々に三度の食事を供給する義務は無いと感じていたのだ。最初の食事は10時頃でマグカップ一杯の飯（確かに綺麗な湯気の出た白米）とマグカップ一杯の少々のカウリが浮いている紫色の液体からなっていた。これがつまり朝食だった。昼食と夕食は5時に供給された：又もや飯と液体、これは食器洗浄後の様な不潔な水の中にリボンごときの物体が加工されていた。日本食の専門家達に言わせれば、これは食用の海苔の種類であった。身動き出来る十分なゆとりは無かった。唯一船底周辺に在る甲板の一部と割り当てられた船底が我々の領地であった。甲板の前 - 或いは後ろへ向かう通路には捕虜達は厳重に立ち入りを禁止されていた。暗くなってくると、皆寝床を探した、というのも夜になれば甲板で煙草を吸う事は許されなくなり又火をつけてもいけなかった。船底の中は即うだる様に息苦しくなるので〔だから〕数人は彼等の寝袋を持って気持ちの良い寝場所を求めて甲板へと這い上がって行った。この‘甲板泊り客’が日本軍によって追い返されなかったということが後に残った連中に分った時、他の者達が彼等の例に従った。すぐさま全甲板は泊り客で満員になってしまった。しかし彼等はかなりの‘歩行空間’を時々彼等を見回らなければならぬ日本の歩哨達用に空けておいた。数人の遅刻者達が歩行空間に横たわりたがった時、甲板泊り客達の間で意見の相違が生じたが、後から来た者達にこの歩行通路は空けておく様正当な要求がなされたので、もはや甲板に場所が無くなってしまった今となつては、彼等は再び下へ戻るしかなかった。短い口論の後遅刻グループは降伏して再び船底の中に消え、その後は平静が戻った。注目すべきと僕が思ったのは、この喧嘩に日本軍が介入して来なかった事だ。

オットウン

1942年5月17日

〔ベラワン（スマトラ）からタヴォイへ〕午後3時10分前船が再び入港し錨を降ろすのに蒸気を立て続けた。推測されたところによると：日本軍は連合軍の艦隊が近くに居るだろうからと、敢えて更に航行する勇気が無かった様だ。我々の指揮官、〔C. F.〕H〔ハーゼンベルグ〕少佐が、下船も在り得るので我々は其れに備えておかなければならない、と発表した時、楽感が燃え上がった。“確実な期待はあまりしないように！”、と彼は其れに付け加えた。しかし夜になつても、我々は全員未だその錆びた船に坐っていた。

---

<sup>76</sup> ジャワの戦闘は既に1942年3月8日KNIL（蘭印軍）の無条件降伏で停戦した。オットウンが属していたグループ自体は、1942年3月末になってからタキンゴンにて日本軍に降伏した。（NIOD、蘭領東インドの日記収集、W. A. B. J. F. ・オットウンの日記）。

オットウン

1942年5月18日

[ベラワン (スマトラ) からタヴォイへ] 午前中に一人の病人、医者そして薬剤助手が下船した。午後遅くガラガラと錨が引き上げられ、蒸気を立てて我々はゆっくり出港した。皆甲板に立って、明かに日本の爆撃によって痛め付けられ変形し形の無い大きな錆びた塊となってしまった色々な倉庫やその背後の油槽の在る過ぎ行く埠頭を眺めながら。そしてその背後には嘗て相当繁栄したものの、今や盗賊の餌食となったデリが在った。“北方面？ 後生だから一体彼等は何処へ我々を連れて行くというのだ？”、我々は自問自答していた。全輸送船団は三隻の貨物船からなり、二隻のコルベット艦に護衛されていた。

ディッケ

1942年5月18日

[ベラワン (スマトラ) からタヴォイへ] 月曜日。我々は午後4時にベラワンを出発し、[そして] 夜8時頃まで停泊地に留まっていた。その停泊地に居た時、日本[人]の大尉が我々を視察にやって来た。夜4隻の捕虜輸送船団(2隻の新しいオーストラリアの船)、[そして1隻の] コルベットとで北方面に出発した<sup>77</sup>。人が言うには我々はビルマのヴィクトリアポイントへ多分運河か道路を敷設に行くのだろう、と。中央の区画は雨でびしょ濡れだったので、(ヨハン) ボンセと僕の間にはハーグが横たわりに来た。

ディッケ

1942年5月20日

[ベラワン (スマトラ) からタヴォイへ] 我々は北[方面]に[そして]その後北東[方面]へ航行している。午後日[本]時[間]4時[に]錨を降ろす。ほぼ南ビルマのヴィクトリアポイント[の近く]と推定する。後で未だそんなに遠くではないと分る。しかしやはりヴィクトリアポイント。4隻の軍隊輸送船、凡そ5000人の捕虜達(1600名のオランダ人、400名のイギリス人そして3000名のオーストラリア人!)と小[さな]クルーザーが、日[本]軍隊、

---

<sup>77</sup> ベラワンからビルマへ出航した船の数については、資料には明白には載っていない。殆どの資料は戦争捕虜達が輸送された3隻の、或いは4隻の船と引き合いに出している。はっきりしているのは、1942年5月14日に船団セレバス丸とトコバシ丸が乗船した3000名のオーストラリア人捕虜達とシンガポールの港から出航した。これらの船は翌日ベラワンに辿り着いた。ベラワンの港にはとにかくオランダ人とイギリス人捕虜達の一隻の船、イギリス丸が護衛船団に加えられた。ベラワンから1942年5月16日ビルマへ向けて航海が始まった。

トラック（市内巡回車）、食糧、チャンコルズ [鋏] そして鶴嘴を荷降ろす為やはり錨を降ろす。我々自身は更に先へ航行するだろう。多分明日午後目的地 [に居る]。

オットウン

1942年5月20日

[ベラワン（スマトラ）からタヴォイへ] 今午後2時だ、そしてこの護送船団はマラッカの海岸の手前に停泊している。午前中我々はずっとこの島の海岸に沿って航行し、今ヴィクトリアポイントの近くに静止している。船団の一隻から今上陸用舟艇連が海岸に向かって航行している。下船はやはり駄目だった。

オットウン

1942年5月22日

[ベラワン（スマトラ）からタヴォイへ] 幸い再び航行する。色々な赤痢患者達<sup>78</sup>がいて、その中の数人が重病だ。尚幸いな事には、これらの患者達は完全に隔離されることになる。あちこちの物置が彼等の為に開放された。

ディッケ

1942年5月23日

[ベラワン（スマトラ）からタヴォイへ] 土曜日。方向は変わったが我々は未だ航行中である。午後4時にイギリス人達が乗船して来るだろうと人は言う。我々はこれからタヴォイに向かう。良い天気だ。我々はメルグイの埠頭に停泊している。[...] すぐその後 [この] 通知：イギリス人達は乗船し日曜日午後1時まで留まる。

---

<sup>78</sup> 熱帯の国々での大腸（血便、或いは赤い下痢）の深刻な伝染病で、細菌或いはアメーバ - によって起こる。アメーバ赤痢によるこの病気は時として慢性化する。もしこの病気が悪く進行すれば、しばしば肝臓膿瘍、或いは腸膜炎を起す。（M.B.Coelho, Zakwoordenboek der geneeskunde : 異国に発生する殆どの医学と欄語、表現、略語等 / Coelho-Kloosterhuis（アンネム1989年、第23版）、209）。

オットウン

1942年5月24日

[ベラワン(スマトラ)からタヴォイへ] この護送船団は昨日午後以来再びメルグイの埠頭に停泊している。午後数回強いわか雨が降り、我々は皆感謝して其れを気持ちの良い水浴びに使用した。嘗て又豊富な水を身体に浴びたのは間違い無く10日も前の事だ。船上の入浴とは身体に浴びる一瞬の滴る海水だけで、其れからは又お次の番だ。でも雰囲気はこの気持ちの良い雨による入浴後、前よりもっと快活になった様に思えた。

ディッケ

1942年5月25日

[タヴォイ] 2日目の聖霊降臨祭、月曜日。午前9時再び航行する予定だ。午後(4時)我々はタヴォイの埠頭に到着し、其処で停泊した。我々は出発の用意をしておかなければならなかったが、後で発表があり、5月26日水曜日[に]上陸するとのことだ。

オットウン

1942年5月25日

[タヴォイ] 朝とても早くガラガラという錨の鎖の音で起こされた。錨が引き上げられ[それから]我々は更に先へ航行した。噂では次ぎの港で我々は下船、そしてきっとこの船は今日にもその港へ到着するだろう、と。この船の我々が収容されたこの区画には便所が無かったので、日本軍は左舷側の手摺りの外へ便所を取り付けさせた。この全形は間を幅広く空けた2枚の板とその回りに帆布を張った物からなっている。これが我々の便所だ。今日の午後強い風が吹いたのが原因で、小さな事故が起こった。長蛇の人の列が食事の配給の所、今回は左舷側、で順番を待つべく立っていた。この時又ちょうど誰かが便所を使っていて、突風中にこの待っている連中の方へ便所の使用者から出た‘塩辛い湿気’が撒き散らされた。この張本人は、彼の仕業の影響に気付いた辛辣な叫びがあるまで自分で全く気が付かなかった。しかし詫びる代わりにこの悪党は興奮している連中に向かって叫んだ：“俺が赤痢患者でない事を喜べ、緊急を要したのさ！”

今年後5時で我々はタヴォイの小さな湾で静止している。最初のグループは既に上陸の準備をしなければならない。嬉しい事に、我々は今この忌々しい船から出ることが出来る。腹疫患者の数がかなり増えてきた。



ディッケ

1942年5月26日

[タヴォイ] 火曜日、大雨。776番船のN e d [オランダの] 兵士達は乗船させられた。我等の船イギリス丸は明日まで待たなければならない。

オットウン

1942年5月26日

[タヴォイ] 上陸は実にのろのろ進む。もう夜になったというのに未だ各50人程の2～3のグループが下船したに過ぎない。上陸用舟艇連は今この船に横付けで、明日充分明るくなったら再び出て行く。後もう一晩この船に。

ディッケ

1942年5月27日

[タヴォイ] 水曜日。午前9時の命令は、全所持品を携帯して上陸。午前11時に[我々は]モータボートで陸へ向かい、午後1時に精米所の近くに到着した。指示を受けた後、我々は寝床を探し（籾殻の中で）料理に取りかかった。

オットウン

1942年5月27日

[タヴォイ] 午後かなり遅くなってやっと我々のグループは上陸用舟艇に押し込まれた。僕は60人数えた。海は騒然として重い灰色の雨雲が湾に低く垂れ下がっていた。我々が船から連れ出される時、細かい霧雨が降り始めた。口数は少なかった。約2時間航行した後、既に暗くなり始めていて、船は岸に向かって方向を変え、そして我々はポーッと出現した大きなトタン板の建物を見た、その建物はほぼ間違い無く精米所であった。その近くに人が見えた、きっと石油ドラムを遠くへ転がして行くのに忙しい捕虜達であろう。徐々に我々は岸壁に近づいて来た。栈橋か何かそういった物は見なかったが、汚くくすみ、ぬかるんだ岸辺が、あちこちの満潮の森の残骸である小さな切り株と共に高く傾斜して伸びていた。このおぼろげな明かりの中にその精米所はただ質素で放置されたように見えた。崩れそうな木柵の上に一對の大きな黒いカラスが座ってい

て、こいつ等は、輸送船が浅瀬の地面を掠った時、金切り声を上げて（あざけ笑っているかに見える）まるで一對の不吉を告げる使者の様に飛び去って行った。

上陸用舟艇の折りたたみ照尺が降ろされるや否や、日本軍が行動に出た。怒鳴りながら彼等の銃の台尻で押し、我々がぬかるんだ岸边へと追いやられるしりから、我等の後に荷物が投出された。我等は精米所へ導かれ、そして其処は既に全く暗闇だった。我々の先頭に立った日本兵を我々はあつという間に見失ってしまった。やつと何処かに蠟燭が点されるまで、我々は当ても無く暗闇の中をうろついた。その時になってやつとこの精米所の建物が実際とてつもなく大きな物であることが分った。ちらちらと揺らめく蠟燭のもとで我々はオーストラリアの将校が名前を読みそして明かに点呼しているのを見取った。騒々しい声から想像すると、中にはもっと多くの人間が居る様だ。我等のグループは一人の日本兵により受け入れられ、こいつが我等を再び外、車のタイヤを積んで栈橋に停泊していた上陸用舟艇へ連れて行った。これらのタイヤを我々は中へ転がし入れなければならなかった。タイヤを中に転がし始めたこのグループから、働いていたのがたったの10人程になってしまうまでに長くはかからなかった。残りは暗闇を利用して逃げた。何故我々は逃げなかったのか？その為の機会が無かったのだ。タイヤ船から荷下しをした後 [我々は] 再び大きな倉庫へ入り、やつとこのことでゆっくり休憩する所と寝場所を探した。僕は靱殻入り、と思うジュート袋を手に入れる事が出来たので、埃っぽいセメントの床に寝る必要は無かった。真っ暗だった。良く寝られなかった。絶えず人の往来。建物の中の後ろで再びかすかな光りがちらちらして何かが発表された。僕が唯一聞いたのは：“明日我々は他のキャンプへ向かって歩く”、誰が或いは何処の班なのかは僕は聞き取れなかった。少々うとうとしたと思ったら、身体の上を歩く鼠にびっくりして再び目が覚めてしまった。やれやれ、僕は疲れ果ててしまった。

ディッケ

1942年5月28日

[タヴォイ] 木曜日。8時に整列、8時半から夜7時まで外出（上陸場所からタヴォイの町までの距離は20マイル [だ]）。全距離をリュックサックとガスマスク携帯で歩行、約30キロ [の重さ]。この遠征は実にうんざりだった。

オットウン

1942年5月28日

[タヴォイ] とても朝早く、未だ暗かったけれど、皆既に忙しくしていた。今日我々は、ここから25キロメートルの所に在る、タヴォイのキャンプへ歩かされることだろう。他の連中によ

れば25キロメートルではなく、25マイル、其れは1倍半も遠い。とにかくかなりの道程が我等を待っている。大きなバラング（手荷物）は後に残す事が許されたが、それらはトラックで輸送はされるものの、自己の危険負担であった。言い換えれば：指揮陣はこれらの荷物が届くかどうかは保証できなかったのだ。[...] 各人は少量の飯を取りに行けたが、これは余りに焦げ付いていたので真っ黒に見えた。更に缶詰の‘アイルランドのシチュー’（ヒュッツポットの種『つぶしたジャガイモ、玉葱、人参と肉の料理』）そしてコンビーフが配分された：10人に付き1缶、という事は一人に付き茶匙一盛りだ。

それからちょっとして我々は出発した。小さなグループは上陸舟艇からの荷を降ろす為後に残り、そして又20人ほどの病人達、彼等は後で残された手荷物と一緒にトラックで運ばれる事になっている。僕は床シート、加えて上蒲団そして未だ多少の細々とした物を大きな包みに纏めてリュックサックの様に背負った、今更に強く日本軍を罵りながら、こいつ等が数ヶ月前に僕が逮捕された際、僕のリュックサックと余分の制服を僕からくすね取ったのだ。幸い乾燥していてそんなに日照りの陽気ではなかった。2時間歩いた後、縦列が既にはぼ3倍の長さになっていた。[...] 捕虜達は最終的には小グループにまとまって先を歩いた。各人がそれぞれの速さを保持し、休みたい時には休憩した。先頭も後尾も見つからなかった。誰も逃亡までは考えなかった、まさに我々にとってここは外国であり[其れが] 全域日本軍に占領されていて、ヨーロッパ人となれば遠くへは行けないと分っている。

前進するに従って、益々投げ捨てられた物が多く、例えば本、缶詰、衣服そしてオルゴールの機械でさえも、全ては徐々に重く感じる野戦袋を軽くする為だ。足が痛くなった数人は、靴を脱ぎ、それからそれらを背囊にかけて裸足で先を歩いた。又志願してスマトラから捕虜達について来た二人の宣教師と牧師<sup>79</sup>も各自の背囊を背中に担いで一緒に歩いた。茶色の厚い修道服を着た宣教師は陽気で元気に歩いた、あちこちで励ましの言葉を掛けながら、とは言え彼自身も古い蒸気機関の様に息切れしていたが。日が上がるに従ってもっと暑くなって来た。我々が段々最終目的に近づくに従って、日本軍は益々活動的になった。道の脇に沿って座りこみ、叩かれたり蹴られたりしても立つ事の出来なかった連中は通り過ぎようとしていた軍用トラックに積み込まれ、大半は彼等の手荷物を後に残して、そしてそれらは日本軍によって見ていたビルマ人達に与えられた。

日本時間の8時半頃（[それは] 太陽時間で約6時だ）に我々のグループはタヴォイに到着した。この行進を観察していた大きなグループ（ビルマ人と中国人達のみ）が居て、目を配らせている警備陣にもかかわらず、機会を見て彼等は我等にバナナ、煙草そしてお金でさえもこっそり渡してくれた。我々の歩行遠征は今間もなく終了した、というのは我々がタヴォイに入った時通り過ぎた最初の大きな石の建物、拘置所を過ぎてすぐ、監視人達は我々を小さな木造兵舎と貯蔵倉庫からなる野营地の中へ連れて行ったからだ。前警察野营地であったこれらの兵舎連は

---

<sup>79</sup> これはC. マック牧師とA.W.M. (エゼヒエル) フェルヘースト神父であった。(Geert Mak, De eeuw van mijn vader (アムステルダム/アントワープ1999) 293 e.v.そしてC. Mak, Een halve eeuw dienst (レウワーデン1977)、62 e.v. も参照)。

- 普通の人道的計算から行けば - 約40名の宿泊用に建てられたものだ。日本軍は各兵舎に100名余りを入れたので、我々は40センチ幅も無い寝床しかなかった。茶色の井戸水での入浴と焦げ付いた飯と少々‘アイルランドのシチュー’の食事後、我々がお互い心から同感した事は、とにかく昨夜のぞっとする暗い精米所よりましに寝られるという事だった。完全に暗くなる前、歩行者全員が着いた。1400名のスマトラ - 戦争捕虜達から約800名がこの新しいキャンプに居た。後の連中はオーストラリア人達と一緒に何処か他のキャンプへ収容されたようだ。

ディッケ

1942年5月29日

[タヴォイ] 金曜日。一種の中国のホンクス [兵舎連] に宿泊、押し合い圧し合い。午後タヴォイの飛行場に向かって4キロメートル先に出発、[そして其処で] 460人と共に大格納庫で宿泊。

リブンス

1942年5月29日

[タヴォイ] [我々は] 午後車で輸送される：6名の重病人達が横たわっている、雨季にもかかわらず全てはオープントラックで。全病人達は跪いて荷物と共にお互い重なり合う様に座っている；我々の車には21人座っている。途中で酷いスコール、急いで走らされる悪い道、[我々は] 全員びしょ濡れだ。病院：空の、杭の上に建った小さな家々、3 x 3メートルの [一] 部屋に5人の病人達。数人の病人達はこの車の旅の後、悪化 [した]。水は無い、灯りは無い、[この] 便所は凄く汚い。まだ病気ではなくともここではそうになってしまう。夜日本軍によって何も他に付いていないバケツ一杯の飯だけが運ばれた。水は使用不可能にされた井戸から [来る]。

オットウン

1942年5月30日

[タヴォイ] 警察兵舎での我々の滞在は長くなかった。既に翌朝、つまり29日 [5月] 我々は又荷造りをして整列し昼頃再び出発した。しっかり20分は歩いてから、未完成の飛行場と察する所に着いた。監視人達は我々を大格納庫へ連れて行き、其処でH [ハーゼンベルグ] 少佐が数人の日本兵達と中に入って行く間、外で待つ様命令を受けた。我々がH少佐の帰還を待ちながら、其処にそうして立っていた時、大尉が急に自制心を失った。“本官は死んでしまう！”、と高潮

した声で彼は叫び、“諸君、我々はこれに異議を唱えるべきだ！本官はこれを受け入れない！死んでしまう、死んでしまう！”幸いこの爆発は長く続かず、神経質になったこの男はすぐ又自制心を取り戻した。我々はこの事件になるべく注意を払わない様にした、というのは今監視人達も全く気に掛けてはいなかったからだ。

H. 少佐が少ししてから再び外に出て来て、我々に演説した：“諸君、この日本悪党軍は我等をこの大格納庫に入れようとしている。本官はこれに対して最大の異議を申し立てたが、彼等はまだ本官が例え今晚だけでもこの滞在を我慢して受け入れるなら、と本官に贅沢を約束した。この瞬間これを受け入れる以外道は無かった、しかし本官は諸君に約束する、より良い宿泊所を見つける為には本官は休まずに奔走することを。”この発言の後、全800名は素直にそして静かに、確かに理想からは程遠い疇へと戻って行った。屋根は弾丸と榴弾の破片による沢山の穴を呈し、床は砂っぽい地面に地均しれた碎石だけであった。多少我慢して寝られる様にする為にはまず碎石を掘り起こさなければならならず、そうして我々の寝袋を砂の上に広げる事が出来た。

ディッケ

1942年6月1日

[タヴォイ] 其処の格納庫の状態は耐えられるものではなかったので、朝食後我々の新しい配属場所に向かって出発した：飲み水の欠乏、大きな戸は捻じ曲がり閉まらなかった（雨と風）そして粗く打ち砕かれた石の上に[我々は]寝なければならなかった。我々は10時に出発し12時には新しい場所、大きな、木陰の多い敷地[にて]、大きな学校とバプテスト布教団体の沢山の小さな付属住宅、に居た。

オットウン

1942年6月1日

[タヴォイ] 今朝10時頃に我々のがらくたを再び背中に放り投げ、新しい‘城’に向かって出発した。ミッションスクールに来て、見たのは、実にゆとりの在る建物に大きな庭、そして其処に未だ数件の小さな建物。更に分ったのは、その他の約600名におよぶ‘スマトラからの人達’<sup>80</sup>がここに既に収容されていた事。我々は未だ中には入れてもらえなかった。最初皆整列し、そ

---

<sup>80</sup> 彼がここで意味するのは何処か他に収容された1400名スマトラ - 戦争捕虜達の基本グループ内の残り。オットウン1941年5月28日の日記断片参照。

れから分けられ、そして再び仲間と小隊に細別された。これに数時間が掛かり、やっと我々に宛がわれた場所を陣取って後落ち着く事が出来た。

オットウン

1942年6月6日

[イェ] 9時頃我々の小隊は数日の雑用に借り出されるだろうと通達が有った。10時我々は自分達のバラン[手荷物]と共に整列させられた。過日既にもっと多くの約50人編成グループが数日の重労働に借り出されて行ったが、場所や期間の長さは誰も知らなかった。[…] 10時に‘整列’の指令があり、他に未だ数小隊が犠牲者であることが分った。全部で100人。全員、日本の監視も含めて4台のトラックに積みこまれ、そして[この様に]お互い押し合いながら座った。10時半出発、数人の下級参謀官達に手を振られ励まされながら。飛行場の傍を過ぎ、それから北方面に行く道路に出た。この道路は最初未だ結構良かったが、徐々に悪くなっていった、大きな穴だらけ。殆ど動けなかったのにもかかわらず、相当な揺れにより、最も奇妙な姿勢に倒される。そして再び元の座る姿勢に戻ろうとする為のどの試みも、他の連中のバランスを脅かす事になる為、即同乗者達の抗議を買った。

昼食として我々は全員ちょっとしたスープだけを貰って来たが、多くの連中は既に出発前に啜り飲んでおいた。そうすれば運転中大部分は鍋から毀れ出ないであろうと確信できたから。数時間のドライブ後、手前側に村の有る川縁にやって来た。其処で止まったので有り難いことに痛い硬直した手足を伸ばす機会を得た。下車する事が許された。其処に小さな店があり、僕はオランダの10セント硬貨を交換して何か食べられる物を手に入れる事が出来た。とにかくこのごく小さな店では他の物がたくさん有るわけは無い。幾人かは少々の葉巻を手に入れる事が出来て、これらは喜ばれた。そして特に其れは[既に]長いこと煙草をきらせていたビレウエンから来た捕虜達によって。と言うのは彼等の出発が余りに急だったので、在庫を持参するチャンスが無かった為だ。

幅50メートルの川の上には橋が掛かっていた。しかしこれは退去した英国軍が破壊し、上部構造は今川の橋脚の間に横たわっていた。日本軍は危急橋を作ったが、これは明かに未だ出来あがってはいなかった。今は単に2本の鉄梁が川幅全長に横たわり、そしてこれらの梁は路面無しで水の上に隣り合わせで車のレール幅に置かれ、同時に両方の河岸に進入(口) - と出口が掘られた。これらのトラックはこの危急橋を注意しながら渡った。一台のトラックが橋の途中で左の前輪を梁から滑らせてしまった。我々の中から15名程がこのトラックを再びレールに戻す為手伝わなければならなかった。幸いカリ[川]は深くなく、救助者達は濡れたズボンで戻って来た。渡った側で我々は再びトラックによじ登り、デコボコの悪い道路を前進したので、それが雰囲気を悪くした。口数はもはや少なくなり、只誰かが隣人に倒れ掛かった時、時としてガミガミ言う程度だった。

終に日本時間の9時頃（既に黄昏時になっていた）、幅の広いカリに面したかなり大きな村に我々は止まった。“全員下車して待て”、が命令であった。其処に数件の店があり、我々は何か買おうと試みた。しかしこの住民達は消極的でルピーしか受け取らなかった。とはいえ僕の場合は新25セント銅貨で丸い薄く乾燥したパン風の物、大皿一杯分が買えた。味は幾分薄かったが、少なくともこれで腹一杯にはなった。日本軍が突然急ぎ出した。我々はまず保存食の木箱、小麦粉の袋そして日本軍の個人用手荷物をプラウ船に積み込まなければならなかった。数人が荷積みされたプラウ船と一緒に行かされ、それがビルマ人によって向かい側まで漕ぎ着けられた所で彼等は再びそのプラウ船から荷降ろしさせられた。我々皆が向こう岸へ渡った時は既にとっぷり暮れていた。こちら側では我々の内の数人がまず保存食の木箱等、準備万端整えて待機していたトラックに積まなければならなかった。我々の側ではその事で未だ何かぶつぶつ不平が有り、其れがかなり監視人達を苛立たせた。そして彼等の‘スピード、スピード’が益々あおりを注いだ。全て荷積みされた時我々は部分的に連れて行かれるのだらうと仮定して、数人が又トラックに飛び乗った。日本軍はこの行為に同意せず、数回の平手打ちでこの連中は再びトラックから追い出され、それはその後すぐ走り去った。我々は自分達の全所持品を再び背負って‘コラ、コラ’ [気をつけろ、気をつけろ] と共に夜中行進した。

荷積みと荷降ろしの多忙さで我々は猛烈な嵐が近づいていたことに気が付かなかった。そして突然激しい白い稲光が夜の暗い空を切って突き進み、直ちに雷が続いて落ちた時はえらくびっくりした。その後すぐ又2回稲光がしてゴロゴロ鳴り響いていた、とその時まるで巨大なタンクが旋回した様に、我々の方に雨が流れ出して来た。すぐさま誰もがびしょ濡れになり、踝まで滑りやすい泥濘に浸かって歩いた。今はとても暗く時々 [僕は] 鈍いドシンと落ちる音を聞き、よろめいた者から辛辣な罵りがそれに続いた。

突然道路の両側に我々は村落のシルエット、そして数件が弱い光を発しているのを見た。我々は小さな村に辿り着いたのだ、そしてこれが我々にとって最終目的らしい、有り難い。我々には多くは識別できなかったが、突然オランダ人の声がして、これが我等に道を指示している。不思議に思って我々がこの‘見知らぬ者’に何時ここにやって来たのかと尋ねたところ、彼は我々の数日前にタヴォイを出発した小隊に属していたそうだ。彼等は我々の新しいキャンプを整えなければならなかった。この真っ暗闇で我々は数件の倒壊しそうな村の家屋に収容された。我々の荷物を下した後まず食事を取りに行った。飯とスープ、これらは美味しそうな匂いがした。それから、今やっと我々の粗末な住まいを見る事が出来た。飯は食べられた物ではなく、純然たるパディ [米の茎]、しかしスープは臭った通り美味しく其れで随分補われた。食後我々3人で携帯していた乾いた服を公平に分配したので、我々は乾いた服で寝る事が出来た。そして我々は充分寝た、そのうんざりした日の後は。

オットウン

1942年6月7日

[イエ] 我々が今本拠地としている場所は、イエといってタヴォイの北約100マイルの所に在る。イエはモウルメインとラングーンへ向かう鉄道路線の出発点だ。しかし数個の橋が英国軍の敗退で破壊された事により、鉄道路線は今大部分が役に立たない。我々はこれを仲間の一人でビルマの大物と話の出来た男から聞いた。200名のオランダ人捕虜達以外に更に50名のオーストラリア人達もここに収容されていた。

オットウン

1942年6月28日

[イエ] 我々のここイエ到着数日後、更に200名のオーストラリア人の捕虜達がやって来て、今250名のオーストラリア人と200名のオランダ人がここに居る。[...] 唯一何か気が滅入るのは、時として何日も続く慰めようの無い霧雨、そして全てじめじめと湿気っぽく、其れによって家々は永久的にかび臭い雰囲気となり、其処に南京虫[虱]が蔓延る。そして日々続く雨の後再び弱々しい太陽が輝く時は、逸早くその湿っぽいがらくたを外に放り出して、絶滅不可能と思われるこの虱の大退治に取りかかる。誰も彼もが時宣を得た‘掃除’を守らない事とこれらの‘脂肪の塊’[薄汚い奴等]が実際はその原因で、虱は絶滅不可能なのだ。

オットウン

1942年6月29日

[イエ] 今朝オーストラリア人達が、小さな分隊を残して、10キロメートル程先に在るキャンプへ出発した。

リブンス

1942年8月5日

[タヴォイ] もろもろの途方も無い噂話; その内の一つは我々が鉄道路線で働く為モウルメインに行くだろう、という。その実際は誰も知らない。



ディッケ

1942年8月5日

[イエ] 水曜日：イレイン王女の誕生日。オープントラック車で [我々は] イエに輸送された；一車につき21人。[C. M.] ラッシュ中尉と話せたのは楽しかった。イエの渡し船はかなり原始的だった。日中はちょっとした雨 [が降った]。夜 [僕は] 下痢 [をした]。[僕は] 昔の仲間 [Th. A. M.] ホーフフェルト、[ヨンクヘール、A. E. H.] ローエル [そして] [P.] ファーベルと再会した。

ディッケ

1942年8月6日

[イエからタンビュザヤへ] イエからモウルメンに向かう鉄道路線に沿って出発。夜パインウンで [我々は] 一緒に泊まった。

オットウン

1942年8月6日

[イエ] 昨夜7時タヴォイから250名のオランダ人達が到着した。今日の日中最初のオランダ人グループが出発した。これはタヴォイで編成された元A - 大隊だ。この大隊は昨夜到着したグループから成り立ち、そこにイエ - グループの一部を加えたものだ。僕はC - 大隊に居て、数日後に出発するだろう。

ディッケ

1942年8月8日

[タンビュザヤ] 3時に [我々は] オープン貨物列車で我々の新しいキャンプへ輸送（2時間半乗車）された。我々が来た所はタンビュザヤと呼ばれる；モウルメンから約40マイル。

オットウン

1942年8月10日

[パインウン] 9時半に荷物を纏め整列させられた。日本軍も多分急いでいたのだろう、というのは点呼が随分速く、確実に10時15分前には既に我々は門を出て行進していた。午前中はちよっと雨模様であったが、我々の出発の頃には上がりそのまま乾燥していた。枕木間が碎石で一杯の鉄道路線を越えて約10マイル(15キロメートル)のかなり疲労する遠征後、我々は4時半に停止地点、パインウンに着いた。ここで[我々は]泊まった。我々は崩れそうな建造物に収容された。その周囲には村落があって一件でソース煮込みの飯と鶏を買うことが出来た。夜には又豪雨になった。

ディッケ

1942年8月11日

[タンビュザヤ] 夜B - 大隊とCの一部がイエから到着[した]。

オットウン

1942年8月11日

[タンビュザヤ] ヤレヤレ、寝不足だ。というのは僕が屋根の漏るちょうどその下に寝ていたことでまずは引越しをしなければならず、乾いた場所へ無事横たわった時は、小さな蟻の一軍に苦しめられた。僕が確実に蟻の巣の上に偶然来たわけで、挙句の果ては更に激しい胃痛に悩まされた。朝早く起こされるまで数時間しか寝ていなかった。8時半に我々は再び出発し線路の上を歩行[させられた]。残念ながら出し抜けに雨が降って来た。4時頃我々の道は幸いそんなに広くないカリ[川]に阻まれた。橋が粉々に崩壊されて川の中にあった。我々はその川の中を歩いて渡ったり、或いは石から石へ飛び越えなければならなかった、というのは石は在っても次ぎの石が遠すぎたりするので、その時はほぼ腰まで水に浸かって歩いて渡るしかなかったのだ。

向こう岸側[川の]には又小さな村の休止所が在った。この場所はライマンといった。ここに列を組んだオープン列車が止まっていて、その中に我々はよじ登らされた。そして我々全員中に入って、床に座って雨打たし状態の時、列車の車輪をつけた車、‘ロコモビル’が最前列の車両に連結された。6時頃我々は出発した。列車が8時半前にタンビュザヤで止まった時、我々はずぶ濡れで骨まで寒さが染みとおっていた。そのキャンプのほぼ近くだから其処までそんなに遠く歩く必要が無い事は明らかであり、広々と見えた。我々は暖かいブイヨンとお茶で持て

成しを受けた。H [ハーゼンベルグ] 中尉は歓迎の挨拶をし、我々の新しい宿泊内に良い時が訪れることを願う、と [述べた]。

リブンス

1942年8月13日

[パインウン] [我々は] [イエから] 暴風雨の中を歩いて出発する。オーストラリア人達によって調理された；生煮えで焦げ付いた、食事を携帯する。[その] 鉄道の傍を歩く（約450人のバラン [手荷物] と病人達を載せたローリー） [その] 雨の後はかなり暑い。枕木の上とその横の泥濘の道を歩くのは疲れる。かすかな丘陵地帯。7時近くになってパインウンに到着。[…]  
[僕は] 開け放たれた倉庫のぬかるんだ地面に寝る。

リブンス

1942年8月14日

[パインウン] [我々は] 最初の破壊された鉄橋に置かれる。満杯の荷物で [その] 落ち込んだ半分を通過してよじ登らねばならない。[それは] かなり暑い日だ。[僕は] 途中で自分で蒸した飯を食べる。大いなる平安。素晴らしい景色。落伍者達のせいでラマインからタン [ビュザヤ] 行きの5時の列車に乗り遅れる。初日は約20キロメートルを踏破、二日目はそれよりちょっと少なかった。粗末な食事に大勢が実に参加してしまった。[我々は] 夜中の2時までお茶と米を料理する。[僕は] レールの間に寝る。4時に酷い雨で起された。[僕は] びしょ濡れ。たった2時間しか寝ていない。

ディッケ

1942年8月16日

[タンビュザヤ] [我々は] 明日長期に渡って重労働に出かけるとの報告 [を受けた]（全A大隊）。

ディッケ

1942年8月17日

[タンビュザヤからトナンへ] 朝 [我々は] 車で南方方面に出発した。約14マイル [その] 雨の中を踏破し、(悪い道) その後は悪い道を7,5キロメートル歩いた。午後我々の新しいキャンプ [トナン] へ着いた。アタップ [屋根を葺く椰子の葉] の倉庫連、片側開き。ロエルと僕は我等の簡易ベッドに [横たわる]、ホーフフェルトとファーベルは我々の間に横たわる。僕の反対側には [J. L.] クラ-マー (HVA-職員)<sup>81</sup>が横たわる。

オットウン

1942年8月18日

[タンビュザヤ] 土曜日、15日 [8月]、タヴォイとイエから残りのオランダ人達がやって来た。

オットウン

1942年9月24日

[タンビュザヤからウェガリへ] 中佐が我々に、タイからビルマに向かう新しい線路を敷設するのに我々が借り出される事だろう、と述べた。[...] そして日本軍はこの決断を実行するのに躊躇しなかった、というのは今日にもう我々は新しいキャンプに出発したのだ。午後出発し10キロメートル程歩かされた。最初の3キロから4キロメートルは未だ通行可能な道だった。しかし其れ以降は苦闘させられ、この道程は何かもっと計画されていた跡の様だった。

我々が新しいキャンプ [ウェガリ] に到着した時、6時頃にはなっていただろう。其れはただみすばらしく見えた。竹の兵舎とビリク (竹で編んだマット) の半壁。寝床用には板の代わりに普通の枝が使用され [ていた]、それ故にこれらのテンパチェス [寝床] は不均等なデコボコな形をしている。

---

<sup>81</sup> HVAはアムステルダムの通商協会で、其処でディッケも働いていた。

リブンス

1942年9月25日

[タンビュザヤからウェガリへ] (178日目 [戦争捕虜の身になって]) 昨日の午後 [我々は] 約10キロメートル我々の新しいキャンプ [ウェガリ] に向かって歩いた。遅く出発したので暗くなる直前に着いた。途中暑苦しい天気となり雨が降った。キャンプ：半開きの兵舎、丸木が互いに離れて置いてあるので、その上で寝るのは痛い、かなり不均等。便所は開け放たれていて、かなり酷い、ただ水は綺麗な川から充分 [ある]。

オットウン

1942年10月28日

[ウェガリ] 月曜日26日 [10月] タヴォイから更に数人、ヘニー等がやって来た。また既に150人がジャワから、多分その大きなグループの先着連に違いない。

オットウン

1943年1月4日

[ウェガリ] 昨日、3日 [1月] 病人達が看護キャンプを出され他の所へ収容 [される]。今空になった病棟には200名の‘ジャワからの’戦争捕虜達が収容された。

オットウン

1943年1月14日

[ウェガリ] 休日。何と昨夜は寒かった事か！僕が所持していた服全てを昨晩は着込んだが、それでも [僕は] 昨夜未だ寒さで目が覚めてしまった。キャンプ内で朝の太陽が輝く場所は込み合っていた。皆逸早く身体から夜中の冷えを追い出したいのだ。

ボム

[日付は恐らく1943年1月20日と24日の間]

[チャンギ (シンガポール) からモウルメインへ] 日曜日1943年1月10日 [我々は] チャンギから二チメイ丸 [に] 乗船 [して出発した]。水曜日ジョージタウン [に着いた]。その後は2番目の貨物船とコルベット艦の護送船団の元に。1月15日金曜日3時15分 [僕達は] 2機のライニングフォートに爆撃された。3回の一斉射撃が双方の貨物船に。僕等の船は即時横転して沈んだ。45分以内に既に僕等乗員と共に船は消去 [した]。僕は唯一 [未だ] 一枚の半ズボン、2個の指輪と止まった腕時計を保持している。後方船倉に漏れ穴が在っても他の船 (モジ丸) は浮上していた。これが僕達の命を救った。全員泳ぐか浮いていた板切れに捉って其処へ向かった。其処は満員だった。 [僕達は] 41名の死者と行方不明者<sup>82</sup>を出した。J [日本軍] は約400名。 [僕達は] モウルメインに向かった。J [日本] の負傷兵達が土曜日の夜下船した。僕達の死者と負傷者達は僕等と一緒に日曜日になって [やっど] ! 重傷者達は月曜の夜J [日本の] 病院へ。 [僕達は] 刑務所にやって来た。飲料水は不足、 [故に] 洗濯は問題外! 同じく、 [僕達は] 14日も身体を洗っていなかった! もっとも石鹸やタオルは無し。僕はレインコート、シャツ其れに加えて半ズボンを他の捕虜達に貰った、J (日本軍) は今までのところ何の手助けもしなかった。猛烈な乾季に入り夜中はかなり寒い!

他の輸送船 [これもヨーロッパ人達] が射撃された; 185名の死者に加えて更に今尚ラングーンの病院に横たわっている400名の病人<sup>83</sup>。

ボム

1943年1月30日

[ラバウ] 昨日 [僕達は] 1月15日の海水浴以来初めて水浴した。一昨日 [僕達は] ここラバウにやって来た。しっかりした屋根の付いていない兵舎連。土質は重く、埃っぽくて乾燥 [している]。

---

<sup>82</sup> 二チメイ丸とモジ丸にはそれぞれ1000名の戦争捕虜達が乗船していた。二チメイ丸の968名は救助されモジ丸に乗船した。モジ丸自体は爆撃により7名の犠牲者を出した。これらの2隻の船はシンガポールからモウルメインに行く最後の輸送船となった。モジ丸は1943年1月17日モウルメインに着いた。(Leffelaar en Van Witsen, *Krijgsgevangenen in de Pacific-oorlog (1942-1945)*. (Franeker 1971) 103)。

<sup>83</sup> これは多分1942年10月16日タンジュンプリオックから出発した護送船で、タコマ丸がその一部であった。タコマ丸には又キャバレー芸人のヴィム・カンが乗船していた。彼の日記に彼は、護送船の一隻が潜水艦攻撃に見舞われた、と書いている。その他は赤痢による多数の死者が出た。ラングーンでは戦争捕虜達が刑務所に収容されそして其処から輸送船はモウルメンを経由してタンビュザヤへと辿った。(Wim Kan, *Birmadagboek 1942-1945*. (アムステルダム 1989)、77-78とVan Witsen, 103参照)。

ボム

1943年2月6日

[ラパウ] 僕達の輸送船からのアメリカ人、オーストラリア人とオランダ人を除いてここには未だ数百人のビルマ人達が住んでいる。この地区自体は極度に住人人口が減り、クーリー（下層労働者）達でさえも引率されて行った。[...] 洗濯の機会はここでは極度に限られていた。最初の3日間僕達は2000人で20メートル四方の澱んだ水溜りを使った、そして其処では僕達が採掘作業を終えた後身体を洗う事を許された（石鹸は無い！）。3日後にはこの水溜りが余りに臭いので僕達は今とても小さなそして流れの早い溪流で入浴している。又其れは上流に居る人の汚れで入浴するわけだが、少なくとも来たる日々は汚く無い！衣服は身体を洗う時濯いでおく。僕達は服を夜中の寒さに備えて身に着け、日中はかなりの汗を掻く極めて埃っぽい仕事上で。故に僕達の衣服は一向に綺麗にならないことが君はよく分るだろう。僕の2番目の‘衣装’を着る事はやはりしないでおく：多少綺麗な物はここでは意味が無い。

オットウン

1943年2月23日

[ウェガリ] ヤレヤレ、遅い帰り。そして家に帰って聞いたのは、将校グループが今日既に新しいキャンプへ出発したと、それはアナクインと呼ぶキャンプ46<sup>84</sup>を示唆した。明日は既に4番から9番までのグループが出発する、だから我々のグループもその中に入る。日曜日の噂は故に真実であったわけだ。<sup>85</sup>

ディック

1943年2月24日

[ウェガリからアナクインへ] [今日] 90年前父がドルドレヒト市で生まれた。我々はトラックで新しいキャンプへ輸送された。車1台に8人と balan [手荷物] を一緒に載せて、ゆつたりと座った、埃まみれで到着した、オランダ人、アメリカ人、イギリス人そしてオーストラリア人達が居たトナンと他数カ所のキャンプの傍を通った。我々の現在の兵舎（‘丸木’）は古いバナナ倉庫で、両側は開け放たれ、アタップ（屋根を茸く椰子の葉）で覆われている。雨が降ると、

---

<sup>84</sup> これらのキャンプは又それらが基地キャンプ、タンビュザヤ（ビルマ）とノンプラドゥック（タイ）から離れているキロメートル数が示唆されていた。基地キャンプを0キロメートルとしてそれから勘定した。

<sup>85</sup> 1943年2月23日日曜日にオットウンは、近い内彼等が新しいキャンプへ引っ越すだろうと書いた。（N I O D、蘭領東インドの日記収集、W. A. B. J. F. オットウンの日記）。

アタップが綿密に覆われていないので、我々は雨打たしになることだろう。この新しいキャンプはアナクインと呼ぶ。

オットウン

1943年2月24日

[ウェガリからアナクインへ] [我々は] 急いで荷造り [をさせられた]。9時半に既に準備を整えていなければならず、11時前にはトラックに乗せられ出発した。約2時間半のでこぼこした特に凄く埃っぽい道の旅後、2時前に新しいキャンプ [アナクイン] に到着した。

オットウン

1943年2月26日

[アナクイン] ウェガリから又数グループが到着した。これらの連中は我々の兵舎に収容されたので、我々は今言わば隣同士に寝る代わりに重なり合って横たわっている。

リブンス

1943年2月27日

[アナクイン] (333日目) 昨日、我々は終に第3団として新しいキャンプ・アナクイン、ジャワから400名のオランダ人が既に居たキャンプ46へ引っ越した。この古いキャンプ・ウェガリ (キャンプ8) を故に我々は後にする。このキャンプは標高200メートルの所で、あちこちに切り立った突き出た岩と、広くかなり深いカリ [川] がキャンプ内に在る。だからかなりの向上だ。キャンプ8では到着時に我々が其処で見つけた小川が、その内に長期間干し上がってしまったので、我々は毎回約半時間歩いてマンディ (水浴び) に行かなければならなかった。

オットウン

1943年3月10日

[アナクイン] 確かに明日一部がキャンプ65へ出発することになっている。これは今日我々のグループ指揮官によって伝えられた。僕も含めて、我々のグループの半分が明日出て行く。大尉



はグループ8の残りの半分と共に留まり、数日後に他のグループと一緒に来る。我々は歩かなければならない。これは僕にとってこの腫れた下肢でさぞかし楽しい遠征になることだろう。<sup>86</sup>

オットウン

1943年3月11日

[アナクイン] 11時半我々は出発準備の出来た状態で待っていなければならなかった。午後中に確かに数グループが出発した。2時半我々は - グループ8の半分とグループ7全員 - 未だ出発の合図を待っている。その時知らせが来て、我々は再び兵舎の中に戻れると言うのだ、というのは出発が3～4日延期されたのだ。我々は今空っぽになった場所を占領し、即大いにゆったりと横たわる。

ボム

1943年3月20日

[ラパウ] 今日は [僕にとって] 又ラパウでの最後の日。明日は引っ越す - 約600人は既に出て行った - タイとの国境近くのキャンプ85 [テダン] へ。ここでのこの仕事はほぼ終わった、僕等は目下更に先へ開始する。

オットウン

1943年3月29日

[アナクイン] 昨日病人達はレポウに運ばれて行った、其処は20キロメートル戻ったキャンプで今は病気の戦争捕虜、主に長期に渡る病人用集合キャンプとして知られている。

---

<sup>86</sup> オットウンはここで左足首の腫れを当てつけている。項目「仕事」、オットウン1943年2月26日の日記断片参照。

ボム

1943年4月5日

[テダン] 僕達はこの僕等の新しいキャンプ、テダン、ダルディンとか何とかそういう風に呼ばれている所に既にもう数週間も居る。又もや僕達は約100名の病人達と一緒に！このキャンプは前のよりも良い、岸壁の裾に沿って流れているカリチェ [小川] のお陰で僕達は充分身体を洗う事が出来る。其れによって僕達に十分な飲料水もある、というのはかなりの利点だ。[...] この場所はとても良い：リアーナ（熱帯産蔓植物）と竹が入り混じってそんなに生茂ってはいない密林で、かなり規則的にカリチェ（小川）が流れている。ここには村落が全く無い。但し僕達の近くにこの線路で働いているビルマ人達のキャンプが在る。一日中ここでは猿と鳥の音がする。一般的な印象に関しては君はこの場所をパレットと、より平坦ではあるが、比べる事が出来るだろう。

ウェストホフ<sup>87</sup>

1943年4月5日

[レットポウ] 愛する君<sup>88</sup>、全てが同等に楽しいというわけではないが、相対的に話す事が私には山ほど有るよ。まず私は [アナクインから] 病院キャンプへ移され、今レットポウ、2000人の病人達を収容している大きなキャンプ、に居る。その理由は私が3日間の中で3回も失神してしまい、[これが] 相変わらず又しても起こったのだ。検査してもらってそしてここに送られて来たというわけだ。ここレットポウで私は再検査され、心臓に問題が有るらしい事が分って、絶対安静 [と診断された]、[私は] 働くべからず（だから [受諾] もはや無収入）そしてそれに [私は] ベリベリ<sup>89</sup>が足に出来ている - 全ては相当粗末な食事からきているのだ。あそこの私の知り合い達から去らなければならないことを私は申し訳なく思ったが、多分これで良いのだ。ここがとても陽気など勿論あるわけではない、病人達だけ、皆混合：オーストラリア人、イギリス人そしてアメリカ人達。我々は何もする事が無く - 一日中ベッドに横たわっている（もちろんベッドではなく、1枚の筵）。

---

<sup>87</sup> ウェストホフはこの日付までリブンス、ディッケとオットウンと同様スマトラからの同じ道程を歩き続けた。

<sup>88</sup> ウェストホフの日記は彼のオランダに留まっている妻に宛てて手紙形式で書かれていた。

<sup>89</sup> ベリベリはビタミンB - 集合の欠乏から生じるビタミン欠乏症である。ベリベリは麻痺とやせ衰えを呈する乾質型、と栄養浮腫として知られる湿質型に進展する。（ファン・ヴェルデン、357）。

オットウン

1943年4月17日

[アナクイン] 10時に我々は既に出発の準備を完了していた。日本軍が何処に居るのか我々は全く分らず、長い間待つて後、兵舎に戻って良いとの命令が有った、というのは出発が今晚に延期されたのだ。

ディッケ

1943年4月17日

[メザリ] 土[曜日]。引越しの整列。雨が降ったので[我々は]夜になってから出発した、[それは]キャンプ70 [メザリ] に向かって約30キロメートル歩く。[僕は] 数個のまめができた。それ以外この遠征は思いの外悪くは無かった。我々は夜8時に出発し翌朝6時にキャンプ70に到着した。

オットウン

1943年4月18日

[メザリ] ヤレヤレ、拷問は終わった、というのは大勢にとって其れは本当に拷問であった。昨夜8時頃我々全員整列させられそしてキャンプ指揮官、[W. E. C.] デイティハー大尉が演説、実際は行進指導、をした。彼は我々全員に今夜可能な限り歩行が簡単になるよう‘歩行計画’を作成した。彼は日本の指揮官からこの歩行計画を適用する許可を貰った。1時間はたっぷり経過した後我々は出発した。道はとてもでこぼこして岩っぽく、頻繁に思いがけなく突き出た石に躓いた。そして僕が嬉しかったのは、こういった目的のみに使用する妥当な良い靴を未だ持っていた事だ。というのは僕はキャンプ内での作業へは大抵裸足で歩いているから。

この結構な歩行計画は全く成功しなかった。朝鮮人の監視人達はそれを気にも留めていなかったし、落伍者達、大抵裸足で行進した歩行者達に‘怒鳴り散らしていた’。更に輪をかけて監視人達は仲間同士で喧嘩をし、其れが我々には又迷惑だった、というのはこの紳士監視人達は彼等の苛立ちを無差別で我々に向けてきたのだ。朝5時半から6時の間に我々の何番目か分からないほどのキャンプに到着した。[...]僕はこの夜間の行進でやはり踵に擦り傷が出来てしまった。このメザリという名のキャンプには既に1000名のオランダ人が居て、全員ジャワからの連中。

ボム

1943年4月18日

[パドン] 僕が君に上記の事を書いた後<sup>90</sup>、夜9時半耳にしたところでは、僕らは翌朝早々に[4月6日] 他のキャンプ、キャンプ80に移動しなければならないらしい。つまり僕達の3番目のキャンプ、パドンだ。殆ど何も所持しない連中にとっては簡単な命令：所持品を一巻にして終わり！このキャンプはテダンより落ちて身体を洗う機会も随分少ないのだ。

リブンス

1943年4月26日

[メザリ] アナクインでの日々は又終わった。[...] 我々の出発の前日は休日で実際の出発日に我々は夜8時に出た。我々はこのキャンプ・メザリ（キャンプ50）<sup>91</sup>へ向かう約30キロメートルの距離を完全装備で歩かされ、靴を持っていない者には日本軍が靴を与えた。大勢は直ちにまめが出来たので、先は裸足で歩かなければならなかった。僕自身は全バラング[全所持品]と共にその大荷物遠征を無事終えた。翌朝6時半に我々は到着した。1ヶ月前先に車で出発していた将校グループと、我々はここで出会った。<sup>92</sup>

ウェストホフ

1943年5月9日

[タンビュザヤ] この時期の最も重要な点は私が再びタンビュザヤに戻り、このキャンプに又去年の8月から10月まで居た事だ。ここはとても変って凄く拡張した。今は約1200名のオランダ人と約1600名のオーストラリア人等がここに居て、全員病気。ここでの生活はとても平穩でそして[故に] 我々は何もしない。

---

<sup>90</sup> ボムはここで1943年4月5日を指示している。彼の日記では彼は彼の妻イナに語りかけている。

<sup>91</sup> キャンプ70に在ったビルマのキャンプ・メザリを意味していた。

<sup>92</sup> この項目の1943年2月23日オットゥンの日記断片も参照。

オットウン

1943年5月12日

[メザリ] 仕事はしなかったが、今夜始まる歩行用の我々の準備をした。[...] 夜11時頃けたましく整列させられ、縦列を組まされて約40分後に出て行った。

オットウン

1943年5月13日

[メザリからキャンプ108へ] 今朝約12時(日本時間)我々はキャンプ95(?)に到着し、其処に今晚まで留まる事だろう。夜間の旅は規則が無く楽しい散歩ではなかった。我々は碎石がばら撒かれた道を歩き、其れに加えて剃刀の様に鋭い縁を持った大きな椰子のかけらが在った。その上凄く暗く、月は朝方になってようやく上がって来た。僕が神に感謝したのは、未だ使える靴を持っている事だ。[...] しかしながらこれらの僕の‘家来達’は無傷ではなかった。1本の足には甲に傷が在り、他方には踵に腫れた擦り傷が在る。尚悪い事に僕は既に数日間下痢に悩んでいるので、僕の状態が今完全ではないと扱われる可能性が在る。僕も今夜の2回目の遠征はかなり尻ごみする。

リブンス

1943年5月13日

[メザリ] 12日[5月] 夜中全ての健康な者達はキャンプ108に出発したが、それまでにキャンプ95に泊まった。ここでは働く必要は無かった。しかし我々が何時に出発するのかは未だ分らない。

リブンス

1943年5月14日

[メザリ] (409日目) 今朝明らかにされたのは、明日7時前には全キャンプが撤去されなければならないということだ。噂は連合国[...] のビルマ入りを示唆している。しかし最悪なのは日本軍によれば我々が全遠征を2日間で行なわなければならないのだ。其れはあらゆる点で希望に満ちては見えるが[ここでの意味: 全く無い]、まあ望みは捨てないでおう。

オットウン

1943年5月14日

[キャンプ95からキャンプ108へ]今夜約1時再び出発した。街道は最初の距離のものより更に酷かった。道は碎石の代わりに岩片がばら撒かれていた様で、暗闇の中で歩く事を更に困難にさせた。更に、特に最初は監視人達による粗野な喚き声と時折あちこちの連中を突つく事で行進速度は一定に保たれた。しかし間隔が大きくなるに従って監視員達の動きも徐々に少なくなっていた。

今朝9時半あたりに我々の新しいキャンプに到着した。竹製倉庫が立ち並び、其処の1件半分程度がアタップ[屋根を葺く椰子の葉]で覆われていた。残りは何の覆いも無かった。既に覆われていた兵舎連には既に数人のオランダ人が住んでいて、彼等は我々より数日前にキャンプ・メザリを出発していた。既にキャンプ108で指揮官になっていた[J. W.] プラッテ大尉は我々を迎え入れ、屋根付きの兵舎を提供する為に彼等がアタップをなるべく早く準備するだろうと述べた。これらの兵舎はアランアラン[葦草]と他の雑草が、特にバレバレ[寝台]、の下、その休む場所に溢れんばかりに繁茂したことから、明らかにかなり前に建てられたものだった。ここは植物の成長が既にその上にまでも伸びていた。我等の兵舎が指示された後、直ちに掃除を始めた。僕は今多少整えた自分のテンパッチェ[寝場所]に横たわりそして浮いているほつれた雨雲を見ながら、今夜は何とか降らないで欲しいと願っている。

オットウン

1943年5月15日

[キャンプ108]全く今夜は我々の睡眠を数回のにわか雨によって妨げられた。両側の部屋仲間と共に持っていたテントシートのたぐいで作られたレインコートでまだ濡れずに横にはなれた。確かにアタップ[屋根を葺く椰子の葉]は届き、皆屋根の覆い敷きを手伝わされた。幸い日本軍が十分なアタップを準備したので数時間後には兵舎連に屋根が供給された。このキャンプが暗示する108という番号は、基地キャンプ、タンビュザヤから108キロメートル離れた所に位置するという意味である。

我々の飲料水は一面に汚い、緑色と粥っぽい水の臭い小沼地から来る。この沼地は又我々の入浴用でもある。そしてこのキャンプには大群の蠅。キャンプの裏、キャンプ賄所のある場所のすぐ近くに今や干し上がってしまったカリ[川]の川床が伸びている。雨季に到達すれば即、又再び十分な水が手に入るだろう。しかしどうせ又泥。午後にかんりのスコールが降ったので、そのお陰で我々の大半、そして僕も、有り難く気持ちの良い入浴にありつけた。それは臭い溜池の汚い、生暖かい水より相当ましだった。

オットウン

1943年5月26日

[キャンプ108] 我々の仕事に行く道で数個のとても古い建物（仏塔）を通った、そしてこの場所はマルコポーロも又既にここを旅した ‘三仏塔峠’ として昔から知られている。この峠を経由して日本軍がタイからビルマに襲撃して来た。又道の左の小さな丘陵にはこれらの三仏塔が立っている。そして其処から500メートル程先にビルマとシヤム（或いはタイ）間の国境がある。いくつかの村或いは居住を示す他の印は何も認められない。ところでそこは既にもはや、40キロメートル足らずを戻ったメザリ、の近くではなかった。それから我々は正しくジャングルの中に居た。時としてちらほら何かは傍を通ったが、大半は牛を前に繋いだグロバック [荷車] に荷物を乗せ傍を通る小数人のグループだ。

リブンス

1943年5月26日

[メザリからキャンプ108へ] (421日目) この遠征は驚くべき事に無事満了した。キャンプ75で実際それ以上先に進めなかった約200人が残留できたが、其れ以降は全員キャンプ95に向かってこの遠征を踏破しなければならなかった。明け方近く我々はかなり広い川の岸の麓（キャンプ95）に到着しそこで飲食を料理し、其処から後山地の風景を通して先へと歩いた。キャンプ95に到着した最後の男がそこに来たのは午後5時だった！その為に同日夜11時の我々の出発予定は実施されなかった。僕が考えるには、皆ほとんど疲れ切っていたので誰もこの遠征をやり遂げることはなかっただろう。

翌日我々は出発しついにこのキャンプ [キャンプ108] に到着した時は実に嬉しかった。ここにはスペースが無かったので、我々自身で2階を建てなければならなかった。健康な者達が、ここに疲れ切って到着した時、数件の覆いの無い兵舎を見つけ、彼等は其れを未だ ‘ちょっと’ アタップ [屋根を茸く椰子の葉] で ‘スレート重ね’ しなければならず—そしてじゃじゃ降りの雨の中で。飲料水は最初泥沼から手に入れなければならなかったし、—そしてマンディ水 [入浴水] も同様に無かった。今は更に強まる雨で益々細流が出来きるので緊急の問題は解決したも同然だった。

ボム

1943年5月27日

[キャンプ80] 僕達は翌朝出て行く、キャンプ120（タイ）ではなくキャンプ100 [アンガナン] へ向かうのだ。其処は相当より悪いに違いない！

ボム

1943年5月30日

[キャンプ80からアンガナンへ] 引越しは酷かった：僕達は20キロメートルを僅かな所持品を首に撒きつけて朝9時から夜9時まで歩いた。数人の病人を除いて全員が歩いた。このキャンプ [アンガナン] は酷い。

オットウン

1943年6月10日

[キャンプ108] 明日再び400人が数キロメートル戻った、キャンプ105に向かって出発しなければならない。僕を含めるグループ8の連中も出発することの通告があった。我々のグループ指揮官、[H. L.] ユリエン大尉は同行せずグループ8の残りの連中と一緒にここ [キャンプ] 108に残る。

オットウン

1943年6月11日

[キャンプ108からキャンプ105へ] 乾いている、だから歩くには良い天気だ。約10時半新しいキャンプ住人達は出発し12時頃我々はキャンプ105に到着した。このキャンプには既に900名のオーストラリア人達が居て、その中の相当な数が病気ときている。其れゆえに我々が今ここにいるというわけだ、というのは鉄道路線のこの部分を期日に仕上げなければならないときている。このキャンプはコレラが流行していたので、長い間回避されていた。

長さ60メートルの1個の兵舎に [我々] 400人が収容された。皆が一つの場所に、それが如何に小さくとも、バレバレ [寝台] を置く事は出来なかった。だから日本軍は竹を伐採する許可を与えたので、存在するバレバレの上にもう一段建てる事が出来る。そして8時にグループ8の我等の部分は終わった。



オットウン

1943年7月2日

[キャンプ105] 僕の寝具と衣服（ベッドカバーと帆布タンドゥ [ここでは：グラウンドシート] が僕の全寝具だ。）を太陽の下に置いて気持ち良い。というのは僕は、他のキャンプ仲間全員も同様、（衣服につく）虱に悩まされている。小さな、白鼠色の獣、こいつ等は主に衣服やベッドカバーの折り返し目に巣を作るから捕まえるのが難しい。

オットウン

1943年7月3日

[キャンプ105] 60名程の病人達が今日キャンプ55へ運ばれた。そこは[1つの] 看護キャンプとなった。

リブンス

1943年7月10日

[キャンプ105]（466日目）ナガモト<sup>93</sup>の訪問後約900名のオーストラリア人と約70名のオランダ人の病人達が新しい看護キャンプ、キャンプ55へ送られた。タンビュザヤは再度の激しい爆撃で、そこでは戦争捕虜達も被害者として戦死したが、退去することになり、全病人達は一時的に他のキャンプへ移されたのだ。

ウェストホフ

1943年7月19日

[レトポウ] [彼の誕生日] 私の最後の記述以来、その間に又もやあれやこれやが生じた。我々は再び[キャンプ22から] 引越して今再びキャンプ30、レトポウ（1943年4月参照）<sup>94</sup>に居る。15日[7月]の早朝突然出発の準備をする命令を受けた。駅まで歩かされ其処から[先]は列車。何時間も待たされた後やっと列車がやって来て我々は出発した。[...] この立地条件

---

<sup>93</sup> ナガトモ・ヨシタケはビルマにおける戦争捕虜達の指揮官であった。

<sup>94</sup> ウェストホフはここで病院キャンプ・レトポウへの彼の到着、について前記の日記記載を参照する様指示している、この章の1943年4月5日参照。

は全て言葉では言い表せない、というのは屋根の覆いが余りに悪くて中でも外と同じ位激しい雨が降るんだからね。

ウェストホフ

1943年8月4日

[レプトウ]他にはというと我々は南京虫と、それに加えて目下衣類につく虱に悩まされていて、衣服や寝具についている蚤を駆除している連中を益々頻繁に見かける。

ディッケ

1943年8月26日

[キャンプ108]全オランダ人がキャンプ105からキャンプ108へ引越し[しなければならぬ]。病人達はキャンプ55 [病院キャンプ]へ運ばれる。

オットウン

1943年8月26日

[キャンプ108]昨夜発表されたこと [キャンプ105にて]は、我々が再び [キャンプ] 108へ戻ることになり明日には既に出発するという。既にまる1週間乾燥していて今日も又お天気だ。だから其れに関しては108へは困難な歩行にはならないだろう。10時に我々が出発し11時半頃キャンプ108へ再び歩いて入った。

ディッケ

1943年9月6日

[キャンプ55] 野菜を掃除していた間に、僕がキャンプ55<sup>95</sup>に出発しなければならないという [9月4日に来た] 情報。トラックで [我々は] キャンプ83へ出発し、 [キャンプ] 95を

---

<sup>95</sup> ディッケは下痢の為既に数日‘非番’であった。この理由により彼は病院キャンプ55に送られた。

經由、そして其処で他の車に乗り換えさせられた。[我々は] 1 晩過ぎ夕飯を [キャンプ] 83 のパサングラハン [宿泊所] で食べた。夜中更にキャンプ30から20名 [やって来た]。

翌朝9月5日列車でキャンプ62 [へ我々は行った]。[キャンプ] 83の [この] 駅で僕はクーリーから暖かいウビ [サツマイモ] を貰いそしてクッキーを買った。夜キャンプ55へ向かって歩き、又もや良い食事に見つけた。僕は2～3日前から血便 [したの] で其処で赤痢病院2に入院した。

オットウン

1943年9月10日

[キャンプ108] 又出発の噂だ。1グループが再びキャンプ122へ引越さねばならないだろう。其れは既にタイの国境を越える。成り行きを見よう。

ほら、ね！噂はやはり本当だ。夜の点呼後ユリエン大尉が来て言うには、グループ8の中の15名がキャンプ122に出発することになるだろうと。そして出発は既に明日だ。そして僕はその明日出発する15名の1人なのだ。だから [僕は] 既に出発の準備に取りかかることにする。そしてこの準備は早々に終わった、というのも我々にはもうそんなに多くの所持品は無いからだ。

オットウン

1943年9月11日

[キャンプ122] 出て行かねばならないこのグループは今朝10時頃出発体制を整えておかなければならなかった。我々の全所持品は幸い自ら担ぐ必要は無く、トラックに積見こむ事が出来た。10時にこのキャンプを出てキャンプ122に向かって行進した。ここには4時前に到着した。何とがっかり！泥っぼい周辺に屋根は無く壁も無いたった数件の兵舎のみが建っていた。我々自身でベリッケン [竹で編んだマット] の仕切りを運び込み、アタップ [屋根を葺く椰子の葉] で屋根を覆わなければならなかった。幸いこれらの材料は既に用意されていたので、直ちに仕事に取り掛かることが出来た。

オットウン

1943年9月13日

[キャンプ122] 昨日我々は未だ‘裸’のままになっていた兵舎連を仕上げた。我等、最初のグループは‘宿舎割り当て補給係’としての任務を果たしていた。今日、我々がこのキャンプに戻って来た時、更に多くの人間が[キャンプ]108から到着したらしい。人力は今約150人だ。

ボム

1943年9月15日

[アンガナン] 僕達はここのキャンプで病人達のみと共に(少なくともオランダ人とアメリカ人に関して)居る。最初50人が送られてきたが、数日後には残っている150人が2箇所以外のキャンプに分遣されていった。

ディッケ

1943年9月19日

[キャンプ55] [C.] マック牧師と[A. W. M. フェルヘースト] 神父が昨日このキャンプに到着した<sup>96</sup>。双方共元気[だ]。前者がヴィム・スフロートからの挨拶を持って来た。彼は元気だ。

リブンス

1943年9月20日

[キャンプ122] 9月11日突然僕も含めて、1000人が[キャンプ108から] (キャンプ) キャンプ122へ引越し[をしなければならない]。[...] 我々の荷物は驚いた事に車で出発したので、歩行は多少楽に進んだ。

---

<sup>96</sup> 日本軍から1978)、68-69:も参照。

ディッケ

1943年9月22日

[キャンプ55] 夜 [K. J. G.] コーブスが別れを告げに来た。彼は明日他の9人とそして [マック] 牧師と神父 [フェルヘースト] でキャンプ108に行く。

リブンス

1943年9月24日

[キャンプ133] (541日目) 又もや我々は更にもっと大きい他のキャンプ (つまりキャンプ133) に居る。皆混ぜこぜで居る: オーストラリア人、オランダ人、ビルマ人、中国人、南印人<sup>97</sup>と日本軍、ナガモトと参謀もここに来る事になるだろう。我々の立地条件は今まで経験した中では最悪で、要するに沼地のたぐい。周囲と兵舎の中は泥濘のみで、その上4人用仕切りに我々6人が横になる。

オットウン

1943年9月28日

[キャンプ122] かなり突然僕も含めて30人が呼ばれ、我々 (だからこの30名) はキャンプ130へ引っ越すと聞かされた。1時に我々はローリーでキャンプ130へ出発した。今回は [だから] 歩かない。しかし [キャンプ] 130に到着した時、この野営袋を荷降ろし、直ちに又戻らされた。ローリーは我々を即数キロメートル先の仕事場に運んだ。我々は現在形式上路線敷設団となっていた。僕は正に又もや屋根の無い、数件のかかなり小さな兵舎が建っていたのを見た、[だから] 帰還時にまず屋根を覆うことになるかも知れず、それからやっと寝ることになる。というのは我々は再び夜中ぶっ通しで働く。今朝早くになってやっと家に帰してもらえた。

オットウン

1943年9月29日

[キャンプ130] 6時に新しいキャンプへ戻る。我々の野営袋をまず取りに [行った]。それらは濡れていた。[それらは] 作夜外に置いてあった。我々はまず自らを乾かし明るくなるまで

---

<sup>97</sup> 南印人とは彼は多分南 - 印人、元々コロマンデルの海岸の住人達、を意味している。

火で温めた。朝食：飯とウビ〔サツマイモ〕。眠る事が出来なかったのはまだ屋根が無いからだ。午後遅くにやっとテントが張られた。差し当たってはそのテントの中に泊まれる：1つのテントに21人。とにかく例え雨が降っても濡れずに横になれる。

ボム

1943年10月1日

〔アンガナン〕ここ2～3ヶ月僕も（ついに）虱の被害者になった。僕達が夜遅くやっとキャンプに戻って来たのとその上僕が既に病気になり始めた期間、夜は疲れ切っていたので、長い間入浴しなかったのがこの致命的な‘虱－結果’になった。今に至るまで僕はこいつ等を退治する事には成功していない。

オットウン

1943年10月4日

〔キャンプ130〕昨日の朝我々が仕事から戻って来た後は、寝られなかった。テントは解体され再び日本軍へ手渡されなければならなかった。これらのテントの代わりに緊急兵舎が作られ、其処には1グループが収容された。この様にして他の兵舎連にも我等前テント居住者達に場所が明け渡され、再び我々自身のグループで横になることが出来た。

ディッケ

1943年10月25日

〔キャンプ55〕夜遅く10時頃レットポウ・キャンプ30の病人達がやって来た：180名のオランダ人、〔その〕残りのオーストラリア人達。

オットウン

1943年11月5日

〔キャンプ130〕僕は既に数日下痢に悩んでいる。頻繁に便所へ走らなければならないのは全く冗談でないが、今日みたいにぐずついた天気が生じてしまうと、全てが嫌になる。便所は外に

ある数本の長い溝しか無く、その上にしゃがむ。そして大抵は自分の前か後に未だそうした下痢患者が坐っている。

オットウン

1943年11月8日

[キャンプ112] 昨夜明らかにされた事は、我々が又キャンプ114に戻るといふ。そしてこの引越しは今日既にすることだろう。僕はこの約16キロメートルに凄く尻ごみした。というのはこのところ再びちょっと熱が出ていてほんの僅かしか食べていなかったから、ぐったりした気分だったからだ。しかし幸い僕の野営袋を手荷物運搬トラックに渡せた。何と幸運、僕は先週1組の新しい靴を貰っていたのだ<sup>98</sup>、さもなければこの全遠征を裸足でしなければならないところだ。

僅かの朝食後10時前に我々は出発した；[我々が貰ったのは]一回分の水っぽい粥だけ。午後5時ごろキャンプ114に到着した。ここで我々は続いてキャンプ112へ行かなければならないことが分った。15分後又出発した。6時前[我々は]112に到着し[そこでは]何度目になるか分からない程の失望が我々を待ち受けていた。というのもこのキャンプは空で一滴の水すら無かった。だから料理が出来なかった。相当ブツブツ言いながら兵舎の中で指示された我々の場所を手に入れた。食事はキャンプ114から来る事になっている。そして、やったやった！数時間後確かに食事が届いた。本当のスープ、正に肉の欠片が入り。今我々は再び人生に満足した!!!

ディッケ

1943年12月25日

[キャンプ55からキャンプ133へ] 今夜8[時]15分過ぎに我々はタイに向けての我等の大旅の為整列する。[...] 11時に我々は[キャンプ55を] 出発した。1車両[に] 28人；指揮官は[F. O. B.] ムッシュ大尉[だった]。

---

<sup>98</sup> 1943年11月2日に抑留者達の中で靴が分配され、其処でオットウンが一組貰った。項目‘食糧及び物資事情’から1943年11月2日オットウンの日記断片参照。

ディッケ

1943年12月26日

[キャンプ133] 夜1時にキャンプ83 [に到着した]、其処で既に即 [その] [僕の] 残ったパンと卵を食べてしまった。我々は其処に4時半 [午後] まで居た。 夜7時にキャンプ105と108を [我々は通りかかる]。多数の日本軍隊がモウルメインに向けて輸送されていた。夜10時 [に] 我々はキャンプ133 ‘ニキ’ [の中] に着き、そこでは車両に泊まった。夜は日本食のスープ、魚と飯を貰った。

ボム

1943年12月26日

[アンガナン] 目下僕達はビルマを出てタイへ行く準備中だ。翌朝出発が始まり、僕はこのキャンプを29日 [12月] に出る。一個団300名 - 僕等の中から最も健康な者達 - はここに残留して鉄道の仕事を続ける。僕達はバンコク [カンチャナブリ - ] から約60キロメートルの休息キャンプに行く。

ディッケ

1943年12月27日

[キャンプ207] 4時半 [午後我々は] 出発する。綺麗な自然の美、深い川底の多くの川々。夜中11時半にキャンプ207で止まり、其処で飯とクリピーク [揚げた山芋のチップスカテンペ (発酵させた大豆のクッキー類) ] を貰った。

ディッケ

1943年12月28日

[キャンプ207からチュンカイへ] 我々は3時半 [朝] に出発するはずだったが、実際 [我々は] まず10時に出た。自分達の賄いから20枚のクッキーと小鯛を貰った。



ディッケ

1943年12月29日

[チュンカイ] 1時 [夜中] にキャンプ297に [到着した]、そこで飯とスープを貰いそして自分達の賄いからは小鯛を貰った。朝6時に我等の新しいキャンプ [チュンカイ]、約330キロメートルに到着した。

リブンス

1944年1月1日

[キャンプ130]クリスマス翌日突然我々はキャンプ130へ引越し[キャンプ133から]しなければならなかった。新しい編入と共に一覧表が手元に届いた。かなり多数が看護キャンプへ行く。僕自身は僕の健康状態によって労働者として記入された。今急にキャンプ133が看護キャンプとして見なされたので、労働者達は場所を提供するべく出て行かなければならなかった。そしてここに約400名の病人、キャンプ130のオーストラリア人達がやって来た。この新しいキャンプはとても小さくそこに約200名のオランダ人と80名程のオーストラリア人が居る、僕が未だ関連しているこの小病院<sup>99</sup>は、全て孤立していて小さな川に面し更に路線の土手の周囲を見渡せる広々とした見晴らしだ。

オットウン

1944年1月7日

[キャンプ112] 昨日の朝9時半頃労働者達は出発した。我々、病人達、は多分明日このキャンプを出る。列車で出発する事だろう。

---

<sup>99</sup> 1943年11月5日以来リブンスはこの病院で看護助手であった。項目「仕事」の1943年11月20日リブンスの日記断片参照。

リブンス

1944年1月7日

[キャンプ130] 新年になって我々は既に又1週間も居る、下流キャンプの病人達の輸送は未だ続いている。[その] ウェガリ - 一団<sup>100</sup>が居るキャンプ108の連中は、既に[次ぎのキャンプへ] 続行。

ディッケ

1944年1月8日

[チュンカイ] 到着した[キャンプ] 108の1グループ[がいる]。ホーフフェルトは其処で未だ病気だ[ビルマ熱]<sup>101</sup>。ドウ・ヨング中尉とアントニーは死亡した。後はスミット(HAPM)、[C. G.] ヘーリングス(ハリソン)とフウゲー(OLVEH)中尉[工学修士J.] デン・ドゥルク(森林監督官) J. フェルドフン(NKPM)、[W. C.] レーンヘル(セルバジジC. M. 確かでない?) J. [P. M.] ヘンス(ニルズ)死亡<sup>102</sup>。

オットウン

1944年1月8日

[キャンプ112からカンチャナブリ - へ] 今夜2時半我々は既に起された。6時前になってやっとキャンプ[キャンプ112]を離れ、列車の停車場へ数キロメートル歩いた。其れは既に止まっていた。我々はそのオープン車両に乗りこまされた。幸い大きなテントが持って来られたので、その下に座る事が出来た。11時前に[それは] 出発した。たっぶり1時間後その列車はキャンプ134の近くに在る我々の良く知る停車場に止まった。ここで食事の配分を貰った。飯と一枚半の美味しい燻製の魚。2時頃我々は再び先に乗って行った。夜9時半再びあるキャンプの近くで止まった。ここで又食事が分配された。そして約45分後再び先に走行していったと思う。

---

<sup>100</sup> リブンスはここで最初ウェガリに居た労働者達の事を意味している。

<sup>101</sup> 多分ディッケはここでデング(デング熱)を意味し、ウィルスと日中刺す蚊による伝染が原因で起こる。この病気は流感の様に高熱が出て、目の奥の頭痛、筋肉 - と関節の痛みそして発疹の経過を辿る。この病気は1~2週間続きそして疲労感は更に未だ何ヶ月も長く引き起こす。再感染によるこの病気は致命的な経過を辿ることも在り得る。(S.P.Smits, *Hoe blijf ik gezond in de tropen.*(アムステルダム、1990)67-68)。

<sup>102</sup> 短縮語HAPMは蘭国米国プランテーション有限公司(スマトラ)を意味する;ハリソン&クロスフィールド有限公司は1909年から数社の英国ゴム企業家達の代表店としての役割を果たしていた保険事務所の名前である。OLVEHはメダンにある独自援助相互保険である;工学修士J. デン・ドゥルクはベンカリスの営林署と連盟した森林監督官であった;NKPMは蘭国殖民石油会社;セルバジジC. M. はスマトラ・ゴム栽培会社の職員である;Nilsは蘭領東インド農業組合である。

夜中再び何処かに止まった。ほんの短時間だが。この時我々は真実3枚のクッキーをご馳走になった。

ボム

1944年1月8日

[カンチャナブリ - ]目下僕はカンチャナブリ - で思い出している - バンコクから約50キロメートル - 10年前君が僕のものになったその日を！君の居るその環境が同じ様に君にその日を思い出させてくれる事を僕は切に祈っているのだが？

29日 [12月] 確かにビルマ [アンガナン] を離れ、そんなに満杯で無い貨物車両での旅の後31日の朝4時半ここに到着した。この旅は僕らを素晴らしい景色と美しい道程に沿って運んでくれた。しかし：この場所にこの鉄道路線を引くのに大勢がどれほど苦しんだ事だろう！ 年間を通して今のこの時期は大変乾燥している軽い起伏の在る水田に今僕らは坐っている。兵舎連は良好だ [ … ]。目下僕らは基地キャンプに居る。もしかすると僕らはこの辺の近所至る所に在る他のキャンプに行くのだろうか？

オットウン

1944年1月9日

[カンチャナブリ - ] 今夜は多少なりとも眠れた。実際滑稽なのは、自分が走行している鉄道路線、そこに自らが嘗ては働いていたのだ。この遠征の最初は未だ確か数カ所を僕は記憶していた。又日本軍が土手から投下した脱線した貨車も見た。或いはそれらは土手から落ちたのか。我々はある区域を通過して走行し、そこでは大きなカリ [河川] に面している色々な捕虜収容所を見た。午後4時前我等はかなり大きな操車場に着いた。ここで降ろされた。我々は自分達の目的地に居た。というのはここからそんなに遠くない所に病人キャンプ [カンチャナブリ - ] があったのだ。それはかなり大きなキャンプだ。残念ながらカリの近くでは無い。身体を濯ぐ水も (未だ) 無かった。

オットウン

1944年1月12日

[カンチャナブリ - ] 未だに水が無い。ポンプは確かあるらしいが、これは壊れている。炊事用の水は何処か他の所で補給される。

ディッケ

1944年1月17日

[チュンカイ] 月 [曜日]。我々のキャンプは3000名のイギリス人と英領インド人が死亡した古いコレラキャンプである。

リブンス

1944年1月31日

[キャンプ114] (671日目) 既に又1月は過ぎ去って新しいキャンプ、つまりキャンプ114 [ここではキャンプ130から到着した] に来て以来もう1週間になる。

オットウン

1944年2月24日

[カンチャナブリ -] 夜になって風が吹き始めた：強力な突風、これは沢山の面倒を起した。2件の兵舎が吹き倒された。相当なラウダウ [騒乱] は勿論の事、[その時] 持ち堪えていた兵舎に居て宿無しになった連中は、我々の所に泊まった。それから風は多少治まり、強いスコールが降った。

ウェストホフ

1944年3月1日

[レトポウ] 多くの大事件は我々の所では起こらなかったが、只昨日50名のオーストラリア人が加わってきた。完全に性根尽きていた一団は相当惨めな光景であった。彼等はここから1キロメートルの所から列車で連れてこられた；途中既に一人が亡くなり、今日又 [死亡したのは] 2人。[彼等は] 食事を与えられずそして完全に栄養失調だった。

リブンス

1944年3月5日

[ターマカン] 3月2日病人達、マラリア - 発病による僕を含めて、はキャンプ114から鉄製故に激烈に熱い貨物列車で出発した。一日と一晚走行した後、我々は午後ここに到着した。このキャンプはかなり伸びていて色々な分割に配分されてお互い接触出来ないようになっていた。我々の区分は今のところ2000名の人力で3500名に拡張される。これはあちこち一連の丘の大きな面積で、西と南西を見て反対にはマラッカの全海岸に沿ってビルマの中まで伸びている山連峰が見える。我々はサンポウから50キロメートルにいて、其処は元々バンコクへ行くシンガポールの鉄道でバンコクから約140キロメートルの所に面している。何が我々に起こるのかは未知だ。少なくとも[ここの]数百人が日本へは行くだろうが、差し当たっては未だ正確に誰かは明らかでない。

オットウン

1944年3月22日

[カンチャナブリ - ] 午後日本へ行く事を指示された150名が輸送される、突然彼等の全所有物を持って整列したつぷり1時間たった後彼等はキャンプを出て行った。

オットウン

1944年3月24日

[カンチャナブリ - ] 今夜ビルマから約300人が到着[した]。

オットウン

1944年3月26日

[カンチャナブリ - ] 今夜オーストラリア人の病人グループが到着した。今朝僕が到着したばかりの連中の兵舎に行った時、3名の死亡したオーストラリア人達が、薄くて色褪せたシートで被

せて外の地面に置いてあるのを見た。彼等はこの旅を生き延びきれなかった。其れは [1つの] 悲しい光景だった。[...] 午後再び健康診断 [があった]。今回僕は良好と見なされた<sup>103</sup>。

オットウン

1944年3月27日

[ターマカン] 午後明らかにされたのは、昨日合格した連中は7時に出発の準備を整えておかなければならなかった。暫く [我々は] 他のキャンプへ行く。だから再び荷造りをして7時に準備完了 [しておかねばならなかった]。8時我々は出発し、9時前には新しいキャンプへ到着した。ここは既に沢山のオランダ人達が居る事が分った。このキャンプは [ターマカン] キャンプ1として示されていた。我々が其処からやって来たその病院はキャンプ3であった。

ディッケ

1944年3月29日

[ターマカン] [僕は] 半病人。46名が出発 [した]。新しい健康診断が日本 [軍の] 医者によって行われる事だろう。[...] 午後明らかになったことは、僕が [P.] ブルムスマ医師により日本へ (向かって?) 行くのに最も適していると彼が見なした50名 (約1000名の中から) の一人に入った。抗議した、2回のマラ [リア - 発病] の為! ハウボルト大尉は僕に更に4枚テン [テン -] クッキー [ピーナツクッキー]、ローエルはコーヒーをこの旅用にくれた。これ [抗議] は助けにはならず、夜やはりキャンプ1 [ターマカン] へ出発した。[J. S.] 僕はノートゥボーム副隊長の [下] 第一班 [の中] クロム中尉の [下] グループ48に配分された。[僕の] 仲間はヘルブランツとファン・フリート [だ]。

ボム

1944年3月29日

[カンチャナブリ -] 我等のキャンプ [第2カンチャナブリ -] から25名が近日中に既にここから日本への旅が始まる集合キャンプへ輸送される。更にもっと多くがその後が続くだろう: 今までのところではJ [日本軍] は将校達に殆ど興味を持たなかった。

---

<sup>103</sup> オットウンは1944年2月23日の健康診断で最近のマラリア発作により日本人医師により日本への輸送は不合格となった。(N I O D、蘭領東インドの日記収集、W.A.B. J.F.オットウンの日記)。

ウェストホフ

[日付は多分1944年4月1日と8日の間]

[レットポウ] このキャンプで言及している目立ったものは、我々の連中から約400名が今日本軍によって日本へ輸送されたという事。私の多くの知り合い達がその中に入っていて、[今] 私は彼等に二度と会えないのではと凄く怖い、何故ならその様な大掛かりな長い旅は大半の連中に持ち堪えられない [だろうから]。

ディッケ

1944年4月6日

[ターマカン] グループ41, 42そして43は午後出発した。

リブンス

1944年4月7日

[ノンプラドック] 僕は[ターマカンに] 1班、グループ45に配分された。交代要員として25番 [を僕は貰った] そして偶然仲間としてナールハウトを得た。4月3日我々は列車でキャンプ(第2ノンプラドック)へ行き、其処から今日明日にでも出発する。まずバンコクを経由してメコンに、そして其処からは船でサイゴンへ。この‘土手’はついに終わった、というのはこのキャンプは最後の場所から約60キロメートルのシンガポール-バンコク鉄道路線に在るからだ。5キロメートル程戻るとビルマへ向かう支流で、其処においては我々には何の楽しい思い出も無い。

オットウン

1944年4月7日

[ノンプラドック] 夜8時ごろ列車は止まり我々は降ろされた。点呼の後、この遠征は歩いて先に進んだ。遠くはない。約2キロメートル歩行の後我々はかなり大きなキャンプ[ノンプラドック]に到着した。オランダ人の他にここにはイギリス人、オーストラリア人そしてアメリカ人も居た。我々が後貰った夕食は良かった。

ディッケ

1944年4月7日

[ターマカン] グループ44, 45と46が[日本へ] 出発[した]。

ディッケ

1944年4月8日

[ノンプラドック] 朝[グループ47と48の] バラン[荷物] [の] 点検[があった]。キャンプ1はターマカンと称する。1時に我々はその駅(4キロメートル[歩行])へ向かって出発し、[この遠征は] かなり強行[だった]。部分的に[僕は] 裸足とテクレックス[木製サンダル]で歩いた。その後は線路[ノンプラドック]から約2キロメートルのキャンプへ向かって40キロメートルをオープン貨物列車で[行った]。ここには600から700人が居る。

ディッケ

1944年4月11日

[ノンプラドック] グループ43, 44と45が今日の午後出発[した]。[...] グループ50と51が到着[した]。

オットウン

1944年4月11日

[ノンプラドック] 昨日と同様、一日中出発の準備完了維持[していた]。やっと夜8時前になって隊列行進の合図が来た。鉄道操車場には列車が既に用意され止まっていた。我々34名がかなり小さな車両に押し込まれた。そうしてからがひたすら列車の出発する時を待つわけだ。列車が静止している間、幸い扉は片方に開けっ放しておけた。



オットウン

1944年4月12日

[バンコク] 昨夜我々は貨物列車から降ろされ、外の線路の横に身体を伸ばして寝る事が許された、其れが出来たならの話だが。貨物列車の外に留まる事はなかなか気持ちが良かった、というのは足は伸ばせるし、それはその貨物列車では不可能だった。其処で我々は余りにも大勢が重なる様に詰められて坐っていたのだ。充分眠った、というわけではない。余りにざわついていたし硬い砂に横になるのはそんなに気持ちの良いものではなかった。午前中に我々全員は再び貨物列車に乗せられ、8時前やっと列車は出発した。

午後2時前列車は大きな操車場、バンコクにある駅舎の最後、の端に停止した。幸い扉を再び開ける事が許され、我々は交代で‘ベンジョ - へ’ (衛生上の必要な用足しに) 行く為、歩哨から少々車両を出る事を許された。我々は再び大都市を見た時目を見張った。列車が入って来て客車の窓の後ろに数人のヨーロッパ人の旅行者達が坐っているのを見た。彼等は我々を多少変な目で見て、と我々は思った。一体何処のヨーロッパ人なのだろう、そうして自由に旅が出来たり周囲を歩き回れるとは？ ドイツ人？ スカンジナビア人？ 或いはスイス人？

ディッケ

1944年4月14日

[バンコク] 我々は今夜出発する。確かに7時半駅に向かって出発した、其処では貨物列車に積み込まれ、車両一台につき35名。長時間じっとしていた後、4月14日、金 [曜日] 約8 [時] バンコクに到着した。B [バンコク] の前に [僕は] ナシゴレン (香辛料の利いた焼き飯) を、午後更にもう一回駅で食べた。8時 [夜] [我々は] Fr [フランス] の列車で出発した、車両一台につき70名。

オットウン

1944年4月14日

[プノンペン (インドシナ)] [我々が] 昨日一日デコボコ列車に坐っていた退屈な旅の後、今朝早く6時頃、列車はかなり大きな駅に止まった。標識に読んだ名前は：プノンペン。プノンペンはフランスの植民地、インドシナにあるカンボジア州の首都だ。インドシナのフランスの統治陣は所謂ヴィシー - 政権の部下で、ドイツの占領区域のフランスではない。フランス軍は日本軍に、彼等の南へ向かう隊列行進の際多くの譲歩をした。それで日本軍はサイゴンの港とインドシ

ナの飛行場を使用する許可を得た。我々が降車した後、大きな建物へ連れて行かれた。ここで朝食を貰った。其れから後我々はポノンペンを通過して幅広の川、メコン（川）へ向かって行進した。

埠頭へ歩行中我々は初めて又数人のヨーロッパ女性を見た。フランス女性達は我々を不思議そうに見ていた。かなり威嚇的な我々の監視人達は、彼女等と又我々がお互い数語の言葉を交わすことを拒んだ、それは我々の非常にしたかった事だが。埠頭にはすでに河川蒸気船が停泊していて [だから] 我々は直ちに乗船出来た。約11時 [に] 長帆船は出発した。船上での食事は悪くなかった。やれやれ、午後になって又熱の到来だ。

オットウン

1944年4月15日

[サイゴン（インドシナ）] 午後4時頃船はサイゴンの埠頭に停泊した。上陸後 [我々がしなければならなかった] 整列、というのは日本軍が誰も内緒で後に残っていないかどうかを知りたがったからだ。ここから我々は港湾陣地まで歩いた。今回はそんなに遠く歩く必要が無かったのは、我等の新しいキャンプが港湾入り口に沿った道路の向こう側にあったからだ。我々は最初の者ではなく、すでに我々の数日前に出発して行ったグループが居た。オランダ人以外にここにはイギリス人と30名のアメリカ人も居た。オランダ人グループが現在は一番大きくて、300名余り。真実電気の明かりがあった。これを我々は何年も見た事が無かった。そう、そう、徐々にだが確実に我々は又文明に向かって戻りつつある。我々は日本の寝莫座と蚊帳を貰った。このキャンプは前警察兵舎であった。竹製建造物は無いが、頑丈な木製の建物と本当のトイレ。この人員超過のキャンプには余りにも少ない。又キャンプの外部の騒音、例えば車の警笛、自転車のベルの音、[そして] 港の騒音、未だ何だか非現実的だ。

ディッケ

1944年4月15日

[インドシナ] [朝我々は] 未だにタイ [に居た]。午後になってインドシナ [に] 到着。

リブンス

1944年4月16日

[プノンペン（インドシナ）]（747日目）サイゴン、フランス政権下インドシナ!! 我々は再び文明の世界に居る。夜11日 [4月] 我々は駅へ向かって出発したが、8時にやっとバンコ

クへ向かって出発した、というのは我々は午後其処から出発したかなり新しい鉄道操車場に留まっていた。2日に渡るドライブの後、夜中我々はメコン川に面したプノンペン（フランス政権下インドシナ）、軍人や市民がかなり行動の自由〔を持つ〕な心地良いフランスの場所、に辿り着いた。

ディッケ

1944年4月17日

〔サイゴン（インドシナ）〕 午後の間に我々はサイゴンに着いた。我等のキャンプは港湾に直結している。〔グループ〕35からの他のグループもここに居る。ここには約400名の英〔国人〕が既に2年も居る。

ウェストホフ

1944年5月8日

〔ナコムパトン〕 勿論又もやかなりの時間待たされた後、終に我々は〔レットポウから〕 出発し、150名は担架<sup>104</sup>の約350人が列車で出かけた。日本軍が我々に看護人或いは医者くれなかつたので、多数の重病赤痢患者達にとってはかなり深刻な試みであった。朝11時我々はキャンプを出、大多数の友人達を後にした。〔…〕我々は線路へ連れて行かれたが、列車は見当たらず〔だった〕。そしてなんと焼けつく太陽の中で待つ。やっと我々は仮に他のキャンプに行き、其処で僕は相当多くの知り合いと出会い彼等と楽しい午後を過ごした。4時激しい雨が降り始まりその時になって我々は列車へ行かなければならなかつた。骨までびしょぬれになった多数の担架患者達にとってこれが持ちこんだ災難は分るだろう。私はまだ自分で絞る事が出来た。こんな状態で我々は列車に詰め込まれ、全て貨物列車で、車両一台につき35人。だから全てぎっちり重なった、何故なら我々の数少ないバラン〔手荷物〕も勿論一緒だったからだ。

長いこと躊躇った後で我々は漸く出発し、1キロメートル走行して待避線に降ろされそしてそれから先は夜12時まで見捨てられた。ずぶ濡れで重病のこれらの患者達を汚れたままで放置しておくなんて何という恥、というのは其処には多少なりとも傍について彼等を助けるすべが無かつた。12時に我等は実際〔先に〕 出て夜中4時まで走行し続け、バンコク - シンガポール線と我々（バンコク - ランゲーン）のものが接続した操車場で再び静止した。其処では又もや5時までじっと居て再び続行。5時半に目的地〔ナコムパトン〕である我々の新しいキャンプに

---

<sup>104</sup> これらの男性達はいわゆる救急グループ、重病患者達、に属していた。項目‘収容所組織 / ヨーロッパ人及び日本人収容所スタッフ’ ウェストホフ1944年5月8日の日記断片参照。

着いた。[…] 相当歩かされここのキャンプに到着した。これは実に大きなキャンプで、未だ終了せず10,000人用に用意されている。兵舎連は我々が今まで見てきたより良い：もう少しゆとりをもって横たわり、便所はより良くそして台所は‘模範型’だから我々は多くの点[で]かなり向上した。[…] 只又してもこれが正真正銘の日本軍だ：水が無い、だから入浴は出来ないし飲み水は相当乏しい。

ボム

1944年5月8日

[ターマカン] この戦争で既に又何週間もが過ぎて行った。又[カンチャナブリーから] 僕達は他のキャンプ、ターマカンと称する、僕等の基もとのキャンプから数キロメートル、に到着した。この新しいキャンプには、主にオーストラリア人(約2300名)と1000名のオランダ人が住んでいて、僕達は高射砲が備え付けられた鉄橋の近くに居る。防空壕は殆ど存在しない。僕らの前キャンプ[カンチャナブリー]は相当に分割された：一団が日本行き、2個のグループはビルマに戻り(!)<sup>105</sup> [そして] 病人達は看護キャンプ、ナコムパトンへ行った。

ウェストホフ

[日付は多分1944年7月15日以降]

[ナコムパトン] ここのこのキャンプはとてつもなく大きい。現在既に8000人余りがここに居て、全員病氣。

ボム

1944年11月15日

[ターマカン] 大雑把に見てここでは余り変化は無くそして我々の生活はだらだら続く。しかし多数の病人達(マラリア)も含む大勢がジャングルへ送り返されて行った。

---

<sup>105</sup> このグループは鉄道路線での修理労働の実施用に送り返された。

ボム

1945年1月1日

[カンチャナブリー] 僕が引っ越して8日以来、全ての将校達が軍隊から連れ去られ、現在（約3000 [人]）カンチャナブリーにある個別のキャンプに居る。小さな、余りに小さなキャンプ、満員の、互いに連なったあばら小屋そして防空壕用には不十分な場所。

ボム

1945年8月9日

[カンチャナブリー] 明日僕は新しいキャンプに引っ越す、約7日間の旅でバンコクから[東方] 約150キロメートルの場所へ。1600人が既に出て行った。

ボム

1945年8月17日

[バンコクの東方150キロメートル] 昨日僕達は新しいキャンプへ到着した、首に僕らの装備を括って24時間以内に47キロメートルの歩行、という殺人的な遠征の後。続行中の旅の夜一晩、僕は枕木の上で線路の上に頭を置き素晴らしくぐっすり寝た。それももう今では昔の話だ。僕は生きている、健康でそして安全な側に居たわけだ<sup>106</sup>。

## タイから鉄道路線に沿って働く戦争補慮達のグループ

ルーゲ

1943年1月16日

[チャンギ（シンガポール）からバンポンへ] 今日我々は出発した [チャンギから] ; D-パーティ（300人）<sup>107</sup>の残留者。 [午後] 5時半 [に] シンガポール [から] （列車で） 出発。合計625人、325人はS [南方] A [地方の] キャンプから。 一車両につき28人。ジョコールバルには [夜] 6時半到着。

---

<sup>106</sup> この日記執筆者はビルマでの状況がタイより比較的良かったに違いないと明らかに仮定していた。

<sup>107</sup> 1943年1月14日にD-パーティの624名からなる最初の一部が既に出発した。（NIOD、蘭領東インド日記収集、J. D. A. ルーゲの日記）。

ルーゲ

1943年1月20日

[ターサオ] [朝] 7時 [に] バンポンで降りた。マラッカはかなり干からびている。タイにはもっと多くの耕作地と沢山の沼地 [がある]。引張る仕事 [木等] 用の象 [が居る]。この領域は岩っぽく険しい。我々の朝食にはバナナの房 [を貰った]、これは同時に昼食でもあった。7時15分 [に] 出発。全員車に [積み込まれた]。8時15分、カンチャナブリー、P-キャンプ<sup>108</sup> [で] 30分の休憩 [があった]。[夜] 6時 [に] 英 [国の] キャンプ、ターサオに到着。野外で寝た。満月、物凄い寒さ [だった]。我々は丘陵地帯を休むことなく走行した。

ルーゲ

1943年1月21日

[キンサヨック] [朝] 10時 [に] 出発。我々は荒野を横切って走行する。埃は地面にたっぷり30センチは積もっている。道はとても悪く、雨季には通れない。P.'s (日本軍) は運転がうまい。[午後] 12時半我々の新しいキャンプ、キンサヨックに到着。自ら [我々がしなければならぬのは] 兵舎を建てる。2日間 [我々は] 野外で寝た。日中は酷い暑さ [であり]、夜中は物凄く寒い。[我々は] クワンド・カリ [川] で入浴をする。

ペルクイン

1943年1月28日

[キンサヨック] 硬直して、寒くそして惨めな気分で目が覚めた。最悪の疲労感は無くなった。僕は昨夜一体何処から僕の記事に更に何かを報告するだけの力をかき集めたのだろうか、と自問する。インクはもう無いし [僕は] 又鉛筆で書いている。この旅について記事を作成するのに目下充分時間がある。既に述べた様に、僕達はトラックでチャンギからシンガポールの鉄道駅へ向かって出発した。僕等の旅は土曜日午後1時に始まりそして水曜日朝6時に終わった；つまり89時間！くたくたに疲れた。この下車後即僕達各々にバナナの房が手渡された。僕達は更に未だ先を旅しなければならず、このバナナは一日分の割り当てになるだろうということが分った。この国の兵隊達は滑稽な印象を与える。彼等の派手な制服がホテルのボーイみたいだ。トラックが乗りつけてきて、一台につき約28人が手荷物と一緒に積み込まれた。間もなく僕達は旅を続行した。爽やかな風は僕らを心地良くし僕も多少は回復した。最初の40～5

---

<sup>108</sup> ルーゲは彼の日記の中において 'p' 或いは 'p.' s' で日本軍を意味している。

0キロメートルは良く整備された中央道路を行った。それ以降このキャラバンはジャングルを横切り硬くて、埃っぽい道を走行した。如何に埃っぽいかは言葉で描写できない。僕達のワゴンからは後にも先にも他の車を見る事は無かった。埃をなるべく肺に受けけない様にハンカチを口と鼻に当てているので僕達は息が詰まりそうだ。途中オーストラリア人達が住んでいる数個のキャンプを見た。そうさ、僕は未だしっかり密封された埃用眼鏡を所持していたので、多少は見る事が出来たんだ。この道を僕は是非もう一度走って見たい、でもその時は贅沢な車でそしてミ-ンチェ<sup>109</sup>を横に。それから一切他の車は前に走らないことだ。道は森を横断しそして両側に巨大な岩石と山々が背景に見えて、其れが素晴らしい効果を与えている。こんなに埃っぽかったのが残念だ、さもなければ僕達はもっと楽しむ事が出来たのに。やっと僕達は夜近く英国の中継地キャンプ [ターサオ] に到着し食事を得た。入浴か着替えをすることは許されずそして兵舎の中には場所が無い、だから僕達は野外で寝た。ここタイの夜は氷の様に冷たく僕達は凍えながら起きた。貧粗な食事の後再びトラックに乗りこんで旅は続行した。道は少し増しで埃もより少なかった。自分の車でなら独特な魅力を発しているこの自然をどんなに楽しめただろう。

午後近く僕達は差し当たっての最終目的地に着いた。このキャンプは森の中の何処かで、木が丸裸に伐採された場所に在る。兵舎は竹で建てられていてアタップ (乾燥させた椰子の葉) の古いぼれた屋根は日射を避けるのみに用を為し、雨にはもたない。だからまあ雨が降らないことを祈るとしよう。僕達は地べたで、或いは埃の層の中で寝る、と言った方が良い。草はここには生えず至る所埃 [が積もっている]。食飲時ですら埃の味がする。ま、気にしないさ、時には雨が降るだろう。僕らのジャングルキャンプの後方には入浴したり泳ぐことのできる大きな川が流れている。この川の河岸上に水晶のごとく澄んだ飲料水の源泉が有る。この川に面して置かれたこのキャンプの補給は発動プラウ船によって為される。色々なプラウ船が僕らのキャンプの近くに停泊していて船員はタイ人達で構成されている。水は気持ちの良い冷たさで僕は1時間泳いだり入浴したりした。やれやれ、何と又新鮮で快活な気分だ。チラチャップ出の‘じいさん’が昨日よりキャンプ指揮官になった<sup>110</sup>。ここに留まる事は無く、[僕達は] 200~300人の一団で先を旅しそしてビルマとタイの国境に在る三仏塔峠まで鉄道を敷設する為に小さなキャンプに収容されるのだ。一体誰が嘗て思っただろう、僕達が今タイで戦争捕虜としてジャングルの中で橋や鉄道の敷設で働かされることを？僕の頭はぐるぐる回っておかしくなりそうだ、こんなことって在るのだろうか！お休み、愛する君。これが惨めな4日間についての報告でありました。

---

<sup>109</sup> 彼の婚約者、ヘルミン ファン・ベンテム

<sup>110</sup> 年配の日本兵、ショウノ・エイジの渾名、そして彼の到来によって彼の前任者であるタキタ (‘アルヴァ’) の恐怖支配が終わりを告げた。ペルクインは彼のチラチャップ拘留時にこの‘じいさん’の人間的な振る舞いと既に出会っていた。其れは例えば海に面したスポーツ場所の敷設が許可され、海で泳げたり、労働賃金が配分されそして食糧の配給量が増やされたりした。Rob NieuwenhuysもEen beetje oorlog (アムステルダム 1979、86-87) の中でショウノについては肯定的であった。(先はN I O Dの、蘭領東インド日記収集、J. ペルクインの日記とL. de Jong, Het koninkrijk der Nederlanden in de Tweede Wereldoorlog; I I b、第2半編、(ライデン 1985) 651) 参照。

ペルクイン

1943年2月2日

[リンティン] 月曜日2月1日僕達は9時半に18キロメートル離れた先に在るキャンプへ向かって歩いた。それは受難の道で疲れ切った何人かの連中が互いに倒れて行くのを見るのは惨めな光景だった。僕にとっても傷ついた足でそれは地獄だった。最後の数キロ僕は裸足で日射で焼けた道を踏破した為、足の裏が放射される熱で焦げ付いてしまった。僕達がリンティンという名の僕等のキャンプに入った時、僕は先頭集団の中にいた。このキャンプもメコン川に面していた。湧き水は無いのでもっぱら沸騰させた水が飲める。リンティンも兵舎の中は床に座ったり横になったり出来る設備が作られていなかった。又しても僕達は味気ない地面に寝る。

ルーゲ

1943年3月7日

[リンティン] 我々は200名で目的地、ヒンダートへ出発する。全部で24名のEng [英国人] と14名のHol [オランダ人] が死亡 [した]。 [夜] 6時 [に] リンティン [へ] 到着。多くの知り合いに [僕は] 出会った。 [ここは] 忌々しいキャンプ; 1500人、その中で1100人が病人。1ヶ月以内に54名が死亡 [した]。現在は日に約5人の死亡者。 [僕は] [Th. F. G. R.] コウルマンズ軍曹と話した。彼は危篤だ。

ルーゲ

1943年3月8日

[ヒンダオ] 10時 [に] 出発。K [コウルマンズ] は死亡 [した]。我々は険しい山岳地帯に沿って歩く。 […] [夜] 7時半ヒンダートに到着。テントのホング [兵舎]。僕の仲間は [\*…\*] カウト。このキャンプ [に] は現在合計800人だ。

ペルクイン

1943年3月12日

[リンティン] 昨夜はじめてにわか雨が降った。懸念した様にアタップ [屋根を葺く椰子の葉] の老いぼれ屋根はこのスコールに耐えきれず、その結果僕達はあつという間にずぶ濡れになってしまった。この部屋では全く眠れず [僕達は] 夜中じゅう互いに背を向けて座りうとうとし



ていた。兵舎連は水浸しだ。同じくがたがたテントの中で裸の地面に寝ているこの‘病院’内の病人達は水浸しで横たわっていた事だろう。日本軍はどの協定にも反している<sup>111</sup>。戦争捕虜達に取り扱われている様子は甚だしいスキャンダルだ。頭の上に水の漏らない屋根すら僕等には配分されない。

ペルクイン

1943年4月1日

[リンティン] 僕達の兵舎の屋根が増しなアタップ [屋根を葺く椰子の葉] で覆われたので、僕達は殆ど濡れずに横たわる。とにかく僕達は寝る事が出来るしそれだけでも大したことだ。

ペルクイン

1943年4月5日

[リンティン] 400人が他のキャンプへ出発した。僕は自分の身体状況により一緒に行く事は不可能だった。[僕は] 上げっぽくそしてきつい腹の刺し込みがある。

ドゥ フラウター

1943年4月13日

[チャンギ (シンガポール)] 今日の午後2時に出発の一般訓練 (25人のグループが車へ、27人が貨物列車に)。我々は自分達のグループと一緒に居られる事と列車内に出来得る限り多くのトックス [純血のオランダ人達] が一緒である事を祈る。車の配分では我々は5人 (ヒューブ [フェルワイエン]、ニック [ワインハーツ]、クーン [ファン・ザイル]、[F. P.] ファン・ロム中尉と僕) が一緒に居られた。今日の午後 [僕は] 未だ明日の旅用 (明朝の為にイカンテリ [魚の干物]、カチャンゴレン [炒ったピーナッツ]、米と2個のカチャン [豆] 入りおむすびそれにケデレ [大豆]) に食糧供給の発給で炊事を手伝った。又ここでは最後の酵母菌を提供した。酵母菌源の瓶<sup>112</sup>を [僕は] ベッペケ [彼の妻] の赤い手カバンに詰めた；これで充分安全だと思う。

---

<sup>111</sup> ペルクインはここでジュネーブの協定を意味している。

<sup>112</sup> ドゥ フラウターは酵母菌がビタミンB5を豊富に含んでいるので、この用意に従事していた。覚書51も参照。

[この] 雰囲気は慌ただしくそして興奮しているが、陽気 [だ]。4日から6日間の旅になり得る見通しにもかかわらず、27人は家畜用運搬トラックで未知の目的地へ。しかしこれは又ちょっと今までと様子を異にしているので簡単に応じられた。我々は皆何処が自分達の目的地となるのか、そして其処では我等のマラング・キャンプ<sup>113</sup>の知り合い達と面会するだろうか、とても興味津々だ。

グルドヴァッチ

1943年4月14日

[チャンギ (シンガポール)] その噂はやはり本当だ。今夜我々は、合計2600名のオランダ人、400名のオーストラリア人、そして7000名のイギリス人、の内の第3グループ、600人と共に出発した。昨夜 [我々は] 送別会を行なった！朝食粥を [夜] 11時に食べ、12時15分 [に] 整列しそして [続いて] チャンギ村へ向かって行進。

ドゥ フラウター

1943年4月14日

[チャンギ (シンガポール) からバンポンへ] 昨夜2時 [に] 起床ラッパ (其れ以前にも勿論殆ど寝ていなかった) ; 3時15分前整列 ; 3時チャンギ村へ出発、4時 [に] 車で (一台につき24 [名]) シンガポールへ出発。 [我々は] 濡れる直前に着いた ; 一貨物車両につき27人で ; 8時 [に] 出発。走行中に話す事は耳を劈くような騒音の為に不可能 [だ] ; 殆ど動けない ; [我々は] 横たわれない ; 1つの戸が開いている ; 雨天 ; 駅で [我々は] 時々かなり長い間休む。便所無し。外観 : ゴムの木庭園 (自国と中国の [所有物] に加えて ? 数個の大きな企業の栽培場)、椰子油、デリス<sup>114</sup>、パイナップル、ゴムの木 (パガース連結 [柵の中] の1~2年の植林!)。12時 [に] 我々はクルアンに居た、其処に1時間止まり、車両から出て何か (バナナ等) を買う事が許された。其れから [我々は] 再び先へ [行った]。今日の午後はこの全鉄製車両が焼け付く様に暑かった ; 我々は死ぬほど汗を掻いた ! 幸い5時に雷雨がやって来た。7時に我々はゲマスに居た、そして其処で我々は又休息時間があって、駅のプラットホームで多少の肉入りナシゴレンを手に入れる事が許された。快適な夜。物凄くベッペケとかわいい宝 [彼の子

---

<sup>113</sup> ドゥ フラウターは最初マランのランパル領域にある第10補給廠大隊キャンプに強制収容されており、1月15日にバタヴィアに、其れからチャンギ (シンガポール) へと移された。其処から要するに今タイ方面に出発した。前書きビルマ - タイ、24-27参照。

<sup>114</sup> デリスの根から殺虫剤が作られる。

供達]の事を思い出していた。目下我々は再び先を走行している。今夜もまた良く寝られはしないだろう。

グルドヴァッチ

1943年4月15日

[チャンギ(シンガポール)からバンボンへ]我々は出発した。どしゃ降りの中をチャンギ村へ向かって行進。[朝]4時半にトラックでこのキャンプからシンガポール中央駅へ。家畜運搬車[列車]で一車両につき27人。其れは実に小さな車両だ。我々は膝を上に入れてぴったり押しつけながら座っている。殆ど寝る事は出来ない。(如何に疲れているかによる。)[僕は]足が痙攣し空腹だ。所々で喧嘩と殴り合いが発生した。誰もが不機嫌だ。我々はバナナを買おうと試みる。勿論許されない。危険:折檻。[購入は]何とか上手く行く。結果:一般に下痢。爽快だよ全く、27人と共に家畜運搬車の中で…

ドゥ フラウター

1943年4月15日

[クアラルンプールからアロースター(マレ-シア)へ]今夜は未だなんとか寝た。4時15分前に我々はクアラルンプールに到着し、其処では5時15分まで留まって朝食(飯にサユールス-プ[野菜スープ])を採った;それから[我等は]再び先へ[行った]。再び何処もゴムの木庭園;[この]景色は[ここでは]もっと山が多い。それぞれの小さな駅では時々外出[が我々は許された]。タンジュンマリンにてバナナを50セントで買った;僕の資本は今で3ドル残るのみだ。午後3時半:イポー(錫産業[の]中心)に到着し其処で再び食事をした(飯とサユールに塩辛い魚);今夜用に飯食を列車に持ちこんだ。とても暑くて我々はくたびれている、今晚はプラットフォームで寝て今夜旅を続ける必要が無い事を祈っている。

イポーを約午後5時15分過ぎに出発。昨夜はやはり旅を続けた;2時プライで起され、其処で飯と野菜の食事を提供された。其れから再び先へそして[我々は]眠る様努めた。今朝8時に我々はアロースターで目覚め、其処で我等は10セントでコーヒーと10セントで各人2個の卵を買った。

トウ フラウター

1943年4月16日

[パダンベサルからバンポンへ] 10時半に我々はタイの国境に在るパダンベサルに着いた(その手前に特異な石灰岩累層)。3時にパダンベサルを出発。酵母菌に[僕は]砂糖を与えた;又強く発酵。かなり暑いドライブの後、5時にシンゴラ(?)に到着。幸い途中でわか雨が降って来た。到着後[我々は]直ちに食べ物を取りに行く事が出来た;最後の食事が昨夜2時だったので、我々は空腹で死にそうだった。我々は明朝分まで3食(飯、サユール[野菜スープ]そして塩辛い魚)貰った。我々は今晚と未だもう一回暗闇の中で食べた。昨夜[僕は]かなり良く寝た。昨夜4時15分前に[我々は]突然小さな駅で点呼に出なければならなかった。それぞれの駅の名前はタイ語のみで表示されていたので、我々はそれらを読む事が出来ない。

ペルクイン

1943年4月17日

[チュンカイ] 今僕は少々元気になったので、又ちょっと報告出来る。12日[4月]僕達はトラックでリンティンからキンサヨックへ向かって走行した。雨の為道はそれ以上走行できず、[故に]僕達は4月14日までこのキャンプに留まる事を余儀なくされた。揺れるトラックでのこのドライブは僕にとって地獄だった。座っているのがあまりに痛いので、中腰で立ちながら、半分しゃがむという拷問を受けた。午後遅く僕達はキャンプ1[ターマカン]に到着し、其処で又一夜を過ごした。僕達は大変暖かく迎えられ、紳士的な男性達から美味しい菓子を貰った。このキャンプには全く空腹は無い。ここの環境と雰囲気は最高だ。今晚僕達は美味しく食事をし満足して寝床に行った。

列車はキャンプ1まで既に走行している。15日[4月]の木曜日僕達はバンポンから約5キロメートル離れた重要な広い道に在る、所謂休養キャンプ[チュンカイ]、へ向かって約6キロメートルの短い運行にこの列車へ乗り込んだ。このキャンプは溢れかえって宿泊所は恐ろしく粗末だ。

トウ フラウター

1943年4月18日

[タムアン] 睡眠に関して実に不愉快な夜間の後、我々は7時半にタイの何処かの小さな駅で目覚めた。点呼の後我々に通知があり、我々は11時に列車を出るから準備完了しておかなければならないとのこと。[我々は]何処へ結局落ちつくのか気になる。バンコクに我々は未だ遥か

達してはいないだろう。10時半に我々はペッチャブリ-に到達した、其処は仏寺と修行院の双方が山頂に建てられていることからある距離からでも既に目立っていた。他には町に沢山の僧侶達 [が居る]。我々はここで乗り換える筈だったが、11時15分には再び先へ走行した。[この] 景色は全域平坦で全て雑木林 (ちょっとオランダの牧草地帯風景 [の様だ]) で囲まれた干からびたサワ (水田)。其処に大きな家畜の一群 (現時点では水牛は居ないが、瘤牛とジャワ牛)。色々な大小の場所の傍を通る。

12時半に [我々は] 我々にとっては再来の大きめの町に、再び静止 [した]。我々の耳は騒音で耳鳴りしている; 背中や首が痛い。我々の尻は赤く腫れ上がり、完全に硬直 [した]。今日は未だ何も食べていなかった。[我々は] とても空腹だ。この町は再び前 (山寺等) のを思わせる。後でここはバンポンであることが分かり、其処で我々は下車して重い荷物で20分歩行後日本の野営地に到着した (途中で数人が気を失う; 我々は未だ何も食べていなかった)。到着の登録後、食事 (良好)、分割そして通知、我々は夜中12時に最初の25キロメートルの夜間行進を始める、と。我々はこの基地キャンプに到達するのに実際4夜間行進しなければならない (80キロメートル余り!)。もう一回食事をし朝食用に一食分貰ってから12時に整列することになっている。もはや寝られなかった。思い物を担ぐ必要の無いように、直接必要で無い物は置き去りしなければならない (後送用に纏めて)。翌朝、強硬な行進 (26キロメートル) の後、我々は8時半に一日留まるだろう、最初の間野営地 (タムアン) に到達する。

ドゥ フラウター

1943年4月19日

[タムアン] 僕の足の指は今日の午後医者からの報告で再び軟膏で治療、包帯<sup>115</sup> [された]。今夜はどうなるか気になる。われわれは今日充分過ぎる程バナナを食べた。今晚は食事として飯と美味しいサユール [野菜スープ]; 行進用には飯と卵半分を貰った。我等自身は各自行進用に保存する為アヒルの茹で卵を買った。我々は半分の卵と、其れに多少足して買ったバミ (インドネシア風焼きそば) を今夜食べた。タイでは全て買えてそして安いから助かる。今夜10時半に整列; 11時に [我々は] 行進 [する]。昨日われわれは26キロメートルを踏破し、今夜は多分25 [キロメートル] [だ]。

---

<sup>115</sup>ドゥ フラウターは既に長い間全快しにくい足の指の傷に悩んでいた。(NIOD、蘭領東インドの日記収集H. J. ドゥ フラウターの日記)。

ドゥ フラウター

1943年4月20日

[カンチャナブリー] 我々は強硬な行進の後、キャンプ2、カンチャナブリーに到着した。この間隔は疑う余地無く昨日のより大きかった。我々は夜10時半に出発した。日本軍が既に即遅刻者達を引き連れ戻す事によって、最初この仕事は少々混乱した。これは我等に約1時間の足止めを課した。我々は自己のグループから約24名のヨーロッパ人達で全行程を歩いた。ファンザイルは足に豆が出来た事で随分暫くしてから脱落せざるを得なかった。実に残念、しかし其れしか方法は無かった。後で長時間の休憩中、彼は我々に追いつき、幸い最初から既に背囊を車に乗せることが出来た後、最後はベチャ[自転車タクシー]で我等を通り過ぎた。我々は全行程を全ての荷物をもって歩き、良い編隊にてかなりのテンポで約8時半にゴールに到達した。ここのこのキャンプはかなり粗末だ。我々は野外で寝、雨が降らないことを祈っている。この便所(溝)は酷くここには相当数の蠅がいる(だから赤痢の危険は大きい!)。[…]

我々は今昨日の様に又同じカリ[川](ここから2キロメートル)の傍の、丘陵地帯にいる;このキャンプは戦場に向かう道に沿って在るらしい。<sup>116</sup>今朝まず我等の足の手入れ(僕は数箇所切り傷、僕の足の指は包帯したままに[しておいた])、其れから睡眠、身体を洗いそして食事をした。我々は8人で‘東屋’に寝る。多くの特異な鳥(カケス)、山そして平坦な所に雑木林 - と竹林が多く、鳥と共に風景を形成している。我々は自分達のグループと終に今朝最初にこのキャンプへ到着した!よくやった!我々オランダ人以外にここには更に若干数のイギリス人も居る。彼等はその時車でここにやって来た;[彼等は]我々が歩かされそして其れが出来た事を最大限に驚いていた。我々はこの行進をその間次第にスポーツ的な業績として、そして見栄をはって名誉事項と考察した。僕は全ての行進が無事満了する事を祈る。夜間は良かった、満月、道は良好。休憩後最初はいつも又実に痛い、屈強の5分後は痛みが解消した。僕がこの行進中物凄くベツペケとかわいい子供達のことを考えていた事は実際言う必要は無い。彼女達がゆっくり横になって寝ている事を祈っている。しかし彼女達の父親がタイで戦争捕虜として放浪しているのを彼女達が知らない事は良い。

今我々は1週間以来今夜初めて又ゆっくり寝られる、雨が降らなければの話だが。タイ人達は我等にはとても親しみ深い感じがする;確かに心地良い気分。だけれども彼等はなかなか盗癖があり、特にここでは我々は自分達のバラン[手荷物]を良く見張っていないといけない。ジェンベルのエイヴェルスに[僕は]今朝再び又ここで出会った。水の設備は悪く[そして我々は]入浴 - と飲料水に相当苦勞した!この歩行の後[我々は]とても喉が乾くので、これは凄く困った。昨夜我々は行進中時々少々白砂糖(酵母菌からの!)を元氣付けとして使用した。賄い所から我々は半分の卵のみを貰って行った。

---

<sup>116</sup> 実際には戦場は北 - ビルマに在った。

グルドヴァッチ

1943年4月20日

[バンポン] 今朝8時頃に[我々は]バンポンへ到着した。僕は今日自分の結婚記念日を祝う。今回は何処で？我々は上に（ビルマ方面）向かって歩く！今夜この祝宴（歩行）が始まる。既に数人の病人達、とりわけ[K. L.] ゴールドバッハ医師、が後に残る。更にそれまでもとは。

ドゥ フラウター

1943年4月21日

[カンチャナブリー] 我々の足は未だ触れるとかなり痛い、特に生々しい擦り傷が。[我々は]今夜[この行進]に気乗りはしないが、やり遂げることを願うばかりだ。今日の午後キャンプ内でタイ人の泥棒を捕まえた（プリンスとボウハツが行動に！）。今夜10時に[我々は]全持品を携帯して整列しなければならなかった。其れから後[我々は]夕飯を食べた（味は良く脂のつた）、飯に干物の魚を翌朝用に受け取り夜中の12時に[我々は]隊列を組んで出発した。

グルドヴァッチ

1943年4月21日

[タムアン]我々は既に使用中の鉄道路線に沿って歩く。何故我々が歩かなければならないのか、は誰にもはっきりしない。我等の靴は悪く殆ど誰も更に靴下など持ってはいない。結果：既に1夜の歩行で傷ついた足。僕の足があまりに腫れてしまったので、僕は自分の靴すら履く事が出来ない。豆と痛みだ。最初の夜間行進は25キロメートル余り先のタムアンへ向かった。自分のバラン[荷物]を背負って何が楽しいものか。再三誰かが遅れて行く。後ろには数人の日本軍が歩いている。さっさとしない者は自分の荷物を脇に投げ捨てて歩き続けなければならない。其れは銃の台尻で理解させられる。我々は何処かメナム-クウェーノイ川(?)<sup>117</sup>の岸辺で休憩する。最後の男は午後1時以降になってやっと中に着く。日陰は殆ど無く、宿泊設備は全く無い。我々は焼けつく日の下に横たわる。

---

<sup>117</sup> この言葉‘メナム’はタイ語で‘川’と言う意味である。

ドゥ フラウター

1943年4月22日

[バンカオ] 約23キロメートルの夜間行進は我等全員を相当困らせてしまった；我々は大きな舗装された道を離れ先は一夜中未開の希薄な森林を通過して、小さなさらさらの砂 - と砂利っぽい道を歩いた。この最後は特に以前に傷ついた足の為はかなり痛かった。我々は全て森の中に在って約3メートル高さの柵に囲まれた数個の村落を通過した。各村には奇麗な家畜の囲いがあった。途中、長時間の休憩中我々は再び新鮮なお茶を貰い、我々の2個の卵（アヒル [の卵]）を食べた。その他には時々少々のジェルクニピス [ライム] の絞り汁を使ったことによって、かなり清々しくなった。この遠征の始めの頃は約35羽の大きな猛禽が我等の上を飛んでいたけれども、夜中じゅう我々は森の中で鳴く梟と郭公鳥の声を聞いた。太陽が昇ると共に森はその殆どが僕には馴染みの無い鳥類の声で満ちていた。

7時半に我々は在る場所に到達し、其処で露で濡れている大きな草地に連れて来られた。ここが目的地であろうと考えながら、我々は自分達のティカール [睡眠用マット] を広げ即寝入った、[それから] 9時に、我々が更に約3キロメートル先に行かなければならない事を聞く為再び起きる。

10時近く我々はやっと自分達の目標（キャンプ3 [バンカオ]）に到達し、点呼の後流れの速い、砂利川床のカリ [川] で気持ち良くさっぱりして身体を洗う事が出来た。其れは心地良かったし、疲れと足の状態の障害でびりびりしていた我々の雰囲気はずが良くなっている。泳ぐ前に我々はまず少々の砂糖付きの飯を食べお茶を飲んだ。その後我々は日本軍が我等の為に太陽がさんさんと輝く下に寝床として広げておいたティカール、覆いを準備し、その下で後睡眠をとろうと試みた - 其れはその暑さにもかかわらず成功した。

2時に昼食をとり（飯とサユール [野菜スープ]）6時に夕食 [だった]；[夜] 10時に点呼があった。[...] 今朝（4月22日）全て符合しているかどうかの検査で3回点呼があった；かなりいらついていたファン R. 大尉と相当取り乱していた連中。

グールドヴァッチ

1943年4月22日

[カンチャナブリー] 昨日 [夜] 10時に又出る。2回目の夜間行進が最初より少し楽などという事は無かった。僕の足は相当傷ついている。大きな災難だ。デ・[モールマン] は自分が頑丈だからと、他の連中のバラン [荷物]、とりわけ薬品箱を2,50ドルで担いで多少稼ごうと考えた。途中の何処かで彼は参ってしまい、彼自身のバランでさえも後に置いていかなければならなかった。ストゥルーヴェはこの状態を少なくとも彼の野営袋と一緒に持つ事で、多少助けた。[...]



我々は今カンチャナブリーに居て、ここで休日を貰う。明日の夜10時に我々は先を行く。食事は驚くほどに良い。何ヶ月の中で初めて我々はスープの中に肉を見る。休日とはいっても結局その様にはならない。我々は巨大なパガー [囲い] が回りにある日向の草地の野外に寝転がる。便所は勿論無いので、非常なうんざりする蠅の異常発生が起こる。これは汚い騒動だ。もしラッキーならタイ人の所で多少の水が買える。30キロメートルの行進の後はやはり多少なりとも身体を洗うべきだから！

ドゥ フラウター

1943年4月23日

[ターダン] 我々は夜中12時にキャンプ4 [ターダン] へ向かって余り陽気でない気分を出発した。昨夜はこの森の中がとても蒸し暑く湿気ていた。満月ではあったが、かなり曇っていたので時々凄く暗く歩くには又妨害になった。[...] この昨夜の遠征は非常に強行だった；絶えず余りにもぬかるんでいる原生林の道を。其れはしばしば大きな泥地帯でとても歩き辛かった。我々は12時頃に出発し（その時は乾燥していて後も幸い雨は降らなかった。）、今朝9時半にキャンプ4（大きな山と山羊小屋の近く）に居た。すっかり疲れ切ってクタクタだ。直ちに [我々は] 自分達のティカール [寝床用マット] を竹の山の上に広げ、我々が今夜再び先行しなければならないということを聞いた後、即寝入った。皆余りにも疲れているし皆目気乗りがしないので、気分はかなり重かった。

グルドヴァッチ

1943年4月24日

[バンカオ] 昨日 [夜] 11時に [我々は] 出発した。暗くどしゃ降りの中で荷造りと食事をす。昨夜は特に強行だった。[それは] バンカオへ34キロメートル [あった]。強盗を含めて2回襲撃 [タイの民族による] があった。我々は1時から4時 [真夜中] の間に ‘パゴデ・キャンプ’ と我々が呼ぶ所に到達した。（[その到着時間は] 自らの速度に依った。）だから2時間から5時間の歩行だ。又しても僅かの日陰も無い焼けつく太陽の下での草地。

其れは死にそうな暑さで、僕の足はむちゃくちゃだ。最後に残った医者、[J.M.A. ファン] フルーネンダール医師も他に何の手当ても施せなかった。薬品は無く日焼けする一方だ。食べ物は粗末で、又殆ど何も買う物が無い。休息もこの焼け焦げる太陽の下では思う様にならない。僕は自分の左足親指の傷に炎症を起こし、其れが故に [僕の] 鼠蹊部は腫れている。[これが] 歩行を難しくする。

ドゥ フラウター

1943年4月24日

[ターサオ] 今朝9時半に [我々は] キャンプ5 [ターサオ] に到着し、死ぬほど疲れきった。  
[ヒューブ] フェルワイエンは昨夜40分間の第3行程で過労（嘔吐）の明らかな症状が出た。  
第4行程で彼と [P.] ラトゥールが落伍した（彼等は今日の午後3時頃に到着した）。第4行程後我々は1時間休息した；我々は道に横たわるや否やぐっすり寝入った。我々が一番大きな休息所に到達した時、先頭 [グループ] が其処を出発したばかりだった。我々はそれからまずは歩き続けた。其れから後6時半から7時半まで未だ1時間森の中で寝、それから日の光でそのキャンプまで行進し続けた。食事はここでは粗末 [そして] 水が相当欠乏 [している]；我々はカリ水 [川の水] を取りに行きこれを自分で沸かす。ニック [ワインハーツ] は喉の乾きから煮沸していないカリ水を飲んだ。プリンスは行進中下痢に悩んだ。ブラウンと僕は我々の足に凄く苦しんだ。ニックも同様。ファンザイルは最後のキャンプに残留した。日本軍はここでは凄く荒い。多くが引っ叩かれる（竹の棍棒 [で]）。今日の午後カリで快く泳いだので、[僕は] 気持ち良く元気 [になった]。帰宅後まずにわか雨そして [僕の] キャンパスの雨水を飲料水として溜めた。今夜 [僕は] カリ水を更に沸した。僕は目下未だ夜中用に飲み水が有る。凄くベッペケとかわいい子供達の事を思いとても [彼女達の事を] 恋しく思った。まあいいさ、彼女達が全て知っていなくてよかったのだ！今日の午後医者が僕の足を再び治療した。我々はここに留まって今夜一泊する； [我々は] テントの中で寝る。

グルドヴァッチ

1943年4月25日

[ターダン] 昨夜11時 [に] 再び出発した。何度もまたもう先へは行けないと思いだ脇に横たわろうとする。[それは] 竹製の棍棒で‘奇跡’を行った日本軍に何ら影響を与えるものではなかった。2名の場合は棍棒ですらもはや助けにはならない。医者はもはや何も持っていないので無用の長物だ。ファンデルワール、デ [モールマン] と僕は約11時にメナムクエーノイ [川] に面したターダンに着く。余りにも少ない飲料水、食物、混乱、買う物は全く何も無い。約束された休日は実行されない。状況は悪い。目下 [ファン] フルーネンダール医師も参ってしまったので、今後は仕方なく医者無しだ。600人<sup>118</sup>で出発して我々は既に十分200人は失った。

---

<sup>118</sup> グルドヴァッチが属していた600人編成の本来のグループはチャンギから出発した。

グルドヴァッチ

1943年4月26日

[ターサオ] 昨夜 [我々は] 早く出発した、日本時間8時 [に]、だから未だ明るい。これは哀れなよろよろ歩きだ。デ [モールマン]、ファン デル ワールと僕はこれを強行しようと試みた：45分力強くやりぬき、15分休憩する。簡単ではないが、一杯喚いたり罵ったりしながら、我々は今朝8時 [に] やっとターサオに到達した。[...] 天候が余りに悪いので、我々は‘夜間休’を貰った。‘休息’とはここでは相対的な観念だ。我々は16人すら横になれないテントの中に、22人でじっとしていなければならない。我々の横には空っぽのテントが立っている。この忌々しいテントは更にその上漏るとくる。

ドゥ フラウター

1943年4月26日

[タンピ] 2ヶ目の聖霊降臨祭。今朝7時半に我々は新しいキャンプ6、タンピに到着した。我々は昨夜8時15分前に出発し、10時英国のキャンプ [ターサオ] で1時間休憩し其処でお茶を貰った。それから [我々は] 大きな休息所まで先行し、其処では暖かい水を貰いそして僕は自分の飯と塩辛い魚を食べた。我々は其処に2時半から3時半まで留まった。我々は前後に随行員(保護の為)を携え200人のグループで歩いた(ランポッカーズ [盗賊]、野生動物等に備えて)。踏破した合計距離は約24キロメートルを数えた；道には数箇所のでこぼこ傾斜と溪谷があった。赤痢に悩むニック [ワインハーツ] とプリンスにはこれはきつい遠征だった。

僕の足はとても痛く、故にかなり辛かった。今朝8時頃から [午後] 1時まで [我々は] 自分達のティカール [寝床用マット] の上で寝袋の中にてぐっすり寝た。それ以降食事をとり(飯と乾燥野菜に温かい水)再び寝ようと試みた。6時我々は既に行進を始めなければならない。

グルドヴァッチ

1943年4月27日

[タンピ] [夜] 約6時 [に] 我々は常時叩かれながら出発した。スーヴェルクロップは高熱があり500メートル毎に下痢だ。我々が彼をどの位連行できるか気が気でない。ストルーヴェとファン スターヴェレンとで我々は何とかして彼を [一緒に] 引っ張る。後この晩は思いの他悪くは無い。日本軍は幸い余り急ぎ立てなかったし、今朝9時タンピからさほど遠くない小川に面したキャンプに到達した。我々は全て自分達でしなければならなかった、飲料水の調達、食事を

作る、等など。 […] デ [モールマン] の靴は小さくなった。彼は先を裸足で行き僕は彼の靴を貰う。サイズ 4 3/4 4 ? 僕の腫れあがった足には快い。5時に食事の命令そして5時半 [に] 行進。何故彼等は1時間前に其れを言わないのだろうか？

グルドヴァッチ

1943年4月28日

[キンサヨック] 道は災難で、急斜面を登る。[夜] 約9時半に我々は峠に到達した。日本軍は再び余りの高速度で‘急き立て嵐’を吹かせる。11時にジャングルキャンプ1、其処で我々は温かい (!) 飲料水を貰うだろう。我々が立って待つ間、僕吐きそうになって気を失う。泣き面に蜂。少々経って再び立ち上がりスーヴェルクロップのバラン [荷物] を、ほんの1時間ほどだけだけれど、代わって持ってくれる誰かを見つけようとしたが、それも不運…

この遠征は拷問だ：真っ暗、月は出ず。お互い逸れない様に手を前者の野営袋に置いて歩く。それでも連中は部隊から離れるもので、そうすると何処かで歩いている誰かに出会うまで探す。木々、曇り空そしてどしゃ降りの中、其れは余りに暗いので目を瞑って歩くのと同じだ。道は石がごろごろして穴だらけだ。傷ついた足で何度も何処かで蹴躓く。蹴躓き、よるめき、悲嘆の声、呻き声、何度もまた背筋の寒くなるような罵りの爆発。ランプと竹を持っている一番後ろの日本兵が時々畜生の金切り声を上げて最後列のグループの間に割り込み、元気付けに激しくぶん殴る。胸の悪くなるような人間の屑。勿論皆その最後列から出ようと試みるが、最終的には何時も誰かが後になって歩くわけだから、この気の狂った速度の急き立ては用を為した。参ってしまった最初の者は出来得る限り共に引っ張られる。しかし其れは余りに多くなった。彼等が間違え無く道脇に横たわらないと、彼等の上に人が蹴躓いてしまう。助ける事はもはや出来ない。一番後ろの日本兵は彼等を立たせようとする。誰も他の者をもはや気にしなくなる。何時間も長くこれが続く。益々酷くなる一方だ。

4時に我々は休息させてもらおう！立っている所に崩れ落ちる、必要ならば泥の真っ只中でも。我々は未だ5分も横になっていなかった、と思ったら何かが起こる。混乱！叫び声！1頭の、察するに我々に驚かされた象が凄まじい勢いで森から我等の間を抜けて走る。(其れは未だ野生だったのかもしれないが？これはここにはもはや居ないと思われていた。少なくともチェンマイの南には?) 真っ暗闇で逃げるのも簡単ではない。蹴躓く物には、必ず蹴躓く。やっと思れは無事治まる；ただ数個の野営袋が押しつぶされた。驚く事は疲れる。最後の日本兵が又急き立てるので、我々は又完全に参ってしまう。我々は幾分気が狂い始めている。大真面目にこの日本のサディストに襲い掛かろうと思った。

終に6時に [日本時間は4時だ] 我々はキャンプ・キンサヨックに立っている。我々はこのキャンプに明るくなってからやっと思入る事が許され、9時まで門の前で待たされる。忌まわしい速度はどれほど必要で役立ったのであろうか…

グルドヴァッチ

1943年4月30日

[リンティン]夜間行進は終わった様だ。我々は明らかに自分達の目的キャンプに接近している。今朝行進。距離は前回のものよりは短かったが、我々は燃えるような太陽の下で歩いたのでやはり辛い。最後の目的地リンティン！我々がここにあまり長く居着くことにならなければ良いが。リンティン、忌まわしいキャンプ。骸骨の住処だ。[...] 有り難い、我々は明日先行する。

グルドヴァッチ

1943年5月1日

[クウェ] 我々は今クウェに居る。14キロメートルの行進後。これが我々の労働キャンプとなるらしい。[我々は]鉄道路線の向かい側に面している森の一部を一掃しなければならない、[土台まで] 焼き払い、テントをはる。思ったより大変だ。明日我々はウォンピンの車道で働き始める。この意味は：毎日約4、5キロメートル行って夜は又4、5キロメートル歩いて戻って来る。それが無理なら、我々はウォンピンに引っ越すだろう。

ルーゲ

1943年5月5日

[ヒンダト] ポスト、サンデタ、クノープス等の部署からも含めた500人が到着。この一団は既にバンポンから出て3ヶ月間旅をしている。[これは] 陸橋建造者達 [だ]。

ドゥ フラウター

1943年5月9日

[タカヌン] 何日間も[僕は] 自分の日記を欠かさずつける元気が無かった。4月26日から27日の行進後、僕は一日中くたびれていた；夜行進しようという前になって、僕は下痢に悩まされた。夜中じゅう[僕は] 何度も薄い下痢をし、それによって夜間行進は災難だった。翌日（[4月] 28日）クタクタでリンティンに到着。其処で全大隊と共に、しょっちゅう下痢（血と粘液）に悩まされながら一夜を明かした。他の連中が夜出発した時、[僕は] 後数人の腹疫患者達と一緒に残留した。[...] 数日後次ぎのキャンプ、ブランカシに輸送された。[...] 其処で我々は又一晩を過ごし、其れから再び車で次ぎのキャンプ、第2タカヌンに連行された。[...] ニック [ワ

インハーツ]と[\*…\*]そして昔のグループの知り合い達を含めたブルーパーティ<sup>119</sup>の800人が今日ここから15キロメートルの所にある次ぎのキャンプに出発する。僕はここに残る；ファンザイル、カウパーズそして後数人の知り合い達も[残る]、故に僕も未だ少しは話し相手が居る。[…]

このキャンプは石灰岩を通して流れているカリ[川]の又すぐ近くにあつてなかなか奇麗だ。沢山の特異な鳥類(王冠鳩或いはヤツガシラ、巣作り中のドロongo、タゲリ風の類、そしてキツツキ風の鳥、キツツキ、カワセミ)そして猿。我々オランダ人以外にここにはまだ大多数のイギリス人も居る。昨日ここに他のキャンプから少数のオランダ人達が行進して通った。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年5月10日

[チャンギ(シンガポール)からバンポンへ]木曜日[5月]6日。夜中[我々は]トラックで暗いシンガポールを通り駅へ輸送された。其処で鉄製の家畜運搬車両に28人；夜中は寒く、太陽は燃えるように暑い。クアラルンプール、イボン、ペナン[そして]アロースター経由でバンコクの近くまでの旅、そこで我々は月曜日の夜中、朝早く到着した。我々はたくさん買うことが出来た：バナナ、卵、しかし我々は朝から晩まで旅を続けてきたので着替えは出来なかった。バナナの食べ過ぎで多数そして僕も下痢をしたので、僕は2回高速で走っている列車/貨物列車の開放された戸口で[僕の必要性から]しなければならず(一人のオーストラリア人は通り過ぎる間駅長に噴射した)其処で余りに多くの連中にしっかり捕まえられたので、それによりチェボクン[水で尻を洗淨する]が邪魔された。目下僕は多くの正真正銘の赤痢患者達と一緒に病院兵舎に居る。[我々は]身体検査され、バラン[荷物]を検査され、[僕の]ボーイスカウト笛を取り上げられてしまった。[…]

列車の旅は多くの連中によれば船[の旅]よりもっと不快だ。4泊5日そして一瞬たりとも横になれず、自分のバランの上に座っているだけ。貨物列車は凄く揺れ(特に夜中)、許可範囲以上に速く走り、[そして]外側からのみ手の届く手動駐車ブレーキ[がついていた]。[僕は]‘座りっぱなし’で、(座っている坐骨[から]) [僕の]皮が剥ける。我々は長いアタップ屋根[屋根を覆う椰子の葉]と土の床の竹製倉庫に横になる。[それは]混乱。[我々は]バンコクから約30マイル[に居る]。

---

<sup>119</sup> ブルーパーティはここでは多分病院内の区分を意味する。ダウスはこの事について記述している：“赤区分と青区分があり、全列小屋が治療される病院へ配属された。”(ダウズ、267)。

ドゥ フラウター

1943年5月10日

[タカヌン] 今朝約200人が再び出発[した]。翌朝又メツァー中佐の率いる一団の200人余りが行く。昨夜酷い雨が降り、[我々の] テントが完全に床が水つきだったが、[僕は] 乾いた場所で未だ良く眠れた。今朝他のテントに引っ越した。目下フェルワイエン、ラーセンとファン ベルクルと一緒に病院テントに横たわり、彼等と一緒に明日残留する。

フェイケマ

1943年5月11日

[バンポン] 僕の最愛のピッチェ。<sup>120</sup>今週は確かに沢山の事が起こり、我々は再び我等の拘置における新しい局面にやって来た。僕はジャワから未知行きで感じた様なことをここで又感じている。木曜日朝[5月6日] 我々は4時にチャンギからトラックで27人に加えて自分達の全荷物とで出発した。最も不自然な姿勢で到着してから貨物列車に詰められた。幸いそこは奇麗だった。我々は4日間その中で北へ旅をした。車両の面積は約10平方メートル[だ]。朝から晩まで我々は旅を続け、2~3回僕は自分の身体上部をスポンジによって水で湿らせた。

かなり不規則な時間に我々は少しの飯とサユール[野菜スープ]を貰った、[時々] 夜中3時[に]、其れから午後4時[に] 2回分。そうして時々我々は歩く為、ある時は長く、外に出ることが許された。僕はどれを好むべきか分らない：我々がした船旅、其れは蒸し暑い甲板は妥当[で持続できる]、或いは殆ど眠れず身体のあちこちが痛むこれ[列車の旅]か。我々は小さな駅で降りなければならなかった、察するにバンコクから遠くない。そしてそんなわけで僕は今タイに居る！目下悲惨な不快で汚く伝染の山のこのキャンプで、我々は今約6日間又自分達の荷物を背中に担いで歩かなければならない。我々は其処で労働しなければならいだろう：木の伐採と鉄道敷設。

ドゥ フラウター

1943年5月14日

[タカヌン] 今日の午後再び[P. C.] ドゥ フォス大尉のキャンプ(15キロメートル先)から12人の赤痢患者達が車でここへ連れて来られた。彼等の中には酷い様子の[Ch.] ヘム

---

<sup>120</sup> フェイケマは彼の日記を彼の妻ピッチェに当てた手紙形式で書いている、前書きビルマータイ、23参照。

シングが居た。<sup>121</sup>

ドゥ フラウター

1943年5月16日

[タカヌン] 昨日の午後凄い風が吹き [だから] 何時このテントが空に舞い上がるかと我々は恐れた。幸い其れは起こらなかった。竜巻が近くにある竹林に火種を運んで火事が生じる事を予防する為に、昨夜は火を熾す事が許されなかった。実際とても乾燥していて、イギリス人達によると去年は其れが下で大火事が猛威を奮ったそうだ。近々我々は多分雨季を迎えるに違いない。イギリス人達は彼等のテントの中で地面から離れて横になるバレバレ[寝台]を作らねばならない。我々も一緒に始めなければならなかったが、それ用の必要なエネルギーが無い。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年5月16日

[カンチャナブリー] 朝突然29名の患者達が小さなトラックでバンボンから45キロメートルの2番目のキャンプ、カンブリー=カンチャナブリーへ輸送された。このキャンプは何も無い地面に数本の低い刺灌木、燃えるように暑い。太陽が回って(午前-午後)日陰から日向へ来ることから多くの疲れ切って眠っている連中は脱水症状で発見される前に死亡していた。日本軍は水を与えず、[それは] 自分で買わなければならない。車道の向かい側には綺麗な森に村落がある(其処では井戸で身体を洗い中国人の家族からお茶を貰った; 友好的だが、日本軍を恐れている)そして多くの日陰、しかし其処へは行く事が許されない(!)。[僕は] 灌木の横で一夜を過ごした。

フェイケマ

1943年5月18日

[カンチャナブリー] 僕のかわいい、かわいいピッチェ。君が現時点居かに我々が生活しているかを知らない事は何と嬉しいことか。これが何れ又良くなる事を願う事にしよう。僕は今だに未だこの経路に沿った自分達の最終キャンプへの途中で、其処では多少の休憩後寄せ集められて労

---

<sup>121</sup> チャールズ・ヘムシングは2日後死亡し1943年5月17日埋葬された。ドゥ フラウターは葬式に出席した。(N I O D、蘭領東インド日記収集、H. J. ドゥ フラウターの日記)。



働キャンプへ行かされる。最初のキャンプ [バンポン] から我々は一杯の荷物で初めての‘日中キャンプ’ [タムアン] へ歩き其処へ朝約10時に相当多くの落伍者を出して到着した。僕はかなり足に豆が出来ていたが、後は元気だ。我々は其処では木の下で野宿し、マンディエン [水浴びをする] が出来るカリ [川] が近くに在ったのでかなり思ったより良かった。ただ余り良く寝られなかった。

夜10時 [に] 我々はキャンプ2 [カンチャナブリー] へ軽い荷物だけで出発した。重いのは [荷物] トラックで後で送られた。又これは未だ何とか行けて朝9時半近くに我々はここへ着いた。下に潜りこまなければならない数本の小さな灌木と共に、奇麗だが酷く暑い平地で野宿。水はここでは殆ど無い。数個の汚い濁った井戸、しかしカンポリート<sup>122</sup>と一緒に我々はやはり飲んだ。水浴びは簡単ではなく、特に午後は風が吹くと凄くもうもうとした埃 [に我々はうんざりする]。後は燃えるように暑い。[...] 全てがここは汚い。これらのページも残念ながら奇麗に保存する事が出来ない。数個の石油缶に結わえ付けそして目下小さな囲いが出来たテントの下に今横たわって (他の連中と一緒に) 居られる僕は今までの所未だついている。砂の上の埃っぽいティカール [寝床用マット] は我々が寝る床でもある。

グルドヴァッチ

1943年5月20日

[ウォンピン] [我々は] [5月] 6日はやはり [クウェから] ウォンピンへ引越した。勿論所謂‘休日’に。何と有効な事だろう。3回4½キロメートルをあくせく運ぶ。がらくたとテント。其れから伐採する - 燃やす - テントをはる - ベッドを作る等。なかなか忙しい休日。如何にやりこなしているのか分らない。[...]

雨季が徐々に近づき、我々のテントは篩の様に漏る。[だから] 余り気持ち良く寝られない。デモ - ルマン、パウル・ミヒルそして僕を含めた10人がクウェに輸送される。ここで実質のボスである (中尉 / 指揮官は何処にも関与しない) マリモト伍長によると、我々は‘作業には向いていない’らしい！ 戻るのか？

フェイケマ

1943年5月20日

[トンチャン] 僕が最後に書いた (カンチャナブリー) そのキャンプに、われわれは5月13日から20日まで留まった。[...] 木曜日朝我々は砂列車で僕が指揮官だったグループの34人と

---

<sup>122</sup> カンポリートは塩化次亜カルシウムの商標名で、消毒剤として使われた。

[一緒に] 5番目のキャンプへ行った、そしてそれによって我等の3夜間行進が節約された。7時近く残念ながら雨が降り始めた。鉄道路線の沈下により我々は10時近くにやっと最終駅へ着いた。我々は外へ出されそれから最初45分間程泥の跳ね返る雨の中に立たされた。それから真っ暗闇の中1時間泥道を。日本軍はその時我々を立たせたままにしたが、30分後我々は自分達から自発的に何処かでアタップ [椰子の葉の覆い] の倉庫を見つけ、その中で我々は目下2日間濡れないで横になれた。さもなければ我々は2日間野外でほぼ永久的に雨の中に居なければならぬ。昨夜7時に [我々は] 今再び自分達のグループと居るこのキャンプに行った。これは又しても相当な遠征であった：未だ降り続く雨の中で完全な泥道そして尚大半が真っ暗闇。有り難いことに、我々はここでもかなり良いテントを見つけたので、僕は2時以降かなりよく寝た。

グルドヴァッチ

1943年5月29日

[クウェ] 病院には場所が無い！ [我々は] 自らテントをはらなければならない、ところで我々の健康状態 (!) からいけばそれは思いの他大変だった。しかし少なくともここは病院の様に熱帯潰瘍や赤痢の臭みはない。地面は大量の雨で泥濘だ。

グルドヴァッチ

1943年6月2日

[クウェ] キャンプの全テントは溢れかえっている。パウル [ミヒル] と僕は21人が詰め合っ  
て横たわっているテントに行く。 [それは] 全く不可能だ。さてどうする？

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年6月3日

[カンチャナブリー] [我々は] 待つ。夜 [我々は] [カンチャナブリーから] 出発して、 [我々は] 集合キャンプへ歩行し、其処で [我々は] 2晩地面で寝た。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年6月5日

[ターサオ] [我々は] 貨物駅へ歩行する。貨物車両は料理鍋類とあらゆる野菜そして豚を一緒に積み込まなければならない。其れ以降 [我々は] ターサオへ [行く]。一台のシェヴォレの予備トラックがレールにロコモビルとして使用されていた。タイヤと外輪 [連] を除去。ブレーキ巻胴が鉄道車輪として [使用されていた] が、約15センチ幅だ。

グルドヴァッチ

1943年6月10日

[クウェ] 我々は最終的にミル・スフミドとハンス・ネイデルヴェー - ンの助言によって森の後方にはい入った。彼等は其処に2 x 4メートルのキャンバスを4本の木に結わえ付け我々は目下4人でその下に横たわっている。雨は勿論あらゆる方向から入り全てはびしょ濡れだが、我々には他に選びようが無い。夜は蚊、メルトゥス [蚊] 或いはアガス [蠅]<sup>123</sup>で気が狂う。

ペルクイン

1943年6月11日

[チュンカイ] 日本軍は又変な事をする。我々がここに来た時、殆ど屋根に覆いが無い兵舎に横たわった。今突然早いテンポでこの屋根を修理しなければならない。アタップ [屋根を覆う椰子の葉] と接合材料は豊富にあり修理は僕達によって完璧に行われた。蚊帳が支給されたので各自一つずつ所持する。日本軍は我々に未だ文句が有るかどうかを聞きにやって来た。この病院のアタップ屋根は日本軍自身によって良く修理された。それにしても何故突然この心配りを？人が言うには、我々は [6月] 15日からタイ政府による監督の下に入るとか。後は‘人々’によるとバンコクが戦争捕虜達の運に関して国際赤十字と協議を行ったという。鉄道の仕事は閉鎖される事だろう。真実であるには余りにも良過ぎるし僕はまず其れを目で確かめるまでは信じられない。

---

<sup>123</sup> アガの蠅は特に夜近く回りに大群をなし、しばしば目の痛みを引き起こす。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年6月13日

[ターサオ] 我々は以前立ち寄ったグループ連の黴の生えたあらゆるバラン [荷物] が貯蔵されている竹材貯蔵庫／倉庫で寝、そして青緑の蚊帳も [置いてある]。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年6月14日

[キャンプ120] 2日目の聖霊降臨祭。[...] ターサオから [我々は] 2隻のタグボートと2隻のずっしり荷積みしたプラウ船とでスプリング・キャンプ、‘水源’キャンプ120へ出発した。途中流れを横切ってやって来た最初のプラウ船（日本の将校達を乗船させる為その瞬間だけ曳航されなかった）がタグボートによって水の中に引っ張られた。[このプラウ船が] 転覆した。我々の薬品と食糧品が無くなった。野営袋と簡易ベッドを [我々は] 泳いで救出出来た。[僕の妻] コーリーの写真が傷ついた。船は警告無しで出ていったけれど、[我々は] 残骸に1時間自分達だけ置き去りにされた。タグボートが残骸を強い流れによって押したので、後で [僕の] 腰と尾骨を痛めた（水の中、船板の上に立っている）。午後 [我々は] 着いた。川から3キロメートルの歩行 [だった]。簡易ベッドを [僕は] 灌木の中に残してきた。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年6月23日

[キャンプ120] 我々は小さな雨の漏る数個の屋根付きテントの中に、肩を付き合せて（16人）横たわっている、[それは] むかるんでいる（[場所は] 4, 5 x 4, 5メートル）。

ドゥ フラウター

1943年6月24日

[タカヌン] 大変重病のマラリア -、腹疫 - そしてベリベリ患者達（約67人）が日本軍により健康診断を受けた。彼等は多分チュンカイの病院へ送られる。エーヴェルスもその中に入っている、[彼は] とても痩せている。

ペルクイン

1943年6月28日

[チュンカイ] 近日中に40歳以上と未だ2マイル(荷物と一緒に)は歩ける病人の2000人がこのキャンプを出る。重病人達と所謂‘健康人’はここに残る。前に名を挙げたグループが発した後、2000名のオランダ人からなる他のグループがこのキャンプに来て住む事になるだろう。多分僕は[僕の弟] ヘルマン<sup>124</sup>と会えるに違いない。

ルーゲ

1943年7月1日

[クウィマ] 今日僕は[ヒンダートから] キャンプ指揮官である[C.・ファン] アルテナ大尉の下にクウィマへ出発した。それは汚いキャンプで、不衛生[である]、全て、病人達も鉄道で[働いている]。

ペルクイン

1943年7月1日

[チュンカイ] 僕達が兵舎の外で寝るのはもっぱら涼しさの為だけでなく、とりわけ兵舎の中に居る何千もの虱から逃げる為だ。南京虫はすでに寝床用マットに一杯居るが、このところこれらの小さくて白い虱が加わって以来、夜中かゆみで寝られない。毎朝何十匹というズボンにいるこれらの忌々しい獣を捕まえる。これらの白い、所謂衣服虱は実に災難で多くの連中が彼等の皮膚を掻き毟っている。其れが所以に皮膚病感染の見込みがある。特にこのキャンプに既にもっと長く留まっているイギリス人達は疥癬とペラグラ(イタリアライ病)<sup>125</sup>を含む不潔な皮膚病に悩んでいる。

---

<sup>124</sup> ペルクインは彼の弟ヘルマンをチャンギで最後に見た。1943年1月23日にこの兄弟は別れを告げた；1945年12月末やっとペルクインはヘルマンが戦争で生き延びた事を聞いた。

<sup>125</sup> ペラグラは栄養不良に繋がるビタミンB - 総合、動物性たんぱく質と脂肪分の欠乏によって起こる。食物内に長期のニコチン酸不足、ビタミンB-5不足によって赤から茶色のしみを伴う皮膚病、ペラグラ皮膚炎を起こす。ペラグラの他の症状は‘神経炎’で、神経性の異常から生じる神経炎：キャンプ眼病、キャンプ耳病そして‘熱い足’。他は陰囊の皮膚炎(‘チャンギボール’)と下痢(‘腹ペラグラ’)を起こす。(Coelho クエロ、594, 851)

ドゥ フラウター

1943年7月8日

[キンサヨック] 今朝6時半に朝食；7時に整列；7時半に広場 [点呼場所] へ整列；10時に貨物プラウ船で出発 [タカヌンから] (一隻のプラウに付き20人 [で])。メツァー中佐、[A.H.] フェルカウル中尉、ファン ザイルと僕は幸い一緒に同じプラウ船 [に座った]。[それは] 気持ちの良い、静かな旅 [だった]。3時半 [我々は] キンサヨック [に着いた]；[我々は] コレラの為上陸を許されなかった。

ペルクイン

1943年7月9日

[チュンカイ] 奥地 [上流にあるキャンプから] のオランダ人グループがこのキャンプに着いた。彼等は食べ物か思いの外良かったので、実際不健康そうには見えなかった。このグループは一人に付き毎日2立方メートルの土を運ばなければならなかったのだ、その重労働で疲れ切っている。日本軍はしょっちゅう叫んだり鞭打ったりして、其処から採れるだけは採る。と言うのは鉄道は8月に終了しなければならないからだ。昨日は又120人のグループが、健康診断の後、上流へ送られていった。このキャンプでは安全でない気がするし、この線路の仕事が完成するや否や気持ちが楽になるだろう。

ドゥ フラウター

1943年7月9日

[ターサオ] 午前9時に [我々は] 出発した；1時半にターサオ到着。船で [我々は] [その] ‘駅キャンプ’ へ [行った]。[我々は] テントの中で寝た。多くの英国人、印度人とジャワのクーリー達。雨。粗末な食事。

ドゥ フラウター

1943年7月10日

[カンチャナブリー] [午後] 2時に [この] 駅 [に到着した]；7時に出発 (41人が [1つの] 長い車両で)；カリ [川] に沿って美しい汽車の旅。夜中12時にカンチャナブリー [回復

キャンプ] に到着。真夜中約3時に病院に到着。[其処では病人達を] 赤痢 - 、マラリア - そしてベリベリ [患者] に分ける。僕は赤痢病棟へエーヴェルスと一緒に [行った] 。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年7月15日

[キャンプ120]我々の寝場所は25センチという自分達の肩幅と背丈より10センチ長いだけだ。其処へ更に自分のバラン [荷物] (野営袋等) が加わるので、膝を立てて横向けに横にならなければならない、お互い目覚めたままだ。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年7月18日

[キャンプ120] 点呼場所への途中 [僕は] バッカー看護士に捕まえられ、彼から僕が他の病人達と (僕は下痢と刺し込みそれにガスがある) 一緒に12時にカンチャナブリーへ輸送される、と聞いた。[...] 昼食後 [我々は] 119人の行進可能な病人達と [296人の病人達の中から] 其処で3個のテントに50メートルの脇線路と共に転轍機のある駅、トンジェイムへ20センチ厚さの泥を歩き続けた。医者と看護士達は荷物を携える多くの病人を助けた。距離は約1200メートル [だった]。多くが道の脇に倒れた。一人が担架で戻された。[僕の] 簡易ベッドを [僕は] 又引きずって行った。クレオソート錠剤は下痢 (と咳) に良く利く。<sup>126</sup> [C. A. ] カウパーズ医師と [N. ] ベイツ<sup>127</sup>医師はあっぱれな仕事振りだった。駅では '感染性の' 病人達は日本のテント或いは日本の小屋には匿われないので、[我々は] 全員何時間もどしゃ降りの雨の中を立って待つ (マラリア、下痢、一般の衰弱等 [の患者達と一緒に])。30X40センチの大きな葉っぱを傘代わりに [使う]。又タミル (マラッカ [から]) で発生している病気も [あった]。[我々は] 一台の平たいオープン車両の鉄道ロコモビルで [出発した]。我々からは其処へ約40人が全タミル人と一緒に。残りはその場所で雨の中を夜の9時まで待たされた。其れから [我々は] 荷造り (残りの引越し) により寝場所が足りなくなったのと全てが泥の下にのめり込んでいると言う、キャンプに戻された。荷物 [汚れてしまった] と転倒集団 [が出た]。[僕は] 服を着たまま寝、湿気っぽく殆ど場所が無かった。

---

<sup>126</sup> クレオソートは木タールから作られ、痰を溶かす咳止めそして胃腸の殺菌剤として使用された。

<sup>127</sup> カウパーズ医師は1948年Klinische waarnemingen in een Japans krijgsgevangenkamp te Singapore 1944-1945, という表題の論文で博士号を取得した。ベイツ医師の手記は1981年De verre oorlog : lot en levensloop van krijgsgevangenen onder de Japanner.として出版された。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年7月20日

[ターサオ] [我々は] 雨が降り止むのを待たなければならない。昼食後駅へ。其処で5時まで待ちそれから83人でターサオへ。其処では1、5キロメートル歩き、[僕は] へとへとで更に30人の[横たわっていた] テントで地下に寝た。新しい線路上の列車の遠征は悪くなかった。かなり多くの陸橋。相当起伏のある領域。自然美。大変な下痢。ターサオは目下かなり拡張され、約15レール[ある]。

フェイケマ

1943年7月21日

[トンチャン] 270人の病人が何時でも下流(カンチャナブリー)へ輸送されるので我々のグループは未だ260人残ることになる。我々にこれから起こる事は何だろうか？

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年7月21日

[ターマカン] 午後[我々は] 駅へ[行った]。[其処で我々は] 長時間待たされた。[夜] 6時に長い列車によって113人の病人達25人[職員]とでオープン車両(コルネリス中佐)の中で10センチの炭塵の上に座りながら、出発した。この旅はカンチャナブリーへ向かいとても美しい。発破された岩壁。[山脈を伴った] 横溪谷。とても奇麗な作品だ。エンジニア(工学修士)[J.] ダウフェスはターサオで死亡した。ただ相当水位が上がると木造鉄橋支えは流されてしまうに違いない。この川は未だ‘粗野’だが、セメントで固めた土手壁が作られる。又線路は既に石床が敷かれるので重い蒸気機関車は安全にやって来られる。

何千人ものタミル人達は上流の方へ[歩いて] 行く、多くの女子供は彼女等のブリキのカバンを頭に乘せて。広い溪谷。11アーチからなる鉄橋はジャワ<sup>128</sup>から[来たものだ]。其処から一直線南西に3000人の病人を回復させる我々のキャンプ(ターマカン橋)[がある]。夜中[我々は] 到着した。[僕は] 服を着たまま寝た。薄い(中国の)竹が並んでいる(縦方向[に]) ; 気持ち良く長くなって横になれる。

---

<sup>128</sup> これはターマカンでは‘クウェー川の橋’と呼ばれる。この橋が掛かっているこの川は実際マエ-クロンに属し、‘クウェー川’(クウェーノイ)はその支流である。この鉄製アーチ橋はマディオ(東ジャワ)から来ている。



ペルクイン

1943年7月28日

[チュンカイ]毎日30日かかって100人づつがこのキャンプに輸送されることになっているが、最初の100人のグループは以前に到着していた。新しい兵舎の建物は各々100メートルの長さで、全て完成済みだ。だから3000人用の宿泊設備を整えなければならない。日本軍は3000人の新来者達も含めて、僕達全員が近日中にバンコクとサイゴンへ出発するだろうと告知した。

ドゥ フラウター

1943年8月3日

[カンチャナブリー] このところ又回復した規定された連中が兵舎から‘回復者兵舎’或いは直ちに‘労働パーティ’<sup>129</sup>へ行く。このキャンプの15人から50人グループの規定された連中はこの‘労働パーティ’から去る。人はこの近所にあるキャンプ連へ、と言う。しかし最新ある者が朝列車で上流の方へ再び行った緑の制服を着たヨーロッパ人を見たので、察するに又しても[連中は]上流へ行くのだろう。

ドゥ フラウター

1943年8月10日

[カンチャナブリー] 昨夜クーリー（見積もりは800から1000人）を満杯に積んだ長い列車が再び奥地の方へ行った。我々は残念ながら未だ誰も下へ来るのを見ていない。昨夜約9時ここへ若干数の病気のオーストラリア人がやって来た。

ペルクイン

1943年8月10日

[チュンカイ] 僕達のキャンプについて言えば、僕が報告しなければならないのは僕達が水浸しにならない様に台所の周囲に土と粘土でダムを作ったことだ。雨が降らないのは幸いだ、というのは住人の4分の3が野外で宿泊する事を余儀なくされていたので。危険は過ぎたので、水は早

---

<sup>129</sup> 労働一団を示唆している。

く引き数日後には僕達は再び離れた兵舎を使用出来る。多分南京虫 - そして衣服虱は既に溺れてしまったことだろう。

フェイケマ

1943年8月12日

[トンチャン] 僕は南京虫に悩まなかった代わりに、ここで目下残念ながらとても困っている竹虱がいる。小さい、白くて殆ど目に見えない獣、これらが身体全体にかなりの痒みを伴う吹き出物の原因となる。明日或いは明後日再び約70人の病人達が下流に行くので、我々は未だ220人とで留まる。

ルーゲ

1943年8月15日

[クウィマ] 8 [月] 9日と同様70人の病人達がカンチャナブリーへ輸送された。合計140人 [が輸送された]。

グルドヴァッチ

1943年8月18日

[リンティン] 又しても事があまりに上手く進んだ。[8月] 16日全ウォンピン・グループ<sup>130</sup>、病人達を加えた300人までがリンティンへ行かなければならなかった。病人達を加える事は日本軍の意図する所ではないが、当然クウェ - キャンプ運営は健康人達 (!) を失いたくはない。少なくともなるべく最小限に。フェルステーフとシュラー医師達のその旨への努力にもかかわらず、僕が留まる事は叶わなかった。

---

<sup>130</sup> この項目内で1943年5月1日と20日のグルドヴァッチの日記断片参照。

スネルン ファン フォルホ - ヴェン

1943年8月19日

[ターマカン] この雨はここ下流で（支流上のジャワの11アーチ橋がある、カンチャナブリーの傍のターマカン [にて]）目下更に激しく降り続けている。泥。僕は自分で野外地の兵舎と便所の上に水捌けを掘り始めた。兵舎も漏る。古いアタップ [屋根を葺く椰子の葉]、その中には雀 [がいる]。

ルーゲ

1943年8月20日

[クウィマ] このキャンプは猪小屋だ。大きな泥沼。赤痢患者達は至る所彼等の必要性に応じて用を足す、多数はテントの前か横で、もしこれを少なくともテントと呼ぶならば：雑然とした破れかぶれの布。

フェイケマ

1943年8月20日

[トンチャン] 最近我々はあらゆる興奮に見まわれ、僕にとって一番大事だったのは僕が昨日出発する他の100人の一人に選ばれた事だ。我々は田舎 [奥地] をとって進む、それは文明道から更に遠く [にあって]、更にもっと雨が降り（我々ここでは未だ殆ど困ってはいない）そして多分もっと粗食で不愉快なキャンプへ。とても困難な補給。全てはとても魅力的には見えないし僕は又更に相当 '腹を立て' ている。僕が知っている大半、例えばヘルマン・ウィルツとダコスタが残留するので、僕は目下古い知り合い無しで居る。又とてもがっかりなのは、我等のカウパーズ医師も後に残る。故に我々は明らかに他の医者が既に居る既存のキャンプに行くのだ。

ペルクイン

1943年8月21日

[チュンカイ] [僕は] 5回目の健康診断を受け、卑劣漢どもは僕を重労働用に充分健康と見なした。僕は奥地には行かないぞ。ダーリン [ミン]、助けてくれ！

フェイケマ

1943年8月25日

[トンチャン] 戦争捕虜の運命程こころ変わる物は他に無い。先週以来僕は出発グループから取り出されて目下下流へ避難する病人達のグループに居る。

フェイケマ

1943年8月29日

[カンチャナブリー] 4日前以来再び多くの事が起こった。僕は今現在我々のキャンプから約90キロメートル下にある、カンチャナブリーの近くの全く新しい兵舎キャンプ [回復キャンプ] に居る。[8月] 26日我々は全員列車へ向かって歩かされ(約2キロメートル)、其処に11時から[午後] 3時まで居た後再び戻された。翌朝7時に[我々は] 整列させられ、それから‘急げ’で出発完了の列車が待つ駅へ。我々は33人で密閉車両に積みこまれ、実にゆっくりしたペースで約3時[に] ターサオ(約14キロメートル)に着くまで走行した。其処で一夜を過ごし、[8月] 28日翌朝早く平たいオープン列車で、途中数時間焼け付くような太陽の下で、一日中マグカップ2杯のお茶だけの後、午後約5時ここに着いた。ここは水の設備に関して絶望的だ。昨夜マグカップ4分の3のお茶。今朝も同じ、今日の午後は何も無く多分[我々は] 今夜は未だ何か[貰う]。身体を洗う水は無い。鍋を僕は少々のお茶で洗い、其れを後から飲む。衣類を洗濯するのは勿論完全に有り得ない。[...] 我々がこのキャンプを使用したほとんど最初の住人達なので、未だ上手く運ばない。

ペルクイン

1943年8月30日

[チュンカイ] 悪いニュース。[我々は] 見知らぬ目的地へ出発する荷造りをしなければならない。気にしないさ。

フェイケマ

1943年9月3日

[カンチャナブリー] 絶え間無く大変悲惨な様子の新しいパーティがやって来る、皆イギリス人だ。赤痢、恐ろしく沢山の疥癬例と殆どイギリス人全員の皮膚病による夥しい数の生きた骸骨。

フェイケマ

1943年9月3日

[カンチャブリー] 僕の愛する君、数回内部の引越し後、僕は数日以来目下ベリベリ - マラリア兵舎の将校病棟でかなり恒久的にとても良い場所に居る。我々はここで6名のオランダ将校達、一人のアメリカ人と18名のイギリス人そしてオーストラリアの将校達と一緒に居る。

ペルクイン

1943年9月6日

[ターサオ] この遠征は次の様に終わった。85人で僕達は[9月5日日曜日] 12時に[チュンカイから] 下流のカンチャブリーに向かって出発した。其処へ着いて[僕達は] 線路へ歩いて出発し、そして列車が田舎の方面に行く準備が出来たのが午後2時だった。しかしそれは僕達が戦争捕虜達によって敷設された川の上と其れに沿った木造橋の上に走行して来た時変わった。僕等の左には川の深さが、右には高い急な岩を見た。其れは印象的な景色だった。夜8時真っ暗闇の中ターサオに到着。このキャンプに僕は既に以前来ていて、すなわち1月にリンティンへの通過時に。この大きなキャンプの近くには鉄道操車場がある。この引越しは悲惨だ：これは兵舎なんて呼べる物ではない、倒壊しそうな長屋だ。そして既に兵舎連が同じだ。

14日前にチュンカイから出発した大隊は今だここに居る。彼等は新しい兵舎連を建設する為に指名されていた。恐らく其れは僕達の仕事にもなる。このキャンプは汚い、それ以上言い様が無い。チュンカイとえらい違いだ。彼等が僕等のグループから上流へ送るのを急いでいない事は、かなり良い徴候だ。僕達はこのキャンプに留まる見込みを望んでいる。

ペルクイン

1943年9月11日

[ヒンダート] 9月10日 [僕達は] ターサオを出発した。今回僕達は船で一夜を過ごすキンサヨックまで下流に向かって旅をした。僕達は親切な歓迎と素晴らしい食事を受けた。僕が最後に居たこの5ヶ月間にこのキャンプはかなり変化した。主にここは下流への輸送を待つ病人達が居る。翌日僕達は川を渡ってヒンダートと呼ばれるキャンプへ旅をする。それはかなり綺麗な船旅だった。又このキャンプは圧倒的に病人達が住んでいる。ただ小グループは鉄道で重労働をしている。主に整備 - そして修復工事だ。

ドゥ フラウター

1943年9月25日

[カンチャナブリー] 昨夜は又激しい雷と雨が降ったので、今夜野外は又酷い泥沼だ；其処へ加えて僕は夜中再び腹に苦しみ3回も外へ行かなければならなかった。[W. W.] ロスも外へ出なければならず、彼は全く泥の中に蹲ったままだった。僕は相当苦勞して自分の靴を何度も未だ捻り回すことが出来た。その上真っ暗だったので、不快な動きだった。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年9月28日

[カンチャナブリー] 引越し、道とレール間約4キロメートル、未だ少々カンチャナブリーの上。兵舎は未だ出来あがっていなかった。水田、小屋は大変ぬかるんで、それに水溜り [がある]。小屋15 [から]、[我々は] 床を高くした。輪状排水溝と土手で小屋 [を作った]。100人が其処へ、負傷、下痢、ベリベリ、マラリア [と一緒に]。昨夜激しい豪雨 [が有り]、小屋は吹き倒された。[僕は] 雨に降られて出て行ったが、後で其処へ戻った；[我々は] 視察を受けた。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年10月2日

[カンチャナブリー] 泥、雨。川はバンジ-ル [洪水]。兵舎の一部は [133人の] 水つきだ。

ドゥ フラウター

1943年10月3日

[カンチャナブリー] グループ1が中央-マラッカへ行く、という噂だ；グループ2（其処に僕が所属することになっている！）はチャンギへ戻るだろう、その間グループ6はここに残り、グループ4はサイゴンへ行く。グループ3と5はビルマに居る。ともかく、又様子を見る。今日で [僕は] ここに既に12週間！

フェイケマ

1943年10月3日

[カンチャナブリー]我々が11月10日以降ここからチャンギへ輸送されるだろうと言うかなり強力な噂が回りに流れている。

ドゥ フラウター

1943年10月5日

[カンチャナブリー]今朝グループ1の最後の40人が出発した。<sup>131</sup>我々も今にもすぐ順番が来るだろう。

ドゥ フラウター

1943年10月6日

[カンチャナブリー] 昨晚予期せぬ30人がチュンカイからここに到着した。彼等はここで一夜を過ごし、我等の‘労働パーティ’から健康な連中60人を加えて今朝5時半に車で目的地タカヌンへ出発して行った。一昨日はチュンカイから既に200人の健康な連中が列車でタカヌンへ出発した。もし僕がこの労働パーティの中に居たとしたら、僕も再び上流へ行かなければならなかったであろう。ファン ザイルは九死に一生を得た。僕は未だ患者だ。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年10月10日

[カンチャナブリー] 便所はしょっちゅう実に不潔（人は長時間自制できなかった）それに蠅と通路が時として6センチ水の下 [にある]。滑りやすく、硬い、黒色の泥（水田源）。

---

<sup>131</sup> 1943年9月30日から10月5日まで絶えず約60人、合計330人のグループが出発した。

グルドヴァッチ

1943年10月29日

[クウェ] 我々は再びクウェに戻っている。

ペルクイン

1943年11月8日

[クウィマ] 3週間何も書かなかったが今現在報告する事が多少ある。10月28日僕と未だヒンダオからの他9人の連中とでヒンダートから3キロメートルは充分離れたキャンプ・クウィマへ出発した。

ドゥ フラウター

1943年11月21日

[チュンカイ] 今朝6時に起床、全て(!) 荷造りして、それから25人と一緒に車でカリ[川]へ出かけ、後50人と共にブラウ船で3マイル上流に向かってチュンカイへ。其処でバレバレ[寝台]と沢山の南京虫の居るオープン兵舎に連行された。其れ以外はここはとても美しい; 兵舎連は野生植物(アラン-アラン[茅]、竹と灌木植物)の中に在る。ここは又他の全キャンプ[カンチャナブリー]より鳥類の宝庫だ。沢山の昔の知り合い達に会う、凄く楽しい。僕は目下ファンザイルとホルマンと一緒に寝ている。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年11月21日

[カンチャナブリー] 午後[我々は]列車へ約3キロメートル行進した。[我々は]鉄の貨物列車に26人で[座った]。夜中は氷の様に冷たく、日中は蒸し暑い。



スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年11月22日

[シンガポールへの途中] タイでは未だ全てがかなり安価だ：卵10セント、ここでは[マラッカ] 25 [セント]、バナナ1セント、ここは8 [セント]。列車の旅は夜中とても寒い、日中は曇りで雨。全ては未開地、あちこち洪水 [している]。[僕は] シヤム湾を見た。国境を過ぎて全てがとても高くなる。1ティカール<sup>132</sup>=2米国ドル相場。[僕は] ペナンも見た。トンネル、座り続け、痛い尻。下痢。[僕は] クレオソート錠剤を飲む。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年11月26日

[シーメロード・キャンプ (シンガポール)] 早朝シンガポールに到着し、シーメロード・キャンプ (ブキットティマ) ヘトラックで運ばれた。雨。其れは再び文明へ戻る得がたい喜びだ、本当の便所に座れる事や、又突然 (半年後に) バケツ一杯の泥っぽい排水溝の水で身体を洗う代わりにシャワーを浴びる事が出来る。これらはアタップ [屋根をふく椰子の葉] 屋根の木造家屋で、木の床、石綿セメントの壁、ここでは電燈さえも、それは1943年<sup>133</sup>1月4日ジャワ以来経験した事は無かった。空前の贅沢：3回大便をし、既に2回入浴した。又チェボック瓶 [尻を洗浄する為の水の入った] も使用する。上流 (カンチャナブリー) では我々は十分な飲料水が無かった (日にミルク缶2杯)。シンガポールは未だ活気的に見えるが、他の場所は死んでしまった。ここでは飯は少ない (日に300グラム) が日に2食。このキャンプはとても広々している。

フェイケマ

1943年11月28日

[シーメロード・キャンプ (シンガポール)] 僕の最愛なる君、僕が書かなかったこの14日間に凄惨な‘出来事’があった。主には僕がタイを出て一昨日より又シンガポール (或いは少なくともその半島に居る)、つまり1週間前に遥か遠く我々が余りに多くの不愉快な経験をしたその国から、君の居る所まで再び約3分の1の距離、というわけだ。まあしかしあれやこれや規則正しく話させてくれたまえ。君と前回話をした直後、僕は出発した最初のパーティと一緒にこの病院キャンプを出て行く様指示された。[...] 僕は車両指揮官となったので、我々が出発する前には

---

<sup>132</sup> ティカールはタイの貨幣である。

<sup>133</sup> 彼が戦争捕虜としてジャワを去った日。

更に色々な管理上の仕事をさせられた。一車両に合計26人が配分されたので、余裕は無かった。

[...] 我々は11月21日日曜日 [カンチャナブリーから] 出発し、10時には既にこのキャンプの広場に整列して立っていた。最初我々の荷物の検査があり、其処で僕は針金ロールを取り上げられた。[...] 1時前に我々は出発した。まず全ての荷物を背負って約4キロメートル歩き、それは訓練していない身体には思いの外大変だった。それから我々の列車に、普通の密閉された貨物列車。 [...]

11月26日金曜日の朝6時に [我々は] シンガポールに [着いた]。 [...] 26人と共に我々は荷物と一緒にトラックで出かけ、それから少し日が明け始め、我々は静かなシンガポールを更に走行し続けた。チャンギへ向かう道は取らず、30分走行後我々は前RAF (英国空軍) - キャンプであったシーメロード・キャンプに着いた。

ドゥ フラウター

1943年12月4日

[チュンカイ] 今朝 [僕は] 他の兵舎に引っ越した。幸い我々 [彼自身、クーン・ファン ザイルとホルマン] は再び3人一緒に居る。[...] この新しい兵舎は南京虫に関しては増しだろう寒さの為着たきりの衣服から我々は再び夥しい衣服虱に悩まされ、これらはそのイライラする刺すような痛みにより [南京虫より] もっと厄介だ。

ルーゲ

1943年12月4日

[ヒンダート] 我々は [クウィマから] ヒンダートへ出発する。全ての小さなキャンプは閉鎖され、後で輸送される為ここに集められた。ここには目下3000人が野営しているに違いない。僕は再び木こりだ。マラリアが蔓延っている。

ドゥ フラウター

1943年12月5日

[チュンカイ] 今朝再び病人達のパレード。病人達の一部は日本人医師によりターマカンへ行くべく選別された；その内7名はオランダ人。後他はまた更に大多数のD-グループの‘半日’労働者が出て行く。其れだからここには200人以下のオランダ人が未だ残っている。

ドゥ フラウター

1943年12月11日

[チュンカイ] 今朝我々は全員コレラ - 注射を受けた。これは又近づく出発の示唆か？今朝一番早く突然200名のイギリス人達が出発した！何処へ？昨夜12時半に彼等の出発が公表された。

ペルクイン

1943年12月14日

[ヒンダート] 12月3日僕達は突然 [クウィマから] キャンプ・ヒンダートへ引っ越した。絶え間無く奥地から何百という連中がこのキャンプにやって来る。これらの連中が宿泊出来るようにゆっくりしたテンポで兵舎連が建てられ、目下このキャンプには既に2500人が留まっている。つまり僕達はより少ない食事が当たるということだ。

グルドヴァッチ

1943年12月25日

[ノンプラドック] [12月] 22日我々は確かに [クウェから] 輸送された。28時間途方も無い道程を走行し、其処は僕達が4月、14日間の夜間あくせく働いた所だった。其れは気持ちの良い列車の旅だった。僕達は再び家畜運搬列車に詰めよって座ったが、雰囲気は良かった。僕達は目下建築中のキャンプ、第2ノンプラドックに居る。完全に丸裸、木が見えない。暫くしたらかなり暑くなるだろう！とはいえ気持ちが良い、8ヶ月間の森の後は。[僕は] 途中全ティカールを西瓜に使い果たした。僕がまるでハンガリーに居た様な気になった。病院では目下‘ハニバル’<sup>134</sup>の横に横たわり、何もしない事を楽しんでいる。

---

<sup>134</sup> ハンス・ファン ザイル ドゥ ヨングのニックネーム。

ドゥ フラウター

1943年12月28日

[チュンカイ] 今朝グループ1の残りが出発した。グループ2の40人も全荷物を持って点呼に出て来る事との通達があったが、それは昨夜再び取り消された。

ドゥ フラウター

1944年1月19日

[チュンカイ] [一昨日]、昨日と今日ターサオから再び連中がやって来た。到着した3グループには54名のオランダ人達(残りはイギリス人達)が居て、その中には数人の知り合いしか居ない。

ドゥ フラウター

1944年1月22日

[チュンカイ] 噂では、我々が日本へ輸送されると仮定されている。船旅が余りに長くなければ良いが！他は彼等が我々を今現在再び何処へ連れて行こうと我等にはどうでもよい。すべてに慣れ、其れが何処であっても我々が何時も思い出しても恋しい者達からは同じだけ遠いのだから。

ドゥ フラウター

1944年2月1日

[チュンカイ] キャンプ外では再び若干数の新しい兵舎を建てるため森の一部が伐採された。

ルーゲ

1944年2月12日

[ヒンダート] 250人の病人、オランダ人が輸送された。ジャワ人[ロームシャ達]もビルマに送られる。

ドゥ フラウター

1944年2月19日

[チュンカイ] 昨日一日緊張が漲った。まず200名のオランダ人と600名のイギリス人が出て行くだらう。我々は全員其処に属した！今突然オランダ人達が抜け落ちてイギリス人だけが行く。

グルドヴァッチ

1944年2月20日

[ナコムパトン] 益々酷くなった僕の下痢のお陰で、[僕は] ‘療養キャンプ’ ナコムパトンへ送られた。

ドゥ フラウター

1944年3月4日

[チュンカイ] 一昨日ナコムパトンへ行く人の名前が読まれた。僕は其処へ入らなかった。[…]  
上流から目下何度もグループがここへやって来る。カリマティ・グループからカウパーズが既に到着した。我々は今日ニック・ワインハ-ズも待ち望んでいる。彼等は約20時間かかってくる。既にこれらの連中の到着から我々の兵舎には再び連中が加わって来た。我々は目下7人で格間に寝ているもので、すし詰めの様だ。[…]  
ワインハ-ズとフェルフスルトもやって来た；[彼等は] 元気そうに見える。彼等が居る事は楽しい。

ペルクイン

1944年3月16日

[タンピ] 3月14日火曜日 [僕達は] 150頭の牛と共にヒンダートから出発した。<sup>135</sup>最初の停止所はリンティンだった。到着して [僕達は] 牛にここに生えている少ない草を食べさせ、他彼等は灌木の葉を食べている。飲ませるのに彼等は川の岸边へ連れて行かれる。これらを森の端

---

<sup>135</sup> 項目 ‘仕事’ のペルクイン1943年12月14日付け日記断片参照。

にある木々の間に紐を結わえて、家畜がこの紐によって静かに夜を過ごせる様願って僕達は柵で囲む。僕達は夜中多くの牛が脱走しない様に見回った。

[3月] 15日水曜日 [距離] リンティン - キンサヨック [歩行] そして今日僕達はキンサヨックからタンピへ向かって歩いた。鉄道と平行して走っている埃っぽい森道を日に15から20キロメートルは踏破した。家畜によって立てられた埃は息が詰まる。この軍隊の最後列を歩いている連中は多少なりとも新鮮な空気が吸える様に鼻と口に布を当てていた。視界は数メートルのみだ。長い竹棒で牛の方向を突つく事によって、牛追いは彼の前を歩いている1頭の獣を肌で感じるが、これら [牛] は見えない。彼等は規則的に交代する。僕等のグループは15人から成っている。5人は荷物と食糖を積んだ荷車を引っ張る任務を受けた。荷車はしかしながら最初の日既に崩れてしまい、ワゴンの中味は今列車で‘駅‘から‘駅‘まで運送される。今までの所思いの他上出来で僕達は50から55キロメートル踏破した。明日 [僕達は] ターサオへ出発するがそれは約22キロメートルの厳しい日になる。

ドゥ フラウター

1944年3月18日

[チュンカイ] 昨日の午後昼食近く、終に200名のオランダ人一団がカンチャナブリーの方向へ歩いて出発していった。

ペルクイン

1944年3月18日

[ターサオ] [3月] 17日 [僕達は] ターサオに着き、今日は休日を貰った。75キロメートル余りをやりこなした。60頭の牛はターサオに留まり、其処から続けて僕達は、日本軍によれば、8人でこの仕事をやり終えられるだろう、と。7人の他の牛追い達は今日列車でカンチャナブリーへ出発した。明日僕達はターダンへ約25キロメートルの行進を控えている。

ルーゲ

1944年3月21日

[ヒンダート] 今日我々は下流、ノンプラドック [回復キャンプ] へ行く。 [それは] バンポンの後方5キロメートル [に在る]。我々は一車両に38人立っている。

ルーゲ

1944年3月22日

[ノンプラドック] [午後] 1時半。ヒンダート駅を出発し、ノンプラドックに [夜] 6時半到着。凄く大きなキャンプ：凡そ7000人；5600名のオランダ人と1400名のイギリス人。かなり綺麗なキャンプだ。全ては素晴らしく統制されていた。食堂、虱駆除課、疥癬兵舎等。食事はかなり良い。沢山の知り合いに会う。[...] 最近の2日間に凡そ1000人の病人がナコムパトン（病院キャンプ、ここにビルマからの全病人も来る）へ送られた。

ペルクイン

1944年3月25日

[ノンプラドック] 昨夜遅くノンプラドックに着いた。僕達は10区間の200から210キロメートルを踏破した。[...] ノンプラドックは7000人が収容されたとても大きなキャンプだ。このキャンプは川に面しているが、沢山の井戸やポンプにより水には困らない。その上水は川と違って感染していない。

ペルクイン

1944年3月30日

[ノンプラドック] このキャンプで僕達は謎に直面している。ノンプラドックは多数のキャンプからなっている：とりわけ仕事はしないが日に25セント受け取り、髪の毛をのばしても良い連中の隔離された部がある。僕が横たわっている区画では、僕達は働かなければならず、つまり兵舎を建てたり又髪の毛は短く切り込む義務がある。この巨大なキャンプの他の区画にはビルマから収容された連中が居て、彼等は働かずそれぞれは良い身嗜みだ。運動を必要として余分な食事さえも貰える連中の居る区別された区画もある。人は、これらのグループが日本へ行くと言うが、それでは何故彼等は特別扱いを受けるのか？このキャンプには僕等の隣りに小さなフットボール場、定期的に行われるテニスバーンが敷設されている。日本軍がこれで何を計画しているのか理解出来ない。

ルーゲ

1944年4月12日

[ノンプラドック] 最近ここにビルマから絶え間無く人が輸送されてきて、どれも翌日には再び出て行く。沢山の知り合いと会う。

ドゥ フラウター

1944年4月24日

[チュンカイ] 24名のオランダ人を含む200人が列車で出発した(報告によれば25日間)。目的地:ビルマ。彼等は戦争地帯<sup>136</sup>に仕事が割り当てられたので、彼等は‘危険ペイ’を授かった。同じ列車に下流から来たグループ1のオランダ人達も同乗していた。

ペルクイン

1944年4月24日

[ノンプラドック] 昨夜突然蘭領インド人達で成り立つ‘ブーン・パーティ’<sup>137</sup>が未知の場所へ出発して行った。彼等の出発に備えて彼等は一人ずつズボンとゴム靴を貰った。日本軍によれば僕達は近日中に全員このキャンプを出てシンガポールへ行くだろう。

ドゥ フラウター

1944年5月7日

[チュンカイ] 栄養不良兵舎と‘手術病棟’から約100人の重病人達が一部は担架で3隻の船によりグループ4の基地キャンプ、カンチャナブリーから約7キロメートル、へ輸送された。悲しい光景。

---

<sup>136</sup> 鉄道路線は何度か連合軍によって爆撃された。前書きビルマータイ、5参照。

<sup>137</sup> ‘ブーン・パーティ’ (ここでは:同朋) とは印欧混血グループを意味する。



ドゥ フラウター

1944年5月20日

[チュンカイ] 木曜日朝ク - ン [ファン ザイル] とホルマンがナコムパトンへ出発した。フェルカウルは昨日の朝出た。昨夜グループ2の大きな雑役グループがカンチャナブリーへ若干の仕事をするため出発した。

ペルクイン

1944年5月28日

[ノンプラドック] 色々なグループ、つまり‘ブーン・パーティ’の連中も純血 - パーティに属するグループとして既に出発した。<sup>138</sup> 各グループは450人から成る。僕達は純米国ドルを支払われるので、シンガポールへ出発する。[...] 僕は出発する前に連中の荷物が精密に検査されているのを見た。全ての書物は取り上げられた。僕は自分の日記を何とかして救わねばならない。

ルーゲ

1944年5月29日

[ノンプラドック] [夜中] 12時半シンガポールへ出発。

ドゥ フラウター

1944年6月3日

[チュンカイ] 6月1日我々は午後全員で整列し蘭日 - パーティが組み合わされた。僕は日本人医師により足の傷と [僕の] 年齢の為不合格となった。沢山の知り合いが犠牲者となる。

---

<sup>138</sup> この事については色々な解説が与えられている。日記著者ルーゲによれば印欧人 - 例外無く - の大半は日本軍が彼等の方策‘アジア人達の為のアジア’の一環としてそれを正当化できなかった為日本へ輸送される事は無かった。(項目‘収容所組織/ヨーロッパ人及び日本人収容所スタッフ’、ルーゲ1944年4月14日日記断片、参照)。他の解説では、日本軍は‘トトクス’(純血オランダ人)の方が彼等の印欧人同胞より寒い日本の冬に耐えられるのではないかと考えた。

ペルクイン

1944年6月3日

[シンガポール] 5月29日月曜日僕達は夜ノンプラドックを出発した。検査にもかかわらず幸い僕は自分の日記を未だ保持している！もし僕がそれらを手離さなければならぬとしたら物凄く残念に思うだろう。列車の旅は又しても厳しい試練だった。これを僕は1943年1月既に詳しく書いた。2回目はすし詰め、シンガポールへ向かうのに悲惨な5日間だった。鉄道で僕達が味わった辛苦で僕等の抵抗力はひどく障害を受けた。この旅は既に1943年1月にシンガポールからバンポンへ行ったのより更に疲労し厳しかった。6月2日金曜日夜 [僕達は] 汚れた硬く疲れ切った身体でシンガポールのみすぼらしいキャンプに着いた。残念ながらこれはチャンギ・キャンプではなかった。

ドゥ フラウター

1944年6月6日

[チュンカイ] 日本 - パーティは整った服装だった (シャツとズボン、厚めのイギリス式半ズボン、長ズボン、ソックスそしてゴム靴)。昨日の午後彼等は全荷物を持って服装検査の為整列した。彼等はその時 [6月] 9日シンガポールへ向かう報告を受けた。[...] 今朝突然全 '不健康人' が整列させられ急に人を上流、ブランカシへ送らなければならなくなった為、医者により再び対象にならない若干数を選択した。このやり方はイライラする大騒ぎだ。何も確実でない。毎日人が出て行かされるに違いない。それなら未だシンガポール経由で日本へ行く方が良い！

ドゥ フラウター

1944年7月28日

[チュンカイ] 川が気掛かりな水嵩を増し、キャンプが洪水の脅しを受けている、と僕は既に書いた。一昨日キャンプ内のその状況が既に危険となった。夜中グループ連が台所、兵舎連と病院を守る為堤防を築く仕事を続けなければならなかった。昨夜も同様だった。昨日水嵩は既に我等の兵舎の後方にすれすれで我々は堤防の決壊を実に恐れた。台所は部分的に洪水し野外へ運び出された。今夜我等の兵舎の後方にある堤防が決壊し (6時半に)、真っ暗闇の中水が兵舎内に流れ込んできた。素早く [我々は] 全てを荷造りし前もって高めの場所に持って行った。

ドゥ フラウター

1944年10月1日

[チュンカイ] 一昨日大きなビルマ - パーティがキャンプ62内に来た; その中には又沢山のオランダ人 (主にスマトラから、又4ヶ月前に出て行った我々のキャンプからの数人)。彼等の中には多くのマラリア患者 (BTとST) がいて、故に昨日は沢山のスライド (88)。<sup>139</sup> 昨夜は暑く再び81名のオランダ人 (知り合いは居ない) を含む他のビルマ - パーティ (キャンプ74) が入って来た。全てのB - パーティは沢山の爆撃や機銃掃射を経験した。めいめいのキャンプには全く、或いはほんの少数だけが残留しているか、或いは全キャンプが引き払われた。

ドゥ フラウター

1944年10月27日

[チュンカイ] 一昨日再び200人 (45名のオランダ人を含む) の奥地 - パーティがコンキタへ出発した。予期しなかった全員はマッキントッシュ医師<sup>140</sup>も一緒に日本軍の忠告に従わなければならなかった。目下ハーディ [医師] がチーフだ。マッキントッシュは彼の出発前にちょっと挨拶をしに僕の所へ来た。彼等は夜中1時に出発した (人が言うには500人がターマカンへ)。[音楽]バンドも日本軍の命令で11月初め約3週間奥地のキャンプ連に寄って巡業する為出て行くらしい。奥地 - パーティの出発とターマカンへ向かう残りの引越しに関する噂が飛び交っている。敗血症により僕はこの奥地 - パーティから逃れた。

ドゥ フラウター

1944年11月25日

[チュンカイ] [既に数日移動がある] 今朝再び若干数の病人 (我々の大隊から32人) がターマカンへ出発した。ここに300人の将校達と100人の下級者達が後に残るだろう、と言われる。

---

<sup>139</sup> マラリアの2種形態の示唆: BTは良性3日熱、そしてSTは‘劇症熱帯’である (悪性3日熱) 。“劇症熱帯”は時宣を得た治療が出来ず死亡する結果を招く。(R. Mills, doctor's Diary and memoirs. Pomei's Party, F Force, Thai-Birma Railway. (Broadmeadow 1994), 25). ‘スライド’の助けを借りて (ガラス上の血一滴の塗抹標本)、それを顕微鏡の下で見ることにより、マラリアが診断出来る。

<sup>140</sup> マッキントッシュ医師はクアラルンプールで日本の占領前に医者として働いていた。(NIOD、蘭領東インドの日記収集、H. J. ドゥ フラウターの日記)。

ドゥ フラウター

1944年12月17日

[チュンカイ] 昨日ターマカンから1000人が歩いて到着した。

ドゥ フラウター

1944年12月21日

[チュンカイ] たった今ターマカンから再び500人が到着した。

ドゥ フラウター

1945年1月3日

[チュンカイ] キンサヨックから色々な病人を含む約50人の連中が入って来た。今日の午後我々は再び320人組で上流、一部はキャンプ83へ、一部はターサオへ行くと聞いた。まず180名のオランダ人と150名のイギリス人だったが、司令部からの命令が来て、英語を話さない連中が上流へ送り込まれる、というので目下320名のオランダ人が上流へ行く事になる。交替しなければならない連中はサイゴンへ輸送される‘ブランチ7、カンチェバリ -’ [カンチャナブリー] に属する。その道を我々も終に行くのだ、何故ならここはかなり危ない。今日の午後ターマカンとカンチャナブリー・キャンプの上空に長くいた偵察機の為に再び警報が鳴った。僕も今現在上流へ行かなければならない、というのは我々は320人の‘健康人’を提供する事もはや出来ないのだ！このキャンプには今2704人の戦争捕虜達が居て[今朝到着した者を除く]、其処に病院に居る19人、660人の半病人、1300人の労働者達、残りは‘工作中’。

ドゥ フラウター

1945年1月4日

[チュンカイ] 9時10分に激しいどしゃ降り、かなり長く続いた。結果：巨大な泥沼；便所は殆ど到達できない。相当な数の防空壕は満タンの水で一部は流れ込んだ水で落ち込んだ。今朝全員バケツや缶等で水を汲み出し中。

ドゥ フラウター

1945年1月12日

[チュンカイ] 今朝10時15分前に200人がターマカンヘプラウ船で出発した。同時刻にターマカンからの350人がアパロンとビルマへ予定されている150人に加わる為ここに歩いてやって来た。全員オランダ人だ。彼等はここへ12時頃着いた。彼等の中に我々のキャンプから多くの古い知り合いが居る。1時ここへ更に275名のイギリス人とオーストラリア人、又100人の正式の病人を含むT. (ターマカン) からも到着した。彼等はここに留まる。

ドゥ フラウター

1945年1月15日

[チュンカイ] 今朝又コンキタから86名のオランダ人を含む200人のパーティが入って来た。彼等の中にマッキントッシュ医師も居た。

ドゥ フラウター

1945年1月21日

[チュンカイ] 合計のキャンプ人力は今日で3846人、内訳は607人が仕事、1499人の労働者、202人の年配者、1409人の半病人、病院に129人。 オランダ人の合計は1096名。

ドゥ フラウター

1945年2月6日

[チュンカイ] 今日には全て静かだ。ターマカンからアメリカ人とオーストラリア人のグループが到着した。2月5日に [J.] ポストマ、 [Ph.] ブルッフマンそして他300名の病気のオランダ人がターマカンから着いた。多くのマラリア。昨夜ブランカシから何人かの病人 (イギリス人とオランダ人) が着いた。一人のオランダ人は意識不明、脳マラリアだ。

ドゥ フラウター

1945年2月17日

[チュンカイ]最後の将校達は今朝船でカンチャナブリーへ出発した。昨夜10名のオランダ将校達がビルマ（アパロン）から到着した。

ドゥ フラウター

1945年2月19日

[チュンカイ]昨夜[...]200名のオーストラリア人がラトゥブリーへ[出発した]。明日はターマカンから全員ここに来る。病理学課の器材等が既に運ばれた。

グルドヴァッチ

1945年2月24日

[ナコムパトン]確固たる噂によれば、ここも又一丁上がり。我々は明後日出発するらしい。日本軍は大掃除を行っている：多少なりとも歩ける者は出て行かねばならない。僕はその間既に随分回復したので、充分出発できるだろう。ゴールドバッハ医師は我々と一緒に行く。特にベルライン医師との別れは僕の心が凄く痛む。ところでゴールドバッハ医師も最良の一人だ。これは好都合というもの。目標はバンコク経由で仏領インドシナの国境、ウボンへ行くらしい。[我々が其処で]飛行場を敷設[しなければならない]と言われる。

グルドヴァッチ

1945年2月27日

[プラカノン]我々は酷い旅の後プラカノンの港湾倉庫にいる。出発はナコムパトンから[2月]25日午後12時[だった]。我々は旅の大半を日本軍隊輸送列車の屋根の上で過ごした。白熱の鉄製屋根の上に当たる強烈な太陽は充分過ぎる程良い。数両の空車両にPOW[戦争捕虜達]は乗れるのだが、其処に彼等は70人を押し込んだので、其れはもっと酷かった。近頃はかなり爆撃や機銃掃射があるので、僕は自分の‘屋根-上’におおいに感謝する！夜8時[に]我々はメナムの支流で、もはや橋が全く掛かっているスファン川(ナコムセッシ-?)に辿り着いた。爆破され無くなってしまった。ある種の竹製釣り橋の上を通過して列車の中味、主に弾薬、が積み込まれる為の列車が待機している他の岸、に移送されなければならない。一緒に一生懸命働

いた日本軍は明らかに急いでいるようだ。[夜] 11時前に停止した。カリ[川]の上を戻り列車の中に可能な限り多くの連中を。車両連が空になったその限りで。思ったとおり、[夜中] ちょうど12時に祭典が始まった！

最初の4発巨人が我等の上空を震動させた後、皆逸早く列車から降りたが。日本軍は我々を止めようとしたが、2機目がやって来た時はもはや阻止は無かった。さて不運なことには、土手の両側が水だった。我々は最終的に土手には居られたが、水に潜りこんだ皆は撃たれた。この粘ついた泥の中で逃げられるチャンスは無い；その泥濘の中に蹲ってじっとして居るしかなかった。だから土手の斜面側に横たわったままでいる、お互い身体を押しつけ怖気ながら。もし彼等がこの堤防を機銃掃射したとしたら、各弾は確実に当たるだろう。そしてもし又爆弾が一部弾薬を積んでいる列車に当たりでもすれば、我々はもう絶望的だ。これはきっちり2時間続行し、僕はこの2時間を簡単に忘れることはない。彼等は時限爆弾(?)から始め、それから焼夷弾を。飛行機連はかなり低空を飛んだ。最上空で100メートル、と我々は思った。土手に居る我々の真っ直ぐ上だ。指揮ランプがパッとつくのが見え、それから後上げ蓋が開き、中の明りが見え、そして2個の爆弾が落ちた。最初のは我々が列車の横に横たわっていた場所から橋に向かってほぼ50メートル過ぎ。(我々は橋からおおよそ250メートルの所に横たわっていた)。爆弾が押しつけられ、他の岸边に近づくのがはっきり見えた。しかし各機体[飛行機]は彼等の爆弾を少々早めに落した。徐々に上げ蓋が我等の真上に来て正真正銘の明るいキャビンを見た。最後に既に我々の少々前に爆弾が進み明らかに我等を過ぎて行くのが見えた。それから最初の爆弾が川の我等側に落ち、我々はこれで一卷の終わりだと思った。世評では140個余りの爆弾が数えられた。隠れ(?)爆弾の後、焼夷弾が来た。瞬く間に全ては火の海だった。騒音から察するに、彼等は向かい側の弾薬を爆破した。だから益々恐ろしく思うのは彼等が又我等側に向かって何か行動を起こすであろう。

我々がある程度下に横たわっているその車両連には未だあまりにも多い弾薬が有った。しかし彼等は素晴らしい月明かりではっきり我々が横たわっているのを見なければならぬ！煌く金属の巨人が赤い灼熱の中を右往左往荒れ狂うのは不気味な - 美しい光景だった。それはどうしても、彼等は我等側を後静かにさせておき、その悪夢の2時間後彼等は北西方面に消えて行った。安堵は強大だったが、長くは続かなかった。彼等が出て行って10分もしないうちに最初の時限爆弾が破裂した。土、石そして木の破片の雨[が続いた]。正確に15分…第3番目が察するに弾薬を当てた。いやはや、何と言う爆音!! ファン デルデン、ファン デ ヘーストと僕は立って話をしていた、爆風で地面に叩きつけられた。我々は神経の高ぶりを乗り越していたと見え、5分ばかりただへらへらと笑いが止まらなかった。しかし我々は今現在少々先に進みたい。日本軍からは許されなかった。しかしその渦巻いた破片等で我々側の一人の腕が壊れ(凄惨な光景)一人の日本人が腹を引き裂かれたことで、我々は500メートル先を戻す許可を貰った。後で爆発の中間休息は長くなった。最後の[爆弾]は翌日の午後3時半[に]破裂した!!

それはある意味で‘利口な’爆弾だった。結果：日本軍8名死亡、我々からは無し。爆撃の中、我々は翌日迂回路として船で川を渡り再び列車へ運ばれ、その中と上に積みこまれた。

ナコムパトンを出てから我々は飲まず食わずだった。特に渴きは災難だった、カリと他の排水溝があまりに汚く渴きに飲める代物ではなかった。日本軍はその時‘水作業’を指名した。我々は再びスファン方向へ戻る道に沿って2キロメートル歩き、其処で蒸気機関車に排水溝の水を満たした。忌々しい日本軍の冗談。飲み水は其処に無かったのだ。夜8時 [に] バンコク。しかし未だ食事も飲み物も無い。たっぷり36時間。我々は船で押し込まれメナム川を出航した。渴きは絶望的で、我々の大半は川から一気に飲んでる。我々は実際敢えてしたくない。大抵何百万人の町の裾近くを通る川の水、だが他に何がある。

[夜] 11時半近く我々はプラカノン (コントーイ?) に到着した。缶少々のお茶と我々からすれば良い食事が貰える! 肉が入っているのが見えた! 夜中空中にいた多い蚊にもかかわらず、我々は即寝た。大きな前進…我々には朝鮮人達が居なくなり今は日本軍を携えている。彼等は叩くことがより少ない。我々は倉庫に収容された。素晴らしい倉庫。余りにも近代的な倉庫で僕は蘭領インドでは見たことが無かった。何年も立って初めて再び電燈と流れ出る水道!!! 食事も我々の今までのよりかなり良い。

ドゥ フラウター

1945年3月10日

[チュンカイ] 再び引越しがあるらしい。RAMC [オーストラリア海軍] は既に引っ越した。今夜200名のイギリス人がワンポへ出発する。最後のオーストラリア人達はラトブリへ出発した。

グルドヴァッチ

1945年4月1日

[プラカノン] ここの状況は進歩していない。一番重要でないのは我々には電燈が無い。最悪なのは我々が塩辛い池の水を飲まなければならないこと、嫌な味…日本軍用には毎日水道からのタンク車が来て、又入浴も! 後は壊れた屋根のお陰で我々が夜中降り始めた雨で起きていなければならない。そして少なくとも雨季と来ている!! 莫塵を巻きしまい何処か乾いているところを探す。こんな風で我々は夜中じゅう凍えて座っている、時々夜中のある一時、まあしか毎晩少なくとも一回は。



ドゥ フラウター

1945年5月24日

[チュンカイ] 終にアパロン、ロンジンズそしてクウェからの病人達が到着した。その中にはドゥ ハースと他の連中；全員かなり痩せ細り、衰弱し血の気が無い。多くのマラリア（STとBT）、ベリベリそして黒水熱<sup>141</sup>、途中で3人死亡した。

ドゥ フラウター

1945年6月30日

[タムアン] 我々は目下既に1週間余りタムアンに居る。[6月] 21日僕は未だチュンカイ<sup>142</sup>のみで働いていた。午後僕は残った物を荷造りした。マッキントッシュは早朝船で出発しアトラナツソン[?]は一日前に。僕は[6月] 22日夜列車で兵舎と病院からの800人の病人と一緒に出発した。8時に[我々は] 整列； balan 点検 [荷物の検査] 等。その前に激しい雨と凄い嵐、強い雷と豪雨。その時再び雨が降り始めた。オープン車両からなる列車は早々にやって来た（約10時[に]）；一車両に付き50人。その時ターマカンの木造陸橋からカンチャナブリー駅へ向かう鉄橋がよく見えた。既に其処で[我々は] 11時から[午後] 4時まで果てしなく長い間立たされた（後で警報の為と分った）。夜中[我々は] タムアンの駅に[到着した]。其処から（約30分）キャンプへ向かって部分的に古い馴染みの道を歩いた。6時に[我々は] 兵舎に収容された。[...] 新しい研究所が目下建設中で、数日内に出来あがるだろう。[この] キャンプは結構広々としていて、大きな鴨池がある。しかしながら以前それはもっと大きかった。

グルドヴァッチ

1945年7月5日

[プラカノン] 300人がドンムアン飛行場へ行く。[彼等は] 新しい滑走路を敷設しなければならない。僕も賄い手伝いとして、一緒に行く。

---

<sup>141</sup> 熱帯マラリアの複雑化、血の破壊と腎臓の損傷を伴う。かなり暗い（‘黒色’）小便の症状により患者は命の危険にさらされる。（ベイツ 1981, 245）。

<sup>142</sup> 1944年5月からドゥ フラウターは昆虫 - 寄生虫学者としてチュンカイ・キャンプの研究室で働いていた。項目‘仕事’、ドゥ フラウター1944年5月15日の日記断片参照。

ドゥ フラウター

1945年7月24日

[タムアン] 昨夜再び激しい雷雨。それは7時に始まったので [我々は] 雨の中で時間通り豪快に身体を洗った。

## 抑留所の組織／日本人責任者と欧州人責任者

ディッケ

1942年6月1日

[タボイ (ビルマ)] 午後に我々は新しい大隊に配属された。僕は [J.H.] デ・フリース少佐 [指揮下] の大隊Aに属する、テウルケン中隊の、ルールス指揮下の第一小隊の、スフレイファー指揮下の第2部隊だ。

オットウン

1942年6月4日

[タボイ (ビルマ)] 今日、やっと日本人警備兵が持ち場に着いた。厳しい規則が作られた。逃亡したり、キャンプを許可無く出る者は有無を言わず撃ち殺す。ビルマ人との接触を図った者も全て同様だ。

オットウン

1942年6月28日

[イエ (ビルマ)] 10日に一度、働いた者たちに対して支払いがある。病人には何も出ない、なぜなら日本人は神聖なモットー、働かざる者食うべからず！を守っているからだ。通常、支払いはまだイギリス王ジョージ六世の顔が描いてあるビルマ・ルピーでおこなわれる。

オットウン

1942年8月18日

[タンビュザヤ (ビルマ)] 我々はもう1週間この新しいキャンプにいる。建物は、これまでと比べれば、まあまあだ。それに日本人の警備兵が居ない。大門の所に見張り所は作られ、そこで我々の中の2人が出入りを監視している。出ていくのは日本人に率いられた労働班だけだ。入ってくるのは、時に数人の捕虜が、仕事の後に自分たちで帰って良いと言われて入ってくることもある。幾つかの小グループは兵舎の外に火焚き場をつくっていて、自分たちで米や‘うまいもの’を、自分自身や他の何人かと作ったコングシー仲間のために煮炊きしている。日本人達は数百メ

ートル先の大きな建物に居る。彼らが我々のキャンプにくるのは朝夕の点呼のときと、作業班を連れにくるときだけだ。 […] ]

唯一の給水設備は水タンク 1 個で、主に雨水を溜めている。キャンプ指導層はこのため急いで特別の‘タンク監視員’を設定し、皆が所定の配給量を守っているかどうか監視させることにした。水浴や洗濯の余地はない。

ディッケ

1942年 9月15日

[タンビュザヤ (ビルマ)] 我々はここに残り、新しく50人の男達からなるグループに分けられた。将校、下士官、それに兵士は別々になった。我々のコングシーは4つの別のグループに分かれた [6, 7, 8, 9]。僕はグループ 8 だ。

ディッケ

1942年 9月17日

[タンビュザヤ (ビルマ)] また新グループ分けた。[日本の] 大佐の演説があった。グループ 8 には新顔がたくさん居る。僕はベンクとウィレムスの隣だ。別の兵舎に引っ越す。新 [捕虜] 番号 : 415.

オットウン

1942年 9月17日

[タンビュザヤ (ビルマ)] そして今や日本の警備派遣隊が来た。またもや日本人監視下になり、つまり多少なりとも自由な生活ともおさらばだ。炊事場のことで、もう始まった。(警備兵から見) 囲いに近すぎる煮炊き場は片づけなければならず、これに類する小さな制限がいくつもできる。僕は今グループ番号 8 にいる。

日本の上層部にも変化があったようだ。なぜなら今日、日本の中佐の演説を聞かされ、彼は今やビルマ支部全部の戦争捕虜収容所の司令官なのだ。この中佐は [ヨシタケ] ナガトモという名前で、フランス語で演説した。彼は食糧の配給に関しては第一に日本軍に補給する、などと話した。次が女性と子供達の番で、そして第三番目に戦争捕虜、最後に民間人収容所が食糧在庫の残りを受け取るのだ。

ディッケ

1942年10月16日

[ウェガリ (ビルマ)] 夕方に通告、[C.F.] ハーゼンベルグ少佐はここを出ていき、ドゥ・フリース少佐がその跡を継ぐ。11,500人の蘭領インドの戦争捕虜がジャワから、そして約3千人のイギリスやオーストラリアの捕虜達がシンガポールから来る。

オットウン

1942年10月16日

[ウェガリ (ビルマ)] 夕方、ハ [ーゼンベルグ] 少佐が公式に別れをした。彼は日本側スタッフから日本スタッフ部門、つまり総務部のメンバーに任命されたのだ。この部門はビルマ全域の戦争捕虜達に関係する部署だ。[……] ハーゼンベルグ少佐は新しい任務に就くために明日タンビュザヤに発ち、あちらで自分の部下を持つだろう。

オットウン

1942年11月22日

[ウェガリ (ビルマ)] 夕方早く、警備をしていた日本軍工兵が、別の部隊の兵隊と替わるのを見た。この新派遣警備兵は特別に監視をする訓練を受けているらしい、という話を聞いた。これは昨日の脱走事件<sup>143</sup>が原因だろうか？

リブンス

1942年12月6日

[ウェガリ (ビルマ)] 昨日の休日は土掘り仕事をしなければならなかった。我らの日本人予備役将校候補生が中に割って入ったため、日本のキャンプ司令官(下士官)は仕事を止めさせなくてはならず、翌日を特別休暇にしなければならなかった。今日は我々の休日を実際、楽しませてもらった、いろいろなごたごたの後でね。キャンプ司令官は初め我々を出動させたが、将校候補生が彼と率直な言葉を交わした後、我々はまた戻された。タンビュザヤの代理司令官が特別に午

---

<sup>143</sup> 3人の戦争捕虜が脱走した。‘日本軍による抑留者達の取り扱い’の章、オットウンの日記から、1942年11月21日参照。

後やってきて、キャンプ司令官の失った面目を取り戻す手助けをしてやった。その午後、25人の男達が2つのスコップで10分間土掘りをやらされた。完璧な茶番だ。

オットウン

1942年12月22日

[ウェガリ (ビルマ)] ‘トコ [店]’ はまた開店したが、売るものがない。トコはヤップがビルマの商人達にキャンプ内で物を売のを禁じてから出来た。トコは今は我々で経営している。

ルーヘ

1943年1月23日

[キンサヨック (タイ)] 兵役：8時起床ラッパ、8時15分から9時半まで点呼と朝食。ここには5千人余の男達が居る。朝食を取りに行くには時間がかかる (イギリス人2千人)。[夕方] 6時点呼 - 食事 - 急いで茶用の湯を沸かし、そして床の上で寝る。

ペルクイン

1943年2月8日

[リンティン (タイ)] ヤップは突然日曜日に兵舎と僕たちの荷物検査をした。道具や、銅線の束や、字を書いた紙やノートを探している間、誰も兵舎に入れなかった。僕は兵舎にそっと滑り込み、僕の日記を他の安全な場所に隠すことに成功した。もし日記を失ったら、強烈に後悔しただろう。これは絶対家で読んでもらいたいし、ここに書いたことは僕の一生を通じて影響を与える物になるだろう。

オットウン

1943年4月18日

[メザリ (ビルマ)] 今朝の5時半から6時の間に、我々のもう何度目かのキャンプに到着した。我々を待っていたのは貧弱でまばらなあご髭を付け、最低の悪夢の中でも見られないようなひどいご面相の韓国人だった。‘髭面男’がここの司令官のようだ。<sup>144</sup>

オットウン

1943年5月8日

[メザリ (ビルマ)] キャンプに戻ってきたところ、しばらくしてから全員に紙が配られ、自分の所有物を書けと言う。何人かの‘悲観主義者’たちは、ヤップはこれからより組織的に我々の所有物や大切にしている物を取り上げようとしているのだという。だけど僕はそれはあまりに悲観的な意見だと思う。

ルーヘ

1943年5月18日

[ヒンダト (タイ)] 鉄道は8月9日に完成しなければならない。

オットウン

1943年6月10日

[キャンプ108 (ビルマ)] ヤップはまたもや新規則を制定した。今日からは病人や‘内部作業員’<sup>145</sup>は普通の配給の2/3しかもらえない。医者に病人をもっと労働に送り出させるようにするための強制策だろう。

---

<sup>144</sup> おそらく‘髭面男’とはトゴヤマという名の日本兵であろう。

<sup>145</sup> キャンプ内の雑役をする人のこと

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年8月19日

[ターマカン (ビルマ)] 鉄道をシヤムに引き渡す。線路はヒンダトまで [通っている]。完成するまでには少なくともまだ一月は掛かるだろう。(ビルマの日本軍将軍はこれに不満で、鉄道隊日本人は叱りとばされ、これで人々をもっと追い立てて激しく仕事をさせるだろう) まだ毎日のように500人くらいのタミール人を乗せた列車が1, 2回、上流へ行く。これでもう2ヶ月以上になる。

ペルクイン

1943年8月19日

[チュンカイ (タイ)] 今日から、一日70人がこのキャンプを出てカンチャナブリとバンポンの間にある場所に行く。噂が渦巻いている。一人はこの後500人がそれに続くのだと言うし、ある者はキャンプ全体が出ていくのだという。我々が新しい目的地に着いたらすぐに、いわゆる‘フィット・パーティー’と‘ノン・フィット・パーティー’に分けられる。後のパーティーはシンガポールのチャンギに戻り、もう一つはマラッカのどこかの道路で働かされるのだという。何が本当で何が違うのか。静かに待とう、急きたてられてはいけない。

ルーヘ

1943年8月20日

[クィマ (タイ)] ア [ルテナ] 大尉は鉄拳で統治している。多くはすでに彼から殴られている。(さぼり屋-密売買-盗み、など) 規律を保つのはたやすいことではない。彼はPたち [日本人達] に対する態度も強い。全てのPは彼に忌み嫌われていることに気づいている。しかしそれで困るのはどちらだ?

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年8月29日

[ターマカン (タイ)] 今日、突然 (ポケット) ナイフ、地図などに対する日本の検査があった。チマヒ-ヤップも居た。[私の] 下痢は多少軽くなった。未だに (一月半) 粥食療法 (それにバ



ナナと粗悪なブラウンシュガー)。検査のために夕食は朝食となり、雨のために夕方の任務は無くなった。

オットウン

1943年8月30日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 夕方の点呼の後で、全員点呼の場所に残る [残らされた]。韓国人警備兵全員で我々の身体検査を始めた。小型ペンナイフとメモ帳が押収された。身体の直接検査の後、我々は立ち続けていなければならず、‘紳士方’警備兵は兵舎の中の所持品を徹底検査しに行った。やっと夜中の12時半頃になって兵舎に行くことが出来た。まるで何頭かの狂った雄牛が暴れ回った跡のようだった。野戦袋の中身はテンパチェス [寝床] の上にぶちまけられ、寝具は振り回されて、そこらに投げられていた。ペンだとか、ポケットナイフ、何人かが持っていた小さな手斧などが持って行かれた。紙や、何通かの手紙や日記帳も無くなっていた。僕はおそらくこのグループの中で何もなくさなかった唯一の人間だと思う。僕の小型日記帳やポケット写真アルバムでさえ、地図帳入れの中に、手も着けられずに残っていた。この代償として、今日は起床ラップが1時間遅く、仕事に行くのも1時間遅かった。

リブンス

1943年9月2日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 夜に突然全体点呼のラップが鳴り、我々は神経質になった日本人から身体検査を受け、その後夜中の11時半までその場を離れられず、その間に彼らは我々の将校に付き添われて全ての兵舎を隅から隅まで徹底的に調べ、懐中コンパスや手斧、ナイフやはさみを取り上げられた。多分これは予防措置として行われたのだろう。<sup>146</sup>

フェイケマ

1943年9月3日

[カンチャナブリ (タイ)] 我々は、5月初めにチャンギを發った29H-フォース ([H. R.] ハンフリーズ中佐指揮下の3,800人で、我々、H-2もその中に入る) の、体調の悪い者を全員ここに集

---

<sup>146</sup> ここでは1943年11月17日には蘭領インドに再帰しているという予言から派生し、広まった噂を指している。‘戦況に関する情報と噂’の章、リブンス1943年9月2日の項参照。

めることになる、と聞いた。ハ [ンフリーズ] 中佐とスタッフもここに来る。体調が良い者たちはバンポン（バンコク行きの鉄道で、かつて我々が下車した場所）へ集められ、十分なパーティーが揃ったら、サイゴンに送られておそらくまた新しい労働が始まるのであろう。最終的には日本かフォルモサ [台湾] に行き着くのだろう。少なくとも現在の所、我々は良好な状態にあり、全員がトンチャン・スプリングキャンプを出られたということだけでほっとしている。

ペルクイン

1943年10月5日

[ヒンダト (タイ)] 僕たちは、僕たちが決して逃亡しないという、意味のない書類に署名させられた。

ドゥ・フラウター

1943年11月3日

[カンチャナブリ (タイ)] さらに、我々は今日鉄道をタイ政府に引き渡すことになっている。

ドゥ・フラウター

1943年11月4日

[カンチャナブリ (タイ)] 我々のキャンプの入り口には今赤十字旗が立っている。さらに、大型 (6 x 6m) の赤十字旗をキャンプ内に置き、空襲警報時には地面に広げなければならない。

ドゥ・フラウター

1943年11月7日

[カンチャナブリ (タイ)] この2晩前から、キャンプ内は全体灯火管制されている。警備の日本兵は韓国人に代えられた (マランで一緒だった幾人かの警備兵に再び会った。！)。

ドゥ・フラウター

1943年11月9日

[カンチャナブリ (タイ)] キャンプBで、日本人司令官が演説をし、鉄道建設協力に感謝し、[死亡者]<sup>147</sup>と食糧不足に対して遺憾の意を表した。[……] 近々また日本軍に対する従順性宣言に署名しなければならないようである。さらに、健康な者はインドシナに行き、その他の者はタイに滞在するという。逃亡者は死を持って処罰されるであろう！

ドゥ・フラウター

1943年11月11日

[カンチャナブリ (タイ)] 健康な戦争捕虜は実際にインドシナに送られるようである。海上ではなく、陸上で行くことを祈ろう。私はどこに行くのであろうか？

ルーヘ

1943年11月12日

[クイマ (タイ)] 全ての工兵Pたち [日本軍工兵] は出ていった。彼らは多くの棒打を残していった。

ディッケ

1943年11月19日

[キャンプ55 (ビルマ)] 新諸命令 (通達) がナガトモ中佐から出た。全5万人のビルマとタイにいる戦争捕虜のうち、それぞれの支部から3千人ずつ (5支部有るから、[全部で] 1万5千人) は鉄道や道路などのために働き続ける。それぞれの支部から千人 (全5千人) はバンコクの病院に行き、戦争が終わるまでそこにいる。残りの3万人は、最初の3ヶ月間休息キャンプに滞在した後、ボンバウ近郊の農家や野菜栽培所で働かされる (可能であれば)。前述の1万5千人は1944年3月頃 (可能ならば) 日本に船で送られ、残り3万人からも人間が足されて、日本で労働させられるという。

---

<sup>147</sup> この日記記述中、一部が欠けている。日本側の検査の時、ドゥ・フラウターは日記を竹筒に入れて地中に埋めた。紙の一部はこの時白アリに食われてしまった。(NIOD資料、Indische dagboekencollectie, dagboek H.J. de Fluiter).

ディッケ

1943年11月20日

[キャンプ55 (ビルマ)] 今日700人近い戦争捕虜犠牲者 (第三支部 [からは] 655人ちょうど) の厳粛な追悼式典 [があった]。ラングーン [から] バンコクへの鉄道敷設の犠牲者だ (アメリカ人、イギリス人、オーストラリア人、オランダ人)。ナガトモ中佐、[A.] ピック中佐、そしてファーレイ少将がキャンプ70から、この追悼式典をこのキャンプ55で行うために来た。ナガトモは大きな十字架を持ってきて、それはこの、すでに300人近い男達 (オーストラリア人、イギリス人、オランダ人) が埋葬されている墓地に立てられる予定だ。今日、ナガトモは演説をし、その十字架に花輪を捧げた。彼は第一部 [鉄道] の敷設において、第3支部と第5支部の655人が、避けられない病気、伝染病、非情な空爆のために亡くなったことを遺憾に思う、などと言った。そして、我々は亡くなった仲間たちの墓を訪れることも簡単にはできなくなるであろうから、亡くなった仲間たちの墓に花輪を捧げる時であると。[……] 我々 ([ヨンクヘールA.E.H.] ローエルと私) の花輪は、G. ドウ・ヨングによって [J.J.] オディンクの墓におかれた。ナガトモの十字架には“ビルマータイ鉄道建設においてビルマで亡くなったオーストラリア人、オランダ人、イギリス、アメリカ人および3, 5支部の戦争捕虜の榮譽に捧ぐ。43年11月20日追悼式典がここで行われた。”と彫り込まれていた。

ディッケ

1943年11月21日

[キャンプ55 (ビルマ)] 今日、日本人収容所司令官 (日本の医師) はビルマータイ鉄道の正式開通に際して祝辞を述べた、我々の祝日だそうだ。(我々は豚何頭かなどを受け取った) 我々の司令官、[A.] ゴツチャル中佐はとても政治的にうまく返事をし、我々全員にとって、哀れなビルマを後にすることができることを思うと喜ぶべき日である、と言った。そしてタイではもっとましな宿舎、食糧、より多くの医療を受けられるように、と。

リベンス

1944年1月31日

[キャンプ114 (タイ)] 今のところ、僕たちは主にコレラ、チフス、天然痘、ペスト、赤痢の注射を沢山されまくっている。さらに、我々を年齢、職業などで分けたリストがまた作られ、その間にもまた健康か病気かで分けられた。この数日間マラリアにやられているので、今のとこ

る僕は病人だ。しかし、これも何時どうなるか分からない、多くの男たちが病氣届けを出している  
るので、ヤップたちはきっとリストをいじくりまわすだろう。

来る数ヶ月にこなされるべき大体の予定は次のようなものだ。僕たちは2月の終わるか3月の初めまでここにいる。それからカンチャナブリ（タイの）病院キャンプに行つて、身体を恢復させ、それからシンガポールに行く。4月には健康な者は日本に送られ、病氣の者とそれからもしかしたらそれ以外の者もインドシナに送られる。この予定がどれだけ守られるかは、将来のみぞ知る、だ。

ボム

1944年2月1日

[カンチャナブリ（タイ）] 奇妙に聞こえるとは思うが、日々は矢のように過ぎていく。8時の暗いうちに僕たちは起きる。8時20分点呼、9時にお粥を食べる（お粥プラス、かき混ぜた卵プラス、ジェルク [柑橘類果物] 2つプラス、バナナ2本プラス、塩プラス、ブラウンシュガー＝レモンライス）。9時半に作業者を整列させる。続いて飲み水を取りに行き、病氣の報告書。その他の小さな雑用で10時半までかかる。11時から11時半：体操。それからコーヒーをテンテン [ピーナツクッキー] を添えて飲む。その後は、10時半から11時と同様に読書の時間だ。

1時に昼食。ご飯にスープ、焼き魚 [\*….\*] それにジェルク。3時に作業者整列、それからエア・ジェルク [レモンジュース] 作り、また少し読書、4時半 [から] 5時病院訪問。その後沐浴、ゆで卵を食べ、もう少し読書。6時半に食事で8時に夕方の点呼。それからまた少し散歩するか雑談をし、9時半に就寝。夜は長い。10時間半、良好な食事と少ない疲労—このために僕は数時間も目覚めているときがある。夜が息苦しいほどの暑さであるためもある。

ペルクイン

1944年2月12日

[ヒンダト（タイ）] 昨日、純血オランダ人は登録され、印欧混血の者たちと分けられた。この2つのグループはその中でまた150人ごとの小グループに分けられた。150人のグループごとに将校がリーダーとして付いている。これが何のためなのか誰にも分からない。

ディッケ

1944年2月23日

[チュンカイ (タイ)] 今日、日本の医師によって検査された、グループ3だ。

ボム

1944年2月26日

[カンチャナブリ (タイ)] さらに僕がいえることは三日前から顎髭を無くしたことだけだ。日本の収容所司令官が、全ての顎髭を剃れと言う命令を出したのだ！今や僕は定期的にひげ剃りをさせなければならない。

オットウン

1944年3月28日

[タマルカン (タイ)] 何度も今朝は点呼が行われた。食事の後、ここの食事はキャンプ3 [カンチャナブリ] よりかなり劣るが、その後また再編成だ。僕は今、呼称番号46のグループにいる。ここではキャンプ3ほど早く金がなくなる。ここの店は商品がないので開いている時より閉まっている時の方が多い。

ディッケ

1944年3月31日

[タマルカン (タイ)] このキャンプ(1)で、[鉄道] 堤の建設で没した4万6千人のための記念碑が、先の3月12日に除幕された！

ルーヘ

1944年4月14日

[ノンプラドック (タイ)] 純血者と混血者が分けられた。全てのPパーティー [日本パーティー] は、少数 [の例外] を除いて純血だ。[これは] P [日本人] の政治だ。アジアはアジア人に。ビルマから輸送されてきたのも純血だ。

ウェストホフ

1944年5月8日

[ナコムパトン (タイ)] まず最初に我々はキャンプで全員検査され、3つのグループに分けられた。一等救急、二等と三等 [救急]、そして健康者。一等救急になった者は常に不合格とされ、ここしばらくは治らない。この [男たち] はバンコックの近くの場所に送られるだろう。二等と三等 [救急] の者も、時間がたったら行くかも知れないし、健康な者はビルマに返されて鉄道堤の仕事をする。この線路が毎日爆撃され、銃撃されていることを思えば、多くの者にとって死を意味することだろう。僕自身は一等救急の中に入れられた。

ボム

1944年5月8日

[タマルカン (タイ)] 僕たちのコングシーの中では [J.] ブールと僕と一緒に残った。散り散りになってしまったために必要となった組織再編で、僕たち (ともう2人) の司令官が、残り300人の兵士の上官として残っている。100人の他の将校たちは現在職なしだ。

ルーヘ

1944年5月8日

[ノンプラドック (タイ)] 3 [時] から6時まで全収容所が整列して立たされた。憲兵隊の検査だ。多くのカードや書類が押収された。Pたち [日本人たち] はまた大いに殴りまくった。

ペルクイン

1944年5月11日

[ノンプラドック (タイ)] 昨日午後、食事の後で急に点呼のラッパが鳴った。急ぎ足で向かう。いったいまた何が起るのか。それは不意打ち検査だった。僕たちは身体検査された。ポケットナイフ、はさみ、小ヤスリなどが没収された。そして僕たちが点呼の場所に立っている間に、兵舎が搜索された。ノートや書き物をした紙などが持って行かれた。またしても僕は日記が発見されなくて幸運だった。

ドゥ・フラウター

1944年6月3日

[チュンカイ (タイ)] 昨夜 [我々は] 2時間点呼で立っていた。チュンカイ病 [院] は閉鎖、我々はタカヌン本部に引き渡される。

ウェストホフ

1944年7月4日

[ナコムパトン (タイ)] 君に書くのは実に久しぶりだ、3週間ぶりだと思う。[……] その理由は、第一にはヤップたちが、全ての書いてある紙は没収し、破棄すると通告したからだ。君に宛てた手紙を、なにも忌々しいヤップたちの手に落とさせる必要はない、と思っていたのだが、しばらく経ってもそのようなことは何も起こらなかったのだから、落ち着いて書き続けることにした。

ボム

1944年8月31日

[タマルカン (タイ)] 僕たちがここに来て間もない頃、2回の家宅捜索があった。見つかった日記は取り上げられた！[……] 僕が [1944年] 1月1日から属していた第9支部は8月1日で解散となった。僕は今第2グループに属している。多分この地域にはおよそ2万人の戦争捕虜がいるのだろう。

ドゥ・フラウター

1944年10月31日

[チュンカイ (タイ)] 11月1日からオランダ第4と第5大隊は一つのオランダ大隊にまとめられ、第3大隊となった。[J.W.] プラッテ中佐が我々の司令官だ。彼の全てのやり方は、[K.] ドロスト<sup>148</sup>中佐を思い出させる。これまでのところ、我々の彼に対する印象はとても良い、ヤップに対する態度も含めて。

---

<sup>148</sup> K.Drost中佐はマランのランパル野営地の一部、ブーヌルウェタンの第10補給大隊で、戦争捕虜たちから非情に尊敬されていた収容所司令官。この第10補給大隊は‘ドロスト・キャンプ’などとも呼ばれた。(A.van Schaik 著、*Malang. Beeld van een stad.*(Purmerend 1996) 53p) .



ドゥ・フラウター

1944年12月20日

[チュンカイ (タイ)] 今のキャンプ内の仕事時間は9時 [から] 12時半と2時 [から5] 時半、川での水浴は12時半 [から] 2時と4時半 [から] 7時半、だから快適だ。食事はまたオランダ炊事場から [来る]。

ドゥ・フラウター

1945年1月5日

[チュンカイ (タイ)] 今やもし飛行機が [キャンプの] 上に来たときにも、もう警鐘は鳴らず、しかし全員小屋の中や木の下など物陰に隠れなければならない。本当の警鐘の時には全員が身近な隠れ場所に潜り込むこと。[...] 図書館の全ての本は (そしておそらくは個人の本も) 日本の判を押されるために提出しなければならない!

ドゥ・フラウター

1945年1月27日

[チュンカイ (タイ)] 僕の本が判を押されて返ってきた。提出したメモ帳も一緒に。

ドゥ・フラウター

1945年2月27日

[チュンカイ (タイ)] 昨日の朝、朝の点呼の少し後に、予期しない日本人の徹底的な検査があった。ナイフ、はさみ、ひも、糸などが全ての文具とともに取り上げられた。最後の物はラボ [ラトリウム] からも同様に取られた。それは11時に終わった。

ボム

1945年4月1日

[カンチャナブリ (タイ)] 僕の指輪をJ [日本人] に提出した。ここでは家宅捜索が多い。書き物をした紙もタブーだ。

グルドヴァッチ

1945年5月14日

[プラカノン (タイ)] 昨日、新しい日本人司令官、ノムラ中尉が来た。彼の趣味は鞘入りのサムライ刀で殴ることだ。初日の収穫。しっかり口を開けた額の傷3つ、警備員が怠け者で水くみに一緒に行かず、我々だけで行かせたから。そのために我々は矯正された！論理的だろう？あの男は超軍隊的だ。僕たちはまた、裸足か木靴を履いてだが、きちんと足並みを揃えて歩いている！！キオツケーケイレイーナオレーヤスメーチョテレ<sup>149</sup>は、いつも鳴り響いている。

仕事時間には誰もテンパット [寝場所] に居られない (仕事時間は6時から [午後] 1時と2時から [夕方] 6時) 読書もトランプも、大声で話すのもいけない。日本時間10時 ([我々の時間で] 8時) には消灯で、その後は話をしてはいけない。[...] 真夜中までは誰も便所に行ってもいけない。兵舎の中ではもうぞうりや木靴を履いてはいけない。規律だ！

ウェストホフ

1945年5月15日

[ナコムパトン (タイ)] 君に最後に書いたのは数ヶ月前になる、書き物をした紙を一切持っていてはいけなかったもので、僕はこれを地中に隠しておいたのだ。幸い結構良く保存されていた。

ボム

1945年7月1日

[カンチャナブリ (タイ)] 6月1日以来僕たちは日中は読書も遊びもできなくなった。書き物とはとくに禁止されている。このために時間はひどくゆっくりと過ぎていく。

ドゥ・フラウター

1945年8月3日

[タムアン (タイ)] この数日、点呼後の夕方に全員が日本の挨拶についての指示とデモンストレーションを受けた。またもや日本の軍人一人一人に挨拶をしないとイケない。

---

<sup>149</sup> ‘チョテレ’という言葉は、天皇の命令を意味する‘勅令’のなまったものと思われる。これは、ここでも出される命令に重々しさを添えるために使われたものであろう。

## 日本人による抑留者の取扱い

ディッケ

1942年5月24日

我々はメルグイの停泊地に居る。[...]今日の午後オランダ人将校達が盗みの取り調べで整列させられた。彼等は日本軍によって探し出された肉の缶詰や煙草を取り戻していたのだ。午後には下級将校と兵士達の上げ蓋の中も調べがあった。しかし成果は無かった。‘備え有れば憂え無し!’ブロム中尉が所謂窃盗で昨日の午後柱に縛られ、彼は今日の午後未だ其処に立っていた(お辞儀をした姿勢で)。[...]全将校達は顔に平手打ちを食らった。夜出発の用意をした。

オットウン

1942年6月2日

[タヴォイ(ビルマ)]全く何処にも日本人歩哨が居なかったので、朝食後多数が静かに門を出て行った。[...]すぐに数人の使者から、‘スタッフ’の指令により我々全員大至急自分達のキャンプにもどらなければならないことが通報された。日本のパトロールが間もなく送られて来て、キャンプの外で見つけられた各戦争捕虜は紛れも無く射殺されるだろう。この最後のは見せ掛けだけの脅かしではないことを知っているの、我々は大急ぎでキャンプへ戻った。

ディッケ

1942年6月6日

[タヴォイ(ビルマ)]逃亡した8名のオーストラリア人が射殺された、という通報<sup>76</sup>。[我々は]射撃の音を聞いた。ナガトモ大尉はこの事に責任を負うべきだ。

---

<sup>76</sup> これらのオーストラリア人達は1942年6月2日逃亡した。しかし彼等は捕えられ、そして1942年6月6日タヴォイの刑務所で処刑された。(ファン ウィッツン、133)。

オットウン

1942年6月7日

[イエ (ビルマ)] 今日はスポーツ競技が行われることだろう。この日本軍司令官はそれが好きだった。ところでこの粗暴な男、は我々から既に‘殴り屋’という渾名を貰っていた。

オットウン

1942年6月28日

[イエ (ビルマ)] 一度我々はインド・ルピーで支払われた。この紙幣はビルマの物とほぼ同じで、唯一の違いと言えばこの紙幣にはビルマの代わりにインドと印刷され、又この紙幣は少々大きめである。しかしこれでは何も買えず、中国人でさえもこの金を受け取らなかった。我々のスタッフはその金を交換してもらえる望みを持って‘殴り屋’に訴えた。数日後我々全員点呼場所で整列させられ、そして其処には演壇が設置されていた。住民の一部も太鼓で集められた。もはや新しい人々が入って来なくなって、少ししてから‘殴り屋’が外に出てきて演壇に上がった。POW's (戦争捕虜達) は2人の指揮官達により気を付けの姿勢を命じられ、‘殴り屋’に報告された。この男はムッソリーニの様な仕方で彼の視線を下に居る群集へ滑走させた。ビルマ人達は深くお辞儀をし、その後村長、1人の恰幅の良いビルマ人と我々の通訳K [クノットウンベルト] が演壇に上がった。‘殴り屋’はその時長い演説をし、それに余り酔い痴れてしまったので、彼は我等に目下殆ど全域のヨーロッパを彼の支配化においていた<sup>77</sup>ある壁紙貼り職人を自発的に思い出させた。凡そ10分程話しをした後で、‘殴り屋’は突然止め、通訳K [クノットウンベルト] に彼の言葉を訳する機会を与えた。この人は手短かに‘殴り屋’が述べた事を言い渡した。最初彼はオランダ語で、それから後は英語で言った。ここ以降から村長はこの英訳をビルマ語で村人達に伝達する事が出来た。この村長が話し終わった時、‘殴り屋’が再び始める、といった具合でこの過程は数回反復された。要するにこの全概要とは、日本政府によって法的に通貨として認証されたこの金銭の受諾拒否に、日本政府は失望の念を抱いた、というものだった。日本政府がこの無礼なやり方で侮辱されたとして、もしこれが再び起こるならば、銃殺される危険を伴うこととなった。<sup>78</sup> この大げさな上演はほぼ1時間もかかったが、ここから以降我々、戦争捕虜達には休日となった。午後我々は2人のオーストラリア人将校が彼等の間によりかかって泥酔した‘殴り屋’をキャンプ中引っ張りまわしていたのを見た。彼等は彼を宿泊所に連れ帰

---

<sup>77</sup> 彼はここでアドルフ・ヒットラーを意味している。

<sup>78</sup> この表明された脅迫にもかかわらず、ビルマ人達は日本で印刷された貨幣か、或いはキングジョージ1世の肖像画がついたルピー以外の貨幣を通貨として受け取るまで拒み続けた。(N I O D、蘭領東インドの日記収集、W.A.B.J.F.・オットウンの日記)。

り、寝床に寝かした。彼等の骨折りの褒美として‘殴り屋’から各人ビールを2本ずつ持ち帰れた。この日‘殴り屋’からは後何の問題も無かった。[…]

数日前になるが、ある朝、病欠届所には主として腹部に苦情を訴える又してもかなり大勢の連中が立っていた、その時[日本の]伍長が叫びながらやって来て、待っている者達に身振りでも5名必要であることを明らかに合図した。誰も‘反応しなかった’ので、この伍長は怒って泡を吹き、大きな棒を振り回しながらグループの方へ急いで走ってきて、数回痛い殴打を与えた。彼は6人に彼の後を続く様無理強いした。この出来事に注目していたホブス医師は即彼の診察場から出てきて小グループに辿り着き、この伍長にくっついてかかった。この男が後に引かなかったのも、ホブス医師はそれから日本人医師の居た分隊まで大股で歩いて行った。しかし彼が中へ入ろうとした手前に、伍長が彼に辿り着き、もはや労働者は要らなくなった事を伝えた。これらの6人はホブス医師と共に戻り、彼は再び診察を始めた。この伍長を我々はその日二度と見ることは無かった。

オットウン

1942年7月16日

[イエ(ビルマ)]我々は作業長/監視人として一人決まった日本兵の居る一定の作業グループに配分された。我々のグループ長は小さなかなり親しみ深い男だった；そんなにもう若くない。ケドコロと彼は称し、彼自身が言うには実際彼は日本人ではなく、中国人と朝鮮人の混血だと。ケドコロが我等に仕事を命令し、我々が文句も言わずに即仕事をすると、彼の目に嬉しさが輝き始める。時々‘叩き屋’は仕事を視察する必要性を感じていて、我々の中で彼が接近してくるのを最初に見た者は、他の連中に‘赤、リード!’と叫んで警告する。<sup>79</sup>そしてケドコロはこの警告する事に関しては、明らかに素早く気付いた。と言うのは、昨日‘殴り屋’がかなり突然我々のグループの所に現れた。ケドコロは彼がやって来たのを最初に見て、我々に“赤、リード!”と叫んで警告した。これは我等から大いに感謝された。そして‘殴り屋’が我等に近づいた時、皆が仕事に精を出していたので‘殴り屋’は是認してうなずきながら満足の低い唸り声を出していた。

---

<sup>79</sup>もしKNIL(蘭領東インド軍)で激しい発砲を受けた場合は、射撃練習場に危険を警告する為の赤の標的が高く上がった。金切り声：“赤リード!”で近くにやって来た各人は警告された。(ヒデオONSE、36)

オットウン

1942年7月25日

[イエ (ビルマ)] 点呼の合図ラッパが鳴った後、皆点呼場所へと歩いた。しかしその原っぱへ向かう入り口に‘殴り屋’が立っていて我々を阻止した。誰もその理由が分らなかった。ようやく我々全員揃って今何が起こるのやらと立って待っていた時、‘殴り屋’は我々が一人ずつ点呼場所へ通れる様指示した。通過時に皆刃の入った彼の侍刀でぶたれた。一撃をかわそうとした者は、2発食らった。殴打は背中の方にかなり強く命中し、相当長い間触れると痛かった。‘殴り屋’は普段ならしないが自ら点呼を行った。察するに彼は再び酔っ払っていて、通訳のK [クノットウンベルト]を通して、点呼の合図が鳴ったら我々は点呼場所にさっさと立っていなければならないことを知らしめた。この長い罵倒の後、我々の指揮官は‘殴り屋’から更に数回強烈な平手打ちを受けた。

夜10時に我々皆再び整列させられた。我等全員が点呼場所へ現れようとする以前に、実際気の狂った多くの日本軍によって我々は襲撃された。金切り声や棒の振り回しによって、我等の集団はまるで突つかれた蟻の巣からバラバラに飛び出して行ったかのごとく、大騒ぎで逃げ散った。既に我々の作業グループ側にいたケドコロは、我等を急いで多くの走行準備の整ったトラックに導き、我々がこの走行準備完了のトラックの一つに登らなければならないと示唆した。残りの捕虜達は殴打によりトラックへ向かって追い込まれ、この駆逐された連中がこの‘遊び’の目的が何であるかに気付いた時、それら(トラック)に殺到した。我々全員トラックに立った時、車は我等を乗せてある種の操車場へと走行した。ここには倉庫があり、我々はここから物資を走行準備完了のトラックに運ばなければならなかった。半時間はしっかりかかった後、我々は再び自分達のキャンプへ戻された。簡単な点呼の後、我々は本当に一箱の煙草を貰った。

オットウン

1942年9月7日

[タンビュザヤ (ビルマ)] 昨日本当は我々の休日だった。我々の日本人雇用者達の所では10日毎に休日がある。ところが日本軍が仕事をするよう我等を連れに来た時は、大変驚いた。多くの金切り声と殴打で仕事グループ連は作業場へと駆り立てられて行った。[…]

今朝点呼の時、我々は今自分達の休日が取れるだろう、と発表された。又雨が降っていて泥濘の中で働く必要の無いことが嬉しかった。しかしながら今日の午後再び日本軍作業班が現れた。その時既に暫く雨は上がっていた。そして我々は昨日と同じ場面に遭遇した：金切り声と殴打する日本軍。我等の指揮官は彼等を正気に返らせようと更に試みた。しかし効果無く、終に仕事グループは意気消沈して門を出、再び鉄道線路土手へ向かって行進して行った。だが1時間足らずして作業指揮官と何やら囁いていた我々の通訳がやって来て、その後この男はその指令

を大きく叫んだ。作業は中止され、少し経ってから我々は今1時間前よりもっと快活に再び門の中へと歩いて行った。ここに今回誤解が在ったのだろうか？

リブンス

1942年9月17日

[タンビュザヤ(ビルマ)](170日目[戦争捕虜の身で])。[我々は]午前10時から午後4時半まで灼熱の太陽の下で整列して立っていた、食事すら無く、新しい日本[人]キャンプ指揮官の演説を聞く為に。日本軍自体の[物資の]欠乏により何の改善も無い; [だから我々は]衣服、履物、薬、煙草、そういった物が得られない。[我々は]‘大型アジア’の為にタイへ向かう鉄道で働かなければならない。[C. F.]ハーゼンベルグ少佐は逃亡に対する捕虜宣言を要求している紙面に、我々をして日本軍の為に署名させる事を拒んでいる。軍人としてこの捕虜宣言をする事は出来ないのだ。報復として歩ける者全て、軽い雑用係、木材-、土木-、便所-、水関係雑用そして全将校に加えて従卒兵達、牧師、神父までも、明日は共に外へ出て行かなければならない。炊事班だけが病院内の病人達と後に残る; ‘非番人達’(病人達)は木を切ったり他の雑用をしなければならない。

オットウン

1942年10月1日

[ウェガリ(ビルマ)]労働時間がかなり長い。そして作業上の日本軍は(我々から日本軍工兵と呼ばれている、何故なら彼等は明らかにこの軍隊の土木部に属しているから)かなり気短かで簡単に引っ叩く。と言うのはたかが僅かな誤解でも彼等は殴りかかるのだ。これは朝から既に始まる。小鍋に粥を取りに行く時間は殆ど無く、或いは“スピード!スピード!(急げ、急げ)”と監視人の金切り声を聞く。その日本軍の一人で、同時に我々の監視人、は大変強暴で逸早く‘ビンタ屋’という渾名を貰った!そしてここで働いているこの短期間に我々全員既に彼のパンチを食らっていた。

9月29日火曜日は痛烈だった。我々は午後その時自分達のキャンプ近くで作業していた。運搬グループの一つの、ウニクスという名の男が、他の者が土をジュート袋に掬っていた間、彼の仲間と立話をしていた。ビンタ屋は明らかにこの立話が気に入らず、彼に背を向けて立っていたW[ウニクス]にかなりの一撃を与えた。その反射行動でウニクスは振り向きビンタ屋の顎を右側から一撃した。この男は後ろ向きに引っくり返り地面にどしんと倒れた。我々とウニクス、恐らく彼がここで最も脅えあがった。ビンタ屋はもがいてゆっくり体を起こし、その間、獣の様にW.の様子を覗いながら彼の銃を掴み、鞘から長い銃剣を取り出して銃にカチ

ッと付けた。この全行程の間この日本兵は前かがみの姿勢のままこの‘張本人’を覗っていた。その時、恐ろしい唸り声でこの銃を前に突き出して彼はウニクスに飛びかかった。我々は恐怖から硬直して突っ立っていた。ウニクスは、腹に危険な切り傷を受けるのを避ける為素早く横に向きを変えることが出来た。しかし銃剣は彼の背中をかすめ、かなり深い切り傷となった。ビンタ屋はその時反対側に立ち、再び突き刺す姿勢をとった。他の日本兵の割り込みでビンタ屋はちょっと気が散り、労働者達の内の数人による叫び声に向かって、逸早く日本人指揮官と大尉が通訳と共に急いでやって来た。ちょうど間に合った、というのはビンタ屋が彼の同僚を払いのけて再び突き刺す姿勢をとっていたからだ。大尉は何やら日本語で怒鳴り、ビンタ屋は他の日本兵によって彼の宿舎へ連行された。ウニクスは通訳により包帯をしてもらいに病院兵舎へ連れて行かれた。夜、夜間点呼の時日本人指揮官は、我々戦争捕虜達というものは日本の兵隊達の命令に遅滞無く素直に従わなければならないのだと公表した。日本兵を殴れば死刑となった、何故なら大日本帝国軍隊の一員を殴った者は、実際天皇陛下、日本の皇帝を殴った事になるからだ。分別の在る日本人大尉はこの事件に関して他には何の処置も取らなかった。ビンタ屋を我々は作業で二度と見る事は無かった。配置換えされたのは確実。昨日、9月30日、このキャンプで又動揺があった。その数日前に我々は書類を受け取り、その中にはとりわけ我々戦争捕虜達が逃亡を試みる事やその逃亡を助けることはしない、という宣言が記述されていた。我々の指揮官であるハーゼンベルグ少佐はこれがジュネーブ協定に記載された取り決めに反しているから、この宣言には署名しない様忠告した。さて午後になって大佐（もしくはそれより上位の）を含む[日本の]将校達のグループが我々のキャンプに入って来てH[ハーゼンベルグ]少佐と我等の将校グループとで話し合いがあった。その後すぐ日本-将校連グループは消え去ったが、彼等だけではなかった。ハーゼンベルグ少佐と我等の全将校達を一緒に連れ去った。

オットウン

1942年10月4日

[ウェガリ(ビルマ)]午後6時にこの仕事は既に停止され我々はキャンプへ引返した。キャンプへ着いて即我々は点呼場所で整列させられた。H[ハーゼンベルグ]少佐と他の将校連が逮捕から解放された。H[ハーゼンベルグ]少佐は我々に演説した。彼と他の将校達はこの逃亡しないという宣言に、やはり署名してしまった、と。特に日本の参謀が表明した脅迫が彼をして署名させる決心に至らしめ、そして彼は我々にもこの当の文書に署名する様提案した。彼はこの宣言が強制的に署名さされたものである為、法的効力の程は疑問視していた。この演説後我々は全員紙を受け取り、そこには我々が逃亡を試みることなく、或いはその逃亡を助けない、という文書が載っていた。



オットウン

1942年10月5日

[ウェガリ (ビルマ)] この日は又もや動揺で始まった。朝の点呼の時4人足りない事がわかった。その中の一人は我々の小隊長、[P. L.] ファン H [ヘーメルト] 大尉だった。4名全員は、僕が聞いたところによると、昨夜の宣言に署名しなかった。幸運を祈るよ、君達！我々がこの事から更に不愉快な事に遭遇するかどうかが気になる？[...] 午後既にこの逃亡の調査が始まり、ナガトモ中佐が自らやって来て色々な連中に尋問した。誰も勿論その事については知らなかった。

ディッケ

1942年10月5日

[ウェガリ (ビルマ)] 4人逃亡[した]、それはファン ヘーメルト大尉、[兵士E. F.] ポティー、[兵士R. H.] ホフマン、スヒュールマンだ。

オットウン

1942年10月8日

[ウェガリ (ビルマ)] この4名の逃亡者達のすぐ隣りに横たわって居た連中、‘仲間’、が翌日朝から晩まで気を付けの姿勢で日本人歩哨の傍で立たされている。この日は特にとても暑く、数人が気を失って倒れた。彼等は水を掛けられ再び気を付けの姿勢で立たされた。食事も貰えなかった。10月6日から7日の夜にかけて彼等は自分達の兵舎に戻され、彼等の処罰は終わった。日本軍はこれらの連中がこの4名の逃走者達の計画を確かに知っていたに違いないと仮定した。

リブンス

1942年10月20日

[ウェガリ (ビルマ)] 今日は傾斜面で仕事をした。この作業を先導している日本人予備将校候補生の朝の報告では、我々が疲れているというのが彼の印象だった、というのが、9日間そのよう

な食事でボロン<sup>80</sup>の作業をするには相当骨が折れるので、彼はその点での的を射ている。食後の休憩はほぼ1時間長くなった（2時間半）。[我々は] 後で全員4時に兵舎に帰る事が許され、明日は我々の休日となる。

オットウン

1942年10月31日

[ウェガリ（ビルマ）] 5時半頃に上級日本将校が仕事先にやって来た。この将校は幸い長くは視察しなかったので、我々はやはり時間に間に合ってキャンプに戻る事が出来た。ここで聞いた事は明日の休日が実施されないであろうという事だった。この視察していた日本人将校は明らかに仕事に関して満足していなかったのだ！

ディッケ

1942年11月7日

[ウェガリ（ビルマ）] 数日以来我々の為の市場が閉ってしまった。我々はやみの塩、チャベ[唐辛子] そして卵を買っている。

オットウン

1942年11月21日

[ウェガリ（ビルマ）] 今朝点呼の時3人足りない事が分った。この3人は昨夜既に逃亡したとの話しを聞いた。それは僕の知り合いである [Th. H.] ファン ハースン、 [H. R.] ネリスンそして [A. N. J.] フレイデヴーフだ。成功を祈るよ、君達！ 3時に再び全員整列し、我々は又も、そして多分20回は間違い無く数えられた。もはや誰もこのキャンプから出る事は許されなかった。

---

<sup>80</sup> ‘ボロン’ 或いは ‘ボロンガン’ で一人につき一日に運ばなければならない土の量が意味されている。項目 ‘仕事’ も参照。

ディッケ

1942年11月21日

[ウェガリ (ビルマ)] 午後我々が昼食に帰宅した時、3人が逃亡したと聞いた：ネリスン、フレイデヴァーフドそしてファン ハースン (グループ15, 16そして9)。

リブンス

1942年11月23日

[ウェガリ (ビルマ)] 土曜日の朝 [11月21日] 作業から又3人 (印度人達) が逃亡した；午後の休憩前と推察される。休憩後午後の点呼の間気付かれ報告された、其れから即武装した日本軍と約20名のビルマ人からなる一団により搜索された。今のところまでは幸い成果は無い。このキャンプと同様仕事でも監視規則がかなり厳しくなった。このキャンプで門を出入りする者は皆届け出なければならぬ一方、武装した日本軍の搜索は続いた。キャンプの外に在る炊事場、マンディ場 [洗い場] そして給茶場は出入りが激しので、その瞬間彼等の頭が既に混乱して、全てちょっと運を天に任せれば逃亡 (特に印度人達にとって) は今尚簡単なのだ。

オットウン

1942年11月25日

[ウェガリ (ビルマ)] 再び4人が脱走した。1時間半余り [我々は] 気を付けの姿勢で立たされ、20回は数えられた。勿論多くの殴打が飛んだ。約30人、皆4人の逃亡者のすぐ近くに寝ていた連中だが、目下何時間も硬直して気を付けの姿勢で歩哨の傍に立っている。

リブンス

1942年11月26日

[ウェガリ (ビルマ)] (240日目) 昨夜以来起こった事は、ドイツの強制収容所と簡単に比べられる。夕食後要するに又しても4人が逃亡したと報告され、以来地獄が勃発した。6時半から8時半まで我々は日本軍による厳重な監視と殴打を受けながら全員気を付けの姿勢で立たされる。逃亡者達 ([F. A. M.] ハルトリンク大尉、[J. H. W.] ドウ ロシェモン大尉、ヘルマンズ中尉そして[G.] クヌスター軍曹) の仲間達は召集され、彼等が何時に逃亡したかはっきりするまでそのグループの前で酷く殴打された。情報を与えることが出来るのは誰かと聞

かれ、そして全グループが翌朝まで気を付けの姿勢で立たされるだろうと脅迫された後（その間に色々な病人達が気を失って倒れた）、我々は解放された。

しかしその仲間達は今も尚、既に25時間余り氷の様に冷たく、そして息が詰まる暑さの中に立っている；何人かはズボンだけ身につけ、食事抜きで。彼等の多くはかなり年配だ。数人が既に気を失って倒れ、一人は顎骨骨折の殴打を受けた。棟監視人達（夜中毎時間各グループから一人が夜警しなければならず、逃亡の場合は彼の責任だった）はかなりの苦境に立たされた。今朝数名のビルマ人の売り子達がまず木に縛られた後、獣以上の残酷なやり方で鞭打たれた。察するに既に一人は銃殺されていた。日本の援軍が到着し監督は更に厳しくなった。

ディッケ

1942年11月26日

午後間に我々は更に3名のビルマ人が木に縛られていたのを見た。最初日本の曹長により1人が運ばれ、[我々は]それから銃声を聞き、続いて2人目のビルマ人が連れて来られ、再び我々は銃声を聞いた。僕は彼等が射殺されたとは信じないが、これらのビルマ人達がこの逃亡の手助けをしたと思われるので、日本軍は逃亡した捕虜達に関する更なる情報のみを得ようと一生懸命だったのだ。このビルマ人達はとりわけガスマスク袋を所持していた。我々が昼食時に帰宅した時、我等の30人は未だ尚日本人歩哨の前で気を付けの姿勢で立っていた。数人はもはや立っていられず地面に倒れていた。其処には年配の将校達、中でも[P.] ラウウェンホルスト海軍中佐、[C. H.] パリス（52歳）大尉等が居た。更に多くが地面に伏していった。3時に我々が出動した時、彼等はその場所で休めの姿勢で立ち、座ることが許され、少々の飲み物を貰った。午後5時に我々が帰宅した時、彼等は未だ立っていた。[...]

夜、夜間点呼でもその約30名の処罰者達は未だ解放されていなかった。9時15分に我々は再び点呼の為整列しなければならず、そして公表された：未だ誰かこのキャンプから逃亡する者がいる様なら、オランダ人キャンプ指揮官、小部隊 - グループ指揮官そして通訳が射殺されるであろうと。夜10時になって約30名の処罰者達は解放された。パリス大尉の入歯は日本軍により彼の口内で打ち砕かれた；他の将校も一撃を受けたので、彼の鼓膜が傷ついた。隊列の1人でも気を付けの姿勢が良くなければ、全員が一撃を受けた。夜酷く虐待された約5名のビルマ人は今だフェリー側にいる。

ディッケ

1942年11月27日

[ウェガリ (ビルマ)] 夜通報があり、仕事の後で歌う事や音楽を奏でる事はもはや許されなくなった。

オットウン

1942年11月27日

[ウェガリ (ビルマ)] 夜間点呼の後、キャンプ運営の一員であるドゥ フリース少佐が日本の参謀に代わって我々に通知しなければならない事があると述べ、それは我々の内の誰であろうと新しい脱出においては罰として銃殺されるであろうということだった。[それは] 全く快い響きではない。

リブンス

1942年11月28日

[ウェガリ (ビルマ)] 27時間立ちづめの後、かわいそうな連中は終に解放され彼等のグループによって必要だった良い食事で持て成された。不思議なことに誰もが病気にもならず殆ど全員が翌日再び仕事をしていた。他には逃亡の試みがオランダ人キャンプ指揮官、小部隊—グループ指揮官そして通訳の処刑という結果を招くだろう、ということだ。

オットウン

1942年12月1日

[ウェガリ (ビルマ)] 我々が戻った時、10月5日 [1942年] に脱出した3人の逃亡者達が再び捕獲されたと聞いた。物凄く残念だ。その事から何が起こるのだろうか？

リブンス

1942年12月3日

[ウエガリ (ビルマ)] 一昨日タンビュザヤからの連中により、最後の逃亡者達 (クヌースターを除いて) が武装したビルマ人達により捕まったというがっかりするニュースが入って来た。察するにTh [タンビュザヤ] の刑務所服役中である将校達は銃殺される事だろう。

オットウン

1942年12月3日

[ウエガリ (ビルマ)] 今日日本軍はとりわけ '温厚' だった、というのは数人の通りすがりの売り子達が我々に彼等の物資を売る許可を得たのだ。僕は一袋の砂糖を買った。午後数人の日本兵士達が我々の仕事場の近くにある大きな水溜りに手榴弾を投げた。それはカリ [川] の名残だと思う。爆発の後表面に死んだ魚が浮き上がり、それを我々が取って持参して良いことになった。夜キャンプでその魚は焼かれたが、それらはとても小骨が多く泥臭い味がした。

ディッケ

1942年12月7日

[ウエガリ (ビルマ)] 夜祈祷会へ。目下再び毎晩行う事が許されている。又店も開店した。仕事先で数日は日本軍から多少許されたが、[もはや] 何も買うことは許されなくなった。

オットウン

1942年12月13日

[ウエガリ (ビルマ)] 3人の拿捕された逃亡者達が銃殺された事は今日の午後我々に知らされた。その事で一瞬沈黙する。それは10月5日 [1942年] 逃亡した3人の将校達だった。

ディッケ

1942年12月13日

再び刑務所に入れられた3人の逃亡した将校達が、今朝T [タンビュザヤ] で銃殺されたという情報。世評では1人の大尉が米神を撃たれ、他の将校は耳を、3人目は目を。我々の将校連の誰も処刑には立ち会わなかった。判決の執行後、ハーゼンベルグ少佐が呼ばれた。夜無言の抗議として静かな点呼。ハーテリンク大尉 [は] (2 [度目の]) 結婚 [そして] 4人の子持ち。

オットウン

1942年12月22日

[ウェガリ (ビルマ)] 店の閉店は日本軍の気に入らない何かが起こった時、日本軍が即適用する罰則だ、例えば2日前に起こった事の様。我等の連中の2人が夜間点呼の後、密かに森の囲いの外で少々の薪を集めていたところ、1人の歩哨が外でぶらぶらしている彼等を見つけ即警報を鳴らした。この2名の罪人達は約1時間歩哨の近くに立ち、それから再び彼等の兵舎に戻った。しかし即店は閉められた。集団罰則の適用は心理的に考察すれば、かなり効果的に作用している。何故ならもし誰かが日本の規則に反する何かをしようとするなら、罪の無い者達が彼の犯罪の為に処罰される、という事を知ってその前に彼は止めるだろうから。

リブンス

1942年12月24日

[ウェガリ (ビルマ)] ビルマ人でないビルマの衣装を着けた3名が日本軍により逮捕されたので、一昨夜突然2番目の逃亡グループが脱出したグループ指揮官と小部隊組長がTh [タンビュザヤ] に出頭させられ、彼等はその連中と対面させられる。<sup>81</sup> 今までの所それに関してニュース無し。

---

<sup>81</sup> この捕虜達、Th.H.ファン ハースン、A.N.フレイデヴーフド そしてH.R.ネリスンは1942年11月20日逃亡した。

リブンス

1942年12月25日

[ウェガリ (ビルマ)] [第1クリスマス] 日本軍は脱出した逃亡者達を、確かに彼等に間違いは無かったが、以前のグループ連が当人等であるかないかを白状させられていた間、このキャンプ内で見せつける為、まさしくこの日を選んだ。一日中彼等は歩哨に面して座り、罪人として縛られ、日本軍が巡らせた最も卑劣なやり方だ、何故なら彼等にはやはり既に死刑が宣告されていたのだから。 […] 神父の説教中 [夜間叙階中] 捕虜達は連れて行かれた、死に向かって。

オットウン

1942年12月25日

[ウェガリ (ビルマ)] 我々には既に聞こえていたが、トラックがキャンプの中に入って来て歩哨の所で止まり、手を背中で縛られた3人の捕虜達が車から飛び降り、哨舎の隣りの地面にすわらされるのを見た時、祭りの喜ばしい気分 [第1クリスマス] 大きな水がさされた。3人の内の1人に僕は見覚えがあった、それはファン ハースンだった！それから他の2人はネリスンとフレイデヴーフドだった。この3人は約1ヶ月前にこのキャンプから脱出した！我々の数人が彼等に手を振り言葉を送った。しかしこの3人は対応しなかった。 […]

僕が集会の終了後、兵舎仲間のグループと一緒に歩き、歩哨のかなり近くに沿って歩いた時、誰かが囁いてこの3人の捕虜達に激励の言葉をかけた。しかしファン ハースンは多少怒りっぽく小さい声で言った：“僕は君等のことを、そして君達も僕の事を知らない！”そしてその時僕は何故この3人が日本軍によってこのキャンプに戻されたのかを理解した。勿論身分証明の為だ。恐らく彼等は3人とも‘印度人’であることから、察するに日本軍は彼等の身元が確かでなかったのだ。其れゆえに彼等は今日の午後我々が手を振った事に対応しなかったのだが、日本軍はこの反応をマークしていたと思う。

オットウン

1942年12月27日

[ウェガリ (ビルマ)] 我々がキャンプに戻って来た時、この3人の‘囚人達’はもはや歩哨の近くに座ってはいなかった。彼等は今朝連れて行かれタンビュザヤのキャンプ後方で銃殺された。言わば：殺人！僕は一晩中落ち込んだ。



リブンス

1942年12月27日

[ウェガリ (ビルマ)] 今日逃亡者達は銃殺され、その為に点呼で再び絶対の沈黙を遵守した。

ディッケ

1943年2月11日

[ウェガリ (ビルマ)] 休日 (日本の祭日)。<sup>82</sup>ある将校が気を付けの合図で姿勢をとるのが遅かったので朝 [我々は] 2時間点呼で立っていた。それから巡查部長が日本兵の服を売ろうとし、午後にはパウル・ディスンが地図の写し描きにより捕まった。

ペルクイン

1943年3月5日

[リンティン (タイ)] 棍棒を持った日本兵が病院兵舎連に入り、病人達を叩き出し彼等を鉄道に追い立てた。もはや確実に自分の足で立つ事の出来ない者達だけが残って横になる事を許された。病人達へ道具を供給する間、一人が地面に倒れた。この若者を僕は他の者の協力で兵舎へ担いだ。僕達は彼を半死半生の状態で置き去りにした。

オットウン

1943年3月23日

[アナクイン (ビルマ)] ‘日本人野郎’ は今日又しても不機嫌だった。騒がしい金切り声で兵舎連を震動させながらその内の一人がやって来て全病人達を外へ追い立てた。病気の哀れな連中は他の日本軍により点呼場所へ集められ作業へ向かって運ばれた。病気の調理人達の代理を務めていた数人の連中も作業へ送られた。その結果食事は遅れて出来あがった。この事で医者は異議を申し立てたが、この異議申し立ての唯一の成果は、病人達が多少早めに仕事を止めキャンプに戻る事が許されたことだけだった。

---

<sup>82</sup> 紀元節のことで、日本の天皇即位を記念する祝日。

ペルクイン

1943年3月26日

[リンティン(タイ)] 昨夜キンサヨックから逃亡した2名の印度青年達が再び捕えられこのキャンプに閉じ込められた。ジュネーブ協定に反して日本軍は彼等を今日の午後銃殺した。

ボム

1943年4月18日

[キャンプ80(ビルマ)] このキャンプ内には既に4人の墓がある: オランダ人1名、オーストラリア人1名そして2名のアメリカ人。全4人赤痢[で死亡した]。これは益々増える一方だろう、何故ならJ[日本軍]は僕達毎日余りに多くの病人達がこのキャンプに残っていると見なし、少なくとも僕達の70%は仕事をすべしと要求している為だ。その結果僕等数人の病人達を目下外部に送らないといけない。

グルドヴァッチ

1943年4月26日

[ターサオ(タイ)] 細菌による赤痢の明らかな症状を持った3人が運ばれて来た。[彼等は]罰として蹴り倒され、鞭打たれ、其れから3時間余り満杯の荷物と一緒に焼けるような太陽の下で気を付けの姿勢をして立たされている。動くと殴られる事になる。その人間の屑がやっている事を見ると、うんざりする。最終的に彼等は病院キャンプに収容される。

グルドヴァッチ

1943年4月27日

[タンピ(タイ)] 我々がターサオから出発する前に更にドラマが起こった。一人の日本人中尉が余りにたくさん物を我々が所持していると見なせば、全バラン[荷物]を取り上げた; 衰弱して見えるなら、全て[持っている物]。それは常日頃のように、多くの殴打や蹴り上げのもとで起こる。道中用に水を沸騰させていた為点呼に遅れた11人が、裂けた竹で殴打され、[その結果]額、背中そして腕に開いた傷口。それは日本軍に相当愛好される懲罰の一つ! そして彼等が更に好んでする事は、股を蹴ることだ。

オットウン

1943年5月2日

[メザリ (ビルマ)] 我々は昨日余りに厳しくそして余りに長く - 夜中遅くになってやっと戻って来た - 働いていたので、全労働者は今日医者から‘非番’を貰った。そして日本軍はこの集団の疫病申告を‘ぐっと堪え’我々をそっとしておいた。この現実をヒル、ヨングスマと僕は再びカチャンイジュ - クッキー [小さな青エンドウ豆] を揚げて祝った。

オットウン

1943年5月7日

[メザリ (ビルマ)] 今朝1人の監視人が我々をカタコンベン<sup>83</sup>には連行せず、その反対方向へ行かせた。我々は、全く意味が判らないまま、彼の後を歩いた。一瞬我々は他のちょっとした仕事を修復させられる、とぐらいに思っていた。しかし約3キロメートル歩いた後、彼は引き返した。だから我々は1時間遅れてカタコンベンに到着した。この余分な遠征を大変だとは、寧ろ全く思わなかった。しかしこの日本軍作業長は違った意見を持っていて、ここに何の関与もしていない我々のグループ指揮官に数回強力な殴打を与える事によりそれを知らしめた。

ドゥ フラウター

1943年5月17日

[タカヌン (タイ)] 夜間点呼の後、日本人指揮官は演説し、これはイギリス人の通訳により訳された。彼は食事の改善 (より多くの肉や魚)、病人達用にもっと多くのテントと立地条件の改善を約束し、そして多くの死亡者に彼の遺憾の意を表明した。再び成り行きを見守ることにしよう。

---

<sup>83</sup> これは5メートル深さの発掘から硬い、石の多い土を鉄道用に採って来なければならなかった。項目‘仕事’、オットウン1943年5月2日の日記断片参照。

グルドヴァッチ

1943年5月20日

[ウォンピン (タイ)] 2回虐待されない日は無い。竹製棍棒、銃の台尻、銃帯で叩る、踏みつける…好んで [相手に対して] 下腹部そして倒れると頭に。サディストの野獣達。我々は膿んでいる傷口に苦しんでいる。其れが更に困難にさせるのは、全てが痛んで夜中横になれないのだ。  
[…] 我々がタンピで置き去りにしたその病気の男は其処で死亡した。言うなれば野垂れ死に。グループ5が其処へ到着した時、彼は死んでいた。

フェイケマ

1943年6月8日

[トンチャン (タイ)] 今朝 J [日本軍] は全病人を整列させ彼等の数を数えるなどという冗談をやったのけた。其れは酷い見世物だった。日本軍が見てまだ充分働けるといふ50人が引き出され、連中は今日の午後内部の仕事をさせられる。

ボム

1943年6月8日

[アンガナン (ビルマ)] ここ数週間雨が益々酷く降り続けているので、我々全員ぬれっぱなしだ。その結果我々908人中、601人があれやこれやの病気を持っている。にもかかわらず日に470名の労働者を出さなければならず、多くの病人達は目下働かされている！

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年6月29日

[キャンプ120 (タイ)] 病院キャンプでのみ多少休養できるが、日本軍はマラリア患者達さえも働かせる。点呼でも多くの病人達が (1時間半雨の中泥の水溜りに) 立たされている。全く悲惨。[自分の] 腰が6センチ細くなってしまった。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年7月3日

[キャンプ120 (タイ)] 昨日 [僕は] 重症のマラリア [を発病した]。最初はゆっくり出来た、それから [僕は] 再び砂を掘らされ、 [これを] 約20メートル上の堤防へ運ばねばならなかった。 [僕は] 余りに衰弱、鞭打たれた。 [僕は] 6回叩かれた。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年7月15日

[キャンプ120 (タイ)] 昨夜260名の病人達の内200名が点呼に出てこなければならなかった(60人の重病 [人] 以外)。彼等は雨でずぶ濡れとなり半時間余り点呼場所に立たされていた。日本軍はいつも其れを楽しんでいる！夜中5時か6時頃、日本時間(3時から4時)帰宅する者は再び朝の点呼にも立たされる！多くの点で彼等はサディストだ。過労から作業で気を失う者は、意識を回復するまで殴打される( [それは] 昨日起こった)。

グルドヴァッチ

1943年8月1日

[クウェ (タイ)] しかし我々の取り扱いも益々悪化している。目下既に何週間も長く休み無しで働いている。暗い内に出て行き、暗くなって戻って来る。夜中湿気の充満する雨漏りのテントで横になる。何も洗えず全てが腐る。フェルステイグ医師が異議を申し立てたが、オサカタ中尉は興味を示さなかった。病気或いは疲れた者は死ぬしかなかった。墓場で皆休養できるだろうから… “カラウ セムア マティ [もし皆が死んだら] - オーケー。” 重病人達は鞭打たれて堤防へ上がらされた。40 [度] の熱があるマラリア患者達は川に押し込まれ、自分達は健康でありそして作業をしたい、と言うまで水の中に留まっていなければならなかった。夜11時に自らの仕事をし終えなかった者、其れは凄くたくさん居るが、素っ裸になって中腰で自分の道具を頭の上に載せていなければならない。よろついたり動く者は鞭打たれた。‘最も馬鹿げた’場所にやってくるそれらのメルトゥス [蚊] とマラリア蚊で静かに立ってられるかってんだ？

朝鮮人達の中に1人独創性のある男が居る様だ。最近の発明は：胸毛 - と陰毛を焼き落す、小片の竹を肛門と口に代わりばんこに押し込む、そういった事。名状しがたい。彼等が良い機嫌の時、我々は(今だ裸だ) In Holland staat een huisを歌わされ踊らなければならない。むかむかする。クラネンブルグは罰としてマラリア - 発作をあまりに虐待されたので、彼は再

び意識が戻ることなく数時間後に死亡する。〔N.〕トップホーヴェン、〔J.〕スタイガーそしてフランスは出て行く。

ルーゲ

1943年8月11日

〔クウィマ（タイ）〕今だ毎日何百人の日本人が奥地へ向かって行く。<sup>84</sup> 同様にタンビ人達。彼等も鉄道で働く。彼等は所謂契約当事者だ。しかし彼等も酷く嘆いている。中国人達も同様。その道に沿って数十人が死んだ。

オットウン

1943年8月27日

〔キャンプ108（ビルマ）〕他の連中が積み降ろされた食物を炊事場へ運んでいた間、僕は仕事 - 仲間と一緒に袋から落ちた塊茎を拾い、これらを空の袋に回収していた。僕は袋を持ち歩哨の方へ顔を向けて立っていた。僕の仕事仲間の、とある評言に笑わされた。すると突然我々は荒々しいわめき声を聴いた。哨舎から50メートル離れた所で、我々に向かって身振りで合図し、金切り声を出している歩哨の朝鮮人監視員達の1人が立っていた。彼が何か必要なのだろうと考えながら、仕事仲間が彼の方へ歩いて行った。しかし彼は戻され、この朝鮮人は僕を指した。僕は無邪気に彼の所へ行ったが、彼は哨舎へ行く様指示した。そして其処へ僕は歩いて行き、一体僕に何をさせ様とというのだろうかと思問しながらその前に立ち留まり、そして事務机のような物の後ろに座って居た歩哨指揮官に規定のお辞儀をした。監視哨も後からやって来て一部始終を話した後、再び自分の任務に戻って行った。同朝鮮人のこの歩哨指揮官は僕に向かってやって来て、僕に歩哨の前で気を付けの姿勢をさせた。その時他の事で警備に呼びにやられた通訳クノットウンベルトが着いた。

短い会話の後クノットウンベルトは再び出て行った。彼が僕を通り過ぎた時、僕がここに立たされている理由を知っているかどうかを彼に聞いた。事務机の後ろに居たこの朝鮮人は其れを見て、荒々しい怒鳴り声で僕に突進して来た。クノットウンベルト足早に先を急ぎ、僕は顔に数回殴打を受けた。目から火花が飛び散った。ビンタ屋はこの仕業の後再び哨舎の中へ入っていった。僕の顔全体は紅潮していた。約10分後にビンタ屋が僕の所に来て、日本語で話すので僕にはさっぱり理解出来ない長い演説をした。彼はその演説を“オーケエエ、オーケエエ、オーケエエ？”と言って終えた。どの‘オーケエエ’も1オクターブ高く喚いて。僕も何となく

---

<sup>84</sup> 道中の日本人達は北 - ビルマの戦線に向かっていた。

‘オーケー’と答えたら、パシッと再び顔を叩かれた。彼は再び僕に対して日本語で長々とこの話をし、最後にこの‘オーケー’を繰り返した。しかし僕は叱責から習ったので今回は：ビンタ屋が聞きたがっている答えはこれだと思って、“オーケーではない”と答えた。しかしこの答えで今回は2回殴打を食らった。再び彼は長い演説を始め、その終了時に僕は数回のビンタを予想していたので既に眼を瞑った。しかし今回はオーケーの質問が無い。彼は更に数歩近づいてきて人差し - と中指で僕の鼻を掴み彼の手が半回転するまで回した。目に涙が迸った。又もや長い話と再び僕の鼻を回す。しかし今回は何やら滑り易いものが彼の指の間に付いていた。何とも恐ろしい目付きで彼はやっと僕を追い出した。何故歩哨が僕を彼の哨舎に送り込んだのか、僕には理由が分らず仕舞だ。恐らく僕が彼の事を馬鹿にして笑ったとでも彼は思ったのだろう。

オットウン

1943年9月13日

[キャンプ122 (タイ)] 我々は今日仕事から特に遅く帰宅した。我々が大量に誤魔化したことを日本軍工兵が発見したのだ。過去に何度もして来た如く、木の幹を堤防主用部に詰めこみ其れを即土で覆った。このやり方だとたくさんの土を運ばなくとも堤防のあるべき高さに達した。日本軍が傍に来て其れを検査した時、砂が滑り落ちて彼は木の幹を見た。彼はシャベルを持ち土を掘り始め、[その時] 誤魔化しと分った。我々はまず土を堤防から再び採り出して、其れから木の幹を運び出した。朝鮮人監視員はその事に本気で干渉した。我々は2つのグループに分けられ向かい合わせに整列させられ、それから互いに2回づつ顔を殴るのだ。これをやった最初の連中は互いに‘撫であった’。しかしこの朝鮮人は如何に其れをすべきか見せる為、この2人を殆ど意識不明のところまで殴打した。それでこの朝鮮人が他のグループに来た時、連中はかなりやりあった。我々が4キロメートル歩いて帰宅した時は既に暗かった。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年9月20日

[ターマカン (タイ)] 10名のイギリス人 (軍警察) がやみ市と日本軍道具倉庫に押し入った事で捕まった。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年9月21日

[ターマカン (タイ)] ここで今日午後5名の他のイギリス人(軍警察)が拷問を受けた。ここから100メートル先で、痛みから彼等の呻き声が聞こえた。彼等はとりわけ喉へ管を入れられ、水を満杯流し込まれた。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年9月22日

[ターマカン (タイ)] このMP(軍警察)は2年間シンガポールで留置される。全ての音楽と朗読は中止された。

オットウン

1943年9月23日

[キャンプ122 (タイ)] 日本軍は今朝再び騒動を起こした。彼等の意にそぐう働き手は余りに少なかった。病人を含む全員が整列[させられた]。日本軍は200人を必要とし、軽雑役をさせられていた連中とで労働者数は170人となった。日本軍はそれで我慢した。しかし今回は‘半病人達’が内部雑用、例えば野采を探す、食事を労働者に持って行く事をしなければならなくなった。栄養補強も又半減していた。何故なら日本軍は原則を固く信じていた：“働かざる者は、食うべからず。”何時になったらこの災難の終わりが来るのだろうか？

グルドヴァッチ

1943年10月1日

[リンティン (タイ)] リンティンは忌々しいキャンプであり、其れが今も続行している。我々の日本軍(或いは朝鮮人)は全てに先勝したい様だ。4人が文字通りそして‘適切に’堤防で作業中鞭打たれ死んだ。[P.F.A.] グス、[F.X.] アーツ、[J.A.] ラームスそして[P.H.] ファン カウク。ルシエン・ドゥ グラーフも - ほんの手前。



スネルン ファン フェルホーヴェン

1943年10月31日

[カンチャナブリー (タイ)] 我々のすぐ近くにあるタミル人キャンプでは日に26人が死亡している。赤痢になるや否や、彼等は死人小屋へ行き(看護人無し) 其処で日に2食何か食べ物を貰う。彼等は互いに助け合わない。集団墓地。死体を4メートル四方の竹製マットの上に置き、其れを墓穴に引っ張って行って其処へ転がし落す。1人でも未だ生きているなら、日本軍は頭を叩いて殺す。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年11月21日

[カンチャナブリー (タイ)] 朝取り調べ、[出発前]、憲兵[隊] トライ中尉により日記やカードを探す為に全てを、彼は何も見つけられなかったので激怒し、僕を徹底的に身体検査した。検査の後[僕は] 自分の隠した袋を友人に担いでもらった。

オットウン

1943年12月27日

[キャンプ112 (ビルマ)] 寒い夜だった。昨日1人の日本兵が僕の所にやって来て、僕の認印付き指輪を渡す様ほぼ強制した。僕は最初何とか論争したが、日本軍が脅迫の姿勢を採った時、数人のキャンプ仲間がその指輪を渡すよう僕に忠告した、というのは日本軍はそれ用に支払おうとしているからだ。2匹の太った魚、1袋の砂糖そして真の5ルピーで僕は指輪を引き渡した。看護師から聞いたところでは、病院兵舎で僕の所に立っていたこの日本兵は僕が意識不明で寝ていた時既にこの指輪に目をつけていた、という。しかし即この指輪を取り上げないだけの人間的な感情を彼は未だ持っていたわけだ。

ドゥ フラウター

1944年3月1日

[チュンカイ (タイ)] 昨日、2月29日、騒々しい日。朝全C-患者[回復兵舎から]が召集され、カリ[川]の中で炊事場から出た全ての骨を探さなければならなかった。前日日本の指揮官が実際に白い魚と色々な骨をサウイ葉[中国キャベツ]と一緒に釣り上げた。全ての食堂-

将校が積明を要求され、2回ベルト打ちを食らった。罰として全キャンプ〔病院を除いて〕用の3日分の野菜と2日分の肉が取り上げられた。後でこの罰は2日間野菜無し、1日肉無しに軽減された。

リブンス

1944年3月5日

〔ターマカン (タイ) 〕こちら側で働いていたオランダ人達の話は酷いものだ。最初の数ヶ月は雨降りにもかかわらず寝る兵舎が無く、病気になることなど日本軍にとっては有り得ず、故に皆働かなければならなかったし、病院に入れば、それはただ死ぬことを意味した。大勢が仕事に死亡した、或いは絶望して高い橋から飛び降りた。実に感謝しなければならないのは、反対側でその様な取り扱いに我々は遭遇しなかった。恐らく我々が目下体験しているこのまじな扱いは、日本軍が終に自ら死亡数に驚いた事実の結果であろう。これがずっと続く事を期待して、少なくとも我々が休養できるまで数ヶ月は続いてほしいものだ。

ドゥ フラウター

1944年4月3日

〔チュンカイ (タイ) 〕昨夜我等のキャンプから若干数の密輸入が捕まったようだ。今夜日本軍に付き添われて背中と腹に掲示板を掛けた2人が2名のトランペット奏者と1人のアコーディオン奏者という、前に音楽の伴奏を従えてキャンプを横切って歩いた。1つの掲示板には英語で：“I. J. A. [大日本帝国軍] は更なる命令の冒涇を許容しない。” 反対側には：“我々はタイの酒をキャンプ内に持ち込んだので、7日間の懲役刑 (犬小屋) に処される。我々の金は取り上げられ、病院に与えられた。”

ルーゲ

1944年5月1日

〔ノンプラドック (タイ) 〕今夜我々は1時間気を付けの姿勢で立っていた。理由：3人がカワット [鉄条網囲い] で1人のタイ人と話した。張本人は見つからない。終に〔オランダのキャンプ運営が〕1人につき5ティカルで3人の志願者を募った。興味無し。5分後1人につき30ティカル [申し出た]、〔その時〕3人の志願者 [が居た]。

ルーゲ

1944年5月3日

[ノンプラドック (タイ)] ‘張本人達’ [タイ人と話した] は歩哨の所にて4日間気を付けの姿勢で立つ罰を受けた。

ウェストホフ

1944年7月4日

[ナコムパトン (タイ)] 日本軍は最近再びかなり厄介で相当厳しい罰を与える。我々の内の1人は日本軍に殴られ、数日間であろうと余りに酷い虐待だったので、翌日傷をおったことから死亡した。

ウェストホフ

1944年7月16日

[ナコムパトン (タイ)] 自ら察するにデリとジャワの婦人達も何の考慮も良心も無い忌まわしい日本の屑の下で大変不愉快な事だろう。ドイツ人であろうどんなならず者であろうと、少なくとも欧州民族であり、[故に] 彼女達はこの屑がここで施行する事はしないだろう。

ドゥ フラウター

1945年1月5日

[チュンカイ (タイ)] 労働者の記帳の為、今朝又もや日本 [人] 医師の前に ‘病人のパレード’ [病人点呼] [があった]。未だキニーネ治療中の連中が選出された。

ドゥ フラウター

1945年2月2日

[チュンカイ (タイ)] 今朝全病人が日本 [人] 医師の前に [出てこさせられた]。我々の医者達は日に1～2時間働かされる連中を其処から探さなければならなかった。([それは] 軽務、[だ

が] 無給；恐らく時々報酬あり)。ここでは勿論半日 - 労働者としての話したが、彼等は今現在既に朝から晩まで作業している。

ドゥ フラウター

1945年2月4日

[チュンカイ (タイ)] 1名のイギリス人が1週間前外でタイ人と話している所を見つけられた。罰として彼は日本軍から9日間の強制労働(日に5立方メートル運河の土を掘ること)を受けた。彼はこれを成し遂げた；彼の友人達によって勿論充分食事は補充された。

ドゥ フラウター

1945年4月30日

[チュンカイ (タイ)] 全てのオランダ音楽は通訳により昨夜のプログラムから削られた。<sup>85</sup> 彼は今日がユリアナ [王女] の誕生日である事を知っている様だ。

---

<sup>85</sup> 天長節、4月29日の裕仁天皇の誕生日。

## 食糧・物資

オットウン

1942年6月2日

〔タボイ（ビルマ）〕朝食は米の粥と本物の白砂糖だった。朝食の後で、多くの人は普通に門を出ていった、日本の警備兵が全然居ないからだ。通りには小店やコーヒー屋が出ていたが、この‘店主達’は僕たちの金を受け取りたがらないことが早々に分かった。オランダの金もだめ、印刷された日本のルピーは尚更だめだ。幾人かのビルマ人はコーヒーをプレゼントしてくれたが、これを享受できたのは最初の‘お客達’だけだ。コーヒー出店の主達にとっても、数百人に只でコーヒーを飲ませるなんて、どだい無理な話なのだ。何人かのオランダ人はさっさと万年筆などの高価な物を売り、そのしばらく後には豪華な食卓について、恵まれない仲間たちの嫉妬の視線を浴びていた。

ディッケ

1942年6月9日

〔タボイ（ビルマ）〕夕方近く、粉とミルクで生地（粉末ミルク、正味1700グラム入りの物2缶、ブルーバンド社のマーガリンを、僕はユニカンポンから持ってきていて、僕と僕のcongsee仲間はとても楽しみにしていた）を作り、それで僕の人生初めて、27枚のうまく焼けたパンケーキを作った。自分自身もパンケーキを7枚食べた。僕のcongsee仲間は、僕の料理の腕前を誉めたたえた。

ディッケ

1942年6月20日

〔タボイ（ビルマ）〕食料状況は多少良くなった。朝は粥と少なすぎる砂糖（たまにパイナップルの小片数切れ添え）、昼は肉なしの薄いポタージュスープ、夜はご飯と野菜スープとサジェール・ゴレン〔野菜炒め〕と、時には塩漬けの小魚か鴨の卵が付くときもある。

オットウン

1942年 6月28日

[イエ (ビルマ)] 食事はずっと単調でほんの少しだ。朝は米の粥、昼と夜は同じ献立で、ご飯とモヤシやテロン [なす] を入れた水のようなスープ。ごくたまに肉切れを入れて煮ることがあり、そのときには味で分かる。僕のような外部作業員は、外の小店で、例えば塩漬けの魚とかカレー料理などを買い足して、ここの食事をおいしくすることもできる。 [...]

10日に1度、村で公式な買い物ができる。それぞれの宿舎から1人か2人が将校1人と共に、日本警備兵の監視の元に村に行く。この時には‘大きな’金も両替できる。仕事の金は大きな紙幣で払われ、ヤップはその紙幣を小額の紙幣に決して崩そうとはしないのだ。日本人は労働者に対して米1日500グラム、病気で‘軽作業’をするように医師からいわれているものには1日250グラムを支給する。病人には配給は無い。リーダー達や料理人達がこの配給量にもかかわらず、たいていは十分な食事を作り出すことには感心する。時には‘ノーデューティー’の者たちが1食減らされることもあるが、それは本当に量が足りないときか、あるいは病人が多すぎるときだ。

ディッケ

1942年 7月1日

[タボイ (ビルマ)] 午後、過去1ヶ月の日本給与の支払いがあった。僕は15セントx5日分=75セント、これで僕が注文した物は、砂糖1/3箱 (7アナ<sup>150</sup>) と鴨の卵4つ (5アナ) だ。

ディッケ

1942年 7月11日

[タボイ (ビルマ)] 土曜日。水作業に金が支払われるようになったので (前は支払いはなかった)、何かのエクストラを買うことができるような金ほしさに、水作業をしたがる部隊仲間が増えた。物価はビルマの通貨で、魚1匹=1ルピー、砂糖1箱=1ルピー5アナ、卵1個=1.1/4アナ、葉巻4本=1アナ。取りあえず、僕は塩漬けの魚と砂糖だけを買った。

---

<sup>150</sup> 1アナは1/10ルピー

オットウン

1942年 8月26日

[タンビュザヤ (ビルマ)] 労働した者は支払いを受け取った。僕は10日分で15.1/2アナもらった。でもこれは正確には10日分ではない、というのも合わせて3日間は雨で「働かなかった」からだ。

リブンス

1942年 9月2日

[タンビュザヤ (ビルマ)] ([捕虜になって] 155日目) 最近では少しでも食べられそうな物は何でも食べる。鍋底を掻いたり、配給バケツや桶の残りを掻き取ったりするようなことを、最も権威のあるような人たちがする。

リブンス

1942年 9月3日

[タンビュザヤ (ビルマ)] しょっちゅう外で仕事をし、昼の飯とスープを獲得する。他の病人やキャンプ内雑役をする男達は、昼は薄いスープだけだ。しかし炊事場では水作業をする者はクラ [ご飯のお焦げ] が食べられるようにしている。僕たちのコングシー仲間ではヤン・フェスラウスが精肉部で仕事をしていた、そのために炊事場以外に中隊からも食べ物を持ってこることができ、おかげでヤン・フェフーフンと僕は他の人たちよりもいつも余分に食べる物があって、これはなかなかのものだ。薪不足のために、今夜はやっと10時に (ほんの少し) 食べた。

オッテン

1942年10月8日

[ウェガリ (ビルマ)] おい、ヤップ、いい加減に払えよな！僕はもう1アナも無い、ビルマ人の商売人が主に果物、食べ物を売りに来ているというのにだ。僕はもういろいろな物を売った、僕の予備の下着セットなどもだ。昨日はランニングシャツを3/4ルピーで [売った]。それにもう15アナ借りている。

リブンス

1942年10月9日

[ウェガリ (ビルマ)] (192日目)昨日は石鹼を半分もらった。長いこと石鹼なしで洗っていた。

ディック

1942年10月20日

[ウェガリ (ビルマ)] [僕は] まだビルマの (日本の) 金を持っている運のいい者に属していて、それで砂糖、レモン、チャベ [唐辛子]、塩を買うことができる。僕の新コングシー仲間に分けてやろう、彼らは金を葉巻に替えてしまったから。ヤップからの支払いはトナン<sup>151</sup>以来ずっとない。

オットウン

1942年10月28日

[ウェガリ (ビルマ)] ヤップ達は、毎日門の前に店を広げて物を売っていたビルマ人の商人達を追い払ってしまった。なぜこれが突然だめになるのだ? いずれにしろ僕たちにとっては‘補充食’はこれで終わりだ。幸い僕は昨日うまいものを少し買うことができた。小エビや茶色豆入りのスナックを幾つかと、それから肉片入りのカレーソースだ。

オットウン

1942年10月31日

[ウェガリ (ビルマ)] [10月] 29日木曜日、また110人がジャワから到着した。ワーオ、あいつらは皆何てすてきな、壊れてもいない靴を履いてるんだ。何人かが、まだ本物のオランダ葉巻を喫っているのを見た。いやいや僕たちは、僕たちがこちらで‘ビルマーセルツー’とよんでいる緑の葉巻だ。荒く切ったタバコの雄しべをまだ緑の葉で巻いてあり、タバコの葉というより果物の木のような。この葉巻を吸うときは勢いよく吸ってはいけない、でないとパチパチと火花が飛び散り、いきなり葉巻が燃え上がるときもある。このようなビルマ葉巻はきちんとした政策を

---

<sup>151</sup> ディックは1942年9月14日にトナンを出ている。



持って吸わなければいけないのだ。きつい味にはすぐ慣れる。しかしこのような現地のしろ物とオランダ丸形葉巻の素晴らしい香りの違いを、しっかり嗅ぎ分けてしまった。

オットウン

1942年11月2日

[ウェガリ (ビルマ)] [仕事からの] 帰りがけに、キャンプからさほど離れていないところに砂糖などを売る商人が居て、僕は(ヤップに見つからずに) 一包み買った。これは現地の砂糖で、ジャワで作っている物と同じだ。ここでは四角い板の茶色砂糖になっていて、アーモンドペーストの板のようだ。この板4枚が乾燥させた葉で一つに包んである。時には、砂糖が固まるときに飛んできたらしい死んだハエやアリがくっついていることもある。この[砂糖の] 塊を夜の食事の後に、菓子のように食べるのが好きだ。粥の中に入れてしまうと、砂糖もうまくなってしまう。

リブンス

1942年11月6日

[ウェガリ (ビルマ)] そろそろ僕の衣類はボロ布回収業者みたいになってきた。青いシャツ、緑のズボン、ランニングシャツにテニスシューズはすり切れているし、作業ズボンも目立つ破れがでてきている。僕の身の回り品は恐ろしいほど少ない。衣類や靴、石鹸や歯ブラシはヤップは支給しない。金は9月半ばから払われていないし、僕たちはもう長いこと何もエクストラを買うことができない。

リブンス

1942年11月10日

[ウェガリ (ビルマ)] 昨日の夜は腹が減って、僕たちがまだ持っていた少ない予備の中からオートミルを食べた。非常にうまかった。[...] 僕たちは最も原始的な人間に近づいてきている。石鹸で衣服を洗うのは10日に1度で、それも毎日はき、毎日盛大な汗に洗われている作業ズボンと、ハンカチだけだ。何も白くすることはできない、全ては薄灰色で、著名なる‘ビルマ風の白’だ。石鹸で身体を洗うのは1週間に1度くらい、贅沢なこととして。これが熱帯でのことなのだから。

オットウン

1942年11月22日

[ウエガリ (ビルマ)] 今日、9月分の労賃が支払われた。金ではなく、現物支給だ。ヒール (僕のパートナーでコングシー仲間) と僕は2人で砂糖半包み、白豆1kg、葉巻、例の緑のビルマ煙草を45本。その白豆で、米の食事をうまくするためのサンバルを作ることができる。みんなやっている。大きな石3つを浅く掘った穴に入れる。これが僕たちの調理器だ。木はキャンプ内やその外に充分ある。多くの男達は仕事の帰りに集めた薪を抱えてくる。ただし、夜の闇になる前に火を消さなければならない。しばらく前に、火がよく消されておらず、夜の風でまた燃え上がったために、歩哨が僕たちの隣の兵舎の住人達ほとんど全員を外に追い出したことがあった。

ディッケ

1942年11月27日

[ウエガリ (ビルマ)] 9 [月の] 残りの給料を受け取った。労働日1日につき15セントの給料の一部はすでに現物で、1ルピー40セント分として葉巻100本を受け取っていた。市場では [100本で] たったの1ルピーなのに。9 [月] 後半の分としてf1,80受け取った。ここから5%は病院に行き、50セント分は葉巻で受け取った。夜に [J.H.] ドゥ・フリース少佐 ([W.E.C.] デティヘル中佐はまだ病気) から、近々我々の10月分の給与を受け取る予定という知らせが来た。将校達は11月1日から月給をもらう。その月給の一部は宿舍運営費として使われる。僕たちは日給15セントのままだ。今日注文した物。砂糖1包みf0,80、卵3つf0,27、5セントでチャベラウィット [小さな唐辛子] 5セントでレモン、5セントで塩。

ディッケ

1942年11月28日

[ウエガリ (ビルマ)] 今日、10月分の給料を受け取った、f4,35だ (一月ずっと働いた)。f0,35を病院に差し出したので、受け取ったのはf4だ。全ての下士官は8%差し出し、将校は10%そして兵士は5%出した。今のところ、僕は物を注文して払ったお金 (f0,41) 以外には銀とニッケルのコインが合わせて2ルピーと日本の紙 [幣] で5ルピー、それに蘭領インドの金がある。さらに [コングシーの] 共同金庫に68セントだ。夕方になって、我々が物品を買う [H.J.M.] ドゥ・ケイサー大尉の店は閉まっているという知らせがあった (なぜなのかははっきり分らない)。

オットウン

1942年12月27日

[ウェガリ (ビルマ)] 昨日から、食事の時に酸っぱい、しかしさわやかな飲み物が出るようになった。発酵飲料だ。

ボム

1943年 1 月 27 日

[ムルメイン (ビルマ)] 靴、調理鍋、スプーン、歯ブラシ、櫛を再び手に入れた！何かを洗うために水も 1 リッターもらった。12日後にして初めて！

ボム

1943年 2 月 6 日

[ラパウ (ビルマ)] 僕がチャンギであんなに多くの時間を費やした日記帳は、今はマルタパン湾に、君の日記帳と、手紙や写真やその他、多くの愛すべき所有物と一緒に沈んでいる。<sup>152</sup>後になって君にあの月日のことを、語れるといいのだが。その時にはずいぶん忘れてしまっていることも多いだろうけれど。[...] この食事は、葉物野菜や肉類が少ないとはいえ結構良い。毎日、僕は補充食として卵を 1 個食べている。毎朝、敷地内に僕たちが [何かを] 買えるような市が立つ。供給物は少なく、値段は高いけれど。例えば卵は 1 個10セントする。時々ほんの少しの塩、それから現地製の砂糖、テンテン [ピーナツクッキー] の有ったことが 1 回あり、それから現地製の葉巻。 [...]

僕たちは竹の帽子と蚊帳をもらった（これを僕は夜、足に巻いている）。竹の帽子は労働中はとても重要だ。

ペルクイン

1943年 2 月 16 日

[リンティン (タイ)] とても良い日だった、たまたま僕が見つけた万年筆を、1 ドルと洋なしの水煮缶とに取り替えたのだ。洋なしは本当にうまくて、一瞬全ての嫌なことを忘れ去ったくら

---

<sup>152</sup> ‘移送と宿泊’ の章、ボムの1943年1月20日の日記抜粋参照。

いだ。家にいるような気持ちになり、嬉しかった。あのドルで、卵を10個も買えるだろう！夕食も悪くなかったし、全て合わせて、今日はいいい日だった。

リブンス

1943年2月17日

〔ウェガリ（ビルマ）〕1年ぶりに歯ブラシを買うことに成功した。ハメルからは靴を贈られるし、それにハンケチを2枚買った。

ルーヘ

1943年2月21日

〔キンサヨック（タイ）〕上流ではコレラが発生した。雰囲気は悪い。食事もある。タバコは無くなった。僕たちは何かの花の雄しべを乾燥させた物を吸っている。朝は米とスプーン1/4の砂糖。昼と夜は米とほんの少しのサジュール〔野菜料理〕だ。

オットウン

1943年2月21日

〔ウェガリ（ビルマ）〕先週金曜日に‘銀を山積みした船’が来て、やっと僕たちの労働に対する支払いが行われた。僕は全く文無しで、何もエクストラを買うことができなかった。しかしこれで僕も‘特別賞与の男’となった。昨日はトマト2つも買うことができ、卵と一緒においしく炒めた。こうすると昔の味を思い出す。

ペルクイン

1943年2月22日

〔リンティン（タイ）〕彼ら〔病人達〕は、労働者と同じ物を食べているが、米の代わりに粥、そして‘カブゆで水’を野菜の代用としてもらう。野菜とは、ロバック〔ラディッシュ〕とラブシナム〔タイカボチャ〕だ。毎日同じ。時々、肉をいくらかとか、とても小さな塩漬け魚がつく。しかし、そんなときには‘カブゆで水’は出ない。日常の食事に2日間新鮮な葉物野菜が出たときには、僕の炎症を起こして痛みをともなった口が多少良くなるかに見えた。しかし残念ながら

[今]また米とロバックとラブシウムを湯の中に入れた普通の飯を食わされるようになったので、それもつかの間のことだった。これでどうやって人間が生き、その上労働までできるというのだ。

リブンス

1943年 2月27日

[アナクイン (ビルマ) ] 時々、文明やそれがもたらす恩恵が夢物語のような気がする。3ヶ月に1本ほどの明かりとりのろうそくは特別な贅沢品で、衣服は言うに及ばず、自分自身を洗うための石鹸も同様だ。

ボム

1943年 3月10日

[ラパウ (ビルマ) ] 卵はもう手に入らず、肉は珍しくなり、野菜は質量ともに低下した。炊事場を牛耳るのはまたもや‘無い無いづくしのハンス’で、僕たちには去年の経験でおなじみの状態となった。

ボム

1943年 3月20日

[ラパウ (ビルマ) ] 食事は最近非常に悪くなった。中心街から70キロ近くも離れてしまったらどうなることだろう。僕たちはまだ補充買い (トマトとかカチャンイジュウ [小さな、緑の豆] など) ができたから助かったが、これもできなくなってしまうのだろうか？

オットウン

1943年 3月26日

[アナクイン (ビルマ) ] 仕事場で、食事休憩の時、チンチャウ<sup>153</sup>の葉を摘んだ。昨日小さな葉を摘んでいる人を見て、それをどうするのか聞いたのだ。水の中で少し煮て、その後葉を細かく

---

<sup>153</sup> チンチャウ、*Cyclea barbata*、はツタ植物の一種で葉は清涼飲料に使われる。

つぶす。それからつぶした葉を入れた水を例えばハンカチなどで漉して、葉を取り除く。この漉した水を1時間置いておく。しばらくするとこれが緑色のゼラチンのような物に変わる。これに溶かした砂糖でもかければ、とてもうまいゼリーができるのだ。

ボム

1943年4月5日

[テダン (ビルマ)] ひどい補給状況で食事はやはり悪くなり、エクストラ (卵など) はほとんど買えなくなった。結果として食料欠乏が起こっている。僕の傷はゆっくりとだがそれでも治ってきて、毎日補助食としてイースト<sup>154</sup> (我々自身で作る) とナツメクッキーを食べるおかげでもあろう。

ペルクイン

1943年4月17日

[チュンカイ (タイ)] 食物はここでは安く買える。金のある人は良い暮らしができる。食べ物に関しては苦情はない。朝と昼は貧弱だが夜の飯はとても良い。米と結構多くの肉と野菜だ。昨夜を除けば、もう何ヶ月もこんなにちゃんと食べたことはなかった。そして味も良かった。

ペルクイン

1943年4月20日

[チュンカイ (タイ)] この収容所の全体的な印象は良い方だ。ヤップの姿は見え、邪魔もされない。食事はイギリス炊事場から来る。質は数日前から改善され、今は3食とも充分でうまい。毎晩肉とたっぷりの野菜だ。食事に脂肪分があるので、鍋をきれいにしようと思ったら石鹸か砂で磨かなければならないほどだ。

---

<sup>154</sup> 註51参照

ボム

1943年4月26日

[キャンプ 80 [ビルマ]] [復活祭2日目] 食料状況は大幅に改善されて、多くの豆類とタマネギやロムボック [唐辛子] が食べられ、およそ3日に1個は卵を買うことができる。我々は復活祭の直前に石鹼1個と古靴をどっさりもらった。J [日本] の靴なので、全般的に我々の足には小さめである。

フェイケマ

1943年5月11日

[バンポン (タイ)] もちろん、我々はまたひどく沢山の物を置いていかなければならず<sup>155</sup> [移送のため]、私は心から血を流すような思いで、きれいなコートとも別れを告げなければならなかった! [私はそれを] 5チカルで売った。私のきれいな毛布もだ。私はそれを12.1/2チカルで売った (闇市でシャム人に)。[...] ここではこの数日卵やバナナを沢山食べられ、チャンギでの食欠状態を補うにはとても良いことだ。

ドゥ・フラウター

1943年5月14日

[タカヌン (タイ)] 今夜また排便、結構普通、少々ゆるめだが、昨日食べた大量の野菜のせいもあるだろう。今朝は砂糖入りのうまい粥を食べ、その後はテントの中で順調に治癒しつつある足の傷のために安静にしていた。食事は又まあまあ良い。野菜と塩漬けの魚、かなり塩辛い。

ドゥ・フラウター

1943年5月15日

[タカヌン (タイ)] 今朝、朝食の後で、カリ川で身体を洗い、シャツもできる限り 'きれいに濯いだ。' 石鹼はもう無い。今は木の幹に腰掛けて水だけで髭を剃り、少々体裁を整えたところだ。

---

<sup>155</sup> '移送と宿泊' の章、1943年5月18日のフェイケマの日記抜粋参照。

ドゥ・フラウター

1943年5月16日

[タカヌン (タイ)] 昨日は米と一緒に、ポーフンケルクと共同で買った鯛の缶詰を食べた。それはまたとないおいしさで、素晴らしい味わいだった。我々のシンガポール通貨をタイ通貨に両替できる可能性がある。両替できたとしたら、50千カルあることになり、時々何かを買うこともできるだろう。今は全くタイの金はない、残念ながら。 [...]

カリ [川] へ行く途中、炊事場の横を通ったとき、今夜サジュール [野菜料理] についてきたサピ肉 [牛肉] でだしを取ったうまいブイヨンスープをもらった。サピたちも、‘疲労困憊’している。今日の午後、2頭道ばたに横になっていたが、どうやっても起きあがらせることはできなかった。まだ15頭の牛がキャンプ内にいるらしい。今日の午後、森から竹を取ってきて、その後肉のたっぷり入ったうまい飯を食べた。その後で、カリで鍋を洗った。

ペルクイン

1943年5月17日

[チュンカイ (タイ)] 僕の衣類の一部を売ること、果物その他の食物を買う金を手に入れた。服などここではいらぬのだ。ここで僕が着ている唯一の衣類は‘チャワット’で、ふんどしのようなものだ。何人かの男達はタイ人にほとんどの衣類を売ってしまい、尻を隠すズボンもないほどだ。金は重要で、金があれば補助食を買うことができる。結婚指輪でさえ、タイ人に売らざるを得ない。僕はまだ婚約指輪を売らなければならないほどには困っていないし、そこまではならないように祈っている。これから先、何があるか分からないのだ。

フェイケマ

1943年5月18日

[カンチャナブリ (タイ)] どんな文明国でも戦争捕虜をこんなに家畜のように扱わず、もっとまじに扱おうと断言する。食事だけが結構充分にある。1日3回米と、野菜や時には卵や肉も入ったスープだ。ごらん、高い要求は僕たちはもうしていない。



グルドヴァッチ

1943年 5月20日

[ウォンピン (タイ)] 朝はミルク缶に水のような粥、昼は乾燥ご飯に僕の親指くらいの大きさの干し魚、夜は米とワルー水 [カボチャゆで水]。幸い僕たちにはまだ塩がある。[…] 今日、僕たちの背囊が無くなったという知らせが入った。何てこった。豚どもめ…。

ドゥ・フラウター

1943年 5月20日

[タカヌン (タイ)] 今日の午後、プラウ船の船頭に私のシャープペンシルを3ドルで売った(もうほとんど芯が無くなっていたのだ)。これでまた、卵を買う金ができた、口の端が切れているのを何とかするために必要なのだ。この鉛筆はファン・ボーフンケルクから借りた。

オットウン

1943年 5月23日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 食事は悲惨な状態だ。米とスプーン1杯の茹でた玉葱。もう数日間同じだ。

フェイケマ

1943年 5月31日

[トンチャン (タイ)] これ [昼食] は米と野菜(ラブー「カボチャ」か乾燥野菜)と干し魚1切れ。夜も同じ。紅茶はないので、煮沸した湯が来るだけだ。

ドゥ・フラウター

1943年 6月5日

[タカヌン (タイ)] 雨のために殆どもう車は走れない。道は走行不可能で、そのために食糧の供給も難しくなっている。今日はまた野菜が無く、つまり粥を2回、米とブイヨンが1回だ。米の配給も少なくなった。今夜のこの雨のためにどんな食べ物になるかは分からない。食欲はある

が、米はどんなにしても食べたくないの、またもや（つらい事に）家での美味しい食事（炒めた馬鈴薯に卵とか）を思い出してしまう。時にはこんな思い出や欲求を忘れることができなくなる、ひどくやっかいだ。他の者たちも同様で、全体に広がった厄災のようだ。

ボム

1943年6月8日

[アンガナン（ビルマ）] 雨の影響の一つはKm 70 [メザリ] の橋が [洪水のため] 流されてしまったことで、そのため昨日は僕たちの食糧配給は半分になってしまった！

フェイケマ

1943年6月8日

[トンチャン（タイ）] 私は10シンガ [ポール] ドルをタイのチカルに、とても損なレートで両替し、しかしおかげで少なくとも卵や砂糖を買うだけの金はできた。残りのシ [ンガ] ポール通貨は、僕の場合まだ22ドル強あったが、キャンプの指導層に差し出し、時が来たら J [日本人] が1対1のレートでタイ通貨に両替すると約束した。最後に、我々は支払いリストに署名をしたので、（これも、時が来たら）給料を受け取ることになるだろう。

オットウン

1943年6月10日

[キャンプ 108（ビルマ）] 今日、ヤップはこの7ヶ月間鉄道建設に従事した者に‘賞与’を与えた。この賞与は葉巻だった。もし7ヶ月間、1日も休まなかったら、賞与は葉巻70本だ。1日休んだ者は葉巻10本少なくなり、2日休むと20本少なくなる。しかし4日以上休むと何ももらえない。しかし約束の賞与がいざ与えられる段になると葉巻がずいぶん足りないことが分かり、労働1月につき10本ではなく、たったの3本の葉巻となった。そして休んだ日、1日につき1本の葉巻が減らされる。休まず働いた者は今や21本の葉巻しかもらえない。1日休めば配給は20本、2日休めば19本、3日で18本だ。僕はこの間に2日休んだので、19本の葉巻をもらった。しかし僕は数週間前から禁煙しているので、あらゆる方向から僕の割り当て分の葉巻を売らないとか、物々交換しないとかいいう誘いがある。しかし僕は全ての申し出を断っている。喫煙物は貴重で、もっと後になってこの19本の葉巻がもっと役に立つことがあるかも知れないからだ。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年6月13日

[タルサオ (タイ)] この食事は大丈夫だ。僕たちは腐りかけの、不適格とされた豚（ヘリツツンのグループによって積み降ろしの時に鼻から泥の中に押しつけられた）を受け取った。おいしく食べてしまったが、次の日には皆下痢になり、お腹はガスでいっぱいだ。

ボム

1943年6月19日

[アンガナン (ビルマ)] 何日かたって、僕たちの米の配給はまた少なくなった、昔ほどの量までにはなっていないが。野菜は玉葱以外には無い。このため僕たちはいろいろな葉を食べている！これが長く続いたら、もっとおかしい事が起こるだろう。

フェイケマ

1943年6月19日

[トンチャン (タイ)] 今や食事は最悪の状態だ。朝は米の粥と砂糖少し、1時には米とラブー [カボチャ] あるいは乾燥ロバック [ラディッシュ] (これは殆ど消化不可能) のサジュール [野菜料理]、午後もこれと同じだ。魚はもう2週間も見えていない。時には(2週間に一度)豚1頭(550人分として)が来、たまに我々自身で金を出したカチャンイジュー [小さな、緑の豆] や卵が入る。しかしこれも長くは続かない、今月はまだ一銭も支払いがないからだ。(公式には1人1日25セントで、10日に1度は支払日になっている)。キャンプには全く金が入ってこない。我々のシンガポール通貨も両替に出したが、これもまだまだ時間が掛かりそうだ。

オットウン

1943年6月19日

[キャンプ105 (ビルマ)] 夜にオーストラリア人が僕たちの兵舎に来た。彼は自分のリュックサックを、売るか物々交換するかしようとしたのだ。僕は彼に、代わりに何が欲しいのか聞いた。葉巻10本が提案され、僕はすぐに乗った。こうして僕は葉巻10本で、すてきなリュックサックの持ち主となったのだ。

オットウン

1943年 6月21日

[キャンプ 105 (ビルマ)] 今日また食糧調達グループに入れられた。キャンプ 98では塩漬けの魚を一匹買うことができた(正直に言えば、実はヤップの倉庫からくすねられるのだ)。

オットウン

1943年 7月 1日

[キャンプ 105 (ビルマ)] 食事は少なかった。今朝、スプーン2杯の砂糖と葉巻1本を交換した。そして今夜はヨングスマが2本の葉巻と交換に僕に塩を提供してきた。禁煙すると大いに得だ。葉巻が売られていたらぼくはそれを買いつけよう、これは何とでも交換できる。

ウェストホフ

1943年 7月

[キャンプ 22 (ビルマ)] 我々の食事は目下素晴らしい、我々は比較的人数が少ない(総勢250人)ので、例えば焼きめしにも肉が沢山入っている。今日は7品目も料理があり、本当の祝日のごちそうだった。最悪なのは僕が今や一銭も金が無いことで、喫煙具や卵などを買うこともできない。それでも僕はレインコートを売ろうとしていて、これがうまくいったら取りあえずは救われる、心配するのも命あつての話だ。

オットウン

1943年 7月 2日

[キャンプ 105 (ビルマ)] 鍋状況は最近ひどい。夜の軽食には塩漬けの魚が米についてくる。魚の小さなひとかけらを僕は翌日の昼のために取っておく、昼の軽食は米と水だけだからだ。僕は本当に飢餓状態に入っていて、食べ物のことばかり考えている。僕だけじゃあないよ。キャンプ全体がそうだ。ヤン・スミットと僕(僕たちはピクール仲間[荷運び仲間]だ)は砂の袋を堤に運ぶとき、うまい食べ物の名前ばかりを挙げながら歩いている。沢山の男達が調理方法を収集している。僕もそうだ。しかし紙は日記のこともあるから大切に使わなければ。

フェイケマ

1943年7月5日

[トンチャン (タイ)] 僕たちがどんなに単純になってしまったかの証明として、僕がグレープフルーツを2つ (小さなもの) を買うことができ、子供のように喜んだ話ができる。1つ30セントもしたのだが、これはこの1月半の間で、5本f.10のバナナを全部買えた時を除いて、初めての果物なのだ。野菜も殆ど手に入らない。僕たちに出されるのは乾燥ロバック [ラディッシュ] とワルー [カボチャ] だ。この数日は少し肉も出るようになった。豚1頭と自分たちで買った水牛2頭と、とてもうまい魚を沢山、ジャバル [海魚] だ。覚えておいて、家でも食べよう!

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年7月6日

[キャンプ 120 (タイ)] 背囊の中身を出して乾かした。君の小型写真は完全に消えあせてしまった。テア [彼の娘] のはまだ見分けられる。幸い僕はまだ他の写真を持っている。僕の眼鏡にもカビが生えてしまった。ここでは激しく長時間労働をするために、僕は [眼鏡を] 掛けていなかったのだ。いくらかは洗濯に出した。小型聖書を乾かした。厚紙はカビが生えたので、取って捨てた。今日は気分が優れない。君のパルモリヴァ [石鹼] (ダゴ通り54) を使い始めた。雨 [なので] 読書とパジャマの修繕をした。鰯を3匹食べた! 日本の配給だ。給与の f.25のうち、f.5 は食物基金に入れた。

リブンス

1943年7月10日

[キャンプ 105 (ビルマ)] 食糧状態は最近非常に悪い。米は少ししかなく、塩も砂糖もなく、ほんの少しの豆、魚や肉は無い、時々塩漬けの魚か、塩漬けの腐った肉があるだけだ。

ドゥ・フラウター

1943年 7月12日

[カンチャナブリ (タイ)] 今日は食事の度に柔らかく茹でた鴨の卵を1個平らげて、滋養になった。途方もなくおいしかった。今朝は‘焦げた米’<sup>156</sup>と、白米と砂糖、これもうまい。昼は焼き飯。夜は米とサジュール [野菜料理]、肉とコンソメスープだ。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年 7月15日

[キャンプ 120 (タイ)] 昨日宿舎に帰ってから、風呂に入り、ひどく汚れた衣服を濯いだ。石鹼は一大贅沢品だ。夕方の点呼の時にいきなり雨になり、乾きかけていた洗濯物がまたびしょ濡れだ。卵を5つ買えた。傷のあった2つは茹でた。缶入りミルク [7月10日に買った物] を飲み干した。

ドゥ・フラウター

1943年 7月18日

[カンチャナブリ (タイ)] 今日の夜は食事の後にもひどく食欲があり、焼きそばと卵焼き (20セント) を自分にごちそうした。午後にヨードチンキの残りを30セントで売ったので都合がついたのだ。とてもうまかった。夜9時にまたもや空腹に悩まされ、その時にはゆで卵一個だけを食べた。何週間もの損失を取り戻そうとしているかのようだ!

ウェストホフ

1943年 7月19日

[レットポウ (ビルマ)] ここの食事は前のキャンプと比べるとひどいものだ。幸い我々は多少は買い足すことができる。僕はまだ金がある、僕の最後のレインコートを買ってしまったからだ、たったの8ルピーにしかならなかったが。これで卵を買おう、それが最も栄養があるものだから、そして生で食べよう。

---

<sup>156</sup> ドゥ・フラウターはここで、ご飯の焦げで‘クラ’とも呼ばれている物を指している。

フェイケマ

1943年7月21日

[トンチャン (タイ)] 食事は目下まあまあだ。8匹のサピ [牛] の肉が入るが、野菜はそうはいかない。時折、外でバナナを何本か、あるいはジェルクバリ [グレープフルーツ] やジェルクニピス [ライム] を買うこともできるが、ひどく限られたものだ。それがこの傷には丁度必要なものなのに。私は結構沢山の卵を買うことができ、素晴らしいものだった。[...] 最大の問題は靴だ。私の2番目の靴は小さくなり、イギリス靴の1方はその最期を迎えようとしている。多くの人たちが裸足で森の中や、泥の中、石の上を歩かなければならない、ひどい話だ！サイズ41の [靴] がいくらか配給された。それより大きなものはない。

ドゥ・フラウター

1943年7月21日

[カンチャナブリ (タイ)] エファースは僕のストレート・ドル2,50を1,75タイ通貨 (70%) に両替させることができ、僕はやっとまた卵約20個分の金を手に入れた。今日の午後はうまいものを食べた。焼き飯に卵だ！今夜も驚きで、バナナパイがあったのだ。[...] 午後はやっと、ヤップからもらった石鹼 (プラス葉巻 ‘ブラック・ホース’ をそれぞれ8本ずつ) を使って久しぶりに全身を洗うことができた。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年7月22日

[タマルカン (タイ)] オムレツを買った。ここでは [タルサオに比べると] 全てがとても安い。ミルク1缶1,50、砂糖1缶15セント。洗濯水での沐浴はほとんどできない。私の乗馬ブーツは壊れ (靴底と踵の上)、短靴はとっくの昔だ。[...] 風呂と髭剃り用に、飯ごう1杯の塩素水だ。さてそれでは荷ほどきをしよう。髭を剃り、髪を丸刈りにしてもらった (棒打された時、長髪の方が短髪より痛みが少ない)、仕事でひどく汚れていたからだ (頭上に掲げて手渡す籠からこぼれる土 [のため]) 。

ドゥ・フラウター

1943年 7月23日

[カンチャナブリ (タイ)] 金銭的な困難が今も最大の問題である。私は最低の状態にあり、もう売る物も何もなくなったので、最後にはやはり結婚指輪を売ることにした(エファースはもう売ってしまった)。ベップケにとっても、夫のついていない結婚指輪よりも、結婚指輪のついてない夫の方が価値があるだろうし、全てを理解してくれることと思う。自分自身ではひどく悲しいアイデアだとは思いますが、残念なことに他に金を手に入れ、卵を買い続ける方法がないのだ。

[...] 私の指輪はf. 13で売れた。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年 7月23日

[タマルカン (タイ)] 夜、簡易ベッドが壊れて下に落ちた(布が破れた)。君たちのことばかりを考えた。簡易ベッドはプルス[?]にした。ミルクの缶を1度に飲んでしまった(f. 1, 50)。握り飯を食べた。

オットウン

1943年 7月28日

[キャンプ 105 (ビルマ)] そして僕たちは、またもやうまい物を‘食べた’。ヤン[スミット]はバターケーキだの、キャラメルプリンだのうまい物ばかりをを数え上げて僕をうまい気分にした。ベーコン入りパンケーキの卓上シロップかけや、最上の挽肉ボールはどうだい? こうやって僕たちは、食べ物の話ばかり交わしながら歩いている。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年 7月28日

[タマルカン (タイ)] 炊事場のオランダ人はイギリス人に代えられた。それからは粥と胡椒はたっぷり、カチャンイジュ [小さな緑の豆] は無くなった。政治と[オランダ人の] 不器用さのせいだ。私は毎日卵を2つ茹でてもらっており、食事療法としても1つもらえる。卵のおかげでまた人間らしくなってきた。卵茹で器は先ず生のカチャンタナー[ピーナツ]を茹で、その残り湯で卵を茹でるので殻はきれいなピンク色になる(復活祭の卵!)。私の簡易ベッド用に(袋



の) 麻布をf. 1, 25 [で] 買った。[私は] またよく読書をしている。パジャマはどんどんすり切れてくる。南京虫以外にも、ここには白色透明の小さなシラミ(身体につくシラミで、腹に黒い血袋がある) がいてひどく痒い。我々は毎日衣服を調べている。私の緑の短ズボンもすり切れている。布きれを当てた。君たちのことをしょっちゅう考えている。

フェイケマ

1943年 8月 5日

[トンチャン(タイ)] 食事はまだ妥当なところだ。1週間に1度牛肉、時々カチャンイジュ  
[小さな緑色の豆]、この1週間、自分の金で結構よく卵や果物を買うこともできる。私は確実にこの3週間は、1日2個、素晴らしい補助食料である卵を食べている。さらに、例えば数日前には、果物の備蓄としてシシルピサン [バナナの房] (小) 3. 1/2とジェルクバリ [グレープフルーツ] 3つを取っておいた。

ドゥ・フラウター

1943年 8月 8日

[カンチャナブリ(タイ)] 食事は今日は簡素(米とシチュー) 玉葱、豚脂肪、ロムボック [唐辛子] 入り。[それは] とても味よく調理してあり、旺盛な食欲で食した。特に卵を食べる時は、今でも1日で最高の時である。

オットウン

1943年 8月 13日

[キャンプ 105 (ビルマ)] 昨日は例の嫌な雨だった。しかしピクール仲間 [荷運び仲間] ヤン [スミット] と、うまい食べ物の話ばかりしながら歩いていたから、雨も気にならなかった。ヤンは 'クレーム・ド・ラ・レイヌ' がいかに美味なスープかを描写し、リソレも前菜としてとびきりで、最後にサクランボケーキとコーヒーだ。さてもさても、僕たちは、またしても素敵において '食べながら' 歩いていたもんだ。今日は雨は上がった。ヤンによればキュウリとトマトのサンドイッチもなかなかの物だそう。夜軽食は水の中に、まずい、虫食いの、固い白豆が入った物と米だった。

オットウン

1943年 8月18日

[キャンプ 105 (ビルマ)] 僕たち全員、白砂糖を大さじ1杯もらった。うまい、長いこと食べていなかった。例の現地製の、砂糖板菓子のような板状のものは売っているが。

器用な奴は米粉でケーキを作って売りに出していた。僕はそんなケーキの1つを買った。コルクみたいにカサカサだが、砂糖を少しかければ結構いける。

フェイケマ

1943年 8月20日

[トンチャン (タイ)] 私のペンは空になり、しばらくはインクの入る当てもないので、鉛筆で書いている。[...] それから我々は、突然我らの‘保護者達’の幾つかの御善行に預かり、それは、それぞれにタバコ1箱、靴下1足、濃縮ミルクのミルクメイド1/4缶(粥に混ぜると美味だ)それにパルムボーム社のマーガリン約100グラムだ。これはジェルクニピス [ライム] と砂糖と一緒に米に混ぜてデザートにする! 1週間前には白木綿の下ばきももらった。さらに大量のビタミンB2の錠剤が入ってきて、目下のところこれを1人1日15個ずつ受け取っている。

フェイケマ

1943年 8月25日

[トンチャン (タイ)] 幸いにも丁度今日、7月分の金が入って、それを持って行くことができる。[病人輸送で下流に行くため]

フェイケマ

1943年 9月3日

[カンチャナブリ (タイ)] 食事は素晴らしい(炊事場はオランダがリーダーシップを取っている)、特に大量の葉物野菜(白菜、玉葱、テロン [なす])がうまい。我々は3ヶ月間こんな物を見ていなかった。外部にも、何かと注文することができ、それが今日届いた。私は白砂糖1/3kg(1kg1チカル)、シシルピサン(バナナの房)2房(値0,20)、卵10個(値0,10)とジェルクニピス [ライム] (値0,01)20個を買った。

ペルクイン

1943年9月14日

[ヒンダト (タイ)] 僕たちのキャンプにはおよそ250人の男達がいる、そのために2日に1度、牛を3頭屠殺する。ひどく痩せたタイの牛だが、肉は我らの料理には大歓迎だ。極上のビフテキの味がする。ウーンうまい。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年9月15日

[タマルカン (タイ)] 私のパートナーの司法修士トッシュから、飯ごうの中金 (取っ手) を買った。<sup>157</sup> 2チカル [だった]。きれいに磨くのに半日掛かった (紅茶の残り [で]) リュックサックに新しいCu [銅] の輪を取り付けた。

ボム

1943年9月15日

[アンガナン (ビルマ)] 僕たちはまた肉を食べ、何回かカチャンイジュウ [小さな、緑色の豆] が来、非常に沢山のウビ [サツマイモ] それに頻繁にテロン [なす] をもらう。また、数ヶ月後にして初めて、卵を3つとジェルクバリ [グレープフルーツ] を少し食べた。

ドゥ・フラウター

1943年9月17日

[カンチャナブリ (タイ)] ここでの飲み物について記しておくのをこれまで忘れていた。我々は食事ごとに紅茶1杯 (もちろん砂糖もミルクも無し) をもらい、同時に、午前と午後に水筒用に塩素入り飲料水が支給される (我々はこれを主に食器洗いに使っている!) 私の資金は今のところまだf.3 ある。しかし売り買いをしてもう少し稼ぎたいと思っている。

---

<sup>157</sup> ここでは 'ランタン' と呼ばれる小鍋のセットで、取っ手を通して持ち運びできるようにしてある物。

リブンス

1943年9月20日

[キャンプ 122 (タイ)] 食べ物は長い間非常に悪かった。塩は無く、魚も無く、肉 [はあるが] 塩漬けの物だけ、臭く、カビが生えていてウジ虫がたかっている。これが甘いウビ [サツマイモ] と一緒に煮られて、胸の悪くなるような鍋となる。現在はましな肉と白豆のおかげで少し改善された。

ウェストホフ

1943年9月20日

[レトポウ (ビルマ)] 愛する人よ、怒らないでおくれ、僕は本当に金に困窮し、全く何もなくなり、特に今やかなりひどい食べ物しか来ないのに、食べ続けるための卵もバナナも買うことができず、肉も無く、塩も無いなどといった状態なのだ。[...] この決心をするまでとても長い間迷ったが、それでも結婚指輪で25ルピーという大金を得た。僕たちのここでの結論は、指輪を持たない健康な男の方が、指輪を持って死んでいる男よりましだ、ということだ。

ドゥ・フラウター

1943年9月26日

[カンチャナブリ (タイ)] 今日の午後、風呂に入り、‘小道’で必要な葉 (簡易便所で使うため) を摘み、揃えて10枚ごとにまとめてから、しばらくの間 [クン] ファン・ザイルと [W.W.] ロスとともに、昔のことについて語り合った。1週間後の今日、10月3日はライデン解放の日だ。フッツポット [ジャガイモと肉と野菜を混ぜた料理] (牛肉入り) とパンとニシン [ライデン市の籠城が解かれたときに食べたと言われる食べ物] に考えが及んだときには、僕たちはもう少しでうなってよだれを垂らしそうになった。昨夜私はここの店で、25セントで焼きレバーを買い、塩味をつけてとてもおいしかった。ロスもうまいと言っていた。さらに卵を2つ買った、またとても食べなくなったのだ、腹のためにも良いであろう。僕の資金はこのため、残念ながら95セントに減った (もし物を売って稼がなければ、使えるのは後約3週間の間一日5セントだ。)

ドゥ・フラウター

1943年9月30日

[カンチャナブリ (タイ)] 今朝の朝食はまた滅茶苦茶だった。ロムボク [唐辛子] でバナナと卵に多少味を付けた。今日の午後は‘フライドライス’で、またもや卵無し、ジェルキエ [柑橘果物] を混ぜてある。[...] 全体的にここの食事はこの2週間ひどく悪くなった！卵はもう出ない！脚気の患者もまた増えてきた。おかずなしで米ばかり食べさせるからに違いない。

ボム

1943年10月1日

[アンガナン (ビルマ)] 食事は少し悪くなったが、それでも僕たちが7月や8月に食べた物よりかなりましだ。肉は献立予定に入っているようだ、しかし野菜のほうは乏しい。

グルドヴァッチ

1943年10月1日

[リンティン (タイ)] 労働日ごとに0,25チカル [の報酬]。病気の時には、ゼロ。それに比べて将校達は、働く働かないに関わらず、一月30チカルもらえるのだ！

リブンス

1943年10月5日

[キャンプ 133 (タイ)] 砂糖、葉巻、それにクッキーはここで買える。(ただしタイ通貨で払わなくてはならず、両替レートはもちろん僕たちにとってひどく損だ。1,82チカルが3 [ビルマ] ルピー、本当は同じ [レート] であるはずなのに。オーストラリア人は [タイのチカルで] 白砂糖でも、牛乳でもバナナでも、何でも村で買うことができるが、僕たちのルピーでは空を掴むだけだ。<sup>158</sup>

---

<sup>158</sup> リブンスはキャンプ133に来る前はビルマの労働キャンプにいた。そのため、彼はビルマの通貨しか持っていなかった。

ドゥ・フラウター

1943年10月7日

[カンチャナブリ (タイ)] ヤップから、昨日は全員に石鹼2個が渡され、我々もやっとこれで清潔になることができるわけだ。だから昨日も今日も、私は久しぶりに石鹼で洗った。

ドゥ・フラウター

1943年10月9日

[カンチャナブリ (タイ)] このところ、夜が結構な寒さで、私は下着を全て身につけて寝、目が覚めないようにするためには毛布をしっかりとかけなければならぬ。12月や1月になったら、この衣類でどうしろと言うのだろう。幸い僕にはまだ蚊帳があり、これでも多少寒さは防げる。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年10月9日

[カンチャナブリ (タイ)] 給与：8月 [分] 30チカル。7月 [分] はまだ [受け取っていない]。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年10月10日

[カンチャナブリ (タイ)] 借り水で髭を剃る。1週間、一度も身体を洗っておらず、こすって垢を落とす。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年10月13日

[カンチャナブリ (タイ)] 7月 [分] の給与を受け取る (食料費と病院代を差し引いて)、12,50チカルだった。

ドゥ・フラウター

1943年10月15日

[カンチャナブリ (タイ)] 今朝、私の最後の5セントでバナナを5本買った、これで私は文無しだ！売買もヤップの厳しい隔離政策のため、可能性はない！

ディック

1943年10月17日

[キャンプ 55 (ビルマ)] 病院。<sup>159</sup> 8月 [分の] 支払い [の] 残り f. 3, 60、9月 [分は] f. 1。 [僕は] f. 11, 33ルピー持っている。 [……] 8時半に朝食、米の粥に砂糖、蒸した物。11時にセラバイ [米粉の小パンケーキ]。1時半昼食、米と豆スープか、カチャンイジュウ [小さな、緑色の豆]、あるいは大粒エンドウと少しのブイヨン。7時に夕食、米、サンバル (生肉か保存用箱詰め肉) と肉入りスープ。公式には2, 000人分として4頭の牛が畜殺された。牛も保存肉もないことがよくある。サンバル、ジャガイモ、ウビ [さつまいも]、葉物野菜少し。時には朝や夕方に肝臓や脾臓一切れ、あるいは血液をエキストラとしてもらう。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年10月23日

[カンチャナブリ (タイ)] ここで初めて、バケツ半分の水をもらった。

ドゥ・フラウター

1943年10月22/24日

[カンチャナブリ (タイ)] 食欲はある、しかしその質は目に見えて悪くなった。野菜や肉は無く、砂糖は不足し、この2日の朝食は同じ‘フライド・ライス’だ。

---

<sup>159</sup> ディックは1943年9月5日から赤痢のため、病院に入院していた。

オットウン

1943年10月25日

[キャンプ 130 (タイ)] まだ食欲が出ない。昨夜は可愛い妻と一緒に豪勢なライストターフェル [品数のとても多い、インドネシアのごちそう] の卓についている夢を見た。どの料理から手を着けていいか、迷って決められなかった。

ドゥ・フラウター

1943年10月25/26日

[カンチャナブリ (タイ)] 昨夜はとびきりの肉シチューとうまい‘はえ叩き’ (四角くまとめた米を油で焼いた物) を楽しんだ。今朝は白米とおいしく油いっぱい焼いた卵、それにまた油の多い平焼きだった。ひどくうまかった、特に卵は。昼にはとても油っぽい‘フライドライス’だった。

オットウン

1943年11月2日

[キャンプ 130 (タイ)] 夕方、靴が何足か支給され、僕はそのうちの1足をもらうという幸運に恵まれた。しかも僕のサイズのものだ。先週はヤップがいくらかの衣類を持ってきた。その時には竹の帽子をもらった。なぜかと言えば、その帽子のサイズは小さくて、僕の頭にしか合わなかったようなのだ。もちろん僕はもらって嬉しかった。

ペルクイン

1943年11月8日

[クウィマ (タイ)] 今週僕たちは衣類をもらい、僕はちゃんとしたズボン2本にシャツ1枚が増えた。赤十字から来た靴をくじで7人の男達にわけた。もちろんヤップはまたもや大部分くすねたのだ。腐った奴らめ！労働者達に対する支払いは大体遅滞無い。しかし残念ながらここには殆ど何も買う物が無く、卵はあったためしがない。



ドゥ・フラウター

1943年11月10日

[カンチャナブリ (タイ)] 昨夜は [ひどい病気の、J.P.] ワイハが、彼に来た特別食 (湯煎した卵3つ、カチャンイジュウ [小さな、緑色の豆] にシチュー2 [杯]) を食べる気がせず、その上ロバーツからブイヨンをもらって、満足して食べた。僕たちはそれを皆混ぜて、一緒に食べた。非常にうまかった。しかしそのため、ロスは今夜4回便所に、僕は2回、通わなければならなかった。

オットウン

1943年11月11日

[キャンプ 112 (タイ)] 食事はまだキャンプ 114から来る。朝は粥で、大体夕方5時頃米と、スープのつもりらしい何か水物だ。つまり、1日2回だけの食事だ。幸い僕たちは労働はしなくてもよい。あるいはだから、ヤップ達は1日2食で充分だと思っているのかも知れない。

ドゥ・フラウター

1943年11月14日

[カンチャナブリ (タイ)] 朝食として、米に小魚が3匹ついてきて驚いた。とても美味だった。昨夜は 'ホット・ポット'<sup>160</sup>で、これもいい味だった。食事は最近またよくなってきた。

ボム

1943年11月15日

[アンガナン (ビルマ)] 僕の状態はまあまあだ。食物はまた少なくなったが、森の葉っぱ類を多く取って不足を補っている。

---

<sup>160</sup> オビ (サツマイモ) と野菜と肉の細切れでフツポット風にした料理。

リブンス

1943年11月20日

[キャンプ 133 (タイ)] 偉大な日だった、午後に、明日の祝いのために様々なバラン [物資] が入ってきたからだ。卵 (1人1つ)、砂糖 (2人で1包み)、葉巻 (1人18本)、ジェルク [柑橘類]、魚の塩漬け、カチャン [豆]。

リブンス

1943年11月23日

[キャンプ 133 (タイ)] 11月20日に受け取った素晴らしい贈り物<sup>161</sup>の恩恵をまだ毎日受けている。一昨日は緑豆スープと骨付き肉、これは今日の昼にも出て、すごくうまかった、そして昨日はベーコン・サンバル料理のような物で脂肪いっぱいだった。さらに幾つかの魚サンバル料理が予定に入っている。卵は1年近い差し止めの後では、目の覚めるような思いだった。普通の時なら質素な食べ物でも、ここでは時には料理の祭典のような雰囲気醸し出す。仕事をしないからといって、毎日決まり切った肉抜き<sup>161</sup>の米と豆の生活で、僕たちはここまで来てしまったのだ。なぜならヤップ達のスローガンは、働かざる者には肉無しで豆も最小限にする、なのだ。

ドゥ・フラウター

1943年11月27日

[チュンカイ (タイ)] 私の足の、痛く熱を持つ腫れもビタミン不足の問題なのだ。助言：補助食を購入しろ。しかし私には一銭も残っていないし何も売ることもできないので、これは不可能なのだ。[...] 今朝、赤十字の荷物から、クッキー2つとタバコ25本を受け取った。私は喫わないのでタバコはファン・ザイルとホルマンにあげた。昼には食事の時、ホルマンからエクストラのクロコット (野生のスベリヒユ) をもらった、彼らは今朝それを集めてきて、非常に危険を冒して料理したのだ (個人で調理するのは禁止されているのだ)。ケデレ豆 [大豆] は私の腹具合があるので食事からなるべく除けた。それでも美味だった。

---

<sup>161</sup> 鉄道建設で命を落とした全ての人の追悼記念式典のため。

ディッケ

1943年12月3日

[キャンプ 55 (ビルマ)] 食事は未だに悪い。朝は粥、昼は米とスープ (ウビ [サツマイモ]、魚のだし) それから夜は米とサンバル料理 (箱詰め保存肉、ジャガイモ、ロムボク [唐辛子] と魚)。売った物: グルデン銀貨3つと半グルデンで8ルピーになった。僕は丁度14ルピーある。今日は闇市でタツノオトシゴ (魚) 40匹を1ルピーで買った。

ドゥ・フラウター

1943年12月7日

[チュンカイ (タイ)] 我々はリフトフェルトに金が入り次第、それぞれ10チカルずつ借りるつもりだ (3倍にして返す)。まずは [A.H.] フェルカウルに1チカル貸してくれるか聞いて見るつもりだ。金が無くてはどうしようもない。塩無し、砂糖無し、卵無し、等々。

ドゥ・フラウター

1943年12月8日

[チュンカイ (タイ)] ファン・フェルカウルはクーン [ファン・ザイル] と私に会わせて1チカル貸してくれた。昼の食事はまたひどいものだった (米とブイヨン)。5セントで、我々はPRI [食堂] でそれぞれカチャンイジュウ・スープ [小さな、緑色の豆のスープ] を1杯ずつ、また午後には肉のパイ (5セント) を買った、我々は腹が鳴るほど飢えているのだ。

ドゥ・フラウター

1943年12月13日

[チュンカイ (タイ)] 今日午後、魚ソースつき米と焼いた小魚2匹 [を食べた]。その結果: ひどい喉の渇き。昨夜は米と炒め物にほんの少しの野菜、デザートとして肉と卵半分の‘ケーキ’。その先は飢えメニュー; 餓えの夢、うまい物を思い出して熱望することがまた始まった。残念ながらまだ金を借りられていない。

グルドヴァッチ

1943年12月16日

[クイエ (タイ)] 3週間以上前から、僕は川岸のヤップの倉庫で夜警をしている。不眠症の者には理想的な仕事だ。これで堤に登らなくても済む。それに、ここでは大いにくすねられる。8チカル分も盗品で儲けた夜もある。1チカルで卵5つになるのだ!! 血の冷や汗を出したことも多いが、神に感謝、幸いにも見つからなかった。ヤップたちは盗人に対しては冗談ではすまない……。

ディッケ

1943年12月16日

[キャンプ 55 (ビルマ)] そして少しの balan [物資] (ジャム、タバコ、石鹼、クッキー) が、Zwの領事館<sup>162</sup>によってバンコックで我々のために購入された。

ドゥ・フラウター

1943年11月17日

[チュンカイ (タイ)] 昨夜我々はホルマンからそれぞれ2チカルずつ借りた。クーン [ファン・ザイル] は指輪を売ることが望んでいる。私はロスのアルミニウムの皿をf. 2, 50で売ることができる。残念だがやらざるを得ないだろう、ここでは補助食を摂らなければ急速に体調がひどく悪くなるからだ。昨夜は直ぐに25セントで茹で卵を買い、今朝の朝食に楽しんで食べた。

ボム

1943年12月26日

[アンガナン (ビルマ)] [クリスマス2日目] さらに我々は赤十字社からクリスマスプレゼントを受け取った。キャンプ全体用にバター1缶と卵を幾つか、さらに1人につきビスケット4枚、タバコ30本、その他いろいろだ!

---

<sup>162</sup> ここに書かれている援助がスウェーデンの領事館のものか、スイスの領事館のものかはっきりしない。バンコックからは両方の領事館から戦争捕虜に対する援助が行われた。(De Jong p595-596参照)

ドゥ・フラウター

1943年12月26日

[チュンカイ (タイ)] [クリスマス2日目] 昨夜はとてもおいしい食事、柔らかくて美味で大きな水牛の肉、スイート・ポテトの炒めたもの、カチャンイジューの芽 [モヤシ] それにとびきりのレバーとレバーソースを皿いっぱい。その後、卵ゼリーのような菓子、それにまた米のケーキだ。我々は本当に腹一杯になった。[...] 私の資金は残念ながらまだ5セントしかない、備蓄は卵1つとバナナ3本しか無いというのに。だから、楽しみもすぐに終わってしまうだろう。

ディッケ

1943年12月29日

[チュンカイ (タイ)] 食事は良好で、野菜が多い。水はない。[我々は] 3日に1度、鍋2杯の水で沐浴する。

ドゥ・フラウター

1943年12月29日

[チュンカイ (タイ)] 瓶を10セントで売り、それでまた8本のきれいなバナナを買った。今日の昼は、食事の時塩漬け小魚の焼いたものを食べ、とてもうまかった。[...] 散歩をよくし、鳥を見る。パガー [困い] 沿いはタイ人からものを買うのを邪魔するためのMP [軍警察] がうようよしている。

ドゥ・フラウター

1943年12月31日

[チュンカイ (タイ)] 兵舎では全員大きな蚊帳を受け取った、私が今その上で寝ている私の蚊帳ほどの効果は期待できないが。

今日の午後いっぱい、そこらじゅうが裂けたり穴が開いたりしている緑のズボンを、シャツの布でつぎを当てていた。結構うまくいった。明日残りをしよう。これは氣力をそぐ、退屈な仕事だ。修繕やつぎ当ては、全く私向きの仕事ではない。

ボム

1944年1月8日

[カンチャナブリ (タイ)] この食事は抜群だ。その上ここでは卵、砂糖などを買い足すこともできるが、今に至るまで、我々はビルマのルピーはあるがタイのチカルは持っていない。

オットウン

1944年1月9日

[カンチャナブリ (タイ)] しかし、良いことは、食べ物だ。またキャンプ内に売店があり、うまいスナックを主に売っている。それにそんなに高くない。さて今やタイの金を手に入れなければ。ビルマのルピーは取ってくれないからだ。

オットウン

1944年1月10日

[カンチャナブリ (タイ)] 今日の午後、僕の指輪を売った。そしてすぐに売店に行き、目玉焼き付きの焼きそばを買った。

オットウン

1944年1月14日

[カンチャナブリ (タイ)] 水不足のため、今朝は朝食無し。喉の渇きに苦しんだ、飲み水もないからだ。売店ではコーヒーを売っていたが、1カップも買うことができなかった。僕の順番になる度にコーヒーが終わってしまうのだ。幸い、午後にはポンプが修理されて、水がまた出るようになった。

オットウン

1944年1月18日

[カンチャナブリ (タイ)] 単調になってきた。しかし、またもや水不足のために昼食がなかった。僕はもう1千カルしかないから、節約しなければいけない。何か売ることができるか見てみよう。

オットウン

1944年1月20日

[カンチャナブリ (タイ)] 僕は今日、洗濯屋になった。この需要はあるようだ。大尉の一人から軍服コートの洗濯を頼まれ、僕はそれに1/4千カルの値段を付けた。僕は金が必要なのだ、それでないと売店でも、全く何も補助食を買うことができない。赤十字社小包が幾つか入ってきた。1人につきキャプスタン・マークのタバコを17本、鰯を半分、それに1/4個の石鹼をもらう。

ドゥ・フラウター

1944年1月22日

[チュンカイ (タイ)] 赤十字社の荷から、我々の炊事場にジャムを43缶、鰯の缶詰191個、1人につき18本のタバコと2.1/2缶のクッキーとコーヒーを受け取った。ここから我々自身にどれだけ回ってくるか、興味深いところだ。

ペルクイン

1944年1月26日

[ヒンダト (タイ)] 食事はひどく悪くなった。今は1日5頭ではなく、たったの2頭の牛を畜殺する。これは2,500人用としては少なすぎる。リンティンでの食べ物に似始めている。

リブンス

1944年1月31日

[キャンプ 114 (タイ)] [食糧状況] は、我々にしてみれば、これまでの良い状況の後で、またひどくなった。昼はラプー水 [カボチャ水] プラス米、夜は米と豆スープを少しと、たまに小魚だ。前のキャンプでは赤十字社提供の特別供与も途中であり、タバコ25本、鯖の小さな缶詰、5人でジャム1缶、ビスケット2枚、石鹼1個、その後また何年間も見えていなかった牛の脂肪をスプーンに2杯、というものだった。赤十字社の存在を意識した初めてのことで、でも僕は早急につきの提供が続くことを祈っている。

ドゥ・フラウター

1944年1月31日

[チュンカイ (タイ)] バッカー大尉と基金のおかげで、f.2で簡易ベッドの布で作ったズボンを買うことができるようになった。とても丈夫なもので、これでやっと救われた。古い緑のズボンは実際、ボロボロになっていたのだ。

ボム

1944年2月1日

[カンチャナブリ (タイ)] 僕はこれで1月以上この新しい場所にいる。そしてそれはよい一月だった。ここでは食事はたっぷりあり、将校として受け取る約25チカルの給料で、様々なものを買足することもできる。通常の食事以外にも、僕は毎日卵2つ、脂肪で焼いた干し魚、バナナ10本に、ジェルック [柑橘類果物] 5つを食べている。それにまだコーヒーを1, 2杯とテンテン [ピーナツクッキー]だ！これは僕がいろいろな栄養の不足を補おうと一生懸命になっている結果であろう。それでも太るような兆候はない。僕の腸の働きはまだ良くなっていないが、これにはまだ何ヶ月も掛かるだろう。この水供給は悪い(雨期までは。その時期になればおそらく [水が] 多すぎるだろう!) が、僕たちは1週間に2, 3回、カリ [川] に一約15分から20分歩いて一行き、沐浴したり洗濯したりする。



ドゥ・フラウター

1944年2月6日

[チュンカイ (タイ)] 我々はまたもや衣料リストに書き込み、それに署名させられた。私のは多くなく、靴1足、緑のコート一つ、スポーツズボン1本、シャツ1枚、破れた下着1枚、破れた靴下1足、全くすり切れた上履き1足、それに緑とカーキ色の修繕用の布があるだけだ。

ペルクイン

1944年2月7日

[ヒンダト (タイ)] また食事に猫が入っている。戦争は戦争で、必要とあれば法も破られる。肉がなければ、何かを見つけなければいけない。どんな猫でもこのキャンプでは安全ではない。つまり、我々には競争相手がいる [猫を捕まえることに関して]。

ドゥ・フラウター

1944年2月10日

[チュンカイ (タイ)] 食事はこのところひどく悪い。米は配給化された(750gr. から600gr. に)。さらに、イギリス兵舎は我々よりも明らかにましな食事をしている！そのために炊事場で文句が多く出るので！火曜の朝、髪を刈らせた。

オットウン

1944年2月16日

[カンチャナブリ (タイ)] このキャンプには頻りにイギリス人やオーストラリア人などの新しいグループが到着し、僕が行って洗濯物があるかどうか聞くと、特に将校などからいっぱい洗濯物をもらうことが多い。しょっちゅう、新しく来た人たちから石鹼を買うこともできる。そんな石鹼はたいてい干からびていて縮み上がり、石鹼よりも木片みたいだ。しかしそれでも、何ヶ月も洗っていなかった衣類を木炭でやるよりもよっぽどきれいにできる。石鹼のない時にはまだそうやっていた。衣服を入れたバケツに、炊事場から持ってくる木炭を一掬い入れて、数時間置いておくのだ。油っぽいコートもかなりきれいになる。キャンプの売店でいろいろな物が手に入るのに、石鹼がないのはおかしい事だと思う。

オットウン

1944年2月18日

[カンチャナブリ (タイ)] ‘ノーデューティー’ 基金から1チカルをもらった。今日は売店で焼きそばを売っていた。一皿1チカル45。これは高い、野菜は全く入っておらず、肉は顕微鏡で探さなければならない。僕はまだビルマのルピーを持っていて、それを両替することができた。今日、タイの金になって戻ってきた。これはエクストラの物で、大いに歓迎だ。

オットウン

1944年2月21日

[カンチャナブリ (タイ)] バケツを借りることができず、そのため洗濯をしなかった。今日は一銭も儲けなかった。やれやれ、この仕事のリスクだね。いつもは同じ兵舎の仲間からバケツを借りる。彼は金を取ると言わないので、僕はたいていいつも彼に売店で何か買ってやる。もし彼の好きな物が売店に無ければ、バケツに少し金を入れて返すのだ。僕はすでに一度バケツを買おうとした、なぜならバケツを持っている人たちはとても少ないからだ。そしてそんなバケツ保持者は今や彼らの所有物が‘金の卵を生む鶏’ だということを知ってしまった。将校付きの者たちの中から僕の競争相手ができて、彼らもやはりバケツを借りて僕と同じようにご用聞きをやっているのだ。

リブンス

1944年2月25日

[キャンプ 114 (タイ)] 我々はここで、最貧民の中のまた最貧民のように生きている。僕が持っている全財産；コート2着、破れたタオル1枚、毛布2枚、プルオーバー1枚、下着1枚、それに壊れた洗面用具だ。

ボム

1944年2月26日

[カンチャナブリ (タイ)] 食べ物はやや少なくなったが、買い足す物を含めれば十分な量だ。ズボンに縫い込んだ蓄えをもうずいぶん取り出さなければならなかった！

ペルクイン

1944年2月28日

[ヒンダト(タイ)] 1日5頭の牛が畜殺され、もう何百人のも男達がこのキャンプを去っていったので、食事には豊かに肉の塊が入っている。内緒だが、僕はタバコの商売をしていて、40ドルの利益を上げた。まだその半分は、僕たちがまた下流に行くときのために取ってある。あちらでは果物や、魚や卵を沢山買えるのだ。

リブンス

1944年3月5日

[タマルカン(タイ)] やっと僕たちはビルマの広大なジャングルを後にして、僕たちから見れば天国のようなところにたどり着いた。沢山の野菜、卵、ベーコンもある肉の食事、さらには大きな食堂があって、とても買い易い値段で何でも売っていて、そこに続いて屋根のある、テーブルやソファのある部屋がある、2年間の間1度も見たことの無かった物だ。手に入るのは砂糖入りのコーヒーに紅茶、イースト、焼き魚、トマトやベーコンのサンバルを始めとして全ての種類のサンバル料理、自家製の米粉パンのピーナッツバターつき、あるいは目玉焼き、ゆで卵や生卵、砂糖、塩、胡椒等々、数え上げたらきりが無い。[……] 赤十字社がこの戦争捕虜のために4百万チカルを提供した。これの影響がどのように出てくるかは、まだこれからでないと分からない。

ドゥ・フラウター

1944年3月10日

[チュンカイ(タイ)] また、僕は気持ちが悪くなるほどのどが渴いていて、水は不足している。だからまたもや昔のとてもおいしいカプラ飲料を熱望してしまう(冷たいミルク、エアー・ジェルック[レモン汁]、フォスコ[カカオやバニラ入りの飲み物] ミルク入り紅茶か生クリーム入りのコーヒー1杯!!) [……] ベリムビンの木[甘酸っぱい実がつく] から、我々は毎朝実を少し摘み、それを食事の時に酢の物のようにして食べる。少しなりともこれで味がつく。今日の午後はまたひどい物だった(米と玉葱水)。さらに、上流のキャンプから来ている大量の乾燥野菜を終わらせなければならない。先の見込みもあまり良いものではないわけだ。イギリスの‘海外部隊’は衣類をもらった。厚い英国製のコートやシャツやズボン(カーキ色、青、スコットランド風)に靴(ゴム製)、それに加えて厚い下着に長い靴下だ。

グルドヴァッチ

1944年3月13日

[ナコムパトン (タイ)] 食事は言い尽くせないほどひどい。ノンプラドックIIよりもまた少ない。水も無い。我々は1日1鍋の紅茶をもらう。これは飲むためだが、どうしてもという場合には、洗顔にも使う。僕の場合は、どうしても、なのだ。

ドゥ・フラウター

1944年4月2日

[チュンカイ (タイ)] 僕たちの配給は、今日また減量された。24オンスの米は17.3/4オンスに、肉、砂糖、そして塩の配給量は半減された。

オットウン

1944年4月3日

[タマルカン (タイ)] 洗濯屋はもう辞めた。キャンプ3 [カンチャナブリ] の時のようにものを買うことは、ここではどうせ出来ないのだ。それが前のキャンプで洗濯屋を始めた理由なのだから。

オットウン

1944年4月5日

[タマルカン (タイ)] 今日の午後、衣類や靴が配られた。全員が靴を1足とイギリス軍の軍隊コートをもらった。サイズについては、見てもいないし聞かれもしなかった。それで僕は大きすぎる靴と、僕にはきつすぎるコートを持っている。これでまた他の人となにかと交換の努力をすることになる。

ウェストホフ

1944年5月16日

[ナコムパトン (タイ)] さらに、ここのキャンプに、赤十字社の小包が届いた。全員に1個ずつ、いろいろなうまいものが入っているはずだ。取りあえず、ヤップたちのフダン [倉庫] に入れてあり、彼らはすでに充分これを喫っている。これが僕たちを素通りして行ってしまうのではないかという事を一番恐れている。

ペルクイン

1944年5月19日

[ノンプラドック (タイ)] アメリカ赤十字社からの輸送品が届き、いろいろな乾物や砂糖、コーヒー、ミルク、クッキー、チョコレート、石鹼、それにタバコ、プラス10万フルデン以上の医薬品だ！今日の午後と夜は、この2年半近く前から一度もないほどおいしく食べた。アメリカのしっかりした包装や缶詰めなどを書いてある‘うまさうな’内容物表示も楽しんだ。今は僕たちはまだ囚われの身だが、アメリカ赤十字社が、大量にヤップに盗まれることなく、全般的に僕たちの面倒を見るようになったら、いったいどんなになるのだろう。僕はそれをととても期待していて、こんな日がいつかは来ることが分かっているのは嬉しいことだ。

ドゥ・フラウター

1944年5月23日

[チュンカイ (タイ)] 昨夜またテート [少佐] に [ドイツ語の] 講義をし、最初の5回分として50セントを受け取った。さらに今朝、試験室から私の最初の週給(90セント引く病院用の10セント=80セント)をもらった。つまり今は、この数ヶ月間になく金持ちなのだ。だから今日の午後は、食事の時目玉焼きを2つ自分にごちそうした。とびきりうまかった！

ドゥ・フラウター

1944年6月3日

[チュンカイ (タイ)] 日曜の夜、6人で1個のアメリカ赤十字社の小包をもらった、豪華な小包で、本当は1人用なのだが、大量に盗まれたのだ！我々はそれを分け、私はバター1片、ポークリーフ、ジャム、乾燥プラム17個、板チョコ1/6、タバコ2箱ブイオンを3包み、それに、こ

れから6人で分けるようにチーズ1包みと粉末ミルク1缶！全ては限りなく贅沢だ(他の人たちも、同じ小包から同じ量だけもらった)。小包には返信用の赤十字葉書！僕たちはこれらを楽しく味わった(まだまだ無くなってはいない！)しかし、これに耐えられない、おそらく脂肪が多すぎるのだろう、下痢の人が多くなった。

ウェストホフ

1944年6月4日

[ナコムパトン(タイ)] 小包はきちんとしていて21種類の品物が入っていた。[...] それぞれ小包1個ずつもらえるはずだったのだが、ヤップの盗みのために、全員、そのほんの一部しかもらえなかった。

ウェストホフ

1944年7月4日

[ナコムパトン(タイ)] 赤十字社からも僕たちは何も受け取れない、ここにいるアメリカ人は彼らのRK[赤十字社]から素晴らしい靴としっかりした服をもらったのに、その間にも僕たちは最貧民のクーリーよりももっとひどい格好をして歩き回っている。全ては引き裂け、全てはボロになって垂れ下がり、白いものはキャンプ中を探しても見あたらない。僕は後ズボンが1本あるが、バラバラになってしまうのが恐くてしっかり洗うこともできない。これが長く続いたら、僕たちはもう多くの男達がしているように、裸で歩かなければならいだろう。僕は今、少しエクストラの食べ物をもたらしている、1日卵半分とスープ100グラムのエクストラだ。

ボム

1944年8月31日

[タマルカン(タイ)] 去年に比べると、今は最高だ。卵、肉、バナナは毎日の献立に含まれている。反対に、(葉物)野菜は全く無い。このため多くの男達の抵抗力は著しく低下している。

ウェストホフ

1944年9月27日

[ナコムパトン (タイ)] ビルマで創設された、[スマトラ島の] 東海岸から来ている人たちに、時々金を支払うようにする基金から、数日前にこのキャンプにいる該当者で分けるようにと、再び300チカルが送られてきた。僕はほとんどの人たちに4チカルずつ与えることができ、これは多くの人たちにとっては、また少しのタバコやその他のうまい物を意味しているため、とても喜ばれた。ただ、ここでは全てがとても高いのが残念だ。

ドゥ・フラウター

1944年9月29日

[チュンカイ (タイ)] 一昨日、我々は試験室の後ろの菜園でできた、初めてのカンクン [薬物野菜] を食べた。ベンはベーコンと、どこから来たのか分からない豚の脂肪とでうまく料理した。キャンプ内の農場ではすでに大量のキャベツを収穫した。

グルドヴァッチ

1945年1月1日

[ナコムパトン (タイ)] 食事は今もまずくて少ない。[...] 補助食は買える、金さえあれば。しかし僕たちはもう1年以上労働をしておらず、収入もないので、それはほとんどない物なのだ…。金を手に入れるために、何でも、最後のズボンまで売る。僕の大切にしていた毛布も同じ目にあつた。今は古いズック袋に頭を出す穴を開けて着ている。悲惨なのはこの厚いズックも全く暖かくはないことで、夜はこんちくしょうめに寒い。

ドゥ・フラウター

1945年1月31日

[チュンカイ (タイ)] 食事はこの数ヶ月まずまず、特別基金から購入しているおかげだ。

ドゥ・フラウター

1945年 2月21日

[チュンカイ (タイ)] 今日やっと、2月上旬の給料を受け取った (天引きの後、f. 2, 10)

ドゥ・フラウター

1945年 4月26日

[チュンカイ (タイ)] 食事は悪くなったが、しかし私は今は少し買い足すこともできるようになった。私の衣類は悲しむべき状態だ。ズボンには18カ所のつぎが当てられ、それでもまだ破れ続けている。

ドゥ・フラウター

1945年 8月10日

[タムアン (タイ)] RK [赤十字社] の食糧が、夕方支給された (3人で、缶詰12個と石鹸)。缶詰にはいろいろなうまい物が入っていて、茹でハム、蜂蜜、砂糖、肉、レバーパテ、ミルク、米と肉、ハム、鶏肉、ジャム、プリン、ビスケット、などだ。[...] 一昨日の夜はRK [赤十字社] の、雪のように白い下着、灰緑色のシャツ、ソックス、タオルにハンカチをくじで分けた。私に当たったのは残念ながらハンカチだけだった。



## 作業

ディッケ

1942年6月3日

〔タヴォイ（ビルマ）〕 タヴォイの港へ。米、砂糖、そしてガソリンをトンホン〔倉庫〕から出した。

ディッケ

1942年6月6日

〔タヴォイ（ビルマ）〕 1日の作業。3種類あった。数日のもの、半日、そして1日だ。僕たちが雨の中に整列して立っていたら、ヤップたちが病気になるので帰って良いことになった。午後にはパガー〔囲い〕を作った。

ディッケ

1942年6月10日

〔タヴォイ（ビルマ）〕 炊事場作業は定職なので、僕は数日間に渡る外部作業には指名されない。炊事場では他にもファン・ット・ホフやサイヤース(PSV〔プランターズ学校協会〕)が、そして茶用炊事場にルッシャーが仕事をしている。

ディッケ

1942年6月20日

〔タヴォイ（ビルマ）〕 〔Th. A. M.〕 ホーフフェルトは（150人の男達〔と供に〕）数日間の作業に〔行っている〕。彼らは防塞を作らなければならない。

オットウン

1942年 6月28日

[イエ (ビルマ)] 僕たちがしなければならない仕事は重労働ではない。道路建設作業をしているが、雨が降れば(季節は湿ったモンスーン風の時期なのでそうなることは多い)仕事はしなくてもよい。そして10日に1度は休みだ。

ディッケ

1942年 7月13日

[タヴォイ (ビルマ)] 火曜日。外部作業。道路を重い鉄の塊で、16人で突き固めた(8人で1グループ)。

ディッケ

1942年 7月20日

[タヴォイ (ビルマ)] 月曜日。同じ隊のフルンとルールと共に、数日間の作業に。タヴォイからおよそ8km離れたところだ。寝場所は大丈夫(ビルマ兵の古い兵舎)。食事は特によいわけではないが、料理人は良くベストを尽くしている。仕事はきつくはない。架橋工事と道路の改善工事だ。

オットウン

1942年 8月18日

[タンビュザヤ (ビルマ)] 今日はC大隊がヤップに作業人員を提供する番だった。仕事場は近くで、鉄道の停車場だ。その停車場の周りは大きな空き地だ。僕たちは敷地の端から中央の低いところまで、籠で土を運び、線路のある所と同じ高さにしなければならない。ヤップはここに大きな操車場を作ろうとしているようだ。ただ、単調な仕事ではあった。7時に仕事は終了になり、キャンプに連れ戻される前に近くを流れるカリ[川]で先ず泳いでよいことになった。うん、これはさっぱりするぜ。

ディッケ

1942年 8月19日

[トナン (ビルマ)] 僕たちはZ0 [南東] (多分タイに行く) に向けた道の新軌道沿いにパリツ [溝] を掘る。仕事時間: 9時から12時までと2時から7時まで。ほとんどはスコップで作業しているが、僕自身はチャンコル [クワ] だ。

ディッケ

1942年 8月26日

[トナン (ビルマ)] 坂を造った。[...] 僕たちの知る限りではビルマとタイを結ぶ道路を造っている。

リブンス

1942日 9月 3日

[タンビュザヤ (ビルマ)] ([捕虜になって以来] 156日目) 午前中は雨の中で仕事し、雨宿りした。新しい道路用の大量の資材運搬がまだ続いている。今のところ1日700m造っているが、[しかしこれが] 1日7kmにしなければならない。クーリーの数は15,000人に増加される。

オットウン

1942年 9月 9日

[タンビュザヤ (ビルマ)] 今日も昨日と同じ仕事、つまり6人くらいでトロッコに砂をいっぱい積み、それから鉄道線路上を500メートルくらい押して行って、そこで荷台を傾けて砂を出す。この方がもちろん、それぞれが籠で運ぶより早い。しかし、我々が運ぶのは泥に近い。幸い今日の午後は雨が上がって僕たち自身も乾くことができた。

リブンス

1942年 9月20日

[タンビュザヤ (ビルマ)] 暑い日。自分のための時間はもう無い。朝、真っ暗なうちから起床ラッパ。マンディ [洗顔] の列、トイレの列、食事の列、お茶の列に並ぶ。8時45分 [に] 点呼で9時半まで、仕事場まで歩き10時半から2時まで仕事。2時から3時半まで食事。その後7時まで仕事。資材回収を待つ。8時15分にキャンプに、8時半から9時まで点呼、その後食事の列、茶の列、沐浴の列などだ。

オットウン

1942年 9月24日

[ウェガリ (ビルマ)] 11時にまた全員整列しなければならなかった。ナガトモ中佐 (不謹慎にもナークトトーンチェ [裸のトーンチェ] と呼ばれている) がまた演説した。中佐は、我々がタイからビルマに向かって敷設される新しい鉄道建設に使役されると言った。この鉄道は日本軍にとって非常に重要なものとなり、我々はこの建設に従事できて大変光栄である。ニッポンの天皇陛下が、我々戦争捕虜に対して、情け深くもこの鉄道建設に従事することを認めて下さることに對して、我々は感涙にむせばなければならない。

リブンス

1942年 9月28日

[ウェガリ (ビルマ)] (181日目)昨日のような日曜は二度とご免だ。目下僕たちは奴隷よりもひどい。9時から1時半まで、[そして] 2時半から8時半まで仕事だ。これはもう仕事ではない、純粋な人殺しだ。湿った空気のために、森の中は猛暑だ。しょっちゅう殴打され、追い立てられる。一瞬たりとも自分の時間は無い。炊事場の容量が小さいため、夜、真っ暗な中で自分で米を炊かないと、炊事場からもらえるのは配給の半量だ。

オットウン

1942年10月 1日

[ウェガリ (ビルマ)] 僕たちはもう1週間、この新しいキャンプにいる。仕事は主に土木作業だ。堤を建設しなければならない。竹棒で、形は指し示されている。麻袋の端に長さ1.5メートル

ル位の鉄線を2本留める。この麻袋の上に土を乗せる。2人の運び役が、通常は竹棒の運び棒にこの土を乗せた麻袋を下げて、堤の場所に運んでいく。[…]

[C.F.] ハーゼンベルグ少佐と僕たちの将校グループは全員連れ去られた。<sup>163</sup>このために僕たちのキャンプは決まった作業グループがいなくなってしまった。将校達は労働する必要はなく、それでも定期的に支払いを受けていた。キャンプの幹部たちは水くみや炊事場用の薪割りその他の軽作業を、将校グループがすることに決めていた。その前にはこの軽作業は通常、病人で外部労働に戻る前の準備期間として内部労働を割り当てられた人たちの仕事だったからだ。

オットウン

1942年10月8日

[ウェガリ (ビルマ)] 午後、日本軍工兵は新しい仕事システムを導入した、ノルマ制、あるいは農園関係者達がいうように、‘ボロンガン’<sup>164</sup>だ。堤が造られる軌道の脇の、大きな敷地が伐採された。この大きな空き地が作業グループの数だけの小さな区画に区切られた。それぞれの作業班は自分の区画の土を掘り、その掘った土を堤の軌道の上に運ぶのだ。僕たちの班は全部で16立米の土を運ばなければならなかった。このボロンガンが達成されたら、宿舎に帰って良いといふので、僕たちは頑張って働いた。そして6時15分前には終わった。帰りがてら、まずカリ [川] で気分良く泳ぐことができた。

リブンス

1942年10月9日

[ウェガリ (ビルマ)] 10日に一度休みがある。10日、20日、それに毎月の最後の日だ。

ディッケ

1942年10月20日

[ウェガリ (ビルマ)] 1942年10月12日から20日まで鉄道線路の仕事をした。

---

<sup>163</sup> これはハーゼンベルグ少佐が、戦争捕虜達に、戦争捕虜として逃亡の試みをしないという声明書に署名することを拒否するようというアドバイスをしたことから。’日本軍の収容者に対する扱い’の章、日記1942年10月10日の抜粋参照

<sup>164</sup> 脚注80参照。

オットウン

1942年10月20日

[ウェガリ (ビルマ)] 仕事ではもう何日も硬い土壌の場所に来ていて、運び屋の何人かは‘突き屋’になった。彼らが最初に土をつるはしで突き崩し、やっとなすくい屋が運搬袋に入れることができる。この、最初に土を崩すのにとっても時間がかかるようになった。日本軍工兵は先週の一人1立米の‘ボロン’をすでに1.5に上げた。それは午後の食事休憩の前にもう終わってしまう班もあったからだ。僕たちの班長がすでに、あまり早く終わらないようにしないとノルマが上げられてしまうと警告していたが、やはりその通りになり、ノルマは厳しくなった。そして今、土を崩すのがずっと難しくなっても、ヤップはそれを下げようとはしないのだ。

今日は月曜日と同じようにとても遅くまでかかり、キャンプに戻るために歩き出したときにはもう薄暗かった。しかし今日の午後一時近くに、作業司令官が我々に疲れがみえると通知し、午後の休憩が1時間近く延長され、4時にはもう仕事が終了になった。僕たちがキャンプに戻ったとき、そこで翌日は休みにするという通知があった。この通知はバンザイで迎えられた。

リブンス

1942年10月21日

[ウェガリ (ビルマ)] (209日目) 僕たちが長い間首を長くして待っていた休日だ。僕の持ち物全部のシラミ抜きをした。これは時々やらなければいけないことだ。同時に、僕のリュックサックの中にサソリを見つけたが、これは迅速にあの世に送った。

オットウン

1942年11月9日

[ウェガリ (ビルマ)] 仕事場には伐採した木を森の外に運び出すための象が二頭現れた。僕はそのうちの1頭の象の運搬用鎖を木に取り付ける役になった。別の班の誰かがもう1頭の象の同じような役目だ。木材の伐採もしている日本兵達が、倒した木に幾つかの大きな留め金を打ち込み、そこに象が被っている鎧状のものから下がる鎖をしっかりと留め付けなければならない。鎖を留め付けたら、僕が“OK”と言い、すると象の首にまたがった象使いが足でぞうの耳の後ろを押すと、それを合図にして象は4本くらいの木を一度に運びながら歩き出す。僕は、木がどこかに引っかかったりした時にぐいと外すために付いていく。重労働ではない。象は時々葉っぱをその大きな口に押し込みながら、鼻をあっちこっちに揺らしている。

オットウン

1942年11月11日

[ウエガリ (ビルマ)] 僕はまだ‘象小僧’で、月曜日と同じ仕事をしている。昨日は砂糖の塊を幾つか持っていき、運び出すための荷物の準備ができたとき、象に砂糖を1片やった。ウーム、旦那は至極ご満悦だ！それからは僕が運搬用鎖を荷物に留め付け、‘OK!’と叫ぶととたんに、あの鼻が後ろの、僕の方にのびてきて、砂糖の一片をねだる。そしたら象使いが蹴ろうと何を叫ぼうと、象は僕が甘い物を作って初めて歩き始めるのだ。こうしていると、僕の砂糖の在庫はすぐに無くなってしまいうだろう。でも僕はこれが楽しくてたまらないから、象と一緒に仕事をする間は砂糖をいつも持ってくるようにしよう。

リブンス

1942年11月20日

[ウエガリ (ビルマ)] (234日目) もう2日間、建設中の橋の下の岩場にパリット (溝) を掘る作業をしている。6人ごとの5つの班で作業しており、そのうち4班は常に休息している。全体的に見て、軽い仕事 (僕たちの手はもうとっくの昔にタコができてい) だし、それに昼食は宿舎だ。

オットウン

1942年11月22日

[ウエガリ (ビルマ)] 僕は今朝4時から5時まで、回廊番をした。それぞれの兵舎に夜は回廊番が一人出る。僕たちがこのキャンプに来たとき、回廊番が設置された。これが日本側か、あるいは僕たち自身の指導者達が決めたものか、僕には分からないが、しかし、まず日本側だと思う、というのも、夜中に日本の歩哨が巡回に来たときには回廊番はヤップに報告しなければならず、それも日本語でだ。第8班の僕たちは、次のように報告する。“フチーバン・ハチブンタイ (意味は：第8班の回廊番)。イジョー・ハリメッセン (特に報告すること無し) 幸いにも、夜間の巡回はそれほど多くない。しかし回廊番としては、暗い夜に便所に行ったり、その帰りに真暗闇の兵舎の中でテムパチェ [寝場所] が分からなくなってしまった兵舎仲間達のガイド役を、しょっちゅうしなければならない。

ディッケ

1942年11月23日

[ウェガリ (ビルマ)] 勾配の作業をする。200グループに、一人ではなく、二人の日本人。早く終わる、4時半。昨日と同じように大きなスングアイ [河] で泳いだ。

リブンス

1942年12月24日

[ウェガリ (ビルマ)] ただ、作業場まで歩く距離は4 kmになった。現在、僕たちは約5.1/2 m (最深部は約6 m) を掘っているが、その先では [...] 6 m盛り上げなければならない。しばらくは十分な仕事があるということだ。

オットウン

1943年1月4日

[ウェガリ (ビルマ)] 下士官として工兵隊の監督をしていたJが、今は‘内部作業班’に入れられていて、アタブ屋根 [椰子の葉で葺いた屋根] の修繕などの小仕事をよくしている。しかし彼は支給される米の食事をなにがしかでもうまく味わえるように、なにかエクストラのものを料理する機会もできた。ヒールとか僕のような‘外部労働者’は、帰りが遅くなることも多いのだが、帰ってきたとき、夜飯になにか特別のものが付いているのはうれしい驚きだ。

オットウン

1943年1月6日

[ウェガリ (ビルマ)] 僕たちは、このところしばらくキャンプから離れた、仕事場まで30分は歩いて行くところで作業をしている。日本軍監視兵達は僕たちだけで行かせるし、最後の‘労働者’が出発してから自分たちが出る。監視兵達は全員でひとかたまりになり、楽しげにしゃべりながら労働者グループからはかなり離れて歩いていく。日本軍工兵は僕たちの最初のグループが着いたときにはもう仕事場にいる。



ディッケ

1943年1月7日

[ウエガリ (ビルマ)] 土運び、4時半終了、沐浴する。

オットウン

1943年1月20日

[ウエガリ (ビルマ)] 僕は‘食事運び’だった。僕たちがキャンプからかなり離れたところで仕事をしているので、労働者達の食事を持ってこなければならない。毎日それぞれの班から2人が指名されて、食事をキャンプに取りに行き、午後には空の米籠や木の‘スープバケツ’をまた返しに行く。今日は僕が、もう一人の班仲間と一緒に‘うまい食べ物’を取りに行くように指名された。約8人の食事運び人と、1人の‘監視ヤップ’とで、12時頃キャンプに戻り、ゆうに1時間経ってから食料を持って帰った。4時頃に空のものを運んで戻り、そのままキャンプに残った。つまり、こんな日にはとても早く自由時間になる。労働者達はかなり遅くに帰ってきた。

ルーヘ

1943年1月28日

[キンサヨック (タイ)] 我々は今、ジャングルを突き切る道を造っている。

オットウン

1943年2月5日

[ウエガリ (ビルマ)] やれ、今日はそれでも休日になった。昨日はこのことについて何も知らされていなかった。でも今朝、班の長官が来て、点呼は遅めで、その後休みになると言った。よかった、僕には本当に必要だった、もう何もやる気がせず、夜には疲れすぎてすぐには眠れないこともあったのだ。

ボム

1943年2月6日

[ラパウ (ビルマ)] 1月28日の木曜日以来、我々はラパウに、我らの一時的‘家’に居て、聞くところによると約3週間ここに居るらしい。しかし見るところ3週間分以上の仕事量だ。我々は丘陵地に鉄道堤を建設していて、堤を造るための土を掘っている。我々の任務は1日に1,2から1,5立米の土 [を動かす事] で、日の出から、太陽時の3時か4時頃までかかる (日本時間はここでの太陽時間と2時間半の差がある)。我々は5 [時] (7時半) にまた起きて、6 [時] (8時半) にキャンプを出る。

リブンス

1943年2月17日

[ウェガリ (ビルマ)] (323日目) 昨日は点呼の時に、1週間に一回休みがもらえるかもしれない、と読み上げられた。そのかわりノルマ (最初は0,8立米、その後1人1日1,2立米に) を1,7立米まで上げるといふ。しかしこれは僕たちがヤップ達をもっとごまかすことを意味するだけだ。昨日、勾配をもっと付けていたときは最高だった。事前計算したときは約50立米の筈だったが、実際には20立米以上はなかった (傾いた面の計算はできないヤップ達が居る)。

オットウン

1943年2月26日

[アナクウィン (ビルマ)] 今日は僕たちの新しい作業場を初めて見た。そこに行くまでに相当歩かなければならず、6キロメートルくらいはある。僕にとっては痛みをともなう散歩で、というのも僕の左足はひどく化膿しただれているからだ。僕たちに課せられた‘ボロン [ノルマ]’は生半可なものではない。もし僕たちがこれを実際にやってしまうなければならないとしたら、帰りは夜間散歩になっていたことだろう。しかし工兵ヤップは幸いにも厳しくなく、6時には仕事を止めさせた。

ディッケ

1943年2月26日

[アナクウィン (ビルマ)] キャンプ40まで (6 km) 歩き、そこから約500m先に行き、そこで仕事をした。

ペルクウィン

1943年2月27日

[リンティン (タイ)] 通告：仕事をした者はそれに対して報酬を受け取る。兵士は1日35セント。こうしてヤップはもっと多くの人たちを働かせようとしているのだ。この僕は踊らされないね。まずしっかり食べて、そしたらやっと仕事だ。

リブンス

1943年3月2日

[アナクウィン (ビルマ)] 仕事は結構重労働だ。1,4立米掘った。

ペルクウィン

1943年3月3日

[リンティン (タイ)] 僕の健康は病棟から出されるくらいになり、軽作業を割り当てられた。数日後には多分鉄道労働の方に行かなければいけないだろう。木の伐採チームに入れられる可能性もある。

ペルクウィン

1943年3月5日

[リンティン (タイ)] 昨日は労働に出て、帰ってから倒れてしまった。また腹がひどくけいれんし、夜には4回トイレに行かなければならなかった。また半病人になった。炊事場作業をやらされるかもしれない。

ペルクウィン

1943年3月17日

[リンティン (タイ)] 今日は少し書き物をする時間があった。また毎日鉄道で労働していて、兵舎に帰るのは夜になってからだ。その時にはくたくたで、暗く、ペンは使えない。

ウェストホフ

1943年3月25日

[アナクウィン (ビルマ)] 再び僕の手紙を続けるときが来た。新しい話は実際にはない。我々はまだ同じキャンプにいて、鉄道の仕事をしており、それはどんどん進んでいる。ただ、特に杭打ちで比較的事故が多いが、僕は1日中、土を掘っている。それでも西洋人がみんなクーリーよりもひどい様子で仕事をしており、ヤップ達が家畜を飼うようにその周りには気分を高揚させる光景もものだ。

オットウン

1943年4月3日

[アナクウィン (ビルマ)] 仕事では僕たちはもう何日もひどく硬い土壌に来ており、土作業がこの数日遅れている。ヤップ達はこのバカ堤建設を急に急ぎ始めたようだ。

オットウン

1943年4月5日

[アナクウィン (ビルマ)] さて、2日間のすてきな休息の後、また仕事に行った。この酷暑の日としては、僕はついていて、というのも、食事取り係に指名されたからだ。班ごとに2人くらいが食事取り係に指名され、その人達は食事休憩の、ゆうに1時間前に、1人のヤップに監視されながらキャンプに戻る。そこには大抵湯気の立つ飯を入れた籠と、スープを入れた樽などが用意されている。食事取りのグループはこの籠や樽を担いで仕事場に戻り、通常は彼らが配膳もする。食事休憩が終わると、空の籠や樽は食事取り係がキャンプに持って帰り、炊事場に渡す前にこれらをきれいに洗う。だが、食事取り係はそれからは仕事場に戻る必要はなく、うまく自由時間となる。実は今日は僕たちの休日なのだが、休日は、堤が完成してから初めてまた設定される。労働をした人たちは遅くに帰ってきた。

ボム

1943年4月5日

[テダン (ビルマ)] ラパウではすでに下準備作業がしてあったが、ここではこの仕事は我々がやらなければならない。我々の仕事はそのため、砂の掘り出しの他にも伐採と焼き払いがある。昨日は、例えば僕はあるチームと一緒に木の根元に直径1メートルくらいの穴を掘り、切り倒さなければならなかった。

オットウン

1943年4月11日

[アナクウィン (ビルマ)] 雨!だが、あの乾燥の日々の後では爽やかな雨ではない。その反対だ。急に冷たくじめじめしてくる。12時にヤップは仕事を止めさせた。泥沼状態になってしまって、土運び人は堤の上によじ登ることもできなくなり、さらに堤の勾配部は踏み崩されてしまった。道はひどく滑りやすく、帰り道は倍も時間がかかった。

オットウン

1943年4月19日

[メザリ (ビルマ)] さて、僕たちの新しい作業場の初体験がすんだが、難しそうだ。またもや堤を築くのだ。だが、ここの土壌はずっと硬く、それに我々の新しい‘雇い主達’は、あまり柔軟ではない。我々がやっと仕事を止めて、キャンプに帰ってよいと言われたときにはもう薄暗くなっていた。食事をするのができた時にはもう真っ暗だった。ヤップ達は午前中10分、食事の1時間休憩を、ぴっちり守っている。午後には休憩はない。

ペルクウィン

1943年4月20日

[チュンカイ (タイ)] 僕はとても調子がよくなり、炊事場の水運び係の仕事を請け負った。きつい仕事ではない。報酬はエクストラのおいしい食べ物や、肉、魚、脂肪、野菜や果物のおまけだ。

オットウン

1943年4月23日

[メザリ (ビルマ)] 復活祭金曜日！しかし僕らには関係ない。今日は午後に降った土砂降り雨のせいもあって特にきつかった。雨宿りなどはなく、濡れた身体で、そしてずぶ濡れのズボンで働き続けなければならない。動いているにもかかわらず、身体は冷え切ってしまう。

リブンス

1943年4月26日

[メザリ (ビルマ)] (391日目) 復活祭2日目。2ヶ月ぶりにまた少し書く。アナクウインの時期も終わった。そこでは激しく仕事をし、5kmの堤を建設し、そこには今すでに鉄道路線が通っている。仕事はひどく急を要していたために、このキャンプに来る前の22日間は休み無く働いた。[...] そこを出る前の日は休みだった。[...] [移送の] 翌日は休憩だったがその後には仕事をさせられた。岩場で1,7立米だ！[...] 軌道は主に山の斜面を削って造られている。最後の2日間は、雨でいたんだ道を直さなければならなかったのでゆっくりできた。こうして僕たちは2回目の雨期を迎えようとしている。

ディッケ

1943年5月1日

[メザリ (ビルマ)] 病気。下痢だ。午後は仕事に行かない。5, 6, 7, 8, 9, 10, 11など、幾つかの班は夜にも残って‘ボロン’を達成するように働かなければならなかった。彼らは皆、7班以外は(11時半 [に来た]) 3時半に帰ってきた。ボロンはまだ達成されていない。翌朝、医者は3時半まで働いた男達全員を‘ノー・デューティー’にした。

オットウン

1943年5月2日

[メザリ (ビルマ)] すでに1週間以上僕たちは‘カタコンベ’の中で仕事をしている。これは深さ5メートルの、かなり深いところで、岩のように硬い土を掘り出して、これからできる鉄道堤に積み上げなければならない。この土は運搬袋に入れる前にまずつるはしで掘り起こさなければならない。それから運び人達はこの土を狭い、急勾配の道を登って上に運び堤の上に空けるの

だ。この急な小道を通して運ぶのは、カタコンベを出入りする時互いに待たなければならないことが多いので、ひどく時間がかかる。

なぜ昨日はあんなに長く仕事をしなければならなかったのか、僕たちには分からない、多分高位の士官の誰かが仕事ははかどっていないと思ったのだろう。いずれにしても作業(工兵)ヤップ達はひどく気短かでもとても気前よく殴りまくっていた。特に、班長や、部署の司令官がやられていた。夜のとばりが下りるところになると、お茶づくり達は木を集めさせられ、後になって僕たちがやっていることが自分で見えるように、火を焚かされた。夜中の4時近くになって、いきなり韓国人のキャンプ司令官が現れ、彼は突然僕たちの味方になって作業ヤップ達と口論を始め、大騒ぎを起こした。効果はあって、そのすぐ後に仕事は止めになり、キャンプに帰って良いことになった。僕たちの兵舎に帰る前に、僕たち全員、今日は‘ノー・デューティー’になると聞かされた。

オットウン

1943年5月7日

[メザリ(ビルマ)] カタコンベの中ではそれほどものを運ぶ必要が無くなり、土の運搬もずっと手際よくなった。竹とひもで、吊り上げ装置を幾つか作り、こうして土袋を吊り出すようになり、運び人が担いで行くよりずっと迅速にいく。夜8時頃に[僕たちは]キャンプに帰り、そして食事の後、9時頃に仕事に戻るためにまた整列した。いやなこった、また夜間作業か!だが15分近く待ったところで通達が来て、夜間作業は中止となり兵舎に戻ってよいことになった。

オットウン

1943年5月12日

[メザリ(ビルマ)] 僕はこのキャンプを後にすることに関して、個人的には一切悲しむことはない、特にこのところのようにきつい日々の後では尚更だ。[5月]9日のように。その日は夜遅くまで働き続けなければならなかった。しかし翌日はまた通常どおりの時間に仕事に行き、10日には11日の朝3時まで仕事を続けなければならなかった。その日はくたくたになって、殆どの男達は夜近くまで眠り続けたのも分かる話だ。

リブンス

1943年 5月13日

[メザリ (ビルマ)] [鉄道] 堤建設が特別に急がれていることから、この頃では朝の3時半、時にはもっと遅くまで仕事をする。[...] 仕事に関しては僕はついていた方で、というのも丁度仕事がきつくなり始めたときに下痢になり、宿舎に残っていたからだ(つまり、5月1日に)。しかし3日後には、あちらにもっと人が要るので、ヤップによって堤作業に送られた。僕らはボロン [ノルマ] は半分(0,8立米)で夜の9時から朝の4時まで仕事をした。その次の日は幸い昼間の仕事だったが、僕は‘ノー・デューティー’組に残った、僕が回復してからもだ。[5月] 10日には僕は降り出した雨のためにひどい頭痛になり(頭風邪)、このため、宿舎に残った。

ディッケ

1943年 5月16日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 水雑役。我々はキャンプから15mほど歩いて竹で水をくみに行かされる。河もきちんとした井戸もなく、小さな湧き水とポンプがあるだけだ。沐浴したり洗濯したりするのは難しい(約500 [人] の‘ノー・デューティー’が選ばれた)。

オットウン

1943年 5月17日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 今日は仕事に行かされた。しかし鉄道作業ではない。僕らは道路で、戦争捕虜言葉で言う‘クロイエン’をしたのだ。道路の穴を石でふさぐのだ。この石は、実際には岩のかけらなのだが、これは道路を造っている場所の隅で探さなければならない。道路の両側の溝も深くした。

ボム

1943年 5月17日

[キャンプ 80 (ビルマ)] この数週間我々は鉄道堤のある部分をプログラムどおり期間内に完成させるため、がむしゃらに仕事をした。朝8時から夜12時半までという日々だった。最初はこれは7日間だけの筈だったが、その後何日かが加わり、最終的には今日終わった。10日に一度



の休日もこの中で無くなってしまった。追加の食糧で何とか身体を持たせたが、疲労ははなはだしい！

グルドヴァッチ

1943年5月20日

[ウォンピン (タイ)] 僕の書き物を続けていなかった。そのエネルギーがなかったのだ。この3週間の概要を書こうと思う。なにかショッキングなことでも起こらない限りこれが通常のやり方になることだろう。[...] 我々は野獣のようになって鉄道と平行に走る自動車道路を建設している。7時から[夜] 7時まで。午後1時間の休息で。

フェイケマ

1943年5月20日

[トンチャン (タイ)] 今日は日曜日の休日で、ついていた。明日は我々新規到着組も鉄道建設、つまりただのクーリー労働を始めるのだ。新規到着者のこの階級の中では僕が最も古株なため、僕はこの52人の男達の司令官という、疑うべき喜びの地位にいる。最愛の人よ、僕はここしばらくはあまり書く時間もないだろうが、しかし、その時間があることを望んでいる、君とちょっと喋ることは僕にとってもとてもいいことだから。

オットウン

1943年5月23日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 食事は悲しむべき状況でしかない。[...] 丁度この、また1週間鉄道作業をし、ボロン [ノルマ] が1人1,8立米という時にだ。仕事は、今雨が降り続く様子を見せているため、もっときつくなる。雨宿りなどはない。そのまま持ち分が終わるまで仕事を続け、[それから] 膝まで埋まる泥の中を歩いていく。僕がひどくぐったりし、キャンプに帰っても何もする気がしないのが不思議だろうか？

オットウン

1943年5月26日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 数日前から、僕は5キロメートルくらい先の岩場で石掘りをする作業班に入っている。僕たちは食事休憩無しで3時か4時頃まで働き、それから宿舎に帰る。そうすれば、その日の内にまだ何かこしらえたり、少ない衣類を洗濯したり、あちこちで久しぶりにおしゃべりをしたりする事もできる。

フェイケマ

1943年5月31日

[トンチャン (タイ)] 昨日はずぶぬれになって帰ってきた。我々は今日の午前中ずっと土砂降りの雨の中で、靴と靴下と短ズボンだけで働き、全ては泥だらけで野獣のように汚れた。[...] 衣類は恒常的にぬれていて汚い、自分のための時間など無いからだ。今日の午後は幸いにもやっとの事で衣類を乾かすための半日の休みになり、我々は少しずつ大きな火のところで乾かした。私はあれやこれやを泥水の小川で濯ぎもした。この小川は500人のオランダ人達と数百人のイギリス人達の唯一のマンディ [沐浴] 場所でもある。

我々は6時半に起床し、それから食事(粥)をして8時15分前に整列する。それから6時半か、時には8時まで、15分の休憩2回と1時間半の昼食時間を挟んで仕事をする。

ディッケ

1943年6月3日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 昇天祭。今日は仕事場で食事をした(こうするとヤップのための労働時間が1時間半長くなる。9時から1時までと2時から6時半まで)。それから僕は沐浴をし、病気報告(白癬 [に罹っている])をし、続いて食事で、その後、もし点呼に行く必要がなければ、つかの間の読書時間だ。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年6月5日

[カンチャナブリ (タイ)] 軌道は西の河の一部に沿っていて、最初は南に、それから西に走っている。土壌中に変成石灰がよく見られる(水平に!)。赤い土壌もみられ、(沿岸帯か?) テ

ラ・ロッサだ。石灰洞窟。川が、波打つ [山の] 峰の間を通り抜けようとすれば、壁も突き破らなければならない。あちこちで川が峰を横につき切って流れている。11-アーチの橋 (タマルカン橋、カンチャナブリから約6キロメートル) はジャワから来ている。緊急に作られた橋は、枕木と同様に野生の木でできていて、それでも重いタイの機関車がそこを通っていく。道床はあちこちで欠けていて (後で運ばれてきて補充された)、堤はまだ沈下安定が必要なため、脱線がおき、軌道の脇に車両が3台ほど (3カ所に) 置かれているのを見た。

このタイ、及びビルマの軌道には5万人の戦争捕虜と、それに大量のタミール人、中国人、そしてタイ人が働いており、1日約5キロメートルのペースで進んでいる。ボルネオタイプの中密度原始林。雨が非常によく降る。泥灰土壌と腐植土、それに吸入泥粘土も多い。岩は不安定で崩れやすい。この軌道は急勾配で高くそびえた川岸から、しょっちゅうはずれている。[この仕事は] 9月までに完成しなければならない。ムールメインからも作業が進められており、三仏塔峠で両方が結ばれることになっている。

オットウン

1943年6月6日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 僕も米運びに指名された。道路はいかなる運搬機も全く進めない状態になっており、何も運ぶことができない。食料調達に指名されたグループは人数700人に及ぶ。空の野戦袋を背に、僕らはキャンプ98に向かった、つまり10キロメートルほど戻ることになる。道路は今や広い泥の河と化し、僕たちはその横の少し高くなった森の部分を使って行った。キャンプ98とキャンプ108の間の道は実際、掘ってあるのだ。[キャンプ] 108からタイへ向かう道は森林と同じ高さか、時には森の地面よりも高くなっている。ディーゼル・トラクターは泥道を苦勞して地面を掘り起こしつつ、非常にゆっくりとしか進まず、モーターも、泥水すれすれだった。幸いにも行き道は雨が降らなかった。

キャンプ98に到着して、まず食事をした。僕たちは自分たちの米を持っていった。その後リュックサック詰めが始まった。それぞれのリュックサックに米が7キロ入る。この詰める作業に約1時間半かかった、というもこの約700のリュックサックを詰めるのを数人でやったからだ。帰り道は雨だった。幸いにもヤップはうるさくなく、僕たちは、自分たちのテンポで歩けた。僕は、最初に108に帰り着いた者の内の一人だ。僕たちが持ってきた4000kg以上の米は、ヤップ達を含めた全てのキャンプ住人のやっと2日分の食糧でしかない。

フェイケマ

1943年6月8日

[トンチャン (タイ)] 4時半になろうかという時に、鉄道作業上に土砂降りの雨が降り始め、私はそのの‘ナンバー・ワン’、つまり監督士官だ。私自身は一緒に仕事をするには許されな  
い、そのため、君にも分かるだろう、私は氷のように冷たくなった。5時半に帰ってよいこと  
になったが、君の‘タイン’は別だ。この人物は‘ナンバー・ワン’として車を止めるために道に  
立たなければならなかった、なぜならJ [日本人]はまだダイナマイトで岩を爆破させに行った  
からだ。それで私は、土砂降りの雨の中を木の後ろでその後1時間立ち続け、私の身体には体温  
が1度も無くなったのではないかと思う。

リブンス

1943年6月16日

[キャンプ 108 (ビルマ)] (441日目) 6月始めから道路は一切の車両通行ができなくなった  
ため、現在はしょっちゅう我々自身でリュックサックを持って食料調達に行かなければならず、  
そのためにはKm98まで歩かなければならず、結構きついことだ。盗難が多い。この仕事をやった  
数日後に、僕を含めた400人の健康な者が、10日間の予定でKm105 (オーストラリア人キャンプ)  
に送られ、最初の日には我々の宿舎を整えなければならなかっただけでなく (古いビルマ人用小  
屋と牛小屋)、その上4人で米袋 (100kg) 一袋を、つるつる滑る森の中の道を通って3キロメ  
ートル先まで運ばなければならず、帰ってきたときには夜の12時になっていた者もいた。しばら  
くはここではリュックサック (10人で米一袋) での食料調達ばかりをし、こうしてまだ少しは使  
い物になる道路2本の間をなんとかつなげておくことになる。

フェイケマ

1943年6月19日

[トンチャン (タイ)] 両聖霊降臨祭とも、ベッドの上で過ごした<sup>165</sup>、しかし、火曜日にはまた  
始めた。最初の日はついていて非常に軽い仕事で、今は毎日1つの班に付いて行き、士官は監督  
をするだけなので幸い落ち着いたもので、感じのよいヤップと一緒に。さらに、この数日はほん  
の少ししか雨が降らず、そのために我々も不幸を感じる程度が軽くなっている。

---

<sup>165</sup> ‘健康と医療状態’の章、フェイケマの日記1943年6月19日分の抜粋参照。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年6月23日

[キャンプ 120 (タイ)] 今日で、[私たちは] 結婚して4年半になる。[我々は] ヤップのために特別に激しく長時間労働をしなければならない。1人で動かす土の量：1,2立米、これを慣れない人たちでだ。朝早くから暗くなるまで。森の中の泥道を40分間歩いて行き、行きは坂道を登る。沐浴や洗濯の時間はない。読書ができるのはとても長い夜の点呼(2時間)の時だけだ。

[私が読んでいるのは] アレクサンドル・ウェストフェール博士のナザレのジーザス。仕事は重労働で頻繁に殴打される。この間、私は切り株の上で10分間見せしめのために2本のスコップを持って立っていなければならなかった。殴打の雨の中を我々は働き続ける。全員が傷つき、手足にまめがある。この間は1日に3人が死に、その中には工学修士[B. C. C.] ミュラーもいた。[...] これから5メートルの深さの鉄道線路用切り込みを作らなければいけない。

フェイケマ

1943年6月30日

[トンチャン (タイ)] 愛する人よ、長い間、何か君に書こうとしていたのだが、暗くなる前にはチャンスが一度もなかったのだ。今はマラリアで‘病棟’に収容されており、そのためにこうして君と話す時間がまたできたのだ。[...] 僕はこここのところ、木の伐採をしていた。多くはあまり太くなく、それは一定の長さに切って森の端まで運ばなければならない！これが、少ない人数でやるときには非人間的な程の重労働だ。

ルーヘ

1943年7月2日

[クウィマ (タイ)] [私は] レイルロードから戻ってきた。仕事は非常にきつく、過労と熱さにやられて多くが倒れている。私の仲間はテン・ヴィンクル。

フェイケマ

1943年7月8日

[トンチャン (タイ)] この数日間は時々自由時間もあつたが、今夜からはフルスピードが始まった。我々は今グループに分けられ、3時間から9時間働いては12時間休み、昼夜兼行だ。6

時間を4回やると36時間の自由時間になる。これでも結構ブラット〔重労働〕だが、しかしこうして洗濯などをする自分の時間ができる。ここを近日中に出ていくことは確かだ、というのもこの辺の軌道は殆ど完成しており、列車はもうどんどん走っている。しかし全ては超特急に行われる。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年7月10日

〔キャンプ 120 (タイ)〕3日間、軽い(病気の)作業班の司令官を1時半までやった。今日は全日作業で3時まで。5メートルの深さに掘り、砂や石を籠で出す。石割り作業〔もしなければならぬ〕。

オットウン

1943年7月12日

〔キャンプ 105 (ビルマ)〕この数日間はまた天気がだめだ。雨、雨、それから又雨以外に何もない。もう1週間、〔鉄道〕堤の仕事をしていない。だが岩を小さく砕く仕事はある。これは幸いにもノルマ作業ではない〔ので〕少なくとも妥当な時間に帰ることができる。

ディッケ

1943年7月14日

〔キャンプ 105 (ビルマ)〕初めて〔僕は〕グループの司令官代理となり、〔また、鉄道〕堤の仕事をした。6時に宿舎に帰った。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年7月15日

〔キャンプ 120 (タイ)〕夜間作業を2回(9時〔から夜中の〕3時まで)午後作業を1回と午前作業を1回(昨日)した。激しく仕事をした(作業ごとに3本の竹の杖で我々を殴りまくる‘死刑執行人’に急かされて)。仕事場は4キロメートル離れた、泥だらけの、20センチから30センチの深さに泥の入った溝からなる‘自動車道路’を行ったところにある。夜になって、

[我々は] 明かりも無しに（月も無く）宿舎に滑りつつ帰った。30センチ深さの泥に3回‘飛び込み’ [をした]。

ペルクウィン

1943年7月15日

[チュンカイ（タイ）] 又やることが沢山できた。キャンプの周りの森の一部は伐採され、地ならしされた。その直後から、我々は速いテンポで宿舎を造らされた。近々、このキャンプに大量の人間が来るらしい。

オットウン

1943年7月17日

[キャンプ 105（ビルマ）] 僕たちはもうすでに3日間、あの忌まわしい堤の仕事をしている。そしてその日々全部がまたしてもあの忌まわしい雨だ！幸い今日の午後は雨が上がり、[そうすると] 全く別人になったような心地がする。もちろん又遅くに帰った、なぜならヤップが指示した部分の土は今日掘り出して [鉄道] 堤に入れなければいけないからだ。あの散々の雨のため、泥を掘り、泥の中を歩いている。そして堤に入れた泥はすぐに又流れ出てしまう。

夜に、日 [本] 軍司令官が、第三支部は堤を [k m] 175までではなく、k m 130まで造らなければならない、という知らせを出した。僕たちのキャンプは [km] 103から「km」107までを築かなければならない。8月10日にはその部分は完成していなければならない。ボロンはそのために一人2立米にまで引き上げられた。つまり又暗闇で飯を食う、ということだ！

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年7月18日

[キャンプ 120（タイ）] 2日間、私はワルワイン少佐のグループの指揮を執った。最初の夜（8時から [夜中の] 2時まで）、‘死刑執行人’は私も一緒に労働させた（籠の受け渡し）。夜中にその夢まで見た。土 [曜] から日曜にかけての夜は雨が少なかった。[我々] 125人で泥の中を線路（長さ10m、370kg）と枕木（10mごとに14本）を運ばされた。固定くぎを打つ以外は線路ができあがった。一人一本ずつの葉巻をヤップからプレゼントされた。全員くたくた。日曜朝、又出かける（短い眠り）。

ボム

1943年 7月19日

[アンガナン (ビルマ)] 雨は今や激しく降り続けているが、一月2日の休日(8日と22日)以外は毎日仕事をしている。

オットウン

1943年 7月19日

[キャンプ 105 (ビルマ)] 又雨! またしても膝までどろどろに浸かって、上で袋に入ったどろどろを投げ込むために堤の勾配を仲間と一緒によじ登る。幸い午後には雨が上がり、太陽まで顔を出した。くずヤップたちは僕たちの食事休憩からまでも45分間差し引いた。休憩は減り、それでも又暗くなってから宿舎へ!

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年 7月19日

[キャンプ 120 (タイ)] 朝早くになって、約20時間の間働き続けていた労働グループがやっと帰ってきた。夕食は食べなかった。その食事は腐ってしまった。全員死ぬほど疲れている。仕事場では線路金槌(線路釘を打ち込むためのもの)で殴られる。虐待だ。彼らは11時には又食事をして整列しなければならない。

フェイケマ

1943年 7月21日

[トンチャン (タイ)] 私はこのために<sup>166</sup>労働者達が実際に虐待されていた時期にいなかった。24時間労働をし、6時間休んで又働く。しかしこの鉄道はすでに完成し、あちらこちらで仕上げをしているところだ。

---

<sup>166</sup> フェイケマは病気だった。‘健康と医療状態’の章、フェイケマ1943年7月21日の日記抜粋参照。



グルドヴァッチ

1943年8月1日

[クイエ (タイ)] 堤の建設作業は重労働だ。ノルマは1人1日2,6立米だ。僕たちは5人グループで働いている。4人でタンドゥー [布で作った土運び用具] を担ぎ、1人がそれに土を入れる。ただし、土がそれを許せば、だ。もし土が硬すぎる場合は2人で土を入れ、3人で‘走る’。僕たちが仕事をしている場所では150メートルの距離を運ばなければならず、それから大体8メートルの高さの [鉄道] 堤を登るのだ。この高い部分は病人のために用意されている。この先の、堤が1/2から1メートル低いところは健康な者用だ！病人の中には、その方が仕事が軽くなるので、健康だ、と申し出る者もいる。日本の医療ときたら… […]

7月26日に僕は‘炊事場薪グループ司令官’になった、たいそうな職務だ！！

これについて回るリスクは、ヤップが堤作業に向かないと決めた者だけが薪集めをすることができるということだ。それでも炊事場はやり続けなければならない、どの様にして、ということには彼らは興味がない。このグループは、パウル・ミシエル、ハンニバル [ハンス・ファン・ザイル・ドゥ・ヨング] (最近クイエに運ばれてきた) とクラーフェルトから成っている。僕たちは点呼の前からもう森に消える。実際にはいけないことだ。一度見つかって、ヤップに殴りつけられた。そのかわり、ヤップを何日も見ないことも多い。そして、最も重要なこと、それは僕たちが炊事場でエクストラをもらえることだ！僕がそこでかき込んだ飯や粥の量は、ちょっとしたものだ。

ルーへ

1943年8月6日

[クウィマ (タイ)] 我々は [昨日と今日] 2時間ごとに10分の休憩で40時間働き通した。

オットウン

1943年8月7日

[キャンプ105 (ビルマ)] 僕は‘ドゥ・ピル’<sup>167</sup>に、もう2日、LD [軽作業] に指定された。あと2人の‘軽作業仲間’とともに、ヤップの監視のもとに、炊事場のための竹の子を探しに森に行ってきた。 […]

---

<sup>167</sup> オットウンはここで、アンダーソン医師を意味している。‘健康と医療状態’の章、オットウンの日記1943年8月2日の抜粋参照。

我々の部分の堤はできあがった、と何人かの労働者達が夜言っていた。後はあちらこちらを直したり勾配を仕上げたりするだけだ。その後我々はすぐにも出発するだろう。

ディッケ

1943年8月7日

[キャンプ105 (ビルマ)] 同じ。<sup>168</sup>我々の部分の鉄道は完成した。やっと1日休日となり、それから仕上げだ。

ルーへ

1943年8月8日

[クウィマ (タイ)] 鉄道は地獄だ。ほぼ70% [の男達] は傷つき痛んだ足で歩き、多くは這って仕事に行く。P [日本人] は病人であろうとなかろうと、構わず殴りまくる。

ルーへ

1943年8月10-11日

[クウィマ (タイ)] またもや我々は夜中働き続けた。掘削工事を完成させなければならないのだ。レールはすでに我々のキャンプに置いてある。rr [鉄道] のP. cdt [日本人司令官] はいつも居る。彼はひどいサディストだ。

11時。今日 [8月11日] 我々の任務は果たされた。全員がほっと溜息をついた。このrrは約35%の人々 [の命] を奪ったと推測される。

ルーへ

1943年8月12日

[クウィマ (タイ)] 休息。クウィマでの初めての休日。

---

<sup>168</sup> ディッケは何日も同じ作業をしたときには日記の記述を短いものとどめた。ここで‘同じ’といているのはグループの長としての仕事のこと。1943年7月14日から、彼は初めて、グループ長代理として堤の仕事をしていた。

ルーへ

1943年 8月15日

[クウィマ (タイ) ] rr [鉄道] の仕事はまだ続いている！毎日、機関車が試運転している。掘削場所は広げ、堤の傾斜もだ。石を切り出し、カリ [河] から砂利を運んでレールの上に詰める。我々は今日12時間仕事をしている。

オットウン

1943年 8月18日

[キャンプ 105 (ビルマ) ] 僕たちはまだ堤の仕事をし続けている。降雨のために堤に穴が開き、それを埋めなければならない。勾配もしっかり仕上げなければならない。このため、8月始めに行われるはずだった「キャンプ」108への移送は話もない。

グルドヴァッチ

1943年 8月18日

[リンティン (タイ) ] 薪割り職のおかげで僕は健康を取り戻し、マリモトによれば僕が‘ナンバー・ワン’だそうだ。こうして僕は‘ハンチョーウシ’！‘牛司令官’になった。29頭の牛を警備し、炊事場ヤップと一緒に1日3回点呼をする。これからいったいどの様にやっていったらよいのかは謎だ。一日中、この嫌な奴らをひとまとめにするために森の中を追い回っている。夜は大きな火を焚くと怖がって(豹!) その周りに集まってくる。彼らはなるべく互いに身をすりあわせようと火の脇にある僕のテントの周りや上に集まる。僕のテントはもう2回もぺちゃんこにされた。こんな事をしてるとちゃんとは寝られない。それに数分に一度は火をくべていなければならない。竹はすぐに燃えつきてしまう。これを続けるのは無理だ。殴りつけられることになるだろう。

フェイケマ

1943年 8月20日

[トンチャン (タイ)] 2番目に感情が騒いだのは<sup>169</sup>は一昨日の夜間作業だ。この新しい路線では多くの列車が脱線するのだ。多くの場合大したことはなく、1時間くらいの作業で、我々の誰かが助けに行く。一昨日の夜9時近くにも、聞き慣れた笛の3連呼があったが、同時に70名が出るようにという指令があり、つまり今度は大きいということだ。10時に我々が到着してみると、3台の、レールを積んだ2両連結車両が脱線していた。我々は昨日の朝9時半までこれにかかっており、帰ってきたのはやっと10時になってからだった。これが9時から夜の7時半まで、丸一日仕事をした後のことなのだ。我々は疲れ果てていたが、この報酬として朝、エクストラの米と鯛の缶詰半分、それに紙巻きタバコを一箱もらった。私は午後から夜中まで石のように眠った。  
[...]今日は突然休日になった、我々がここに来てから、つまりこの3ヶ月の間に2回目だ。

リブンス

1943年 8月20日

[キャンプ 105 (ビルマ)] (507日目) その後また2回の病気期間を経て、僕たちはこの休日にたどり着いた。7月11日以来、毎度のように朝は日の出から夜の日の入りまで働き続け(一人[一日] 2から4立米)、[鉄道] 堤は殆どできあがった。休日は例外に属していたが、これからはもう少し規則的になる可能性がある。

ボム

1943年 8月20日

[アンガナン (ビルマ)] 明日は休日だ、7月23日以来初めて。

ディッケ

1943年 8月21日

[キャンプ 105 (ビルマ)] 幹部から特別休暇をもらった、一月以上働き続けていたからだ。

---

<sup>169</sup> 最初の感情はこの前日にフェイケマが他の100人とともに‘奥地’に出発するグループに選ばれたこと。‘移送と宿泊’の章、フェイケマ1943年8月20日参照。

グルドヴァッチ

1943年8月24日

[リンティン (タイ)] 僕が思ったとおりのことになった。ある晩、僕は寝入ってしまった。火が消えた。その結果として牛たちは炊事場の火の方に歩いていき、炊事場の半分を踏みつぶして、めちゃくちゃにし、塩の袋を舐めてしまった！僕へのお仕置きはよく効いた。特に下腹への蹴りと、竹とベルトの金具で僕の顔を殴るのが。僕の最後の眼鏡は幸い何とか無事だった、つるが壊れてしまったが鉄線で直せるだろう。

オットウン

1943年8月27日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 僕は‘座り係’だった。これは兵舎やその周辺でおとなしくしていて、ある種の笛の合図で急ぎ足で点呼の場所に向かい、そこでなにかの仕事が与えられる。多くの場合、それは食糧を運ぶトラックの荷下ろしだ。

労働者たちが出発した数時間後に僕は作業合図を聞き、点呼の場所に急いだ。そこにはやはり食糧を積んだトラックがあった。作業グループ―僕たちは6人だった―は荷下ろしを始め、荷が空になると車はまた出ていった。

リブンス

1943年8月27日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 今日はまた久しぶりに[鉄道] 堤用の砂を運んだ。

オットウン

1943年9月9日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 今朝僕たちが仕事場に着くとグループの中から10人くらいが、別の仕事をするために選び出された。僕もそのうちの一人だ。僕たちは2人ずつのグループに分けられ、それぞれのグループは重い大金槌と丸い金属棒をトラックに取りに行き、その後何人かの工兵ヤップとともに岩場の軌道に向かった。これまではいつもつるはしで土を崩し、かけらを運ばなければならなかった。この作業はひどく時間がかかり、ボロンを達成できる者はいなかった。そのために遅くまでかかったのだ、ヤップは大抵暗くなるまで仕事をさせる。

突き出した岩に穴を開けることになった。端が金でこのようになった丸棒を、大金槌で約1/2メートルの深さの穴が開くまで岩に打ち込む。工兵ヤップたちはこの深さを正確にチェックする。うまくいったとなると、少し先に行ってまた同じような穴を開ける。この様にして午前中ずっと続いた。食事休憩の後で‘爆破グループ’はまた集まり、木箱を取りに行かされて、穴を開けた岩場まで運んだ。この木箱には爆薬ゼリーが入っていた。そのぶよぶよする物質を穴に詰めさせられ、この仕事に1時間はかかった。全ての穴が埋められたとき、僕たちはヤップたちが集まっていた、小さな、ポンプのような機械のある場所に行かされた。他のヤップたちは僕たちが詰めた穴に長い導火線を設置していた。それが終わると、下士官がもう一度見回った。‘オール・クリヤー’であるかどうかの確認だ。彼が帰ってくると命令を下し、ヤップたちは岩の裏の、機械のある場所に身を潜めた。僕たちも隠れなければいけなかった。2度目の命令が下ったとき、ヤップたちは機械の取っ手を押し、いくつもの爆発がそれに続いた。隠れていてよかった、僕たちの後ろにも岩のかけらや砂が落ちてきた。

この後、僕たちは次の岩場に行かされ、そこでまた同じ作業をした。ただ、今度は爆薬ゼリーを、穴が開くとすぐそこに詰めた。他の作業員は岩のかけらを片づけていた。幸い、僕たちは暗くなるまで仕事をしなくても良かった。5時過ぎに停止になった。停止になってよかった、というのも、僕は嫌な感じの頭痛が始まるのを感じていたからだ。これはあの爆薬ゼリーからきているらしい。今日の午後、ある工兵ヤップが（僕が開けた穴に例のゼリーを詰めているとき）たどたどしい英語で、僕にまだ頭痛は起きないか、と聞いたのだ。僕は頭痛など無かった。その場に居たもう一人のヤップと、僕に質問したヤップはその時ちょっと笑った。彼らはあのゼリーが頭痛の原因になるということを知っていたのだろう。

オットウン

1943年9月13日

[キャンプ 122 (タイ)] 今日は新しい環境での仕事場所に行った。<sup>170</sup>確実に1時間は歩いた。またもや土仕事と堤建設だ。もちろん遅くに帰ってきた、帰りもまた1時間歩くからだ。

---

<sup>170</sup> オットウンは1943年9月11日にキャンプ108からキャンプ122に向けて出発したグループに入っていた。‘移送と宿泊’の章参照。

ペルクイン

1943年9月14日

[ヒンダト (タイ)] 僕たちは鉄道のために激しい労働をし、1日25セント受け取る。全ては恐ろしく高く、殆ど何も売っていない。毎晩、僕は仕事のために死にそうに疲れていて、僕たちのグループは‘ザ・ライト・デューティー・パーティー’ということになっているのだ。これではあの‘スピード時期’に、哀れな男たちがどれだけ酷使されたか考えてしまう。情報によれば40時間ぶっ続けでやり通した時期もあるという。夜は松明の明かりのもとで。毎日ダイナマイトの爆音を聞く。どこか、かなり上の方で、レールロードの基礎を造るため、岩を爆破しているのだ。

幸い雨期は終わった。雨期にはここは本当の地獄だっただろう。僕の肩は重い木の幹を運ぶために皮がむけていて、今は少ない自分の時間を日記書きに当てている。時には日記を付ける意味があるのか、と想着てしまう。今にもプラウ船が到着して、僕たちは夜遅くまでその荷下ろしをするために呼び集められるかもしれない。今日だけは、僕がヒンダトに来て初めて、何もないといいのだけれど。愛しいミーンチェ、僕はいつも君のことを考えている。安らかにお休み、可愛い人。

ボム

1943年9月15日

[アンガナン (ビルマ)] この仕事は終わった、鉄道にはすでに一種の作業列車のようなものが走っている。

オットウン

1943年9月18日

[キャンプ 122 (タイ)] 僕はここ数日間病気だ。今日は熱が無くなり、軽い内部作業を割り当てられた。堤は完成した。だから、土仕事はもう無い。今は別の仕事、レールを敷く仕事がある。グループの仲間はその仕事をもう数日間している。

リブンス

1943年9月20日

[キャンプ 122 (タイ)] 堤はもう殆ど完成だ。今日、レール敷設の人たちがもうキャンプに到着し、月末までに鉄道は仕上がる。そしたら僕たちは、遂に休むことができるのだろうか？未来に希望を見ている。

リブンス

1943年9月24日

[キャンプ 133 (タイ)] 噂では、我々はこちらには短期間しか居ないそうだ。僕たちは鉄道の先を行き、まだ堤ができていない所にはどこでも送られて早く仕上げる手伝いをし、km122でもそうだったように、枕木やレールを敷く手伝いをすることもある。このために、特にこの前のキャンプでは夜遅くまで仕事をしたのだ。中には朝9時から翌朝の9時までずっと仕事をし続けて、その上、その日の内にこのキャンプまで歩かされたグループもあるという。

ペルクイン

193年9月24日

[ヒンダト (タイ)] ここはもう1週間ずっと毎日雨で、ヒンダトの一部は浸水している。仕事は、この呪わしい雨の中で一段と重労働だ。鉄道まで僕たちが歩かなければならない道は厚い泥の層に変わった。その中を、貧弱な靴で‘かき分け’ていくのは痛みをともなう体験だ。僕たちはいつも濡れている。一日中雨の中で仕事し、食事の後、泥だらけでくたびれ果てて、雨漏りのする小屋の中の、水の滴るバレーバレー [寝椅子] か、水の浸みたズック布の上に眠るために横になる。そして次の日はまた全く同じ事の繰り返しなのだ。雨の中で仕事し、濡れた簡易ベッドで眠る。僕はしょっちゅうひどく疲れ、8時 (太陽時) にはもう横になって、この陰惨劇を忘れ、雨期はもうすぐ終わる、と考えるためになるべく早く眠ろうとする。

オットウン

1943年9月25日

[キャンプ 122 (タイ)] [9月] 24日、金曜日、また仕事に行った。レール敷き。最初は雨が降っていなかった。しかし午後には小雨。僕たちは夜通し働いた。夜は食事が仕事場に運ばれ



た。それは忌々しい夜だった。ヤップたちはひどく短気で、ひどく殴りまくった。嫌な奴らめ！今朝は仕事場で朝食。幸い雨は上がっていた。やっと午後1時頃に仕事は終わった。2時に宿舎に帰った。僕は石鹼を1つ買うことができ、しばらく振りに気持ちよく石鹼を使って沐浴した。僕たちは30時間やり続けたのだ！

オットウン

1943年9月27日

[キャンプ 122 (タイ)] やれやれ、今日は気持ちよく寝坊した。休日だ。昨日は10時に整列し、トロッコで仕事場に送られた。このトロッコは平たい車両、実際には鉄道車輪に木製の台を取り付けたもので、鉄道車輪を付けた自動車に引かれている。‘物知り’は、自動機関車、と呼んでいる。別のグループが置いた枕木に、僕たちはそれからレールを打ち付けなければならなかった。夜中の2時になって、レールがもう無くなったので、仕事は止めになった。またトロッコに乗せられて帰り、4時頃に僕は僕のテンパチェ [寝場所] に、その後は休みになるという良い気分で潜り込んだ。

オットウン

1943年9月28日

[キャンプ 130 (タイ)] トロッコは僕たちをすぐに数キロメートル先の仕事場に運んだ。僕たちは今、公式にレール敷設グループになった。

リブンス

1943年10月5日

[キャンプ 133 (タイ)] (553日目) 今日は休憩日だ、昨夜は働き通し、今朝の9時半にやっと帰ってきたからだ。昨日の昼間は3/4時間の食事休憩があっただけで、灼熱の採石場での重労働だった。夜は、彼らが僕たちの食事を持ってくるのを忘れたので、やっと夜中の12時半になって食事した。午後2時からずっと [食べていなかったのだ]。

この採石場が、鉄道堤の後ただ一つの障害物だ。レールはこのすぐ先にあり、全てはここが突破されることだけを待っている。日中はクリングン [南インド海岸の原住民] と一緒に仕事し、その後は中国人と、3時半から4時半まではビルマ人に代わり、その後は全員一緒だった。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年10月10日

[カンチャナブリ (タイ)] このキャンプの、大体2,400人(病人)のうち、作業(墓掘りなど)をしているのは数人だけだ。将校は新しい便所用の溝掘り(=軽作業)や、薪割りやMP[軍事警察](私)などをしている。

フェイケマ

1943年10月12日

[カンチャナブリ (タイ)] 僕はこのところひどく忙しい、というのも、約1週間前に設置された、食堂のコーヒー屋の‘係り’になったからだ。何かすることを与えられるのは必要なことだった、何もしていないと僕は怠惰でだらけてしまう、僕は結構良い状態なのだ。<sup>171</sup> [...] 僕たちが作るコーヒーは、食堂の監督のもとに兵舎で売られ、通常1日に大体バケツに18杯から20杯作る。コーヒーはコーヒーマグなみなみ1杯で5セントで売られており、この水不足のキャンプの救いである。

ペルクイン

1943年10月13日

[ヒンダト (タイ)] 仕事はもう無い。全ての工具は洗浄され、梱包された。僕たちは、すでに送られたスコップやつるはしを、またもう1度手にするために早々にその後を追うことになるだろうと僕は思う。それがいつになるかはそのうち分かるだろう。

オットウン

1943年10月16日

[キャンプ 130 (タイ)] 先週はまあまあゆっくりしていた。レール敷設は数日間停止されていた。運搬の問題だろうか?ただ、もう操作場のある荷物置き場には何度か行った。そこで数回、枕木を積んだトロッコの荷下ろしをした。1度は枕木に前もって穴を開けるために枕木の山のと

---

<sup>171</sup> フェイケマはこの時期頻繁にマラリアの発作に襲われた。‘健康と医療状態’の章、フェイケマの日記1943年10月3日の抜粋参照。

ころで仕事をした。それぞれの穴開けグループは男3人とドリル1つで成り立っている。2人が山積みの中から枕木を1本とり、穴開け係のために、印を付ける。手本は操作場にある敷設済みのレールだ。嫌な仕事ではなく、午後4時頃には枕木の山の穴開けが終わり、またトロッコに運ばれて帰った。

[10月] 13日、僕たちはまたレール敷設のために呼び集められた。そしてまた24時間労働 [だった]。9時頃にトロッコが僕たちを仕事場に運んだ。レールと枕木を積んだトロッコはもう来ており、僕たちがすぐ仕事にかかれるようになっていた。そして僕たちは、翌日に代わりのグループが来るまで仕事した。この24時間に3度、1時間近い食事休憩があった。僕たちが新しいレールや枕木の到着を待たなければならないときには、特別休憩にもなった。その24時間の中に、大量のレールが敷設された。

この数日前の夜に、[レールを] 敷いていて橋の所まで来た。それは2枚の巾広の板に過ぎなかった。少なくとも、そのように、その橋は見えた。後でそれは2本の丸太で、一方を縦に削ってあるものだと分かった。2本の木は深みの上をきっちり岸から岸まで渡してあった。僕たちには水の流れる音が聞こえた。それは僕たちにはずいぶん巾の狭い水の渡しに思えた。最初に2本の丸太の上に枕木が置かれ、その後にレールだ。僕は釘留めグループだった。夜は松明で照らされて仕事をしていることも書いておかなければいけない。僕たちがその橋の上で作業をしているときに、あるヤップの一隊が、急いでいるらしくひどく早足で枕木から枕木に飛び渡りながら、横を通り過ぎていった。1人のヤップはつまずいたが、僕たちのうちの1人で松明を持っていた男につかまって立ち直った。そのヤップは先に跳んでいき、松明を持っていた男はずれてしまった枕木を直そうとして松明を下に置いた。この動きの時に松明に当たり、松明は橋の下に落ちてしまった。その時初めて、僕たちは、自分たちが数十メートルの溪谷の上にいることを自覚した、なぜなら松明は最初、計り知れない深さを落ちていったからだ。落ちてからずいぶんして、やっとそれは、僕たちからかなり下の、溪流の中の石に当たって砕けた。僕たちはそれからもう少し注意深くなった。翌日、例の橋を渡って帰るときに見ると、本当に、その谷は50メートルの深さもあるかというものだった。

オットウン

1943年10月17日

[キャンプ 130 (タイ)] いつもより遅く迎えが来た。僕たちが仕事場に着くと、日本の兵隊が大勢居るのが見えた。本物の軍楽隊だ。数百メートルのレールを敷設した後、‘ヤスメ’が怒鳴られた。(‘ヤスメ’は日本語で‘休憩’のこと) 僕たちには1キロメートル弱先にも戦争捕虜たちのグループが作業しているのが見えていた。見たところそちらもレールを敷いているようだ。日本の伍長だか下士官だかが、僕たちの監視兵の所に来て何か言った。その韓国人は僕たちに彼と一緒に来るように言い、僕たちを森の一部に連れていった。そこで僕たちは木の下に座ら

された。もう一方の戦争捕虜グループもやはり森に来て、僕たちから少し離れたところに行かされた。もちろん、両グループ間には早々に何らかのコンタクトが取られた。

あちらのグループは、やはりオランダ人で、タイ・パーティーに属していることが分かった。彼らはバンポン（バンコクの近く）から、ビルマに向けて鉄道工事をしてきたのだった。今や我々は2つの鉄道が結ばれる地点に来たのだ。しかし、この最後の部分は戦争捕虜にはさせない。撮影隊が位置に着くのが見えた。命令が聞こえ、少し後にヤップたちのグループが2つ、僕たちが仕事を止めさせられた場所に歩いていった。カメラチームが活動を開始すると、その2つの日本人グループは多分あと300メートル程の、欠けていた鉄道のレールを敷き始めた。最後の釘が打ち込まれると、全てのヤップが歓声を上げた。カメラマンはカメラをあちらこちらに向けた。数人の‘高官’を含む、大勢の士官が前に出た。森に居た監視兵に合図が送られ、彼は僕たちのグループリーダーを引き出して日本軍士官たちの所に送った。高等士官の一人が短い演説をした。その後、士官たちと、そして僕たちのグループリーダーたちもグラスを渡され、ワインが注がれた。グラスが空になるとグループリーダーたちはまた森に送られた。一人のグンゾー（日本の下士官）が僕たちの方に来て、僕たちに向かっていくらかの紙巻きタバコを撒いた。殆どの捕虜たちはタバコを目がけてつつこんでいった。僕はヤップに、物欲しげに掴み取りするのを見る楽しみを与えまいとして静かに座ったままでいた。幸い、同様に考えている人は僕だけではなかった。それならタバコ無しさ。僕はもう長い間タバコを吸わないでいるし。

この‘祭り’の後、僕たちはまたトロッコのある場所に歩き、乗って帰った。しかしキャンプではなく、荷物置き場までだ。そこで、僕たちはまたレールを敷かなければならなかった。そこは積み替え操作場になるらしかった。長く働き続けた。昼食は、夜になってから夕食と一緒にもらった。昼飯の籠の中の米はもう酸っぱくなっていた。夜中の2時になってからやっとキャンプに帰ることが許された。

リブンス

1943年10月17日

[キャンプ 133 (タイ)] (556日目) 今日はまた日曜日だ。数日間、毎回のよう崩れてしまいう採石場で、やたらに急かたてられ、殴りまかれる激しく悲惨な労働の後で、僕は‘幸いにも’、石が僕の足の上に落ちたために3日間休みになり、丁度その間に採石場の仕事が終わった。[...] いずれにしても、鉄道は終わりだ。次に待っている話は何だろう？神のみぞ知る。

ドゥ・フラウター

1943年10月22-24日

[カンチャナブリ (タイ)] 昨日、バンポンからバンコクまでの日本軍の大量輸送が行われたと言っていた。近々、鉄道は正式にタイに移譲されるらしい。

オットウン

1943年10月25日

[キャンプ 130 (タイ)] 静かな日々だ。堤仕事もレール敷きも終わった。ただ時に、[10月]22日のように、軽い仕事があるだけだ。その日、僕たちのグループのうち僕自身を含む数人が、ヤップのテーブルを作らされた。

フェイケマ

1943年10月26日

[カンチャナブリ (タイ)] 僕はまた数日間休みだ、というのも、我々のコーヒー及び甘い物ビジネスは多くの問題を抱えているのだ。水はいつも少なすぎて、1週間のコーヒー供給の後、停止せざるを得なかった。それから我々はテンテン [ピーナッツクッキー] や甘い物 (焼いたクッキーなど) のビジネスを食堂で立ち上げようとしたが、材料 (粉とか油など) を手に入れたとき J [日本人] から命令が来て、ハエがたかる恐れがあるため、包装しないと売ってはいけないという。そのためまた停止しなければならず、僕は今、包装のための紙を探しているところなのだ。この先続けられないとしたら残念なことで、というのも、このビジネス全体が食堂の結構良い収益となり、それを病人用の特別食料購入に使うことができるからだ。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年10月29日

[カンチャナブリ (タイ)] 夜12時から朝4時まで、MP [軍事警察] [の仕事をした]。寒く、歯痛 [があり]、[キャンプ中] 泥だらけで、くるぶしに痛みがある。

ペルクイン

1943年11月8日

[クウィマ (タイ)] 今日は僕たちの2日目の休日で、僕の日記を付けることができる。兵舎は上々で、ここはチュンカイよりも居心地がよい。食事については文句はない。鉄道での仕事はまあまあだが、しょっちゅう暗くなるころに帰ってきて、これは楽しくない、15分後には真っ暗な夜になってしまうのだ。

ルーへ

1943年11月11日

[クウィマ (タイ)] 今日、最後のrr [レイルロード作業] があった。

ペルクイン

1943年11月12日

[クウィマ (タイ)] 鉄道の仕事は事実上、終わった。工具は洗浄され、梱包されて送られ、ヤップの荷物も、ヤップ自身付きで同様だ。監視人だけがまだいる。線路ではもう仕事をしない。今日は男たちは竹を切って、ヒンダトに持って行かされた。

リブンス

1943年11月20日

[キャンプ 133 (タイ)] 僕自身は行けない、<sup>172</sup>僕は11月5日から病院の看護助手として、今でも満足して仕事をしているからだ。多くはマラリアか熱帯熱か赤痢にかかっているのだが、これまでは幸いにして死んだ人はいない。これは全然別の職種だ。病人用便器を空にし、病人の身体を洗い、赤痢患者の衣類の汚れを洗い流す、でも僕は喜んでこれらのことに自分の時間を提供したいと思うし、これによって多くの人を知ることできる。同時に、この [鉄道建設作業からの] 休みの時期にやることができ、給料も出るし、食べ物も少し多くなり、こんな時には助かることだ。

---

<sup>172</sup> キャンプ130で行われた、鉄道建設中に亡くなった人たちの追悼集会のこと。‘収容所組織／ヨーロッパ人及び日本人収容所スタッフ’の章、1943年11月20日のディッケの日記からの抜粋参照。

ペルクイン

1943年12月1日

[クウィマ (タイ)] 10日間、僕たちは道路の建設作業をした。毎日数百メートル進んだ。象が重い丸太を運ぶのを手伝った。鉄道建設の時にも、多くのキャンプで象たちは激しく働かされた。象は僕たちの忠実な仲間だ。この怪力が動かせるものといったら信じられないくらいだ。昨日はクウィマからすでに5キロメートルくらい離れたところで仕事をした。全部徒歩で行かなければならないため、仕事始めは少しずつ遅くなり、仕事の終了も暗くなる前にキャンプに帰るために少しずつ早くなった。毎晩僕はひどく疲れている。殴られはしないし、自分たちのテンポで仕事をしているので、まあまだ。食事がうまいし量も十分なせいもある。冷たい朝の時期がまた始まり、そのために早朝に歩くのはとても気持ちがよい。空想の中で、僕はミーンとレンバン [ジャワ西部] のどこかを散歩している。あそこは高山気候で特に朝は同じような爽やかさだ。

ペルクイン

1943年12月14日

[ヒンダト (タイ)] 僕は今、カウボーイという楽しい仕事をしている。4人の他の若者たちと一緒にキャンプの外の小屋に寝起きしている。点呼などとは全然関係なく、そのためにずっと自由な生活だ。カウボーイごっこにはいろいろな冒険や危険がつきまとう。気を抜いたために、僕は2回雄牛にやられた。僕の右手は腫れて痛みを持ち、おまけに鼠蹊部を蹴られたためにびっこを引いている。大したことはないし、仕事に変化がある。昨夜は虎の訪問を受け、そのために動物たちはパニックに陥って、囲いを破って逃げてしまった。真夜中に僕たちは牛たちを探しに行き、修復された囲いの中にまた追い込むことができた。この職では恐がりはだめだし、弱虫もだめだ、というのも抵抗する雄牛を炊事場に追い立てるときにはずいぶんいろいろなことが起きるからだ。

オットウン

1943年12月18日

[キャンプ 112 (ビルマ)] この13日間には特記すべき事は殆ど起こらなかった。時々小さな労働者グループが、例えば堤に開いた穴をふさぐなどの軽い修復作業のために鉄道に出た。

ペルクイン

1944年1月12日

[ヒンダト(タイ)] 僕たちが飼っている牛はたった60頭くらいで、1日5頭が畜殺されるため、僕たちの職は2週間以内になくなってしまいかねない。それは僕たちにとっては厄災で、僕たちは今、‘王子様’のような生活をしているのだから。毎日、僕たちは数百頭の牛を取りに来い、という知らせを待っている。

ドゥ・フラウター

1944年1月13日

[チュンカイ(タイ)] それから、1日中 [クン・] ファン・ザイルやホルマンと一緒にタバコを巻いていて(300本) こうして [私たちは] 毎回10セントを稼ぐ。

ペルクイン

1944年2月10日

[ヒンダト(タイ)] 百頭の牛がキャンプに追い立てられて入ってきた。やっとまた仕事ができ、1日中ニップや自分たちの将校から隠れて森の中にいるのは危なっかしいことだから。

オットウン

1944年2月20日

[カンチャナブリ(タイ)] 僕は1週間以上マラリアの発作を起こしていないので、‘軽い内部作業’をすることになった。今朝早く、4時から5時まで、回廊番だった。それぞれの兵舎に回廊番が1人いる。



オットウン

1944年2月29日

[カンチャナブリ (タイ)] 昨日は結構沢山の洗濯物を持ってきたが、<sup>173</sup>全く洗濯ができなかった、僕は炊事場作業に呼び出され、野菜切りの仕事をさせられたからだ。今日は‘休み’だったので洗濯ができた。

オットウン

1944年3月15日

[カンチャナブリ (タイ)] また炊事場作業。だが、まず最初に病気報告に戻った [マラリアの発作のため] そしてまた補助食を食べる権利付きで1. b. d. [軽い内部作業] を今すぐから7日間ということになった。炊事場での仕事は玉葱の細切れを作ることだ。これは忌々しい仕事で、玉葱の手で目をこすらないように十分注意しなければいけない！

しかし、この全てのために僕の洗濯屋は休業だ。

オットウン

1944年3月18日

[カンチャナブリ (タイ)] また作業にかり出された。だが、この仕事を他の人にうまく1/2チカルで売ることができた。僕は洗濯物がずいぶん沢山あったので他の仕事はできなかったのだ。

ルーへ

1944年3月22日

[ノンプラドック (タイ)] このキャンプは休息キャンプの筈なのだが、それでも毎日激しく仕事をしている。日に2回、バンポンに竹を取りに行く。作業は例えば、井戸掘り、庭作り、塹壕掘り、キャンプの周りに水路作りなどだ。

---

<sup>173</sup> オットウンは料金を取って他の人たちのために洗濯をしていた。‘食糧及び物資事情’の章、1944年1月20日のオットウンの日記抜粋参照。

ボム

1944年3月29日

[カンチャナブリ (タイ)] しかし、毎日の雑事にもかかわらず、ここでの存在は空虚だ。ましな時が来るのを待っている。その意味では日本行きに指名されたほうがまだましだ。今ではこの共同体はたいした騒ぎもなく静かに進んでおり、解決しなければいけないのは小さな問題だけ。<sup>174</sup>ここでもはっきりしているのは、料理が変われば食も進む(ラテン語を習った私としては、“ヴァリエタス・デレクタ”と言おう)。

ドゥ・フラウター

1944年5月12日

[チュンカイ (タイ)] 今朝、私はマッキントッシュ大尉(ここの医療試験室長)のところに行かされた。血液や便の検体の顕微鏡検査をする職に多分空きができる。おそらく僕が候補になる(1日15セント)。

ドゥ・フラウター

1944年5月15日

[チュンカイ (タイ)] 日曜の朝(5月14日)にライト<sup>175</sup>が来て、月曜日からスミスの代わり(マラリア、及び痰の検査)に始められるかと聞いた。

ドゥ・フラウター

1944年6月13日

[チュンカイ (タイ)] 病院ではヤップが職員を解雇したため(今では病院キャンプではなく、労働キャンプだ)、また大きな変化があった。赤十字社に属する人たちと、病院の常雇いのスタ

---

<sup>174</sup> ボムはカンチャナブリ収容所で財務委員会の委員だった。‘教育、娯楽と信仰’の章、1944年3月29日のボムの日記からの抜粋参照。

<sup>175</sup> ライト博士は植物学者としてクアラルンプールの農業試験場で仕事をしていた。1941年、ライト博士はマランを訪れ、ドゥ・フラウターと知り合いになった。(NIOD、蘭印日記集、H.J.ドゥ・フラウターの日記より)

ップだけがその地位に残ることができる。このため私も昨日解雇された。 […] 私も普通の労働をさせられることになるだろう（‘ラインに乗って’） [鉄道の仕事]

ドゥ・フラウター

1944年6月17日

[チュンカイ (タイ)] 昨日、[私は] 血液検査を正式に辞め、マッキントッシュは [私に] 抗マラリア研究をさせることにした。今朝は、今日の午後の話し合いのために研究計画を立てた！

ドゥ・フラウター

1944年6月20日

[チュンカイ (タイ)] 昨日キャンプ内での蚊の調査を始めた。

ドゥ・フラウター

1944年12月6日

[チュンカイ (タイ)] 昨日、シュルツと私は定職の食事取り係になった。朝早く起き、エクストラな仕事だが、エクストラな分量の食事ももらえる。

ドゥ・フラウター

1944年12月31日

[チュンカイ (タイ)] キャンプの前の運河は巾4 mで2 mの深さになる。彼らは50人のグループで仕事をしており、6日ごとに50mの溝を掘らなければならない。

ドゥ・フラウター

1945年1月14日

[チュンカイ (タイ)] 昨日の午後は忙しい午後だった。鉄道で、大量の米袋、粉袋、油の缶詰、砂糖の袋、カチャン・イジュー [小さな緑色の豆]、それに豆が到着したのだ。ヤップの命令で、

なんと病人たちがこの物資を‘倉庫’に運べという。キャンプ司令官や医師たちの抗議も無駄だった。その時、全ての健康な人たち（将校やキャンプ指導層を含めて）が、その仕事をすると申し出た。1時に申し出をし、4時まで運んだ。

ドゥ・フラウター

1945年2月21日

[チュンカイ (タイ)] 毎朝昼シフトグループが、そして毎晩夜シフトグループが、タマルカンへ、それぞれ橋の補修（木の橋）と物資の積み替え作業に行く。（昨夜もまた戦車などを含めて大量の物資と人間が下流へ行った。）上流へは爆薬が [行った]。

グルドヴァッチ

1945年4月1日

[プラカノン (タイ)] 仕事は毎日そのまま続いている、きついことだ。僕たちは今、船荷の積み降ろしをしている。100キログラムの袋だ！3人ずつ組になって。交替で、2人がそれを1人の首に乗せたりしている。戦争が終わったら新しい背中を探さなくては！

グルドヴァッチ

1945年5月14日

[プラカノン (タイ)] 仕事はどんどんきつくなる。僕たちは今度はバンコク中にピルボックス [抗爆弾避難場所] を建設している。仕事をしている人たちはどんどん出ていかなければならず、そのため病人がまた [働かなければならない]。しかし、勇気づけられることではある！<sup>176</sup>

---

<sup>176</sup> 防空壕が必要だという事実から、彼は戦争が連合軍にとって有利に展開していると見ていた。

ウェストホフ

1945年5月16日

[ナコムパトン (タイ)] 僕も新しい仕事を得た、それは馬丁だ。このキャンプには馬が2頭いて、オーストラリア人1人と僕がそれぞれ1頭ずつ世話をする。僕のはとても小さな馬で、とても良くいうことを聞く。1頭の馬は日本の大佐用で、僕のは荷車を引くためのものだ。毎日僕は勤勉に草を刈り、馬小屋を掃除し、夜には彼をマンディーする[洗ってやる]。僕はこの職をとても上機嫌でやっている、というのも、少なくともこうして何かすることがあれば、日々が早く過ぎる。それでも稼ぎは5セント多く、これも助かるし、馬小屋は日本人キャンプの方にあるので、何か特別な食べ物をもらう機会も皆無ではない。この職の嫌なところはもちろんまた直接に日本人と接する事が多くなり、旦那方の機嫌が良くないときには一最近よくあることだが一あの犬畜生の殴打を受ける可能性があることだ。しかし、ジャングルに戻るよりも、こちらの危険性の方がまだまだ、彼らから来る少ない情報によるとひどい状態らしい。

ドゥ・フラウター

1945年7月24日

[チュンカイ (タイ)] この2日間、ここから1グループが修復工事のためにタマルカン橋に行った。[...] この作業組は4時に起こされ、4時45分に整列で、[それから]列車で出かける。夜はやっと9時か9時半に戻ってくる。

グルドヴァッチ

1945年8月1日

[ドンムアン (タイ)] 仕事はきつい。食事はひどく簡素だ。だが殴られることは殆ど無い。炊事場ではいわゆる人手不足のため、仕事時間は朝4時15分から夜の9時か10時までだ。そうしたら、もう何もできない。飛行場でも泣きの涙だ。土作業にコンクリート打ち。昼間グループと夜グループとで[仕事を]し続けている。彼らは急いでいるのか？

## 保健・医薬

オットウン

1942年5月27日

[ターヴォイ (ビルマ)] 突然僕は驚いて又目が覚めた、というのは誰かが医者を呼び、その少し後喚き声で：“神父！神父！”そして其れを受けた返事：“わかった、神父は来るよ。”死にかけている人間、誰だろう？間もなくこの危篤の者の名前は聞いたが、赤痢患者の1人だ。死亡した最初の者、彼の愛する者達から遥か遠くで。ビルマにおける最初の死者、そして彼はここで無名の墓を貰った。<sup>113</sup>

ディッケ

1942年6月11日

[ターヴォイ (ビルマ)] [A.] ルカルディ、曹長、会計士 [そして] 6人の子供の父親、そして1人のオーストラリア人とが病院で死亡した。

ディッケ

1942年6月13日

[ターヴォイ (ビルマ)] セネンバ<sup>114</sup>のマリウス・ヤンセン、軍曹、既婚者で2人の子持ち、[が] 死亡 [した]。サンドベルグは重病だ。フルーンは最近病院から戻って来た；病院には約300人の患者が居て、キャンプでは約200名が病人だ。病院の状況は痛ましい。不十分な栄養、水欠：病人達は雨の中で自ら洗濯し、そして雨の中で入浴しなければならない。

---

<sup>113</sup> これはバステアーン ニコラス・グッドハートで、32という年齢で死亡した。(NIOD、蘭領東インドの日記収集、J. C. ディッケの日記)。

<sup>114</sup> セネンバ株式会社はタバコ栽培会社で、1889年に設立された。(M.A.ローデリッヒス その他 メダン、Beeld van een stad. プルメレンド 1997、14-15)。

ディッケ

1942年6月22日

[ターヴォイ (ビルマ)] デリ新聞<sup>115</sup>の [J. P.] メッスン (既婚、子供2人) が [昨日] 病院にて赤痢で死亡したという情報。 [...] これは拘置中死亡した10人目だ。病院に入院していたヴィム [スフロート] と [ヨハン] ポンセ双方に手紙を書いた。

ディッケ

1942年6月25日

[ターヴォイ (ビルマ)] 12時頃我々の企業仲間ヨハン・ポンセ、41歳、既婚者で3人の子供の父親がターヴォイ病院で死亡したという情報が入る。全兵舎がその事でショックを受けた。生前ポンセはヘルヴェチア<sup>116</sup>の会計士だった。午後 [C.] マック牧師からの情報で、ポンセは6月24日夜9時15分前に死亡した [とのことだった]。 [...] 他には6月25日曹長 [J. B. J.] ドゥーハース (既婚で子供1人) が病院で死亡した。(15番目 [死亡した])。

オットウン

1942年6月28日

[イエ (ビルマ)] 我々のキャンプにはオーストラリア軍隊の大尉の位を持つオーストラリア人医師も居る、ホブス医師。ホブス医師はとても尊敬に値し、冷静で好感が持て、各患者に優しく耳を傾ける。数人のオーストラリア人はホブス医師が我々を彼の同国民以上に優遇している、と主張する、何故なら病欠届所に来るオランダ人達は、彼から何時も‘非番’を貰うからだ、と。僕自身の意見としては、其れは全くの中傷だ、というのはオーストラリア人の非番の数もオランダ人と同数である事は間違い無いし、多分もっと大きいかもしれない。実際、ホブス医師は百パーセント元気でない者を作業に送る事には気が進まないのだ。これが作業長として何時も多く労働者達に要求し続ける、敵意に満ちた日本軍伍長の腹立たしい事。ホブス医師は、病人達を作業に送る事は出来ないし、日本人医師に彼の仕事が邪魔された事を伝える事にしよう、と大変冷静に言う。この伍長は内心文句を言いながら逃げる。

日本人医師、細い、大きな角質の眼鏡を近眼の目に掛けた小さな男、そして彼の左側に、彼にはとても重過ぎる様に見える巨大な‘チーズナイフ’ (侍刀)、我々は散発的にしか見

---

<sup>115</sup> デリ新聞は1885年3月18日からメダンに出現した。

<sup>116</sup> タバコ会社ヘルヴェチアは1873年スイス人のアルバート・ブレイカーによって始められ、1892年からはデリ株式会社の経営下にあった。(ローデリッヒス他、11)

る事は無い。 […] 赤痢が最も多く起こるが、栄養浮腫<sup>117</sup>の事例もある。そして殆ど皆ビタミン不足に悩んでいて、それは回復の遅い傷口で分る。

オットウン

1942年7月7日

[イエ（ビルマ）] 我々のイエにおける最初の死者。そのスコットランド人、彼は既に長年北スマトラの、ある企業に勤めていた、。葬式は午後どしゃ降りの中で行われた。行列は遠くまで歩く必要が無かった、というのはこのキャンプの近くにある沼地の1箇所穴が掘られていて、そしてそこは今水が半分溜まっていた。盛装した‘殴り屋’は葬式に出席していた。

オットウン

1942年8月2日

[イエ（ビルマ）] 昨夜誰かが死亡した、我々の分隊の誰か。僕を含めた4人が板切れを買う為村へ送り出された。ビルマ人の木材納入業者は我々に本当のコーヒーをご馳走してくれた。美味しい。キャンプに戻って我々は棺を組み立てるグループに木材を届けた。3時に葬式があった。とても簡単、しかし実に印象的。其処に今3つの墓がある。先週1人のオーストラリア人が死亡し、彼は今2名のオランダ人が埋葬された間にいる。

オットウン

1942年11月2日

[ウェガリ（ビルマ）] 昨日僕の足に擦り傷をした；潰瘍にならなければ良いのだが、というのは今朝それが多少赤く、傷の回りが腫れていた様に見えたので。

---

<sup>117</sup> 脚注15参照。



リブンス

1942年11月11日

[ウェガリ (ビルマ)] 今朝 [我々が] 仕事に出かける前、オーシーキャンプ (キャンプ26) でコレラが発生し、2日間で7件の死亡事例と通知 [された]。極度の衛生が守られなければならない。全ての飲料水は煮沸 [しなければならない]。

オットウン

1942年11月11日

[ウェガリ (ビルマ)] コレラ状況の陰鬱な情報を聞いた。18キロメートル先のオーシーキャンプで、この伝染病が発生し、既に7件の死亡事例があるらしい。タンビュザヤではビルマ住民内でコレラが流行しているらしい。これは乾燥と水の欠乏から起こるのだろう。

夜医者がこれらのコレラ情報を知って講演した。現在其れに対する薬が少なく、厳重な衛生に注意する事が大変重要だ。特にこの住民との接触を避けることだ。

オットウン

1942年11月21日

[ウェガリ (ビルマ)] 夜 [我々は] 反コレラ - 注射を受ける病院兵舎へ集団毎に行った。

オットウン

1942年12月17日

[ウェガリ (ビルマ)] 昨日 [僕は] 未だだるくは感じるが [下痢により] 再び仕事に取り掛かった。そして昨夜又僕の胃に刺し込みがあり、4回便所に旅した。今朝再び '医者' から '非番' を貰い粥食養生。

リブンス

1942年12月24日

[ウェガリ (ビルマ)] 数週間前のコレラ - 注射後、我々は18日 [12月] ペストの注射もした。目下明らかなのは、衛生と健康事情に関してこの我々のキャンプが全キャンプ中遥かに最も健全である、ということだ。近くのオーシーキャンプでは1200人中400人が病気 [であり]、とりわけ不衛生な状況、下手な料理人によって食事が特別味気なくそして煮沸されていない飲料水による。

オットウン

1943年1月20日

[ウェガリ (ビルマ)] 我々のグループは今日酵母菌酒を貰った。皆小さなカップに。これはビタミンが豊富な飲み物で、炊事場にてウビ (サツマイモ) 塊茎から作られたものだ。皆に毎日充分当たらないので、グループは3～4日毎に酵母菌酒の順番が来る。<sup>118</sup>

リブンス

1943年1月21日

[ウェガリ (ビルマ)] (296日目 [戦争捕虜の身で])。食事がすっかり粗悪になってしまって以降、それは目下再び改善された；特に随分沢山の野菜がスープの中に。ベリベリ - 患者の数が目に見えて増加しているので、これは必須の物であった。大抵の症状は口の中、舌の上そして咽喉に多くの腫れ物が出来、どれもかなり痛い。僕自身は足に酵母菌酒を貰い、其れによって特に夜起こった痛みが凄く増しになった。

オットウン

1943年1月26日

[ウェガリ (ビルマ)] 右足が完全に腫れ上がったのに傷口は何も見当たらなかったのも、僕も医者に行った。既に10日ばかり悩んでいる。“ビタミンの欠乏”と医者は確証し、僕を‘酵母菌酒リスト’に載せたので、目下毎日コップ一杯の酵母菌酒を貰っている。

---

<sup>118</sup> 脚注51酵母菌の重要性参照。

ルーゲ

1943年1月28日

[キンサヨック (タイ)] 病人の数は増加している。大勢が赤痢 [だ]。連中の5分の1はkwz [兵舎病]、約75名のオランダ人が病院に [居る]。ネウリティス<sup>119</sup>は頻繁に起こる。悪い食事、凄い埃と不衛生。最近の10日間でイギリス人内に90人のマラリア事例 [があった]。

ルーゲ

1943年2月2日

[キンサヨック (タイ)] 最初のオランダ人が死亡した、[F. J. D.] ノードフック ヘフト中尉。

ペルクイン

1943年2月2日

[リンティン (タイ)] 足の傷を治す為、幸い僕は兵舎病を貰った。粗悪な、偏った食事とビタミンCを含む長期に渡るビタミンの欠乏により、大勢に唇と口蓋の炎症が始まり、其れは特に食事中かなり痛い。しかし食べなければ数日以内に死んでしまう。僕もこの病気、壊血病の類に苦しんでいて、其のせいで無気力そして惨めな気分だ。ジャングルで痛めた足は最悪、加えて痛い口蓋が僕を落ちこませる。

ボム

1943年2月6日

[フラパウク (ビルマ)] 異常な労働で大勢が目下、足首や手に傷をしているが、作業は思った程ではない。僕自身は再び胼胝になるべき5個の口の開いた豆が出来ている。故に再び漕手の手をしている！包帯は殆ど無い！夜は寒く、大勢が其れゆえに腹痛、或いは僕のように風邪を引いている。[…]

---

<sup>119</sup> ネウリティス (神経炎) はビタミンB-複合の欠乏によって起こる。他には脚注51参照。

爆撃<sup>120</sup>により僕は背中に2箇所擦り傷を受けたが、爆弾の破片が僕を掠めて通り過ぎたからだと思われる。恐らくこれは我々のグループに座って雑談していたフェルフ・ヴェンを死亡させ、ドゥ クラインを入院させた同じ破片であったろう。この傷は現在既にほぼ塞がっている。

ペルクイン

1943年2月9日

[リンティン (タイ)] 赤痢患者の数が上昇している。それは地面に細長い穴とその上にしゃがみ込んで用を足す事の出来る2枚の板切れからなる開放便所から起こる。その様な仮設便所は5メートルの長さで、連中が腹を割って隣同士にしゃがみ、糞の出来るメートル毎に2枚の板、或いは2個の半分に割った竹が置いてある。口は噤む、さもなければ蠅が中に入り込んで来る！この忌まわしいキャンプには衛生面が完全に認められず、加えて群をなした蠅。赤痢に苦しんでいる者達は離れた兵舎或いは区画に寝るわけではないので、それらの連中は他の者達との間に寝ている。お互い伝染するのは少しも不思議ではない。どうなっていくのだろう、すぐにも赤痢の蔓延が発生するに違いない。

ペルクイン

1943年2月13日

[リンティン (タイ)] 僕にとっては悪いニュースそして呆れた事には13日：僕は赤痢になり下痢中。他の呼び方をすれば排便レース、或いは噴射便。症状は幸いたいたことは無い。日本軍はやっと僕等赤痢患者が隔離兵舎で看護されるべきことに気がついた。其の通りになった、僕達は再び地面に或いは埃の中に横たわり、看護の欠片も見当たらない。餌として粥と[何か]スープであるべき物を貰う。僕は寝ることにする、排便レース無しの安らかな夜であることを願って。

---

<sup>120</sup> 連合軍の飛行機による1943年1月15日の二チメイ丸の爆撃。項目‘移送と宿泊’、ボム(日付は恐らく1943年1月20日から24日の間)の日記断片参照。

ペルクイン

1943年2月15日

[リンティン(タイ)] 僕に関しては良好で今日再び米飯を食べた。もはや痙攣は起きない。赤痢事例の数は増加し、今日又2人其れで死んだ。14日間に6人の若者達が既にこの呪われた地区で死んでしまった。日本軍はこれに対して何も施さない。薬は無い、良食は無い。僕の隣りの男はこの労働キャンプの外へ約50メートルの所にある、崩れ落ちそうな無-防水テントからなる‘病院’へ運ばれて行った。

ペルクイン

1943年2月22日

[リンティン(タイ)] 死亡事例の数は既に13までに上っている。3週間内で平均2日に1人の犠牲者が出ている。実際薬の欠乏から医学上の施し様が無いのだ。患者達は又力を付ける為の補充食すら貰えない。[...] 哀れな食事から起こる他の症状としては、長期に渡るビタミンの欠乏<sup>121</sup>で“チャンギボール”と称するものが起こる。其れは陰囊、睾丸の炎症だ。数人の連中によっては、それが余り凄い炎症を起したので、膿みが其処からぼたぼた落ちている。1歩毎にその開いた傷口が服で擦られるので其れは拷問に違いない。横になってさえも大変痛い。足を広げて、蠅から身を守る為に汚い包帯で包まれた彼等の陰囊で横たわっているこれらの連中を見るのは哀れだ。

ボム

1943年2月25日

[フラパウク(ビルマ)] 僕の健康状態は良い。ここには多くの病人が居て、特に赤痢患者だが、今までの所タンビュザヤの病院で2人だけ死亡した。一昨日以来この地区がコレラに感染と発表された。この病気がここでどれほど広範囲に流行しているのか、は僕は分らない。

---

<sup>121</sup> この陰囊の皮膚炎はペラグラ病の症状である。脚注51参照。

ディッケ

1943年2月26日

[アナクイン (ビルマ)] 僕は気分が悪くなったので、夜病欠届所へ。37度8分の熱と大変な疝痛があった。殆ど歩けなかったが、夜間点呼にはやはり出て行かねばならなかった。僕は‘非番’を貰い、他に何も無いので水だけ飲んでる！下痢 [をしている]。

ペルクイン

1943年2月27日

[リンティン (タイ)] 僕等の巡査部長の葬式に出席した。彼は鍛えられた職業軍人だった。しかし彼も又衰弱と栄養不良により打ち倒された。僕は初めて墓地を見た。墓穴は60～70センチ以上の深さはなかった。土はとても硬く連中は深い墓穴を掘るには余りにも弱っていた。死体は竹製の担架に横たわりシート或いはベッドカバーで覆われていた。綱不足の為、数本のリアーナ (熱帯性蔓植物) によって亡骸は墓穴に入れられた。かなり原始的だが、やはり厳粛だ。正直に言えば、この簡単な儀礼は僕に何の感銘も与えなかった。強固そして無関心になっていく。そうならざるを得ない、さもなければ、もし自分を取り巻くこれらの災難で内面の感情に心を奪われてしまうなら、自分が死んでしまう。

リブンス

1943年2月27日

[アナクイン (ビルマ)] その仕事から判断すると、ここでは正に2～3ヶ月はかかるだろう。去年の様に雨季が其処に又やって来ている、我々がこの時期を又ビルマで過ごすなんてことはとんでもない。

ペルクイン

1943年3月1日

[リンティン (タイ)] 今日我々の企業の1人を含む5人が死んだ。この労働キャンプ・リンティンで、既に29日中に30名の死者。

オットウン

1943年3月2日

[アナクイン (ビルマ)] 僕は足の怪我に未だ尚苦しんでいる。傷口を塞ぐのに、グループ仲間の勧めでユーパトリウムの葉を貼った。ユーパトリウムはイラクサによく似た植物で、ここでは雑草としてあふれんばかりに生茂っている。ゴム農園場ではこの植物を‘副栽培’としてゴムの木の下に使用し、僕にこの忠告をくれたグループ仲間自身がゴム農園主だ。そして[彼は] 傷を受けたクーリーがその傷をこの植物種の葉で覆っていたのを何度も見ていた。

ボム

1943年3月10日

[フラパウク (ビルマ)] 僕の腸はどうも調子が悪く、それが頻繁に赤痢まで発展するかもしれないので、以来3日間僕は仕事に行っていなかった。今日は全てが又普通になったので、再び働くことが出来た。病人の数はここでは大変なものだ。我々は1月末にこのキャンプに約1000名、そして基地キャンプ・タンビュザヤに100名の病人で開始した。今やここには約850人しか残っていない。その中から今日約510人が仕事に行った。賄いとかそういった職務にはせいぜい100人までが必要で、残りは病人達でなりたっている!!

ペルクイン

1943年3月17日

[リンティン (タイ)] 僕は残念ながら良くない。相当のビタミン、特にビタミンCの欠乏であちこちの場所に発疹が始まっている。僕の陰囊は既に化膿しとても痛い。其処で悼むべき80人以上の死者がいる。

ボム

1943年3月20日

[フラパウク (ビルマ)] 今尚僕は仕事をしていない：2箇所の足傷が其れを妨げている。僕はこれらが完全に回復する前には行かない；ここでは完治せずもがき続けている病人のきわめて多い事例を経験する。目下我々は又もや200名の病人を後に残してこのキャンプを出発する！

我々の新しいキャンプでのオランダ人の合計数は其れゆえ既に1000名から650名に減少した！ […]

ここでは全てに苦勞する（机、椅子そして未だ何か些細な物が無くては、適切な成就はない）ものの、精神的に僕はこの2週間再び随分さっぱりしている。其れで僕は目下2週間前より随分強くなっている。大勢がそれで苦しんでいる；故に将校達の中で数人が - 特に最も好感の持てない者でない - 医者から時々休養を貰っている。

ペルクイン

1943年3月28日

[リンティン（タイ）] 僕はとても弱くなった。昨日病院へ行く途中目が回った。到着して僕は暫く待たなければならなかったが、後はもはや何も覚えていない。僕は気を失って倒れ、人が僕を日陰に寝かしてくれた。毎晩5回から7回あたりまでかなり腹の刺し込みがあって便所に行く。便の中の血と粘液から、これは正に赤痢であろう。

ペルクイン

1943年4月2日

[リンティン（タイ）] 飲料水には誰も気を配っていない。既に木が濡れていて、その結果多少雨水、或いはクウェーノイ川からの汚染された水[この水は煮沸出来ないので]が飲まれている。それにより尚もっと病人が出てくるし、死亡数も上昇するだろう。このキャンプで死んだ115人では未だ不十分なのか？

オットウン

1943年4月3日

[アナクイン（ビルマ）] 昨日僕は余りに疲れ切って帰宅したので、全く食欲がなかった。昨夜熱っぽく感じ、[故に]今朝病欠届所へ行った。熱は無かったが、‘医者’は僕がはつらつとしている様には見えないと思い、即座に2日間‘非番’をくれた。



ペルクイン

1943年4月6日

[リンティン (タイ)] 日本人医師が検査をした。僕は36時間未だ食べていなかった；悪く見えたに違いなく、僕の腐った陰囊の観察により彼は僕に入院する様命令した。恐ろしい。この所謂入院した連中の90パーセントが死ぬだろうし、足を前の方にして再び担がれて行く。僕は友達に生還すると宣誓した！僕は目下古い、廃棄処分の日本軍テントの中で危篤の、うめいている赤痢患者達との間で、地べたに直接横たわっている。ここに居る事の唯一の長所といえば、どの日本軍もこの周辺に敢えて入ってこようとしない事だ。彼等は自ら感染するのを恐れている。僕の陰囊は日に2回洗淨され、清潔な布で覆われる。今日の午後 [僕は] 多少の食べ物を貰った。それはカチャンイジュウ - スープ [小さな青豆] で、味は良かった。僕は自分を過大評価していたし、今は大変衰弱している事を認めなければならない。脈拍数は110。だから自分で平静を保ち、強化に向かうべく心がけねば。

ペルクイン

1943年4月17日

[チュンカイ (タイ)] 残念ながら日本軍が与えないか、或いは売るかして、病人達は薬が手に入らないと聞いた。大勢のイギリス人が疥癬を含む酷い皮膚病にかかっている。其れを見ていなければならないのは怖い事だ。それらの哀れな奴等が腐って行くような印象を受ける。何故まさしくイギリス人だけがそれらの皮膚病に苦しむのだろう。

このキャンプでは鉄道の仕事で完全に衰弱しきって日に4～5人が死亡する。大勢が手遅れて連れて来られる。再び力を湧かせるのに最も重要なのは、僕達がここで十分な食事をもろう事と思いきり休養する、というこの2つの要素だ。僕は出来る限り長くこのキャンプで持ち堪えられる様全て作業上で上手く調節しよう。

ドゥ フラウター

1943年4月21日

[カンチャナブリー (タイ)] 今日の午後コレラとペストの注射と、天然痘予防接種も受けた；‘環取り検査’ (細菌赤痢 [の]) とマラリア - 検査。

グルドヴァッチ

1943年4月23日

[カンチャナブリー (タイ)] この日我々は病院まで行き、又戻るという6キロメートルの行進をしてめでたい事だ、コレラ、チフス、赤痢—予防注射、それと平行して血液検査と環取りテスト (直腸 [検査]、一般に称される：環取り、赤痢 - 検査用) を受ける為。この用件を完全化する為更に1本予防接種。

ドゥ フラウター

1943年4月25日

[ターサオ (タイ)] 第一日目の復活祭！今朝僕の足の事で日本人医師の所へ行ったが、先へ [行進に] 付いて行かなければならない。ニック [ワインハ - ツ] とプリンスは双方赤痢 (血の下痢) で;この病欠届所に色々な他の連中と一緒に居た;彼等も先へ一緒に行かなければならなかった。今日の夜中はこれ全て如何なるだろう。

オットウン

1943年4月26日

[メザリ (ビルマ)] 午後天然痘の予防接種を受ける為、皆医者の中へ。予防接種は髭剃り用剃刀によって為された。

リブンス

1943年4月26日

[アナクイン (ビルマ)] その時期<sup>122</sup>の最中、キャンプに食事を取りに行く時僕は足の裏を火傷した。我々はキャンプから3、5キロメートルの所で働いていて、食事はいつも2人で約12時に取りに行かなければならなかった。堤防のばらついた砂は白熱で、それが上記の結果となった。この為僕には6日間‘非番’を貰った。[...] 病人の数は甚だしく、又既にこの骨の折れる労働を通して。

---

<sup>122</sup> 彼はここで5キロメートルの鉄道が敷設されたアナクインの時期を示唆している。項目‘移送と宿泊’、1943年2月27日リブンスの日記断片参照。

オットウン

1943年4月28日

[メザリ (ビルマ)] ヤレヤレ、又病欠届所へ行き、[目下] 僕は今日軽い仕事を貰った；明日は再び堤防で働かなければならない。又しても1件死亡事例があった。この男はマラリアに屈伏した。其れはここで沢山発生するらしい、といわれる。でもここは沼っぽくも湿低地帯でもないのに。

グルドヴァッチ

1943年4月29日

[キンサヨック (タイ)] スーヴェルクロップにおいては全体的が外れた。(後数人と共に) 病院キャンプへ入院(!)。もはやそのテントには場所が無かった、ということは何処か出来る限りその近くの地面に寝かされることになる。スーヴェルクロップは手当て台の様なものの下に横たわり、彼の足がはみ出ている、雨の中で。

グルドヴァッチ

1943年4月30日

[リンティン (タイ)] リンティンの名物：細菌赤痢。朝死体連が横に、或いはもっと酷いのは、便所の中に。彼等は自分達のテントにもはや這い戻る事が出来ず、其処にそのまま居る。何と言う死に様…

ペルクイン

1943年5月1日

[チュンカイ (タイ)] 良い食事のお陰で小さな数カ所を除いて僕の唇と陰囊は回復した。[僕は] 再び良く喋れるようになり、今日などは長い時期後初めて又口笛が吹けた！食事が良ければ病気になる必要が無いという事をこれが証明している。

ディッケ

1943年5月3日

[メザリ (ビルマ)] ‘非番’。ヴィム [スフロート] は入院した；赤痢。僕は良くなってきている。

ドゥ フラウター

1943年5月9日

[タカヌン (タイ)] 翌日 ([4月] 28日) 疲れ切ってキャンプ・リンティンに到着。そこで全部隊と共に1晩宿泊、下痢続き (血と粘液)。それから他の連中が夜出発した時、未だ数人の腹疫患者と共に残留した。夜中に激しい雷と雨；我々は野外に留まらされ、びしょ濡れ、何度も下へ [便所]。[それは] 大変な夜だった。翌2日間日本軍は我々に病院へ連れて行くと再々約束したが、何も起こらなかった。更に雨の夜。[G. J.] レヌス医師から僕は12個のダゲナン - 錠剤を貰った。自分で未だエンテロヴィオフォルム<sup>123</sup>を所持し、日本軍からクレオソート錠剤を貰った。ダーゲナン - 錠剤はよく効いて、辛い下痢と空腹の3~4日後には下痢が止まった。とはいえ他の連中 (11人) はその時未だかなり酷かったが。ススマンと僕は一番体調が良かった。[J. H.] ヘック大尉の居る、ヨンカー大尉の組は我々に追いつき、我々に医療手当てを提供する為のあらゆる骨折りをしてくれた。彼等は、我々を数日後車で次ぎのキャンプ・ブランカシ (ペラングカスト) へ移動させる事に成功した。それにもかかわらず其処でも我々は医療看護の無い野外に降ろされた。其処で我々は再び1晩過ごし、それから又車で次ぎのキャンプ・第2タカヌンへ運ばれた。其処に又他の連中 ([W.] ファン ライエン大尉の組、ヨンカーの組) がその間に到着し、我々は再びレネス医師の看護の下に来た。僕は最初の3日間看護テントに入院させられ、5月7日キャンプのテントに移ったが、未だ半病人だった (粥と飯の食養生)。現在僕は以来5日間もはや便が出なかった。[僕は] 気分は良いのだが、かなり痛みがあって腫れている僕の両足に凄く悩んでいて、その為に歩く事がかなり困難だ (赤痢による急性栄養不良の結果?)。

---

<sup>123</sup>ダーゲナン (硫黄含有) とエンテロヴィオフォルムは反細菌性薬である。脚注52、クレオソートについても参照。

ドゥ フラウター

1943年5月10日

[タカヌン (タイ)] 今日初めて又便が出た。この先は未だ様子を見ることに。[J.] ファンデルレイは今日死亡し、今夜葬式。酷い！[僕の] 気持ちは落ちこみ、横たわりながらとてもベッペケや小さな子供達の事を思い出している。彼女達に再び会える事を僕は心から願う。ところで気分は多少良くなり、ぐったりしていたのが少し増しになった。とはいえ食糧は未だ粗悪だ。

ドゥ フラウター

1943年5月12日

[タカヌン (タイ)] 今夜6時に[F. P.] ファン ロム中尉と[E. L.] ドゥ ブラウン軍曹の葬式に出席した。レネス医師が墓で聖書を朗読した。其れは大変感動的だった。美しい夜で実に静かだった。彼等は原始林の中の小さく切り開いた場所に安眠している。日本軍指揮官も其処に居て二言三言述べた。1人のイギリス人ラッパ手が[Last Post]を吹いた。僕は目下足の病気でテントに横たわっている。早く又元気になる為出来る限り沢山食べている。未だ何となく弱々しいが、他は既にもっとたくさんのが出来る様になっている；ヒューブ[フェルワイエン]とラーヌンは未だ腹疫患者のテントに居る。ヒューブは短期間に相当やせ衰え、又食事を中に保持するのが大変なのだ。今夜は素晴らしい星空、上がって来る月。他には非常にベッペケと小さな子供達の事を恋しく思った；凄く懐かしい。今全て自宅ではどうなっているだろう？

ドゥ フラウター

1943年5月15日

[タカヌン (タイ)] 今日又2名イギリス人が埋葬された。こんな風にして続行するばかりだ。今日我々からも又赤痢患者が死亡した。僕の排泄物は良好で普通になった。

フェイケマ

1943年5月18日

[カンチャナブリー (タイ)] ここで初日に連中の一人が暑さの為に死亡した。他の数人は病院(2マイル先)へ行った。他の12人と僕等は葬式を準備しなければならず、日本軍当局が約束したけど来なかったトラックを1日中待ったあげく、我々はこの男を14日[5月]午後埋葬し

た。我々は自分達で墓を掘らねばならず、ここから先の他の連中が先行する半時間前、夜帰宅した。其処で我々は未だ受けていなかった自分達の‘環取り -’<sup>124</sup>と‘マラリア検査’そしてコレラと天然痘に残留しなければならなかった。目下我々はそれらを一昨日受けた。[…] 僕は再び凄く腹が痛み、‘便’は実際水だけ。[…] 其れですっかり衰弱してしまう。ここでの便所は名状しがたい。塹壕の上で数個の木の幹にしゃがみ、其処の中は肥えた蛆虫の濃い粥。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年5月18日

[カンチャナブリー(タイ)] 夜中[僕は] 高熱[があった]。日中は下痢。イギリス人(印英混血の) オグデン医師のテントに[行った]。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年5月19日

[カンチャナブリー(タイ)] 1日中[僕は] 半分意識不明のまま地面の上の代わりにテント内の簡易ベッドに横たわっていた。午後日本軍キャンプの病院、[L. T.] レムレフ医師へ運ばれた。入浴用に使える水は無い。便所は兵舎から約100メートル滑りやすい水田の土手を越えた覆われた穴だ。

グルドヴァッチ

1943年5月20日

[ウォンピン(タイ)] 我々は1日中強烈な太陽の下で禪のたぐい(チャワット)だけの裸で働いている。腕、肩[そして] 背中塩の結晶の汗で覆われている。これが尚唯一傷への只の薬だ。包帯、ヨードチンキ或いはそういった物はもはや既に長い間存在していない。ところで我々には医者或いは看護師も居ない。我等の連中の1人が銃剣で一撃を食らい、其れで肘上の腕が骨折した。幸い明らかに挫傷の傷口は開いていない。彼は竹と綱で添え木を当てられる。

---

<sup>124</sup> 恐らく彼はここでガラスの試験管によって行われた赤痢の直腸検査(‘環取り’)を示唆している。

フェイケマ

1943年5月20日

[トンチャン (タイ)] このキャンプは殆ど永久的に雨が降っていることから泥沼だ。だから全て言い様の無い汚さで、何も乾かない。ここでは勿論夥しい数の腹疫患者がいる。物凄い数の蠅 [そして] 赤痢。薬は殆ど無い。病人達は葉で屋根を葺いた雨漏りする壁無しの数件の竹小屋にいる；他の材料は其処に無いのだ。

ドゥ フラウター

1943年5月20日

[タカヌン (タイ)] 多少の排泄物 [便] ；少々粘液！傷 [足] は奇麗に治った；[僕は] 未だ足が大変弱っていてすぐ疲れる。今日又2名のオランダ人と1名のイギリス人が死亡した。葬式の毎日は実に気が滅入る。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年5月21日

[カンチャナブリー (タイ)] 今日は少し良い。再び食事をした。昨夜病院にてベッドが (バレバレ [寝台]) 雨で濡れた。これは屋根1平方メートルにつき20平方センチは雨漏りする泥っぽいアタップ [椰子の葉で覆われた] 倉庫だ。半分の高さの壁。日曜日以来 [僕は] 入浴せず、服すら洗えない。我々には水が無いのだ。

ドゥ フラウター

1943年5月24日

[タカヌン (タイ)] 尚悪い事には我々のキャンプのイギリス人達内で数件のコレラ事例が生じたらしい。我々はもはやカリ [川] へ近づいてはならず (もはや水は煮沸出来ないし入浴も洗濯も出来ない)。しかし [我々は] 其れから守り続けられる事を望んでいる。僕の排泄物は今だ尚白い粘液、でも少なくなっている。相変わらず粥食養生。

オットウン

1943年5月26日

[キャンプ108 (ビルマ)] ヤレヤレ、昨日大変不愉快な事件が起き、其れで我々皆少々気が滅入っている。2人の若い連中、J. とV. d. H. が喧嘩した。如何してなのか僕は知らない。しかしある瞬間V. d. H. がJ. を一撃し、それによりJ. は平行感覚を失い地面に倒れた。ところが実に不運にも、彼は頭を大きな石の上にぶつけて倒れ、意識不明のまま横たわった。J. は即看護兵舎に運ばれ、数時間後J. が死亡した事を我々は聞いた。

今日葬式が行われた。このキャンプの向かい側のぬかるんだ地面に穴が掘られ、其処には薄層の水が溜まっていた。天までも喪に服しているかのごとく、灰色の雨雲が余りに低く垂れ下がり、原始林の木の先が雲の連列に隠れてしまった。ラッパ手がLast Postを吹いた後、墓穴は埋められた。僕は死体に泥の塊が落ちていくが聞こえ、戦慄が走った。そして静寂の中で誓った：“僕はこの原始林の泥墓には入らない！”

ドゥ フラウター

1943年5月26日

[タカヌン (タイ)] 今日又7名のイギリス人 (コレラ) と3名のオランダ人 (赤痢) が死亡した。カンポリート<sup>125</sup>で頻繁に消毒される。このキャンプで目下若干数の日本人医師達が働いている。

ドゥ フラウター

1943年6月1日

[タカヌン (タイ)] 再び新しい月。これが又何を齎すのだろうか？前月より多少は増しである事を祈りたい。今日は又6名のイギリス人と1人のオランダ人が死亡した。

---

<sup>125</sup> これはカルシウム次亜塩素酸塩の商標名で、消毒剤として使用された。



グルドヴァッチ

1943年6月2日

[クウェ (タイ)] 赤痢患者達に場所を作る為、我々は自分達のテントを出なければならない。それはここでもリンティンと同じく最も広く知られた病気だ。僕は(シンガポール以来!) 凄く怖くて、‘人’は馬鹿扱いするが、各‘食事’を自分の小鍋で火に炙り続けている。

ペルクイン

1943年6月6日

[チュンカイ (タイ)] 悪いニュース。‘奥地’のキャンプ連でコレラが発生した。既に9名の日本兵を含む何百人に及ぶ犠牲者が出ている。川での入浴は禁止された。缶或いは小鍋で川から多少の水を掬い、其れを身体にかける。気を付けなければならないのは、水を口の中に入れない事だ! 前もって煮沸された飲料水は、塩素の加入で大変不快な味がする。

ドゥ フラウター

1943年6月6日

[タカヌン (タイ)] 昨日6名のイギリス人、今日は9名(コレラだけでなく赤痢でも)と2名のオランダ人が死亡し、だから残念ながら又もや豊作。

フェイケマ

1943年6月8日

[トンチャン (タイ)] 僕の最愛の君。3日間以来僕は兵舎病だ、余り嬉しくない。これには長所と短所がある。医者は僕が5日周期[熱]<sup>126</sup>にかかっていると言い、確かに其れによく似ている、というのは日曜日そして昨日、午後と夜、悲惨さを通り越す程気分が悪くなる相当な発熱をした。今日は再び随分回復した、とはいえ今夜又発熱しなければの話だが。目下既に3日間殆ど1日中横になっているので、僕の腫れた足は今又ほぼ普通になり、又足の親指のかなり厄介な傷も殆ど治った。只不愉快なのは、熱があっても食事と便所(これらの不潔な穴をそう呼びたい

---

<sup>126</sup> 3日周期で起こる熱の発作を伴うマラリア。

のなら)の為に絶えず又泥の中に入らなければならず、故に相変わらず又足と手が泥だらけになる。その上僕は今横になっていた事から多少弱っていて、約10分も立っていたなら、目が回り座らなければならない。僕は又最近入浴も出来ない(ところで、それはここでは頻繁に時間が足りないことから起こる)。

ボム

1943年6月8日

[アンガナン(ビルマ)]我々がここに居るこの10日間に、既に2個の墓穴を掘らねばならなかった:ここまでの遠征により死亡した1名のアメリカ人と1名のオランダ人、[J. J.]サンデー。

ドゥ フラウター

1943年6月10日

[タカヌン(タイ)]ファン ザイルが僕を呼びとめ、ヒューブ・フェルワイエンが亡くなったばかりというギョツとするニュースを伝えたところだ。彼の鼻に出来た膿瘍が内向して中で潰れてしまったらしい。彼は、看護士の通報に寄れば、今朝既に意識不明だった。彼は6月10日、午後約4時に死亡した。我々は彼が回復に向かっているとまさしく思っていたので、最近はだからこそ彼を見舞わなかった。彼は又完全に栄養不良になっていた様だ。[...]ヒューブの他に未だ2名のオランダ人が赤痢で死亡した。

ペルクイン

1943年6月11日

[チュンカイ(タイ)]回復キャンプ・チュンカイでは残念ながら更に多くの連中が日毎に死んでいく。昨日は9名そして今日は12名の死者[だった]。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年6月14日

[キャンプ120 (タイ)] キャンプ コレラ 汚染! (我々の隣りのイギリス人キャンプ)。厄介な入り口。膝を越す程の多くの泥。ウビ水 [サツマイモ水] と飯。肉無し。タバコは乾燥させたサツマイモの細長い小片。便所は‘開放市電’：開口溝に加えてその上にしゃがむ竹。葉っぱは [便所] 紙として [使用される]。水の欠乏。550人の連中内で327人が病気 [だ]。赤痢、マラリア。3名が普通の衰弱で死亡した。食事を取りに行く前に、コレラ対策として小鍋と匙を煮沸した湯の中に浸ける ([C. A.] カウパー医師 [が忠告している])。薬が足りない。多くの治りの悪い傷。

ペルクイン

1943年6月15日

[チュンカイ (タイ)] このキャンプでもコレラが確認された。既に3名のイギリス人が其れに汚染され、其処から1人既に死んだ。この死体は日本軍の命令で即座に焼かれなければならない。噂ではカンチャナブリーの約5キロメートル下流に在るキャンプで、日毎60人がこの恐れられた伝染性の病気で死んでいる、という。其れを聞いた時ちょっと僕は驚いたが、今は全く冷静だ。僕達がこの病気阻止に受けた予防注射を信じている。だから僕は怖くないし、今後に大きな確信を持っている。

リブンス

1943年6月16日

[キャンプ105 (ビルマ)] その間に色々なキャンプ連でコレラが発生し、その最悪であるキャンプ130と324では、それぞれ約300と100人が死亡した。このキャンプでも数事例あったが、ここで死亡した大半の連中は赤痢事例で、とは言え最悪の熱帯膿瘍が生じてはいるが。

ルーゲ

1943年6月16日

[ヒンダート (タイ)] 上流に在るキャンプでコレラの重症事例。大勢の死者。僕は過日タンビ/タミルキャンプの医者から、其処に約400名のタンビ人がいて、毎日約25人の死者を出している、と聞いた。

フェイケマ

1943年6月19日

[トンチャン (タイ)] 不快な事は1週間前からコレラが近づいてきている；我々の隣りのイギリス人キャンプで1例さえも。我々はだから水と蠅に特に注意し、切り抜けて行くことを願っている。他には目下もはや持ち堪えられない衰弱した連中が絶えず、例えば赤痢の死亡者達は、その根本の原因が衰弱なのだ。シンガポール以来この組の合計は現在5人死亡。僕自身は幸い再びとても元気だ。ただ僕の内臓は未だ快調とは程遠く、大抵日に5～8回便所—或いは森に行かねばならない。

ボム

1943年6月19日

[アンガナン (ビルマ)] この間2人が亡くなった：[O. J. C.] ファブリチウスと[A.] ファンダイクン。もっと大勢が間もなく後に続くだろう、肺炎が目下死因として加わった。[...] 僕自身現在病気で、察するに(顕微鏡が無い) マラリア。我々にはキニーネがあり、他の薬は不足している。

ボム

1943年6月27日

[アンガナン (ビルマ)] 4人死亡した：[J. J.] ストゥルン、[M.] フォス、[H.] ヴェルドホースト法学博士と[B. J.] ケンパース。チャンギから出発して以来約1100人から合計で83人の死者を出している、5ヶ月半で7,5パーセントだ！我々にも天然痘の2事例がある！皆新たに予防接種を受けた。

フェイケマ

1943年6月30日

[トンチャン (タイ)] 昨日の午後僕は又酷く発病したが、今日は今までの所未だ全てオーケーだ。僕は勿論重いキニーネ治療中で、其れは幸いここでは未だ充分ある。我々の宿泊所は屋根だけだ：一方側は半メートル、他方側は約2メートルの高さで20メートルの長さ、その下に我々が横たわる長い竹製のバレバレ [寝台]。これは勿論直に萎れてしまう葉で覆われていた。幸いあちこち下に敷物が敷いてあり、僕は運良く敷物が有る所に横たわっている。

ペルクイン

1943年7月1日

[チュンカイ (タイ)] 僕の視力は回復しなかった。小さな活字の本を読む事はもはや不可能だ。この苦情は良く耳にするから、ビタミン不足のせいであろう。午後しばしば僕は熱気に襲われる。寝る事は勿論駄目、というのは汗を掻いて短時間でベッドカバーが濡れるので、普通に横になる事すら出来ない。疲労と生彩の無さでバレバレ [寝台] の端に座って待つ。何時間も多少涼しくなるのを待っている。

ボム

1943年7月3日

[アンガナン (ビルマ)] マラリアからの回復で、僕は再び明日出て行く。その間僕は未だ：クトゥエア - [水虫] (我々にはカルシウム軟膏がある) と白癬 [黴感染] (これに対しては何も無い) にかかっていた。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年7月6日

少し先のキャンプ (600人収容? [の]) では240のコレラ事例 [があって]、既に80人が死亡した (我々のグループのオーストラリア人達)。2ティカル援助した。僕の簡易ベッドシートを包帯用として医者に渡した。全てに不足、特に包帯と薬 [に]。

ボム

1943年7月8日

[アンガナン (ビルマ)] [過日] 一人だけ亡くなった: [A.] ファン デン ベルグ。

リブンス

1943年7月10日

[キャンプ105 (ビルマ)] カタコンベン (メザリ付近の発掘) で働いていたほぼ全員が以前数回重症のマラリアを発病していたので、この2度目の雨季は我々の大半に致命的だ。僕自身ここで数日立て続けに微熱があり、それにより僕の抵抗力が大きな打撃を受けた。‘軽い労働’の後1週間してから僕は仕事に送られ、我々は其処で森の奥にある採石場から荷積みされた石を道路へ引っ張らなければならなかった。しかし2日後には参ってしまい、完全に力尽きた。目眩と眼中の黒斑点に悩み、察するに一種の枯渴。医者は僕に今までの所朝野菜を探す事だけの‘非番’をくれ、それによって僕は再びほぼ以前の自分に戻った。

ドゥ フラウター

1943年7月11日

[カンチャナブリー (タイ)] 検便。赤痢は無い!!! だから赤痢兵舎から退院。

ドゥ フラウター

1943年7月18日

[カンチャナブリー (タイ)] 未だ骨と皮ばかりの細さとはいうものの、僕はとりわけ再び丈夫になってきていると感じる。他には便が明らかにもっと硬くなり、又便所に行く回数も少ない。特に毎度の食事に貰うトニクムは僕に良く効く。その他、我々は最近余分に卵が貰え、ゆで卵かオムレツにして、今朝は再び飯に2匹の魚を貰った。後美味しいサユール [野菜料理]。その上僕はもっと食欲がある。

ボム

1943年7月19日

[アンガナン (ビルマ)] 又もや5人死亡した: [P.] ドウ グラフ、ファンリブ、[A.M.] ファン ウィーレン、[P. M.] アブラムズそして[H.] オブダム。そして新たに死亡事例が予期される。

僕は血と粘液があったので2日間兵舎に居たが、赤痢ではない事が分った。僕の入院(今回は?) はだから免れた。

フェイケマ

1943年7月21日

[トンチャン (タイ)] 数日来膝の傷が益々大きく痛くなってきたので、僕は再び兵舎病だ。その上この2日間又マラリアにかかったので、再びキニーネ治療を受けている;これが唯一豊富にある薬だ。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年7月22日

[ターマカン (タイ)] 目下人を見分けるのに眼鏡をかけなければならない。[僕の] 記憶もかなり悪い。傷は治らない。僕は既に1ヶ月半踵に2 x 4 x 4ミリの窪みがある(皮膚は塞がって)。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年7月25日

[ターマカン (タイ)] ここで再び健康を取り戻した元気で頑丈な連中に比べて、我々はとてもやせ衰えてしまった。3000人がこの10件の兵舎にいる。毎日2~3の死亡事例[がある]。僕は未だ下痢と痙攣[がある]。医者(チャックス)<sup>127</sup>により軽い食養生(2番)が調整され

---

<sup>127</sup> J. チャックス医師はマゲランKNILの最上級軍隊医療機関の将校であった。彼の妻、M. C. C. (ミア) チャックスーグレイン夫人はアンバラワ第6の女性収容所に抑留された。De Japanse bezetting in dagboekenの続きでVrouwenkamp Ambarawa 6と題され、マリスカ・ヘイマンズーファン ブルッヘンにより編纂された刊行物は目下準備中である。チャックス夫人の日記はこの刊行物の一部を占めている。[2001年出版、脚注その内適応]

た；多くの粥。カチャンイジュ - [小さな青豆]（過剰からか或いは粥自体）は僕にとって下剤となった。1晩 [僕は] 気分が悪かった。

ウェストホフ

1943年7月28日

[レトポウ (ビルマ)] 今日は悪い日である。昨夜エディ・ニューエンハウスが亡くなった。私は彼の臨終に居たが、彼はもはや私の事が分らず静かに眼を閉じた。今朝我々は彼を埋葬した。神父は良い言葉を送りそれから [C. M.] ラッシュ中尉。私は枝と花で十字架を作った。それは実に悲しい事例だ。又彼は棺に入れられず、マットの中に縫いこまれた。救出が来るまで未だ後何人続かなければならないのか？私は駆け足で悪化して行くハンス・カイサーの生命も大変懸念している。全て如何に結末づけられるのか？ところでそれは今日唯一の葬式ではなかった；‘僅か’ 3件あった。

グルドヴァッチ

1943年8月1日

[クウェ (タイ)] 死亡数はその間日に5～6人まで上昇した。目下400人余りのキャンプとしては悪くない。しかし少なくなれば (!) 何度も補充される。ここでは既に又コレラが流行していたが、有り難いことに突然始まった様に突然止まった。7月初め最初のタミル人とジャワ人達がここへ来た時、彼等がコレラを一緒に運んできた。彼等は溝鼠の様に堤防の傍で死んで行った。其れから我々自身に32事例も起こり、その内29人が死亡した。それは鉄条網で隔離されたテントで起こった。ファルケンブルグと [J. H. C.] ズウェルヴァーが驚いた事に生還した。しかしズウェルヴァーは衰弱でその1週間後死亡した。僕の胸に相当堪えた。ズウェルヴァーは僕がシンガポールで細菌性赤痢になった時、母親の様に看護してくれた男だった。哀れな奴。

[W.] ファン デル メウルン医師もコレラで亡くなった。(我々が第10大隊<sup>128</sup>から出発した時、彼はもはや生きて戻っては来れまいという気がして、彼の妻に別れの手紙を残してきた、と話していた…)。コレラの長所は日本軍が恐れていて、我々が殴打される事は大変少ない。[…]

一番元氣な骸骨として僕は今ウォンピン - テント<sup>129</sup>と称するテント指揮官だ；フェルステイフ医師によれば一番好感が持てると同時に最も不運なテント。(我々は彼のアナクマス [最愛の仲間] - グループ!) 其処には未だ18人居る。平均48時間に1人死んでいる。名簿

---

<sup>128</sup> 脚注74参照。

<sup>129</sup> グルドヴァッチが1943年5月6日から29日まで居たウォンピン・キャンプからやって来たグループに因んで称された。



はこのメモの最後に書き写す。<sup>130</sup>我々はもはや普通に反応しなくなっている。偶然自分の特別な友人でない限り、死ぬことで心は動かされない。感動的な事例は [H. J.] ブリッツだった。我々は作業からかなり気分の悪くなった彼を家につれて帰って来た。彼はほぼ無関心に横たわり、食事に興味を示さなかった。食事の間スヘッツが言う：“何だかブリッツが変な色をしている！”ブリッツの横に座っているベッカーが彼の髪を掴んでちょっと見、彼の頭を再び離して言う：“マティ [死んだ]。”誰も何も言わない。皆静かに冷静に食べ続ける。2時間後死体は運び去られ、彼の横にあった食事用小鍋も空だった！

最初の18人のテント居住者達から目下未だ3人生きている：[パウル] ミシェル、[デ]モールマンと僕。最初の堤防組からはたったミール・スミッドと僕だけ生きている。[W.] ドゥ ノード、[S.] オーストそしてハーティングは死んだ。僕の左手の痺れた症状が悪化している。ところで全て‘左’に関しては僕には役立たない。左耳、左目と又左足、腫れて痛い（‘火傷の足’？）。ビタミン不足？フェルスティブ医師は全て‘ネウリティス’と呼んでいる。

オットウン

1943年8月2日

[キャンプ105（ビルマ）] 僕は激しい下痢で昨夜数回便所へ行かなければならなかった。だから今朝は病欠届。即‘非番’を与えない事で良く知られるアンダーソン医師は、今回かなり優しかった、というのは僕は2日間非番と粥食を貰ったのだ。或いは僕が大変酷く見えたからかもしれない。いやはや、休日と言うのは良い事だ。僕は今日未だ数回便所へ行かなければならなかった。夜コレラ - 注射を受けた。（勿論コレラの予防注射！）。

ドゥ フラウター

1943年8月3日

[カンチャナブリー（タイ）] 筋肉が未だ活動していないとはいうものの、僕は徐々に元気になっていると感じる；入浴後乾かすのは未だ厄介だ。歩くのは大丈夫；ただ長時間立っていたり歩いたりするには腫れた足が悩みだ；又多少びりびりする指先にも悩んでいる（医者によれば全

---

<sup>130</sup> グルドヴァッチは確かに名簿を彼の日記に追加した。彼は1943年5月から8月まで‘テント指揮官’だった‘ウォンピン - テント’と称する所で死亡した連中を赤で線を引いた。その他彼は何人かの抑留者達においてその死因を彼等の名前の後に報告し、更に別のリストに死亡した友人/彼のグループには所属していなかった知り合いの名前を記述していた。（N I O D, 蘭領東インド日記収集, K. V. F. グルドヴァッチの日記）。

でビタミンB、B2の欠乏症状)。幸い食欲があり味は良い。[僕の]便は未だ色々だが、僕がここに来た時より限りなく良くなっている。再び腹が出てきている！

フェイケマ

1943年8月5日

[トンチャン (タイ)] 数日前1日に3人、完全に痩せ細り、主にビタミン不足で亡くなった。

ボム

1943年8月9日

[アンガナン (ビルマ)] 再び7名のオランダ人が死亡した：[H. H.] ヒュール、[H.] ドックレルク、[M. K. G.] オースターバーン、[F.] デル キンデレン、[Th. H. W.] コックス、スホットリングそして[F. F.] ファン スワム。その上他のキャンプで4人。ここに - 恐らく我々は間もなく出て行く - 41名の死者を後に残して：24名のオランダ人、12名のアメリカ人そして5名のオーストラリア人。僕の腹は徐々に悪化していき、更に多くの血と粘液。イギリス塩<sup>131</sup>の治療はその度に多少気分はすぐれる。僕の内臓が全て悪くなる前に、我等の状況に変革が来るかどうか問題だ。僕が君の傍に戻って行ける事を強く願っている！さよなら、さよなら、僕の最も愛する君。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年8月11日

[ターマカン (タイ)] 白い衣服—或いは竹虱がペストを持って来るらしい。兵舎連は消毒されなければならない。多くの南京虫と何匹かの溝鼠も。

---

<sup>131</sup> イギリス塩 (エプソム塩、マグネシウム硫酸塩) は下剤薬として使用される。

ペルクイン

1943年8月19日

[チュンカイ (タイ)] 再び上流から1グループがチュンカイに到着した。僕が見た物は凄く悲惨だった。戦争自体既に全くウンザリだが、この酷い苦悩は戦争と全く関係が無い。如何して人間がその様な苦悩を他人に齎す事が出来るのだろうか？しかし僕達の敵は非人間的で残酷だ。彼等は悪魔のサディストだ。誰一人として歩けなかった。僕達が彼等を兵舎へ担いだ。1人は死んで着いた。その中には太い、腫れきった足の連中がいた。これらの絶望的な犠牲者が担架に横たわっているのを見る時、自分の感情を表してはいけない。異常に腫れた顔の彼等の目はかろうじて開いている。そして其れで彼等は人を嘆願しながら見ている。神よ、何と酷い。歩いている骸骨と蠅がその回りに集っている臭い、汚い膿みで覆われた連中も忘れてはならない。これらの可哀相な連中の何人が来たる日々そして週に哀れな環境で死んでいくのだろうか？あー神様、後どのくらい長く、何処に最後があるのですか？人は見た物、経験した物全てによってある程度までは強硬になっていく。僕が今朝見たのは余りに凄くて、悲惨さに胸が悪くなる。そして自分がチュンカイに到着したその瞬間が如何に酷かったかを忘れてしまう。これらの連中は僕が過去にそうであった以上にもっと酷い病気だ。

フェイケマ

1943年8月20日

[トンチャン (タイ)] 僕自身は残念ながら又腫れた足と痛い赤い斑点に悩み、その為に医者から更に5個のビタミンB1 - 錠剤 (日に1錠) を貰った。残念ながら僕の膝の傷も又開いている今、僕は再び働く。未だ大きくは無いが、又全噴火口。

ルーゲ

1943年8月20日

[クウィマ (タイ)] 大勢が殆ど完治しない熱帯膿瘍を持っている。[K. F.] ホルダイク医師は薬が貰えないので、全く無力だ。傷を粉末状のコーヒーで治療している。更に毎日連中が倒れて行く。

オットウン

1943年8月22日

[キャンプ105 (ビルマ)] 僕が今夜病欠届所で順番を待っていた間、1人のオーストラリア人が最後の安息所へ連れて行かれた。この死体は色褪せた薄いシートに包まれ、綱で首回り、腰そして踝を結び合わされていた。身体の輪郭が明らかに識別出来る。例えば鼻、胸の上で折り曲げられた腕、足、それらは全て知覚できた。一度は人間として生きてきた、実に衰弱した、骸骨のような、その包み。徐々に小さな行列は、既に数個の墓が用意されていた密林に面した、裸の、小さな墓地としてのキャンプの辺鄙な所に向かった。神父が短く祈りを捧げ。その後ラッパ手がLast Postを吹いた。其れからオーストラリアの指揮官が更に短い言葉を述べ儀式は終了した。墓掘り人が墓を埋め始めた。鈍く泥の塊がほぼ裸の身体に落ちて行くのを僕は聞いた。戦慄が走った。何と、ここでこの冷え冷えとした泥と陰気な原始林に置き去りにされなければならないとは！僕は未だ長い事立ってその場所を見ていた。風で早く急き立てられるほつれた雨雲が上に押し掛かるこの果てしない密林を後ろにして15個の粗野な木の十字架を見ながら。その夜のこの葬式は僕に大きな印象を与えた。

リブンス

1943年8月23日

[キャンプ105 (ビルマ)] 最近数名の親しい友人達の具合が良くない。イザークは既に今月の初め死亡し、そうこうする内に今日はダーンも危篤だという啞然とするニュースが入った。戦争が短くなって、この死亡事例も最後が来るように、そして我々が自由の世界に羽ばたける様祈ろう。

ウェストホフ

1943年8月23日

[レットポウ (ビルマ)] ここには、医者（私に言わせれば、皆に6週間以内には全てが終わると報告する無責任な事をする）を含めて楽観者があまりに多い、彼等の話しから、注射を期待することによって生命を引き伸ばす努力をしようとしている酷い重病人達。それはかなり危険な試み、何故なら彼は我々以上にかろうじて知っているわけだから。ハンス・カイサーは長く経てば経つほど悪化して行っているが、彼も多くの嘘が含まれているこの良いニュースに賭けている。

オットウン

1943年8月27日

[キャンプ108 (ビルマ)] 夜我々は体重測定をした；僕の体重は目下60キロだ。

ディッケ

1943年8月27日

[キャンプ108 (ビルマ)] 体重測定、[僕は] 今55,5キロだ。

フェイケマ

1943年8月29日

[カンチャナブリー (タイ)] 昨日来た約200人に、ここでは1人の医者と1人の看護師だけ、それだからこの病人組は、殆どの連中にとってかなり疲れた旅の後、24時間後の今も未だ医者を見ることなく、今日ももはや見ることは無いだろう。僕に関しては大した事ではないが、悪い状態の連中も居るのだ。でも我々は今日何度目か分からないほどの‘環取り検査’を受けた(赤痢検査の為ガラスの試験管を尻に)。前キャンプ[トンチャン]では1週間前に更にコレラ - 注射も受けた。我々のキャンプがこの病気にならなかった事は素晴らしい。550人中25人だけが死亡、他のキャンプでは500人中150人がコレラで、50人が赤痢、そして50人は他の病気で死亡したにもかかわらず。僕はその後元気だ：僕の足は又腫れが引き、感染は再び殆ど過ぎ去った。未だどれほどの期間彼等が僕をここに引留めておくのが気掛かりだ。

ボム

1943年8月31日

[アンガナン (ビルマ)] 今回は20人死亡した：ファン キレゴム、[D.] ファン デン ブリンク、[P. A. B.] ディンクラ -、[P. G. Th.] スティル、[J. F.] グレゴリウス、[H.] ズエニス、ドゥ フリース、[M.] ファンアルデネ、[J.] フーゲー、[J. P.] メーンツ、[H. K.] マーフドゥライン、[A.E.] シュワルツ、[W. R.] ワーデンブルフ、[J.] パーリングス、[L.] バウター、[L. J.] ファンヘルデレン、[J.] ハーメリンク、[M. L.] ワッセンブルグ、[I.A.C.R.] ジレットそして[J. Ph.] ケイム。

来年の女王誕生日を我々と一緒に祝えるだろうか？その間僕は一つ病気が増えた。体内の栄養不良が原因で静脈が裂けた；その結果僕の右膝が内出血した為、目下殆ど歩けない。ここでは皆不思議な物や以前なら知られていない病気に対面している！僕は君達が同じ体験をしていない事を願っているが？

1日で9人の合同葬式をした：6名のオランダ人、2名のアメリカ人そして1人のオーストラリア人。これは悲しみの最高記録だ。雨はその間にかなり少なくなり、ひょっとしてそれによって死亡数は多少下降するかもしれない。だが目下大半の死者は一般的な衰弱によっているから、その点で見込みは多くない。

ペルクイン

1943年9月1日

[チュンカイ (タイ)] 昨日タイにいる全戦争捕虜に最高指揮権を持つ日本の陸軍大將が、チュンカイへ視察の為にやって来た。<sup>132</sup>この紳士は既に460人が埋葬された墓場にも訪れたのか？毎日の様に慌ただしく半死の連中がこの中に連れて来られるので、死亡事例の数は逸早く上昇する。日に4～5人死亡し、残念ながら10人死ぬ日が有る事などは珍しくない。

リブンス

1943年9月2日

[キャンプ108 (ビルマ)] (519日目) ちょっとした発熱後 [8月] 27日の夜以来僕は再び家にいる。この2日間が終わった時、前回の遠征から持ち続けていた擦り剥けた肉に大きな豆が出来ていた様で、これは既に又治りつつあるが、でもまあ今のところ9月5日まで非番を貰っている。

---

<sup>132</sup> ペルクインは1943年7月から1944年7月までタイの戦争捕虜達への責任を持っていた、ナカムラ大佐を意味している。

フェイケマ

1943年9月3日

[カンチャナブリー (タイ)] 今日最初のオランダ人がここで亡くなった、それはアムスフォート出身で君も良く知っている [J. J.] プレンパー ファン バーレンだった。脳にきたマラリア。

オットウン

1943年9月3日

[キャンプ108 (ビルマ)] [僕は] 今朝既に100パーセントではなく益々気分が悪くなった。完全に食欲は無い。今夜 [僕は] 病欠届所へ行った。‘医者’は日本軍が既にあまりに多くの連中が病気で自宅留置だと文句を言ったので、僕に‘非番’を敢えて与えようとしなかった。

ディッケ

1943年9月14日

[キャンプ55 (ビルマ)] 病院。僕がこのキャンプに来て以来、最初のオランダ人が亡くなった： [J. J.] オーディングと5名のオーストラリア人。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年9月15日

[ターマカン (タイ)] しびれた足の悩み、これは又ビタミン - B 欠乏の症状 [である]、下痢、チャンギボール、口蓋疫等と同じく。最近ここで誰か気が狂った、これもビタミンの欠乏。彼は柵に話しかけ歩き去る、目下軍警察の独房に居る！他の気遣いは足と性器が酷く腫れている。[…]。ここでたった今又誰かが死亡した。ここでは既に160人余りが死亡した。

ボム

1943年9月15日

[アンガナン(ビルマ)]今回は半月中に31人死んだ:[A. M. T.] ムルホーランド、[J. E.] ブーシェ、[M.] ファン デン ボールン、ドゥ フィール、[H.] アレクサンダー、[N. F. P.] フランチモント中尉、マリン、[W. F.] ザイデル、[W.] ウェメンホーヴェ、[J. H.] ガラヴァチ中尉、[\*…\*]、ファン ダム、[W. A.] ファン ライスワイク、[C. K.] カンプメイネート、[M. J.] ヘルデズ、ユクル、[H.] ラム、ファン ベイク、[D.] ファン ウェリー、[G.] ヴィンク、[P. A. J.] ファン デン ウーヴァー、[G. A.] ダニエルズ、ドゥ フリース、[C. H.] ファン デン ベルグ、ドゥ フリース、[P. C.] ピケット、フンゲン、[J. P.] トゥワイセル、[A. C.] ロス、[W. J.] ヘイエルスそしてドゥ サウレス。その上我々はキャンプ80で更に9人失った。

僕はかなり回復している。今月来僕は入院したが、その結果完全なる休養を楽しんでいる:もはや何百メートル歩いて便所へ行く必要は無く、目下ベッドの下にある半分の竹に手を伸ばす。

ディッケ

1943年9月17日

[キャンプ55(ビルマ)]病院。最近の24時間[僕は]9回便をした。寒い。[陸軍中佐][A.] コーテス<sup>133</sup>により沢山の足が切断された(足の傷)。既に150名のオーストラリア人-埋葬と11名のオランダ人が埋葬された。

ドゥ フラウター

1943年9月18日

[カンチャナブリー(タイ)] [A.] エーマン中尉から[僕は] タカヌンにおける死者の最後のリストを見せて欲しいと頼まれ、我々の‘病棟’で読み上げを依頼された。それは[A. C.] ファ

---

<sup>133</sup> アルバート・コーテス医師は有名なオーストラリアの外科医である。日本のスマトラ襲撃中彼は戦争切断術をおこなった。彼は撤退譲渡のチャンスを受けたが、病人と負傷者達の傍に留まり、戦争捕虜の彼等に随った。キャンプ55で彼は合計114の足、25は全て膝から上を切断した。コーテス医師は竹製屋根の下で工兵により作られた‘道具’とキャンプ大工の鋸を使って手術した。患者達は部分麻酔された。患者達の生存率は2人に1人だった。(ダウズ、227-230)。



ン ステンベルヘン、 [P.] ラトゥールそして他の知り合いを含む158名の悲しいリストだった。

リブンス

1943年9月20日

[キャンプ122 (タイ)] 打撲傷の腫で歩いた為、全右足が炎症を起し直ちに‘非番’を貰った。其れが終わった時、僕は新しい病気、黄疸が始まり、それで気分は悪く、食事から吐き気がして、白目が黄色になる。最悪時は今再び過去の事となった。

ウェストホフ

1943年9月20日

[レプトウ (ビルマ)] 今日は1943年9月20日：悲しい日、というのは今朝11時半にハンス・カイサーが亡くなった。とても静かに彼は死んで行った。今日の午後我々は大変な数の関心を持っている連中とで彼を最後の休息の場所へ運んだ。私は彼の友人を代表して奇麗な花輪を作った；其れは残念ながら唯一の花だった。この様にして徐々に多くの友人達が行ってしまふ。コーリーと子供達に私は心から同情する。何時彼女達がこの悲しいニュースを受け取るのだろうか？今現在彼女達は彼が帰還して来るとまだ願っているだろう。近々彼女達に悲しい幻滅が。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年9月21日

[ターマカン (タイ)] 夜39度の熱； [僕は] 足を高く上げて良く寝られなかった。 [僕の] 全足首は赤く、鼠蹊部が腫れている。重い頭痛。絶対安静。 […] 3000人収容のこの病院キャンプでは古い鉄の鋸で足が切断され、大抵は麻酔無しだ。あらゆる薬と包帯の欠乏。

ボム

1943年9月23日

[アンガナン (ビルマ)] 死亡リストは8日間で既に又22の名前になる。

ドゥ フラウター

1943年9月24日

[カンチャナブリー (タイ)] 今少々ここでの‘病院’の様々な患者達について。[J. P.] ウェイガは、突然ベリベリに悩んでいて、とても太っている；足と腹は水で完全に腫れている。職業軍人でヴェンロ出身のペーターズ、彼は僕がここに来た時既に入院していて、今も尚悪い。彼は全体に腫れあがり、顔すら実に大きい。他にはまだ急にベリベリ - 症状が出つつあり、肥っていく2名のイギリス人が居る。ファン ザイルは疥癬患者達も居る第2病棟に居る；彼等は殆ど皆裸でテンパット [寝床] に横たわっている。気持ちの良い光景ではない。ポーヴェル (脱腸手術)、コッフ (胃病) そしてファン オーストヴェ - ンは手術室にいて、其処では又かなり頻繁に皮膚病と酷い傷の患者が看護されるが、其処は何時も余りに不愉快な臭いがするので、そう頻繁に僕は来ない。

ボム

1943年10月1日

[アンガナン (ビルマ)] 僕は今現在とても調子が良い。腹は完全に治まり、‘功績 (便)’は素晴らしい。今日僕はマラリア治療の最後のキニーネ日で忙しい；ぼくは1日おきに2回発熱した。幸いぼくはキニーネに強い：僕はこの薬から食欲に影響を及ぼされたとは全く気付かない。[...] 死亡数は下降しているが、死亡リストは8日間で又もや14名になっている、(その上キャンプ80では、25人死亡)：[F. T.] ファン フェルト - ヴェン、[J.] ファン デ インター、カウント、[L.] デ ラ クロワ、[H.] セルダーベイク、[H. J.] ルスト、[J.] ヒルハート、ヤンセン、ファン ウスト、[C.] ヒリンク、[P.] ファン デ コップル、レーンス、ハンズ、[P. M. H.] ケッスルズ。

フェイケマ

1943年10月3日

[カンチャナブリー (タイ)] 僕自身再び少々身体の具合が悪い、幸い大した事はないが。まず僕はアミーバ - 赤痢<sup>134</sup>である事が分った。幸い大した事はないが、彼等はここにエミティネ<sup>135</sup>を持っていないので目下治療してもらえない。[...] ここは不潔さと害虫との長期に渡る戦

---

<sup>134</sup> 脚注4参照。

<sup>135</sup> エミティネはアミーバーに対する薬である。

いだ。最後に僕は昨日又マラリアを発病した。近頃は殆ど何時も約3週間半毎だ。気分の悪い日とキニーネ治療の後は再び回復した。[…]

注目に値する事として更にここにおける手術の奇妙な方法について書いて見たい。昨日まで部屋が無かったので、患者は兵舎連の間で数個の木箱の上に置かれた。野外で手術され、時には雨の中で。看護師は蠅を追い払う為立って団扇で煽いでいる。こんな風に外科医は数十件の傷と2個の盲腸を切り取った。今現在は蚊帳 - 部屋が作られた。

ドゥ フラウター

1943年10月4日

[カンチャナブリー (タイ)] [W. W.] ロスと僕も、他の大勢の様に、今手と足の豆と潰瘍に悩み、夜其れがとても痒くて故に掻き筆ってしまう、其れから後は感染 [が起こる]。ロスは僕より酷い。僕は腕首と足に今熱い焦げ飯を乗せている。多いに助けになる。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年10月5日

[カンチャナブリー (タイ)] [W. L.] ファン デル ヴェフト大尉 (バタビア石油会社の技術者) と話し合った; [彼は] ベリベリと足の潰瘍 [がある]。手術しなければならない。手術中午後 [彼は] 亡くなった。[僕は] 6人の担ぎ家の1人になり十字架無しで墓地 [へ]; キャンプの反対で道を渡った向こう側のわき道を100メートル程 [我々は] 歩き、壁に囲まれた中国墓地 [へ]。

リブンス

1943年10月5日

[キャンプ133 (タイ)] 最近の1週間半僕は並外れて元気だ、沢山食べた、其れは長い間無かった事だ。そして [僕は] 疲労感が殆ど無く、恐らく1週間来乾季が始まり、全キャンプがかなり快適な景色を呈していたお陰だろう。

ディッケ

1943年10月7日

[キャンプ55 (ビルマ)] 最近3ヶ月余りの内に死亡した：キャンプ55内で186名のオーストラリア人と14名のオランダ人。

オットウン

1943年10月8日

[キャンプ130 (タイ)] 我々のグループは内部雑用だった。竹を伐採しなければならなかった。これらの竹は病院兵舎の建物に使用される。かなり多くの病人がいるので、これらの病人達と一緒にする方がより良く、そうすれば看護が有効に出来る。

グルドヴァッチ

1943年10月9日

[リンティン (タイ)] 僕の調子は良くない。[僕は] 酷い胃痛と食べ物(!) を中に持ち堪えられない。更に酷い事には、不眠症。薬は勿論無い。既に2回これらの厄介な牛<sup>136</sup>から逃れようと試みたが、マリモトは拒んだ。“駄目だ、オーケーではないぞ!” もし僕が代用者を見つける事が出来たら良かったのだが、誰も好まなかった。重なる災難で数日来僕の靴が完全にぼろぼろになり、目下僕は裸足で森の中で牛の世話をしなければならない。今僕は既に子供みたいに足を痛がっている。刺、鋭い竹と石の結果、其れはもはや足とは呼べない。大きな塵、各1歩が痛い。もはや長くはもたないに違いない。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年10月10日

[カンチャナブリー (タイ)] この1ヶ月半存在するキャンプは既に150人の死者を出している。日本軍の毛布を借りた者は、裸で埋葬される。十字架、或いは目印無し。立ち小便器としてここでは2節の竹が役立っている、縦方向の一部を切り取って。尿瓶としては竹筒。

---

<sup>136</sup> 彼はここで彼の雑用を意味している。項目‘仕事’、1943年8月18日グルドヴァッチの日記断片参照。

オットウン

1943年10月20日

[キャンプ130 (タイ)] 僕は最近の日々全く食欲が無い。苦勞しながら多少の飯を中に放り込む。しかし実に不思議なことには、美味しい焼いたピフテキを思うと、口に涎が出てくる。

ドゥ フラウター

1943年10月22 - 24日

[カンチャナブリー (タイ)] 近頃の日々は僕が傷で両手に再び包帯をしているのと、尻が未だ座るには無理なので、僕の日記を欠かさずつける事が出来ない。[10月] 22日彼等はここで主に僕の傷を生の過マンガン酸カリ結晶<sup>137</sup>で治療し、その結果激しい痛みと腫れでもっと酷くなっている。その上僕は熱があり頭が割れそうだ、ある種の過マンガン酸カリ中毒。昨日僕は其れでかなり気分が悪かった;今日は随分良くなり、僕の傷は再び軟膏(H. A. D.)<sup>138</sup>で治療された。ロスも又手足に凄く困っている。僕の左足 - 膝も残念ながら既に始まっている。故に僕のメモを短く [しておく]。 [...]

[J. P.] ワイガはまずまずだ。未だ尚相当水腫れ [浮腫] (落ち込み、意気消沈、一緒に加わってくる)。我々の向かい側にいる1人のイギリス人もベリベリに苦しみ、日毎大きくなっていく。不愉快な光景。

ボム

1943年10月24日

[アンガナン (ビルマ)] 1週間以来僕は再び退院し、又目下将校兵舎に住んでいる。[...] 僕の退院はキャンプ80へ向かって歩く事の出来なかった全病人(約70人)の移送と一緒に起こった。それでこの1週間で死者は無い、少なくともキャンプ100 [アンガナン] では。以前には死者23人の前リストがあった: [G.] グリフィウン、ヴォワタ、[R.] ハーネンブルグ、[J. P. L.] フェルウェイ、[J. G.] トレッフアーズ中尉、[J.] ファン デル ポートウン、[J. A. F. J.] ファン デー ホーベルフ、[J.] プフント、[C.] フロートハウゼン、[Y. H. L.] ラ ラウ中尉、エンタースヒルド、[G. J. F.] ヒーズキャンプ、ドゥグラーフ、[L.] エッヘン、[A. S.] レイエンナール、[B. G.] ステイヴェンズ (10月

---

<sup>137</sup> [注釈する。(Coelhoではなく)。Van Dale:カリウムのマンガン酸塩 (KMnO<sub>4</sub>)、強い酸化剤。脚注適応。]

<sup>138</sup> [注釈する: H.A.D.は水銀アンモニアである。]

11日)、[J.]メイヤー、[C. F.]ファンブゼイ、[J. W.]ドゥクーン、[M. J. W.]ファンデルメウルン、[A.]ファンデルハム、ドゥハースそしてブローベルグ。キャンプ80は13名死亡の情報を齎せた。特にラウの死は僕の心を打った。[…]  
彼は今ここで既に大きくなり過ぎた墓地に埋葬されている。丁度昨日スコットランドの牧師、パドレ・カニンガムによって奉献された。入り口に‘アンガナン・キャンプ100連合軍戦争捕虜の墓地’そして聖書の一説‘我々は彼等を忘れない’、と書かれた門。我々のオランダ人死者合計数は目下既に約29名或いは約25パーセントとなっている。

ドゥフラウター

1943年10月27日

[カンチャンブリー(タイ)] 僕の傷は軟膏で素晴らしく治った。我々の兵舎にいる98人の患者達から約60人がビタミン不足の結果そういった傷、或いは他の皮膚病を持っている。他には突然全キャンプに酷いかゆみを伴う奇妙な睾丸腐食が生じ、又睾丸と鼠頸部一帯間に擦り剥けた場所ができる！これもビタミン不足の問題だ。

グルドヴァッチ

1943年10月29日

[クウェ(タイ)] ミル・フミッド、ハンス・ネーデルヴェンそしてダーンチェ・ハートヴェールドが死亡した。昨日ヘーラード・フンズが亡くなった。我々の最初の堤防チームから今僕が最後のモヒカーンだ。そしてそれ、[S.] オーストとミルは、我々が開始した時、強硬な奴等だったのに。堤防の仕事は目下大変楽になっているが、僕はもはや働けない。腐った食事の各一口はすぐ又吐き出る。特に夜僕は胃痛に苦しんでいる。その為に僕の衰弱は絶望的だ。

リブンス

1943年10月30日

[キャンプ133(タイ)] 時々川のほとり、鉄道或いは森の中で死んでいるクリング人とビルマ人を見かける。彼等の病人達には何も施されていない。彼等は仕事へ向かって鞭打たれ、もはや働けないとなると、彼等はつまるところ見捨てられてしまう。重病事例だけは未だオーストラリア人の医師によって治療される。我々の連中から又もや4人死亡し、2人は肺炎で危篤だ。必

要な薬は無いし[\*…\*]日本軍によってもはや供給されないらしい。もし良い薬だけでもあれば、何人助かっていたことだろう、と思うのは辛い。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年11月1日

[カンチャナブリー(タイ)] フランケン<sup>139</sup>は外傷熱だ。イギリス人医師はマラリア(!)だと思いい血液検査を(再び)させる。吐き気を催させる - 甘い膿瘍臭は忌々しい。直径10から15センチの足の潰瘍。M&B<sup>139</sup>は効く。ここは下痢と赤痢に並んで多くのベリベリとマラリアがある。(白虱がチフスを持ってくる?) 包帯は無い。僕は2ヶ月間包帯をしなければならない(洗わない!)。<sup>140</sup>キャンデーのセロハンは傷口覆いの湿った綿の上に‘タフタ’として良い。ユーソル、或いはアクイフラグマ。<sup>141</sup>ある男は(イギリス人)既に何ヶ月も膿瘍臭を起こす蠅防止に蚊帳(日中)の下に居る、

ドゥ フラウター

1943年11月7日

[カンチャナブリー(タイ)] 昨夜又オランダ人が担架で中へ運ばれて来た(クイマ出身)。その上流の状況は痛ましいに違いない。噂ではクウェにいる500名の健康人から8月初め以来300名が死亡したらしい。最近中に運ばれて来た3名のオランダ人は(衰弱し、潰瘍の下に)、其処で未だ相変わらず苦しめられているのだという思いを我々に与える。昨日そのオランダ人達の1人が足の上にあった潰瘍の為部分的に又切断された。

---

<sup>139</sup> M&B (Ma y & B a k e r、メイとベイカー)は硫黄含有の抗菌剤である。

<sup>140</sup> スネルン ファン フォルホーヴェンは彼の膝から踝まで包帯が必要だった。(N I O D、蘭領東インドの日記収集、J. H. スネルン ファン フォルホーヴェン)。

<sup>141</sup> ユーソルは消毒剤である。

オットウン

1943年11月12日

[キャンプ112 (ビルマ)] 今朝 [僕は] 熱が無かった。全く食欲が無い。僕の胃が閉ってしまっただけだ。多少は食べる事を強られる。今日は又スープと少々の肉、それは正に問題無く食べた。

オットウン

1943年11月13日

[キャンプ112 (ビルマ)] 再び熱！僕は余りに気分が悪く…の様に、あー、これが僕の最後のメモだ。

ドゥ フラウター

1943年11月14日

[カンチャナブリー (タイ)] 今日は再び日曜日で、僕がこの病院に入って既に18週間だ。シンガポールの病院での3週間を入れると21週入院期間となる！

リブンス

1943年11月20日

[キャンプ133 (タイ)] 朝キャンプ130で堤防での仕事に死亡した全戦争捕虜の追悼祭があり、それは少なくない(7000名のオーストラリア人グループとイギリス人から: 2600名!)。このキャンプにはキャンプ112で残留されたウェガリの連中が居て、聞いて驚愕してしまった事には、僕の古い企業仲間のヤン・フェルスラウスも死亡して墓地にいる、それは先月起こったに違いない。



リブンス [ 函解付記 : 木製十字架、墓地のスケッチ。 (日記 13 ページ) ]

1943年11月23日

[ キャンプ 133 (タイ) ] [ J. ] フェルスラウス、1917年4月5日生まれ、1943年11月7日キャンプ130にて死亡。彼は僕が知っている、1943年11月22日に丁度20人目の死者が埋葬された静かで日陰の墓地に埋葬されている。墓はそれぞれに素朴な十字架で見事に手入れされているように見えた。彼は他2名のオランダ人そして14名の英国人と一緒に居る。1943年11月20日 [ キャンプ 130 で ] 鉄道建設中に命を落した全員の追悼儀式が行われた。ここに際して大きな木製の十字架が墓地の先端に設置され、各墓にはナガトモの名の下に花輪が置かれた。

- 1 a 敬意を表して
- 1 b ビルマでの死者に
- 2 a オーストラリア人、オランダ人、英国人、アメリカ人
- 2 a 3 & 5 戦争捕虜分課
- 3 a 追悼式
- 2 c 1943年11月20日ここにて施行
- 4 a 建設中
- 4 b ビルマ - タイ鉄道 (泰緬鉄道)

オットウン

1943年11月28日

[ キャンプ 112 (ビルマ) ] 11月14日から11月27日までの期間僕は何も知らない。この2週間僕は全面的に意識不明であった。

オットウン

1943年12月1日

[ キャンプ 112 (ビルマ) ] アー、僕は何と痩せてしまったのだろう！僕の腕や足に肉がまるで無いみたいだ。足の上に正に皮がある。歩く事は出来ない。少々よろめきながら、至る所しっかり掴まなければならない。病院兵舎長の中尉が僕の病気について細切れに話す。僕は更に愛妻に手紙を書いていた。中尉が其れを僕に見せてくれた。それは何処かアラビア文字の様に見える、数文字が筆り取られた紙切れだった。如何して其処を手に入れたのか、分らない。かすかに僕によって (?) 書かれた住所がある： ‘グロスヴェノ - ル・ホテル’ 。この ‘手紙’ 自体は、余り

におぼろげな書体なので読めなかった。僕がこれを見聞きした時、再び熱に浮かされていて、僕がイギリスの何処かに野営していて、リチェはロンドンのホテルに宿泊していた。僕は又他の映像も見た。僕自身山岳地帯を歩いていて、その途中に民族衣装を着けた男女のグループが歩いていた。スカンジナビアの風景、ノルウェーの様だった。僕は14日間意識不明だったので、その時は別世界に生きていたような気がする。とても不思議だ。中尉によれば、僕は41度の熱があったそうだ。

ドゥ フラウター

1943年12月3日

[チュンカイ (タイ)] 我々はこのキャンプにて全ての点で減退した。[...] 今朝 [僕は] 再び病欠届所へ行った。[僕の] 腹が未だ良くない。今1週間のリヴァノル錠剤<sup>142</sup>を貰う！[...] 毎日ここでは再度埋葬されている；昨日は7名のイギリス人。

ドゥ フラウター

1943年12月4日

[チュンカイ (タイ)] 昨日汽車の下に飛びこんで自殺した1人のオランダ人が居たが、今日は又3名のオランダ人が死亡した。こんな風に続行して行くのみだ。毎日新しい連中が其処へ加わり、後どの位未だ続くのだろうか？

オットウン

1943年12月18日

[キャンプ112 (ビルマ)] [12月] 5日僕は再び熱がありキニーネ治療を受けた。キニーネは少なくなり、[だから] 僕が又脳マラリアになったりしたらと思うと恐ろしい。キニーネの不愉快な所は、食欲がなくなることだ。少なくとも僕はそう思う。看護師によれば熱の為に食欲がなくなるそうだ。[...] 勿論この新しい熱の期間、僕の体力が再び減退した。僕は余りにもへとへとに疲れている。歩く練習を勿論又新たに始めなければ。

---

<sup>142</sup> 注釈する。 [リヴァノル]

ドゥ フラウター

1943年12月23日

[チュンカイ (タイ)] たった今マラリア兵舎に着き、僕のテンパッチェ [寝床] を設置した。ここは幸い気持ちの良い静けさで、兵舎の回りにある竹林にいる鳥達の囀りを楽しむことが出来る。粉末キノーネの服用量を既に貰っている、胸が悪くなる苦さ。

オットウン

1943年12月23日

[キャンプ112 (ビルマ)] 今朝病院兵舎から退院した。それは残念に思う、というのは僕が未だすごく弱々しく感じるだ。

ディッケ

1943年12月24日

[キャンプ55 (ビルマ)] 出発の日 [まで] [合計] 294名のオーストラリア人と31名のオランダ人がキャンプ55で死亡した。

グルドヴァッチ

1943年12月25日

[ノンプラドック (タイ)] [クリスマス第1日目] 我々は余り首尾良く行っていない。4月20日バンポンから行進した我々の150人からなる最初のグループからは63人しか残っていない!

ボム

1943年12月26日

[アンガナン (ビルマ)] [クリスマス第2日目] 僕の腹は明らかに弱所となっているというのは、食事は適度に良く僕は気分が良い。過去の期間でこのキャンプから4人が死亡した；他のキャンプの29人と一緒にして、我々はビルマで1064人から336人失った。

ドゥ フラウター

1944年1月13日

[チュンカイ (タイ)] 我々の‘病棟’で近頃死亡リストが350人になり、全員ビルマから来たオランダの戦争捕虜達、読み上げられた。

グルドヴァッチ

1944年1月23日

[ノンプラドック (タイ)] いつもと違って僕の腹が変だ。24時間に20回から40回ただの水が出るだけだ。[H.] ドゥ モンチー医師<sup>143</sup>は‘腹ペラグラ’と呼んでいる。<sup>144</sup>かなり不愉快、というのはもう長い事、夜中いつも時間に間に合って目が覚めない。それだから僕の‘幅広い持ち衣装’がかなり問題だ。

ボム

1944年2月1日

[カンチャナブリー (タイ)] 別の朝に数人の連中と体操をしている。この身体の訓練 - より良い食事と平行して - が必需の医者達が近くにいることで出来るのは僕にかなり役立つ。この方法で再び我々の身の上に更に起こる事に備えて僕は鍛錬している。

---

<sup>143</sup> ドゥ モンチー医師は何年もの間熱帯専門医として経験があり、キャンプ内の衛生を任されていた。(Daws, 260)。

<sup>144</sup> 脚注51参照。

グルドヴァッチ

1944年2月20日

[ナコムパトン (タイ)] 事故無しに夜中が過ぎ行く事は無い。何か麻痺した括約筋と関係があるらしい。(ビタミン不足?) 1つの大きな災難。

リブンス

1944年2月25日

[キャンプ114 (タイ)] しかしながら今健康状態を5段階に分けてリストが作られた。健康人達は残留し、残りはカンチャナブリー (病院キャンプ) へ行く。僕は後者に属する。

ボム

1944年2月26日

[カンチャナブリー (タイ)] ヴィッテは離れた病院に居る。彼も目に見えて回復しているが、彼にとってはある時期を見てバンコクへ行くのが最良だ。又労働キャンプの危険を負うには彼は余りに悪い状態だ。

オットウン

1944年2月29日

[カンチャナブリー (タイ)] 今日の午後我々全員の体重を量らされた。僕は今53キロ。[それは] 更に15キロ僕の普通の体重より下回っている。とはいえ僕はここで相当太った。その時僕の体重はどの位在ったのだろうか? 僕はその時文字通り骨と皮だった。

リブンス

1944年3月5日

[ターマカン (タイ)] 目下このこの鉄道建設で起こった、最初の確実な死亡数が分った。其れはとてつもない: 51000名の戦争捕虜達から17000名が死亡し、その上更に30000名のビルマ人、クリング人、中国人、日本人。故に合計47000人。

グルドヴァッチ

1944年3月13日

[ナコムパトン (タイ)] ちょっと数ヶ月前の上流の鉄道を振りかえって見る。目立つのは、イギリスの医者達が彼等のオランダの同僚達<sup>145</sup>より (幸い!!) もっと早く切断する準備をする。察するに何か熱帯地方の経験不足に関係があるのでは? [...] 我々の医師連は大半が切断の誘因となる熱帯潰瘍を便所の蛆虫で治療した。奇麗に洗浄し傷の中へ。それらは既に膿みを食べたことで死滅した肉が消えてしまう! 見事に奇麗に。それらを再び間に合わせて取り出さなければならぬ、さもないとそれらは一度働き始めたら止める事を知らないから!! 其れを考えた/発見した人は、ノーベル賞ものだ! 或いは村の各呪医は既にそうであるべき事を知っていたのだろうか?? 僕の左足にある2個の潰瘍は既にその様に治療された。全く美味しそうではないが、実に奇麗になる!<sup>146</sup> 痛みに関しては思いの他大丈夫だった。又ファン デル メウルン医師の髭剃り用剃刀による盲腸の手術は印象的だった; 僕のが既に無かった事には感謝した。

ドゥ フラウター

1944年3月13日

[チュンカイ (タイ)] 我々は近頃夜食事に添えて皆予防用のキニーネを貰う (監視の下で飲みこむ錠剤)。<sup>147</sup>

ドゥ フラウター

1944年3月18日

[チュンカイ (タイ)] 今日の午後血液検査の結果に病院へ行った時、担架が僕を通り過ぎ、其処に瘦せに - 瘦せ細った患者が横たわっていた。誰もが死体だと思って姿勢を正したが、担ぎ屋が死体ではないと言った。それは重症の赤痢患者で、輸血を受けていた。それは実際もはや骨と皮以外何も無かった。悲惨な光景。そしてその様なのが未だ沢山居る。ここのキャンプは目下病院キャンプとして約14ヶ月存在している。現在ここに1450人余りの患者が埋葬されている。

---

<sup>145</sup> オランダ医者連は彼等の外国の同僚達に反して '柄杓法' を優先し、それでクレッテ (匙から作られた) の助けで麻酔無しで熱帯潰瘍が洗浄された。この様に切断を避ける事が出来た。(Daws, 224-225)。

<sup>146</sup> これは今日でも又流行している実証済みの方法であった。蛆虫は (当然完全に奇麗でなければならぬ) 死滅した組織を食べ、この方法で傷が奇麗になり回復が - 傷の塵に邪魔されず - より早く良くなる。

<sup>147</sup> マラリア予防剤として。

ディッケ

1944年3月19日

[チュンカイ (タイ)] 鉄道の仕事で死亡した：46000名、其処から17000名のヨーロッパ人、（[そして] アメリカ人とオーストラリア人）。

ボム

1944年3月29日

[カンチャナブリー (タイ)] ジャック・デュ マッシュと、あるP. [W.] ウィマンズにとってこの戦争は余りに長く続いた、彼等の名前を僕は最近第4分隊（僕は第3分隊で、以前は第5分隊）の死亡リストに見た。そのH. ・ドゥ サヴォルニン ローマン [平貴族] もそのリストに載っていた。僕と一緒にピシンに居たファン デル メウルン医師と [A. J. M.] アーダンクも死亡した。こんな風にして蘭領インドの共同体は間引きされて行く。

オットウン

1944年3月30日

[ターマカン (タイ)] 再び凄く気分が悪い。昨日又もや熱っぽく、‘医者’ から即2日間‘兵舎病’（半病人より適応）を貰った。そして勿論再びキニーネ。

ディッケ

1944年3月31日

[ターマカン (タイ)] ボブ・トウイスはグループ8の8番目、だから目下6パーセント [このグループから] の死亡率。ボブ・トウイスは数日前キャンプ3で2重の肺炎にかかり死亡した。人は彼にマラリア用の治療をしたのだ！

ペルクイン

1944年4月4日

[ノンプラドック (タイ)] 4月1日土曜日僕は入院した。その日再び熱があったので、僕は医者へ行った。直ちに彼は、僕の異議申立てにもかかわらず、僕を病院へ送った。日本軍は病院の管理上大勢の患者を受け入れる事に勤め、其れゆえに多少気分が悪いだけの者でも既に即患者として入院させられる。1年前の4月にも僕は入院したが、その時は実に悪い状態だった。その上所謂リンティン病院は兵舎で、たくさんの病人が其処で多かれ少なかれ静かに死ぬる為に運び込まれる何とも崩れ落ちそうなテントだった。ここは完全に違う。病人達は看護を受け薬を供給される。僕は早い退院を望んでいる、というのはここでは何も稼げない。

リブンス

1944年4月7日

[ノンプラドック (タイ)] 僕自身キャンプ1 [ターマカン] での酷い発熱後、随分身体の具合が良くない。[僕は] 熱帯潰瘍を含めてあらゆる足の傷と他には余りに痛い尻の結果 (疥癬?)、殆ど動けないしどんなにしても座る事が出来ない。しかしこれも再び消え去ってしまう事だろう。

ドゥ フラウター

1944年4月8日

[チュンカイ (タイ)] 我々のグループ (ファン ライエン大尉) の死亡率は15, 3パーセントに達した。我々の全チャンギ - 組 (H-区画) の平均は約15パーセント [だ]。1943年9月タイに到着した1600名からなるイギリス人大編成隊が居て、そこから1200名が死亡した! 一般的にイギリス人内での死亡率の方がオランダ人内より又目立って高い!

ペルクイン

1944年4月24日

[ノンプラドック (タイ)] 数日前日本軍が皆を体重測定した。今日は僕の番で67, 5キロだった。水腫或いは浮腫から既に8キロ下がり、それは主に再びビタミンCが食べ物に入っていることから、加えて僕は充分新鮮な果物を買っている。



ドゥ フラウター

1944年7月1日

[チュンカイ (タイ)] アメリカ赤十字資材 (器材と薬剤) の大きな発送物が届いた。最初の6ヶ月間は目下全員に十分な薬がある (ネオサルヴェルサン、ダゲナン、エミティネ、十二指腸虫に対する新薬、ストレプトザイル、綿、包帯、キニーネ - 注射物資、その他)。<sup>148</sup> 医者連によれば我々は今現在飢えによってか、或いは汽車の下に横ばいになるしか死ぬ事が出来ない、と！これが全てもう少し早く届いていれば良かった。どの位多くがもっと助かったに違いないのに！昨夜少々墓地を散歩した；多くの墓が今だ十字架或いは杭を備えていない (余りに少ない木)。

ウェストホフ

1944年9月27日

[ナコムパトン (タイ)] マラリア患者の数が相当上昇している、特に我々には蚊帳が無く、水田に在る我々の兵舎連はほぼ絶えず水の下に立っているもので。この連中が大変な高熱を持っていることに君は驚く事だろう、40度から41度は実に普通だ。キニーネはもはや無いので供給されない、だから熱の無い振りをするしかない。哀れな連中は3枚の毛布の下に横たわって寒さに奮え、彼等が出来る限りしか飲めない。

ドゥ フラウター

1944年10月16日

[チュンカイ (タイ)] 昨夜墓地を散歩した。[...] 古い墓地には168人が埋葬されている；1942年10月22日の最初の墓 (23歳) だ。新しい墓地には目下1289人埋葬されている；だからこの病院キャンプで2年間に合計1457人の戦争捕虜達が死亡した。

---

<sup>148</sup> 注釈する [治療薬]、脚注123と135も参照。

ドゥ フラウター

1944年10月31日

[チュンカイ (タイ)] 今朝再び暫く実験所で働いた。患者の1人が気を失って倒れた。今だ尚日に約80件の血液検査。キニーネが無くなった現実、かなり厄介だ；マラリア患者達は目下治療として絶対安静を言い渡されている。健康人達への感染の危険は再びかなり大きい。蚊、特にステゴミア<sup>149</sup>はかなり夥しく小屋の中にいる。

ドゥ フラウター

1944年12月18日

[チュンカイ (タイ)] 今日実験所にターマカン組からとても多くの病人達。かなり多くの重症マラリア患者達。今日の午後 [我々は] 体重測定された (ヨーロッパ人と印欧混血人)。僕は64キロだった。 [僕の] 丈は1, 74メートル。

グルドヴァッチ

1945年1月1日

[ナコムパトン (タイ)] 僕の腸は具合が良くないままだ。察するに定期的な下痢により直腸脱出症<sup>150</sup>が起こった。 [A.] コーテス医師は僕に所謂 ‘癒痕組織形態の液体’ を括約筋に6本注射することによりほぼ完治させた。痛さと同じだけ不愉快。しかしそれはやはり良く効いた。僕の最悪の時期は8月/9月だった。B [ベルライン] 医師によれば、再び危険な状態だったらしいが、自分ではそんなに感じなかった。少なくともクウェでの時の様な ‘放棄傾向’ は全く無い。B医師は僕を輸血の為にイギリスのM. I. 室へ送った。間違いから血は貰えなかったが、血を抜き取られてしまった！気は付いたが、血を供給すると、1週間1個余分な卵とカチャンイジュースープ [小さな青豆の] が貰えるので、僕は何も言わなかった。B医師は激怒して [いた] ; ほとんど間一髪で僕が彼から引っ叩かれるところだった。

でも彼は僕に医長の [H. L.] ラースウン医師からのはっきりとした禁止に反して、10本の高価なニコチン酸注射<sup>151</sup>を与え、これが素晴らしく効いたと僕は想像している。其れはしかし忌々しい注射だ。それ以降15分間身体全体のかゆみとひりひりで転げまわる。しかし

---

<sup>149</sup> この蚊の種類は黄痘ウイルスを運ぶ。(Coelho, 750)

<sup>150</sup> 直腸の衰弱、可能性として頻繁な気張りにより生じる。

<sup>151</sup> ニコチン酸は中でも新陳代謝に重要である。他には脚注51も参照。

B医師が期待していた様に、約2ヶ月後下痢は止まった。‘爆発’の間に徐々に長くなる休憩期間 [があった]。朝自分の便の中で目が覚めないというのは、想像もつかないほどの安堵…

6月から11月まで僕は疥癬があった。汚くて、膿みが出る、其れが全てにくっ付く。殆ど座れない、横になれない或いは歩く事さえ出来ない。そして我々は更に疥癬が特にイギリスのPOW(戦争捕虜)一病ではないかと思った!! […] 僕の目はかなり悪い: ちくちくして晴れた日射では凄く見にくい。これの長所は日に補充栄養として2個の卵(!!!!)だ。僕はまるで濡れた眼鏡で見ている様だ。ラースウン医師によればそれは‘欠乏性神経障害’<sup>152</sup>とか。

ドゥ フラウター

1945年1月4日

[チュンカイ(タイ)] 昨日の午後ウィルソンが重症マラリア発作BT/ST<sup>153</sup>により病院で死亡した。[彼は] 治療を終了し再び仕事に出かけた。[彼は] 午後担架で中へ運び込まれたが、既に意識不明で、数分後に死亡した。

ドゥ フラウター

1945年1月10日

[チュンカイ(タイ)] キニーネはもはやこのキャンプには無い。ちょっとでも有れば其れは重症のBTとST事例のみに供給される。再び日本軍はキニーネを要求された。数日前キニーネ不足が証明されたが、彼は今始めて相当驚いた様な風情をして、キニーネを注文しようと言った。

ドゥ フラウター

1945年1月19日

[チュンカイ(タイ)] 実験所での血液検査回数は限界により減少した(日に70から80まで)。血の気の無いマラリア患者達が病院や兵舎連に横たわっているのを見るのは悲惨だ。半死状態で彼等は頻繁に仕事から家に戻される。我々は再び多少のキニーネを受け取ったので、BT患者も3回キニーネを供給してもらう事ができる。

---

<sup>152</sup> 欠乏病ペラグラによる症状。脚注51参照。

<sup>153</sup> 脚注65参照。

ドゥ フラウター

1945年1月25日

[チュンカイ (タイ)] ターマカンから500人(病人)が又中へ着いた。ここの病院(1件の兵舎)は目下超満員だ。患者達は廊下の担架に横たわっている。他の兵舎への拡張は認められない。

グルドヴァッチ

1945年4月27日

[プラカノン (タイ)] 悪いニュース。今朝ベーレンズ軍曹がコレラで死亡した!我々は未だそれにもかかるのか?日本軍は恐れた。我々は倉庫に隔離され入浴さえも許されない(戸の前に在るカリ[川]で!!)。だが故に働く事は無い。これは少なくとも長所だ。

ドゥ フラウター

1945年5月3日

[チュンカイ (タイ)] 日曜日 [K.] スタイケル(脊髄癌)が死亡した。月曜日1ヶ月の苦悩後、[A.G.] ベックマン [ラプレ]、タキレンの爆撃の犠牲者として。火曜日かなり思いがけず [J.M.] キヴィット。だから又続いて3人。その4人目は重症の黒水熱 [に苦しんでいる]。

グルドヴァッチ

1945年6月22日

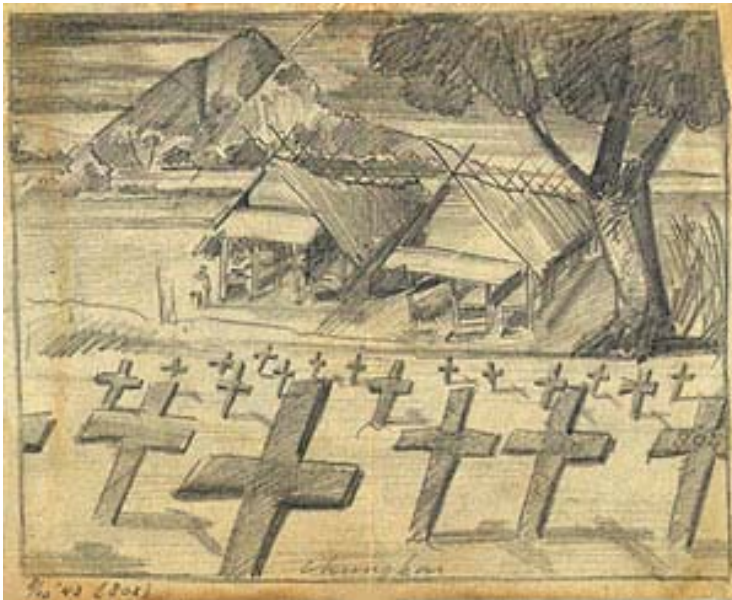
[プラカノン (タイ)] イロンカ [彼の娘] が又誕生日だ。3歳!僕は何かちょっと奇妙な祝いをした。[6月] 21日から22日にかけての夜中酷い吐き気がした:腹の刺し込み、下痢。気分が物凄く悪い。ゴールドバック医師はコレラを恐れ、僕を隔離する。しかし熱が高く、其れは良い印だ。コレラに熱は無い。その為に数時間忌々しい時を過ごした。其れが全てイルカの誕生日に!!



ビルマタイ鉄道沿いの戦争捕虜収容所。



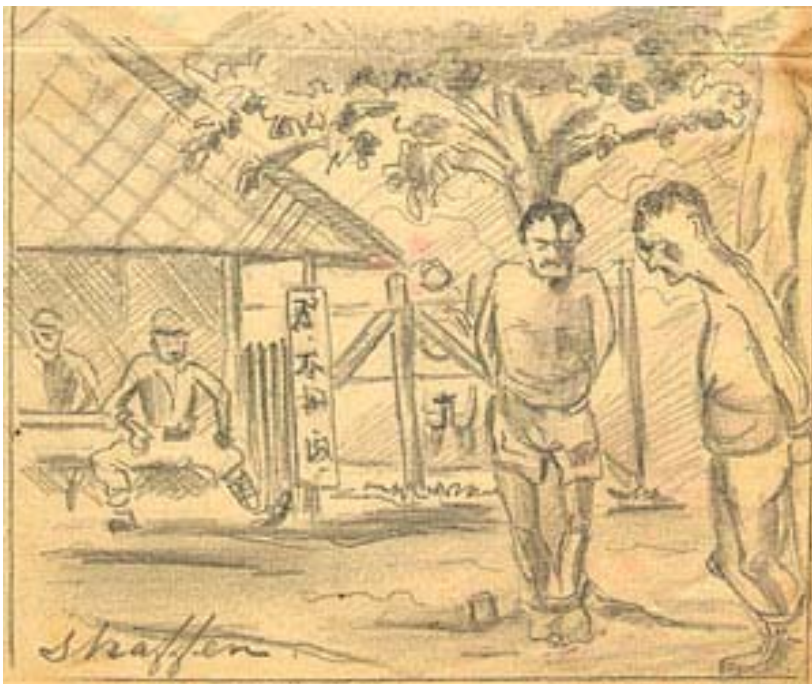
タイ鉄道。線路の敷設, 13 June 1943. W.F. Brinks.



収容所(タイ)の共同墓地 画家不明 (NIOD IC IS 135)。



タマルカン(タイ)に近いメクロン川沿いの木材仮設橋。



日本軍による罰 画家不明。(NIOD, IC IS 136)

## 教育、娯楽と信仰

ディッケ

1942年6月28日

[タヴォイ (ビルマ)] 日曜日。僕は足の傷のためにまだ休んでいる。ザ・ロブゾン・ミステリーの本、約250ページを読み終えた。

ディッケ

1942年7月5日

[タヴォイ (ビルマ)] 牧師 [C. マック] と神父 [A. W. M. フェルヘースト] は、礼拝をするための、共同の家をもらった。僕はタヴォイではまだ牧師の礼拝に行っていない (病気のため)。

ディッケ

1942年7月8日

[タヴォイ (ビルマ)] 水曜日。1938年の短編小説を3作読んだ。フリースランドの金、王道と、貸し家 (115ページ)。とてもいい。12時に短い礼拝、夜はハーゼンベルグ大佐の講演。‘ヨーロッパの春’。

ディック

1942年10月10日

[ウェガリ (ビルマ)] 15日後にして初めての休日。午前中に、[C.] マック牧師の礼拝 [が行われた]。1時にベソクの作った焼きめしを食べた。



オットウン

1942年10月11日

[ウェガリ (ビルマ)] やっと僕らの休日だ、[10月] 9日には休日になるはずだったのだがヤップの高官が視察に来るといので延期になり、しかし彼は現れなかった。僕は自分の蚊帳と上掛けをキャンプのすぐそばを流れるカリ [川] で洗った。夜は集会 [があった]。歌が唱われ、朗読が行われ、そして最後にウィルヘルムス [オランダ国歌] を唱った。

ウェストホフ

1942年10月16日

[タンビュザヤ (ビルマ)] 僕たちの唯一の精神的気晴らしは、神父が僕たちのホング [兵舎] に来て、話をするために椅子に座り、‘暖炉脇の話’をするときだ。様々なrk [ローマンカソリック] の分野の興味深い話が、とてもまじめに取り扱われ、説明される。こうして僕たちはカソリック信仰の内部の様子を知ることができる。聴衆は大抵大勢いて、どんな質問でもしてよく、それらは全てすぐに回答される。よく言われるのは“必要が祈りを教える”だが、このことを少し深く理解し、考えてみると初めていかにそれが自分の支えになるかということに気づく。

ディック

1942年11月3日

[ウェガリ (ビルマ)] 休日 (!) 日本の祭日だからだ。<sup>177</sup>今日は8時15分前起床ラッパ、8時にミサ、8時15分に食事をとりに行き、9時点呼、10時にマック牧師。エリコの徴税人ザーカイについての説教。その後砂糖を持って [ヨルクヘールA. E. H.] ローエルのところに行く。僕の考えていたこと：ヤンカと僕たちの4人の子供たち、それに僕自身は神に捧げられた。彼は僕たちを守り、助け、救いの手を差し伸べるだろう。[...] 夜に、[P. G.] マンテル中佐の、ジャワでの戦闘に関する興味深い講演があった。

---

<sup>177</sup> この祭日は明治節で、明治天皇の誕生日を記念するもの。(L.F.ヤンセン著、*In deze halve gevangenis. Dagboek van mr dr L.F. Jansen, Batavia/Djakarta 1942-1945.*、G. Knaap (編)。(Franeker で発行1988) XLVIII, 66)

ディック

1942年11月17日

[ウェガリ (ビルマ)] 今のところとても楽しんで読書している。デン・ドローラートの、7人のジプシーの結婚式。特に彼がスラブ人についてとても好意的に書いているので、僕は彼の本はとても価値があると思うのだ。

オットウン

1942年12月5日

[ウェガリ (ビルマ)] セントニコラス祭。そうさ、僕はまだちょっとだけ今年の、愛妻と肩寄せ合ってこの祭りを祝ったことを思い出してしまった。もうずいぶん昔のことのような気がする。今夜は集会があり、セントニコラスの歌を唱った。僕たち全員、葉巻を2本ずつもらった。

リブンス

1942年12月24日

[ウェガリ (ビルマ)] またもや1週間が過ぎ、僕たちが自由になりたいと望んでいたクリスマスの前になった。神はしかし、別の決定を下し、このクリスマスも祖国や家族と遠く離れて祝うことになる。次のクリスマスは僕たちの愛する者たちとともに祝えるように望みをかけよう。明日はもう7時(午前4時45分頃)からカソリックの聖歌のミサがあり、その後聖歌とともにプロテスタントのミサがある。どうやら豚のベーコン入りのカチャン・イジュ [小さな、緑の豆] の豆スープが出るようだ。このために、僕たちの賄い費で10頭の豚を買った。食事も特別においしいであろう、と僕たちは願っている。

リブンス

1942年12月25日

[ウェガリ (ビルマ)] このクリスマスはあらゆる面で忘れがたいクリスマスになった。荘厳な聖歌のミサはすでに午前4時から始まった。その夜は、満月に近い月がかかる、凍るように寒い夜だった。礼拝の最初から最後まで、[僕は] 裸足で立って参加していた。その後沢山の砂糖を入れた粥を食べ、そして点呼の後はマック牧師の指導するプロテスタントのミサだった。その後は夢から覚まされるようなことがあり、それはヤップが、こんな日に限って、脱走した逃亡者を

キャンプにさらし者にし、彼らが前に属していたグループのものが、人別の確認をさせられたのだ。<sup>178</sup>

オットウン

1942年12月25日

[ウェガリ (ビルマ)] 休日だった。神父が早朝ミサを行った。竹の聖壇まで出来ていた。プロテスタントのためにはマック牧師が午前中少し後に礼拝をおこなった。僕はヒールや僕の兵舎の多くの男たち同様、両方の礼拝に参加した。11時には本物のコーヒーが砂糖と共に出された。そして昼食は豚肉の入った本物のグリーンピーススープだった。グリーンピースは、カチャンイ・イジュー [小さな、緑の豆] で代用してあった。しかしそれは本当の豆スープの味がし、僕はちよつと無茶なくらい沢山食べた。

午後遅めに、音楽の公演があった。バイオリン奏者一人と何人かのギター奏者が我々のために演奏をした。よく知られた曲や歌謡曲だけでなく、クリスマスの曲もあった。[...] 夜はまた集会だった。クリスマスツリーが置かれ、竹で作った提灯が下げられてあった。とても感じがよく、祭りの雰囲気を出していた。歌が唱われ、[A. L.] グレンドゥル中尉が自分自身の詩を良く通る声で朗唱した。とても素晴らしい詩で、僕は彼にその詩をもらおうと思っている。<sup>179</sup>

オットウン

1943年1月1日

[ウェガリ (ビルマ)] 正月のため仕事は休み。今朝は‘年賀の挨拶’にヘニーやエリック<sup>180</sup>の所などを回った。昼食はまた肉入りのグリーンピーススープだった。1日はあつという間に過ぎた。夜には集会があり、トーマスファールとピーターネル<sup>181</sup>の新年の抱負を聞いた。とても良かった。

---

<sup>178</sup> ‘日本軍による抑留者たちの取り扱い’の章、1942年12月25日付けリブンスとオットウンの日記抜粋参照。

<sup>179</sup> オットウンは9節の4行連句から成るグレンドゥル中尉の詩を彼の日記に書き留めた。マック牧師はグレンドゥル中尉がクリスマスのためにクリスマス劇を書き、演出もしたと記している。(Mak 1977, 72).

<sup>180</sup> エリックはオットウンの学友で、オットウンは昔、プールウォレジョから約12キロ離れた場所にある彼の親の砂糖会社に寄宿していた。エリックはオットウンと違い、キャンプでは将校宿舎に居たため、ほとんど会うことがなかった。(NIOD, Indische dagboekencollectie, dagboek W.A.B.J.F. Otten) .

<sup>181</sup> トーマスファールとピンターネルは元々、正月に上演されるフォンデルの悲劇、*ガイスブレフト・ファン・アムステル*(1637)の後、対話形式で過ぎた年の(アムステルダム)の政治、社会状況を批評する劇中人物。

オットウン

1943年3月4日

[アナクウィン (ビルマ)] 僕たちは幸いにもそれほど遅くなく終わり、帰りにカリ [川] で一潜りできたのは気持ちがよかった。ただし、‘あそこの噛み付き屋’には気を付けないといけない。それは3, 4cmくらいの長さの小さな魚で、20匹あまりの群で泳いでいる。初めて僕たちがここで泳いだとき、この水の中で泳いでいるのは僕たちだけではないのだということに早々に、痛みをもって思い知らされ、中には血の出るまで噛まれた奴もいる。この小さな水中居住者は、ここではみんな裸で泳いでいるので、特にその性器を狙うのだ。最初に噛まれて以来、殆どの者は頭を水につけ、目を開けて泳いでおり、その魚の群が自分に向かってくるのを見るとすぐに手で性器を覆うことができるようにしている。するとちょっと残念そうな様子でその水中居住者の群は君から離れていき、その太いミミズのようにぶら下がっているものを隠すのが遅い獲物を探しに行くのだ。

ボム

1943年3月10日

[ラバウ (ビルマ)] この病気の3日間に、ヒューズレイのエンズ・アンド・ミーンズを気持ちよくたっぷり読んだ。砂を掘り返した後の精神的風呂浴びだ。

オットウン

1943年4月11日

[アナクウィン (ビルマ)] [雨は] 昨日とはまた違う、昨日は息詰まるような暑い日だったからだ。仕事から帰ったのも遅かった。しかし夜は、第8グループにとってはそれでも愉快的な夜だった。僕らのグループ長官、[H. L.] ユリエン大尉の誕生日で、夜のキャンプファイヤーでそれを祝ったのだ。誕生日の人は僕たちにコーヒーとケーキをおごった。調理人のうちの一人が、米粉でケーキを作ったのだと思う。でも味は良かった。コーヒーも、焦げた米か、あるいは焦げたトウモロコシで作ってあったのにまるで本物のコーヒーのような味がした。そしてそれは本当に愉快的なパーティーだった。

ルーヘ

1943年4月24日

[ヒンダト (タイ)] 今日は映画上映があった。マラッカを通過してシンガポールに向かうP [日本人] の進軍、シンガポール攻撃と降伏。

オットウン

1943年4月28日

[メザリ (ビルマ)] 昨夜は日本の戦争宣伝映画を見せてもらった。日本の航空隊の視点からアメリカのパールハーバーの攻撃を見た。それに日本空軍の、最新英国戦艦‘リパルス’と‘プリンス・オブ・ウェールズ’に対する、パールハーバーの2日後、シヤム湾の攻撃もだ。この時、船は爆弾を落とされたのではなく、日本の戦闘機は低空飛行で魚雷を発射し、その多くは目標に命中した。両戦艦とも戦いを生き残れなかった。英国の海軍本部はこの2隻の船が最大限の対空砲を装備しているため、空からの護衛は必要ないと判断していたのだ。自己の装備の過信と敵空軍の過小評価の結末を、僕たちは今になって日本の映像報告で見ている。

ドゥ・フラウター

1943年5月15日

[タカヌン (タイ)] まあまあよく眠り、うまい砂糖入りの粥を(沢山)食べた。1日中でも食べられている。木の幹に座って、今は日記を付けている。まだ早朝(ほぼ9時半)で、美しい朝だ。至るところで鳥が鳴き、遠くでカラスの音がする。下方ではカリ[川]が、切り立った岩のそばを流れている。スリグンティン[鳥の一種]がこのすぐそばで卵をかえしており、今朝明るくなるころには煩く叫んでいた猿たちも、幸いにして静かだ。昨夜はカリの砂州で、アンドラエナのコロニー<sup>182</sup>を見つけた。可能な限り全ての蝶たち(ダナイドゥンやパピリオドゥン、特に、P. アリストロキア)が7時近くに湿った場所に水を飲みに来る。

---

<sup>182</sup> 日記にあるドゥ・フラウター自身のメモによれば、これは地中に巣を作る野生の蜂の一種。

ドゥ・フラウター

1943年5月28日

[タカヌン (タイ)] 今朝は晴れていて、午後は雨。3回食事 [をした]。テントの中で、借りることのできたイギリスの探偵小説ザ・サーキュラー・ステアーケースをたっぶり読んだ。[これで] 少し気が紛れる。

フェイケマ

1943年5月31日

[トンチャン (タイ)] 夜に タベの祈りが点呼の後であり、いつも大体8時から8時半までかかる。昨日は小礼拝があった。時にはこの惨状が、全て神の思し召しなのだと考えるのがひどく難しい。しかし、嫌な思いを抱えて森を歩くとき、そこで緑の若芽や小さな花を見ると、やはり神はここに居るのだと我が目で見、神は至るところにおり、つまりこれも神の意志に違いないと思う。

グルドヴァッチ

1943年6月22日

[クイエ (タイ)] [僕の娘の] イルカ [の] 誕生日。シンガポールから持ってきた祭りの最後の残りで祝った。コーヒーと葉巻だ。ひどく湿っていたが、火にかざして乾かしたら何とかあった。

ボム

1943年7月8日

[アンガナン (ビルマ)] 最近よく読む。スリー・マン・イン・ア・ボートにシェイクスピアのロメオとジュリエットをつい最近、ポケットブック・エディションのファイブ・トラジディーズ。

この数ヶ月間に新約聖書も読んだ。4つの福音書以外は、数ページを除いて全部読んだ。僕が重要だと思ったのはコリント人への手紙13:5、ガラテア人、それにヤコブの手紙だけだ。それ以外は重要ではないし、時には素晴らしいナンセンスだと思った。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年7月15日

[キャンプ 120 (タイ)] ひどく長くかかる点呼の時、私はペイドン・パウウェルのスカウティング・フォー・ボーイズを読んでいる。

ボム

1943年7月19日

[アンガナン (ビルマ)] 僕はこの間にもシェイクスピアのハムレットを読んだ、この厳しい時の楽しい娯楽だ。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年7月28日

[タマルカン (タイ)] ボーイスカウト提唱者たちの集会で、‘[J.C.] ハメル牧師組’が創設された(牧師は大きな善行をした)。<sup>183</sup>

グルドヴァッチ

1943年8月1日

[クイエ (タイ)] [僕]も詩を作り始めた<sup>184</sup>、変化を付けるためにドイツ語で! 一体に、読み返してみると、何か哀調を帯びている。

Freiheit, Frau und Kinder

Seit ihr Wirklichkeit?

Oder seit ihr nur ein Traum

---

<sup>183</sup> ハメル牧師自身はこの出来事についてこう書いている。“ある日、私は驚くべき訪問者を迎えた。ボーイスカウトのリーダーたちが、シヤムで組織される、そこにいる間は一緒にいると期待されるボーイスカウトのグループに、‘ハメル組’と命名する事に依存はないかと聞きに来たのだ。私としてはそこに頭わされる考えにふさわしくあり続けようと願うしかなく、この申し出が私にとって私の選んだこの道を断固として歩み続けるための励みになると信じている。” (Hamel, 148)

<sup>184</sup> これは彼と供に捕虜であったハンス・ファン・ザイル・ドゥ・ヨング(‘ハンニバル’)が愛に関する様々な詩を書いていた影響。

Der Vergangenheit

Schwer zu leben, schwer zu sterben  
Ist' s in diesem Land  
Wo so mancher unser Freunde  
Still sein Ende fand

Heimweh, wenige nur wußten  
Was es wirklich heißt  
Das in diesen schweren Stunden  
Uns das Herz zerreißt  
Heimweh, Sehnsucht, die Gefühle  
Uns bekannt nun sind,  
Dieses schmerzende Verlangen  
Nach Freiheit, Frau und Kind.

Ach, wie lang noch dieses Martern,  
Diese Quälerei,  
Kommt denn niemals mehr ein Ende  
An die Tyrannei?

Achtzehn Monde schon dies' Leiden  
Und kein End in Sicht, ---  
Doch auch das wird einmal kommen,  
D' rum verzweifelt nicht.

Betet Gott, daß diese Stunde  
Baldigst kommen mag  
Denn zuviele Unser liegen  
Schon in fremden Grab.

[自由、妻や子供達  
君たちは現実なのか  
あるいは過去の  
夢でしかないのか



生きるのは難しく、  
死ぬことも難しい  
この、多くの友が  
すでに孤独な終わりを迎えた国では

郷愁：しかし殆どは知らなかった  
このつらい日々  
僕たちの心を引き裂くものが  
実は何を意味しているのか  
郷愁、渴望、やっと今分かった  
これが何であったのか  
この苦しいばかりに希求するものは  
自由、妻と子供達

ああ、この拷問は  
この苦悩はいつまで続く  
この暴虐に  
終わりの来る日はあるのだろうか

18ヶ月続く苦しみ  
それでも終わりは見えてこない  
しかしいつかはその日が来る  
だから僕は絶望しない

神に祈ろう  
その日が近いことを  
なぜなら我らの多くはすでに  
無名の墓に眠っているから]

フェイケマ  
1943年8月5日

[トンチャン (タイ)] [J. J.] オランニエ牧師はタルサオ収容所からここに来て、数週間いたが、その殆どの期間病気だった。彼はここで数回説教をし、点呼の場所の裏にある倒れた丸太の

上で数回タベの祈祷会をした。今日はイレーヌ [王女] の誕生日だ。私はそのために特別に髭を剃った。

ドゥ・フラウター

1943年8月5日

[カンチャナブリ (タイ)] 医者にいった後、ベルウィック<sup>185</sup>やライトと共に、鳥を探しにいった。なかなか良いフクロウを見た。[...] 今日の午後にはベルウィックの蝶の収集を見た。[...] その後マラヤン・ネイチャー・ジャーナルに載っていた、ベルウィックの書いた2種のマレーシアのハエに関する記事とヴェジー・フィッツジェラルドという人の‘セラダン’ (バンテン) [野牛] に関する記事を読んだ。さらに、タヌキモ属の食虫植物、蛇や蘭に関する幾つかの記事。

ペルクイン

1943年8月7日

[チュンカイ (タイ)] 土曜の夜で雨の降っていないときは、アマチュアグループのキャバレット [風刺を効かせたバラエティーショー] 公演をするときがある。舞台は丁度、まだ浸水していないところにある。全ての困難にもかかわらず、僕はそれを見に、聞きにいった。それに僕には気晴らしが必要だった。僕は楽しみ、一つのなぞなぞの様な冗談は大喝采だった。それはこんな具合だ。

[英語で] 水と昇る太陽の違いを知ってるかい？短い間をあけて、彼は尋ねるように僕たちを見回し、言った。“ [英語で] 誰もいないかい？それはね、水は昇り昇って、昇る太陽は下に落ちる、下に、下に。” (手で良く知られた動きをしながら)

ウェストホフ

1943年8月

[レトポウ (ビルマ)] 土曜の夜はヴィム・カンが指導する大成功のキャバレットのタベだった。実際高いレベルのもので、歌も喋りもとてもうまく、時節に合っていた。このABCキャバレット<sup>186</sup>

---

<sup>185</sup> ベルウィックはイギリス人の昆虫学者でクアラルンプールの農業庁に勤めていた。ライトについては脚注111を参照のこと。

<sup>186</sup> ヴィム・カンは妻のコリー・フォンク、ピアノ奏者のコル・ルメール、リア・ステンと共に蘭領インドを公演ツアー中だった。ドイツのオランダ侵略のため、ツアーは予定の100日より長くなった。予定してい

のヴィム・カンがずっと僕たちと一緒にいて、僕たちを楽しませてくれることを願う、それは僕たちにとっても必要なことだから。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年8月11日

[タマルカン (タイ)] テア [彼の娘] [は] 2歳11ヶ月。鯛を朝食にする。それから卵クッキー (米に卵焼きをいくらか混ぜ、油で焼いてクッキーにしたもの)。その後食事療法のタピオカ粥。それからレモンティー。午後には粥と一緒に米クッキー。コーヒーを買い、アーレン砂糖 [椰子砂糖] か、糖蜜も。夜の粥の時、また 'ケーキ'。食事療法で、半熟ゆで卵。良い天気だ。雨はない。 [僕は] 下痢。 [...]

ボーイスカウト集会 [が有った]。ヒンズーの本を読んでいる。ロウズ・オブ・メイム。また講義や講座が開かれる。

フェイケマ

1943年8月12日

[トンチャン (タイ)] 僕たちはまた、僕たちにとって、他の日よりも意味の深い日々の内の一つにたどり着いた。心の中では、いつものように僕たちは一緒にいて、そのためにこの日が他とはやはり違う日になるのだ。子供たちにはもちろん君から、今日がパパの誕生日だということを話したろう。もう家に居なくなってから二回目になるけれど。 [...] 僕の誕生日をあまり皆には言わないけれど、それでも僕はミカンの缶詰 (僕たちがバタビアでも買ったもの、しかしここではf. 1, 25する。) を、ヘルマン・ヴィルツやダ・コスタと共に、マグ一杯のコーヒーか、f. 0, 05のアッセムシロップ [柑橘味の甘い飲み物] を飲みながら食べようと、一缶買った。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年8月16日

[タマルカン (タイ)] オランダ文学講義始まる。中世から現代まで。

---

た1940年6月の帰国は不可能であった。コリー・フォンクは、最終的にはジャワに抑留され、ヴィム・カンはビルマータイ鉄道労働をした。彼はその経験と日記のメモを*Honderd dagen uit en thuis*. (Utrecht 1963) という本に著した。キャンプでは多くの詩を書き、同じ捕虜たちのために、頻繁にキャバレット公演を行った。1986年にはヴィム・カンの本、*Birmadagboek 1942-1945*が出版された。

リブンス

1943年 8月20日

[キャンプ105 (ビルマ)] 教会の面ではここは僕にとって前進だ、アングリカン教会の方式で祈りと感謝の言葉が入るから。つまり、より礼拝らしくなり、説教だけのものよりずっと僕には合っている。

オットウン

1943年 8月31日

[キャンプ108 (ビルマ)] 女王の日なので、今朝は砂糖と生姜入りの粥が出た。残念ながらオレンジの太陽は出なかった。雨は降らなかったが、食事休憩の時、小雨が降っただけだ。仕事は遅くまでかかった。夜には短い儀式があった。マンテル中佐が短い演説をし、合唱団が歌を4つ唱った。ウィルヘルムス [オランダ国歌] は無し！禁止されたのだ！

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年 8月31日

[タマルカン (タイ)] 女王の日。[ウィルヘルミナ女王] 統治45年、63歳。歌の公演など。特別食 (肉とウビ [サツマイモ]、一部腐っており、翌日は多くが下痢と胃にガスが溜まる)。夜は記念集会。大きく、くっきりとした虹 (特に [鉄道軌道の] 南東側 [に見え])、空はしばらくの間きれいなオレンジ色に染まった、ひどく象徴的。ハメル牧師受賞。<sup>187</sup>

ボム

1943年 8月31日

[アンガナン (ビルマ)] 僕が描写した状況からも分かるように、<sup>188</sup>語るようなことはもうあまりない。僕の状態がよいときーひどく沢山はないがーには、まだシェイクスピアを楽しんでい

---

<sup>187</sup> この機会に、ハメル牧師は‘タマルカンメダル’を受け取った。ギルダーコインから女王の顔を切り出し、その上に25セント玉から切り出した王冠をのせ、麻製の赤ー白ー青のリボンに留めたもの。この贈り物は数千の戦争捕虜に代って感謝の気持ちを表したもの。(Hamel, 149)

<sup>188</sup> ‘健康と医療状態’の章、ボムの日記1943年8月31日からの抜粋参照。

る！前述の本 [ポケットブック・エディション、ファイブ・トラジディーズ] の、全ての5つの悲劇を読んでしまい、また読み返している。ハムレットが際立って素晴らしい、秀逸な文章を最も多く含んでいる。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年9月7日

[タマルカン (タイ)] 今日、私の似顔絵を二枚 (斜め横からと、正面から)、テアの3歳の誕生日のために、ルー v. d. ベルフ・ジュニアに描かせたが、よく似ているかどうかは分からない。意見が分かれている。0,75チカル [かかった]。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年9月11日

[タマルカン (タイ)] テア [は今日] 3歳。天気は優れず。[僕は] 下痢。ヨハネの福音書を読み始めた。今日は展覧会 (スケッチ)、ベッドに寝ている病人のために、兵舎の中を運んだ。フォンデルのルシファーに関する講演 [が有った]。

ドゥ・フラウター

1943年9月18日

[カンチャナブリ (タイ)] その後エクササイズ [体操] でそれから読書、それに私の [鳥の] メモに手を入れた。今日の午後食事 ('フライドライス') の後、2時半に [D.] テーケマ大尉のカトリシズムに関する講座に参加した。これは当分の間1週間2回だ。[W. W.] ロスと [A. H.] フェルカウルも参加している。

ボム

1943年9月23日

[アンガナン (ビルマ)] 結婚5年！去年は少なくとも君にいくらかの花を贈らせることができたが、今年は今日僕の病床に花 (野の花!) を飾ることで満足しよう。その上、訪問客のためのケーキがある！細かく砕いた米とイースト (ビタミン摂取のため自分たちで作っている)、現地

のブラウンシュガー（無くなりかけている）と、マーマレードのようにしたジェルック・バリ [グレープフルーツ] の皮でできている。つまり、僕は僕たちの結婚記念日を最大限に祝っている。

ドゥ・フラウター

1943年9月27日

[カンチャナブリ (タイ)] もし全て順調にいけば、今度の金曜の夜、僕は赤痢病棟で、‘昆虫によって媒介される人間の病気’についての小講義をする。それから同じ講義を翌週に‘コンヴァレセンス病棟’ [回復兵舎] でできるように望んでいる。

ディッケ

1943年9月29日

[キャンプ 55 (ビルマ)] E. ゴラの (翻訳) 大地第一部 (270頁) を読み終わった。ドストエフスキの白痴 (850頁) を読んでいる。

フェイケマ

1943年10月3日

[カンチャナブリ (タイ)] ちょっと中休み [書いていた途中で]、礼拝があったからだ。もうすぐ5時にはこの隣の兵舎で [礼拝がある]。これらの礼拝は僕の隣に寝ているハルケマが指導する、とても良くやっている。牧師はここには居ない。ハメル牧師はこのすぐ近くの別のキャンプにおり、[V. E.] スハーフェル牧師はチャンギに留まっている。このキャンプもいろいろ動き始めている。毎日曜の夜には外で‘シンガーサンク’がある。自分たちで唱ったり、歌手の公演があったりするのだ。さらに、それぞれの兵舎の中で夜間に多くの講演会が行われる。例えばこの小屋では‘爆薬の歴史’について、チャーチルについて、さらにある大尉が先の戦争でドイツ軍の戦争捕虜であった経験について聞いた。(それもまた大変なことだった！)。

ドゥ・フラウター

1943年10月11日

[カンチャナブリ (タイ)] 昨夜ローラー<sup>189</sup>を2メートルの距離で観察した。その後何人かの男たちと話し、蚊帳の中で10時まであらゆる歌を寝ながら唱い、この全ては‘確認’<sup>190</sup>のためだ。気持ちは高揚し、新たな勇気と新たな期待に満ちている。

ドゥ・フラウター

1943年10月30日

[カンチャナブリ (タイ)] ハイネの他にもロシタ・フォーブス (クエリド出版) のライスニ、山のスルタンを読んでいる。

ドゥ・フラウター

1943年11月3日

[カンチャナブリ (タイ)] 今日の午後3時に小教会の中で何人かの男たちと集会を開いた。フェルカウルは‘ドゥ・ホーフ・フェーリュヴ’ [オランダの森林公園] に関する講演をした。ホームシックになりそうだ!

ドゥ・フラウター

1943年11月6日

[カンチャナブリ (タイ)] 今、僕たちの小クラブで‘昆虫学研究’についての講演をしてきたところだ。僕たちは今では‘恢復病棟’のそばの大きな木の下で座ってやる。

---

<sup>189</sup> ドゥ・フラウター自身のメモによれば、コラキオス・ベンガレンシス *Coracias benghalensis* という鳥。

<sup>190</sup> 戦況が連合軍にとって優勢であるという噂の確認。

ドゥ・フラウター

1943年11月7日

[カンチャナブリ (タイ)] 今朝12時に教会に行ってきた。[G.] アウターヴァイク (セマラン [出身]) が礼拝を指導している。また満足感と安心感を与えるものだ。

ドゥ・フラウター

1943年11月11日

[カンチャナブリ (タイ)] 今日の午後、例の小クラブでまた僕の白ジラミ研究についての講演をした。<sup>191</sup>

フェイケマ

1943年11月14日

[カンチャナブリ (タイ)] このキャンプではこんなにも果てしなく退屈なために、[愛する者たちの喪失感を] 倍にも感じてしまう。これまで全ての移動のため、本は殆ど残っていない。何かすることもここにはない。キャンプ全体に建物が建っているため、ちょっと散歩するだけの場所もない。最近までは夜に講演会があったが、それもI. J. A. [日本帝国軍隊] によって禁止されてしまい、まだ残っている気晴らしと云ったら、教会の礼拝にも使うオルガンとバンジョーとJ [日本人] も今は使っている (そのため僕らはもう使えない) バイオリンと、さらに何人かの歌手で構成されるバンドだけだ。他には際限もなく ‘これは誰または何?’<sup>192</sup>あるいはイギリス人が呼ぶように ‘クイズ’ をする。兵舎対抗で、イギリス人対オーストラリア人、オランダ人対イギリス人、といった具合だ。

---

<sup>191</sup> ドゥ・フラウターは当時、東ジャワのコーヒー栽培の病害であったカタカイガラムシについての研究をしていた。

<sup>192</sup> ‘これは誰または何?’ は戦前人気のあった蘭領東インドラジオ放送 (Nirom) のクイズ番組。(H.A.M. Liesker 他、; 2603 -1945, *Jongens in de mannenkampen te Tjimahi; Baros 5 en 4<sup>e</sup> / 9<sup>e</sup> Bat.*, (Ridderkerk 1993) 360).



ドゥ・フラウター

1943年11月20日

[カンチャナブリ (タイ)] 今日の午後3時にロスが砂糖精製についての面白い講演をしてくれた。細君が今日誕生日だというフェルカウルは、始まりに‘小ケーキ’ (餡入りのジンジャーケーキの上にイチゴジャムと餡の乗ったもの) をふるまい、とてもうまかった。スピッツは水曜日にシオニズムについての話をしようとしている。

ディッケ

1943年11月22日

[キャンプ 55 (ビルマ)] 夜にヴィム・カン、ワカノ、ヘウスドゥン、ベネコム、ライアル、コレリ、それに何人かのオーストラリア人歌手とクラリネット奏者のPOW芸能人の公演があった。

リブンス

1943年11月23日

[キャンプ 133 (タイ)] 僕は僕たちのこれまでの戦争捕虜期間中、不思議なものに導かれていたと感じていて、そのために現在も完全に健康に感じている。将来どの様なひどいことが起きるかは分からないが、しかし神は彼を信じるもののそばにいつもいるのだ。だから僕は将来に大きな信頼を持って、僕たちの解放と最終的にはオランダにいる家族との再会を固く信じて将来に向かおうとしている。

ドゥ・フラウター

1943年11月28日

[チュンカイ (タイ)] 今朝、[私は] [クン] ファン・ザイルと一緒にV. d. フルフトが説教をする教会に行ってきた。その後鳥を何羽か見、その後は朝も午後もテンパット [寝場所] で喋って過ごし、大いに喋り、それで考えたことは我々がまた自由になったら愛する者たちと一緒にいたいということだ。

ドゥ・フラウター

1943年12月12日

[チュンカイ (タイ)] 今朝真っ暗な内にまた朝食を取り、その後僕の任務である部屋の警備をし、それからファン・ザイルとウェスターマンと共に教会に行ってきた。昨夜はイギリス人のコメディー歌劇を少し聴いていた。

ドゥ・フラウター

1943年12月24日

[チュンカイ (タイ)] 私たちの兵舎は明日のクリスマスを記念して全体美しく緑色で飾られた。2つの兵舎の間では今イギリスの合唱隊がクリスマスソングを数部合唱している。とても美しいが、私は聞いていてひどく悲しくなってしまう。

オットウン

1943年12月25日

[キャンプ 112 (ビルマ)] [クリスマス第1日目] つつましいクリスマスだった。もう何回目かも分からないが、また来年のクリスマスには自由になっているか??と自問してしまう。タバコを少しとクッキーを一つもらった。

グルドヴァッチ

1943年12月25日

[ノンプラドック (タイ)] [クリスマス第1日目] 今日がクリスマスだということに、今やっと気が付いた。

ボム

1943年12月26日

[アンガナン (ビルマ)] 「クリスマス第2日目」自分で何かを書こうとするのはずいぶん久しぶりだ。幸いその理由は悲しいものではない。僕が様々な他のことに、大抵は [J.] ブールと一

緒に、関わっているからその暇がないのだ。しばらく前から1週間に2回‘それは誰または何?’をやっている。それに必要な質問を集めるのは時間がかかる。それに僕たちはシントニコラス祭のタベの開催に関わり、この数日はクリスマスの祝いだ。祭りの設定は祭りそのものよりも楽しいし、多くの時間をかけられるのは大きな意義がある。この状況の中ではどんな活動でも有意義だ。

ドゥ・フラウター

1943年12月31日

[チュンカイ (タイ)] 昨夜は白雪姫と7人の小人のパロディーを演じたキャバレット (イギリス人) に行った。とても上手で気が利いていた。

リブンス

1944年1月1日

[キャンプ 130 (タイ)] 1943年はそれでも終わった。祝いはしなかった、そのような状況ではなかった。明日は休みではなく、12時に消せばよいと言われていた灯りは、すでに11時に酔っぱらったヤップたちによって消さなければならなくなった。食事さえ、この様な日にはいつもなら良いものが出るのに、普通の乾燥肉の肉サンバル少しに豆が2、3粒はいったラブスープ [カボチャスープ] だった。これが特別の日だと僕たちが感じられた唯一のものは幹部たちによって配られたパンケーキとマグ1杯の、砂糖入り本物のコーヒーだけだった。

ドゥ・フラウター

1944年1月1日

[チュンカイ (タイ)] 今朝8時にまた起床ラッパ。朝食は米とマーマレード、それに細かく刻んだ卵の乗った、一種のケーキだ。朝食の後先ずイングランド対スコットランドのサッカー (4-0) マッチを見、その後‘タイのアスコットレース’を観劇した。‘キャンブレディー’がまた居た。<sup>193</sup>緊張感のある楽しい見物だった。その後食事。[...] とてもおいしかった。今日の午後にはまたクリスマスキャロルの再上演があった。ライトはまた出演していた。

---

<sup>193</sup> これは女装の出し物。

ルーヘ

1944年1月1日

[ヒンダト (タイ)] 今日の午後サッカー試合があった。オランダ対イギリス：3-2。とてもいいプレーだった。

ドゥ・フラウター

1944年1月16日

[チュンカイ (タイ)] 昨日のキャバレットはそれでも良かった。特に‘彼女’はまた独特の出来だ。‘彼女’が実は‘彼’なのだと実感するのが特に難しかった。

ドゥ・フラウター

1944年1月17日

[チュンカイ (タイ)] 点呼の時、次の木曜日に水泳大会があると発表された。現在オランダ対イギリスのチェス大会も行われている。成績は今14-3。水泳、テニス、バスケットボールのレッスンを受けることもできる。

ドゥ・フラウター

1944年1月29日

[チュンカイ (タイ)] 今日は土曜日なので、今夜はまたキャバレットがある。

グルドヴァッチ

[おそらく1944年2月]

[ノンプラドック (タイ)] ここNP [ノンプラドック] には2人の有名同国人が居る。ヘニー・クエンテメイヤー、ボクシングのヨーロッパチャンピオン！（力を少しでも保つため、炊事場からは特別食が出ている）と…ヴィム・カン！！彼には、有るかもしれない自由な夜の、我々全員の期待がかけられている。（‘自由’というのは、ヤップから何かをして良いという許可が出ること）しかし期待は裏切られることが多い。何かできると思っている人たちは皆、講演をしたり

する。(特記：ベルライン医師が旅行談を語ったり、最高だ!)しかし、ヴィム・ザ・グレート様はそうじゃない!(‘充分な準備ができない’から、また‘大したこともないものを見せるのは自分で許せない’から。カレだからね!)最終的には2回、何かした。舞台公演を始めたころの話。フィンチェ・ドゥ・ラ・マール<sup>194</sup>の仮装(ひどく魅惑的!)をしての歌の夕べ。2回とも見事な公演でとても楽しめた。しかし、1年に2回は多いとはとても言えない…。

グルドヴァッチ

[おそらく1944年2月]

[ノンプラドック(タイ)]外部作業の時、いつも絵のように美しい、フランス語を喋る一人のタイ娘が僕たちの周りにいる(フランス人との混血?)。僕たちは彼女をイヴォンヌと呼び、彼女を見ると完全に浮かれてしまう。彼女の‘信じがたい’美貌はキャンプに帰って微に入り細に渡って表現される!<sup>195</sup>ある日、僕たちは炊事場の食事の列に並んでいた。その中にはナイエンス神父が、目立たぬチャワット[腰布]を身につけて混じっていた。(彼は僕たちと一緒に食べる、彼の公式なガジ[報酬]は病人のために使われるからだ。)その時、今帰ってきたばかりの外部作業員が、見てきたばかりの彼女の美貌をジェスチャーを交えて劇的に表現し出した。突然神父に気が付き、ひどく恥じ入って、小さな声で“申し訳ない…”と言うと、ナイエンス曰く“気にせずに、もっと続けて、私ももう2年間女気無しさ。”[…]

ナイエンス牧師はこのキャンプに1冊しかない、ローマンカトリックの聖書(ヒムルライヒ出版、聖書を出版するならこんな名前だろうさ!)を持っている。ある病人がそれを借りたがった。ナイエンスは断った。病人は怒った。ナイエンスは自分のそばで読んでもよいが、持って行くのはだめだといった。彼は、意図は見抜いている、といった。タバコを巻くのに丁度よいきれいな薄い漉き紙だ。病人は深く感情を害した、そんなこと考えたこともない。おや、ないかい?ナイエンスは彼の同僚、V. d. ヘースト宣教師に、彼が彼の祈祷書をどうしたか、一度話してくれないかと頼んだ。しばらくぶつぶつ抵抗した後、V. d. ヘーストは認めた。“わかったよ、そりゃあ僕は古いユダヤ部分は煙にして喫ってしまったけれど、新約部分には触らなかったんだから。”

<sup>194</sup> フィン・ドゥ・ラ・マール(1898-1965)はオランダの有名な女優であり、キャバレット演者であり、オペレッタ歌手であった。アムステルダム・ドゥ・ラ・マール劇場創立者。

<sup>195</sup> この1節に関して、グルドヴァッチはその後バンコックで、イヴォンヌが日本軍からスパイ容疑で銃殺されたという噂を聞いた、と日記に書き添えている。

ボム

1944年2月1日

[カンチャナブリ (タイ)] この数日の間に本を一冊手に入れることに成功した。幽霊物語集 *ザ・ゴーストブック*。面白い物語らしいし、これで [\*…\*] と交換する本ができる。この一月の間に *デン・ドールルト* のものを幾つか読んだ。一大野生化。僕の知っている *ブドウ摘み達* や、*蹄鉄のある宿* に比べると見劣りする。だがしかし。オランダ語を読めて満足だ。それから小さなアメリカの本で *リチャード・シェーマンの ツー・マリー・ウィズ・ラブ* を読んだ。これは君も是非一度読むべきだ。繊細なジョークに溢れていて、全く思いがけない結末、いい本だ。それから、*ブティト・イラストシオン*、*アンリ・マルシャン* の劇作 *ラ・ヴィ・エ・シ・クールト*。差し挟まれている評論によればいい本、ここでこの本を読んだ私たちの評価ではメロドラマ。しかしこれも、何年前かも忘れるくらい久しぶりにフランス語を読むのは嬉しいことだ。最後に今は *アクセル・ムンテのザ・ストーリー・オブ・サン・ミッシェル* を読んでいる。すごく面白い。この後もイギリスの詩集、‘*シェイクスピアから1940年まで*’の詞華集と、ブルクハルト [独] の歴史に関する論文集がある。ごらんの通り、ここでもまだ、読みたい人には色々な言語のものが手に入る！

ドゥ・フラウター

1944年2月10日

[チュンカイ (タイ)] 火曜夜、11人の他のライデン卒業生とライデン大学の *ディース・ナタリス* [創立記念] を、コーヒー2杯と *PRI* [食堂] からそれぞれ二つの‘特別なもの’を楽しみながら華々しく (!) 祝った。費用は頭割りで徴収された (15セント)。[…] 火曜の夜は1番の先輩 (20年度組) として議長を務め、開会のスピーチをした！

ドゥ・フラウター

1944年2月14日

[チュンカイ (タイ)] 土曜日は初めてのオランダ・キャバレットの公演があり、大成功だった。

ドゥ・フラウター

1944年2月20日

[チュンカイ (タイ)] 今朝は多くの人たちから祝福された [彼の誕生日なので]。全員が、来年は家で祝えるように願ってくれた。今朝は教会に行ってきた、よい説教だった。午後の食事はおいしかった (焼き魚!) その後、フェルカウルにまた本を読んでやった。僕たちは赤い嵐中の私の結婚を読み終えた。

ボム

1944年2月26日

[カンチャナブリ (タイ)] 先回挙げたほかに、ソーントン・ワイルダーのザ・ブリッジ・オブ・サン・ルイズ・レイを読んだ。ちょっと期待はずれだ。さらにギ・ド・モーパッサン (おそらくはアクセル・ムンテが彼のことを書いていた時期の) 短編集も読んだ。これらの本を手に入れるためには僕の幽霊歴史集が [交換の対象として] 大きな役割を果たした。自分ではまだその本は読んでいなかった! 昨日、第2の本を買った。ヤン・デン・ハルトグのオランダの栄光。僕は前に読んだことがあるが、物々交換のために買った。僕たち5人 ([J.] ブール、ウェルシング、プールマン、そして僕) で、現在4冊の本を持っている。

リブンス

1944年3月5日

[タマルカン (タイ)] 今のところ、このキャンプでは拡張のための新しい兵舎建設で忙しく、そこで素晴らしい小教会を手に入れて、すでにもう牧師や神父が熱心に使用している。特に今、受難週の間は。礼拝を屋外でしなくてもよくなって、大きな改善だ。

ドゥ・フラウター

1944年3月20日

[チュンカイ (タイ)] 土曜日のオランダ・キャバレットの夕べは特別に大成功の夜だった。始まりと終わりの場面は完璧だったし、それ以外の運びも勢いがあった。[J.] ポストマが立て役者だった。[Ph.] ブルフマンとステーンハウズンのダンスは素晴らしかった。全体的に成功だ。イギリス人も、そして日本人でさえ賞賛していた。

ボム

1944年 3月29日

[カンチャナブリ (タイ)] 僕はまだ時間を有益に過ごすことに成功している。僕はこのキャンプの財務委員会に入っていて、結構時間をとられる。さらに、僕はラテン語を習っている。もう長いこと、僕はラテン語もギリシャ語も知らないことが残念だったのだ。それからシェイクスピアのミドサマー・ナイツ・ドリーム、テンペスト、マーチャント・オブ・ベニス、ルイ・ブロムフィールドのザ・グリーン・ベイ [?] それにデン・ドローラートのオリエント急行を読んだ。この最後の本は一大野生化よりもましたが、それでもあまり感心しない。僕の幽霊歴史本はロード・チェアウッドのアブラハム・リンカーンの伝記と交換した。この本はまだ読んでいない。

オットウン

1944年 4月 3日

[タマルカン (タイ)] 夜に‘キャバレットグループ’の公演があった。今度はオランダのグループだった。とてもうまかった。‘司会者’以外は。なんて駄目な奴だ。彼が自分自身の演目が出てきた時には追い出しの口笛が鳴り響いた。

ドゥ・フラウター

1944年 4月25日

[チュンカイ (タイ)] 僕は今夜‘回復期のアメーバ性病棟’で講演をする。明日は‘ビタミン欠乏症病棟’で。木曜日には赤痢病棟で。金曜日はまた潰瘍病棟で、全て依頼されての上だ。<sup>196</sup> これで金が支払われればいいのだが。

ウェストホフ

1944年 7月 4日

[ナコムパトン (タイ)] 朝起きて、1日中何もすることが無く、夜になっても疲れていなかったら (だからとてもとても遅くなってやっと眠りにつく)、退屈しても不思議ではない。僕は幸

---

<sup>196</sup> ドゥ・フラウターはコーヒー、ゴム、タバコ栽培に関する講演の準備をしており、‘厚生部’の要請で病人用兵舎でも講演していた。4月25日の講演は‘ジャワの毒蛇’についてであった。(NIOD, Indische dagboekencollectie, dagboek H.J. de Fluiter)



いにもひどく古い、汚いランプを持っていて、これで1日の何時間かを何とか過ごす。読むものはない。本は何冊かあるのだが、それは一種の図書館のようなものの中にある。本をそこに提供した人だけが、他の本もみな読むことができる。残念ながら僕は1冊も持っていないので、誰か本を長く手元に置いておく人の好意にすぎるだけだ。

ドゥ・フラウター

1944年7月24日

[チュンカイ (タイ)] オランダ・キャバレット ‘笑いから笑いまで’ は金曜と土曜にも大成功で、それには素晴らしい舞台装置も貢献している。<sup>197</sup>

ボム

1944年8月31日

[タマルカン (タイ)] 僕はこの間にも全ラテン語文法を終え、フェルギリウスに入った。今月はあまり本を読まなかった。ブロムフィールドのナイツ・イン・ボンベイや24アワーズなどだ。両方ともあまり重要ではない。デュランのソクラテスからベルグソンまで、アメリカ的で面白い。それからウェルのヒストリー・オブ・マンカインド、くだらない。ラッセルのワン・ノーリッジ・オブ・ザ・エクスターナル・ワールド、これについては評価をまとめることができない。

ドゥ・フラウター

1944年12月19日

[チュンカイ (タイ)] ショウは今は月曜と火曜の夜だ。昨夜はレオ・ブリット<sup>198</sup>の率いる ‘ヘイフィーバー’ の講演があった。私は第一演目の最後まで居たが、寒過ぎてそれでやめた。機知に富んだものではあった。

---

<sup>197</sup> オランダ・キャバレットグループの原動力はキャンプの調理人、ヨープ・ポストマだった。彼がシナリオを書き、自分も出演した。インドネシアの若者ハン・サマティニが音楽伴奏を受け持った。楽器は大多数が鉄道資材から自分たちで作ったものだった。舞台装置やポスターはイラスト画家のハウブ・ファン・ラールが作った。(Leffelaar/Van Witsen, 238-257)

<sup>198</sup> レオ・ブリットはプロの演出家で、レビュー劇団を率い、自分のグループでミュージカルやオペレッタ公演をした。(Leffelaar/Van Witsen, 253)

ドゥ・フラウター

1945年1月14日

[チュンカイ (タイ)] 礼拝は休みの日だけ [許される]、つまり月曜日だ。夕べの祈りとロザリオの祈りは週日の夜も続けて良い。

ドゥ・フラウター

1945年2月27日

[チュンカイ (タイ)] 昨夜はバラエティーの夕べだった ('エディーのショー')<sup>199</sup>照明は減茶苦茶、歌と音楽の出し物は 'クレージー・ギャング' 状態だった。一番面白かったのは唯一の日本の歌が演奏されていた時、酔っぱらったヤップが舞台によじ登り、日本の歌と、ハワイアンソングとシューベルトのスタンシエンを聞かせたときだ！そのために私たちのプログラムを全部は終われなかった。

ドゥ・フラウター

1945年4月17日

[チュンカイ (タイ)] 'チュンカイ劇場' 終了。命令により壊され、全て燃やされた。<sup>200</sup>

ドゥ・フラウター

1945年5月11日

[チュンカイ (タイ)] 読書した。陰謀家、1765年頃のフランス歴史小説 (マリー・アントワネットの真珠のネックレス [の話]！) ハーフナール著の高等学校用物理の本に目を通してている。

---

<sup>199</sup> ドゥ・フラウターがここで言っているのはオーストラリア人、エディー・エドウィンズの 'ロードショー' で、短い演目を集めた公演をし (寸劇、歌、ダンス)、司会者として出演していた。(Leffelaar/Van Witsen, 253)

<sup>200</sup> キャバレットグループ '笑いから笑いへ' の一員であったフィリップス・ブルフマンによれば、連合軍の攻撃によって日本軍が惨敗したことを理由に、憲兵隊が全ての公演を禁止し、チュンカイ劇場を燃やさせた。(Leffelaar/Van Witsen, 253-257)

ボム

1945年 5月16日

[カンチャナブリ (タイ)] 今夜はクラシック音楽のコンサートがあった。ここには15人から20人から成るオーケストラがあるが、通常は演奏を許されない。今回は大丈夫。ピエール・ギョント、シューベルトのウンフォエンデット、プルセル、ファウスト、トレアドール、シューマンのメヌエット。全ての楽譜は一人のイギリス人将校が暗記していたものを写した。最近僕は本を沢山読んでいる。

## 「戦後の生活」の思案／抑留者の精神状態

オットウン

1942年12月22日

[ウェガリ (ビルマ)] 僕は27歳になった。思いの中で君から誕生日の祝福キスを受ける、最愛の君。来年の僕の誕生日は又一緒に祝えるだろうか？

オットウン

1942年12月31日

[ウェガリ (ビルマ)] これは僕達と一緒に居られなくなって早くも2回目の大晦日だね、君。去年僕達はこの祝宴を既に離れて祝った：僕はセラランジャヤで、君は僕から400キロメートル余りも離れたコタラジャ<sup>178</sup>で。

オットウン

1943年1月6日

[ウェガリ (ビルマ)] 僕は目下、既に数日そうしているのだが、ゆっくり仕事に向かって歩き、全労働者群団を通り過ぎさせる。とある瞬間、僕が全く1人で風景の中を歩いているみたいになる。木や灌木の殆どの葉が乾燥により黄色や茶色に枯れ、其処へ加わって更に寒い朝で、僕はまるでオランダの秋の森を歩いている様だ。未だ夢想覚めやらぬ間に僕は仕事に到着し、其処で直ちに仕事仲間により現実に戻されてしまう。‘ボロン’を片付けなければならない。

ペルクイン

1943年2月2日

[リンティン (タイ)] 僕は自問する：人は死ぬ前にどれだけ耐えられるのだろうか？強ければやり遂げて行き、そうでなければ死んでしまう。あー、最愛の君、君の夫は愛が欲しくてたまらない。分るかいミン、僕等がタイに居るこの短期間に、既に数人の連中が衰弱で死んでしまったん

---

<sup>178</sup> 前書きビルマ - タイ、29参照。

だ、悲惨さによる死、或いはふと死んでしまう、其れは彼等がこの絶望的な状況にもはや生きていけないからなんだ。あー神様、何時になったらこの悲惨な時期の終わりが来るのですか？何時になったら僕は再び君と一緒に幸せに先を生きていくのだろうか？何時、愛しい君、何時？そうだ、君がある時僕のことを心配していた事を思い出す。僕は其れを笑った、僕はその時健康で丈夫だった。でも愛する君、もし君が今心配して僕の事を世話してくれようというなら、僕は甘んじて受けたらう。僕は今ならもう笑わない、僕は保護が必要なんだ；この忌まわしい場所に取り残された様な気がする。君の声が聞きたい、そして君の華麗な目を見て其処に愛を読み取りたい。それがほんの瞬く間であっても、僕は其れで再び立ち向かうことが出来る。この日記を通して既にこんなに何度も君と‘話し’が出来るとは嬉しいよ。其れは役立っていて、僕に持ち堪える力をくれる。君が後になってこの日記を読む事がある時は、如何なる状況のもとで僕達がここに生き延び様と試みているかを、君は恐らく認識する事が出来るだろう。

ボム

1943年2月25日

[フラパウク (ビルマ)] やっと僕は再び何か紙の上を書くことが出来る。過日の2日間の休日 - [2月] 15日以外に11日も休日 (日本帝国の建国記念日) - 僕はこの金曜に唯一色々な他の仕事をする為、書く事が出来なかったが、又同時に書く事は何も無かった。この生活は極度に単調で不愉快だ。毎日が同じだ：1日中砂を掘る。毎日の喧嘩だけが違っている、とは言えそれは一般の退屈さから生じるので、実際は同じだ。仕事後 - 我々は目下45分かかって行き、そして戻る - 入浴 (我々は1個の石鹸を貰う!)、管理その他、そして一日は終わる。後1時間ばかり暗闇の中で世間話をして日付は1日移動する。僕の全戦争捕虜期で初めてこの生活は僕には余りにも苛酷と感じる。目下僕はもはや毎日1日中作動している機械以外の何者でもない。これが余りに長く続かない事を願っている。[...] 毎日僕は君の事を思う、とりわけ昼食時に君も同じだけ良い食事が得られている事を毎日繰り返して願っている！

ペルクイン

1943年2月25日

[リンティン (タイ)] 1日に4人の死者。25日間で18人死んだ。僕は未だ長い事良くならず、僕の便が又水の様薄い。ここから生還するには、実際1日中ベッドに留まっているのが良い。僕はこの忌々しい食事と強制労働からこの先衰えていくつもりは無い。万一の場合はこの忌々しい戦争が終わるまで僕は病欠し続ける。もはや働かないし、其れを恥ずかしいとも思わな

い。家に帰らなければ、再びヘルミンの下へ、残骸としてでなく健康で。もう充分だし、何も気にしない。僕はこれらの忌々しい日本軍によって殺されないぞ！

ペルクイン

1943年3月1日

[リンティン (タイ)] 僕は学校のノートを見つける事が出来た。32ページあって、僕がこのノートを全部書き切る前に戦争が終わる事を願っている。念の為小さい字で僕の日記を続けて行こう。

ペルクイン

1943年4月7日

[リンティン (タイ)] 最愛の君、僕が今書いているこれらの文章は僕の君に対する最も深い愛しい願いと気持ちだ。愛する君、思いの中で君の誕生日を心からの沢山のキスで祝い、満足な素晴らしい健康を祈っているよ。最高の状況の下に早く再会することをお互い願おうね。とても楽しい19回目の誕生日であることを僕は君に祈っているよ。

午後遅く：僕がバンポン [回復キャンプ] への輸送に考慮されている事を知らされた。抜群、その喜ばしいニュースが丁度この日に齎されるなんて。其れはまさに君が取り計らってくれたみたいだね。有難う、愛する君。

フェイケマ

1943年5月11日

[カンチャナブリー (タイ)] 後1週間ほどしたら僕は君に一度広範にそしてゆっくり書こう。時には余分に遠くタイの原始林にいる捕虜になった君の夫を思い出してくれ。君の夫とパパから凄く沢山のキスを。君のマーチュ。

リブンス

1943年5月13日

[メザリ (ビルマ)] この強制労働を、以前そうだった様には、もう余りに掛けなくなる事で、実際かなり鈍感になってしまった事に時々はっと気が付く。文明が余りに遠く、切り捨てられたみたいで、其れが未だ存在していると考える事すら実に難しい；再びその一部に属する事などなおさらだ。

ドゥ フラウター

1943年5月16日

[ターマカン (タイ)] 全て家の方はどうなっているかな？あー、僕は非常に最愛の子供達のことを思い凄く恋しい。戦争が終わって我々が互いに又再会できる事を。何と全てが又快適な事だろう。

フェイケマ

1943年5月18日

[カンチャナブリー (タイ)] この汚さに居ると、時として非常に文明に対する願望を持つ事がある。適切な椅子 - 宿泊設備と入浴設備。ここタイの国内から全てが余りにも遠く感じる。しかしいつか最後は来るに違いない、そうじゃないかピット？そして僕は神様に嘆願する、我々が戦争の無い何処かの自宅で再び皆一緒に居られる事を、何時か又我々に戻して下さる様に。結局これはとんでもない夢であるとしても、其れを可能な限り上手く乗り切る様に、僕の出来得る限りの最善を尽くそう。[...] そして今君達の何か僕が僕の耳に届けば良いのだが。現在既に11ヶ月前の事になり、其れは非常に長い。しかし未だどの位更に長くなるのだろうか？君は未だ僕の事をとて愛し続けてくれているだろうね、ピット、そして子供達と一緒に僕の事を一杯話しているだろうか？それが彼女達に恐らく後1～2年したら再び帰宅するパパが未だいる事を忘れさせないことになるから。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年5月20日

[カンチャナブリー (タイ)] 再び持ち直し始め、又先へ生きる元気 [を得る]、とは言え日に7～8人死亡するキャンプでここから最悪の奴隷状態に向かって行く事を我々は分っている。戦後は再び君達を充分養って行きたいから、我々はここをやりぬかなければならない。其れが我々を支えている。

ドゥ フラウター

1943年5月22日

[タカヌン (タイ)] 目下我々のテントに再びマラリア - 発熱した者が居る。こんな風に続行して行く。全て元気付けるものは少ないが、我々は勇気を失わずそして希望が生きさせてくれる。再び家に居られたらどんなに快適だろう。僕はその事ばかり考え、楽しい思い出で先を生きる。

ペルクイン

1943年5月24日

[チュンカイ (タイ)] ミンチュ、僕の最愛の妻、この落ち込みをから回復するのをたすけておくれ。お願いだ、愛する君、僕に拳を握る新たな力を与えてくれ。決して、決して君は僕が如何に苦しんできたかを何時か気付くなどという事は出来ないだろう。この苦悩は身体的な事だけではなく、大きな精神面も占めている。考え込むこと、逃げ場が無い、無力さ：全てひっくるめてこれは拷問だ。僕はこの手紙を希望は捨てないという思いで締めくくる。さよなら、愛する君、君を僕の胸でしっかり抱きしめて何度も、何度もキスを。君の夫。

ボム

1943年6月4日

[アンガナン (ビルマ)] 僕の婚約指輪に刻まれている：1933年6月4日 (!! ) 10年前だ。其れ以来君は僕にどれほど幸せをくれただろう。今も尚それは君を思う僕の気持ちの中で絶えず刺激剤となっていて、そしてそれは我々が未だ一緒に待っている素晴らしい将来なのだ。君の現在の生活状態が君にも今日この機会に何とか僕の事を思い出させてくれることを強く願う。さよなら、さよなら、愛する妻。



グルドヴァッチ

1943年6月10日

[クウェ(タイ)]ミル[シュミット]はとても陰気で、諦めきった話をしている。その様なのはもっと居る。ところで彼は音楽に興味を持ち、僕は彼の為にジブシーの歌を歌わされる。悲しいもの程好みらしい。可哀想な奴。

フェイケマ

1943年7月5日

[トンチャン(タイ)]我々がここを出て行くだろうと言う執拗な噂が絶えず出ている。もし我々が鉄道に沿って更に先の山に入るとなると、益々悪化して食糧供給は更に難しくなるというものだ。他の方面のほうが増しだろう。目下更にもっと英領インドとアンナムのクーリー達が奥地へ行く、我々全員は凄く祈っているが、でも悲惨な目に遭わずに済むという事はまず無いであろう。外の世界は良好で何とか終結に向かって進んでいることだろうが、僕達がいつか再会する前には、もし何時か其処まで行けばの話だが、僕には未だとても長い受難の道が見える。僕の分別から言わせれば：勿論其れは来る。僕は元気だし実際これを上手に切り抜ける、そしてある時最後がやって来る。しかしながら僕が確かに再び自由で、良い身なりで満足のいく食事を取り、文明化した周りを歩き回って、それから君に再会する、なんて全てが余りにも非現実的な感じがする。僕には子供達も必要だが、君はまさにもっと、もっと！あー、再び一緒に居られてもはや一人でないとなればどんなに心地良い安堵だろう、その一方では断じて一人でなく、至る所全く未知らぬ人達の間で寝たり働いたりしている。

フェイケマ

1943年7月8日

[トンチャン(タイ)]ヤレヤレ、今僕は再び目下ここでの主要部を占める健康や食事そして可能なら仕事についての話題を何かと話した。こうして徐々に既に1年3ヶ月も窮地に陥っていれば、そして特にこの様に密林の中で閉じ込められてしまうとそれは理解できるというものだ。

オットウン

1943年7月24日

[キャンプ105 (ビルマ)] 全く！1日中雨 [降りだった]。すっかりずぶ濡れと寒さで帰宅した。其れから更に不愉快な食事。そうすると惨めさが2重になる気がする。暖かい服を身に着けて家具付きの家を歩き回るなどは非現実的な話の様だ。まさにそういった事は決して存在しないし、ただ夢を見ていたに過ぎない。ところでかなり以前の出来事は楽しい夢であったような気がする！

ウェストホフ

1943年8月4日

[レトポウ (ビルマ)] 誰もが何もする事無く、退屈している。読み物は無い、娯楽は無い、何か我々の怠惰を取り除いてくれる物は何も無い。死亡事例は少なくとも日に2件、時には4～5件。全ては同様に気を滅入らせてしまう。もし我々がある時戦争状況の確実な良い情報を得たとしたら、そうすれば [これが] 全てそして全員を回復させることだろう。其処に加えて更にごこのこの永久的な雨、太陽は何週間も見ないので、何もかもが思った様にいかない、まあしかたない、様子を見よう。

ディッケ

1943年8月8日

[キャンプ105 (ビルマ)] ヤンカと子供達に再会する1943年のクリスマスの可能性を僕は今尚信じている。

ペルクイン

1943年8月10日

[チュンカイ (タイ)] 昨日僕は自由への強い切望から感情的になった。自宅とヘルミンの良い思い出から目に涙が浮かんだ。其れは愛への絶望的な渴望の気持ちであり、惨めさが魂に奥深く這い広がって行く。その様な感情の発作が身に起こる時、如何に心が痛むかは名状しがたい。

ウェストホフ

1943年8月23日

[レトポウ(ビルマ)]これが早く終わってくれる事をやはり切に望むべきだ、さもなければ我々は皆駄目になってしまう;喜ばしい見込み無し。しかしヴィム・カンが彼の歌で述べている:“人は御伽噺を信じる子供で居続ける。”そして確かに、これらの素晴らしい情報は既に信じられなくとも、心の中では其れを信じ、深い幻滅が続く;大勢に余りにも信じ過ぎた致命的な反動が。

リブンス

1943年8月27日

[キャンプ108(ビルマ)]我々がクリスマスを自由の中で祝える事を望む。神様、其れを与えてください、何故なら我々がここで確かに習った1つの事、すなわち平和と自由は人間の幸せに不可欠であるという事だ。

ボム

1943年8月31日

[アンガナン(ビルマ)]僕が君に何か出来る事があれば是非してあげたい、僕は既に1年半というもの君に対する僕の義務を怠っている!其れ故君が元気である事を望むのみだ、これ以外僕に望める事は目下何も残っていない。

ドゥ フラウター

1943年9月25日

[カンチャナブリー(タイ)]今朝[W. W.]ロスと僕は双方再び[C.]カイト[イギリス人]に髭を剃ってもらい、其れで又‘奇麗’になっている。(我々がここで如何に生活しているか、如何にあるもので間に合わせなければいけないかを我々の妻達が知らないのは良いが、彼女達が如何に惨めであるかを誰が知ろう;多分彼女達は我々と同じ事を考えているかも!)

ドゥ フラウター

1943年10月5日

[カンチャナブリー (タイ)] 素晴らしく美しい明るい夏の日。残念ながら数件の不愉快な噂によって雰囲気は落ち込んでいる、僕が今朝聞いたそれは、すなわちチュンカイ (ここの近所) から来たグループ2の300人の連中が再び上流、タカヌンへ連行され、タカヌンから250人が下へ降りてきたと言う。其処では未だ21マイル鉄道を敷設しなければならないらしい。だからグループ2に属する我々が再び上流へ行かなければならない機会は故にかなり大きく、とても憂鬱だ。上流へ行かなければならないのは僕には実に嫌な事だ。

ドゥ フラウター

1943年10月9日

[カンチャナブリー (タイ)] 今日ヴィリー・コルサリの出版物を多く読んだが、僕の最愛のベップケをととても恋しく思い続けたので、余りに落ち込まないようにするには其れを止めなければならない! 3日後には可愛い小さなキキの誕生日だ。思いの中で僕は君達の傍にいる。

ドゥ フラウター

1943年10月26日

[カンチャナブリー (タイ)] 昨夜僕はベッピーとキキ [彼の娘達] が僕の傍に居て、彼女等を僕の腕に抱き愛撫できた夢を見た。僕はとても幸せだったが、目が覚めた時とても悲しかった、現実は何れにも、余りにも違っていた。

ドゥ フラウター

1943年10月27日

[カンチャナブリー (タイ)] イギリス人達が皆イギリスの歌を歌った; 特にStille nacht (聖夜)は平和への強い切望を表す為我々も頻繁に歌う。その上それはまさにその雰囲気の歌である。

ドゥ フラウター

1943年10月31日

[カンチャナブリー (タイ)] 陰気な、暗い、冷え冷えする雨模様の日曜日。甚だしい噂にもかかわらず昨夜は気分が落ち込んだ、既に僕はもはや確信 (ヨーロッパでは終戦したであろう!) が何も無い為でもある。我々は今実際我々が如何なるのか、何を信じる事が出来何が信じられないのか、もう何も分らない。

ドゥ フラウター

1943年11月1日

[カンチャナブリー (タイ)] 又新しい月。これが何を齎すのだろうか? 出だしは良くなかった。1日中暗く悲しい天気であった。この日我々も殆ど自分達のテンパット [寝床] に横になりながら、読み物をしたり考え込んだりしていた。それにより目下雰囲気は良くない。今朝はかなり酷いジャングルシチュー、午後は‘焼き飯’; 食事も故に今までの所大した物ではなかった。今晚何かより良い食事を望む。[...] 一昨夜再び赤痢とベリベリで死亡した印欧混血人の若者が埋葬された。こんな風に其れは続行する。何時になったら終わりが来るのか? 僕は非常に愛する者達が恋しく、実に不安だ。

フェイケマ

1943年11月10日

[カンチャナブリー (タイ)] 僕が不思議に思うのは、君達が如何にしてお金を手に入れているのかという事だ。我々自身のお金はとっくの昔に無くなっているし、其処のクラマツト<sup>179</sup>ではとても安価に生活しているのだらうと仮定する。君が自ら料理し、又服が作れる事に目下凄く沢山の楽しさを味わっていると僕は察する。

---

<sup>179</sup> クラマツトはバタビアにあるラーデン・サレラーン通りの両側にある約170件の住居から成り立つ‘保護地区’であった。1942年10月から1943年9月までここにバタビア、その周辺そしてチェリボンから約2300人の女性と子供が抑留された。彼女達は大半がチデン収容所に連行された。其れから後この収容所は絶えず新しいグループの抑留者達が住んだ。(M. E. ドゥ フレッター他、Batavia/Djakarta/Jakarta. Beeld van een metamorfose, (プルメレンド1997) 71)。

リブンス

1943年11月23日

[キャンプ133 (タイ)] その間我々が解放を待ち望んでいたこの年も最後になった。しかし其れは不可能であったが、同じ楽観的信念で我々は今年に入ろうとしている。

ドゥ フラウター

1943年12月13日

[チュンカイ (タイ)] 今日の午後まず休憩し、それからカリ [川] で入浴した。それからとても静かな場所を気持ち良く一人で散歩し、思いの中では愛する彼女達の凄く、凄く、うんと近くに居た。この密かな郷愁は時として余りにも強く、僕は其れで恐ろしくなる。ところで僕は最近やはり又多少気が減入っている；多分注射の反動。<sup>180</sup> 未だどれだけ長くこの悲惨さが続くのだろう？と言うのはここでは、特に今、更にこの寒さで、かなり大勢が苦悩している。

ドゥ フラウター

1943年12月31日

[チュンカイ (タイ)] 大晦日、僕が家で過ごさなくなつて3度目。われわれの気分は如何なるもので、我々の思いは何処にあるか、もはや書く必要は無い。勿論又ここからうんと遠い、僕の愛する者達の傍。もし我々がある時、来年再び自宅に居られる、としたらどんなに素晴らしいだろう。其れを再び望む事にしよう、とはいえ僅かな慰めと、幸いとても沢山の喜びが包含している思い出の中に先の強さと勇気を探さなければならないが。

ペルクイン

1944年1月1日

[ヒンダート (タイ)] 僕の愛する皆に幸運な新年を願う。僕の最大の願いは僕の最愛の妻だ。新年が到来し、誓約の年となるだろう。偶然僕は同時に新しい日記に着手する。10本のタバコで又帳面を買った。この3冊目は24ページしかない - 2冊目は32ページあった - が、この日

---

<sup>180</sup> 彼等が2日前に受けたコレラ - 注射。項目‘移送と宿泊’、1943年12月11日ドゥ フラウターの日記断片参照。

記が僕の戦争捕虜の身で続ける最後になると見なしている。2冊目の出だしでも同じ事を思ったが、そうはならなかった。目下1944年が僕達の年になると確信している。この日記に僕達の自由を報告するのは確実だろう！

オットウン

1944年1月1日

[キャンプ112 (ビルマ)] 新しい勇気と一杯の希望で新年が始まっている。これが解放の年であることを誰もが納得している！朝我々全員コーヒーとミルクそしてクッキーを貰った。コーヒーは実に本当のコーヒーの様だった。クッキーは米粉の自家製だった、と思う。しかし味は最高。そういった事が即雰囲気活気に与えた。

リブンス

1944年1月1日

[キャンプ130 (タイ)] ところで、キャンプ133でのクリスマスは大した‘クリスマスの祭り’ではなかったし、又特別の食事も無し。いやはや、クリスマス - 或いは大晦日の雰囲気は今回無かった。昔自宅での其れは如何に違っていたことか。これは僕が家と家族から遠く離れて<sup>181</sup>益々喜ばしくない状況で祝う、今既に7回目のクリスマスと新年だ。未だ後何回僕は来たる年月にこれらの祝祭を感謝する事ができるだろう；自宅で皆と再会する事を期待する大きな切望とで。

リブンス

1944年1月7日

[キャンプ130 (タイ)] 何という巨大な文化と道徳価値の損失をこの戦争は齎したのだろう。この損失を修復する事無しに、これが未だどれほど長く続くと言うのだろうか？僕はここでもはや想像もできなくなっている。我々がここの密林に閉じ込められて既に2年以来、我々は自分達のティカールチュ [莫産] の上が同時に居間 - 、寝室 - 、食堂 - 、そして勉強部屋を形成していた事を含めて (あくまでも勉強と呼べるなら)、最も原始的な人類として生活してきた。

---

<sup>181</sup> リブンスはここで恐らく7年前の彼のオランダ出発を示唆している。

ペルクイン

1944年2月3日

[ヒンダート (タイ)] 僕達の運命とこの忌々しい戦争の終結に関して僕は多少悲観的になってしまっている。今年は新しい勇気を持って開始したとは言うものの、僕達が今年に解放を祝う事など今は想像できない。事実として余りに調子が良すぎるように僕には見える。1年は12ヶ月、それから1ヶ月が既にあつという間に過ぎた。後11ヶ月で戦争は終結するとは。僕には想像できない。とは言え、其れが僕の間違いで今年再びヘルミンを僕の腕にしっかり抱きしめられる事を願っている。

ドゥ フラウター

1944年2月25日

[チュンカイ (タイ)] 今日我々の小さな愛する子の誕生日 [だ]。今朝直ちに思ってしまった。他には今日2年前の全ての事をとても沢山思い出していた。<sup>182</sup> [...] そのトゥルーシュは今も既に2歳だ。僕が彼女を見たいとどんなに切望している事か。彼女は自分の父親を今だ全く知らない。

リブンス

1944年2月25日

[キャンプ114 (タイ)] 戦争捕虜の身が大半どのようなものであるのか僕は知らないが、察するにドイツでの方が少しは良いのではないだろうか、少なくとも未だ定期的に小包を受け取る事が許されたり、手紙が書けたりして。ここでは我々に2年間何の知らせも無かった。偽りの新聞Greater Asia<sup>183</sup>以外、外部とは何の接触も無く、他に新聞或いは雑誌は無く、娯楽は無い、ただ日本軍からの殴打の大いなる可能性のみ。実際なるべく鈍感にならない様、読書やチェスをする生活はもはやしていない。何時ここに終結が来るのだろうか？時として我慢する事或いは勇気を失うことはかなり辛く、それで今までに余りに大勢が死亡しそして未だ続々と死んでいく。僕は傍に今尚聖書を持ち、同じ様に僕のペンも；これら2個が唯一僕に昔を思い出させる。匙ですら僕はもはや所持せず、フォークだけ、それでスープや必要なれば薄い粥を飲まなければならない。我々全員、確かに連合軍がこの戦争を今年に終結させるとはったりをかけていることがある

---

<sup>182</sup> その時彼は3番目の子供、トゥルーシュの誕生に立ち会う為休暇を取った。前書きビルマ - タイ、24 参照。

<sup>183</sup> バンコクに出現した日本の宣伝新聞。(ファン ヴィツツン、143)。



時現実になることを願っている。あまりにも多くの罪の無い犠牲者が出ているし、もっと長く続けば更に出てくるだろう。神様、更にやって来る、疑う余地の無い相当困難な時期、我々をどうか守ってください。

ウェストホフ

1944年3月12日

[レットポウ (ビルマ)] そして [今] 私が書いてから再びほぼ2週間になるが、ニュースと我々自身に関して何も無いので書く理由が無かった。

ドゥ フラウター

1944年3月13日

[チュンカイ (タイ)] やはり僕には残念ながら最近将来が再び憂鬱に見えてくる；解放は今のところ来年に延期され、だからわれわれがみな生きて乗り切るよう願望して。

グルドヴァッチ

1944年3月13日

[ナコムパトン (タイ)] 数ヶ月前鉄道の上を少々振り返る。[...] 2回も我々はモスキト戦闘機に空襲攻撃された。痛快とは言えないが、精神的にはかなり勇気付けられた。専門家によれば、命中すると、最初は何も感じないそうだ。だから攻撃の後で手足に触って確かめる！

ボム

1944年3月29日

[カンチャナブリー (タイ)] 財政委員会 [このキャンプの] の僕の会員資格は僕が後で蘭領インドに関係する事、つまり要するに政治面での僕の確信を裏付けた。ここの様に数千人だけの小さな共同体でさえ、既に自己の利益と愚かさそして馬鹿らしい口論が交じり合って酷い山になったへまを見る。実際我々が如何にしてこれらのグループ連中と蘭領インドを再び再建しなければならないか心配で自問してしまう。僕のビルマ時代の初め、ある本を読んだ：ダン・カーネギーの How to make friends and influence people。さも最上の生活の知恵を説くごとく、目的の

達成の規則で詰まった本。しかし [ J . ] ブールと僕が我々にとって正しいと思えるそのものに達すべくこれらの規則を頻繁に適応している（或いはむしろ：努力）のが現実だ。

ボム

1944年10月1日

[ターマカン (タイ)] 我々の別離以来3度目の誕生日。<sup>184</sup>戦争捕虜の身として最後であってほしい。僕は君の知っている何か、そして君の居る状況のことを知りたかった。この戦争が君に多少なりとも楽しい方法でこの日が祝えて、君の両親も其れが出来る様僕は願っている。彼等は元気だろうか？ [...] 我々が今生きているこの状況はあれやこれや直接脅かされる事は無くなって、其れを常として来た事から比べると大変な事だ。とはいえ、其れは大変肯定できる事ではない。

ボム

1944年11月15日

[ターマカン (タイ)] 英語とラテン語が残っている1ヶ月半の時間を、僕の指導者としての地位により過ぎてしまわないかぎり、満たした [読書と並んで] : この時期他の連中の問題を少々面倒見る事で元気を保持する。

ボム

1945年1月1日

[カンチャナブリー (タイ)] 1945年: 恐らく多くの困難を齎すだろう年、しかし其れは我々を戦争の終結に向かって最後に導いてくれ、其れで終了するかもしれない? 1943年に比べて1944年は我々にとって良い年だった。1943年は我々全員にしばしば終わりが近づいた様に思えた; 1944年にはこの恐怖は全て取り去られた。今現在の状態であれば、戦争は故に戦いで死者を出すのみだ。君達の方がどうなっているか我々は知りたい!

---

<sup>184</sup> これは彼の妻イナの誕生日で、彼女はこの日で36歳になった。

ドゥ フラウター

1945年2月12日

[チュンカイ (タイ)] 愛する者達がとても恋しい。昨夜長くこのかわいい子供達の事を夢見た。其れが本当だったら！彼女達は如何しているだろう？彼女達は未だ生きているのだろうか？平和が僕にこの点で何を齎すだろう？大きな悲しみ或いは強力な喜び。その事を考える時僕はしばしば怖くなる。

グルドヴァッチ

1945年5月25日

[プラカノン (タイ)] 未だ尚肯定的な反論無し。それがあつた時本当なら、僕は9月/10月に賭ける、そして誰が知ろう、クリスマスを自宅で？又馬鹿なことに、我々が‘二流連合軍’である事を僕は忘れていた（[チャンギに居るイギリス人将校 [の] 見解 [によれば!!]）、だから我々には最初の月は船に場所が無い。それはライミー<sup>185</sup>に任せておこう。

ボム

1945年8月17日

[バンコク] 我々が再び一緒になれる事を願望して、僕は将来を待ち望んでいる [\*…\*]、そしてそれが我々の最初の蘭領インドでの年月の様に良い事を願って。僕の‘日’記の最初のページが未だ読める事を願う。僕はこれを自分の野営水筒の付近に隠した。この旅で其れはすっかり濡れてしまった。このページは後頭部にかかっている僕の蚊帳に隠した（[其処は] 日本軍が家宅捜査でいつも検査するのを忘れる）。

---

<sup>185</sup> 米国英語で英国/イギリスの船乗りになされた渾名；‘ライム - ジューサー’からの派生。

## 抑留者相互の人間関係

ディッケ

1942年5月27日

[タヴォイ (ビルマ)] コングシー：[P.] ファーバー、[ヨハン] ポンセ、[jhr. A. E. H.] ローエル、[Th. A. M.] ホーフフェルト、ディッケ。

オットウン

1942年6月1日

[タヴォイ (ビルマ)] だが、まだ全く落ち着いた訳ではない、<sup>201</sup>なぜならその時まで内部的な意見の食い違いを治めなければならなかった、それは‘ヤンチェ’が彼の友人だか同僚だかの‘ピッチェ’の居る他の中隊に行きたがったからだ。しかし、そのピッチェの居る中隊や小隊にヤンチェと替わってやろうという人がおらず、ピッチェは司令官と昔よくメダンのテルムールンの平屋根の上で<sup>202</sup>‘飲み交わした’仲だというのでその中隊を離れたがらなかったからだ。こうしてまだ全員が概ね満足するためにはいくらかのごたごたがあった。しかし夜になる前には全てのいざこざが治められ、そこに、おお、贅沢にも、本物の電灯が点き、ブリッジや読書ができるようになる—この状況を考慮した上で—また雰囲気は良くなった。

ディッケ

1942年6月16日

[タヴォイ (ビルマ)] 火曜日。伏せている。コングシー仲間は僕にとっても親切だ。特にホーフフェルトとローエルは。ポンセは今日赤痢で病院に入院した。

---

<sup>201</sup> ‘移送と宿泊’の章、1942年6月1日のオットウンの日記からの抜粋参照。

<sup>202</sup> メダンのケルク通りにあったカフェレストラン、テルムールンは街で最もにぎやかな場所を見渡せる、戦略的によい、広い屋上テラスがあったため多くの人が集まる人気の場所だった。

オットウン

1942年 6月28日

[イエ (ビルマ)] オランダ人の間で有名なもう一人のオーストラリア人は理髪師、あるいは‘バーバー’だ。この、もうそれほど若くもない男は僕らのもじゃもじゃ頭の体裁をいくらかでも整え、僕らの顔を‘クリーンにシェイプする’ためのエネルギーに溢れている。この労働の対価は通常現物で、葉巻などで支払われる。だが僕らの理髪師は、もし金を持っていなくても、これは長く病気をした場合などにあり得る話なのだが、その場合はただで散髪やひげ剃りをしてくれる。この‘オペレーション’は通常愉快なおしゃべりをしながら行われる、というのもこの理髪師はいろいろな経験をしていて、彼がリビアでイタリア人を‘一網打尽’にするのに加わった話しを喜んで喋るからだ。数週間前、彼はいたずらをして、オランダ部門で食事の1時間前にオランダ語で“食事を取りに来い！”と叫んだ。するとオランダ人全体が炊事場のそばの、配膳場所に駆け寄った。食事の樽が外に運ばれるまでに時間がかかりすぎると、早々に待っている男達と調理人との口争いになった。それは誰かが、少し離れたところで引かかったオランダ人達を笑っている‘バーバー’に気が付くまで続いた。その‘仕返し’に、数日後、あるオランダ人が、“メッス・パレード”と叫び、今度はオーストラリア人全体が騒然となり、このいたずらも、独創性はもう無いとはいえ、成功したのだった。

ディッケ

1942年 6月30日

[タヴォイ (ビルマ)] ローエル、ファーバー、ホーフフェルトは数日間の作業に出ていった(180人)。いやに悲しげな雨降りの日だ。コングシーの中で唯一残ってしまって残念だ。彼らと一緒に楽しかった。<sup>203</sup>互いに僕たちは助け合った。

オットウン

1942年 7月16日

[イエ (ビルマ)] イエに来てから10日程して、僕は下痢になり、医者はすぐ粥と紅茶の食事療法を指示した。1日3回、粥と薄い紅茶だけというのは力が出る食事ではなく、1週間して下痢が治まったときには布巾のようにぐったりしてしまった。この状況を何とかしようとは、僕はし

---

<sup>203</sup> ヨハン・ポンセは1942年6月24日に亡くなった。‘健康と医療情況’の章、1942年6月25日のディッケの日記からの抜粋参照。

なかった、反対に状況を受け入れすぎるくらいだった。こうしていると、病気がもっと重くなるかのように、そしてひどく鬱に見える。一日中テンパチュ [寝床] に横になって降りしきる雨を眺め続けるのは、この状況を何とかしようとする力を奮い起こせないとすれば、意気を削がれる以外にない。僕のコングシー仲間のちょっと咎めるような目つき―僕は彼らが持ち寄る乏しい資産を食っているのだが、僕に状況をしっかり見つめさせることになった。コングシーに自分では何も貢献せず、実はどこも悪くないのに、自分の衰弱や意気阻喪を受け入れすぎる。それで僕は‘作業行き’にしてもらうために医者に行き、即座に受け入れられた。天もこの決断を喜んでくれるようで、次の日僕が労働者達と供に出動した時にはきれいに晴れ渡っていた。

コングシーという言葉は実は中国語で、(取引の) パートナーというような意味だ。僕たちPOW [戦争捕虜] の中でも、複数の男達がコングシーを形成しており、労働者だけがもらえる金は一カ所にまとめられ、果物などの食べ物を買ったり、副食を調理したりする。僕のコングシー仲間は、ディースベルフン、ホル、ハイトン、シェファーだ。

ディッケ

1942年12月12日

[ウェガリ (ビルマ)] 勾配を作った。早めに終わり、泳いだ。夜はローエルの誕生日 (40歳になった) にファーバーやホーフフェルトと一緒にいった。ローエルは僕たちの最初の賭に勝ち、ホーフフェルトが負けた! 今夜はファーバー、ローエル、ホーフフェルトと新しい賭をした、僕たちがヤップの命令に従わなくても良くなる最初の日はいつか、というものだ。この賭に負けたものは僕たち4人に食事をおごる。この日付は下記のごとく。

J. Chr. ディッケ	1943年3月22日
A. E. H. ローエル	1943年4月5日
P. ファーバー	1943年8月11日
Th. A. M. ホーフフェルト	1943年クリスマス

オットウン

1943年1月4日

[ウェガリ (ビルマ)] 僕は油をいくらか、安く買うことができ、うまく卵を焼くことができた。J. は先週、卵を10個くらい買うことができたのだ。彼とヒールと僕は買ったものももらったものも、全ての食糧を分け合っている。

オットウン

1943年1月14日

[ウェガリ (ビルマ)] 僕たちのグループ司令官、[H.L.] J [ユリエン] 大尉がカチャンイジー [小さな、緑色の豆] を煮てくれないかと僕に頼み、引き受けた。午後になって彼にすっかり煮えた豆料理を持っていくと、僕にも少し分けてくれた。エリック<sup>204</sup>はあの借りたルピーを棒引きにしてくれ、砂糖も一包みくれた。

ペルクイン

1943年2月17日

[リンティン (タイ)] 前にも書いたように、川沿いの労働キャンプはタイ人の船員の乗ったプラウ船で食糧供給される。今日僕は2艘の重く荷物を載せたプラウ船が、ゆっくりと栈橋に向かってのを見た。船員はこの作業に専念していた。プラウ船の船尾に、肉の塊が布と紙で簡単に覆われ、そこにハエの群がたかっているのが見えた。チャンスと見て、水に潜り、水中を船尾に向かった。プラウ船は深く水に浸かっていた。誰にも見つからずに、僕は水面に浮かび上がり、一掴みするとそれは3ポンド以上ある肉の塊だった。それを僕の歯でくわえ、混濁した水の中を、外から見えないように充分深く、30メートル以上先でまた水面に出るために泳いでいった。用心深く僕は上に登った。神様有り難う、成功だ！捕まっていたら銃殺だっただろう。仲間たちと一緒に薪を集め、火を焚いて、小さく切った肉を泉の水で煮た。そのブイヨンや柔らかく煮た肉は王侯貴族の食事にも思えた。

ヤップやタイ人の食料を掠めることについては僕は罪の意識を感じない。法外な利益を得ている闇取引人にもだ。西方前線異常なしという本の一節を思い出した。腹を空かせた兵隊が、夜中によく食料強奪に出かける。その時は何も‘感じ’ないで読んでいたが、今ではそれがよく分かるし、感じられる。

ルーへ

1943年3月20日

[ヒンダト (タイ)] キャンプ司令官、[J.] マンスフェルト・ベック中佐はあまり好かれていない。皆彼に不満を持っている。毎日病人もレールロード [労働] に出ないといけない。彼が自分で出させるのだ。

---

<sup>204</sup> 脚注157参照。

ボム

1943年3月20日

[ラパウ (ビルマ)] 僕は、所有していた司令権を取り上げられた<sup>205</sup>、僕の仕事に対する考えが、我々の司令官 (ファン・ムック大尉) が望むことと違っていたからだ。同じ運命に、他の2人もあっている。僕は妥協をし続ける政治には反対する。

ウェストホフ

1943年3月25日

[アナクイン (ビルマ)] 我々の幹部が全てに対してハイ、その通り、というのを見ているのは悲嘆に値する。彼らは自分でリスクを取ることを、そして殴打を受けることになるのを恐れすぎている。例えば食事は全くひどいし、彼らによれば、それは彼らにもどうしようもないのだと言うが、偶然1週間、僕らは彼らの余りを貰うことになった。それは僕たちに与えられるものより、ずっとずっと良いものだったのだ。

ペルクイン

1943年3月30日

[リンティン (タイ)] 覚え書き。我々の将校の恥ずべき態度について、残念ながらまたしても報告しなければならない。将校は誰一人として衰弱せず、脚気も、唇の炎症も、‘チャンギボール’も赤痢も無い。この症状は全て、蛋白、ビタミン、動物性脂肪、ミネラルなどの欠乏から来るものだ。‘旦那方’将校達はしかし健康的食糧に不足はない。彼らには数人の従卒や召使いが付いている。この若者達は上官の命令でキャンプから1時間ほど離れたタイの村に買い物に行く。そこで彼らは卵、肉、魚、野菜、果物、砂糖やコーヒーを買う。そして毎日旦那方はそのとびきりのご馳走を食べている。ここまではまだいい。しかし中隊長は医師の言うことを気にかけない。中隊長が半病人を労働にかり出すことが何度もあった。ヤップがこれだけの人数の労働者を必要としているので、その人数を揃えなければいけないのだ。将校は折り畳みナイフのようにヤップ達にお辞儀をし、僕たちのために交渉をしようとはしない。自分たちの静かな生活を乱されるのが怖いのだ。彼らがこのキャンプの苦しみを少しでも和らげようとしなければ、何のために将校が居るのか、僕には疑問だ。あるいはヤップと交渉して、キャンプ司令官に利益も渡し

---

<sup>205</sup> ボムは、56人の男達のグループの‘組長’だった。(NIOD, Indische dagboekencollectie, dagboek A.M. Bom).



て、病人のために特別食糧を買うとか。そしたらそれらの人々は回復後また仕事に行ける。何とか方法を講じて、キャンプ全体のためにより状況になるようにヤップを手なずけるのだ。将校達は労働はしない、それゆえ、彼らには美しい‘外交的’計画を練るのに十分な時間があるのだ。残念ながら、ろくでなし達は彼らの部下のためには何にもしようとはしない！ヤップ達が棒で病人達を宿舎から殴り出すために回って来た時でさえ、将校の旦那方は能なしの塊のように見ていただけだ。それなのに夜には僕たちは我らが中隊長によって仮病使いだの‘純血種の牛畜生’（ママ）などとののしられるのだ。“おまえら怠け者達には吐き気がする”などと言った。なんとというモラルを持った男か。毎日のように健康な若者達を、自分自身とその一党のための食糧買い出しに送り出すことに、自分の良心とどの様に折り合いを付けているのだろう。その若者達は永久半病人[ということになっているの]だ。僕に言わせれば、本当の半病人に労働を強制するのは犯罪だ。それによる劇的な影響には知らん顔だ。医師の指示は考慮に入れない。ヤップはある人数の労働者を要求し、中隊長はきっかりその人数が揃うようにする。イギリス人達が‘ユア・ブザー・オフィサーズ’と言うのも無理はない。

グルドヴァッチ

1943年4月28日

[キンサヨック(タイ)] このキャンプにはハンニバル(ハンス・ファン・ザイル・ドゥ・ヨング)、エド・フォンタイン、そして[W.]ファン・デル・ムールンがまた居る。大きな喜びだ。僕たちの元々のチマヒグループはしかしもう殆ど誰も残っていない。沢山の人が死んだが、多くは途中の場所に残っている。

ドゥ・フラウター

1943年5月11日

[タカヌン(タイ)] 昨夜何人もの男達のリュックサックが盗まれた(おそらくはイギリス人の仕業)。タオル、パンツなども、物干しひもから、跡形もなく消え失せた。

ペルクイン

1943年5月15日

[チュンカイ(タイ)] ここでは食事がいいし、特に休息することができるので、僕たちの互いの関係もまた良くなった。話はしょっちゅう家のこと、家族のことになる。そのことを心おきな

く話すことで互いに支えあうことができる。僕自身毎日そのことを考えて、ミーンと‘話す’。可愛い人、怖がらないで、僕は帰ってくるから。

ドゥ・フラウター

1943年5月17日

[タカヌン(タイ)] 今朝の粥は殆ど砂糖無しだったが、将校の粥は反対にたっぷり甘かった。憤慨に値する！さらに炊事場ではずいぶん量の肉が消え失せるという。これはまたしても不正な動きだ！[...] イギリスの食堂ではまたプラウ船いっぱいの砂糖や卵などを買った。我々が卵を少しでも見られるものか、興味のあるところだ。我々もイギリスの食堂に買いに行ける可能性もあるが、そこではまたタイの金が必要で、残念ながら私はまだそれを持っていない。

ドゥ・フラウター

1943年5月19日

[タカヌン(タイ)] 下流の病人テントを上流に運ばなければならなかった。[G. J.] レヌス医師は自分でも大量に担いだ。全員が彼を最も尊敬している。他の将校は悲しむべき様相を呈している(ファンR. 大尉は炊事場で“クラ [ご飯の焦げ] と砂糖をよこせ！” [と言った])。

グルドヴァッチ

1943年5月20日

[ウォンピン(タイ)] 我々の将校の一人が、蛮勇を奮って抗議した。<sup>206</sup>その報酬として無慈悲な殴打の雨を受けた。一般的には、彼らは将校には手を出さない。ところで我々の将校達は余り芳しくない。彼らに何か抗議をさせるのに、14日間かかった、僕らの見方とすれば、それが彼らの義務ではないか？しかし殴打の雨の後では僕らの福祉に関する最終的な名残りの関心も将校達から永久に消え失せた。旦那方は実際不自由していないのだ。ここには8人居る。その中から1日置きに交替で4人が僕らと一緒にグループ司令官として仕事に行く。すると彼らは仕事の最中、日本の司令官と一緒にタバコを吸い、賢い批評をなさっているのだ。“ほら、たまにはまじめに仕事しろよ、じゃないとヤップが僕に煩いからな！”僕が将校になるほど賢くはなくて、呪

---

<sup>206</sup> ある捕虜への暴行に対して。‘健康と医療状態’の章、1943年5月20日、グルドヴァッチの日記よりの抜粋参照。

いたいくらいだ。ここを生きて出られる可能性が何倍も高いのだ！信じられない！僕らは徐々に、星を付けているもの全てを嫌悪するようになってきた。しかし、全てそうだと思っただけではない、どこかにまだ良いものも居るかも知れないのだ。彼らに一度でも会えることを祈ろう。

オットウン

1943年6月30日

[キャンプ105 (ビルマ)] こんちくしょうめ！あのマリーパールの悪漢めが、僕の最後に残った少しの塩を使ってしまった。僕はそれをとても儉約して使っていた、朝の粥にしか使わないからだ。まだあった少しの塩で、確実に10日分くらいは充分だったのに。

フェイケマ

1943年8月5日

[トンチャン (タイ)] 幸いにも僕は時には卵や果物などをここで病気で寝ている人たちのために捻出することができる。[...] ここ [病棟] でできた多くの時間を、幾つかの食の楽しみに当てた。オムレツを焼き、卵を焼いたり茹でたりし、カチャンを煎った、全てはヘルマン・ヴィッツと私のためだ。彼は今や毎日カリ [川] に、卵やバナナなどを食堂用に調達するために数人で出掛け、時には何か特別のものを持って帰ってきて、いつも僕もそれを分けて貰う。

ペルクイン

1943年9月6日

[タルサオ (タイ)] 僕は9月4日土曜日に、近づきつつある検査でここから運び出されようとして、鋸で自分の左手を自傷した。薄汚れて見える布きれで出血する手を包んだ。ヤップは僕の考えを見抜き、ひどく殴りつけ、その後、裁判のためにイギリスのMP [軍事警察] に引き渡した。僕は薄暗い照明のイギリスMP将校のテントに連れて行かれた。彼はサングラスをかけていた。僕は大きな憤りがこみ上げてくるのを感じ、言った。“ [英語で] あなたの目が見られません、ミスター。何故サングラスをかけているのですか？”彼は怒った、僕は彼に対して、サーと呼びかけなければならず、これ以上何も言うてはいけない。僕はそれに応えて質問した。“私はイギリス人の捕虜になったのかそれとも日本人のですか？”その将校は僕の隣にいたMPに首を曲げて合図し、直ぐさま僕は激しいパンチを左脇に食らった。僕は身体を二つに折り、起きあがりざまに他のMPの手から太い棒をひったくり、そいつの頭を思い切り殴りつけた。それは不公平な闘いと

なり、彼らは僕を‘グロッキー’になるまで殴りつけた。僕は小さな木の小屋に投げ込まれ、一晩中そこにいなければならなかった。

ペルクイン

1943年9月26日

[ヒンダト (タイ)] 将校達に関して、残念ながらまた良くない報告を書かなければならない。マンスフェルト・ベックとかいう、このキャンプの司令官であるイギリス人の中佐<sup>207</sup>は日本人よりもっと悪い。この男は浅黒い肌で、白人嫌いで有名だ。特にオランダ人がその影響を受ける。ほんのちょっとでも気に入らないことがあると、滅茶苦茶に殴りつける。もう一人の‘白い日本人’、ブレッジ大尉というやつも、オランダ人を殴るのが大好きだ。彼らはいつか解放の時が来たら、ここでの自分の行動にどの様に責任をとるつもりなのかと考えてしまう。

ペルクイン

1943年9月28日

[ヒンダト (タイ)] 最奥地のキャンプから100人の病人グループが到着し、その中にテッド・アンドレやデディスなどを見つけた。彼らに再会できて本当に嬉しく、質問責めにしてしまった。おお、まあまあの一重病では無い一健康状態の友人に会えるのはなんと嬉しいことか。明日は彼らはチャンカイに向けて発つ。ヴァウトもヘルマン [彼の兄たち] 見なかったと言っていた。

ドゥ・フラウター

1943年9月29日

[カンチャナブリ (タイ)] バーウィック [イギリスの昆虫学者、中尉] から、今朝60セント(100頁)のメモ帳を、僕の鳥のメモと日記を完成させるためにと貰った。とても親切だ！

---

<sup>207</sup>NIOD側の資料に依れば、これはオランダ人である。同章1943年3月20日のルーへの日記抜粋と比較のこと。

グルドヴァッチ

1943年10月1日

[リンティン(タイ)] クウィマ経由で我々の所に来た [J. M. A. ファン] フルヌンダール医師(元スカブミの人?)<sup>208</sup>は、医師のパロディーだ。唯一彼が興味を持つことは商売だ。僕たちが仕事をしている間、彼はクワイノイ川の小舟から果物、卵、砂糖、タバコ等々を買う。そしてそれを、夜に恥ずべき膨大な利益を上乗せして我々に売るので。おお、我々は‘良い’稼ぎがあり、彼は将校のガジ [給料] でやっていかなければならないのだからねえ。哀れな男。

グルドヴァッチ

1943年10月9日

[リンティン(タイ)] ‘インドーブランダ’ [インドネシア系対純白人オランダ人] 間の関係はとても悪い。将校の旦那方は見て見ぬ振りをしている。僕たちブランダは18人しか居ないので分が悪い。将校の前で、僕たちは‘バカなブランダ’とか‘薄汚いブランダ出身のおまえ’とか話しかけられる。しかし、それだけではない。デ [モールマン] は重症のマラリアで自分では立つこともできない位なのに、コリンズ中尉(彼がどっちか、3回で当ててごらん)の目の前で色豊かな同国人に殴り倒された。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年10月10日

[カンチャナブリ(タイ)] 重病人ですでに卵を受けつけなくなっている人のためにミルクを買った。

ボム

1943年10月24日

[アンガナン(ビルマ)] 特に [Y. H. L.] ラ・ラウの死が僕には衝撃だった。僕たちはここでラ・ラウ、[J.] ブール(国際部スタッフ)、ヴィッテ(レウウィンマンゲール = パシル・ナンカ

---

<sup>208</sup> ファン・フルヌンダール医師は戦前スカブミに住み、仕事をしていた。

の事務官)、フリース(補給大尉)、ウェルシング(砂糖企業連合の副事務長、中尉副官、スラバヤの市街警護団員!)とともに友人クラブを形成していて、ドゥ・フォーフル(カディパートの砂糖工場所有者)、ファン・スレウス(ラングフェルト・スフローダーの専務)、ゼーマン(建築家)なども時々参加していた。

僕たちの関係はチャンギで始まった。少し前に亡くなった [J.H.] ガラヴァジもこの中に入っていた。ラ・ラウやブルーにはとても引かれていた。率直で、教養があり、して良いことと悪いことの判断が正確だった。僕は病院でラ・ラウの隣に寝ていて幸運だった。彼が長い赤痢の患いで衰弱した後、病状は手に負えなくなった。彼は神経性症状を呈し(二度と食べることができない、などという妄想に取りつかれたり)、僕は比較的調子が良かったので、彼を看護することができ、僕はそれを喜んでやったのだが、どの様な最期を迎えることになるかすぐに明らかになった。最期は10月9日土曜日の朝、9時に来た。

ディッケ

1943年10月26日

[キャンプ 55 (ビルマ)] ヴィム・スフロート、彼はまあまあ調子がよさそう(1日6回便所通い)で、アドリアーン・ローエル[前のコングシー仲間]も[移送時に]一緒に来た。彼らは僕の野戦用ベッドと枕(ヴィムと共同で使っていた)を持ってきた。

グルドヴァッチ

1943年10月29日

[クイエ(タイ)] 奇跡的にも回復したハンニバルは<sup>209</sup>、余りにも良く僕の世話をしてくれるので気が動転するほどだ。[J.J.] ドンク大尉、レティンハ、フリッツ・ボルストも困ったときの篤い友人達だ。僕の左手は急に良くなってきた。我々の、商業本位主義の、医療‘自転車修理屋’はひどい破廉恥漢だ。何日か前、あの重い大槌でレールを釘留めさせられていたとき、僕は吐いてしまった。それが良くないとして、僕はひどく打ち据えられた。ドンク大尉が中を割って入ったとき、彼も何発か頂戴した。ヤップ達によれば、労働者は健康であるべきなのだ!! いい加減にしろ! 僕はもう殴打に耐えられないのだ。[ファン] フルヌンダール医師(!)は僕を病人リストに載せようとしな。ドンク大尉が彼の所に行ったが、何も変えられなかった。フ. は病人として収容できる数は限られていて、僕はもうどうせ‘おしまい’なのだから、その分は別のこ

---

<sup>209</sup> ハンニバルは数週間前に朝食を取りに行くとき、気を失って倒れた。

とに使った方が良いという。おお、もちろん彼が全く間違っている訳ではなく、正直言えば僕はもうどうでもよくなっている。それでいったい何だというのだ？

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年11月1日

〔カンチャナブリ（タイ）〕 イギリス人がいかに不潔かは注目に値する。何時間も真っ裸で歩き回ることが良くある。足の膿を（潰瘍）を、時には田圃の泥水で洗う、ここでは病人用便器（ベッド用便器）も洗うというのに。

ルーヘ

1943年11月15日

〔クウィマ（タイ）〕 多くの韓国人女性（売春婦）も到着した、看護婦の名目で。

ドゥ・フラウター

1943年12月14日

〔チュンカイ（タイ）〕 ファン・ザイルも腹を下していて、絶対安静を命じられた。しかしバッカー大尉は医師の指示に不満で、今朝、全ての‘内部軽作業者’を外部労働に送るために整列させた。‘安静’は彼によって‘労働’に書き換えられた。その結果、医師と大尉の間で争いになり、いまや後者が彼の行動の全責任を負うことになった。我々の将校の我々自身に対するこのような態度を見るのは悲しむべきことだ。これがヤップの命令だったのなら話も違うが、これはヤップに全く関係なく、独自の行動なのだ。バッカー大尉の名前は戦争後のために覚えておく必要がある。幸い僕は部屋の警護という定職があるため作業に出る必要はない。

グルドヴァッチ

1943年12月16日

〔クイエ（タイ）〕 11月23日頃までは予断を許さぬ状況だった。しかし、ドンク大尉、レティンハ中尉、それに厳格専制君主の‘ハンニバル・ママ’〔ハンス・ファン・ザイル・ドゥ・ヨング〕のおかげで、僕はまた峠を乗り越えた。

グルドヴァッチ

1943年12月16日

[クイエ (タイ)] 残念ながらこれ [川沿いの日本軍倉庫の警備] は定職ではなかったが、しかしここに冗談のようなことが起きた！川沿いには野生のスベリヒユが沢山生えている。これを僕は毎朝沢山採ってキャンプに持ち帰っていた。フ・医師はそれを見て、自分のためにも採ってきてくれないかと僕に頼んだ。余りやる気はなかったが、断る元気もなかった。僕が [鉄道] 堤の仕事を開しなければならなくなった時、野菜提供はもう終わりだ、と彼に告げた。彼はいったい僕が誰のために野菜を採ってきていたのかと聞いた。それは、彼を除けばドンク大尉、フリッツ・ボルスト、ハンニバルと僕自身、それに病院にいる3人の男たちだ。彼はそれがとても有益だと言い、もし彼が僕を病人だということにすれば、それを続ける気があるか、と聞いた！！ヤップからの命令以外で川に行くのは嚴重に禁止されており、結構危険なことだが、それで僕が堤に行かなくても済むのなら、やらざるを得ないだろう。こうして、僕は今、病人になった！あの恥知らずめ、こうなれば急に可能になるのだ！！

ドゥ・フラウター

1944年1月4日

[チュンカイ (タイ)] 私はこの [マラリア] 病棟で、バタビアのジャスマイ [ジャワ・スマトラ貿易会社] の [A. Th. M.] フレースンと、昔ヘルレン [オランダ] の炭坑で働いていた職業軍人のフレイズナールの間に寝ている。二人ともとても親切な男達だ。この間もフレースンは卵をおごってくれ、今日の午後にはPRI [食堂] からのうまい 'ジンジャーブレッド' をおごってくれた。

ディッケ

1944年2月3日

[チュンカイ (タイ)] 12月分として将校は次のごとく受け取った。35チカル+10チカル (11月立て替え分) - 5チカル (病院基金) = 40チカル。それに比べて、僕ら下士官やその下の者で、12月に仕事をしなかった者は何ももらえなかった、基金からでさえ1チカルも無い。 '旦那方' 将校達が目の前で、食事の度に砂糖、卵、小魚、バナナ、コーヒーとクッキーやビスケット、テン [テン] [ピーナツクッキー] を食べ、ジェルック [柑橘類] を飲んだりしているのを見るのはつらいものだ。そして僕たち金無しの下士官は、事実上何も手に入れない。中には時々部下に何かを分けてやる将校もいる (しかしその数は少ない)。



リブンス

1944年3月5日

[タマルカン (タイ)] ここで初めて同姓の人に出会った、ブレダ [オランダ] から来たヤン・リブンスで、工兵隊で仕事をする大柄な男、さらにヘイスの弟のフランス・ブロムに会い、彼とはレイスワイク [オランダの地名] について愉快地に長々と語り合った。フリッツ v. d. ベルフはキャンプ114に居るらしい、僕がそこで彼に会わなかったなんて奇妙なことだ。

ディッケ

1944年3月31日

[タマルカン (タイ)] 夜にホーフフェルトを病院に見舞った。彼は回復し始めている。ベンク、ドゥ・グラーフ、ブルハウト、ファン・スターフェルンも病院にいた。さらに第8グループの知人達、ファン・ヴァンクム、ホル、ディースベルゲン、アールセン、ミヒールセン、ファン・ペルトにも会った。

リブンス

1944年4月7日

[ノンプラドック (タイ)] ここで、BPM [バタビア石油会社] 社員で、ランタウの女教師レニ・ワルラーフと結婚している [F.O.] ファン・デン・ハウトに会った。昔のP [プラウ] ブランドン職員でホッケーのチームメイトだった [J.H.Ch.] ファン・ミリヘンは、とても残念なことに丁度僕が到着した日に移送されていた。今やもう移っていったアンシンが彼と話したことがある。キャンプ1 [タマルカン] ではKm105から来たグラハム・ホワイトとプリチャルドに会い、ベンクにも会い、大体昔からの知人にはみんな会ったことになる。

ドゥ・フラウター

1944年7月26日

[チュンカイ (タイ)] 一昨日の夜はD大隊 (オランダ人) 対C大隊 (イギリス人) のサッカー大会があり、とても興奮した。我々は1対0で負けたが、審判 (ピーコック少佐) はプレー時間を短くしすぎた。それで再試合ということになった。私たちの側に多くが賭けられ、我々 (オランダ人) は5試合して1試合 (同点) 以外は皆勝ったのだ。オランダの栄光はここでも、舞台上

同様に高々と上がるのだ！全ての面で、我々の方が勝れていることをイギリス人に見せてやらなければならない！

ドゥ・フラウター

1944年12月31日

[チュンカイ (タイ)] ハルディー医師から、昨日の食事の時用にと、大変うまいチャトニー入りの大瓶を貰った。彼はいつも同じように心優しく、戦争捕虜としての私の生活をとても耐え易いものにしてくれる。

グルドヴァッチ

1945年1月1日

[ナコムパトン (タイ)] ある意味で目立つのはイギリスの兵舎だ。夜そこを通るときには吐き気をもよおさずにはいられない。こうした性向は特に寄宿舍生活によって促進されたのであろうと、人は言う・・・。

ドゥ・フラウター

1945年2月21日

[チュンカイ (タイ)] 慰安婦達 [\*…\*] は将校達と供に下流へ。<sup>210</sup>

ドゥ・フラウター

1945年2月27日

[チュンカイ (タイ)] 昨夜は私のズボンが盗まれそうになった。幸い私は危ういところで目が覚め、泥棒は逃げ去った、彼は多分他のものも盗んだだろう。

---

<sup>210</sup> 資材及び戦車の移送と共に。‘仕事’の章、1945年2月21日ドゥ・フラウターの日記からの抜粋参照。

グルドヴァッチ

1945年7月5日

[プラカノン (タイ)] ゴルドバッフ医師も、幸い僕たちと一緒に残った。なぜならここにはもう2人の‘医術神’も居るからだ。[P.] ブルムスマ医師と[W.] ファン・デル・メルヴ医師（[ファン] フルネンダール医師と同様の自転車修理屋！）。

“汝早急に苦しみつつ死にたければブルムスマかファン・デル・メルヴのもとに来たれ！”

## 抑留所外部とのコンタクト

オットウン

1942年5月28日

[ビルマ] 2時間歩いた後、縦列が既にほぼ3倍の長さになった。日本の監視人達もバラバラに2つのグループに分けられた。1つのグループは前方に、そして2つ目のグループはずっと後方に歩いた。縦列の‘中間グループ’は故に実際無監視で歩いた。これを有り難く利用して住民が我々に提供してくれたかなり沢山の果物や葉巻を受け取った。我々が歩き続けたその地区は繁栄している様に見える、村落は密集している様だった。どの道にもすぐその傍にビルマ人、主に女性と子供達、が立っていてその端で我々に果物、葉巻そしてお茶さえも提供してくれた。日本軍が傍を通るや否や、彼女等は村へ駆け込み、日本軍が去ってしまうや否や即再び現れた。ここで話される言葉は我々には1語も理解出来なかった。マレー語は彼女等が話せず分りもしない、数人だけが少々の英語を話した。

ディッケ

1942年5月28日

[ビルマ] ビルマの住民は並外れて客を暖かく持て成し、協力的だった；我らキリスト教徒はこういう人々を良しとし手本にする。途中我々が休憩した時、水、お茶、コーヒー、暖かい飯、卵、果物、葉巻そしてタバコが提供された。

オットウン

1942年6月4日

[タヴォイ (ビルマ)] 厳しい規律にもかかわらず、キャンプの周りの鉄条網では、一方にビルマ人、他方には戦争捕虜、その間で活発な商売が行われている。物々交換が営まれている大半の商品は、万年筆、腕時計そして衣類と引き換えに、果物、土着の美味しい物、又土着の砂糖片だ。

オットウン

1942年6月28日

[イエ (ビルマ)] 住民との接触は今尚禁制されているにもかかわらず、ビルマ人とはかなり活気のある商売が行われている。しかしキャンプの位置する場所がこの禁圧を厳しく取り締まるには実に困難にさせている。そして日本軍もそんなに酷く気に病んでいるわけではない。ただ日本の歩哨が傍を通る時、彼としては役割を果たさないといけないわけで、歩哨が近づくと、‘赤、リード!’と叫ばれる。このわめき声が余りに一般的になってしまったので、オーストラリア人達もこれを受け継いだ。でもこの‘商売人’が捕まえられた時は、彼は数回きつい殴打を受け、その後1日中日本人歩哨の傍にて気を付けの姿勢で立たされる。大抵は我々のスタッフが住民との接触は禁止されている事を戦争捕虜達に再確認させなければならない。

日本軍はやはりそれらの接触があることを凄く良く知っている。されど其れを見ないようにしているに違いない、さもなければ彼等は役目を果たさなければならない。というのは休日連に競技が計画されたので、‘殴り屋’は自ら住民達をこのキャンプ内に入れたのだ。若いビルマ人達は競技に参加するのに励まされさえした。こうしてオランダ人、ビルマ人、オーストラリア人と日本軍が兄弟の様に(?)競走或いは他の競技に参加し、それには普通商品が付いていて、大抵オランダの参加者達が商品を全部さらって行った。

オットウン

1942年8月26日

[タンビュザヤ (ビルマ)] 今日日本軍は又ビルマ人に仕事を課せた。彼等が我々の籠に土を入れ、[故に]全捕虜達は満杯の籠を運ばせられた。これらのビルマ人の中で数人が少しの英語を知っていた。彼等はモウルメインから来ていて、又彼等が話した事によると、ラングーンは既に何度も連合軍の飛行機によって爆撃されたそうだ。

オットウン

1942年10月31日

[ウェガリ (ビルマ)] 到着したばかりのオランダ人グループの中に数人海軍兵がいて、その内の一人が弟(?)ヤンを知っていた。彼が話してくれたところでは、開戦時ヤンは巡洋艦ドゥ ラウターの信号手で、それが後でジャワ海にて沈没した<sup>196</sup>、という。多くの船乗り達は日本の船

---

<sup>196</sup> 帝国軍艦ドゥ ラウターは1942年2月27日日本軍により沈没するに終わった。

によって引き上げられ、セレベスのマカッサールへ運ばれ、そこで捕虜となった。故にヤンは其処にいるかもしれないが、彼がオランダ船に引き揚げられ、ひょっとしてオーストラリアにいる、という可能性もある。

オットウン

1942年12月26日

[ウェガリ (ビルマ)] 午後我々全員一枚の葉書を貰い、其処に自分達の妻や両親に宛てて多少書く事が出来た。この葉書は大部分英語の原文が前もって印刷され、其れは要約すれば下記の通りだった：“僕は未だビルマのモウルメイン近くの戦争捕虜 - キャンプに居る。オーストラリア、イギリス、オランダそしてアメリカ国籍の2000人からなる捕虜達が居る。2000人から3000人収容の色々違ったキャンプがあり、彼等は毎日決まった仕事をしている。気候は良い。我々の生活は定期的に糧秣、又薬や衣類の供給に頼れるので目下耐えられる。日本人指揮官は我々を友好的に取り扱っている。”そしてこの様に未だ他にもそれらの‘賛美している’言葉があった。この長い原文の中に我々が何か個人的に書く事の許された2行が残っていた。英語或いはマレー語のみで。この葉書が着くのかどうか気掛かりだが？

オットウン

1943年3月29日

[アナクイン (ビルマ)] 作業中レトポウへ向かう旅先の病人グループが通り過ぎた。彼等の中に僕はファンE. 中尉補を見つけた。彼から聞いたところでは、僕の昔の先生で幹部養成学校の訓練教官であった、[F. ファン] コーイ中尉補がラングーンで赤痢により死亡した、と。

ボム

1943年4月5日

僕はとても君の事を思っている；多少なりとも君の事が分っていられたら、或いは君に何か知らせる事が出来たなら。君が余り苦難にあうことなく、空腹に苦しんでいないことを願っているが？君がハンとマイの傍に居るといふ考えが僕を安心させてくれる。当時我々は一枚の葉書を送

って良いと約束された。しかし葉書は全く無かった。其れ以後誓約：葉書はある、3月と4月に書く事が許される。3月は今既に終わった！

グルドヴァッチ

1943年4月22日

[タイ] 途中で我々はタイ人と知り合った。[我々は] 同情の感動的な実例を経験する。我々がある村でワロン [屋台] の近くに偶然休んでいると、一人の老女が叫びながら外へ出てきて彼女の所持する全部のテンテン [ピーナッツ・クッキー] とジャグンクッキー [トウモロコシ・クッキー] を我々に分け与え金は取らない！ところで、この人が其れで忙しくしている間、我々同国仲間の多くが彼女のワロンを先に空にしている。人間の屑！ほぼ毎回我々が村を行進すると、女子供が我々と一緒に付いて歩き、もし手が塞がっていれば我々にバナナやパパイヤを食べさせてくれる。火をつけた煙草を口に押し込んでくれる。しかしこれは次ぎの休憩所で熟れていないバナナの木から、ぶしつけに押収したり尊大に傷つけたりする理由にはならない!!タイ人は我々の教養程度を知って評価していると察する。タイではインフレーションが広まっていると言う印象を受けるが?彼等は全て買い求め、我々からすれば途方もない価格で。しかし又違ったタイ人もいる。夜中この部隊はかなり離れて行進する。しばしば前後に人を見ない。我々の内の2人がタイ人に襲われ、意識不明になるまで殴られ全て強奪された。それでフィッシャーは首に痛みがある。調子が悪そうだ。

グルドヴァッチ

1943年4月26日

[タイ] ターダンとターサオ間で我々のグループ (アウトウンボーハード) の一人がタイ人に強奪され殴り殺された。そして更に2件の襲撃があった。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年5月10日

[タイ] 住民は思いの外、友好的で気前が良い、彼等は我々にマンガ [マンゴ]、バナナそしてタバコを投げしてくれる!彼等は頻繁に乱暴なことをする日本軍を嫌っている。女性達は全員模倣

したヨーロッパの服で歩いている（脹脛までのサロンカバジャ<sup>197</sup>と帽子 - 時代遅れの一時期流行ったファッション - 頭に斜め）。住民は色々でジャワ（スンダ [一ス] からマドゥレースまで）ではジャワ人に似ているが、ただ中国人の目（モンゴル人の傾向）。女性と少女達は後ろに束ねた髪 [をしている]。住宅：普通のジャワ風、ただ頻繁に木製の壁。[…] 住民は衣服が欠乏していて全て購入する。僕は自分の茶色の半ズボンと茶の低い靴を売ってみよう。絹刺繍のキモノは、出来るなら、君達の為に保存しておきたい - 其れは重いけれど。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年5月11日

[バンポン (タイ)] 便所とはしゃがむ為に竹が上においてある塹壕であって、其処も闇市となり、住民が購入するか或いは身体からズボンを引っ手繰る。汚い水で入浴する井戸で、更に何かを売ろうと試みたが、[値段は] 余りに低い。

オットウン

1943年5月12日

[メザリ (ビルマ)] 出発 [キャンプ108へ向かって] の数時間前、ヘニー・ファン L. の所で未だ雑談をしていて、‘古き良き時代’の思い出を更によみがえらせていた。彼から又聞いたことだが、我々の家に良く来ていた友人ヤ-プが死んだ。彼の部隊の降伏後、日本軍はこれらの連中を彼等の巻きゲートルと一緒に括りつけ、それからある方面に追い出した。ここに機関銃が配備されたらしく、敗北した連中は皆射殺された。かわいそうなヤ-プ！彼の両親や婚約者がこれを後で聞いたなら、彼等にとってこれは打撃だろう。ヘニーは腹疫病に苦しんでいたもので、新しいキャンプへ又一緒に行く事は出来なかった。

ドゥ フラウター

1943年5月16日

[タカヌン (タイ)] イギリス人達に昨日自宅から手紙が届き、手渡された。数々の幸運な連中がいた。我々も何か一度聞きたいものだ！

---

<sup>197</sup> 土着の女性達の伝統衣装：足首まであるスカートは腰で引き締め、その上に前がピンで閉じられている長いブラウスの衣服。



ボム

1943年5月17日

[キャンプ80 (ビルマ)] 多忙な期間<sup>198</sup>中に我々は模範葉書を家に送る事が許された!! ジャワから我々の出発後7ヶ月。この通知が君に届いてくれる事を非常に願っている。

オットウン

1943年5月17日

[キャンプ108 (ビルマ)] 我々にとって興味深い事に、ほんの数ヶ月前にメダンからやって来た一人の日本軍工兵が周囲に居た。彼が我々に北 - スマトラの全欧州女性達が一つのキャンプにいて、そして確かにメダンであると伝えた。そしてこの日本軍が説明した通りなら、これらの女性達はある地区、主にセルダン地区<sup>199</sup>に居て、彼女達は10時から12時まで買い物に行く事が許された。これらの女性が如何にしてお金を手に入れているのか自問する、何故なら日本軍は実際彼女等には支払わないだろうから。ヘニーが僕に伝えたところでは、[僕の妻] リーが降伏前、宿者長から前貸しを受け取ったが、やはり其れで彼女が1年も過ごせるわけが無い。特にこれらの女性達は自ら自分達の食事を準備しなければならないことを僕は今この日本人から理解できた。

ルーゲ

1943年5月18日

[ヒンダート (タイ)] 今日初めて葉書を書く事が許された。彼等がこれを自宅で受け取る事を願っている。

---

<sup>198</sup> 鉄道の一部を仕上げるべき予定表により苛酷に働かなければならなかった。項目「仕事」、1943年6月6日オットウンの日記断片参照。

<sup>199</sup> C.・オットウン - ヨーリッツマ夫人はセルダン地区には居なかったが、1942年4月16日からブラスタギで抑留されていた。(NIOD、蘭領東インドの日記収集、C.・オットウン - ヨーリッツマの日記)。セルダン地区にはDSM-住宅街で成り立ち、ペーターブルグ通り、ドゥ ジャティラン、ドゥ ドウリアン通りそしてドゥ セルダン通りに限定され、メダンの北東に位置していて、1942年3月から10月の間に概算で800人にのぼる日本人労働者の女性と子供達が格別に重要なヨーロッパの中間経営陣とDSMの重役の家に連れて来られた。セルダン宿舎はゲデック(竹で編まれた仕切り)で囲まれてはいなかった。1942年10月この都市キャンプセルダン宿舎は廃止され、大半の居住者はタンジュンモラワにあるキャンプへ引っ越した。約70人の女性と子供達による小さなグループはプラウブラヤンへ行った。(M. A. ロデリッヒス他、59)。

ドゥ フラウター

1943年5月21日

[タカヌン (タイ)] 我々は数行印刷された文章で自宅に送る印刷された葉書を受け取った。明日それらは再び回収される。

ペルクイン

1943年5月24日

[チュンカイ (タイ)] 最愛の君、今日我々は前もって印刷された葉書を家に送るチャンスが与えられた。葉書には選ぶ事の出来る5行が載っている。要らない物には線を引いて消去し葉書に署名をする。受取人に自分がこの日未だ生存して居た事を証明するわけだ。今僕が君に‘手紙’を書いていて其れを君が実際受け取るという事を想像するだけで僕は凄いショックを受けた。

オットウン

1943年6月1日

[キャンプ108 (ビルマ)] 原始林で食用葉を探す為、野菜探索者が今森へ送り込まれる。監視員無しで出て行けるこれらの野菜探索者は、時として半日より長く出ている。日本軍はこれらの連中がやはり逃走しない事を良く知っている、何故なら生還するチャンスがとても小さいからだ。そして幸運にも生きて居住場所に到達したとして、[それなら] 住民の中には必ず日本軍へ密告する人間が居るだろうから。

オットウン

1943年6月19日

[キャンプ105 (ビルマ)] 又もやキャンプ98<sup>200</sup>へ糧秣徴発をしに行った。ここで僕は再び幹部養成学校のクラス仲間、すなわちピート・バックナーに出会った。我々は一時間楽しく話をしていて。ピートから聞いたところでは、ここのキャンプ98に居る全連中は第5分隊に属している、という。我々のキャンプと又108は第3分隊に属している。

---

<sup>200</sup> 1943年6月から定期的に日本軍の命令でキャンプ105からキャンプ98にて糧秣が徴発させられた。項目‘作業’、1943年6月6日オットウンと1943年6月16日リブンスの日記断片参照。

オットウン

1943年6月28日

[キャンプ105 (ビルマ)] 昨日 [キャンプ] 108から連中がここへやって来て、[彼等が] 最新のニュースを伝えた。[S.] ヨハンスウン以外に、未だ数人が死亡した。我々のグループから [F. A.] スタークンブルグも。タンビュザヤにある基地キャンプの上空に連合軍の爆撃機の‘訪問’を受け、爆撃が投下されて色々な犠牲者が出た。僕が知っている一人も、すなわちエド・レイネ。

フェイケマ

1943年6月30日

[トンチャン (タイ)] 僕はこの頃君が2人の娘達とスカブミの其処へ来て、其れが今までの所君達の最後の生きている証となった<sup>201</sup>1年前のその午後のことをもう一度特別に思い出していた。

ドゥ フラウター

1943年7月16日

[カンチャナブリー (タイ)] ここでこの部屋の数人が数日前本当に家からマレー語の葉書を受け取った。あー、バップケも書いてくれた事を僕は非常に願っているが、我々のものは勿論まずジャングル・キャンプへ行き、それからやっと又送られる、だから僕が何かを聞く前にはかなり長い事かかるだろう。

オットウン

1943年7月19日

[キャンプ105 (ビルマ)] 約2～3週間毎にこのキャンプで新聞が受信される。この新聞は、英語で印刷され、Greater Asiaという名で、日本軍によって出版されているらしい。この新聞はグループからグループへ回る。グループ指揮官達が其れを持って兵舎に入って来て、時々彼等は

---

<sup>201</sup> 1942年6月28日フェイケマは戦争捕虜として農業学校で抑留されたスカブミに最後の彼の妻と娘達の訪問を受けた。(N I O D、蘭領東インドの日記収集、M.フェイケマの日記)

自らその新聞を読み上げるが、彼等は其れを読ませたりもする。我々のグループでは朗読者はワイネで、彼は又ある通報が何を示唆しているのかを正確に伝える事を心得ている。ドイツ軍が北アフリカのモントゴメリーにより追放された時、新聞には、北アフリカがもはやドイツにとって重要で無くなったので、ドイツの軍隊司令部が軍隊を退却させた、とあった。そして日本軍が未だソロモン諸島を占領中、日本とアメリカの軍艦の間で海戦の最中である、という風に我々は読んだ。数版後のGreater Asiaにニュースが載っていて、それは日本の空軍がソロモン諸島にあるアメリカの陣地の襲撃を執行した、というものだ。“ほらね”、その時ワイネが解明した、“このニュースから我々は、アメリカがその時海戦に勝利を得、日本軍がソロモン諸島から追放された、と読むことが出来るのさ。”

ボム

1943年8月20日

[アンガナン (ビルマ)] 我々は今日2回目の模範赤十字カードを送る事が許された。

ドゥ フラウター

1943年9月15日

[カンチャナブリー (タイ)] 今日の午後夕食前に突然ここに病人を連れて来たデルクスウンの訪問があった。彼はここの近所の[W.] スヌープとラウスと同じ労働キャンプに居て、元気そうに見えた。彼が伝えた所では、今日再び100人の連中が[労働キャンプ] 上流へ向かって出て行き、明日と明後日更に200人が続くことだろう、と！故に残念ながら未だ終わっていないのだ！

ドゥ フラウター

1943年9月24日

[カンチャナブリー (タイ)] 今日又愛する者達の事をととても、とてもたくさん思い、非常に彼女達を切望した。何時我々は再び一緒になれるのだろう、そして彼女達は今如何しているのだろうか？僕は最近その事で非常に不安にさせられる。未だ尚ジャワからは葉書を受けとっていないが、今現在2000通選別されなければならない。その中にベップケからの何かも有る事を非常に望んでいる。

ドゥ フラウター

1943年9月27日

[カンチャナブリー (タイ)] 昨夜イギリス人が彼の受け取った郵便から更に公表した [...]。他に彼は目下オランダ人達にもジャワから郵便が届いている事を少々報告した。これがここにあるのだが、直ちに手に入れる事は許されない！グループ2の我々の郵便は選別後まずグループ2の司令部へ送られ、其処で検閲されそれからやっと配られ、つまり我々に再び送り返される（もし我々が少なくとも未だここに居れば）。だからもし何か僕に来ているとしたら、其れを僕が受け取る前にまだ長くかかるということだ。ま、しかたない、再び幸運を祈ろう。本当なら素晴らしい噂がある！

ドゥ フラウター

1943年9月29日

[カンチャナブリー (タイ)] 今夜と今朝僕のベップケから葉書が届いた事を聞いた。僕は余りに其れを受け取る事を切望していたが、其れは未だかなり長くかかるに違いない。[...] 今日道路で働かなければならない‘作業組’はタイ人によって又もや温かい大豆ミルクをご馳走になった。ある別の時には彼等はお金或いは他の食べ物を貰った。パンツで働いていた一人には、ズボンさえ与えられた。タイ人の態度について近頃は誰ももはや全く何の文句も言わない；彼等は我々戦争捕虜達に対してかなり思いやりがあり友好的だ。

ペルクイン

1943年10月8日

[ヒンダート (タイ)] 毎日病人達がチュンカイへ向かう旅の途中にヒンダートへ入って来て、今日僕は終にヘルマン [彼の弟?] について少々聞いた。彼は良好で、[彼は] 未だ健康だ。彼は三仏塔峠の近く、最上流のキャンプ連の一つで働いている。

ドゥ フラウター

1943年10月9日

[カンチャナブリー (タイ)] 今だ尚郵便を受け取っていない、残念ながら。

ウェストホフ

1943年10月11日

[レトポウ (ビルマ)] 色々なキャンプを通った旅から戻ったまさしくその [C. Mak] 牧師と [A. W. M. フェルヘースト] 神父によれば、ここに生きている我々は彼等のと比べたら天国だ、と、其れで多くが分るというものだ。

ドゥ フラウター

1943年10月13日

[カンチャナブリー (タイ)] 今朝僕は最愛のベップケから昨6月14日付けの葉書を受け取った。彼女の手書を再び見ると記述を読む事は嬉しかった。しかし2人の愛する子供達がディフテリティス<sup>202</sup>になって4週間入院していた事を読んだ時、僕は驚いた。其れは皆に、特にベップケには大変な時であったに違いない。アー、其れは思いもよらぬ事だ！しかし全てが無事に終わった事は何と大きな幸運！我々は神様にその事を感謝しなければ。愛する小さなトゥルーシュもえらく強くなって今だ尚青い目をしていると読んで嬉しかった。彼女達に今本当に足りない物は‘皆無’だろうか？我々は経済的な事に関して心配している。後は全てが良好で彼女達がもはや病気にならない事を願い、われわれがみな互いには約健康で再会できることを祈るとしよう！今日僕はこの葉書を既に余りに何度も読み返したので、殆どそれを丸暗記している。しかし僕は未だもっともっと頻繁に読もうと思っている、というのはそれが終に再び僕の最愛のベップケと又愛する小さな子供達からの何かであるから。

ドゥ フラウター

1943年10月24日

[カンチャナブリー (タイ)] ファン デ ゼイは一昨日再びケディリにいる彼の妻から2通の葉書を受け取った。[\*…\*] マランから8月20日付けの葉書を受け取った。僕もベップケから更に何かを聞く事を、特にその悲惨なディフテリティスの話しの後、非常に願っていた。

---

<sup>202</sup> ジフテリアの間違った名称。

ドゥ フラウター

1943年11月7日

[カンチャナブリー (タイ)] 今晚 [A.H.] フェルカウルが来て、彼の妻 (バトゥ) <sup>203</sup>から彼に通報が届いたと話した。僕にも又葉書があるらしい。誰からかは残念ながら分らない。僕は凄く楽しみで、この通報が、子供達の病気が後都合良く行っている事を非常に願っている。

スネルン ファン フォルホーヴェン

1943年11月7日

[カンチャナブリー (タイ)] ジャワからの素晴らしい手紙：全ては良し。僕には何も [無かった]。

ペルクイン

1943年11月8日

[クウィマ (タイ)] 一昨日ジャワから僕等に郵便物が有った。家から写真付きや無しやの手紙を受け取ったことは最高に嬉しかった。彼等は手紙にキスをし、彼等達の涙を流れるままにさせていた。[実に] 残念な事に其処には僕への郵便が入っていなかった。僕の懐かしいミンチュの写真が手紙の中に入っていたりしたらどんなに僕は嬉しい事だろう。ま、仕方がない、如何に早く僕が彼女を再び見られるか誰が知ろう。

ドゥ フラウター

1943年11月9日

[カンチャナブリー (タイ)] 昨日は何も特別な事は無し。読書はしなかった、というのは昨夜ベップケから貰った葉書の内容について余りに気が張り詰めていたので。其れは昨夜食事の後届いた。今夜マレー語の原文のコピーを貰う事を願う。幸い良いニュースだった。葉書は8月25日付だった。トゥルーシュはとても頭が良い様で、既に良く喋り、又僕に良く似ている。キキとベッピーにおいても幸い全て良好だ。[...] ホルマンズ経由の通報でベップケが今僕から何も

---

<sup>203</sup> バトゥ (東 - ジャワ) は山岳地帯、マランから北西約15キロメートルの所にある。

受け取っていない事が分った。実に酷い、察するに余りある。僕の書物は故に正しい場所に届かなかったのだ。

フェイケマ

1943年11月10日

[カンチャナブリー (タイ)] 昨日、11月9日日曜日僕は君からこれらの最も楽しい写真を添えて葉書を受け取った。何と嬉しい日であったろう [\*…\*] そして実に最近、7月23日付けの。僕はこのキャンプ中最も幸せな男だ、と思う。僕が1942年6月末前に君達の事を最後に知った後、君達全員が3ヶ月半前まで大丈夫であった事を読むのは素晴らしい。そして写真は君達全員が元気そうである事もはっきり見える。君自身は幸い少しも変わっていない。エルスは既に何と大きな女の子で、幸い彼女は元気だ。この写真を見る誰もが、彼女が随分僕に似ていると即言う。彼女の服、君の服と同じく僕は勿論知らない。ヨークの物は元々エルスのものだったのを君が作った、そうじゃない？そして何と奇麗、髪にリボンを付けたヨーク。何と丸々と太った頬っぺたをこの子はしているのだろう。彼女がまるでカールが随分少なくなっている様に見える。それからこの大きなハンス、残念ながら既に僕には見知らぬ少年。何と大きくなった事だろう。

グルドヴァッチ

1943年11月12日

[クウェ (タイ)] 昨日エルツィ [彼の妻] (!! ) から 3月23日付の葉書。カリーとイルカ [息子と娘] について沢山の話し。彼等は皆元気だ！本当??でなければ逸話の通報になるだろう。彼等は僕の胃について心配している。特に 大いに食べなければ! (でも僕の減量には害悪だ!)

ペルクイン

1943年11月17日

[クウィマ (タイ)] ヘルミンから手紙を受け取った！あー、何と僕は嬉しい！手紙の日付：1943年1月、だから11ヶ月古い。



ドゥ フラウター

1943年12月7日

[チュンカイ (タイ)] ホルマンは昨夜セントニコラスのプレゼントの様に彼の妻と彼の娘達の写真を貰った (昨5月15日付。)

ディッケ

1943年12月16日

[キャンプ55 (ビルマ)] オランダからとジャワから手紙が届いた。

ドゥ フラウター

1943年12月19日

[チュンカイ (タイ)] 昨夜かなり多くの連中が葉書或いは妻や子供の写真を貰った。僕には何も無い。昨11月付けで日本語の若干数の葉書があった。幸いここにそれらを翻訳できる者が居た。我々の妻達は今日本語で通信しなければならないのだろうか?<sup>204</sup>この郵便を通して残念ながらジャワに関しては全て大きな作り話である! あー神様、我々の解放が見えて来る何も起こらないのですか?

オットウン

1943年12月23日

[キャンプ112 (ビルマ)] このキャンプに郵便が持って来られ、その中に多少の手紙があると思う。僕は手紙を受け取ったかなり少ない幸運者に属した。オランダから! 父さんがこれをタイプした。この状況の中でナイメイヘンは全て大丈夫だ。ああ、ヨーリツマ父さん [彼の義理の父親] が亡くなってしまった。かわいそうな君、君がこの通報を聞く時に、僕が君の傍に居られたら。弟のヤンは日本の戦争捕虜収容所<sup>205</sup>に居た。

---

<sup>204</sup> 葉書の文章は日本語、マレー語或いは英語で作成しなければならなかった。(ドゥ ヨング、620)。

<sup>205</sup> この日記に追加された手紙から、ヤンは戦争捕虜として福岡に居た事が分った。手紙は1943年5月6日オランダから送られた。(N I O D、蘭領東インドの日記収集、W.A.B.J.F.オットウンの日記)。

ボム

1943年12月26日

[アンガナン(ビルマ)] [第2クリスマス] 先週我々の若干数がジャワから手紙を受け取った。僕は未だその幸運者には属していない。

ペルクイン

1943年12月27日

[ヒンダート(タイ)] 2日間のクリスマスは過ぎほぼ大晦日の夜だ。愛するミンチュ、クリスマスの間僕は再び凄く君と勿論家の事を思った。この時期を捕虜として過ごす事は精神的に辛い。君、僕等はここで気力を維持して来年間絶対再び一緒になろう。多くはもはや書くことがない、何故なら僕達はここで鈍感になってしまっている。何も読み物がない、残念ながら。様子を見よう。この状況下では無感動になるので、生きる何の楽しみもない。

リブンス

1944年1月7日

[キャンプ130(タイ)] ウェガリ組を含むキャンプ108の連中は既に進んで[次ぎのキャンプへ向かい]、彼等からキャンプ133の駅経由で再び通知、主にオランダに関して、が届いた。色々な連中がとりわけその中からその後を引き出す事が出来るオランダからの、つまり郵便を受け取った。スヘーヴェニンゲンの一部とデンハーグは防衛目的によって家屋が倒壊され、そこから同時にハーグの森が犠牲になった。大部分の20歳から40歳の男性達がドイツで仕事に就かされ、その間全職業軍人-士官達はポーランド(スタニスラウ)へ輸送された。他はオランダ内でドイツに対する嫌悪が徐々に高まってきているだろう。

ボム

1944年1月8日

[カンチャナブリー(タイ)] アンガナンに残留したファンハムは健康な労働者としてジャワへ葉書を送る事が許された。彼は其処へ僕の名前を引き合いに出したので、君が彼の奥さん経由で唯一生きている印を貰える事を期待して。

ドゥ フラウター

1944年1月16日

[チュンカイ (タイ)] 今朝まず鳥の本を交換する為ライト<sup>206</sup>を捕まえる様試みた。しかし彼は居なかった。其れから後我々は家を書く葉書を貰った。インク不足から鉛筆でしなければならなかった。我々が書き入れられる書類 (印刷された) は少々違っていた。今は日付も書き入れてよい事になった。

ドゥ フラウター

1944年1月20日

[チュンカイ (タイ)] 12時とてつもない驚き、つまり僕の最愛のベップケから2通の葉書；1通は10月24日付で、もう1通は切手が破られその上に判子が押してあったので、残念ながら日付が分らない。後者は日本語で書かれていた。幸い日本語の字を知っているそのフリーハーズがいて、彼の助けとウェスターマンの古い日本語の葉書から内容のほぼ全部暗号を読み取る事に成功した。幸い全て良好だ。明日が彼女の誕生日であるベップケの機会に嬉しい驚き。彼女は最後の葉書をタイに書き、だからここからの僕の葉書は受け取ったのだ。

オットウン

1944年1月21日

[カンチャナブリー (タイ)] 我々は再び葉書を書くことが許された。リッチュ [彼の妻] はこの葉書を確かに受け取るだろうか？彼女は如何しているだろうか？ああ、それを余りに何度も自問する。

ディッケ

1944年1月22日

[チュンカイ (タイ)] 今日3通の葉書を書いた：1通はヤンカ [彼の妻]、1通はペーターそしてヒセラ [彼の子供達] そして1通は甥のカーレル。

---

<sup>206</sup> 脚注111参照。

ボム

1944年2月1日

[カンチャナブリー (タイ)] [1月] 23日我々は葉書を家に送る事が許された。2種類の葉書があった：1つはクリスマス版。そのカードを自分で使わなかった僕の連中の一人が君に彼のカードを送った。同じ方法でアムステルダムのレースムへ1通が行った。もしこれらの葉書が目的地に達するとすれば、2年の戦争捕虜収容所後、初めての僕の生きている印となる。僕の葉書が良い状態で君に届く事を非常に願っている。我々は目下大丈夫だが、君達は如何している？何が聞ける幸運は僕に未だ運命として定められていなかった！

ドゥ フラウター

1944年2月27日

[チュンカイ (タイ)] 昨日僕は終にベップケから8月25日付の葉書を受け取った。古いとは言え、でも大歓迎で彼女の手書を再びちょっと見るのは嬉しい。

ドゥ フラウター

1944年3月20日

[チュンカイ (タイ)] 昨日の午後32名のオランダ人ぽっちがラジオ電報<sup>207</sup>を送る事が許される、と発表された。故に区画毎にくじを引かねばならなかった。我々の区画(23人)はたった2通の電報しか送る事が出来なかった。再びくじが引かれた。ホルマン(マランプロボリンゴ)とブルッフマン(セマラン)が幸運者達だった。しかしホルマンは僕の挨拶を彼女に伝える為電報の中に入れようとベップケの名前を持ち、写真も求めた。後で他にも誰か僕の名前を取り上げてくれた事が分った。僕もデンハーグに電報を送る事の出来た者に挨拶を伝えてもらう為僕の名前を間に入れてもらうことが出来た。<sup>208</sup>この電報が彼等の目的地に届く様願おう。(それらはずまりラジオバンコクにより放送される事になる;如何に訛って僕の名前が聞き取れないような発音をされるかもしれないと事を誰が知ろう!)

---

<sup>207</sup> 国際赤十字により一方では戦争捕虜と抑留者達、そして他方ではオランダと連合国連にいる彼等の親戚間で電報を送る事が可能になる様手配された。(ドゥ ヨング、620)。

<sup>208</sup> ドゥ フラウターの義理の両親がつまりデンハーグに住んでいた。

ペルクイン

1944年4月13日

[ノンブラドック (タイ)] 母さんから葉書を受け取る。残念ながら又マレー語だ。タイからの僕の葉書を彼女は受け取った。僕等の家は全てオーケー。このニュースで言うまでも無く僕は嬉しい。

ルーゲ

1944年5月23日

[ノンブラドック (タイ)] 今日ドラ [彼の妻] が僕の居所を聞いていると耳にした。彼女から何か聞いて僕は嬉しいが、直ちに其れが僕の書いた4通の葉書と手紙が届いていない事を裏付ける。しかし我々は目下もはや書くことは許されず、彼女がこの葉書を受け取ってくれる事を望む。

ウェストホフ

1944年6月4日

[ナコムパトン (タイ)] 昨日、6月3日、君からの手紙に驚かされたよ、お前。其れは確かに最近の物ではなかったが、1943年7月8日、でも其れは問題ではなかった。というのはまず最も重要な事は勿論、僕に再びお前が活着ている証が得られた事でとても嬉しかった、ということだ。

ドゥ フラウター

1944年6月18日

[チュンカイ (タイ)] 今日の午後ベップケと小さな子供達の写真で驚かされた。[...] ベップケは彼女の顔がもっと痩せて見える。子供達は元気そうだ。僕は今日その写真を何度も見た。未だ最近の手紙を受け取っていないのは残念だ(マランから今年の4月と5月付けのものだった)。僕は知らせを非常に心待ちにしている。最後のは11月末だった。

ドゥ フラウター

1944年6月29日

[チュンカイ (タイ)] 昨日ビルマから再び連中が戻って来た。食事は凄く悪かった (病院の患者達に肉として鼠と蛇)。彼等は又爆撃や機関銃激戦の残骸も見た。

ドゥ フラウター

1944年7月28日

[チュンカイ (タイ)] 昨日と今日の午後ジャワから又郵便が届いたが、僕には残念ながら何も入ってなくて、又半年何も耳にしない。今のところ全て良好ならば良いが。他の連中が昨5月付けの葉書 (マランからも) を貰っているのに何も貰えないのは実に悲しい。

ドゥ フラウター

1944年8月14日

[チュンカイ (タイ)] キンサヨックから土曜日数名の病人 (2名のオランダ人を含む) が下流に came。仕事は軽く、食事は普通、兵舎は良くて、支払いは日に35セント。タイ - 食堂<sup>209</sup>で物を買う事が出来た。虎に大変困っていた [...]。彼等は肉を14日毎に貰った。

ボム

1944年8月31日

[ターマカン (タイ)] 6日我々はお金を家に送ろうと試みた。これは断られた。でも既にこの期間家から未だ嘗て何も耳にした事のない連中 (大半!) にはジャワにて問い合わせをさせるだろう。君がそれによって何か耳にする事を願い、そして僕が何か聞ける事を祈る。

---

<sup>209</sup> タイの支配人による食堂を示唆している。

ボム

1944年11月15日

[ターマカン (タイ)] 又もや僕が多少紙に書き記す誕生日。<sup>210</sup>でも君が何時の日かこれを目にすることがあるだろうかと自問する?既に25ヶ月もの長い間僕はもはや何も君の事を知らない。

[...] でも時々噂が入ってきて、シンガポールにいる女性達が苦勞しているという。オーストラリア人とアメリカ人は頻繁に沢山の手紙を受け取るのに、日本軍はジャワ或いはスマトラからの郵便が我々に届く調整が出来ないのか、或いはしたくないのか!

ドゥ フラウター

1944年12月28日

[チュンカイ (タイ)] 今日我々は自分達の妻に25文字自由に手紙を書くことが許された。如何なる仕事とどのキャンプに滞在していたかは報告しては行けなかったけれども。この下書きは日本語、英語或いはマレー語に翻訳されなければならなかった。其れはタイプされる為カンチャナブリーへ送られ、其れから署名をするのに我々の手元へ戻って来る。

ボム

1945年1月1日

[カンチャナブリー (タイ)] 我々は25文字で葉書を書くことが許された。その中には僕がラテン語を習っていたことを書くことによって、僕に休日があった事と精神的に冴えている事を暗示したかった。

ドゥ フラウター

1945年1月15日

[チュンカイ (タイ)] 昨日やっと未だタイプされていない葉書に署名をしなければならない。これが目的を達成する事を願う。

---

<sup>210</sup> ボムはこの日で44歳になった。

ボム

1945年2月11日

[カンチャナブリー (タイ)] 3日前僕は初めてほぼ2通そして半年間は君が生きている証を貰った。君が去年の7月から10月にかけて多かれ少なかれ元気であった事をに気付くのは素晴らしい。C. R. は我々が理解するに、バタビア<sup>211</sup>の意味だ。東ジャワには収容所が無いと理解したが？

ドゥ フラウター

1945年3月24日

[チュンカイ (タイ)] 嬉しい日。と言うのは終にベップケから葉書を貰った。幸い全てよし。出所はアンバラワ抑留所？日付は書いていない、恐らく1944年7月 - 8月。残念ながら彼女は僕から1枚の葉書を受けとったばかりだ。合計で2000通の葉書が到着した。C. Q. (バンドゥン?) とC. P. (アンバラワ?) から。

グルドヴァッチ

1945年3月28日

[プラカノン (タイ)] 昨日我々は少々気の狂った体験をした。我々が港で荷降ろしをしていた間多くのタイ人が我々を見る為立っている。1人が足を引きずりながら益々近づいて来る。日本軍が近くに居ないある瞬間、彼は突然訛りの無いオランダ語で話した：“やあ君達、ここで生存している皆に再会して僕は実に嬉しいよ！”信じられない!!それはフランス！彼は1943年 [N.] トップホーヴェンと [J.] スタイハーと一緒に逃亡した。そして彼は成功したのだ！彼がかなり色黒の印欧混血人であることが勿論彼の幸運であり、だからここでは目立たない。彼は既に1年間タイ人と結婚していて、戦後ここに留まりたいらしい。義理の父親がバンコクに服地店を持っている。[我々は] 未だ尚気が転倒している。彼は我々に会う為もう一度試みると約束した、特に何か決定的な事が起こる時は。<sup>212</sup>

---

<sup>211</sup> 日本軍はキャンプを示唆するのに2文字のコードを使用した。C. R. は日本の管理ではバタビア - 収容所のコードであり、C. Q. とC. P. はそれぞれ中央ジャワのチマヒ/バンドゥン地方の収容所であった。

<sup>212</sup> 項目 ‘日本軍による抑留者達の取り扱い’ 1943年8月1日グルドヴァッチの日記断片参照。



ボム

1945年4月1日

[カンチャナブリー (タイ)] 12週間前ここに1月ジャワから来た(その前彼等はフローレス  
或いはアンボンに居た)数人の将校がサイゴンから到着した。僕が聞いたところでは、君達は明  
らかにまずまずに暮し、ケース・スホーレルはサイゴンの近く居て、[T. C.] オッフエルハ  
ウスはバタビアに、[そして] フェルプルーフ [と] シャッセはチマヒに[居る]。

ドゥ フラウター

1945年5月5日

[チュンカイ (タイ)] このキャンプに大きな期待。去年6月にこのキャンプを離れた日本(行  
き)組が海で連合軍の爆撃に遭い破壊された。<sup>213</sup> 900人の行方不明のリスト(イギリス人、  
オーストラリア人そしてオランダ人)が発表された。134名の行方不明のオランダ人がいて、  
その中に沢山の仲の良い知り合い達、とりわけハウサー、[J.] ファン デン エンデ([栽  
培会社] D j [ジェルブック]、ファン ラッパード、アーベンダノン、プント看護師、スクレ  
ウダー(森林監督官)、コーヘン、ファン ベイク、プロゲス、ドゥ フェイター、コーイ(海  
軍フルート奏者)、ドゥ コルヴェー、ズウィ-プ(リハビリ体操D j [ジェンバー])。

ウェストホフ

1945年5月15日

[ナコムパトン (タイ)] 数日前私は再びお前から1943年9月付けの葉書を貰った。特に私  
の妻が元気で勇気を持ってこの酷い時期を過ごしていると知って、私の勿論非常に嬉しい。

---

<sup>213</sup> 恐らくドゥ フラウターはここで1944年6月27日日本へ連行したほぼ1300名の英国人とオランダ人の戦  
争捕虜を乗せてシンガポールから出航したホクク丸を意味している。エンジン損害の為途中停止後、この  
船は1944年9月21日マニラから約35隻の護衛船団で北方面に向かって出発した。約75個の急降下爆撃機が  
- 2隻の水雷艇駆逐艦を除いて - 全護衛船団を沈没させた。ホクク丸の沈没はほぼ800名の戦争捕虜の命を  
失った。生存者の一部は1944年12月マニラの港から日本へ出発した時アメリカ海軍の飛行機により砲撃さ  
れたオリフ丸に乗船して再度遭難の犠牲者になった。(ドゥ ヨング、680-682)。

ドゥ フラウター

1945年7月6日

[チュンカイ (タイ)] 昨日郵便が分配された。僕には無い。コックには日付無しの葉書がマレーシアから、そしてそれは再び送り返されてきた。今C. Q. から。我々の愛する妻達は今再びC. Q. に連れ戻されたのだろうか？マランからの連中のほかの葉書は [\*…\*] 今だC. P. から [来ている] [...] パンフレット<sup>214</sup>何とがっかり、少ないニュースを運んで。今年終結するのだろうか？ロシアは参加しないらしい。多分来春になってからであろう。未だ余りに長い！

---

<sup>214</sup> 鉄道の上にはばら撒かれた連合軍のパンフレット。

## 戦争の経過についての報知と流言

ディッケ

1942年6月9日

[タヴォイ (ビルマ)] 夜に、シンガポールが陥落し、日本兵3万人が捕虜になったという知らせが来た。[...] ある日本人将校は1942年6月3日にロシアが日本に宣戦布告した、と明言した。

オットウン

1942年6月28日

[イエ (ビルマ)] 時々、素晴らしく空想的な噂が、いつも信頼の置ける筋からの情報としてキャンプを駆けめぐる。情報源はいつもきちんとした服装のビルマ人で傘を差し、時には金歯を入れているが、いつも立派な英語を喋る。こうしてドイツはもう何回もフランスで連合軍に敗れたことになっている。もう少し近場ではラングーンがまたしてもイギリス軍に奪還された。これらの噂の信憑性の薄さにもかかわらず、僕たちの中の多くはこれで心理的に高揚することができた。

オットウン

1942年7月1日

[イエ (ビルマ)] 昨日の夜にタヴォイから200人のオランダ人が来て、やっと幾つかの新情報を得ることができた。[...] 全体の交戦状況に関して、この新グループは華々しいニュースを持ってきた！ジャワはまたしてもアメリカ軍が占領したという。この噂はタヴォイで激しく飛び交い、ある晩にはキャンプ中が大騒ぎになったそう。夕暮れ前に、連合軍がビルマに上陸したという噂が流れた。この噂は日本軍の兵士が列をなして次々とキャンプのそばを行進していったことで強められた。夜遅くなって、イエが連合軍側の手に落ち、今や早急にタヴォイに突進していると言われた。何人かはすでに遠くに大砲の音を聞いたとまで言った。その時多くの人たちはこれまで大切に取って置いた保存食の缶を開け、殆どみんなが野戦袋を用意した。もちろん寝た人は全くいない。最もひどい悲観主義者でさえこの噂を信じ始めていた。朝になっても男達は神経をとがらせて何時間か集まっていた。しかしその朝が進み、何人ものヤップたちが落ち着いて村を散歩しているのを見、ビルマの商売熱心な者達がカワット [鉄条網] の所に現れ、上陸に関しては何も知らないことが分かると、昨晚のは、ひどくそれらしい噂でしかなかったと認めざるを

得なかった。多くの人にとってこれが精神的に大きな打撃だったことは言うまでもない。それでは誰がいったいこんな噂を流したのか、と思う。この噂の出所は決して分からないだろう。

ディッケ

1942年7月9日

[タヴォイ (ビルマ)] 65隻の連合軍の輸送船がシャム湾に到着した。ペナンは連合軍が占領した。

オットウン

1942年9月9日

[タンビュザヤット (ビルマ)] 夜に、幹部の従卒が僕たちの兵舎に居た彼の友人の所に来た。この訪問者はBBCの放送を聞いたと言った。<sup>211</sup>25師団、およそ1,000機の戦闘機と共にロシアのスターリングラードに向けて進軍していたドイツ軍は随所で敗北をきっし、非常にのろい行軍を続けている。太平洋の戦いに関して言えば、ソロモン諸島はアメリカ軍とオーストラリア軍によってヤップたちから奪還されたという。アメリカ空軍は制空権を得るために大量強化されたらしい。この情報伝達の特徴は誰もどうやってその情報を手に入れたのかを聞かないことだ。そう、BBCを聞いた、しかし彼は自分でラジオを聴いたのか？それともこれも英語を喋るビルマ人からのものなのか？全ての人たちがこれが本当のニュースだと疑いもせずにとめていて、連合軍がこの戦争に勝つと確信しているためでもある。

ディッケ

1942年10月16日

[ウェガリ (ビルマ)] 9月29日、タルトゥンで大きな戦い。2万人の日本兵が死傷し、4000人が捕虜となる。シンガポールとペナンが包囲された。ラングーンは毎日爆撃を受けている。ジャワとスマトラは解放された。

---

<sup>211</sup> 鉄道全長に渡って、秘密裏にラジオを持っていた。数十台のラジオがあったと思われる。(Daws, 245-246)

ウェストホフ

1942年10月25日

[タンビュザヤ(ビルマ)] 10月25日、日曜日はジャワのオランダ人戦争捕虜が直接ここに送られてきて、大失望だった。すでにここしばらく、あの島が連合軍の手に落ちたと教えられ、それが絶対に本当だと誓われていたからだ。その全てが真実ではなかったということが分かって、いかにひどい幻滅だったかは誰にでも理解できるだろう。

オットウン

1942年11月9日

[ウェガリ(ビルマ)]夜には第8と第9グループだけが大きな焚き火のもとに集まり、[F.O.B.] ムッシュ大尉が世界の動きに関して講演をした。この大尉は戦況をとてよく知っていた。前線の地名をあまり言うことなく、彼は連合軍はヨーロッパでもアジアでも、すでに防戦態勢ではなく、攻撃態勢に入っており、多くの場合大きな前進を遂げている。ロシアの状況は殆ど硬直状態である。ドイツ軍の大量流入は停止したようである。僕たちは多大な関心を寄せながら聞いていた。

オットウン

1942年12月17日

[ウェガリ(ビルマ)] 昨日の夜、またニュース(これはビタミンN<sup>212</sup>と呼ばれている)を聞いた。リビアではイギリスとオーストラリア軍がアルアゲイラを征服したか、あるいは奪還した。ロシアではドイツの大軍が押し返されている。

ペルクイン

1943年2月19日

[リンティン(タイ)] 噂には不足していない。頑強にドイツが降伏したと主張している。ヤップさえもそれを認めた。

---

<sup>212</sup> 連合軍成功のニュースは抑留者を奮起させるものだった。

オットウン

1943年 3月10日

[アナクウィン (ビルマ)] 夜に、主にロシアの戦いについてのニュースを聞いた。最も素晴らしいニュースが語られている。何が本当で何が嘘なのか？

ペルクイン

1943年 3月21日

[リンティン (タイ)] また何かが起きている。100台以上のトラックいっぱいの日本軍兵士達がこのキャンプの脇を通って三仏塔峠の方向に走っていった。リンティンにも完全武装したヤップが大勢居る。戦車や装甲車までも見かけた。噂はひきもきらない。ビルマではイギリス軍が大きな前進をし、中国軍はタイに攻め入った。これが事実だとしたら、我々は1943年が終わる前に解放されるだろう。トランプ占いではそのように出たから、そうなるに違いない。時々僕は馬鹿なことだけどトランプ占いに凝って、その占いによれば我々は雨期にはバンポンの基地キャンプに戻り、1943年後半には解放される。今年中に僕たちは家に帰り、家族みんなとヘルミン [彼の婚約者] が健康でいるのに出会うだろう、とかなんとか。

ペルクイン

1943年 5月15日

[チュンカイ (タイ)] 噂にはまだ不足はない。こっそり持ち込まれた新聞、その中には英語で書かれたザ・バンコク・クロニクルもあり、そこに書かれた文章の裏からは日本軍が劣勢にあり、連合軍は強力な攻撃を仕掛けていることが読みとれる。楽観論がまた多くなってきた。またその一方ではイギリスとオランダのグループが検査の結果またもや労働キャンプに発って行って、悲観論もあり、僕もそんな目に遭うのではないかとびくびくしている。

ウェストホフ

1943年 6月22日

[タンビュザヤ (ビルマ)] 聖霊降臨祭の前の土曜日 6月12日の2時半に、飛行機の轟音が聞こえ、そこにまたもやあの6機のアメリカ機が来てまた消えていった。数分後に彼らは戻ってきて、驚愕したことにヤップ達はキャンプから高射砲で打ち始めた、ここには大きな赤十字の印が付い

ているというのにだ。その結果：猛烈な爆撃、全ては地響きをたて、叫び、僕たちの心臓は縮み上がった。僕はベッドの下に潜り込み、爆弾の破片は屋根を突き抜けて僕たちを打ちつける。30分後にそれは終わり、被害の調査が始まった。それはひどいものだった。先ず僕たちの間から15人の死者と大勢の怪我人が出た。腕や足がもぎ取られた人、顔の無い人、足の無い人、頭蓋骨が割れてしまった人などが僕たちの居る病棟に運び込まれた。それは禍々しい眺めで、完全な悪夢だった。 […] 我々の収容所指導者から日本の司令官に対して燃えるような抗議が申し込まれ、その結果としてラングーンに電報が送られ、ここで何が起こったかを無線で連合軍に知らせることになり、僕たちも、僕たちを攻撃することは連合軍の意図である筈がないと信じるために、これで安心することができた。

そして1943年6月15日火曜日が来た、この日を僕たちは決して忘れないだろう。2時に空襲警報が鳴り、僕はどこかの穴に潜り込み、そこに彼らがまたやって来た。1時間の間、収容所に公式攻撃が仕掛けられ、僕や僕と一緒にいた多くの人達が恐怖のために気が狂わなかったのが不思議だ。爆弾は収容所の真ん中に6連発で落とされ、周りのもの全てを破壊した。 […] 3時過ぎにそれは終わり、被害調査が始まった。僕たちの収容所の半分は地上から消え去り、何もかも全て壊れ、膨大な死者が出た。はっきりした数字は僕たちには分からないが、35人と言われ、そしてまたしても恐ろしいほどの数の重傷者だ。 […] 同日の午後、歩けるものは全員（だから僕は入っていない、病が重すぎた。）収容所を出て無人のキャンプへと向かった。 […] 1,500人以上が出ていき、約300人が残った。僕たちは次の日に列車で移送されるはずだった。しかし、それからまだ2日間僕たちは恐怖の中で待っていなければならなかった。

ウェストホフ

1943年6月27日

[キャンプ 22 (ビルマ)] 僕たちは今タンビュザヤから18km離れている。朝9時に、少しでも歩けるものは全員キャンプを出て、自分でどこか隠れ場所を探さなければならない。1時には食事のためにちょっと戻れるが、その後はまたジャングルに入る。前はキャンプの外に一人で居ると撃ち殺されたが、今ではそれが命令だ。僕たちは丘の上にいる。これまで3日間連続で、タンビュザヤへのすごい爆撃を見ている。

ペルクイン

1943年7月1日

[チュンカイ (タイ)] 噂に不足はない。イギリスの将校が、10月には解放されることを賭けて‘スウィープステーク [富くじ]’を主催した。イタリアはもう何度目かの降参をし、ジャワも

何度目かの解放になった。全て素晴らしい‘知らせ’だ。ネバーマインド、士気高揚にはいいものだ。

リブンス

1943年7月10日

[メザリ (ビルマ)] 僕たちがメザリで生活を始めて以来、ヤップたちは定期的に毎日1隊以上のタイ軍の中隊を、徒歩で、あるいは車でビルマに送っている。そのことから、彼らは来るべきモンスーン転換期にここで大きな動きがあると予想しているのが分かり、そこから僕たちは1年前あんなに間違えて持っていた希望的観測を持つ権利が、多分ずっと大きくなったのだと分かる。しかし僕らは、希望を持ち続けるにしても、それに関しては注意深くなっている。

ペルクイン

1943年7月15日

[チュンカイ (タイ)] チュンカイに3ヶ月。ザ・バンコク・クロニクルなどの内密に持ち込まれた新聞によって確認されたニュースがある。連合軍が前線全てに渡って枢軸国に対する大規模攻撃をかけている、という力強いチャーチルの演説。希望はまた膨らみ、僕でさえ今年中に解放される小さなチャンスがあると思ってしまう。

ウェストホフ

1943年7月19日

[レットポウ (ビルマ)] ちょっと中止 [自分の話を]。空襲警報があった。このところ1日に3回もあることがある。ひどく気力を削がれるもので、あの駆け回ったり、叫び声などに耐えられない人が多い。

ドゥ・フラウター

1943年7月23日

[カンチャナブリ (タイ)] 我々が今日読むことのできた7月15日付けのバンコク・クロニクルには、シシリア侵攻やアーケンの爆撃のことが沢山出ていた。シシリアでは良好に進んでいるよ



うだ。この悲惨な情況が全て終わったらどんなに素晴らしいことだろう、そして私は家で愛する者たちと一緒にいたいと願う。しかし、いつも彼らのことを考え、その時が早く来ることを祈る。希望が私たちをここで生かしている！

リブンス

1943年 8月20日

[キャンプ 105 (ビルマ)] 僕たちがここで毎週(ただし半月から一月の誤差を含めて)受け取る日本の新聞(グレート・アジア)によると、7月に殆ど全ての場所で大規模な連合軍側の攻撃が行われ、ルーズベルトは1943年が決定的な年になると宣言したらしい。シシリアに対する大攻撃、ロシアや太平洋の島々では大規模戦略が展開され、僕たちは皆これが期待通りの結果を、とても早い時期にもたらすことを信じている。ヤップたちでさえ、この新聞によれば、9月には連合軍がここビルマで大規模攻撃を仕掛けてくると予想している。神よ我らを助け賜え、それが本当に起こった時、そして彼らが僕たちをまた引きずり回し始めたりした時に。1ヶ月後くらいにはこれに対する答えが得られるように祈る、それとももっとずっと長くかかるのか?この答えを知っているのは唯一人だけ、彼[神]に全てをゆだねよう。

リブンス

1943年 8月23日

[キャンプ 105 (ビルマ)] 今見ているとおとぎ話のようだが、しかしその願いが叶えられるのも、もしかしたら僕たちが考えるよりも早いかも知れない。驚いたことに1943年8月8日付けのグレート・アジアに、ムッソリーニが辞任してバドグリオ<sup>213</sup>に代わり、ファシスト党が解体されたと出ている。枢軸国の最初の専制君主が倒れたわけだ。2番目が続くのはいつだ?あの党が解散したので連合軍とイタリアの交渉が可能になった。いつドイツの番になるのだろうか?

---

<sup>213</sup> このニュースは事実に合っていることが分かった、というのもムッソリーニは失脚し、ピエトロ・バドグリオがその後を次いだからである。バドグリオは元帥で、1928年から1933年にかけてリビアの知事であり、1936年にはエチオピアの副王になった。イタリアに戻ってから、1940年12月6日に彼は退位した。彼の目的はイタリアを戦争当事国から外し、ムッソリーニを失脚させることだった。バドグリオが首相に任命されてから2ヶ月とたたない1943年9月3日に、イタリア降伏が調印された。

リブンス

1943年9月2日

[キャンプ 108 (ビルマ)] 8月29日は母の誕生日で、つまり祝いの日、しかし今回は昨年よりずっと期待の持てる将来の見通しの元に祝うことができ、それだけでも大きな喜びだった。今年中に懐かしき祖国と連絡を取れる望みはいまだにとても大きい。この日は占いの面でも重要で、それというのもベルダーとかいう奴が1943年3月に、8月5日から29日の間に僕たち戦争捕虜にとって、そして全世界状況に取って決定的なことが起きる、と予言したのだ。この情報源によれば、僕たちは1943年11月17日に蘭領インドに戻っている。この予言が当たった形跡は余りない。<sup>214</sup>

ウェストホフ

1943年9月8日

[レトポウ (ビルマ)] しかし後でチェックするために、噂を一つ書いておこう。それは：8月にドイツの街がひどく爆撃され、死者が沢山出た。その結果、女性達が抵抗に立ち上がり、それに向けてゲシュタポが発砲した。軍もこれを許さず、争乱となりクーデターが起きた。ヒトラーは退任させられ、ゲシュタポは解体され、スハフト博士<sup>215</sup>が枢軸側と連合国側との仲介役に任命された。1943年8月27日に交戦停止が調印された、というものだ。僕は好奇心でこれを書いているだけ、信じてはいない、僕たちはもう何度もだまされているからだ。

スネルン・ファン・フォルホーヴン

1943年9月14日

[タマルカン (タイ)] 飛行機。ヤップは赤十字の旗を広げた。6x8メートルで、初めて赤十字の旗を掲げた。

---

<sup>214</sup> ‘収容所組織／ヨーロッパ人及び日本のスタッフ’の章、1943年9月2日リブンスの日記よりの抜粋参照。

<sup>215</sup> H.G.H.スハフト博士はドイツの経済学者で金融専門家。1923年から1930年まで、そして1933年から1939年まで、彼はドイツ中央銀行の総裁だった。1934年から1937年まで経済大臣を務め、その後1943年までは担当無しの大臣だった。1944年にヒトラーを襲撃して以来拘禁されていた。ニューレンブルグ裁判では彼は無罪になっている。

ディッケ

1943年9月29日

[キャンプ 55 (ビルマ)] 噂は日本の週間新聞グレート・アジアによって大体確認される。北アフリカ作戦の終結、パンテレリアの陥落、シシリー攻撃と占領、ムッソリーニの退陣。ソロモン諸島とニューギニアの占領など。

ドゥ・フラウター

1943年10月19日

[カンチャナブリ (タイ)] ‘フィリピンチェ’はどうやらうまく行っているようだ。<sup>216</sup>どこかで [日本を囲む] 輪が閉じようとしている！

ドゥ・フラウター

1943年10月27日

[カンチャナブリ (タイ)] 寝ながらひどく愛する者たちのことを思い、彼らに会いたかった。‘集中的で激烈な戦い’に関する噂のために、彼らのことが心配だ！シンガポール北部への上陸の噂。真実にしては早すぎる。この噂キャンペーンの源はどこだ？去年マラン収容所でのこの様なキャンペーンのことを全てまだ覚えている、我々の気持ちがあの時どれだけ裏切られたことか。警察 (!) の務めをするために出ていくといわれ、そして我々はタイに到着したのだ。

ドゥ・フラウター

1943年11月6日

[カンチャナブリ (タイ)] V. はまたもや本当に意気消沈させるような知らせを持ってきた、それはヘッドクォーターの ‘キングフィッシャー’<sup>217</sup>大尉がついこの10月に何枚ものバンコク・クロニクルを読んだにもかかわらず、太平洋での戦闘の話は全く載っていなかったというものだ。つまり、時間が経てば経つほど全ては残念ながら空想かまやかしを元にした話だったことが明らかになる！失望がどんなに大きなものかは理解できる！

---

<sup>216</sup> これはフィリピンにおける連合軍側の戦況優勢の噂を指している

<sup>217</sup> 日記にあるドゥ・フラウター自身のメモによれば、これはW.F.アイスフォーフル大尉のこと。(NIOD, Indische dagboekencollectie, dagboek H.J. de Fluiter)

ドゥ・フラウター

1943年12月11日

[ チュンカイ (タイ) ] 噂は全く無くなった。私たちはこれからどうなるのか全く分からない。絶望的だ。

オットウン

1943年12月20日

[ キャンプ 112 (ビルマ) ] 昨日の夜は僕たちのキャンプのかなり上空を飛ぶ連合軍の飛行機のエンジン音で目が覚めた。するとあのような爆撃機の乗組員が、コップ一杯のコーヒーと、ハムサンドイッチを手に持って、居心地良く機械のそばに座っている様子が頭をよぎる。

ドゥ・フラウター

1943年12月20日

[ チュンカイ (タイ) ] 昨夜は寒く、またひどく不安な夜だった、それというのも外国の飛行機の訪問を4回受けたらしく、それは我々にもはっきりと聞こえ、それに向けてこの近くの戦略的な橋<sup>218</sup>やその他に設置された日本の高射砲が反応して激しく砲撃を始め、このための我々全員が揺り起こされた。榴弾の破片が幾つかの兵舎の屋根を突き抜け、しかし幸いにも怪我人は出なかった。榴弾がうなりをあげてキャンプの上を飛び交った。これからの日々(夜)、どの様なことが待っていることか!

ボム

1944年1月8日

[ カンチャナブリ (タイ) ] 今年の第一日目は空襲警報のおかげで30分間防空溝の中で過ごした。僕たちは対空砲の爆煙は見たが、飛行機自体は空を背景には見えなかった。

---

<sup>218</sup> よく連合軍爆撃機の標的になっていたタマルカンのそばの橋。同章1944年11月30日のドゥ・フラウターの日記、及び1944年12月14日のボムの日記抜粋参照。脚注54も参照のこと。

オットウン

1944年2月11日

[カンチャナブリ (タイ)] 昨夜はアメリカの飛行要塞が僕たちのキャンプ上空を高く渡っていくのが聞こえた。すぐに日本の高射砲が激しく打ち出した。しかし数分後にはまた静かになった。

ルーゲ

1944年3月22日

[ノンプラドック (タイ)] 噂。ノンプラドックに28,000人の男達が来させられる。バンポンが激しい空爆を受けたという、ヒンダトでこの間広まった噂はここで確認された。

ボム

1944年3月29日

[カンチャナブリ (タイ)] もう僕たちの生活はまた一月経ってしまい、つまりこの戦争も同様だ。この後者に関しては規則的にとっていいほどに、満足のいくようなニュースが入ってくる、僕たちにとっては進行が遅すぎるが。

ペルクイン

1944年5月3日

[ノンプラドック (タイ)] 僕たちの隣のキャンプにある高射砲がイギリスの飛行機に向けて発砲した。この後空爆がなかったのは幸運というべきだろう。連合軍の飛行機がしょっちゅう来るようになってきたから、この様な撃ち合いもこれからよくあるだろう。新しい恐怖が僕らを待っている。

ドゥ・フラウター

1944年6月6日

[チュンカイ (タイ)] 昨日午後、3時間近く空襲警報が鳴った。空のかなり上空に大きな機械を見た(飛行機雲!)。この近所に爆弾も落ちた。高射砲が打ち始めた。

ウェストホフ

1944年7月4日

[ナコムパトン (タイ)] あまり新しいニュースはないが、ここで聞くニュースは全然当てにならない、事実上誰も、少しも信じていない。例えばフランスへの上陸、パリはもう陥落したなどのナンセンスだ。

ドゥ・フラウター

1944年7月28日

[チュンカイ (タイ)] ヒットラーが襲撃され、多くの将軍や提督が多かれ少なかれ負傷したという話を聞いた。

ウェストホフ

[おそらく日付は1944年9月14日]

[ナコムパトン (タイ)] ほぼ1週間前(9月7日)、またもや僕たちの悲惨な現状をもっとひどくする災難が起こった。その1日前の午後、また空襲警報があり、偵察機が来た。同じ夜、[\*…\*]<sup>219</sup>爆撃機がやって来て、僕たちの隣のキャンプが激しく攻撃された。直接的なオランダ人犠牲者数が54、それに百人におよぶ重傷者だ。全員ひどく打ちひしがれた。自分たち側の飛行機に殺されるなんて、本当にひどい話だ。

ボム

1944年11月30日

[タマルカン (タイ)] 昨日の夜の日没直前に、すでに数ヶ月の間予想はされていたが起きなかったことが遂に現実となった。僕たちが点呼場に整列していると、21機の4発爆撃機が現れた。最初の飛行でもう爆弾を落とし、幾つかは僕たちのキャンプに命中した。大型の爆弾で、破壊力も大きかった。死亡18人、怪我人34人。死亡者の中にオランダ人1人、怪我人は3人。夜を通して、(そして今日も) 行方不明者を掘り出すために働いた。その夜はまた空襲警報が鳴ったが、今回の目標は僕たちではなかった。キャンプの雰囲気はもちろんととても不穏だ! 列車はまたは動

---

<sup>219</sup> 日記原本の一部がここで抜けている。

きだし、この夜は高射砲もまた鳴っていた。つまり爆弾はその目標を外したのだから、彼らの訪問をまた受けることになるだろう！今回も、この危うい瞬間に君の名前を呼ぶことで勇気を奮い起こした！君に戦争の苦しみが及びませんように、あるいは君がそれを乗り越える勇気を持つことを祈っている！

ドゥ・フラウター

1944年11月30日

[チュンカイ (タイ)] リターンパーティーが、攻撃は高射砲基地を目標としていたというニュースをもたらした。<sup>220</sup>15から20の爆弾が落とされ、飛行高度は1,500-2,000メートル。死亡したのは14人の戦争捕虜、その内1人がオランダ人、それは [D. L. A.] エンゲルベルツだ。怪我人約30、4人が行方不明。

ボム

1944年12月14日

[タマルカン (タイ)] この14日間は休み無く空襲警報が鳴り、爆撃がこの地域にあって、昨日の夜はまた我々の橋が目標だった。我々のキャンプでは1人死亡、1人怪我。今朝もまた僕たちは12時から2時半まで隠れていたが、攻撃目標はかなり離れたところだった。

ドゥ・フラウター

1945年2月14日

[チュンカイ (タイ)] 昨日午後、4時45分に全く思いがけない連合軍爆撃機の攻撃がタマルカンの橋に対してあった。[...] 今朝タマルカンから到着した約20人の病人から聞いたその爆撃の結果は：橋の一部から2つのアーチが無くなり、橋梁が1つ、端を水の中にぶら下げている以外は消え失せ、修繕不可能なほどに破壊された。あれはヤップがジャワからここまで運んだマディウンの臨時橋だった！！木の橋もひどく壊れた（約1週間の修繕）。

---

<sup>220</sup> 1944年11月29日夜、連合軍のリベレイター型飛行機による空襲があった。目標はドゥ・フラウターが聞くところによれば、タマルカンのそばの橋であった。(NIOD, Indische dagboekencollectie, dagboek H.J. de Fluiter)

グルドヴァッチ

1945年3月5日

[プラカノン (タイ)] これが日常にならなければいいが。昨夜はこれまでに無いほどの花火だった。僕たちが寝ている納屋は北西地区に40ある。南東の角から約10棟は昨夜火にくべられた。ゴムでいっぱい、ものすごい臭いと煙だった。さらに、僕たちの野原から大体100メートル位の所にあった朝鮮人兵舎が幾つか燃え上がった。それは素晴らしい眺めで、今回は僕たちも何が起きているのか見られ、あまり恐ろしくもない。僕たちの納屋の屋根にも今や穴が3つ開いている。もっとひどくなっていた可能性もある。

グルドヴァッチ

1945年3月28日

[プラカノン (タイ)] 初めて激しい日中の爆撃があった。6発の飛行機もあった。戦争捕虜の1グループは丁度コゴタイ石油備蓄所に保全当番に行っていた。僕たちに関していえば一番近い爆弾は約500メートルほどの所に落ちた。オーストラリア人3人、オランダ人1人が死んだ。全ての納屋の屋根は今やボロボロだ。水道と電灯は‘一卷の終わり’。僕たちの便所は直撃された。僕たちの壊れた屋根のおかげで、全ては文字通り糞尿に覆われている。

グルドヴァッチ

1945年4月1日

[プラカノン (タイ)] ビルマとフィリピンに関する噂。そしてドイツはまたしてももちろん降伏した!!! 単調になってきたね。

グルドヴァッチ

1945年4月19日

[プラカノン (タイ)] またもや日中の爆撃。また、僕たちの労働グループの1つが石油備蓄所にいた。今回は機関銃を撃っている者の中にライフル銃兵も居た。元気がなくなってくる。それでも彼らがあんなに高いところから結構正確に撃ってくるのは大したものだ。



ドゥ・フラウター

1945年5月1日

[チュンカイ (タイ)] 良い日だった。ドイツが降伏したという噂が広まった。あの通訳も噂としてそう言ったという。希望に満ちた雰囲気。

ドゥ・フラウター

1945年5月6日

[チュンカイ (タイ)] 日本人医師ノブサワが試験室に来て言った。“[英語で] 君に嬉しいニュースだ” 一人が“私に?” と聞くと、“いや、君たち皆にだ。私が言うわけにはいかないが、多分‘ナンバーワン’ [収容所司令官] が明日知らせるだろう。” 彼は大国はあと4つしか残っていない、それは日本、ロシア、イギリス、アメリカだ、とも漏らした。“他の全ての国は‘スコシ、スコシ’。” あの通訳がまた、ヒットラーは死んだ、といった。ドイツは‘[英語で] イギリスとアメリカに無条件降伏’し、しかしロシアとは戦い続けている。さらに、ロシアが英国領インドに攻め込んだ。琉球諸島上陸で、アメリカは船600隻と800,000人の兵隊を失った、といい、これら諸島が奪還されたら戦争捕虜は出ないだろう、それほど壊滅的打撃をアメリカの戦艦隊は受けた、しかし(それにも関わらず) 本州上陸はいつ行われても不思議ではない、という。この全ての相反する[情報で] キャンプは興奮し、希望に溢れた雰囲気になった。

ウェストホフ

1945年5月15日

[ナコムパトン (タイ)] 近頃聞くニュースが全て本当だとすれば、ドイツは陥落して、ヨーロッパの戦争は終わったことになる。この噂はしかし、本当にしつこくて、僕たちはそれを信じざるを得なくなってきた。

グルドヴァッチ

1945年5月15日

[プラカノン (タイ)] またしてもヨーロッパの戦争は終結した。退屈しきってしまう。おかしなタイ人まで一緒になって言っている。親指を上げ、Vサイン。信じる者は救われる!!

グルドヴァッチ

1945年5月20日

[プラカノン (タイ)] この噂は、今回はひどくしつこい???しかし、[ドイツ語で] ああ、それはもう前にもあったこと…。

グルドヴァッチ

1945年8月1日

[ドンムアン (タイ)] タイ人や、英国領インド人の戦争捕虜達から時々ニュースを聞く。ベルリンで会議? 僕たちはトーチカや僕たちの兵舎の周囲に土嚢を築かせられた。ヤップはタイ人と問題が起こると予想しているのか? しかし、おかしいのは銃眼が内側を向いていることだ。脱走の試みを恐れているかのようだ?

ウェストホフ

1945年8月14日

[ナコムパトン (タイ)] アンディネケや、何かが起こりそうな雰囲気、今日1945年8月14日は、キャンプ全体が興奮している。ヤップ達は戦争は終わったといい、スタッフは何かを隠しているようで、しかし、僕たちは嫌になるほど何度もだまされた。しかし、もし今回こそは本当だったとしたら。皆神経質になっているが、僕たちはまだなにも知らない。

ドゥ・フラウター

1945年8月15日

[タムアン (タイ)] キャンプの中は異常な緊張に包まれている、それは昨日バンポンから誰かが知らせを持ってきて、戦争は終わったと言ったからだ。タイ人も、ゼスチャーでそう言っていたそうで、さらには朝鮮人が昨夜そう言い、今朝もそうだった。しかしヤップの一人はこれを否定し、それでもロシアが[8月]8日以来日本と交戦状態にあることは確かだと言った。この全てのために、雰囲気はとてつと緊張している。

グルドヴァッチ

1945年 8月16日

[ドンムアン(タイ)] タイ人はこれがもう終わったと言いつけている。そしたら僕らの扱いなどの面で、何か気付くようなことがある筈ではないか??

## 抑留所での戦争終結の発表

ウェストホフ

1945年 8月16日

[ナコムパトン (タイ)] 偉大な日だ、可愛い人よ、これは終わった、戦争は終結したのだ。さあ、今はなるべく早く一緒になれるように願う。(僕はこれをあの有名な日の数日後に書いている、僕も皆も、全員何かをするには興奮しすぎていたのだ。その日がどの様に過ぎていったか君に話す努力をしてみよう。) それは朝から始まった、僕らのスタッフが炊事場に、特別食のために大金を渡した、と知らされたのだ。[A.] コーテス [医師] 中佐はこれについて聞かれ、墓石のように黙り込んだ。仕事はまる1日通常通りに行われた。

こうして夜6時になり、僕は食事の後、馬の世話をしに<sup>221</sup>日本人用キャンプに行った。驚いたことに彼らは武器の回収をしていた。僕はすっかり理解し、馬はそのままにして帰りかけると、僕らの将校達全員が1人の日本の将校と共に行進してくるのに出会った。僕はまた戻った、もちろん、好奇心にかられたからだ。儀式用軍服を着た日本の大佐が、他の全ての日本軍将校達と共に、連合軍側を迎えた。日本語が話され、通訳が訳した。その間にもキャンプ全員、約3,500人の男達が続々とやってきて、戦争は終わったこと、日本が負けたことが確認された。この知らせがどんな感情をもたらしたか、僕には書き表すことができない。多くは泣いていた。どうやってそんなことが可能だったのか僕には分からないが、とにかくこの知らせのあった1分後にはイギリスの旗が揚げられ、イギリスの国歌が唱われた。3分 [後] にはしかし、キャンプにある中で1番背の高い竹の天辺にオランダの3色旗が掲げられ、熱烈な感情の元に [1942年] 3月8日以来初めて、[オランダ国歌] ウィルヘルムスが [大声で] 唱われた。多くの人たちは自分の感情を抑えることができなかった。

グルドヴァッチ

1945年 8月17日

[ドンムアン (タイ)] 仕事は停止状態だ。僕らはタバコと果物をヤップから貰った!! 何か隠されていることは確かだが、しかしそれは何だ? 突然気が狂ったようになりが僕らの兵舎から轟いた(炊事場はそこから50メートル離れている)。歓声? ファン・デル・ホルストが、何が起きたのか聞きに行った。

---

<sup>221</sup> ‘仕事’の章、1945年5月16日、ウェストホフの日記よりの抜粋参照。

僕らはまだうまく感情処理できないでいるが、しかしそれは本当らしい。ファン・デル・ホルストは泣き叫びながら走ってきた。“ワー・フィニッシュド！！！”日本の警備兵は銃から剣先を外して、本当に泣き始めた。彼の銃を僕らに渡し、彼を撃ち殺せというのだ！馬鹿げたことだ。彼は‘優しい’ヤップの一人だったのだし。僕らは彼を慰め、一緒にコーヒーを飲んだ。彼は東京に妻と4人の子供がおり、もう2ヶ月も彼らから便りが無い。哀れなこの男のために、彼らが生きていることを祈ろう。ここを立ち去ることはできない。僕たちはあてもなく歩き回り、どうしていいか分からない。まだ‘コラ、コラ’の怒鳴り声や、殴打されることのない生活に、慣れなければいけない。炊事場は突然猛烈に忙しくなった。赤十字社の備蓄を受け取り、即座にそれを使おうとしているのだ。今日は腹一杯に食べる者が多いだろう！

ボム

1945年8月17日

[バンコク] はっきりしない数日間を経て、僕たちは今日、日本の大尉、司令官から、戦争は終わったと聞いた。今のところ僕は、戦争捕虜になった始めのころと同様、よく理解できない、これがどんなに素晴らしいことであるのかまだ完全には分かっていないし、僕がどれほど君と早く再会したがっているかも！やっこの悲惨な状況にも終わりが来た。例えば僕が今書いているこの紙や鉛筆も、もう所持が禁止されているからといって隠す必要はなくなったのだ。

今日も突然に、僕たちの運命を少しでも和らげるための本4冊を含めて、あらゆる赤十字社の製品を受け取った。しかし、読書は禁止されていたのだ！しかしこれが全てではない。これまでの年月に多くの人たちが粗悪な扱いを受けて亡くなり、1943年終わり頃に、ならず者達が自分たちが勝てないことが分かってくると扱いはずっと良くなって殆ど誰も死ななくなったが、それでも僕たちは最低限で生活し続けた。[…]僕は未来を熱望している、僕たちがまた[\*…\*]一緒にいられ、それが僕たちの蘭領インドでの最初のころのように素晴らしいものであることを。

ドゥ・フラウター

1945年8月17日

[タムアン(タイ)] 少し後にイシイ大佐が戻ってきた。[…]音楽の最中にキャンプ警備兵と通訳、そしてMP[軍警察]も呼ばれて出ていった。少し経って、エドケンスが戻り、イシイの名に於いて、戦争が終わったこと、我々は自分たちの上官の指揮下に入ること、できるだけ平静を保つようにすること、という通告が行われた。我々のMPが替わって警備についた。この感情を想像できるだろう。舞台はいっぱいになり、イギリスとオランダの旗が前に出され、全員が立った

ままで心の底からの情感をこめてイギリスの、オランダの、アメリカの、そしてオーストラリアの国歌を次々と歌った。

**Staff Diary project:**

Elisabeth Broers (editor Dutch)  
Mariska Heijmans-van Bruggen (project co-ordinator)  
Jeroen Kemperman (project assistant)  
Elly Touwen-Bouwsma (programme director)  
Richard Voorneman (editor Dutch)

**Members Advisory Committee for the Diary project:**

Dhr. R. Boekholt  
Drs. E. Derksen (Stichting Tong Tong)  
Dhr. F.N.J. van Dijk  
Dr. mr. G. Jungslager (Stichting Japanse Ereschulden)  
Dr. E.B. Locher-Scholten (Universiteit Utrecht)  
Dr. Osamu Namba  
Dhr. H.R. Toorop (Voormalig Verzet Oost-Azie)  
Dr. H.L. Zwitter